
緋弾のARIA ~紫電の雷神~

プーモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア ～紫電の雷神～

【Nコード】

N3310S

【作者名】

プーモ

【あらすじ】

世界最強と謳われた超偵、『紫電の雷神』こと成瀬 レインハート。

彼が武偵高に転入した時から 彼と、彼の仲間を中心に巻き起る、激動の物語。

第1弾 雷神と呼ばれた男(前書き)

初投稿(?)です。

至らない点もたくさんあると思いますが…どうか中3の落書きだと
考えて気軽に読んで下さい。

第1弾 雷神と呼ばれた男

第1弾 雷神と呼ばれた男

くーくー…

「あー、また負けた！」

とある船の上…うみねこの声が聞こえる甲板で、少年は携帯ゲームに興じていた。

少年の手のゲーム機の画面には『クエスト失敗』の文字が。

「うーん、難しい…でもこれ以外やることないしなあ…」

ふと、少年はうみねこが羽ばたく海へ目を向けた。日光が海を反射し、彼の目に飛び込んでくる。あまりの光量に目をほそめ、ため息を着いた。

雲一つない、青空。

少年には良い天気とは 言えない。

彼も晴れは好きだ。

だが、快晴というのは至極落ち着かない。

彼の能力を十二分に発揮するには至らないからだ。

まあ、こんな人の多い船に乗っている上、海の上でそんな大規模な能力を行使するのは正直拙いという理由もあった。

だが…

「おつと…充電切れか…」

携帯ゲームの電池の形のバッテリー残量が尽きそうなのをみて、おもむろに充電機を取り出す。

ここは甲板だ。

コンセントなどあるはずもない。

充電機はコンセントなしには意味の無い、無用の長物…の、はずだった。

ぱち、ぱち…

何かが弾ける、音がした。

「このくらいなら問題ないだろ…」
ぷーーーーー！

汽笛の音に、少年…成瀬 レインハートは目的地を見ようと甲板の柵に乗り出した。

「あれが、武偵高…！」

自分が転校する学園の姿に、レインハートは目を輝かせた。

その背後、彼があとにした甲板のテーブルの上。

そこに投げ出された携帯ゲームのバッテリーは、100%を示していた。

「うーん、ここはどこだ…？」

レインハートは今、謎の建物の前にいた。要するに、迷子だ。

理由というのも、「わあ、広いな〜」と船を降りてフラフラしていたら、いつの間にか…という感じだ。彼にしてみたら、気がついたら目の前に謎の建物が現れたように感じる…らしい。

まあ、謎の建物といっても実際には彼が転校する高校、武偵高の一校舎に過ぎないのだが。

東京武偵高、ここは近代、凶悪化された犯罪に対抗するために新たに作られた国家資格、『武偵^{ぶてい}』を育成するための教育機関である。

『武偵』とは、『武』装が許容された探『偵』、即ち武偵である。

しかも彼らには『武偵法』なる一般人とは異なる法律が課せられ、銃刀法にも多少の変化が見られる。

彼らには、帯銃・帯刀が（もちろん範囲は限られてくるが）許されているのだ。

その武偵を育てる高校、武偵高の校舎には、危険なところもあったりする。

が、そんな事を知る由も無いレインハートは、その扉に手を掛けた。「とりあえず入ってみよう…お邪魔しま〜す…」

誰に聞こえる訳でもないだろうが、レインハートはとりあえず声を

かけてからその建物に入った（不法侵入、では断じてないと本人は自負している）。

つん、と何かが鼻を刺激する。

硝煙の、臭い。

よく見れば、足元には空薬莢が散乱している。

やれやれ、危ないもんだなあ…

レインハートは足に意識を集中させた。

足から、紫の光がぼうつ、と放たれ、バチバチと音を鳴らした。

レインハートが一步を踏み出す。

その顔は前を向いていて、空薬莢のありかなど視界に入ってはいない。

彼の足が置かれる場所には、空薬莢が2、3個ばらまかれている。

このままだと空薬莢を踏み、バナナの皮を踏んだ人のように頭から転ぶだろう。

彼が 成瀬 レインハートでなければ。

彼の足が近づく。

空薬莢が、彼の足から逃げるように真横に転がった いや、どこ

された。

彼が一歩歩く度、空薬莢は道をあける。

彼が仰々しい扉にたどり着く頃には、彼が通ったあとには空薬莢で横を固められた、一本の道が出来ていた。

「すみません…」

ダダダダン！

「のわあ!?!」

扉を開けた瞬間、発砲音が響き渡り、開けた扉から火花が散る。

彼がでかい声をだしたのも、仕方のない事だった。

しかし、それがまずかった。

中にいた生徒、その全員の視線が彼、成瀬 レインハート に突き刺さった。

「誰だ…？」

「銀髪…」

「外人…？」

「ツンツン頭…」

「…いやでも…」

ボソボソと囁く生徒たちの視線に耐えきれず、レインハートは思わず…

ダッ！

「逃げた!?!」

逃げ出した。

「わあああああ!」

しかも、その逃亡速度、異常に速い（早い、でもオーケーだろう）。

「ちよっ、君!」

男子生徒の静止も聞かず、レインハートは相手が視界から消えて声が聞こえなくなるまで走り続けた。

「（ああ…なんで逃げちゃったんだよ…俺の馬鹿馬鹿…）」

レインハートは木に頭を打ち付けて自分の行いを悔やんでいた。

…幸いな事に、今日はもう始業式が始まる時間帯なので、周りに人気がない。彼がおかしな目で見られる事はなかった。

「うっ…職員室行こう…」

そう言ってくるっ、と踵を返した瞬間…

ガッン!

「うおっ!?!」

彼の目の前を黒い影が通りすぎる。その際、鼻先を掠めたらしく、彼の鼻は少し赤くなっていた。

「いったあ…何だよ、もう!」

怒りつつも、自分の鼻先を掠めたであろう足元の物体を拾い上げる。やけに重い（痛い）と思えば、それは弾の抜けた銃のマガジンだった。

「なんでまた、こんなモノが…？」

考えても仕方ない、とレインハートはマガジンを無造作に後ろに放り投げた。

そして、さっさと職員室いくか、と歩を進めようとした　瞬間。
がさがさがさっ！

ドガッ！

…ぶちっ！

…？

なんだか、変な音が聞こえたため、レインハートは踵を返した。…そこには。

ピンクのツインテールの、ちびっこい可愛らしい女の子が…怒髪天を衝く、といった感じに、怒っている！

そのあまりの怒気、いや、下手したら殺意に、一步、二歩と後退したレインハートの目に、彼女の足元の黒い物体が目に入った。

……………一瞬で、なんで少女が怒ってるのか理解した。

あの、放り投げた、マガジンが、彼女の頭に、クリティカルヒットしたのだ！

そりゃ怒るに決まってるよ！

レインハートは早速謝ろうと
パン！

…ぼとん。…コロコロ。コッソ。

…土下座をしようとした地面に穴があき、空葉莢が彼女の足元のマガジンにぶつかる。

…まずい。

…非常に、まずい！

「ご、ごめん！謝るから！発砲はやめて！」

リアルに身の危険を感じたレインハートは顔をひきつらせ、彼女に

背を向けて走り出す。

「どいつもこいつも…」

すると彼女は驚くべき事に、

「この…バカー！」

スカートの内側のホルスターから、もう一丁の銃を取り出した。

銀と黒の、二丁拳銃。

一般にダブルと呼ばれる技術…

しかも、弾を打つタイミングが絶妙だ。人間の意識の狭間を縫ってくるような

「（この年で、しかもこの完成度…）」

素直に感心しているレインハートは、それでも全弾を避けきった。

「ふう…どうやら弾切れみたいだね？」

発砲してこないとをみると、どうやらそうらしい。

レインハートは安心してその場を離れようとして

ヒュン！

身を翻した。

そのすぐ隣を、彼女の日本刀が通り抜ける。

「まだよ…まだまだ、全然まだ！」

少女の一閃を避けたレインハートに、もう片方の刀が迫る。

二刀流！？

少女の刃は、もう寸前まで迫っている。

…仕方ないな。ちよつとだけだぞ！

バチツ！

「キヤツ！」

少女は突然放たれた閃光に目を閉じ、尻餅をついた。

「な…何？」

少女が目をほそめつつみたレインハートの姿は、紫の雷に覆われていた。

銀色だった髪は、その雷の色を反射してか、紫銀に輝いている。

「あー、また加減を間違えたか…反応を高めるだけで良かったのに

…」
一人で何かを呟いているレインハートをよそに、少女はその赤い瞳を見開いた。

「ああ、あんた、もしかして…」

あんぐりと口をあけて、驚愕に口を開いた少女の表情を見て、まずい、と思った時には遅かった。
そう、遅かったのだ。

「『紫電の雷神』!？」

…ああ、やっぱり遅かったか。

小学生つばいから知らないかも、とか思った自分が悪かった。てか、軽々しく能力を使った自分が悪かった。

心の中で後悔に後悔を重ねて彼、『紫電の雷神』こと成瀬 レインハートは頭をポン、と押さえた。

第1弾 雷神と呼ばれた男（後書き）

すいません、駄文で……………

キャラ崩壊とかしてませんでしょうか？

設定にも多少無理はあったかとも思いますが…大目にみて下さると有難いです。

第2弾 神崎・H・アリア

第2話 神崎・H・アリア

ああ…やってしまった。

「『紫電の雷神』…紫の雷を纏った紫銀の髪と瞳の凄腕の武偵…まさか、あんたが雷神…!？」

レインハートはその問いには答えず、こっそり溜め息をついた。

せつかくばれないように日本中を渡り歩いて来たのに、こつも簡単にバレるとは…

自分の不甲斐なさを恨めしく思い、再び嘆息する。

その溜め息ですら、雷でバチバチいつてる。

それが鬱陶しくて、彼は雷神化を解いた。

バチバチ…バチツ、…

雷音がフェードアウトしていき、髪と瞳の色も銀に戻る。

とたんに、世界が速まったように感じた。

雷神化すると運動神経、特に反射神経が強化される。

実に50倍だ。チート臭いが、事実だ。

よく剣の達人が『剣が止まって見える』などというが、雷神化した彼の前では銃弾ですら『止まって見える』。

無論、かわす事も容易い。

だが…

ぐうぐうぐうぐう。

「な、何の音!？」

「…った…」

少女は警戒するように（怯えるようにも見えない）辺りをキョロキョロ見渡すが、レインハートの発した声にそれを中断して、顔をしかめた。

「…何て言ったの?」

少女の問い、その言葉がトリガーになったのか、

「お腹すいたぁー！ー！」

レインハートの雄叫びがその場に響き渡った。

「びやあ、ばずばつだよばりば！（いやあ、助かったよアリア！）」
「話す時は口の中を空にしときなさい！」

ここは武偵高の一角のファミレス。レインハートはピンク色の豚まん（ももまんというらしい）を頬張りつつ（ファミレスの料理を食べ）、先ほどのピンクツインテールちびっこと神崎・H・アリアにお礼を言った。口にもものを入れた状態でお礼を言われていい気分になるかは甚だ疑問だが、今それは関係ない。

「で？『紫電の雷神』がこの武偵高に転校してくるって本当なのかしら？」

アリアはほおずえをつきながら、八重歯をちらつかせ黒い笑み具体的には、何か企んでいるような笑みを浮かべた。

背筋に冷たいものを感じつつ、レインハートはももまんをファミレスのドリンクバーのオレンジジュースで飲み下した。

「もちろんだともさ。ちなみに二年生、教科は強襲科。」

武偵高には一般的な高校とは異なる、幾つかの特別（武偵用の）教科があつたりするのだ。

犯人に強襲して逮捕する、アサルト強襲科。

犯人を狙撃し前線をサポートするスナイプ狙撃科など…

今挙げたのは戦闘向けの科で、他にも探偵科や通信科などたくさんある。

閑話休題終わり。

「ふーん、奇遇ね。私も強襲科よ」

ちなみにこのアリア、とてつもなくちっこいくせにレインハートと同じ二年生なのだ。しかも、武偵の力量を示すランクはSだ（必ずしも戦闘に関係するとは限らないが、彼女に関しては間違いない）。

「ふーん、ごちそうさまでした、っと…。」

アリアの言葉を軽く流し、ももまんを全て食べ尽くしたレインハートは合掌し、レジへ向かった。

その手には伝票（ドリンクバーだけだが）が握られていた。

「ももまんありがとね。ドリンクバーは俺が払っとくから」

「ちよつ、待ちなさいよ！」

アリアは食い入るように立ち上がり、レインハートの伝票を奪い返した。

もう伝票はクシャクシャになっている。まあ、アリアにとってそんな些細な事は関係ないのだが。

「あつ！何すんだよ！」

「ここは払ってあげるから言うこと聞きなさい！」

「…はあ？」

心底怪しむような（ような、ではなく実際に怪しんでいる）表情でレインハートが聞き返すと、アリアは得意気な顔で椅子に足を乗せレインハートの、行儀悪いぞ、という突っ込みは華麗に流された。言い放った。

「あんたも私のドレイになりなさい！」

「…はあ!？」

思わずすつとんきょうな声を上げたレインハートだったが、それも仕方ない事だろう。いきなりほぼ初対面の少女（しかも美少女）にドレイになれ！などと鬼畜のような言葉を吐かれたのだから。しかも。

「断るってんなら…風穴あけるわよ!!」

アリアの言葉、いや命令に　　急激に黒い絶望感に視界を覆われて、レインハートは思わず額に手をやった。

何この急展開？

その後は、一言で言い表すなら『地獄』、あるいは『泥沼』だろう。

「なんだよドレイって!?!」「うるさい!ごちゃごちゃ言ってるど風穴あけるわよ!」「知らないよ!」「うるさいうるさいうるさい!」「お前の方がうるさいだろ!」

などと散々言い争った挙げ句、銀と黒のガバメントで風穴をあけられそうになったため、全速力で逃げてきた、というわけだ。

「死ぬかと思った…」

溜め息をつきつつ、レインハートは目の前の部屋の表札(?!)、2年A組の文字を見る。

まあ、色々あったが今日から転校するクラスだ。

こんどこそ、仲間ができるといいな…

友達なら、昔はいた。でも、彼が『雷神』だと知ると、みんな彼とどこか一定の距離を置いた。自分の中身を知ったら、みんな…

そんな思いを胸に抱きつつ、その教室の戸に手をかけた、その瞬間。

「見つけたわよ…『雷神』!」

「あ、アリア!でかい声で言うな!俺の名前はレインハートだ!」
あろう事か教室の前で彼の正体を堂々と叫んだアリアの口を押さえようとして

『ガヤガヤ…』

『何、転校生つて外人?』

『しかも…雷神!?!』

「あ、ああー、バレた!転入した瞬間バレた!」

レインハートは頭かを押さえ、身悶えた。

せつかく自分が雷神だなんてばれなそうな学校を見つけたのに、その努力が一瞬でパアになった。

「お前: どうしてくれるんだよ!?!一発でバレちゃったじゃないか!」

「知らないわよ!」

アリアの奔放さに、今更ながら頭を抱えた。こうなってしまった以上、選択肢は一つしか無い。

あーもう、考えても仕方ないだろ!やれば出来る!俺!なんと

か

誤魔化せ！

レインハートは改めて扉に手をかけ、勢いよく開けた！

『いよつ、雷神！』

…新たなクラスメートから一斉射撃を受けた。

「う、うるさい！俺は雷神なんかじゃ…」

「あれ？レイン？」

「ふえ？」

聞き覚えのある声に、逆に間の抜けた声を上げた。

「君々い、レインでしょ？」

その言葉に、レインハートは完全に諦めモードに入った。

「り、理子！？」

栗毛系のクリームパーマのこの少女、峰 理子はレインハート（以下レイン）の幼なじみで、確かどこかの名家の子孫だとか。一時期はとてつもなく暗い感じだったが、なんだかちよつと前から生き生きしだしたという、不思議っ娘だ。

聞けば彼女はクラスの中心的存在らしい。彼女から雷神の武勇伝が語られるのも時間の問題だろう。これでレインの雷神疑惑は払拭の出来ないものになった というかバレた。

「成瀬 レインハートです。よろしく」

「神崎・H・アリアよ。」

とにもかくにも、

これで波乱万丈のレインの学園生活が始まることとなる。

「先生。あたし、アイツの隣がいい」

「先生ー！レインはあ、私の隣がいつてさ！」
…主にこの少女たち（アリアは黒髪男子を指差し、理子は手を全力で何回も挙げて）のせいだ。

第3弾 遠山 キンジの女難（前書き）

今回は早めに投稿できました。

偏に応援して頂いた皆様のお陰です。

有難うございます。

第3弾 遠山 キンジの女難

第3弾 遠山 キンジの女難

なんだ？このクラスは。

レインは目の前の光景に驚愕していた。それは、今まで自分が見てきたクラスというモノとは、全くもって別のモノだった。

「おお、成瀬！お前『雷神』なんだってな！」

「成瀬、お前もちろん強襲科だよな？」

「あつ、ずるい！成瀬君、探偵科入ってよ！」

「成瀬、俺と死合いしないか？」

「おいお前、ちよつと字い違うだろ」

自分が雷神と知ったら、避けられると思っていた。だけど、彼らはそれどころかあつちから近寄ってくる。

初めは利用されるんじゃないかとも思ったが、彼らの雰囲気を見る限りそうは思えない。

『雷神』である自分がこれほどまで容易く受け入れられる事に、レインは歓喜より戸惑いを覚えていた。

どうしていいかわからず、生返事を返していると…

パパン！

カラァンカラカラ…

何か不吉な音が響き渡り、レインは経験からそれがなんの音なのか即座に理解した。

発砲音と、空薬莖の落ちる音…

発砲した人間に検討は着くが、一応万が一天文学的数字の可能性で別人というのもあり得るので、レインは椅子に座ったまま首だけで後ろを向いた。

しかし、案の定そこには…

「れ、恋愛だなんてくっだらない！」

ピンクのツインテールをはためかせる、神崎・H・アリアさんその人がいた。

発砲したにも関わらず、誰も止めに入らないのは武偵高では発砲もある程度許可されているからなのか、それとも彼女のあまりに唐突な発砲に啞然としているのか…どちらにしろ、レインの知るところではない。

彼女の隣で輪の中心にいた、先ほどアリアに指名された少年、遠山キンジも呆然とした表情を浮かべているのだから、無理もないだろう。

「全員覚えときなさい！そんなくっだらない事いつてる奴は…」

お、おい、お前…ちよっと待て！

レインの心の中での静止は届かず（当たり前だ）、アリアは高らかに

「風穴あけるわよ！」

宣言した。

それが彼女、神崎・H・アリアの素敵で過激な自己紹介となった。

「ああ…静かだ…」

そう呟き、夕日の斜陽に目をほそめているのは先ほどの少年、遠山キンジだ。

彼は現在、この広い武偵高の寮の一室で暮らしている。

それというのも、彼が強襲科から探偵科に転入したり、相部屋になる探偵科の生徒がいなかったりと色々あったのだ。

「今日は色々ありすぎだな…」

キンジは今日の災難を思い出していた。

幼なじみの姿に、思わず禁忌を破りそうになった事。

通学バスに遅れてこいでいたチャリが、武偵殺しとかいうイカレ爆弾魔にチャリジャックされた事。

そして あの少女、神崎・H・アリアの事。

「なんなんだろうな、アイツは…」

誰にとも知れず呟いて、再び彼女の姿を思い出す。

校舎から飛び降りて、自分を助けてくれた。

その二丁拳銃で七台ものセグウェイと戦ってくれた。

そして、その小さな、しかし柔らかな胸が、押し付けられた瞬間

自分の胸を、ギュツと押さえつける。

自分は、自分に課していた禁忌を冒した。

もう、あの力は使わないと決めたのに

兄さんを破滅させた、あの力を。

「兄さん…」

「誰に向かって言ってるの？」

「っ !?」

キンジは猛然とした勢いで振り返った。

今の恥ずかしい、しかも下手したらBL&ブラコンと言われ兼ねない独り言を聞かれたので、多少の照れ隠しも含めて、とてつもない速さになっていた。

「うおっ、どうしたの？」

そこには、今日転入してきた成瀬 レインハートが心底驚いたような表情でたちすくんでいた。

「はーん、それでお前がルームメイトねえ…」

「そういう事。よろしくね、遠山」

「こちらこそ。あ、キンジでいいぞ。俺もレインって呼ぶから」

クラスメイトから聞いていたより社会的なキンジを見て、レインは思わず苦笑をもらした。

彼はクラスメイトからはネクラだとかなんだとか言われていたのだが、それは本人に言っても嫌な気分させるだろう、とレインは聞きかけた口を閉じた。

レインがここに来たのは、勿論ここが彼の部屋になるからだ。

理由は、周りにあき部屋がない上広い部屋に一人は寂しいだろうという教師陣の心遣い　　というのは建前で、一人で広い部屋使ってるじゃねえ、うらやましいじゃねえかというつつても自分勝手な教師の一言で決定したらしい。これも、わざわざキンジに話す事でもない。

ルームメイトにいきなり隠し事(?)をする事に心を痛め、レインは軽く溜め息をついた。

「へえ、チャリジャックされたのってキンジだったのか」

クラス中で噂になっていた『武偵殺し』の模倣犯、そいつがルームメイトを襲っていたとは、頭が痛い。友人のためにも犯人を捕まえようとする程度の優しさは、レインも持ちあわせていた。

「ああ…だが、犯人の目的が何かがさっぱりなんだ」
ピンポン。

ドアのチャイムがなっているが、二人は嫌な予感を敏感に察知たのか断固その扉を開けに行こうとしない。

「確かキンジ、遠山家の人間なんだよね…」
ピンポンピンポンピンポン。

遠山家は、代々その『特異体質』を使用し、正義のヒーローとして

活躍してきたらしい。その『悪役』が彼らに恨みを持っていても不思議ではない。逆恨み感は否めないが。

しかし、かなりマイナーな家だが、その祖先が遠山のキンさんだといふのだから驚きだ。

「うーん、生憎俺も兄さんも一度もそんな目にあつた事は…」
ピポピポピンポンピンポーン！

「だあ、さつきからうるせーな！」

「開けた方がいいかな…」

口ではそう言いつつ、レインの顔には『開けたくない』とありありと書かれているようだった。

それはキンジもある程度同じだったのだが、
ピポピポピポピポピポピポーン！

それではこの無限に続くインターホンは止まらない。

仕方なく、本当に仕方なく、キンジはドアノブに手をかけて（その後ろにはレインがしぶしぶ待機している）、

ガチャン！

開けた！

反射的に二人は身構える。

その様子を、彼女

「…か、神崎！？」

「何の用だ、アリア？」

アリアはその赤紫色の瞳を丸くして、不思議そうに首を傾げた。

「なんであんな達そんなに身構えてるのよ？あとキンジ、私の事はアリアでいいわよ」

そのまま額に手をやってるレインと呆然としているキンジを尻目に、アリアは堂々と部屋に踏み込んだ。

「お、おい！勝手に入るなよ！」

「一応男子寮だぞ、ここ…」

一応、無駄だと思いつつアリアに注意する。

「それが何よ？」

が、そんなものはどこ吹く風、アリアはずかずかと一番奥のリビングに入り込んだ。

「お、おい待てよ！」

律儀にアリアが置きっ放しにしていたトランクを持ってくる辺り、彼も苦勞人なのだろう。

レインはリビングで偉そうに足を組み、ソファアに座っていた一自由人 アリア を見て、嘆息した。

「で？なんの用なの？」

前置きをする時間も惜しい、という訳ではないが、面倒だったのでいきなり本題に切り込んだ。

「そんなの簡単よ。キンジ、レイン。あんた達、

私のドレイになりなさい！」

本日二回目の、ドレイ宣告に。

レインはただただ、額を押さえた。

第3弾 遠山 キンジの女難（後書き）

次回はいつになるかわかりませんが、これからもよろしくお願いいたします。

第4弾 レインとキンジのドタバタ劇 パート1 (前書き)

パート1、とはいったもののパート2があるかはわかりません。
次回がパート2な訳ではないので…

第4弾 レインとキンジのドタバタ劇 パート1

第4弾 レインとキンジのドタバタ劇 パート1

レインは窓越しに流れる景色を眺め、溜め息をついた。

今、彼は超能力調査研究科、通称SSRの合宿に参加していた。

「あ、あの！大丈夫ですか？」

不意に、誰かに声をかけられた。

包ましい声。その言葉から自分の体調を気遣っているのがわかる。

心配をかけるほど疲れた表情をしたのだと思うと、レインは途端に恥ずかしい気持ちになった。

「あ、うん。平気だよ。えと…星伽さん」

話しかけてきたのは、袴姿の大和撫子な美人、星伽ほとぎ白雪しろゆき。

なんでも偏差値75で名家の家系で生徒会長なのだとか。

「本当に大丈夫？気分、悪くない？」

大丈夫だと言ってるのに、未だに気遣ってくれる。

「う、うん。大丈夫だから…座りなよ」

初対面に等しい自分にこれほど優しい人は初めてみたレインは、少し戸惑いつつもなんとか返事を返せた。

その言葉にまだ納得しきってないのか、白雪はしぶしぶ、と言った様子でレインの隣に座る。

彼が何故SSRの合宿に参加しているかといえば、まず一つはこの学校の先生方に『紫電の雷神』である事がバレしてしまった。主にクラスメートの噂話で、事、そしてこのSSRが超能力の研究の教科らしい事。

お陰で強襲科を希望していたのがこの様だ。

レインはバスの中にいる、SSRの面子を見渡す。

多い訳でもないが、少ない訳でもない。

この全員が、程度はどうあれ超能力者なのだ。
自分と同じ。

この現在、武偵は多い訳ではないが珍しい訳でもなく、むしろ優秀な武偵は一般市民には英雄視される事もあるらしい。凶悪な犯罪者を逮捕した、という実績があるからだ。

なら、なぜその優秀な武偵、『紫電の雷神』は疎まれさえしないもの、周りから避けられてきたのか。
簡単だ。

彼は武力を行使する探偵、武偵ではなく超能力を行使する探偵、超偵として見られていたからだ。

武偵は誰にでも使用できる拳銃を使用して犯人を逮捕する。

対して超偵は拳銃なども使用するものの、その大半は超能力で犯人を逮捕する。

誰にでも使える訳ではない、超能力で。

彼の元友人達は、その力に恐怖したのだ。

自分たちにはない、異常な力に。

「本当に大丈夫？」

レインはハッ、と顔を上げた。

白雪が自分の顔を除き込んでいる。

再び心配させるような表情を見せたらしい、と判断し、レインは気を引き締めた。

自分は普通でない力を持っている。

ならば、普通以上に強くなければ、普通以上に正しくなければならぬ

それが、レインが能力

チカラを使用する上での、自分に課したルール。

その誓いを、こんな簡単に破る訳にはいかない

レインは、白雪に不器用な笑みを返した。

「ここが、合宿場所…?」
着いた先は、恐山。

俗にいう、パワースポット…らしい。この胡散臭い山で滝に打たれてでもして超能力を鍛えよう、という魂胆だろう。

レインはキンジやアリア、白雪、理子と一緒に滝に打たれて、自分の能力でみんなが感電する光景が目には浮かび、思わず吹き出した。

本当にそうなれば、笑い事では済まないが。

ああ…今頃キンジ達はどうしてるかな…

昨日の惨事を思い出して、レインは笑いを苦笑に変えた。

突然のドレイ宣告。

夕日をバツクに佇むアリアを、レインとキンジは呆然と見つめる。

「…は?」

思わずすつとんきょうな声を上げるのも無理ないだろう。

「ほら、何ボケボケしてんの?早くなんか出しなさいよ、気が利かないわね!」

…どちらかといえばお姫様的な容姿のアリアが、何故か女王様に見えるてきた。

仕方ないのでインスタントコーヒーでも出そうと、キンジがキッチンへ向かう(なんか語呂いいけど狙った訳ではない)。

「ほらよ」

キンジは律儀にもレインにもコーヒーを出してくれた。

友人のコーヒーを有り難く頂きながら、レインはアリアの方を向いた。

「ふーん…なかなかじゃない」

どうやらインスタントコーヒーはアリアのお気に召したようだ。

レインは彼女も認めたコーヒーをもう一口すすり、まったく息を吐いた。

「で、いつになったら帰ってくれるんだ?」

キンジはレインと共通の疑問を口にした。

まあ、レインはモラル的な意味で言ったのだろうが…キンジには、別の理由があった。

それは、彼の禁忌。

女性は彼が禁忌を冒す事になりかねない、最も危険な存在だ。

兄を破滅させた、あの忌まわしき力の トリガー 引き金。

それが自分の部屋に入っているなんて、とんでもなく危険な状態だ。一刻も早く、打開しなければ…！

しかし、そんなキンジの願いむなしくアリアから絶望的な宣告を受ける。

「あんだ達があたしのチームに入るまでよ。それまでは、何日泊まっても帰らないわ」

アリアは何でもない事のように言うが、二人にしてみたら冗談じゃない話だ。

「ええっ！帰れよ！」

「うるさい！出てけ！」

「ここ俺たちの部屋だぞ！」

「いいから出てけ！」

「俺たちの人権は！？」

アリアの独裁政治によって、哀れ二人の無力なアリア王国国民は自分たちの家を追い出されてしまった。

すぐさまカードキーを通すが、アリアは中からロックしているのか、扉は固く閉ざされたままだ。

仕方なく、二人は下の階のコンビニで漫画雑誌を立ち読みする事になった。

「さて…そろそろ帰る？」

「てかなんで俺たち追い出されたんだ？」

「さあ…？」

首を傾げながら、レインとキンジは自室に戻った。

カードキーは今度は認証され、やっとの思いで自室に入る事に成功した。

未だかつて、自室に入るためにこれほど慎重になった人間が何人いただろうか。

…結構たくさんいるかもな、と思いつつ二人は廊下を慎重に歩く。

「あれ？アリア、いないのかな？」

レインに言われて、キンジはリビングから物音がしない事に気がついた。

ピチャピチャ。…ちやぽん。

「ん…？バスルームかな？」

レインが何でもない事のように言ってるのに対して、キンジはとてつもなく焦っていた。

今この場にいる事がバレたら 二人の身体に間違いなく、風穴があく。

しかも、なんとか対処しようとしたキンジ達（動いているのはキンジ一人）に、更なる追撃がかかった。

ピンポーン。

「誰だ？こんな時間に…」

レインが怪しむように首を傾げる隣で、キンジは顔面を蒼白にしていた。

この、慎ましい

インターホンの音は…！

余談だが、この時キンジにはインターホンの音が死神の招き声に聞こえたのかなんとか…

第4弾 レインとキンジのドタバタ劇 パート1 (後書き)

次回！

アリアのあられもない姿が…！？

第5弾 雷雨・雷花（前書き）

皆さんこんにちはです。

主人公がどんどんチート臭くなって行きますね…大丈夫でしょうか？

第5弾 雷雨・雷花

第5弾 雷雨・雷花

ピンポン。

こ、この慎ましいインターホンは…！

聞き慣れたインターホンの鳴らしかたに、キンジの脳裏をとある幼なじみの姿がよぎる。

インターホンの主+アリア…

このままでは、大惨事になる 主に彼らの部屋が。

「キンジ、アリアの方を頼む。俺はインターホンの方を…」

流石に今の状況はまずいと悟ったのか、レインはいつになく真剣な表情でキンジにアリアの事を任せ、自分はドアに向かった。

「は、はい」

キンジの狼狽する様を見てか、レインの緊張感も張りつめられていた。

心なしか、声が震えているようにも思える。

「あ、あれ？転校生の成瀬君…？キンちゃんと同じ部屋なんだ…？」
ドアを開けた先には、袴姿の大和撫子な美少女が立っていた。

キンちゃん キンジに会いにきたらしい。

「もう聞いているかも知れないけど…私、星伽 白雪っていいですよ、よろしくね」

「うん。俺は成瀬 レインハート。よろしく」

白雪の人の良さに、良い塩梅にレインの緊張感がほぐれた。

逆に、こんないい子なのになんであんなに怯えてたのか、と疑問に思っくらしいに。

「ところで…キンちゃんは？」

白雪は首を動かし、レインの陰に隠れていないか確認する。

今、キンジはおそらくバスルームにいるのだろうか…

でも、今のキンジとあったらアリアの風呂を覗こうとしてるみたいだしな…

それではキンジも白雪も、ましてやアリアも、いい気分にはなるまい。

レインは仕方なく煙に巻くことにした。

「今、ちよつと手が放せないみたいで…」

しかしそれは 逆効果だった。

「そんなに大変なの！？なら手伝わなきゃ！」

言うなり、白雪はレインの横を通り抜けようと…

「ちよつ、ちよつと待て！」

慌ててレインは白雪の肩を掴む。

しかし、白雪の進もうとする力は可憐な見た目とは裏腹に、大の男何人分の力もあった。

グググ…とだんだん前進している白雪を見て、レインは未恐ろしいと思うと同時に…

キンジ、お前はこの子に何をしたんだ？

という疑問が頭に浮かんだ。

「って訳だから、今手が放せないらしいんだ」

レインは拳銃の整備、という最もらしい言い訳をして、白雪の目を誤魔化した。

銃の整備は、一般的には装備科アムドの人間に任せる（中には自分でこだわりを持って整備する武偵もたくさんいるが）。

本当はキンジも人任せだし、それは白雪も知ってるだろうが、レインが銃の整備を薦めたという事で話しを進めたのだ。

銃の整備はあまり他人に手伝わせない人が多いらしい、という一般論を付け加えて。

「それじゃあ仕方ないね…あ、明日からはSSRの合宿だからね」
そう言い、白雪はレインの手に合宿のしおりを渡した。

始業式を終えたばかりでもう合宿とは、武偵高のSSRへの力の入

れようが窺える。

しかも場所は恐山ときたものだ。外国とはいかないが、結構な距離があるはずなんだが…

遅れないでね、と言い残し、白雪は仰々しく腰を90度に折ってからこの場を去っていった。

なんとか誤魔化せたな…

そう胸を撫で下ろした瞬間。

「本当に死ね！このドヘンタイ！」

ドゴオオオオン！

…バスルームから、キンジが大砲で発射されるマ オの如く…いや、それに縦回転を加えた改良（改悪？）バージョンで飛び出してきた。ドゴツ！

壁にぶつかり、床に倒れ伏す。どうやら気絶しているようだ。

「もう許さないわよ！風穴たくさんあけてや…」

言いながら、出てきたアリアは…

裸だった！（両手に銃を持っているが）

レインの視線に気づいたらしく、セリフを途中で中断したアリアは…レインを見て。

自分の格好を見て。

再び、赤面してるレインを見て。

カアアアアア、と熟したトマトのように顔を赤く染めた。

「あの…」

「…な」

「アリアさん？」

アリアは手で自分の小さな胸を隠しつつ…

「かざあな…」

片手のガバメントでレインに発砲した。

「ぎゃああああ！」

雷神化でもなし、この狭い空間でアリアの弾丸を避けるのは至極難しい。

レインは咄嗟に近くの靴箱の陰に隠れた。

「風穴風穴風穴風穴……！」

頭の螺が吹っ飛んで大気圏を突破したようだ。

アリアはガバメントをどこか楽しそうに乱射していた。

…これ、なんてヤンデレ？

いや、デレがないな…

レインは今更ながら、無傷でいられた奇跡を神に感謝する。

余談…でもないが、武偵高の制服は防弾仕様になっている。というか、今日日武偵、犯罪者が着る服はだいたい防弾仕様だ。

だが、防弾仕様といっても死なないように殺傷力を削ぐだけで、衝撃は残る。

その痛みはバットで殴られた感じに似ているとかなんとか…

この合宿の目的は、超能力の開発、及び向上…らしい。

朝からスプーン曲げの練習やら意味の分からない絵を描かされてイメージを高めるだとか、やることが異常だ。

だが…それだけでもないらしい。恐山の森林の前、簡易アリーナとなつた川原での訓練だ。

「次は超能力を実践してもらおうか」

教師がパチン、と指を鳴らすと、たくさん的小アーチエリーなどに使われる、アレだ。が、あらゆるところから空中に飛び出している。飛び出している。飛び出している。大規模なもぐら叩きみたいだ。

「なんだろ？あれを全部撃ち落とせって事かな？」

疑問を口にしつつ、レインの口角は微妙に上がっている。

やっと面白そうな訓練ができる。彼の表情は、そう雄弁に物語っていた。

「察しがいいな、成瀬」

「誰にでもわかるでしょう」

「じゃあまずはお前がやってみろ」

「じゃあの使い方が間違ってる、という突っ込みは無駄だとわかってるので、目線で了解の意を示し、的を撃つ場所らしい的が飛び交うど真ん中の正方形のタイルの上に立つ。」

「時間は5分。それまでに何個的をぶっ壊せるかを競ってもらおう。枚数は実に5000枚で、範囲は半径25メートルだ。」

先生から簡易に説明を受け、レインは愛銃、FN ブローニング・ハイパワー（レインはブローニングから『ブ로우』と呼んでいる）を太股のホルスターから引き抜いた。

「ちなみに、この的は私が超能力で作っている。どれだけ壊そうがなんら問題はない。存分にやれ」

はなからそんな心配はしていなかったが、先生（未紹介だったが、鳳 千鶴というらしい）の言葉に短く頷く。この場では『雷神』だとバテているので、隠す必要もない 確かに、存分に実力を発揮できる。

「いくよ…ブ로우」

愛銃に口付けし、レインの身体から微弱な紫電が放たれる。

「では…始め！」

千鶴の声が響き渡った、刹那。

レインの足から、半径25メートルの範囲の地面に紫電が走る。

レインは、的のない空に弾を撃った。

空が、紫に染まる。

バチィツツッ！

銃弾が弾け、地面に張られた紫電の結界に雷の雨が降り注いだ。

その瞬間、レインの周辺の的が全て消し炭となって、超能力の残り、銀の粒子となる。

さしずめ、紫の花畑に白銀の蝶が舞っているかのような景色に周りの人間は皆一人の例外もなく見惚れている。

「キレイ……」
誰かが、一人でに眩いた。

的を一掃したエリア攻撃は見事だが、それも一時的なものだ。まだ残り時間は4分49秒ある。

「どうするつもりだ……？」

いち早く優美な景色の束縛から逃れた千鶴は、品定めをするように『紫電の雷神』の姿を見据えた。

紫電のシャワーが消え、雷に覆われた上、発生の瞬間消し炭になるため視認が難しくなっていた的は再び姿を現す。

その数、15枚。

種は撒いた。

後は花を咲かせるだけだ。

レインは指を鳴らす。

パチン、

とその音が響くより速く、

バチィ！

雷音が響く。

瞬間、15の的が全て雷の柱に貫かれた。

5分が経った頃、白雪達の前の電光掲示板には『perfect』の文字が浮かんでいた。

「凄い……！」

白雪の言葉は、隣の生徒にも聞こえるかどうか、という音量だったが、30メートルは離れていたはずの銀髪の少年は笑顔で手を振ってくる。

偶然かも知れない。いや、むしろ偶然の確率の方が高いだろう。しかし、何故かそうでないと白雪は確信していた。

第5弾 雷雨・雷花（後書き）

感想お待ちしています!!

第6弾 リックマ捕獲大作戦！（前書き）

なんかタイトルからして危ないですね、今回。

やっぱり主人公の能力が強過ぎる気がします…

第6弾 リ ックマ捕獲大作戦！

第6話 リ ックマ捕獲大作戦！

「これが『雷神』か…！」

誰かが呟いたのを皮切りに、生徒達は一齐にレインに詰め寄る。

その内容はどれも、先ほどレインが使用した術の事だった。

彼が使用した術の名は、一つ目が『雷雨』。二つ目が『雷花』。

一つ目、『雷雨』。

銃弾にレインの雷撃をあらかじめ込めておき、発射した後、好きなタイミングで炸裂させる事ができる広範囲攻撃。しかも銃弾の破片には電流が流れており、殺傷力を増大させている。ちなみに普段は空に打ち上げたりせず、普通に相手に銃口を向けて使用している。

二つ目、『雷花』。

地面に雷電を走らせ、砂鉄を電磁力でくっつけて媒体にすることで至るところに砲台を作り、そこから雷を、これまた好きなタイミングで発射できる。

あらかじめ雷花で砂鉄に電磁力を持たせておくことで、空に打ち上げた雷雨が引き寄せられ（この銃弾にも電磁力が付加されている）、勢い良く地面に向けて降り注ぐ（敵を判別してる訳ではないため、敵味方入り交じった戦闘ではあまり使えない）。

そして、その銃弾の破片にも電磁力が付加されているため、更に砲台が増える。

より多方向からの砲撃が可能になる…という事だ。

余談だが、レインはその砲台を『種』、発射された雷撃を『花』と呼ぶ。

先に名称を決めたのは種の方で、雷撃を花と呼ぶようになったのは種にあわせたからに過ぎない。にも関わらずこの技は『雷花』と呼ばれるのだから可笑しな話だ（花というなら、雷雨を放つ際破片が

弾ける様の方が近いだろう)。

閑話休題。

そんな感じで友人達に説明をしていると…

パン!

カラアンカラカラ…

…どこかデジャブを誘う音を聞き(既視感というなら目で見てる訳じゃないので使い方が間違ってる気もするが)、恐る恐るレインは振り返った。

「いつまで話してるつもりだ?合宿を続けるぞ」

今のは千鶴が空に向けて発砲した音らしい。

多少やる気のなさそうな千鶴の声。それと裏腹の派手な行動に、ピンのツインテールのどこかの少女の姿を重ね、思わず微笑を漏らした。

「さて、今回の訓練内容だが…良い言い方と悪い言い方、どっちが
いい?」

『いい方で』

「うん、みんな息ピッタリで何よりだ。さて、今回の訓練は…」

千鶴は精一杯テンションを上げているのか、長いためを作ってはい
るが、声のトーンが既にテンションの低さを物語っている。

「サバイバルで〜っす」

テンション高そうなセリフとは真逆な低さのテンションに全員が肩
を落とした(流石にずっこけるといふ古いリアクションをする人間
はいなかった)。

…が、それも一瞬だった。

『…サバイバルうー!?!?』

生徒一同は千鶴の言った内容を反芻する。

本当に息ピッタリだな、と自分も参加していたレインも他人事のよ
うに感心していた。

「うん。あ、流石に一人は危険かもだから他人と組ませるから。くじ引きで」

言うなり、千鶴は指をパチン、とならす。

すると彼女の前にはくじ引きらしき物が現れた。

おお、便利だな、この人の超能力。と思いながら、レインは千鶴の手元を興味深気に除き込んで…

思わずっこけそうになった（さっき古いと指摘したに関わらず、だ）。

「先生、これアマダくじじゃないですか！」

「……………おおっ」

「リアクション薄っ！てか今気づいたんですか！？自分で出したくせにー！」

「お、落ち着いてよ成瀬君…半分ずつに名前書けばいいんだし」

白雪に宥められ、レインはまだ少し納得出来ない様子でアマダくじに自分の名前を記入した。

「お前がバディか…よろしくな、『雷神』。

私は朝露 静奈だ。静奈でいいぞ」

結局、レインはアマダくじの結果この黒髪ポニテな背丈は中くらいのボーイッシュ少女とのバディとなった（余談だが、最近千鶴は海を観たらしい）。

「ああ、こちらこそ。あと『雷神』はやめてくれない？レインでいいよ」

「オーケー、レイン。…ははっ、外人みたいだな。ところで、お前はハーフなのか？」

「いや、クォーターだよ」

「ふーん…」

軽い挨拶に他愛ない会話をして、ミッションの緊張を和らげるのは武偵の基本らしい。

しかし、これは本当に単なるおしゃべりだとレインは考えていた。

静奈は最初からあまり緊張している様子はないし、自分も緊張どころかワクワクしているからだ。

「では、ルールを説明する」

千鶴の声に、生徒たちの視線が運ばれてきたホワイトボードにあつまる。

ホワイトボードの方を向いて何事かかきながら、千鶴は説明を始めた。

「お前達にはこの恐山で1日中生活してもらう。その間に…」

セリフの途中で、ホワイトボードの前をあけてその全貌を明らかにした。

…そこに書かれていたのは。

「リ…リ ックマだと！」

そう、何故か右目に傷の付いたリラック…

「違うぞ。熊だ」

千鶴はどこか誇らしげに語るが、100%どこからどうみても右目を負傷したリラック マだ。

「リラ クマも熊ですよ！」

「いや、そういう話ではなく、熊だ。こいつを捕まえてこい。あ、殺してはいかんぞ。私が怒られるからな」

『うおい！』

三度目の全員ハモリ。

しかし、内容が内容なので仕方ない事だろう。

要するに、彼女の仕事である右目負傷の ラックマを合宿にかこつけて生徒に捕まえてこいという話だ。

理不尽極まりない上、職権濫用だ。認められる訳がない 誰もが、そう思った。否、思っていた。

彼女 鳳 千鶴の、悪魔の囁きを聞くまでは。

「ギヤアギヤア騒ぐな…捕まえてきたやつには…」
再び、千鶴は間をあける。

彼女はこういうもったいぶるのが好きなようだ。

案外、ジンプとかが好きなのかもしれない。
たっぷり間をおいて、ようやく千鶴は口を開いた。

「単位を2・0やろう」

その言葉を聞いた瞬間、

『お任せ下さい、我が主^{クハヤクロー}』

二年生のSSR生徒は、例の全員ハモリで千鶴の術中に堕ちた。

この人、超能力者じゃなくて催眠術士じゃないのか？と頭に疑問符を浮かべながら、レインは自分も単位が足りてないため仕方なく彼女の術中に堕ちた。ちなみに、単位2・0とは留年しないために必要な分らしい。

レインは転入してきたため、単位はほとんどない。

なので、この条件はぶっちゃけ彼に損はないのだ（熊を追っかけて山を走り回る、というのは疲れそうなものだ）。乗る他にない。そんな心理も、彼女はわかり尽くしているんだろうな、とレインは低血圧そうな担当教師を見てこっそりため息をついた。

第6弾 リックマ捕獲大作戦！（後書き）

感想お待ちしています。

第7弾 怒りの雷神（前書き）

今回はあの人が登場します！
いやあ、急展開だなあ…

第7弾 怒りの雷神

第7話 怒りの雷神

「あー、なんか雨降ってきそうだね…」

レインは、雲行きが怪しくなってきた空をあおぎながら呟いた。雨は雷を操る彼にとって悪い条件ではないはずだが、それは戦闘に限った話で、生活面、しかも宿もないこの状況ではただ悪天候だ。しかも…

「そうだな…どこか雨宿りできる場所を探すか…」

この少女、静奈がいる中で能力を使用すれば、彼女も黒焦げになる。自分の能力は対複数用のエリア攻撃がほとんどなため、仲間がいる時にはそのほとんどの攻撃が封じられる。

それもまた、みんなが『雷神』たる俺から離れていった理由の一つか？

自分の周りにいる事で、みんなが恐怖、悔しさ、劣等感、そんな感情を、抱かせていたのだろうか？

そう考えると、なんだかやりきれない気になる。

「…どうかしたのか？なんだか顔色が悪いぞ？」

「ッ！」唐突に顔を覗き込まれて、思わず肩が上がった。

また、顔に出ていたらしい。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない…」

頭に疑問符を浮かべる静奈を横目で見て、レインは再び自分を戒めた。

すぐに感情が表にでるのは、俺の悪い癖だな…

「そうだね…洞穴でも探そうか。熊もいるかも知れないし」

心が未熟な俺は、武力でみんなを守らなくてはならない。

レインは隣の少女を見て、今一度気を引き締めた。

幸い、雨宿りする場所はすぐに見つかった。洞穴とより洞窟だが、それでも雨を凌ぐ事はできるため、差異はない。洞穴を探していたのは熊を探すためではなく、雨を防ぐためなのだから。そして無論、雨宿りの間も手をこまねいている訳ではない。二人は各々の方法で、熊の捜索を行っていた。

「（全然当たらないなあ…）」
レインは目を閉じて、感覚を途中に仕掛けてきた罠へ向けている。某大人気狩猟ゲームの道具を参考にして（ちなみに何日前、船の上でやっていたのと同じゲームだ）トラップを作って、行く先々にばらまいてきた。

これに引つ掛ければ一発で獲物の居場所が割れる上、生体電流にレインの微弱な雷が混ざるため半永久的に追跡が可能となる。しかも今は雨だ。しかし、そんな凶悪トラップに、未だターゲットが引つ掛かった形跡はない（普通の鹿とかは…割愛）。

範囲が狭すぎたか、はたまた、ただ運が良すぎるだけか。それとも

「 見つけたぞ」

地面に描いた術式に頭を垂れていた静奈が、ゆっくりと面を上げる。「どこだ？」

間髪入れずに聞いてくるレインに思わず苦笑しつつ、静奈は手招きし、傘もないまま、ザアザアと雨の降りしきる音のみが聞こえる森林へと足を踏み入れた。

静奈は、雨に濡れてなどいなかった。

雨粒が彼女の頭を、髪を、足を、服を濡らそうと落ちてくる。

しかし、その水滴一滴一滴が突如見えない傘に遮られたかのように一瞬とまり、彼女の頭上をそれ、地面の水溜まりに波紋を起こす。彼女の超能力は、水を操る。

軌道を制御する『激流の奏者』^{ストリーマー}によつて、雨粒を全て避けていた。雨に打たれてる動物、その特徴を理解するのも容易だ。

「便利だね、静奈の能力」

「そうか？私は複数の能力を使うのは苦手だから、あまりそんな気はしないが…」

それでも充分に便利なのだが、本人はあまりそう思っていないらしい。この能力があるのにわざわざ雨宿りして能力を使ったのも、その辺が関係しているんだろう。

「…雨に打たれてる熊だが、なんだか変な感じがする。気をつける」
「…了解だ」

ここまで来れば、熊の存在を理解できる。
あと300メートルくらいの地点にいる。

息を潜め、静かに熊に近づく。

その距離、50メートル、もう視認できる。

だが、その視認した熊は確かになんとか変な感じがした。

距離、10メートル…！

いよいよもつて、熊の様子がおかしい。

生気が感じられない。

呼吸が、見て取れない。

生きては、いない　！？

熊がグリーン、とこちらを壊れた木偶人形のように向く。

首だけが（……）。

その顔には、確かに右目に古傷があった。

だが、そんなのは問題ではない。

顔中に、生々しい赤い傷痕が見える！

熊の身体が、ブルン、と震えた。

ほんの小さな変化。だが、それをレインは見逃さなかった。

「静奈！離れ」

そう言い、彼女の方を向いたレインの瞳には、顔を蒼白にさせ、ただただ、口を押さえる静奈の姿が映った。

しまった！

瞬間、熊の身体が弾け飛び、鋭い大量の氷柱が全方向に飛び交う。

咄嗟に雷神化し、静奈の前に立ち塞がったレインは、両手に持ったスロージングダガーで迫ってきた氷柱を全て撃ち落とした。

「ふう：なんとか間に合った。静奈、大丈夫？」

レインは蒼白な表情の静奈に声をかけるが、彼女はまだショックが抜けきれないのか、地面にへたりこんでしまった。

「…平気とは言えないみたいだね。じゃあ、少し休け」
びしゅん！

！？

感じたのは、殺気にも似た寒気。

振り向いたそこには

「さっきの氷柱：！？」

先ほど明後日の方向に飛んでいった氷柱が、全て自分たちを取り囲んでいる！

くそ、ここには静奈が！

レインが雷神化を最大出力にすると同時。

全ての氷柱が彼らを捉えた。

「…流石は『雷神』：この私の氷柱のほとんどを防ぐとは…その女さえいなければ、私ごときが貴様に一太刀でも加えられる事もなかっただろうに」

そういつて茂みから出てきたのは、淡い銀髪の白人だった。

「…誰だ、お前：！」

そう威嚇するように声を上げるレインの左肩には、氷柱が突きささっていた。その赤い血がしたり、泥と混ざって地面を赤黒く染める。

「…私の名はジャンヌ・ダルク30世。彼女の末裔だ。そして…本来なら、軽々しく口には出来ないのだが…敬意を表し、貴様には教えてやる。私は

イ・ウーのメンバーだ」

その、言葉に　ドグン。

心臓が、これまでにない高まりをみせる。

こいつは　イ・ウーのメンバー。

アイツに、繋がっている　！

頭が、その考えに至った瞬間。

バチバチバチ…バチツ。

「…？」

バリイ！

「な…！」

レインの身体から、再び紫電が放たれた。だが、その雰囲気は普段とは全く違う。

「貴様…！」

「来なよ。後悔させてやる。俺の仲間を狙った事…そして

俺の目の前でイ・ウーの名を語った事を」

今までとは質の違う威圧感に、ジャンヌは冷や汗を流し　鋭い笑みを浮かべた。

「良いだろう…この雨で私の力は増大される。貴様に勝ちの目はないぞ。たとえお前が『雷神』だとしても」

「いいから来なよ。格の違いを教えてやる」

刹那。

紫電と銀氷が交わった。

第7弾 怒りの雷神（後書き）

あれ…ジャンヌってこんな性格だったっけ…？

第8弾 信じる力（前書き）

やってしまった…

まさか、オリジナルヒロインとは……………

そんな高度（なのかなあ？）な事が俺にできるでしょうか……………

第8弾 信じる力

第8弾 信じる力

「ふっ…この聖剣『デュランダル』に」

ジャンヌがデュランダルを振りかざしたのを見て、レインはスロウイングダガーを頭上でX字に交錯させ、受け止めようとする。

「断ち切れぬモノなど存在しない！」

だが、一瞬火花を散らし、ダガーはへし折れ、弧を描きながら静奈の足元に突き刺さった。

「ぐっ…！」

ダガーをへし折られた際、デュランダルの一撃を喰らったのかレインは右足から血を垂れ流している。

「やはり女を庇い、雷を使えないどころか雷神化もままならない『雷神』など、恐れるに足らないな」

ジャンヌは足に傷を負ったレインを嘲笑うかのように、木から木へと素早い動きで飛びうつり機動力の差を見せつける。

「ちっ！」

レインはジャンヌの進行方向を予測し、ダガーを投擲する。

相手は木を蹴って、空中を移動しているのだ。

その動きは、直線的で当てやすいはず。その予測はもちろん当たっている。

だが、

ガキーン！

「…くそ、やっぱり防がれたか…」

デュランダルによってダガーは弾かれ、回転しながら地面に落ちる。やはり雷、もしくは雷神化がなければ厳しい。銃を用いたとしても勝ち目はないだろう。

レインは一瞬、ちらと静奈の方をみる。

彼女ももう衝撃から気を取り直したのか、正気を保っているようだった。

これなら　！

「静奈！離れる！」

静奈を引き離して、全力で戦う。

そのために叫んだ瞬間、気づいた。彼女の異変、いや、正確には彼女を取り巻く、自分にも届く冷気に　！

「くそっ…駄目だレイン！
動けない！」

なんと、静奈の靴は白い氷　霜、だろうか　によって、地面に貼り付けられていた。

「なっ…！」

「余所見とは余裕だな、雷神」

レインは背後から感じた文字通り寒気に、咄嗟に振り向いた。

静奈と氷に気をとられていて、接近に気がつかなかった。

そして、あの氷。

熊の死体から出てきた、氷柱。

静奈の足に張り付いた、霜柱。

こいつの能力は　！

ダガーを盾にしようと、刀の間に滑りこませた。
が…

「遅い！」

デュランダルが、レインの胸板を真一文字に切り裂いた。

「れ…レイン！レイン…！」

静奈の叫びが、降りしきる雨の音にかき消された。

ドクドクと流れ出る血に、静奈は再び青ざめる。

「…心配せずとも、殺してはいない。こいつの力は我らい・ウーも欲しているのではな」

冷たくいい放つジャンヌに、静奈は怒りを露にし、怒鳴りちらす。

「お前、何が目的だ！イ・ウーとはなんだ！何故レインを狙う！」
「…貴様には関係のない事だ。それ以上口を開けば、殺す」

しかし、ジャンヌから発せられたあまりの殺意に、口をつぐんでしまった。

どうすれば、いいんだ…

私では彼を助けられない…

私ではこいつには勝てない…！

私は…私では…！

「…静奈…」

「！」

突如聞こえた、発せられるはずのない声。

静奈は声を発した男

「レイン！」

その名を、叫んだ。

「…ッ、馬鹿な…！？致命傷ではないが、確実に気を失うほどの傷だぞ！」

ジャンヌが狼狽の声をあげるのを無視し、レインは静奈に向けて言葉続ける。

「頼む…逃げろ」

「な…！」

驚きのあまり声を出せない静奈に、追い討ちをかけるようにレインの言葉が紡がれる。

その言葉は、普段の彼とは違う　悲壮な覚悟を感じる、言葉だった。

「お前はどんな方法を使っても逃げろ。こいつは」

彼の言葉を聞く中で、彼の言わんとする事が、解った気がした。

「俺が」

やめろ、言うな。

そんな事、そんな悲しい事　！

「死んでも」

「それ以上、言うなあぁー！ー！ー！」

叫んだ静奈を。

レインはただ、驚きに満ちた表情で見上げていた。

「死んでもなんだ！」

死んでも食い止める？

おまえが死んだらこいつが止まるのか！？

死んでも守る？

お前が死んだら、私はこいつから守られるとでも！？」

白銀の瞳を大きく見開いて、レインは静奈の瞳から流れ落ちる、一滴の涙を視界に映した。

「甘ったれるな！そして、私を見くびるな！」

お前は、私を傷つけまいと力を押さえていたらしいな！

思い上がりも甚だしい！

私だって、自分の身くらい自分で守ってみせる！

お前は私を守るんだろう？

なら、お前は私を信じる！

私もお前を信じる！」

ドゲン。

再び、レインの鼓動が加速する。

しかし、さっきのような怒りからの衝動ではない。

心が、たぎる。

俺は、静奈を　信じる！

「口を開くなと…言ったはずだ！」

先ほどの言動を危険だと判断したジャン又は、静奈に向けて氷柱を放つ。

その数、実に50本。

その氷柱は、全て

バリイン！

「な…！」

砕け散った。

全て、一瞬で。

紫の雷によって !

「…待たせたな」

その『紫』は、呆然とするジャンヌに向けて言葉を発した。

その正体は、最早確認するまでもない。

「再戦といこう！」

髪と瞳を紫銀に染めた、

「『紫電の雷神』…！」

成瀬 レインハートだった。

「レイン…！」

静奈は、自分の目の前に堂々たる風格で佇んでいるレインの背中を見ながら、彼の名を呼ぶ。

レインは無言で、それでいてプレッシャーを与えない柔らかな笑みを浮かべ、彼女の方を振り向いた。

彼女の周りには水のドームができていて、そこから紫の雷がバチバチ…と音を発するのを確認する。

水は電気を通しやすい。

その水に帯電させて、自分への感電を防ぐためのものだろう。

なるほど、これなら彼が直接にでも攻撃しなければ怪我は負わないだろう。

レインは全身全霊で雷神化した。

その運動神経、反射神経は大幅に上昇している。

レインはデュランダルを構えるジャンヌに、愛銃 FNブローニング・ハイパワー、ブローウの銃口を向けた。

「早めに決めるよ…『雷砲』」

呟いた瞬間、ブローウの銃口付近に紫の雷が集まった。

あれはまずい！

瞬間的に判断、あるいは直感したジャンヌは地面の水溜まりを凍ら

せ、デュランダルを突き刺しそれを支えにして左へ一気に滑った。
ドゴオオオオン！

刹那、先ほどジャンヌがいた位置はかすかな紫の閃光の残光がちかちか…と鈍い光を放っている。

その地面は、何かに削りとられたかのように吹き飛んでいる。

「貴様…武偵法9条は知ってるか？」

冷や汗をかきながらも、ジャンヌは皮肉めいた問いをレインに投げ掛けた。

武偵法とは、武偵が守る法律みたいなもので、その9条は『武偵は任務中、いかなる事情があろうと犯人を殺してはならない』とかなんとかだ。

だが、雷神化して頭も冴えているレインには、そんな事はわかりきっている。

「避けると思つてたさ」

「ふん…お褒めに預かり、光栄だな」

二人は互いの武器を携え、獰猛な笑みを浮かべた。

第8弾 信じる力（後書き）

完璧レールガンですね。
感想お待ちします。

第9弾 雷神の裁き（前書き）

自分のネーミングセンスの無さに呆れる中3の今日この頃です…

ブーモはもうすぐ誕生日なのですが、欲しい物が

・時間・文才・体力・ネーミングセンス

と、手に入らないものばかりです。

時間が欲しいなんて思ったの人生初ですよ…

第9弾 雷神の裁き

第9弾 雷神の裁き

ジャンヌはデュランダルを地面に突き刺し、それを支点にしてカポエラのように足を 氷の刃をつけた凶悪な装備だ 振り回す。それを受け止めようとダガーを盾にしたのを見て、ジャンヌは更に身体を捻らせ、今度はレインの脇腹を狙った。

レインはバックステップで距離を取り、すんでのところかわす。服が少し破れた。

防弾に加え防刃性能も含まれる武偵高の制服に傷をつけるとは、ジャンヌの超能力の力が窺える。

さっきの『雷砲』 電磁力によって銃弾の威力、速度を大幅に上げる技、みんなにお馴染みの所謂レールガン を撃った後から、先のような肉弾戦が多くなった。

いや、肉弾戦を多くしたのではない。

彼女は得意の剣撃を使わないのだ。

理由は、レインの能力ゆえだった。

レインの雷は武器の接触によって流しこむ事ができる。そのため、つばぜり合いが出来ないのだ。

剣撃を封じられたジャンヌは空気中の水分から作り出した氷刃を手の袖口につけ、ボクシングのジャブのように拳をつき出す。

レインは寸前で頭を傾け、ダガーの取っ手の穴に指をいれ、くる、と回した勢いでつき出された腕を切りつけた。

だが、ジャンヌはそのまま前方に転がるように回避し、今度は足に氷刃を発生させ、軸足狩りの要領でレインの足に切りかかる。

それを回避しようと、後方に跳んだレインに向けて、ジャンヌは懐に忍ばせておいた小型拳銃を懐から取りだし、レインに向けて発射する。

その銃弾はレインに真つ直ぐ飛んでいき
一瞬、空に停止した。

そして、ビデオの巻き戻しのよう
に ジャンヌの銃口に向けて弾
丸が戻ってくる。

磁場の形成による、電磁力。

超強力な電磁力で銃弾を反発させる能力。

普段銃弾や砂鉄を媒体に使っている応用技ではない、シンプルで、
それ故強力な電磁力。

使っている間は一切銃弾を寄せ付けないが、非常に燃費が悪い上に
自分も銃を使用出来ない。

しかし、雷神化したレインは、銃弾が自分の目の前にきた瞬間に銃
弾とその手前の空間に同極の磁力を発生させ、反発させるという離
れ業をやってみせ、見事に燃費を向上させた。

その弾丸は、銃口に吸いこまれるようにジャンヌの銃に戻ってい
た。

銃が爆ぜる。

左手に走る痛みにはジャンヌは一瞬顔をしかめるが、壊れた銃を瞬時
にレインに投げつけ、爆風に紛れてデュランダルを振るう。

この勢いなら、デュランダルは刀に防がれる事なく豆腐を切るよう
にレインの身体を断ち切れるだろう。

だが…

ガキーン！

「ば、馬鹿な…！」

デュランダルは 防がれた。

それも、何本もへし折ったダガーによって。

バチィ！

「く…！」

デュランダルを握る右手に痛みが走り、ジャンヌは後退し距離を取
った。

「…どういう事だ…！デュランダルに断ち切れぬモノなど…！」

いいかけて、ジャンヌはレインの握るダガーに目をやった。
質は今まで折ったものと同じ。違う点は
紫の光。

帯電している　！

『雷刃』。

雷を刃物に流し込み、強度、切れ味その他を強化する技だ。
更に、雷刃で強化した刃物で切りつけられた相手は感電し、痺れる。
直接切りつけなくとも、刃が刃に触れれば相手は程度に差はあれど、
感電する。

超攻撃力の雷砲、対剣撃の雷刃、対銃撃の雷磁力。

およそ武偵が持つほぼ全ての攻撃を防ぐ術。

これが、雷神の本当の力　！

普通の武偵の攻撃は、彼の前では意味を為さない。

だが、ジャンヌもまた、レインと同じように普通ではない。

「ふざけるな…」

彼女が咳いたのと同時、周りの空気が急激に冷えていく。

吹き荒れる吹雪に目を細めながらも、レインは相手の姿を見失わな
かった。

「私が…このジャンヌ・ダルク30世が…負けるものか！」

ジャンヌが手を振り上げた、瞬間。

雨が、止んだ。

突然、直前まで降りしきっていた雨。

それが突然、止まった。

……………？

不審に思ったレインは、空を見上げた。

その瞳に映ったのは、雲に覆われた灰色の空　　ではなく、大量の
小さな氷柱が、灰色の空を覆い隠している　　！

「この氷柱の雨を…」

ジャンヌが挙げた手を振り下ろし、

「さばききれるかっ！」

その全ての氷柱が、レインに向けて降り注いだ。

「一つ言っておくよ、ジャンヌ・ダルク30世」

無数の氷柱を前にしても、レインは動じない。

ゆっくりと手を前に突きだし、

パチン。

指を鳴らした。

その瞬間、

バリイ！

光が瞬き、ジャンヌの視界を覆った。

あまりの光量に腕で目を隠し、その光を遮る。

光が収まっていくのを確認し、恐る恐る手を開くと、レインを中心に小規模なクレーターができています。

彼はもちろん、無傷（といってもさっきから攻撃を喰らっていたので、全然無傷とは言えないが）だ。

「な…！」

何をした、そう言おうとしたジャンヌは自分で口をつぐんだ。

何をした？

そんな事はわかりきっている。

この少年は、呼んだのだ。

本物の雷を…！

「雨が自分の独壇場だと思ったら…大間違いだよ」

『雷神の裁き』。

『紫電の雷神』、レインの最大の技の一つだ。

雨の日しか使えないという重大な欠点があるものの、その威力は全部の技の中で最大だ。

自身の雷で、本物の雷を呼び寄せる。

もちろん、人間の身体から生成された雷と本物の雷とでは規模が違いすぎるため、人に当たれば十中八九死に至る。

そんな危なっかしい技を他人（犯罪者も含む）に使えるはずもないので、レインはもっぱら別の使い方をしている。

レインは、短距離走のスタートをきるような体制をした。ジャンヌが反射的に身構えて、

「!?!」

後方に吹っ飛ばされた。

腹に残る痛みから、やっと殴られたという事実を認識できる。

いや、蹴られたのかも知れない。

ともかく 迅すぎる!

「『皇雷神』」

ジャンヌの視界の端に映るレインの姿は、その技の名の通り皇帝のように凛々しく、神のように神々しかった。

「ジャンヌ、お前の目的はなんなんだい？」

レインの問いに、ジャンヌは忌々しそうに彼を睨み付ける。

「…答える気はない、か。仕方ないね。ジャンヌ、お前を逮捕するよ」

そう言い、先ほどのパンチを喰らってまだ立てないジャンヌに歩み寄った 瞬間。

「ッ!」

パン!

という乾いた破裂音と共に、銃弾が放たれる。

右から飛来したその弾丸を、レインは身を翻して避けた。

…?

端から戦闘を見ていて、先ほどまでレインの戦闘力にあっけにとられていた静奈は、疑問を感じずにはいられなかった。

何故、レインは雷磁力を使わなかった ?

レインは、銃弾が飛来したその方向を振り返った。

そこには、真っ黒なレインコートに身を包んだ男が、立っていた。

レインの驚愕の表情を目の当たりにして なにも言わず、男は僅かに口元を歪めた。

第9弾 雷神の裁き（後書き）

前書きが長くてすみません。

後書きも長くなりそうです。

遅速更新とか言ってた割に一日に一話の（自分には）ハイペースで書いてたブーモですが、それもどうやらここまでのようです…時間が足りません。

目下の悩みは、塾の宿題が多い事です。

更新がちよっと遅くなりそうですが、引き続きこのような駄文を読んで頂けると嬉しいです。

第10弾 黒衣の男（前書き）

まだだ！まだ行ける！

と意気込んで書きました。

半分寝ぼけて書いてたので、今回誤字脱字多いかもです。

第10弾 黒衣の男

第10弾 黒衣の男

突如現れた黒衣の男。

灰色の空に太陽の光が遮られた今、その姿を視認するのも容易ではない。

だが

レイン、静奈、そしてジャンヌ。

この場にいる全員が、声を失い、ただ立ち尽くした。

今にも消えそうな、儂ささえ感じさせる男の、圧倒的な存在感に

！

「誰だ…あいつ…!?!？」

突然の乱入者。その存在に苛立ちを覚えた静奈の声は、微かに、しかし確実に震えている。

黒衣の男は、静奈に見向きもせずジャンヌの方にゆっくりと歩いていく。

「…何をしにきた」

ジャンヌは鋭く男を睨み付け、忌々しげにいい放つ。

どうやらジャンヌは彼と知り合い 仲はよろしくないようだがなようだ。

ジャンヌに明らかかな嫌悪、あるいは拒絶の意を示された男は、初めて言葉を口にした。

「気にするな。少し挨拶に来ただけで、ついでの負傷者を拾っていただくだけの事だ」

その声は機械的なまでに平坦で、それでいてジャンヌが発した冷気よりも冷たい。

聞いていた静奈の背筋に、悪寒が走る。

ジャンヌもまた、この男を前に気丈に振る舞ってはいるが、その白い顔はより一層蒼白になっている。

ジャンヌとの会話を終え、くるっと踵を返した男は、黒いフードから覗く金と銀のオッドアイを、真っ直ぐレインに向けた。

「……………」

「……………」よくもぬけぬけと、俺の前に姿を現したものだな……！」

沈黙を破ったのは、レインだった。皇雷神が解けて、その髪は普段の銀に戻っている。

そして、彼の少し後ろに水のドームを張っていた静奈は、彼の方を啞然とした表情で見つめていた。

レインの普段の明るさからは考えられない、攻撃的な口調。

その言葉に乗せられた、どす黒い感情。

彼と謎の男との間には、一体、『どれほど』の『何』があるのか

それを考えるより早く、レインが愛銃『ブロー』を抜き、雷砲を放つ。

超音速の弾丸を、クイックドロウで撃ったそれは敵に回避の隙を与えない。

完全に、直撃。

あの超威力の電磁砲が。

「……………」レインッ！」

静奈は思わず声を荒げた。

武偵法第9条、それを思い浮かべ、レインの未来を案じ、同時に彼を叱るつもりで声を上げた　はずだった。

その一瞬で。

静奈の頭の中で複雑に絡み合った感情のコードは全て吹き飛び、『驚愕』　それだけが残った。

雷砲の紫電の残光が途切れ、視界が良好になったそこには、黒衣の男が、両手をポケットに突っ込んだまま、チリ一つついてないそのレインコートをはためかせ、悠々と佇んでいる　！

「……………」

レインは無言で空へ弾丸を放つ。

雷雨、雷花の合わせ技。

男に向けられたのではない雷の雨に、男は微かに動いた。自身の回避、あるいは防御のためではない。

「ぐっつ!?」

ジャンヌを蹴り飛ばし、雷雨の攻撃範囲外へ誘導した。

刹那、雷雨が男を直撃する。

男は傷つかない。

雷花が男を包む。

男は微動だにしない。

雷神の、全霊の攻撃が通じない。

その事實は、端から見ている静奈の心を揺さぶるには十分だった。もっとも

ドゴオオオオン!

この雷神に、その程度の事で動揺を誘えるかは、甚だ疑問だが、雷砲を再び放ったレインは、カートリッジを外し、別のマガジンを装着させ、通常の雷雨を連射する。

爆発音が響き渡る中、男は口を開いた。

「…何年ぶりだろうな、お前とこうして会うのは」

その言葉に、レインの引き金を引く指に力が加わる。

「 黙れ」

怒りが、身体の内からにじみ出てくる…!

「冷たいな。ひよつとして、まだあいつらの事を気にしてるのか？」

「 黙れ…!」

男はよほど気分がいいのか、先ほどまで沈黙していた男とは思えないほど饒舌になっている。

「いいじゃないか。お前は別に、あいつらの家族でもなんでも」

「 黙れええええええええええええええええええええええ!」

レインは愛銃をホルスターに納め、スローイングダガーを二刀流で携え、黒衣の男に切りかかる。

もちろん、雷神化していて、雷刃で刃をコーティング済みだ。片方のダガーで、頸動脈を狙って男の首に切りつける。

男はどこからだしたのか、ニメートルはある日本刀を抜き出しその刀の鞘で防いだ。

「『月影』か…！」

苦虫を噛み潰したような表情で舌打ちしたレインの耳に、ブロロロロロ…

という低いプロペラの音が聞こえてきた。

「…どうやら迎えが来たようだ」

心底残念そうに、男は顔をしかめ、ヘリコプターから垂れ下げられる縄梯子を見つめた。

「…命拾いしたな」

「…そういう事にしておこう」

皮肉をさらりとかわされ、レインはやりきれない表情を浮かべる。

ヘリコプターで移動する以上、乗られたら手出し出来なくなる

武偵法第9条的な意味で。

彼はあくまでも男を『武偵』として捕らえる事を決めていた。

それは今も揺るがない。

だから、ヘリコプターを撃たないのか？

そう聞かれれば確かにそうだ。

だが、今逮捕したいならヘリに乗り込む前に捕まえればいい話。それをしないのは、他に理由があったからに他ならない。

「…命拾いはお互い様のようだな」

去り際のセリフに、レインは露骨に顔をしかめながらも、内心その通りだと納得せざるを得ない状況にだった。

ああそうさ。空っぽだよ。

レインは音叉のように指を近づけ、いつものように力を入れる。パチッ。

その紫電は、弱々しい花火のように儂く弾けるのみ。とても戦える状況じゃない。

本来、敵方が帰るのはこちらにとって好都合。

やりきれない思いが胸を支配するレインは、ジャンヌと黒衣の男を乗せたヘリを、ただ見つめるだけしかできなかった。

次の瞬間。

ドサツ。

「れ、レイン!？」

そつとレインに近づき、静奈は彼の心音等をはかる。

「生きてる…というか、気絶してるだけ、か…」

気絶してるというより、すやすや眠っているという形容が似合うレインの寝顔を見ながら、静奈は彼が起きないよう、ゆっくり優しく、彼のほつぺたを突つついた。

柔らかい感触に、思わず頬が綻んだ。

「…ふん、こんなところで寝ていて、私が熊にでも襲われたらどうするつもりなんだ？」

皮肉めいた冗談を一人でに呟いた静奈は、次の瞬間、自分が何故最初から戦えなかったのか、その理由を思い出した。

そつだ。

熊に襲われて？

違う。

私達は熊を狩りにきたのではないか！

その結論に至つたのと、隣に転がる熊の死体の顔を見たのは、ほぼ同時だった。

「キャアアアアアアアア！」

普段のボーイッシュな感じ（最早男も使っていない言葉遣い。ボーイツシュというより大和撫子？）とはまた違った、女の子らしい可愛い叫び声をあげた。

第10弾 黒衣の男（後書き）

アニメ緋弾のアリア面白かったですね。
あれ？プーモだけですか、そう思うの？

第11弾 一難去つてまた一難(前書き)

今回、なんか寝ぼけながらかいたので変なところ多いかもです。

第11弾 一難去ってまた一難

第11弾 一難去ってまた一難

「何をしてるんだ、馬鹿共が」

「すみませんでした」

恐山のふもと、合宿の宿場で静奈と包帯ぐるぐる巻きにされたレインは正座させられていた。

自分が捕らえるはずだった熊の無惨な姿を一瞥し、説教をしている千鶴はため息をついた。普段からテンションの低い彼女だが、今はより一層テンションが低い上、額に血管が浮かんでいるのは見間違いではないだろう。

「…まあいい、お前がそんなにボロボロなんだ。襲撃者というものもあながち嘘でもないだろう」

だがそこは一応武偵高教師科の中では良識人である千鶴。

任務失敗は誰にでもある、と軽く流した（というか、熊が殺されていたのだから生け捕りははなから無理だが）。

それを安心した様子で見ていた静奈が、面目ないという様子でレインが一礼し、部屋を後にした。

「あー、静奈。ごめんね、運ばせちゃって。重かったでしょ？」

あの後、気絶したレインは死体となった熊と共に静奈に運ばれ、下宿所に戻って来た。熊を運んだのは、あらかじめルールで熊を見つけたら即刻終了とするため、下宿所に運ぶ事になっていた（実はそのためにバディを作ったらしい）。

改めて感謝の意を述べたレインに、静奈は首を横に振った。

「気にするな。雨の中だったし、私はお前に助けられたのだからお互い様だ」

照れるように微笑する静奈に、レインもまた微笑しながらその隣を歩いた。

びー！びー！

「？ ああ、俺のケータイか…」

マナーモードにしてあった携帯電話を特製カバーから取り外し（レインの能力上、普通にケータイを持つていたら壊れるため防電・防磁力の特製ケータイカバーを使用している）、切れた電話を折り返す。

電話をかけてきた相手は、クラスメートで車輛科の優等生、武藤剛気。

明るく気さくで、大柄なツンツン頭。

また、大の乗り物オタクで乗り物とつくものならヨットや飛行機からスペースシャトルまで操縦できるらしい。

初日、掃除をしていたら出てきた、昔から持っていた外車のミニカ―（後から聞いた話だともう非売品だったらしい）を弄っていたら譲ってくれとせがまれたものだ。

その時は多少の愛着もあったので渋ったが、武藤の防弾使用の前の自動車をくれてやるとの一言で一瞬で交渉成立したのは記憶に新しい。

それで仲も深まったというものだ。

ともかく、その武藤から電話が来ていた。

どんな内容なのか、この間の交渉の件なら一瞬で切ってやろうと考えていたが

「！ レインか！？」

武藤の声に、レインは思考を切り替えた。

レインのケータイにかけたにも関わらず確認するくらい慌てているらしい。

「ああ。どうしたの？何かあったの？」

何も無いはずがなかったが、今はそう聞くより他はない。

レインの質問に、予想外の答えが帰ってきた。

「アリアの乗った飛行機が『武偵殺し』にジャックされた！」

パン！

飛行機の中、乾いた破裂音が響き渡る。

飛行機のスイートルームに座って、イギリスへ帰ろうとしていたアリア　そして、彼女を追いかけてきたキンジは、突如聞こえてきた銃声に廊下へ振り返った。

まずい　！

「『武偵殺し』…！」

苦虫を噛み潰したような表情でいうキンジに、アリアはその赤紫色の瞳を見開く。

「キンジ…あんた知ってたの!？」

アリアの問いに、キンジは無言で頷き、指で静かにするよう指示した。

キンジは武偵殺しについての資料、それに加えて最近起きた事件、極め付きに、とある事件　彼の兄、遠山　キンイチの死亡事故。

それらを繋げ　この飛行機に、武偵殺しが現れる事を予測していた。

今回はハイジャックを。

そして兄の時はシージャックを、それぞれやってみせた、武偵殺しが。

兄は、乗客を助けて死んだ訳では断じてない…！

未だに信じられないが　殺られた、のだ。

武偵殺しに　！

兄を殺し、そして今度はアリアを殺そうとしているそいつを、見逃す訳にはいかない。

正体を見極めるべく、キンジはアリアと共に、音を立てないように銃声の下へと向かった。

廊下を出た瞬間目に入ったのは、飛行機のパイロットと機長らしき

人物を操縦席から引きずって来る、アテンダントらしい若い女の姿だった。

こいつが武偵殺し!?

そのあまりに意外な光景に啞然とするキンジを嘲笑うかのように、アテンダントは二人を放り、手を自由にする。

慌てて拳銃、ベレッタを抜いたキンジの足元に、金属製のカンが放り投げられる。

カッ!

瞬間、白光が視界を覆い、キンジは反射的に手で顔を隠す。

「くっ…!」

キンジが視界を取り戻し、目を開いた時にはアテンダントの姿はなかった。

「何処へ…!」

行った、と言う前に、キンジの視界に血で書かれたような赤い文字が映った。

『一階のバーにおいで。イ・ウーは天国だよ』

「…誘ってやがる」

「上等よ。風穴開けてやるわ」

予告通り、キンジ達は一階のバーに足を踏み入れた。無造作に転がされた酒瓶は、明らかに奴が意図的に転がしたものだろう。

バーの奥、横長のテーブルには、さっきのアテンダントが足を組んで座っていた。

その姿を見て、キンジ、アリアの足が止まる。

そう、その姿 先ほどとは違う、服装を見て。

彼女は、武偵高の制服を着ている。

それも、ロリータ風にフリルをふんだんにあしらった、魔改造された制服。

まさか。

キンジには、見覚えがあった。

その制服は

まさか、まさか！

キンジの必死の願いを裏切るように、アテナダントは自分の顔に手を伸ばし、

ベリイツ！

薄いマスクのような特殊メイク（・・・）を剥いだ。

武偵殺しとは

「…理子…ッ！」

「はるはる〜」

いつものバカっぽいしゃべり方も、今はイカれ爆弾魔の嘲笑に聞こえてくる。

クラスメートで、いつもクラスの中心にいた、明るいちよつと不思議な少女、峰 理子。

彼女が、武偵殺し…！

キンジに、兄のシージャックという真実を教えた少女。

キンジに、武偵殺しの次のターゲットを教えた少女…！

なるほど、それも全部こいつの手のひらの上、という訳だ…！

腹だたしい表情を浮かべるキンジをよそに、理子は、キンジのあまり好きでない話 血筋の話 시작했다。

「アタマとカラダで戦う才能って、結構遺伝するんだよね」

テーブルからピヨコン、と飛び降り、理子は後ろで手を組みながら辺りを徘徊する。

「武偵高にも、お前たちのような遺伝系の天才がけっこういる。でも、お前一族は特別だ」

理子は忌々しげに、それでいてどこか嬉しげな表情をし アリアへ向けて、いい放った。

「オルメス」

第12弾 二人の双剣双銃（前書き）

最近思い始めたんですが、プーモには外国語のスキルがありません。どっしたら皆さんのようないい感じの名前（技とか）がつけられるんでしょう……？

第12弾 二人の双剣双銃

第12弾 二人の双剣双銃

理子の一言、『オルメス』に、アリアは硬直した。

『オルメス』 それアリアの『H』と何か関係があるのだろうか。

「あなた…一体、何者なの…!？」

狼狽するアリアの問いに、理子は口元を歪め、

「理子・峰・リュパン4世 それが理子の本当の名前」

自らの名を口にした。

リュパン ?

「まさか、アルセーヌ・リュパン…!？」

その名前に心当たりのあるキンジは、一人でに口を開いた。

アルセーヌ・リュパン。

フランスの大怪盗。

彼女が、そのリュパンの曾孫 !？

「でもねえ、家の人はみいーんな、この可愛い名前で呼んでくれるの。酷いよねえ？」

4世様、4世様、4世様あーって。」

「な…何よ。4世の何が悪いっていうのよ」

何故かアリアが否定的なセリフを口にすると、突然理子は目を見開き、怒鳴り声を上げた。

「良い訳ねえだろ！あたしは数字か!？あたしはただのDNAかよ!？」

違う！あたしは理子だ！

数字じゃない！」

その怒鳴り声からは、怒りでも狂気でもない何かがにじみ出ていた。それを敏感に感じ取ったキンジは、その何かの正体もわからないま

ま、無意識に胸を押さえた。

「だから、あたしは曾お爺様を越えるんために、イ・ウーに入った。『リュパンの曾孫』じゃないあたしを、あたし自身をもぎとるために――！」

理子の悲痛ともとれる狂気は、これが彼女を狂わせたと確信するに足るものだった。

それを聞いているキンジもアリアも、真剣な表情をしている。

「武偵殺しも単なるお遊び。本命のアリアを誘き出すための、ね」
理子はなんでもない事のようにいうが、キンジからしてみたら冗談ではない。

何人もの人が死にかけて、自分の兄が殺されて。

それが、ただのお遊びだと　？

「曾お爺様たちの闘いは引き分けだった。だから私はオルメスを倒して、曾お爺様を越える！そのために、お前もちゃんと役割を果たせよ？キンジ」

理子の獰猛な瞳が向けられているキンジは、ベレッタを抜き警戒心を強める。

「オルメスの一族は代々パートナーが必要なんだ。曾お爺様との条件に合わせるためにわざわざお前とアリアをくっつけたんだから」
随分勝手な言い方だといいたかったキンジだったが、今の理子の前では皮肉さえ致命的な隙になりかねない。

そう判断した彼は口をつぐんだまま露骨に機嫌の悪そうな顔を浮かべた。

しかし、その冷静な判断力も失われる事となる。

またもや、理子の手によって。

「だからあ、わざわざお兄さんの事を教えてあげたんだよ？」

兄さん。

そうだ、コイツは、兄さんを、

兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを

兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを兄さんを
殺しやがったんだ！

ベレッタを握りしめる手がミシミシと音をあげる、その痛みですら
気づかないほど、キンジは怒り狂っていた。

そのキンジに火に油を注ぐように、理子は更に付け加える。

「キンジのお兄さんはねえ、今理子の恋人なんだあ」

ふざけるな！

キンジは怒りに任せ、ベレッタを理子に発射しようとした 無謀
にも、真正面から。

「キンジっ！」

アリアの静止も聞かず、キンジが引き金に力を入れた、瞬間
ガタンッ！

「!?!」

突然、地面が揺れ、キンジの銃弾は天井に小さな穴を穿った。

いや、揺れたのは地面ではない。

ここは空の上の飛行機の中。

間の悪い事に（アリアからしてみたら、キンジが反撃されなかった
ため間の良いと言えるが）エアポケットにでも入ったのか、機体が
大きく揺れたのだ。

その衝撃に銃を撃った反動が合わさって、キンジは銃を放してしま
う。

「くそっ…!?!」

酒瓶が割れる中、ベレッタを取りに後退しようとする前に、理子が
こちらに小振りの銃、ワルサーを向けている。

動いたら撃つ、そう脳ミソに直接命令されているかのように、身体
が動かない。

「だめだよキー君。今のキー君じゃあ足手まといだよー、くふふっ
！」

理子はどうやらあの狂乱状態から普通の状態に戻ったらしい。

そして、キンジが自分の禁忌を破るのを煽っているように、堂々と

彼の秘密を言い当ててみせる。

コイツ、アレを知ってるのか　！？

キンジが驚愕の表情を浮かべてる横から、ピンクの影が弾丸のように飛び出した。

その正体はもちろん、

「アリア！」

「勝手に突っ込むんじゃないわよ！　このバカキンジ！」

言いながら、アリアは銀と黒の二丁のガバメントの銃口を理子に向ける。

ガバメントの最大装填弾数は、プラスアルファで八発。

二丁合わせて十六発だ。

理子のワルサーも十六発なので、弾数は互角だ　！

「だめだよ、アリア」

しかし、理子は不敵な笑みを浮かべ　スカートの中の、太股のホルスターに手を突っ込んだ。

「二丁拳銃が自分だけだと思っちゃ」

理子はホルスターから、もう一丁のワルサーを引き抜いた！

^{ダブル}二丁拳銃　！

眉を寄せたアリアは、けれど止まらない。

アリアが、理子が、それぞれの両手の引き金を引く。

バババババババ！

何重にも重なる乾いた破裂音をBGMに、二人の少女が身体を翻す。まるでダンスをしているような足取りの彼女らの足下に、後ろの壁に、すぐ頭上の天井に。

二人の踊り子は、それぞれの弾が切れるまで穴を穿ち続ける。

やがて、銃声が止む頃には、バーは硝煙の臭いに満ちていた。

アリアは理子の両腕を挟むように拘束する。

「キンジっ！」

言われるまでもなく、キンジは兄の形見のバタフライ・ナイフを広げ、理子に迫った。

バタフライ・ナイフが紅く煌めき、キンジが勝利を確信した瞬間
キンジの動きが、止まった。

その、非現実的な光景に。

「なんだ、あれは！」

理子のクリーム色のパーマが、まるで生きているかのように蠢いた
かと思えば、その髪が、アリアに襲いかかった！

「！？」

しかも、その髪は人の手のように、ナイフを握っている。

アリアは瞬時に飛び退き、背中から二本の刀を取り出し、X字にし
てナイフを防ぐ。

あの髪、よほど力が強いのか、腕力がないとはいえアリアの両手を
押している。

「くふっ、アリア。私とアリアっているんなところが似てるよね。

ちっこ可愛い外見、ツインテール、家系、それに」

理子のツインテールの髪、そのもう片方のテールがもう一本のナイ
フを掴んでいる！

キンジは慌ててベレッタを拾おうとするが、間に合わない。

「アリアっ！」

思わず叫んだキンジの目の前に、側頭部に傷を負ったアリアの、緋
い血が飛沫をあげた。

第12弾 二人の双剣双銃（後書き）

感想お待ちしております。

第13弾 ヒステリアモード（前書き）

最近ようやく原作8巻を読んだんですが、雷キャラが被ってしまいました…

そりゃ5巻だから曾お爺様がいつてたけど…もっとあとの話だとばかり…

第13弾 ヒステリアモード

第13弾 ヒステリアモード

「アリア、アリアっ！」

負傷したアリアは顔を蒼白にさせていて、息が荒い。

手当てしないと！

キンジはアリアを抱き抱え、先ほどのスイートルームへ向かった。後ろでは理子が

「くふふっ、理子、鬼ごっこだあい好き」

と、本当に戦闘を楽しんでいる、所謂戦闘狂のテンプレートのようなセリフを吐き、いーち、にー、と数を数え始めた。

その数がアリアの命のタイムリミットに思えて、キンジは急いでアリアを手当てすべく部屋に向かった。

鍵を閉め、アリアをベッドへ降ろしたキンジはアリアの出血元の側頭部を調べた。

「…くそ！」

出血具合からもしやとは思っていたが、どうやら側頭動脈をやられたらしい。

頸動脈ほどの致命的でないにしろ、これ以上の出血は命に関わる。

キンジは武偵手帳（武偵用の警察手帳とでもってもらって正解だろう）に備え付けてあった止血テープをアリアの頭に巻き付けるが、それは一時しのぎでしかない。

「キンっ、ジ…」

…！

アリアの様子がおかしい。

まずい、血が足りなくなってきたのか…！？

キンジは武偵手帳から、今度は小さな注射器を取り出した。

「打つぞ！ アレルギーは！？」

「な、い…」

たった二文字の言葉でさえ言うのが大変なほど、アリアの状態は悪いようだ。

キンジは先ほどの注射　ラッツォを片手に、アリアのブラウスに手をかけ、

「いいか、コイツは必要悪だぞ！」

乱暴に開いた。

トランプ柄の下着が露になり、思わず頬を赤らめる。

こんな時に不謹慎も甚だしい、と自分を戒め、心臓の位置を探す。

ラッツォは心臓に打つ薬。

鎮痛剤と気付く薬を合わせた、所謂復活剤だ。

心臓の位置を確認したキンジは注射器を打つ前に聞いた

「キンジ…怖い…」

と言うアリアの声に、集中していた手を止めたまま、アリアの顔を向く。

その声を最後に、アリアの呼吸の音が消えた。

心臓が止まっている　！

「戻ってこい、アリア！」

躊躇すれば失敗する。

キンジは思い切り注射器を突き刺し、薬を心臓に注入した。

アリアの身体がビクツ！と逆海老反りになる。

薬が効いてきたらしい彼女の顔は、蒼白から薄いピンクに変わりガバツ！と唐突に上体を上げた。

「キンジ…？あれ、胸…胸！？」

自分のあられもない姿を見たアリアは、先ほどとは別で顔を赤く染める。

どうやら、薬の副作用でラッツォ投薬前の記憶が吹っ飛んだらしい。記憶喪失したアリアは犬歯を剥き出しにし、

「キンジーー！」

とガバメントを二丁取り出す。

それを発砲する前に、キンジは両手でアリアの腕を掴み取りガバメントを押さえつけた。

「お、落ち着け、アリア！ 俺はラッツォを注入しただけだ！」

「ラッツォ？ ……ギヤアアアアア！」

アリアは自分の胸に注射器が突き刺っているのを見て（先ほど自分の胸を見た時気づかなかったのか）、およそ女の子が発するものではない（というか発して欲しくない）声を上げた。

「キンジiiiiiiiiiiii！」

「落ち着け！ だからお前は理子にやられて」

「はっ！ 理子！ 理子……！」

だめだ、アリアの頭のネジがどこかはずれたらしい。

ラッツォには興奮作用も含まれているらしいので、正常な判断力を失っているのだろう。

自分と理子の力量の差を理解していない（理子の力量だけ忘れている可能性もあるが）。

「落ち着けアリアっ……！」

キンジは必死で彼女を止めようとする。しかし、薬が効きやすい性質なのか、アリアは扉へ向けて前進を続けた。

「もういい！ あんたは私の事をクライっていった！ 私、覚えてるわよ！ 青海に猫を探しにいったとき！」

そう、キンジはアリアを巻くために青海での猫探しの簡単な任務でアリアを失望させようとした。

その際、彼はアリアに『クライだ』と、話の流れではあったが確かにいった。今更ながらに、後悔する。

そんなキンジの想いと裏腹に、なおも騒ぎ続けるアリア。

このままでは、理子にこの場所がバレてしまう もっとも、あの怪盗の曾孫には既に見つかっているかも知れないが。

両手で彼女のガバメントを塞いでいる今、この手を離せば自分は防

弾制服に銃弾をぶちこまれ、アリアは理子の下へ赴くだろう 勝
ち目の無い戦いだともわからずに。

…一つだけ、ある。

両手を使わず、アリアの口を閉じる方法が。

しかも、この状況を一発逆転できるかも知れない、恐らく最善の一手

「アリア」

短く、彼女の名を呼ぶ。

目の前で盲目的に前へ向かおうとする、可愛らしい少女の。

しかし、その一手を打てば、自分に課した禁忌を破る事になる。

…さて、ここで問題だ、遠山 キンジ…！

お前は自分の禁忌を守るのか、それとも アリアを守るのか。

そんなこと聞くまでもない 俺は、

アリアを守る！

例えそれが、禁忌を破る事になっても！

キンジは強引にアリアの顔を自分の顔に近づけ

唇を重ねた。

「……………！！！！！！！！！！」

アリアは硬直したまま、動かない。

恐らく赤面してるのだろうが、ピッタリと顔をくっつけているアリア

アの顔は、視認出来ない。

その体温を感じるだけで。

ドクン…

全身の血が、ほとばしる。たぎる。熱くなる

！

その血が自身の中央に集まっていくのを感じ 思考がクリアーに

なるのを感じる。

…ぷはっ。

長い、長いキスを終え、口を離す頃には…キンジは、なっていた。
・

ヒステリアモードに。

正式名称、ヒステリア・サヴァン・シンドローム。

脳内に恋愛時に分泌される物質の影響で、その物質が一定量を越えると、約30倍もの量の神経伝達物質を媒介し、中枢神経系の活動を劇的に向上させる。

つまり、性的に興奮する事で起こるヒステリアモードの状態では倫理的思考力、判断力、反射神経運動神経その他諸々が常人を遥かに越える、超人になれるのだ。

そしてレインの雷神化ともっとも異なる点が、この能力、いや体質は元々子孫を残すためにあるため、なにがなんでも女性を守りたくなる事。

「さあ、」

今のキンジの姿は、さながら姫アリアを護る騎士ナイトのようであった。

「反撃と行こうか」

第13弾 ヒステリアモード（後書き）

なんかこの前はキンジの出番少なかったり最近はレインの出番少なかったり忙しいですね（自分で書いてる癖に）。

なんか二人は別行動が多いですが、ちゃんと事件には絡ませますよ
…多分。

第14弾 キンジの実力（前書き）

今日はプーモの誕生日です。

誕プレ決めてないです…どうしよかな…

第14弾 キンジの実力

第14弾 キンジの実力

ヒステリアモードになったキンジは、その普段より数段回転が早くなった頭で理子の対処法を模索する。

現在最も注意すべきはあの髪。

この際、どうやってあのメデューサのような動きをさせているのかは横に置いておこう。

アレを防ぐには

「…か、かじゃ、あな…」

と、そこまで考えたところでへたりこんでいたアリアがようやくと声を発した。

「ば、バカキンジ…ふあ、ファーストキスだったのに…」

「心配しなくてもいい、俺もだよ」

抑揚もなくしようなない事実を告げるが、なんのフォローにもなっていない。

「責任…！」

皆まで言わなくても『責任取りなさい』というニュアンスは伝わったため、キンジは余計な詮索はせず、代わりに肯定した。

「ああ、責任は取るさ…だが、仕事が先だ」

そのいつもと違う物腰、そして何より今のキンジの強者の雰囲気を感じ取ったのか、アリアはその赤紫の瞳を見開き、啞然とした表情を浮かべた。

「キンジ…アンタ…！」

「武偵憲章第1条 仲間を信じ、仲間を助けよ。」

アリアが自分に対する疑問を口にする前に、キンジはそれを遮った

アリアが自分を助けてくれた時の言葉で。

「俺はアリアを信じる。だから、アリアも俺を信じて俺を囿にして

くれ。逮捕するぞ、アイツを、二人で」

「うーん、これじゃ鬼ごっこじゃなくてかくれんぼだよ……」
パン。

発砲する際も笑顔を崩さず、理子は鍵穴を吹っ飛ばした。

扉が一人でにギィ…とさびれた洋館で聞けそうな不気味な音が響く。ホラー映画なんかじゃ、こんな音がした後にドアの近くの登場人物は怪物や殺人鬼によって殺される。もっとも、今殺人鬼の立場なのは自分だが。

一応、キンジ達が扉を開けた瞬間発砲してくる可能性を考慮して、理子はワルサーを構えていたが、どうやら杞憂に終わったようだ。キンジは、部屋の奥の、ど真ん中に突っ立っていた。

その瞳は、普段の彼とは違う質の、強さと優しさに包まれていた。「くふふっ！ アリアとなんかしたんだ！？ こんな状況でよくできたねえ…っつと、そのアリアはどこかな？ もしかしたら…殺っちゃった？」

キンジの後ろ ベッドの膨らみを注視しながら、理子は皮肉気にキンジに問うが、

「…さあな」

と短い返事で返され、会話が途切れる。

……。
沈黙が訪れる。

何も話さないでいる空間に二人でいるというのは、人間、特に日本人には耐え難い苦痛だ。

それは理子も、ましてやキンジも例外ではない。

しかし今は 理子にとって、好都合だった。

自分がワルサーの銃口を下に向けているのも相まって、キンジは理子から一瞬意識を逸らし（本来は相手と対峙している状況で余所見など愚の骨頂だが）、バスルームを見た。

アリアのいる、ね。

あのベッドの膨らみはブラフ 恐らく、本命はバスルーム。
経験からそう判断した理子は、キンジが鋭い視線を自分に戻した事
を感じた。

ああ、いい…！

クラツ、ときたように理子はフラフラと頭を垂れる。

感じる者が感じれば、恐ろしいとまで思うであろう敵意。

それを心地良さそうに受ける理子に、キンジは眉を寄せた。

「良いよキンジ。その瞳。良すぎて理子 壊しちゃうかも」

「その気でこい、理子。でないと…死ぬよ」

キンジの構えから、彼の敵意が、理子に伝わって来る。

「サイツコー。さあ見せてキンジ！ オルメスのパートナーの力を

さあ…！」

「…ッ！」

理子の狂気にも似た、いや、狂気そのもの的高笑いに若干たじろい
だキンジに、理子は片手のワルサーの銃口を向けた。

引き金を引く前にキンジは、隠してあった備え付けの酸素ボンベを
盾にするように理子と自分の間につき出す。

打てば爆発する。

キンジと、自分ごと。

理子が予想通り引き金を引くのをやめ、そのお陰で隙ができた。
ほんの一瞬の間。

だが、それで十分だった。

バタフライナイフを携え、キンジは理子に特攻を仕掛ける。

この体格差、押さえつければ腕力で圧倒できる。

しかし、キンジが彼女の下にたどり着く前に

ガクン！

と、機体が揺れた。

再びの、唐突な揺れ。

ヒステリアモードのキンジも、そこまでは予測出来なかったようだ
が、先ほどのようにナイフを落したりはしなかった。

そのキンジの額に、理子はワルサーの標準を合わせている　！
鉛弾が、自分の頭に向かってくるのが見える。

左にも、右にも、避けられない。

それを悟ったキンジは、

「（いちか：ばちかだ！）」

バタフライナイフを構え

キーン！

銃弾を、真つ二つに、切り裂いた。

！

キンジは、自分のやった事に自分で驚いていた。

まさか、ここまでできるとはおもわなんだ。

驚愕しているのはキンジだけではない。当然の事だが。理子は更に驚いている。それに感嘆の表情も混じっている気もするが。

キンジはナイフを仕舞い、アリアから借りた片方のガバメントを抜き、理子に向けた。

「動くな！」

「アリアを撃つよ！」

キンジに銃口を向けるのは不可能だと判断したのか、理子は先刻のキンジの視線の先、バスルームに銃を向けた。

だが。

「　！」

理子は気づいた。

キンジは、笑っている　！

はめられた、そう気づいた時には

チュチュン！

「ぐっ！」

理子の両手からワルサーが弾かれた。

銃弾によって。

それを放ったのは、

「アリア！」

ピンクのツインテールをはためかせた、アリアだった。

そう、彼女はベッドの中でもバスルームの中でもなく、天井の荷物入れ、所謂キャビネットに隠れていたのだ。

「わかってるわよ！」

アリアはガバメントを放り投げ、刀を両手に持ち直して、理子のツインテールを断ち切った。

「うっ……！」

初めて焦りを顔に出した理子に、アリアは素早くガバメントを拾い上げ

「峰・理子・リュパン4世！ アンタを殺人未遂の罪で逮捕する！」
キンジと同時に理子に拳銃を向ける。

だが、理子はアリアのセリフをお構い無しに、キンジ達の顔をまじまじと見つめていた。

「なるほど……ベッドにいとみせかけて、キンジはバスルームの方をわざと注視。アリアがそこにいると思わせて、実はキャビネットに隠してた、と……ダブルブラフってよっほど息が合っていないと出来ない事なのにな」

理子は笑ってキンジ達の作戦を、答え合わせでもするかのように見抜いていった。

……？ おかしい。

なんだ、この余裕は。

理子は今、両手の銃に髪で持ってたナイフも、全ての武器を

髪！？

ヒステリアモードのキンジが気づいたのに理子も気づいたのか、突如彼女の髪が不気味に蠢く。

「何をしている！」

引き金を引こうとした瞬間

ガタンッ！

「……？」

再び、機体が揺れた。

「バイバイキーン」

理子が脱兎の如く部屋から逃げ出すのを、キンジ達はただみていることしかできなかった。

やられた！

思えば、おかしな点多すぎた。

この飛行機は、理子の都合の言い様に傾き過ぎている。

恐らく、髪の中でリモコンが何かで操作していたのだ。

その事に気づいたキンジは、いち早く理子を追いかけた
この狭い、飛行機の中で。

第14弾 キンジの実力（後書き）

最近勉強が難しく思えてきました（特に数学）。

自分より歳上の方々はこの試練（大袈裟）を乗り越えてきたんですね…改めて尊敬します。

第15弾 雷神、帰還（前書き）

なんか最近毎日深夜に書いてます…不健康や…

第15弾 雷神、帰還

第15弾 雷神、帰還

理子を追いかけるキンジは、飛行機の窓の外の光景に、走りながら
啞然とした。

下降している。

吹き荒れる台風の中、とんでもないスピードで。

こんな事をして何をするつもりなのか、わからない。

一刻も早く理子に追いつかねば その一心で、キンジの心は焦燥
に駆られた。

幸い、理子は直ぐに見つかった。

一階のバー。

壁には、円を描くように粘土のような物体 恐らく、爆弾が仕掛
けられている。

その壁の窓に頭を押しつけて、台風によって灰色に染まった空を眺
めている。

その顔は、どこか悲壮感を感じさせるものだったが、キンジの気配
を感じた瞬間、彼女は元の表情 いや、この理子こそ自分を守る
ための仮面なのかも知れない 笑顔を浮かべた。

お陰でキンジはその表情を見る事が出来なかったが、その方が良か
っただろう 双方にとっても。

「こんな狭い飛行機の中で、何処に逃げようって言うんだい？ 仔
リスちゃん？」

キンジの皮肉めいたセリフに、理子は白い歯を剥き出しにして、壁
側に親指をつき出す。

動いたら爆発だよ ということだろう。

キンジはガバメントを構えたまま、動きを止めた。

「ねえキンジ、この世の天国　　イ・ウーに来ない？　一人くらいならタンDEMできるし」

理子は口角を釣り上げ、いかにも何か企んでいるような瞳で

「お兄さんも、いるよ？」

キンジにとつての禁句、兄の話を持ち出した。

キンジの弱点は、兄の名前が出ると冷静でいられない事。

しかもそれは、普段の何倍もの判断力や思考力を持つヒステリアモードでも、変わらない。

「…理子。それ以上兄さんの事を話さないでくれ…このままじゃ、俺は衝動的に9条を破ってしまいそうになる　それはお互いに困るだろう？」

武偵法9条。

武偵は武偵活動中、いかなる状況においても殺人を犯してはいけない。

その武偵最大の禁忌を冒すのも厭わないと、そこまでキンジは、ぶちギリ寸前だったらしい。

いや、それよりも脅威なのは、ヒステリアモードが本来、女性を守るために存在する力だという事。

キンジは、そのヒステリアモードの状態でも、理子を殺す覚悟がある　そこまでの、意思の強さ。

「くふふっ、それは怖いね。じゃあ、アリアによろしく言っという二人、いや三人か。いつでも歓迎するよ」

理子はいきなり、壁の爆弾を爆発させた。

壁に丸い穴が空き、理子はその穴から、バツ！　と

「なっ！」

パラシュートも無しに、飛び降りた！

「り…ッ！」

理子、と叫ぼうとするが、出来ない。

彼女の開けた穴から、急激に飛行機内の空気が流れ出る。

酒瓶やらなにやらがバリッ、と音を立てながら空へ投げ出される。自分はああはなるまい、とキンジは近くの固定された椅子を掴んだ。高度が低くなつてて助かった、と思った。

あのままの高度で穴を空けられたら、酸素やら気圧やらの事でこの飛行機の間は全員御陀仏だっただろう。もちろん、理子もそうだったろうが。

窓の外を見ると、理子はリボンをほどこき、あのゴスロリ制服を簡易パラシュートに変化させた。

高度を落としたのは、この辺の理由もあるらしい。

彼女はそう言われるのは嫌いだそうだが、流石はあのリュパンの曾孫だ、とキンジは素直に感心させられた。

だが、そんな悠長な事を考えている場合ではないようだ。

台風の影響で吹き荒れる風、雲。

その隙間から、真っ直ぐとんでもないスピードで飛んでくる物体、それをヒステリアモードになったキンジの瞳は捉えた。

おいおい、冗談キツイぞ…！

キンジが見たもの、それは…

「ミサイル…！？」

呟いた瞬間、機体が、今までに無いほど激しく揺れた。

理子が操縦してた時は、ある程度コントロールが効いていたが、今回はそういう訳ではない。完全に墜とすつもりで来ている。というか、牽制目的でミサイルを撃つようなイカれた輩は現代社会には、殆どいない。

とまあ、そんな事は置いておこう。

キンジは祈るように、窓から機体の損傷をみた。

翼は無事だが、左右の内側ジェットエンジンがイカれたようだ。

それと理子の置き土産が相まって、この飛行機は未だ急下降を続けている。

キンジは飛行機を止めるべく歩を進めた。アリアの待つ操縦室に。

「遅い！」

操縦室に入った途端、顔をみている訳でもないのにアリアからの怒号が飛んできた。

来たのが理子だったらどうしたんだろうか、という質問は胸に押し込んだ。

そんな質問は不要だし、恐らく自分は信用されているのだからそう結論付け、キンジはアリアの隣に座った。

「アリア、飛行機を操縦できるのかい？」

いつものキンジと口調が違うのは、彼が今ヒステリアモードだからだ。

ヒステリアモードになったキンジは、女性に対してとてもキザな行動をとってしまうらしい。

元々彼の顔は割りと整っている上、ヒステリアモードの彼には、普段とは異なる雰囲気　フェロモンというのだろうか？　が滲み

出ている、出会う女の子はことごとく赤面していたとか。

しかし人間、そういう初心な反応を返す者ばかりでもないらしい

キンジを事あるごとにヒステリア化させ、こきつかいまくった女子がいて、それもキンジのヒステリアモードのトラウマの一つになっているのは、隣に座るアリアの知ったところではない。

というか、知られては困る。

「せ、セスナなら…でもジェット機なんて飛ばした事ない」

そうとも知らず、アリアは初心に赤面し、ぎこちない返事を返した。

「上下左右に飛ばすくらいはできるけど」

「着陸は？」

「出来ないわ」

「　　そうか」

機体が水平になっている。

窓から外を見れば、高度が300メートル近くだった事がわかる。

300メートルといったら結構な距離と思うかも知れないが、結構短い。

着陸しようというなら、尚更だ。

「 応答を 繰り返す こちら 羽田コントロールANA600便、緊急通信周波数 で応答せよ 繰り返す 」
通信機からノイズの掛かった音声が聞こえてきて、周波数を合わせ、キンジはインカムからスピーカーに切り替えた。

「こちら600便だ。当機は先ほどハイジャックされたが、今はコントロールを取り戻している。機長らが負傷したため、現在は乗客の武偵二名が操縦している。俺は遠山 キンジ。もう一名は神崎・H・アリア。」

キンジの声に、管制室は安堵と驚愕の声をあげた。
取り敢えず管制室との通信は繋がったため、キンジは機長のポケットから拝借した衛星電話を操作する。

『もしもし?』

このハイテク電話からかけたからか、相手は怪訝そうな声を上げた。
その相手とは、

「俺だ武藤。変な番号からで済まないな」

『ッ! キンジか!? 今何処にいんだよ!? お前の彼女が大変なんだぞ!』

「彼女じゃないが、アリアなら隣にいるよ」
車輦科の優等生、武藤 剛気だ。

『おま…何してんだ…!』

隣でアリアが赤面しているのは割愛しよう。
キンジは彼女の唇を指で軽く押さえ止めた。

「 武藤。ハイジャックの事、報道されてるのか」

『ああ。乗客名簿にアリアの名前があったんで、みんなで教室に集まってるんだ』

武藤の声が止まった後、羽田の管制室から再び通信が入った。

武藤達にも聞こえるよう、回線を開きつ放しにする。

『遠山武偵。まずは安心しろ。その飛行機は最新技術の結晶だ。残りのエンジンが二機でも問題なく飛べるはずだ』

『それよりキンジ、燃料計の数値を教えろ』

キンジはもちろん、羽田より武藤を信頼している。

武藤のいう通り、燃料計の数値を教えた。

『くそつたれ、盛大に漏れてやがる！…持って、15分つてどこか』

「流石は先端技術の結晶だな」

キンジは羽田に皮肉を言っただけだが、情けない事にあちらは何も言
い返せないらしい。

どうしようか、武藤に指示を仰ごうとした瞬間 別の声が、聞こ
えてきた。

『キンジ、羽田に引き返すんだ。距離的にそこしかない』

聞き慣れた、という訳ではない しかし、良い意味で妙に頭に残
る、その声の主は

「レインか!？」

『大変な事になってるみたいだな…』

そう呟いたレインは、武偵高の上に停空していた小型戦闘機から、
雷の如く屋上に飛び降りた。

そんな背景も知らないはずのキンジは、人知れず、

「役者が揃ったな…！」

嬉々とした表情で、呟いた。

第15弾 雷神、帰還（後書き）

何故レインを出したのか…ですと？
そりゃあもちろん、主人公だからさ！

第16弾 ジャックされた飛行機ってなんかロマンチック(前書き)

最近友人も小説家になろう始めました。

魔神の落胤というユーザーネームなので、そちらもよろしければ応援してあげて下さい。

第16弾 ジャックされた飛行機ってなんかロマンチック

第16弾 ジャックされた飛行機ってなんかロマンチック

「レイン！ お前、S研の合宿に行ってたんじゃないか!?」
飛行機から飛び降りて、外の窓から入ってきたというのに、誰も突っ込まない。

自分がこんな事をしようが彼らはやはりたいして驚かないのだろうか、と苦笑しながらレインは武藤の方に向きなあった。

「お前が連絡くれたんじゃないか」

「いや、そりゃそうだが…恐山からここまで、どうやって来たんだ？」

武藤の質問を聞き、先ほどの自分の疑問がとんだ間違いだったな、とレインは少し反省した。

そりゃあ、飛び降りたという事実自体知らないのだから、驚くも何もあったものではないだろう。

レインは無言で、出てきた窓の外、静奈が降りるためのロープを垂らしている小型戦闘機に親指を向けた。

その戦闘機を見て武藤は目を輝かせて何事かぶつぶつと呟いていたので（恐らく乗り物オタクの性というやつだろう）、代わりにといった風にレインにもう一人の仲の良い友人が話かけた。

不知火 亮。

強襲科のAランクで、頭脳明晰で運動神経抜群、その上容姿端麗、常に笑顔を浮かべている爽やか美少年、いや美青年と来たものだ。出来ない事は何もないのではないかと思うくらいの完璧超人。

一言で表すなら、才色兼備。

「成瀬君、どうやってここに？」

そんな彼は、いつもの女子を悩殺する爽やかスマイルではなく、真

剣な表情でレインに尋ねた。

「ああ、静奈の家がなんか大きいらしくて、執事にアレを飛ばさせたらしいんだけど……」

「なるほどね……」

その噂のアレこと、静奈をおろした戦闘機を眺めながら、不知火とレインは溜め息をついた。

あれは、何だかよくわからないがまだテスト段階の戦闘機らしく、スピード特化にした最新機……なのだそうだ。

それを説明してない不知火は、武藤程では無いにしろ戦闘機の種類は知っているようで、見たことのない機種だったから事情がある程度把握してくれたのだろう。

「あれは家が大きいかそんな事で手にはいる代物じゃないよね……」
「だろ……？」

静奈の家に若干疑問を残しながらも、改めてレインは意識を現実に戻した武藤に話を聞く事にした。

「武藤、キンジとの回線は？」

「繋がってんぜ。ホラよ」

武藤の携帯を投げ渡され、レインはそれを耳に当てた。

「キンジ、大丈夫なの？」

『レイン。ちょっと厳しいな……羽田にはどうやら行かせて貰えないらしい』

「？」

話によると、キンジ達の乗った飛行機の隣に、防衛省の戦闘機がピツタリとくつついてるらしい。

羽田を使うな、千葉の空港に着陸しろ、と命令をつけたが、彼らは海上で撃墜するつもりだったようで、キンジ達は現在東京の上空を飛行中だ。

「やってくれるね、日本の腐れ防衛省共は」

苛立ちを露にしたレインに、キンジは多少焦りを覚えた。

彼の能力上、ケータイが吹っ飛びかねない。

『レイン、武藤に代われるか？』

「ああ…」

「…もしもし？」

なんとか武藤に代える事に成功したキンジだったが、喜ぶ程の事ではない。

気持ちを瞬時に切り替え、武藤に着陸の方法などを聞いていく。

その片隅でレインは、キンジのヒステリア化に気づいていた。引き金などの事情は知らないが。

「（キンジの様子がいつもと違う…遠山家は代々、何かのスイッチが入ると人が変わったように強くなると聞いたけど…）」

なるほど、会話の様子からして言われた事を一瞬で理解して覚えているようだ。

「でも…」

まだ、重大な問題が残っている。

いくらキンジが着陸の方法を覚えようと、その着陸が出来ない場所がなければ意味はない。

『武藤。着陸にはどれくらいの距離が要るんだ？』

キンジも同じ問題に突き当たったらしく、武藤に質問を続けた。

「その飛行機なら…2450メートルは必要だな」

レインは小さく舌打ちした。

空港の滑走路以外に、そんな長い直線道路が東京にあるはずない。

『学園島の風速は？』

「風速…？ レキ、頼む」武藤が振り向いた先には、淡い瑠璃色のような薄い碧の髪の少女。

その表情は、何故か何の感情も表してはいない。

レキと呼ばれた少女は、抑揚のない平坦な声で、自分が感じた事実を告げた。

「私の体感では、五分前に南南東の風、風速41.02メートル」

『よし、武藤、風速41メートルに向かって着陸した場合、距離はどのくらい必要だ？』

「…2050メートルつてとこだな」

『ギリギリだな』

キンジの低い呟きに、さつきからの彼らの会話を思い出して、レインには嫌な予感しかしなくなった。

「キンジ：お前まさか、学園島に突っ込むつもりじゃないよね？」

その言葉にクラスの間人は皆どよめくが、キンジからは予想外の答えが返ってきた。

『勘がいいな、レインは。だが、ちょっと外れだ。確かに、巨大な長方形をしている学園島の対角線を使えば、滑走路には足りる。だが、それで人がたくさん死んだら元も子もないだろう？』

おどけたように言うキンジに、武藤達と恐らく彼の隣に座ってるであろうアリアは（普段より全然言葉を発しないのは操縦に意識を集中させているからだだろう）焦らされている事にもどかしさを覚えているが、レイン、不知火、多分（？）レキはなるほど、実際問題その通りだな、とキンジの次の作戦を素直に待つ事にした。

『着陸するのは空き地島の方だ。あそこはレインポーブリッジを挟んで学園島と同じ形だからな』

そのキンジの突拍子のない、しかし理にかなった策に、レインと不知火は苦笑し、武藤はただ驚愕の表情を浮かべ、レキはいつもの無表情を保っていた。

「おい…そこにいるのは本当にキンジか？」

友人であるはずの武藤がそんな質問をするのも仕方ない事かも知れない。

いや、友人であり普段のキンジをよく知る武藤だからこそ、彼の豹変ともいっていい変化に思考がついていないのかも知れない。

『おかしな事を聞くな。アリア、ここにいるのは誰だい？』

その態度がおかしな質問をさせるんだ、とは誰も突っ込まなかった。なんとなく、今のキンジにはある意味で何をいっても無駄な気がした。

いや、そう思わせているのもキンジ本人なのかも知れない。

『な…何よ』

音声だけでも赤面しているのが分かる程声を震わせて、アリアが答え

『いってごらん？』

キンジが追撃をかけた。

レインがこのキンジに『ジゴロモード』と名付けたのは余談だ。

『き、キンジ…』

『だ、そうだ。悪いな、武藤。期待を裏切って』

「いいから、それより気をつけるよ、キンジ。今空き地島は雨で濡れてる。下手に操縦するとトリップするぞ」

『…わかってるさ』

……？

キンジの声が、どこか不安気だったような気がして、レインは首を傾げた。

その後ろでは、武藤がクラスメート達に何か指示を出している。自分も参加しようとレインは通信を切ろうとケータイのボタンを押そうとして

『…レインか？』

通信越しに何故分かるのか、という疑問はこの際置いておこう。

キンジからの通信に、レインは耳を傾けた。

「どうしたんだ、キンジ？ 今更出来ないなんて言ってくれるなよ」

『…残念ながら、その通りだ。今のままじゃ、間違いなく墜落する』

キンジから返ってきた予想外の答え いや、弱音に、レインは思わず絶句した が。

それも、一瞬だった。

『だから、協力してくれ。お前の力が必要だ』

キンジの言葉に、レインはほぼ反射とっていいスピードで、答え

「俺は何をすればいいの？」

もちろん、オーケーの返事を。

第16弾 ジャックされた飛行機ってなんかロマンチック(後書き)

そろそろハイジャック事件も佳境ですね。

第17弾 アリアと奴隸と奴隸2号と（前書き）

最近、オリジナルの小説を書き始めたので更新が少し遅くなるかもです…申し訳ございません。

もし良かったらそっちも見て頂けると光栄です。

第17弾 アリアと奴隷と奴隷2号と

第17弾 アリアと奴隷と奴隷2号と

「(参ったな...)」

キンジはこっそり溜め息をついた。
無理だ。

この飛行機は、無事に着陸する事など出来ない　そうヒステリア
モードで活性化された頭が告げている。

前に武藤が言っていた。

どんな飛行機であれ、最低限誘導灯が無いと、夜間着陸は出来ない。
絶対に。

オマケに台風のせいで暴風、視界最悪、滑走路は雨で濡れてるとき
たものだ。

着陸など出来ない。

空き地島が全く見えない。

やむを得ず、キンジが被害を最小限に押さえる墜落のさせ方を模索
しようとした瞬間　何かを感じたのか、目ざとくアリアが、今ま
での無言から唐突にいつものアリアに戻った。

「キンジ、大丈夫よ。アンタにならできる。あたし達は、まだ死ね
ない！　お互いにやる事がたくさんあるわ！」

あの、無茶苦茶な事を言いながら、何故かいきなり巻き込まれて

でも、いつの間にか彼女の無茶苦茶は無茶苦茶じゃ無くなる、不
思議な少女に。

まるで魔法使いだ　キンジがそう思い始めて。

それはまるで、本当にアリアの言葉で魔法が起きたかのように。
空き地島に、チカチカと、小さな、たくさんの光が見え始めた。

『キンジ！　見えてるかこのバカ野郎！』

聞こえてきたのは、武藤の声。

『お前らのために、みんなで無許可で装備科の懐中電灯持ち出して来たんだ！ あとで全員分の反省文書きやがれ！』

『キンジ！』

『もうちよいだ、頑張れ！』

『あと少しだよ！』

次々と聞こえて来る、仲間の声。

今のキンジには、分かる。

そいつらがかつて、バスジャックの時彼とアリアが助けた奴らだと、そして、アリアはそいつらを見て苦笑しながら、

「それに」

『キンジ、こつちの準備も万端だよ。』

「アイツも協力するんだもん。キンジとアイツとあたしが組んで、出来ない事なんか何一つ存在しないわよ」

なんの遠慮もなく、言い放つ。

レインの声をバツクに、

『お前らあああああ！長靴をはいたかあああああ！』

『おおおおおおお！』

『いくわよ！』

『ああ…！』

アリアの号令と共に、キンジは飛行機を着陸させる。

武偵憲章第1条。

仲間を信じ、仲間を助けよ！

ザシャアアアアアア！

飛行機がトリップする中、アリアは

「止まれー！ー！ー！」

と甲高い声で叫び、キンジと言えば操縦席で、レインに通信をか

ける。

「レイン、頼むぞ！」

『ああ…『皇雷神』！』

バチィッ！

という雷音の後、飛行機は突如、グイン！と軌道を変えた。

『雷磁力』 それにより、風力発電の風車に、迫り

ガシャアアアン！

翼が上手い具合に風車に引っ掛かり、その場をぐるん、と一回転し

止まった。

着陸に、成功した ！

『うおおおおお！』

隣で歓声が上がる中、皇雷神が解けたレインはその場に尻餅をついた。

「ふう…怪我人をこきつかうなあ…皇雷神を二回も使うなんて…」
ぐうぐうぐう。

「腹減ったな…」

ぼそりと、一人で愚痴を溢したレインの顔は、けれどもどこか安堵の表情を浮かべていた。

レインとキンジの部屋、そこではアリアとキンジが楽しげに談笑していた。

その雰囲気壊すのもなんだから、という理由は言わず（風穴を空けられたくはないのだ）、レインは屋上に寝転がっていた。

「…アリアは、イギリスに帰るんだろうか…？」

あのハイジャック事件が終わったあと（事情聴取やら何やらも含めて、だ）、キンジに聞いた話によればアリアの母、神崎 かなえさんはイ・ウーのメンバー達に冤罪を着せられていて、彼女はその無罪を証明するために、あの巨大な組織と、イ・ウーと戦ってきたのだ。

イ・ウーの強さは、レインもよく知っている。

何も、アリアだけがイ・ウーを追っていた訳ではない。

レインも、そして彼の師匠も、皆それぞれの思惑を持ってイ・ウーを追っている。

だからこそ、分かる。

アリアの言う『ドレイ』 パートナーの重要性が。

そのパートナーを早急に見繕うため、イギリスに帰ろうという事だろう。

キンジがアリアを引き止め、なおかつパートナーになるといふなら

付き合ってもいい。

そんな素直じゃない自分に苦笑しながら、レインは雲一つない夜空を見上げた。

星が見えないのが残念だが、真つ暗なのもそれはそれでいいものだ。

キィ…

「…？」

不意に、自分が寝転がる真下のドアが控えめに開いたのを感じ、レインはバレないように（元々は探偵である武偵の性であろう）、地面に突っ伏しながら下をみた。

そこには、ピンクのツインテールをはためかせる

「…アリア」

アリアがいた。

暗闇でよくは見えないが、目が腫れているように見える キンジは断つたのだろう。

自分が引き止める、という思惑が一瞬頭をよぎるが、すぐに頭を振って追い出した。

たった一日二日行動を共にしただけの自分に、何ができる ましてや、引き止めるだけの『何か』がある訳でもない。

だが、声を掛けずにはいられなかった。

「レイン…？」

ゆっくりと振り向いたアリアは、

「……………っ」

月明かりに照らされ、その整った顔立ちを露にした彼女は、可愛いという形容がいかにも様になる、本当に可愛い女の子となっていた。「ど、どうしたのよ、こんなところで」

「それはこっちのセリフだよ、アリア…帰るの？ …イギリスに」
レインの問いに、アリアは短く、

「…うん」

とだけ答え、黙りこくっていた。

ブロロロロロ…

音につられて上を向くと、イギリスのヘリコプター（何故そうと分かるかという点、ヘリの文字と同乗者の顔立ちだ）が着陸してくるところだった。

「迎え、来ちゃった…あたし、もう、行くね…」

アリアの声がだんだん弱くなっていく。

それに自分は気づいている。気づいているのに…！

「（しっかりしろよ！成瀬 レインハート！ お前だって、ようやく自分を怖がらない仲間が出来たんじゃなかったのか！？）」

葛藤している間にも、アリアはヘリに乗り込み そのまま、ヘリを飛び立った。

恐らく、席に座り直そうとしたアリアが振り返った 瞬間。

彼女の、寂しそうな表情が、一瞬だけ見えた。見てしまった。

「（ふざけるなよ…そんな表情見せられたら、権利なんかなくても）
レインは大きく息を吸い込み

「（引き止めずには、いられないだろうが！）」

「「アリアー…！」」

同時に、叫んだ。

そう、たった今駆けつけたキンジと、全くの同時に。

アリア、戻ってこい　！

初日にいきなりドレイ宣告され、どれだけ戸惑ったことが主人っていうなら、最後までこきつかってみせる　！

そんな思いが通じたのか、アリアはレイン達の方を振り返り、バツ！

「コッ！！」

二人の姿を確認するなり、結構な高さから飛び降りた！

「うおっ！？」

慌ててレインはアリアをキャッチし、地面にたたせる。

アリアはイギリス武偵局の人間らしき人達にあかんべーをかましていた。

その様子を横から愉快そうに眺めていたレインだったが、そうもいかないようだ。

彼らもまた、ヘリから降りてきた。

彼らはどうしてもアリアを連れ戻したいらしい。

イギリス武偵局の人間に手を出すのは、得策ではない　キンジと

レイン、そしてアリアにとって。

それを全員わかっていたのか、三人は誰も彼らに手を出そうとはしなかった。

「キンジ」

「ああ…」

言いながら、レインはブローを抜いた。

イギリス武偵局の奴等が身構えるが、レインはそいつらを視界にもいれず、くるっ、と踵を返し、

パン！

上手い具合に扉が開かなくなるよう、ドアノブを破壊した。

「ちよ、何やって…」

何か文句を言いたそうなアリアの口を、

「むぎゅっ！？」

キンジが押さえ

「お前、俺を助けるときこつから飛び降りてくれたんだよな…」
「さつき戻ってきたときも、な」

微妙にひしゃげたフェンスを見て 二人は頷きあつた。

「アリア！ お前が『独唱曲』^{アリア}ならな！」

「俺達が」

「BGMくらいにはなつてやる！」

！

アリアがその赤紫の瞳を見開いたのを横目に眺めながら
レインとアリアを抱えたキンジは、

「うおおおおお！」

フェンスから、飛び降りた！

そのまま、植物園のビニール屋根に上手く
ガシヤアアアン！

は、いかなかったようだが…

「いててて…」

「こ、このバカコンビ…！」

上空からは、ヘリコプターがライトでレイン達を照らしていた
まるで、オペラ的一幕みたいに。

「まあいいわ。あんた達を私のパートナーにして、曾お爺様みたい
な立派な『H』になる そう決めたんだから」

「ま、待てよ！ なんなんだ、その『H』ってのは！」

「まだ気づいてなかったの？ キンジ」

今更の質問に、レインはすつとんきような声をあげ、アリアは嘆か
わしいと言わんばかりに溜め息をついた。

「ああもう！ アンタたちは私のパートナーなんだから、名前くら
い教えてあげるわよ！ 私の名前は」

人差し指をキンジ、そして何故かわかっていたはずのレインに向け
て、言い放つ。

「神崎・ホームズ・アリア！」

「ホー、ムズ…？」

「そう、私はシャーロック・ホームズ4世！　そしてアンタたちはあたしのパートナー、ワトソンに決定したの！　口答えしたら隣でキンジが唾然としているのを尻目に、レインはアリアが誇らしげに言うのを」

「風穴あけるわよ！」

ただただ、笑って見ていた。

第17弾 アリアと奴隸と奴隸2号と(後書き)

アニメ緋弾のアリア：展開遅くないですかね？

武偵殺しの件は何話に纏めるつもりなんでしょうか…？

第18弾 番外編 狼を狩る雷神（前書き）

塾でGWの宿題が出たのですが、その量が半端じゃないです…

第18弾 番外編 狼を狩る雷神

第18弾 番外編 狼を狩る雷神

強襲科の校舎。

その闘技場では、いつも放課後になると生徒達が模擬戦闘をして、自らの技を高めたり、経験を積んだり、友人と競ったりしている。闘技場には、今日もギャラリーが集まっていた。

「パパン！」

けたたましい発砲音に反応して、レインは転ぶように地面を転がって銃弾を回避する。その際、愛銃プロウを、発砲した相手、アリアに向けて転げながらも発砲する。

不安定な状態での発砲に正確性などあるはずもなく、銃弾には牽制以上の効果はない。

現に、アリアは避ける事すらしていないのに弾丸は明後日の方向へ飛んでいっていた。

「ちっ！」

「どこ狙ってるのよ、バカレイン！」

悪態をつきながらも、レインはブレザーの裏に大量に隠しておいたスローイングダガーの一本を片手に持ち、アリアに投擲する。

アリアは瞬間的にガバメントを上空に放り投げ、背中の刀を二本取り出し、片方でダガーを弾き、もう片方を横なぎに振りかざしながら肉薄した。

レインはダガーを左右二本取り出し、左で防ぎ、右をアリアに再び投擲する。

アリアはのけ反りながら、

ヒュッ！

「！」

なんと今にも彼方へ飛んでいきそうなダガーの柄尻についていた穴に刀を引っ掛け、レインに投げ返してきた。

「まじかよ…！」

レインはそれを、真剣白刃取りで受け止める。

だが、両手を使う真剣白刃取りは、できれば使いたくなかった。何故なら。

「隙だらけよ！」

アリアは落ちてきたガバメントを片手でキャッチし、指で回しながらレインに向け、

パン！

発砲。銃弾が、レインの防弾制服に突き刺さる。

「ぐっ…！」

刀を押し退け、レインが体制を立て直そうとして、

「終わりよ、レイン」

ズガガガガガ！

「うっ…があ！」

二丁拳銃を活かした連射で、レインの防弾制服に次々と銃弾をぶちこんでいく。

そして、倒れふしたレインの首に刀の峰をあてがい

「あたしの勝ちね、レイン」

「…負けちゃったか」

レインの敗北が決まった。

「雷神化していない時のアンタって、大したことないのね」

模擬戦闘終了後、アリアのきつい評価にレインは苦笑を浮かべた。

「そうなんだよね…」

普通、否定するか突っ込むところをレインは反論せずにいる。

それを見て疑問を感じたキンジが首を傾げると、それを察したのかレインはキンジの方に首だけ回して、話を始めた。

「言い訳する訳じゃないんだが、元々俺には強襲科どころか、武偵

の才能は全くないって言われていたんだ」

その言葉に、アリアはいつものようにその赤紫の瞳を見開いた。

「嘘よ！ アンタの試合、あれはAランクとはいわなくても、Bランクは固かったわ！」

アリアの主張に、キンジは反射的に、さっきお前そのBランクの奴を大したことないっていつてなかったか？ という疑問を、レインは何故そこまで否定したがるんだ？ という疑問を、それぞれ抱いた。言葉にはしなかったが。

「あー…俺は努力したんだよ。師匠に訓練してもらったし、それに…」

「その歳でそんなレベルの努力なんてあり得ない！」
自分も同い年だろうが、という突っ込みは華麗に流される。

アリアはどうやらどうしても自分の話を認めたくないらしかった。それを感じたレインは、近くのベンチに腰掛け、アリアとキンジにも座るように促した。

「ちよつと、昔話をしよう」

一年前　とある小国、そのはずれの小さな町。

そこに、ある少年が足を踏み入れた。

「ここに　いるのか。奴は」

短い銀髪の少年、成瀬　レインハート。

その手には、任務が書かれた一枚の紙があった。

風でその紙がめくれ、内容が露になる。

凶悪犯罪者『フェンリル』の逮捕

「面倒そうなところに隠れやがって…」

街のバーで、レインは情報を集めようとあたりを窺うが、その辺の事情通のような人物は居そうにない。

店員に聞いたところ、今は満席になる時間帯より30分程早いらしい。

だが、大して気にもとめずレインは外の景色を眺めた。

「（フェンリル。アイツはイ・ウーの一員らしい。逃す訳にはいかないな）」そう気を引き締め、とりあえず修行の一環として空気椅子でもしようか、と考え始めたとき……

「もしもし？ 貴方はもしや……武偵なのですか？」

突然声を掛けられ、レインはそのまま振り返った。

そこにいたのは、みたとこ初老、それでいて若々しい男性で、白髪混じりの髪をオールバックにしていた。

「あなたは……？」

「名をマルフォイと申します」

マルフォイと名乗った老人は、

「掛けても？」

といかにも紳士のような態度（常識だと思うが、今のレインは嘘くささしか感じていない）を取り、レインの正面に座った。

「……こんな辺境の町に、何かご用事でも？」

老人の唐突な問いに、けれどもレインは気分を害さなかった。

余所者の警察同然の武偵が町にずかずかと入り込んできて、不快な気分になるのはむしろあちらだろう

レインも、目上の人間に敬意を払い、質問に真っ当に答えた。

「大きな声で言えませんが……『フェンリル』」
ざわっ。

その単語を発した瞬間、辺りの空気が殺気だつのが分かる。が、レインにはそんなものはどこ吹く風、気にもとめずにマルフォイに言葉を続けた。

「彼をね、逮捕しにきたんですよ」

おどけたように言うが、マルフォイの顔は笑っていない。

マルフォイは、ひいては町の人達は 敵なのか、見方なのか。それくらいははっきりさせたくても、誰も責めたりはするまい。

コーヒーを一杯頼むと無言でそれを啜った。

それに倣い、レインも何も言わずにココアを飲んだ。

「…本当に、フェンリルを逮捕するというのですか？」
沈黙を破ったのは、最初に無言を貫いた老人の方だった。
レインはといえば、その態度と質問に拍子抜けしていた。

「…それは、どういう（・・・）の意味で、なんですか？」

「…貴方の考えいる通りかと」

目を瞑りながら答える目の前の男性に、頭の中で タヌキが、と毒
づきながらレインは彼に紙を渡されている事に気づいた。

伝票…ではなさそうだ。

見れば、その紙にはこの町の地図　そして、赤い×マークが描か
れていた。

「…マルフォイさん」

立ち上がった初老の男性に声を掛けようと、レインが顔をあげた、
そこには。

既に、初老の男性の姿はなかった。

第18弾 〱番外編〱 狼を狩る雷神（後書き）

次回からゲストキャラが登場するかも…です

第19弾 く番外編く 不屈の翼を持つ男（前書き）

タイトルから分かる人もいるかもしれませんが、ついにあの人達の登場です！

書いててテンション上がりまくってました！

第19弾 番外編 不屈の翼を持つ男

第19弾 番外編 不屈の翼を持つ男

「ここが『フェンリル』のアジトか…」
今レインがいるのは、古びたビルのような建物で、いかにも怪しい
雰囲気の廃墟だ。

「…確かに、なんだか重々しい感じがするな」
とはいえ、そんな事で立ち止まる『雷神』ではない。
砂を巻き上げる風を感じながら、レインは廃墟へと歩を進めた。

一步、一步と進む内、レインは額に滲む脂汗を拭う。
先ほどから、進むごとに強くなる。

圧倒的な、威圧感が。
このプレッシャーを発する相手が、今まで経験してきた中でも1、
2を争う程の強者である事が容易に想像できる。
それほどの威圧感を感じながらも、レインは歩みを止めない。
やがて、ある扉の前についた。

威圧感が、逆に相手の位置をこちらに教えている。
恐らく、相手もこちらに気づいているだろう。
開けた瞬間、発砲してくる可能性だってある。
全身の細胞が開けるな、開けるなと警告を発しているのも無視し、
レインは扉を無造作に蹴破った。
パン!

予想通り、弾丸が飛んでくる。
雷神化したレインは、弾丸を容易に避け、相手に向けてスローイン
グダガーを投擲した。

すると相手は、土煙で視界が悪い中、なんと指二本でスローイング

ダガーをキャッチし、レインに投げ返してきた。

「ッ！」

咄嗟に地面を蹴り、飛んできたダガーを避け、再びダガーを投擲する。

相手はその間にもレインに肉薄してきて、その分ダガーが届くのも早くなっているはずだが、相手は大したこともないように軽々とダガーを避ける。

土煙を切り裂き、その男はレインと同じ、銀の髪と瞳を露にし、レインに拳を放つ。

レインは直接相手に電流を長しこむため、その拳を掴もうとした。

「……！」

だが、レインはその拳をすんでのところで避けた。

刹那、彼の拳の延長線上の壁に、

ドゴオオオオン！

という爆音と共に、小規模のクレーターが出来た。

もしも拳を掴んでいたら、その手は間違い無く使い物にならなくなっていただろう。

悪寒が背筋に走る。

レインは肉弾戦は危険だと判断し、後ろに飛び退いた。

跳躍の間に、レインはブロウを抜き銃口に電磁力を発生させる。

男の眉が上がるのを気にもとめず、レインは致死率を押さえた『雷砲』を放った。

音速の三倍の速度で放たれた弾丸は、放たれる前に予測しなければ避けられない（本当は普通の銃でもそうなのだが、弾丸が見えるレインにとっては実感が湧いていなかった）。

しかし、その男は

「仕方ねえ……」

短く呟いた瞬間、その背中から、蒼銀の翼が生えた。

「……！」

レインが驚きの表情を浮かべると同時、翼の男は弾丸を避けた。

完全に見てから動いたにも関わらず、だ。

しかし、レインはそれに驚かなかった。否、正確には驚く暇がなかった。

一瞬前まで、雷砲を避け身を翻していた男は、

「!!!」

目の前に、いた。

まるでSF映画の瞬間移動のようなスピードに対抗するように、レインは繰り出された拳をほとんど反射で避けた。

「何!?!」

今度は、相手の男が驚きの声を上げた。

好機!

それを肌で感じ取ったレインは、拳を男につきだした。

「ちっ!」

遅れて、相手も拳をつきだす。

拳速は男の方が上。

故に、拳が互いの身体に届くのは同時。の、はずだった。

パシィ!

しかし、二人の拳は、突如として現れた乱入者の女によって、防がれた。

燃えるような紅蓮の髪をなびかせる女は、手を交差させ二人の拳を受け止めた。

「なっ!!!」

レインはただ、驚きの声を上げた。

自身の雷を纏った拳を受けたにも関わらず、男の砲撃のような拳を受けたにも関わらず。

彼女は涼しい顔で、自分たちの顔を交互にみている。

その血のような赤い瞳が自分に突き刺さり、レインは若干たじろいだ。

「…何をしてるんだ、夜明」

「こっちのセリフだけ、太陽。こいつが『フェンリル』だろ?」

翼の男　夜明の言葉に、レインは目を見開いて抗議する。

「ふ、ふざけてるの!? フェンリルはそっちでしょ!?!」

その言葉を聞きながら、太陽と呼ばれた少女はレインを親指で指差しながら、

「こつこついう訳だ」

と溜め息混じりに告げた。

「ごめんね、勘違いしていたみたいだ」

先ほどのバー。

そこでは、太陽と呼ばれた少女の隣に座る夜明に頭を下げる、レインの姿があった。

「やめてくれよ。俺も手え出しちまったし、お互い様じゃねえか」

そういい、苦笑いしながらも顔に反省の色を浮かべるのは月光　夜明。

フリーの武偵らしく、その腕は通の中では世界でも指折りの実力者と言われている。レインもその二つ名を聞いた事があった。

『不屈の翼』。

先ほどみせた蒼き翼がその由来である事は聞かずともわかった。

しかし目の前にいるのは豪快にパフェにがつつく好青年にしか見えない。

自分の事を棚に上げるようだが、とてもじゃないが先ほどの戦闘がなければそんな話は信じなかつただろう。

「済まない、連れが迷惑を掛けた、『紫電の雷神』。」

謝りながらもレインを品定めするように眺める深紅の髪の少女、名を夕暮　太陽。

『深紅の死神』の二つ名を持ち、あらゆる犯罪者を素手で逮捕したことでも有名（こちらも通に、だが）だ。

しかし、このビクネーム二人が行動を共にしているとは、レインも全く知らなかった。

「それにしても、夜明と対等に戦えるとはやるな、雷神」

「雷神はよしてくれ。レインでいい。」

それに、あのままやってたらやられていた。」

「謙遜すんなよ。逆に俺がやられててもおかしくなかったぜ？」

夜明の白々しいセリフに苦笑しつつ、

「本気じゃなかったクセに……」

と短く突っ込みを入れた。

「話を戻すが、レインもフェンリルを追っていたんだな？」

「も、って事は、夜明達も？」

質問を質問で返すのはあまり誉められた行為でもなかったが、この短い間にそれくらいは流せるくらいには親しくなったようで、夜明は短く首を縦にふった。

「俺たちに依頼があったんだよ。『フェンリルを捕まえる』ってな。

相当な額でビックリしたぜ」

「……それって、もしかして9だらけの？」

999999999円 要するに、ほぼ1億。」

「？ ああ……何故わかったんだ？」

「もしかして、お前も同じ依頼主から依頼されたのか？」

太陽の問いに首肯で返して、レインは人の悪い師匠の顔を思い浮かべた。

「（こいつらと協力しろ、って事だよな……こんな面子を揃えるなんて、一体フェンリルってのは……）」

あの師匠に限って、杞憂という訳もあるまい。

改めてフェンリルに疑問を抱いたレインは、既に空となったパフェの容器をまじまじと眺めた。

口についたクリームを満足そうに舐める夜明を見て、少し安堵したのは余談だ。

第19弾 く番外編く 不屈の翼を持つ男（後書き）

こんな素晴らしい機会を下さったサザンクロス様に偏に感謝です。

第20弾 番外編 無双的な彼女、二つ名を『深紅の死神』(前書き)

GWの宿題が…多すぎるうううううう!

第20弾 〈番外編〉 無双的な彼女、二つ名を『深紅の死神』

第20弾 〈番外編〉 無双的な彼女、二つ名を『深紅の死神』

「って事は、お前もあの怪しいジジイにたぶらかされたって事だな？ レイン」

「うん、確かマルフォイって名乗ってたけど…」

「仮名だろう。わざわざそんな面倒な真似をする臆病者は、それほど堂々と自らの名を明かさないものだ」

太陽の齒に衣着せぬ物言いに苦笑しつつ、レインは改めて夜明達に向き直った。

「俺の師匠がわざわざお前達を呼んだ、って事はこの件、ほぼ間違いない無くイ・ウーが絡んでる。」

当初、フェンリルがイ・ウーのメンバーであるなどほぼ無いと推測されていた。

レインとて、イ・ウーのメンバーについて何も調べていない訳ではない。

むしろ、調べ過ぎているからこそ、そんな男が存在するのかが疑問だった。

『教授』^{フロロヘンソン}と呼ばれる謎のリーダー。

『双剣双銃』^{カトラ}という異名を取る、『武偵殺し』(こちらも異名だが)

超偵ばかりを狙う誘拐犯にして剣の達人、『魔剣』^{デュランダル}。

その他にも、『無限罪』のブラドという吸血鬼、その娘、ヒルダ、『砂礫の魔女』、パトラ。

そして あの男。

それほどの面子が集まって何やらやらかしているらしい。

しかし、このフェンリルは彼ら実動隊とは別の、隠密指令隊だという話で、当時イ・ウーにそんな隊などあるのか、とレインは師匠に

疑問を抱いた　だが、今となつてははつきり、確信を持つていえる。

『フェンリル』は、いる

「俺は、アイツを捕まえない…！」

このタイミングでいうアイツとは、二人にはフェンリルの事だと思われるだろう　そしてその事を、レインも分かっていた。

目の前にいる夜明、太陽ではなく、ここにいない誰かに呟いたようなセリフを吐き、レインは拳を握り締める。

「…どうやら、そのマルフォイとかいう男がフェンリルである線が一番有力だな」

話を戻したのは、太陽だった。

どうやらレインの『事情』を深くは聞かずにいてくれるらしい。

正直、その方がレインとしてもありがたかった。

「どうして分かるんだ？」

太陽の言葉にいち早く質問で返した夜明は、頭に疑問符を浮かべていた。

「…考えてもみる。あの男があ廃墟がフェンリルのアジトだと言い、待ち伏せすれば有利だと話を持ち掛けてきたんだぞ？」

夜明の質問に答えながらも、太陽の意識は夜明、レインにを視てはいない。

「…なる、それでレインと俺をぶつけて、どちらかを始末させようって腹だった訳だ」

夜明も、

「…師匠の作戦が裏目に出たかな…とりあえず」

レインも、彼らは会話をしながらも意識を別の方向　すなわち、店の外へ向けていた。

「……………いい加減、出てきたらどうだ？」

太陽のセリフを皮切りに

バリッ！

レイン達の席の窓が割れ、その残骸が彼らに飛びかかる。

反射的に夜明は飛び退き、太陽はスプーンで全て弾き、レインは椅子を盾にした。

そのままレインと太陽はナイフとフォークを相手に向かって投擲、自身も窓から外へ飛び出した。

手応えはあったので、脚をやられたであろう襲撃者を追おうと飛び出したのだが…

「…驚いたな、いつの間に出たの？」

そこで見たのは脚を引きずる襲撃者ではなく、彼を気絶させた夜明の姿だった。

「今さっきだ。…それより」

「ああ…500、いや700はいるか…？」

襲撃者を放り投げる彼らの目の前に現れたのは、

「…グルルルル」

群れなんて規模でない量の、狼だった。

「…どうやら、あの男がフェンリルで間違いないようだ。目視だが、あの男の服に付着していた毛と毛並みが一致する」

太陽の人間離れた観察力、分析力に舌を巻かれつつ、レインは背を夜明、太陽に預ける。

「いつの間にか囲まれてるんだけど…どうする？」

「そりゃ、正面突破だろ」

「いや、効率が悪い。ここは」

夜明の案をきっぱりと否定し、太陽はにこやかに微笑んだ。振り向いた太陽の後ろから、狼の一匹が飛びかかってくる。

それを気にもとめず、太陽は、夜明とレインに告げた。

「私一人で充分だ」

刹那、狼が吹き飛ぶ。

太陽が拳を放った、と認識する前に、彼女から叱責を受けた。

「ほら、何してる。夜明、不屈の翼で連れて行ってやれ」

「へーい、頼んだぜ、太陽」

「…任された」

短く会話し、夜明はレインを軽く抱き上げ、不屈の翼を広げた。蒼銀の粒子が雪のように舞い散り、次の瞬間には太陽達の遙か上空まで移動していた。レインは、夜明の顔を見上げる。振り返りは、しない。それほどまでに、太陽を信頼しているのだと、分からないレインでは無かった。

「さて、と…遊んでやるよ、犬っコロ共」

太陽が呟いた瞬間、狼達は絶妙な時間差で攻撃を仕掛けてくる。左右から迫りくる狼の爪を跳んでかわし、両方の鼻っ柱に拳を叩き込む。

ぐちゃ、と肉が潰れるような音のあと、狼が唸り声をあげて地に倒れ伏す。

続いて、何体もの狼が一斉に牙を向けて飛びかかってくるが、太陽は地面に拳をつきだす。

地面は隆起し、土の槍が狼達を貫いた。

そのまま舞い落ちる土塊を手に取り、狼達の鼻に、目に、それぞれ正確にあてていく。

狼が太陽の後ろから飛びかかる。

太陽は振り向く事もせず、狼を蹴り上げた。

「やれやれ…このままじゃこの国の狼は絶滅するぞ」

場違いな事を口にしつつ、それでも太陽は攻撃の手を緩めない。

戦闘が始まって1分も経たぬうちに、太陽を中心に文字通り血の海が出来上がっていた。

「…妙だな」

夜明は飛翔しつつ、一人で呟いた。

「何が？」

「あの男…会ったときに全く気配を感じなかったんだ」

「…押さえてたんじゃないのか？」

レインのもっともらしい返答に、夜明は頭を振った。

その顔はいつになく（今さっき会ったばかりのレインから見て、だが）

「いや、押さえていたとしても、人間に完全に気配を消す事なんかできるはずがないんだ」

「…あの男は何者なんだ…？」

レインの疑問、あるいは独り言に、夜明は答える事ができなかった。代わりに、

「…見つけたぞ、あそこだ！」

こちらを悠々と窺う老人、マルフォイの姿を視認し、夜明はその翼をはためかせた。

第20弾 く番外編く 無双的な彼女、二つ名を『深紅の死神』(後書き)

見事な無双っぷりですね、太陽さん。

第21弾 番外編 空を裂く狼（前書き）

最近の悩みは、自分に時間がない事です。

学校、塾、部活、塾の宿題、学校の宿題、小説書く、アニメ見る、漫画と小説読む…友人から「おま、アニメと漫画と小説削れよ」と言われたのは…記憶から抹消されました。

第21弾 番外編 空を裂く狼

第21弾 番外編 空を裂く狼

男、マルフォイがいたのは建物の屋上だった。

こんなところにおいては、彼としても派手には戦えないはずだったが、どうやら彼は既に住民を退けているらしい。

レインと夜明は、この建物から、ひいてはここから半径500メートル程度には人の気配を感じていなかった。

「ようこそおいで下さいました、レインハート殿、夜明殿」

「名乗った覚えは…」

「無いんだがな」

二人はそう言うと、レインはダガーを、夜明は拳をそれぞれ構えた。「くくっ…若いとは良いものですねえ、相手の力量も分からず、恐怖も感じないので…からねえ！」

マルフォイ いや、フェンリルは無造作に片手を、爪で引っ搔くように空間を抉った。

「まずい！ 夜明！」

「分かってる！」

レインは回避行動を取り、夜明に声を張り上げた。

夜明も言われずとも分かっていたので、不屈の翼で大きく上昇した。先ほどまで二人がいた空間が断ち切られる。

地面に綺麗な傷跡を残し、次々と後ろの建物を破壊、いや両断していく。

「なんて切れ味だつての…！」

「ワイヤーか何かか!？」

フェンリルは、レインの問いには答えず、代わりにもう一度片手を振るった。

刃のようなものは、視認出来ない。

レインと夜明は、フェンリルの爪が振るわれた延長線上を避けるようにして回避する。

「（接近戦はまずい…！）」

レインは得体の知れない得物の切れ味、射程に警戒心を抱き、自然とフェンリルから距離を取った。

愛銃ブローを抜き、夜明の時と同じく『雷砲』を放つ。

フェンリルは物怖じせず、その両手の『爪』を前にかざすと　バ
チン！

盛大に何かが弾ける音がしたと思えば、レインの雷砲は　防がれて
いた。

避けられるのではなく、防がれた。

雷砲の威力はレインの技の中でも上位に入るものだ。

それが、防がれた。

それは、レインに大きな動揺を与えた。

動揺は数秒頭を支配し、

その数秒は大きすぎる隙となり、

隙は、相手にとって絶好の機会となる。

フェンリルは、レインに爪を振るう。

「レイン！　避ける！」

夜明の叫び声に、ハツと現実引き戻されたレインは、既に降り下
るされているフェンリルの爪。

ほとんど条件反射でダガーを構えたが
ズパアッ！

軽快な、肉の切れる音と共に　レインの肩から、鮮血が飛び散っ
た。

「ぐ…あ…！」

よるめいたレインは、屋上の端に脚を引っ掻け、落下しながら一旦
体勢を立て直す。

「（指、手は少しだけだが動く。肩は…この戦闘中はもう使えない

な」
己の肉体の状態を確認、止血テープを器用に左手だけで右肩に巻き付け、レインは建物の間を蹴りながら再び戦場へ向かった。

「（あいつの能力は分かった…どうやら、俺と相性最悪みたいだな）」
夜明はフェンリルの能力を確認すべく、右拳をフェンリルにつきだす。

そのあまりの拳圧に、空気が塊となって飛ばされる、と聞けば単純だが実際に使用するととなるとアホみたいなトレーニングと経験が必要になる技だ。

フェンリルは、その極限の体術を、腕をうちわであおぐかのように振るい、かきつけた。

「（間違いねえ…！ だとしたら、俺だけで勝つのは相当厳しいぞ、こりゃあ…）」
夜明は舌打ちし、翼をはためかせ、旋回しながら拳を撃ち込んだ。その全てが、フェンリルに当たる前に弾けて消える。

「ちょこまかと…」
フェンリルは呟くと、先ほどのように爪を振るおつと片手を振り上げる。

夜明は無論、翼で回避しようとするが、
「……………！？」

翼を動かしても、進まない。その理由は、正面から吹き荒れる突風だった。

「死ね！」
突風によって移動出来ない夜明けに、フェンリルの爪が降り下ろされた。

「！！」
ズパアアアーン！
轟音と共に土煙が舞い散り、フェンリルの視界を覆う。

「くくつ…手こずらせてくれましたねえ…」

言いながら、フェンリルが片手を振るうと、視界を遮っていた土煙が霧散していく。

フェンリルとしては、真つ二つとなった少年の死体を眺めようとしただけの行動だった。

だが、それは、彼自身の甘さを認識させる結果となった。

土煙が晴れたそこにあつたのは、地面に走る真つ直ぐな太刀傷のみだった。

「な…!？」

どこだ、と言おうとしたのも、束の間。

その瞬間、戻ってきていたレイン、そして身体を両断されたはずの夜明の上段蹴りがフェンリルの顎に叩き込まれた。

「が…はあっ」

フェンリルは地に倒れ伏す。

何故、夜明は回避に成功していたのか、それは至つて単純で、一度不屈の翼を解除し、自由落下で風が吹き荒れる風域から脱出、瞬時に再び不屈の翼を発動させてフェンリルの爪を避けた、という訳だ

完全には避けられず、左の肘のあたりから血がしたたってはいるが。

ちなみにこの戦法、少し考えれば誰にでも考えつく事だ。

しかしそれを実行するには突如として身体が動かなくなるような異常な事態にもパニックにならず適切な行動を取れる判断力、そして一旦翼を解いて落下という恐怖を味わい、なおかつ再度能力を発動させるタイミングを間違える事なく正確に計れる経験、度胸。

それら全てを持って、夜明は今ここに立っている。

それらを踏まえて、レインが一言、先ほどのフェンリルのセリフを、皮肉で返してやる。

「老いとは嫌なものだね…敵戦力をまともに測れず、驕りで恐怖を感じないらしい」

「違いねえな」

その言葉に答えたのはもちろん、レインの歯に衣着せぬ物言いに微笑んだ夜明だった。

一方その頃、太陽は既に700近くいた狼の群れ、その3分の2程を片付けていた。

「（？）」

おかしい　そう太陽が感じた理由は、狼の数。

今、目の前には目測で数えられる程度の狼しかいない。

それは一見、何の問題も無い事なのだが…

減らした狼の数は、700匹の3分の2程　つまり、500匹にも達していない。

なら、残りの200近い狼達は何処へ　？

その瞬間、

「（……………！）」

太陽の頭に、一つの可能性がよぎった。

それは、悪役が追い詰められたら決まってる、この世で最も太陽が嫌う内の一手　それを思い浮かべ、太陽は小さく舌打ちをした。

第21弾 く番外編く 空を裂く狼（後書き）

今日原作9巻を読んだのですが……とある敵キャラの話。

二つ名と技が…もろかぶりだと…!?

以下ネタバレあり

あの吸血姫様が

・二つ名『紫電の魔女』

・第三形態になる際、雷を浴びて超パワーアップ

もろかぶりやないですか……!

ま、まあこの二人が戦う事になったら面白いかも知れないですし!

という訳で…なんてこった……!

第22弾 く番外編く 紫電の雷神と不屈の翼（前書き）

唐突ですが、自分の好きなアニメにAngel Beats! っていうのがあるんです。

それはどうやらゲーム化が決まっているらしいのですが…発売日っていつ頃？

という訳で、どなたか知っている方がいたらぜひ教えてください。よろしく願いますく

第22弾 番外編 紫電の雷神と不屈の翼

第22弾 番外編 紫電の雷神と不屈の翼

「ふう…終わったか？」

夜明が心底疲れたように溜め息を吐く隣で、レインは地に倒れ伏すフェンリルを、怪しむような表情で眺めていた。

自分の師匠が、不屈の翼と深紅の死神という超強力な武偵二人を高額で雇った割には、どうにもあつけない…

本当にこの男はフェンリルなのか？

そう考えてたレインは、疲れているのだろう、と勝手に結論付け、その疑問を頭の端に追いやった。

「はあ、なーんか拍子抜けだぜ」

夜明が大きな伸びをしながら、不平を口にした。

理由は違えど、同じような事を考えていたようで、レインの顔に再び猜疑の表情がよぎる。

その髪が、さつきから全く同じ方向になびいている事に気がついた。

「（おかしい…なんだ…この、風は…！）」

砂塵の影響で、見える。

全方位からフェンリルに集まっていく、つむじのような風が…！

「…！ 何をしている！」

レインがブロウの銃口を構えると、同時。

「ッ！」

ブロウを握る右手に、激痛が走る。

「レイン！」

太刀傷…爪を振るっついてもしないのに、だ。

そう、フェンリルの超能力とは…

「いい…風だ。なあ、糞ガキ共」

風を操る能力だったのだ。

見えない刃は、漫画などでよく見る所謂真空の刃で、夜明の動きが鈍ったのも、その翼が羽ばたくのと逆向きに突風を起こしていた事で、辻褄が合う。

「そいつで自分の闘気の混じった空気を別方向に流してたのか…」

「ハッ！ そんなセコい事のために、この私がチカラを使うとでも！？」

夜明の言葉に嘲笑を浮かべながら、フェンリルは、人間には不可能な程、口角をつり上げた。

まるで、悪魔のような不気味な笑みに、レインと夜明の背筋が凍る。その、耳までつり上がった口から、鋭く尖ったところの話ではない、まるで太めのナイフの刃のような犬歯が覗いたかと思えばボンツ！

彼の筋肉が膨張し、布を弾く不気味な音と共に彼の肌色が露になった、はずだった。

しかし、彼の肌からは灰色の、先ほどの狼と同じ色の毛が生えていた。

ゴキツ、ベギヤツ、ゲチャツ…

耳を塞ぎたくなるような不快な音がその場に響き渡り、奇妙な静寂を作り出す。

まるで、世界の終わりのような光景だった。

雲に覆われた空を背景に、肉が破壊され、ぐちゃぐちゃになり、再構築されていく。

3日は飯を喰う気になれないであろうその光景から、けれど二人は目を放さなかった。

目を放せば、その瞬間殺られる　そんな曖昧で、しかし絶対的な予感。

不快な音が、止まった。

目の前にいた老人だった男は、もはや見る影も無かった。

つり上がった口角、その延長線上に見える尖った耳、充血しきった

明の対応は弱い。その傷の深さを物語っているようでもある。

「…急ごう」

レイン達は、再びあの狼の元へ向かった。

「ノコノコと…飛んで火に入るなんとやら…か」

その耳まで裂けた口を歪ませながら、フェンリルは目の前に立つ二人の少年に目を向けた。

「勝算が無いわけじゃないからね」

「見せてやるよ…俺達の奥の手」

二人が不敵に微笑んだ瞬間…フェンリルは、声高々に笑い出した。

「…?」

「何がおかしい…ッ!」

疑問の表情を浮かべるレイン、怒りながら疑問をぶつけてくる夜明、それぞれに答えるように、フェンリルは、その巨大な身体をずらした。

そこには

「…!」

何処かへ行っていたと考えていた、この町の住人達の姿があった。その周りには狼が何百も徘徊していて、うかつに手を出したら人質が八つ裂きにされるだろう。

「人質かよ…!」

歯を噛み締めながら呟いたレインに、フェンリルは理解が早くて助かる、と言わんばかりの笑みを浮かべていた。

「どうだ? 手を出したら人質は死ぬ。お前らは、俺の体のいいサンドバッグになるんだ…よっ!」

フェンリルが腕を振るうと、レインの身体から血が吹き出す。

「ぐっ…!」

「まずはてめえからだあ、雷神。痺れさせられたりしたら厄介だからなあ」

どうすればいい…!

人質を傷つけないためには、狼を全部倒さなければならぬ。
それも、何百もの狼を全て同時に、しかもフェンリルを乗り越えて、
だ。

レインの顔に焦りが浮かんだのと、同時。

彼の肩に、夜明の手が置かれた。

「レイン…アイツを、三秒でいい。足止めしてくれ」

「夜明…その身体で、何を…！」

「てめえ、何してやがる！」

フェンリルから放たれた真空の刃に切り裂かれ、顔をしかめながら
も、夜明はレインの心配を振り払うように、笑って 告げた。

「俺には貫きたい信念がある」

絶対に誰も泣かせない信念。

「俺には背きたくない誓いがある」

視界に入った人、全てを救う誓い。

「俺には護りたい世界がある」

自分と一緒にいる人達がいる世界。

「そいつ等が在る限り、俺は、俺の魂たまはは…不屈だ！」

「…！」

ずっと、気になっていた。

夜明の、ひいては『自らの』戦う理由。

それが 見えた気がした。

それを聞いた瞬間、レインの口、そして身体は自らの意志よりも先

行してフェンリルの足止めを開始していた。

「三秒だなんてケチケチしないでくれよ！ 五秒は稼いでやる！」

「…サンキュー、レイン、愛してるぜ」

「それ、太陽に言っただけだよ」

軽口を叩きながら、奥の手を使おうとする二人は、この状況だといふのに 笑っていた。

「『雷光』」

呟いた瞬間、フェンリルの目の前に、稲光が瞬く。

「ぐおおおおお！？」

フェンリルが焼かれた目を押さえる。

この間、0.5秒。

夜明の背中から生えていた翼が夜明の身体をつつむ。

夜明の瞳、髪は翼と同じ蒼銀に染まり、背中からは不屈の翼がより薄く、コンパクトになってその姿を露にしている。

「『不屈の翼』レイジング・ウィング 第2形態 『救済の翼』メサイヤ・ウィング」

そう呟き 1秒が経った

夜明の姿が、一瞬消え去る。

次の瞬間、0.1秒後には夜明はフェンリルを背にして、狼達と対峙していた。

0.5秒、全体で2.6秒が経過した時点で 狼は全て、地に倒

れ伏していた。

「ぐうつ…貴様ら…ッ！」

「…『皇雷神』」

紫電が瞬き レインも皇雷神を済ませる。

そして、

「『今度こそ終わりだ！』」

二人の拳が前後からフェンリルの腹を捉え

「が…あ…」

こんどこそ、フェンリルは地面とキスを交わす事となった。

夜明とレインは、駆けてくる太陽を横目で見ながら ゴツン。

最初は互いに向けあっていた拳を、ぶつけた。

「その後は、近くの街の病院に行ってたよ。…夜明の怪我？ あんなの3日で直しちゃったよ、あいつ。それより筋肉痛が酷かったな。…救済の翼の影響だそうだけど。フェンリルの逮捕は太陽がテキパキやってくれたさ。…で、俺はその後夜明と太陽に礼を言っつて、一足先に退院、また日本に帰るための帰路についた、と…へ？ ああ、俺歩きで日本に帰ってきたんだよ。…わかったわかった。今度その話聞かせるから。…で、何を言いたかったかって？ そりゃあ、お前ら…自分で考えなよ」

レインはアリア、何故かキンジにも追いかけられながら、最初にアリアに聞かれた、強さの秘密、それを思い浮かべていた。

彼には貫きたい信念があった。

彼には背きたくない誓いがあった。

彼には護りたい世界があった。

それを、少なからず自分も見つけた

それは間違いなく、己の強

さの一部であるから。

だから、それを教えてくれた少年の話をしたのかも知れない。

レインは彼と同じ銀髪をなびかせ、アリアに風穴を空けられないように、走り出した。

翼を広げるように。

第22弾 〱番外編〱 紫電の雷神と不屈の翼（後書き）

サザンクロス様、本当にありがとうございました。
満腹です。もう満腹です。

次回からは原作2巻の内容に入るかと。

第23弾 武装巫女、襲来！（前書き）

最近、緋弾のARIAが欲しいです。

全く関係ないですが、本編突入です！

第23弾 武装巫女、襲来!

第23弾 武装巫女、襲来!

アリアとの戦闘訓練、そして過去の話を終えたレイン達はそのまま帰路についた。

「はあく、色々疲れたな…」

溜め息を吐きながら、キンジは手のケータイを開いた。

「…つつ!？」

思わずそんな声を漏らす程、その目に飛び込んできたのは衝撃的だった。

「(メールが、49件…!?)」

そう、49件のメールだ。

その内容の一部を抜き出すと、

『キンちゃん、大丈夫ですか? 最近、キンちゃんに悪い虫が寄ってきたと聞きましたが…』

『キンちゃん、その女の子のせいでハイジャックに巻き込まれたの!? 許さない…その女の子から離れた方がいいよ、キンちゃん』

『キンちゃん、そのアリアって子、今同じ部屋に住んでるって聞いたけど…』

など、怖い。激しく怖い。

そんな情報をどこで手に入れるんだ、と問いただしたくなるくらいに。

しかも加えて最悪なのが、送り主が…

「~~~~! あ、アリア! 逃げろ!」

キンジは、先日免れた悪夢の再来を恐れ、アリアに避難を促した。

「な、何よいきなり…」

アリアが怪訝そうに自分を見るのにも構わず、キンジは必死の形相で彼女を退避させようとする。

しかし、それも失敗に終わった。
遅かったのだ。

後に、忙しさに構わず、もっと早くケータイを開いていれば、とキンジは後悔する事となる。

~~~~~

「（！）」

「あれ、キンジ、ケータイ鳴ってるよ？」

レインに促されながら、キンジはおそろおそろケータイを開いた。  
その新着メールを、開く。

その内容は…

『キンちゃん！ 私、やっと恐山から帰って来れたんだあ キンちゃんに早く会いたくて』

今、部屋の前にいるんだあ てへ』

「ノオオオオオ！？」

キンジは頭を抱えながら、急いでアリアを隠そうとするが、

ピン、ポン…

憤ましい、インターホンの、音。

地獄の閻魔様の怒号より恐ろしく感じるその音の後に  
ズシャアアツ！

玄関から、何やら不吉な 具体的には、ドアが斬られてぶっ壊されたような 音が聞こえてきた。

「な、何？」

レインが首を傾げながら、おそろおそろ玄関の方を除き込むと…ヒュン！

「どわあ！」

脇差しが投げつけられ、その場に倒れるようにレインは回避。その

頬には血が滴っている。

「あ、あ、あ、危なっ！ 誰さ！ こんな事するのは!?!」  
訴えるように叫び、切り伏せられたドアから舞い上がる砂塵が晴れ  
ていく玄關を見据えると、そこには…

「ああ、ごめんなさい成瀬君。間違えちゃったあ」

目が明らかに此処でない何処かを見据えている…

「ほ、星伽さん!?!」

星伽 白雪その人が、日本刀を携えて佇んでいた。

「アリアはあ、どこお?」

死んだ魚の目とはよく言ったもので、白雪は瞳孔をかつ開いた目で  
レインを見つめ、アリアの居場所を問いただした。ちなみに、顔は  
常に一定の口角を保ち、笑っている。

…ガタガタガタガタガタガタガタガタガタ。

その、あまりの恐怖にレインは擬音が聞こえそうな程震えながら、  
キョツケの体勢で、敬礼。

「リビングであります!」

主人ことアリアをあっさりと売りさばいた。

普段はこんな事はしないのだが、仕方ない事だろう。理由は察して  
欲しい。

その場で敬礼したまま白雪が通り過ぎるのを待つ事にしたレインは、  
白雪が自らの視界の端に消えてから、安堵の溜め息をついた。

「そつえば」

「ひいやあああ!?!」

その瞬間、耳に息がかかるくらいの距離で、白雪が（・・・）話し  
かけてきた!

「成瀬君は同じ合宿だったのに、すぐにキンちゃんのところへ駆け  
つけたんだよねえ。いいないいな、羨ましいなあ」

そう言う白雪の顔は笑っているが、目が全く笑っていない。

「は、はあ……」

本当に戦慄を覚えつつ、レインはしどろもどろ返事を返すが…

「ねえ、なんで私も一緒に連れて行ってくれなかったの？　なんでなんで？」

その笑い声から、もう殺気すら通り越した何かか滲み出ているのを感じ　　レインは白雪に、一礼。

「申し訳ありませんでした」

それだけ言い残し、雷神化　　全速力で、あてもなくもうすぐ夜の武偵高の闇に消えた。

「金持つてくんの忘れた…」

切実な悩みを一人にぶつちやけているのは凄腕の武偵と名高い『紫電の雷神』こと、レインだ。

武装巫女様から逃げ出して、走って走ってようやっと財布その他もろもろを部屋に置き忘れていた事に気がついた。

持っているのは愛銃ブローとスローイングダガーを十本程。

鉛はあるが、金はない。

どうしたもんか、とその辺（学校の屋上）をふらふらしていると…

「…ん？　あの娘は…」

見覚えのある少女が、銃を担ぎながら星の見えない空を眺めていた。

「レキ」

彼女の名前をうる覚えながら呼ぶと、少女はその碧の髪を揺らし、その顔をレインに向けた。

「なんでしよう」

感情というものが感じられない、平淡な声。

レキは周りから、そのあまりの機械的な平淡さと、あまりに精密な射撃から『ロボット・レキ』と呼ばれる。

それが蔑称なのか敬称なのかはレインには判断がつかなかったが、彼の耳にも彼女の噂は届いていた。

入学時から狙撃科のSランク武偵で、天才的な銃技の数々で難易度の高い任務をこなしてきた、と。

「こんなところで何をしてるの？」

テンプレートな上、自分も他人の事を言えないようなセリフだったが、そこはさすがレキ、全く突っ込まずに質問に答える。

「聞いていたのです…風の声を」

……

「は？」

レインが間の抜けた声を上げたのも仕方ない事かもしれない。

「だって、ヘッドフォンしてるじゃん」

「これに故郷の風の声を録音しているのです」

なんの抑揚もなく告げるレキに、溜め息混じりにレインはヘッドフォンを借りる（無理矢理ではなく、きちんと許可をとってだ）。

……なんと、本当に風の音しか聞こえない。

これはさすがに危ない予感がしたので、レキの音楽プレイヤーを借りると案の定、さっきのような風の音が流れるだけのものが5つ、入ってるだけだった。

「はあ…レキ、音楽とか聞かないの？」

「……………」

コク、と無言で頷いたレキを見て、レインはおもむろにケータイを取り出し、イヤホンをつける。

「ほら、聞いてみなよ」

その片方をレキに差し出し、もう片方を自分の耳につける。

レキが少しイヤホンを眺めた後、耳に装着したのを横目で確認し、再生する。

月明かりに照らされながら、レキとレインは、ギターの、ドラムの、ベースの鼓膜を刺激するリズムに心を浸していた。

「…どうだった？」

「…楽しかったです」

「そう。良かった」

二カッ、と笑うレインの顔を見たレキは　笑っている、ように見える。

「さて、俺はそろそろかえ…」

言いながら、立ち上がるうとしたレインの腹から、グウウウウウウウ。

…エネルギー不足の警報が鳴った。

「……………」

「お腹…減っているのですか？」

顔を真っ赤にして俯くレインに、レキは握った手を差し出した。

「さっきのお礼です。よければどうぞ」

そのまま、レキは長銃、ドラグノフ狙撃銃を肩に背負い、その場を去っていった。

「あ、ありがとう！」

レインの声に一礼し、レキは屋上を後にした。

それを確認し、レインは大急ぎで握った手を開いた。

「……………」

そこに握られていたのは…カロリーメイト、チーズ味だった。

「……………そんなオチだろうとは思ったさ。」

第23弾 武装巫女、襲来！（後書き）

白雪：…ヤンデレですと？

ちよつと怖くし過ぎたかなあと反省します。

レキとの絡みが全く無い事にも気づいたので、彼女とも絡ませてもらいました。

レキ可愛いよレキ。



## 第24弾 火のないところに煙は立たない

第24弾 火のないところに煙は立たない

レキからのプレゼントをありがたく頂き、レインはそのまま帰路についたのだが…その表情は愕然としている。

武装巫女様からの襲撃をなんとか引き分けという形で終わらせたアリア、心底疲れたような表情を浮かべるキンジ、そしてその武装巫女様こと白雪がぼろぼろでソファアに座っていたのだ。

「…何やってんのさ？」

レインの声がトリガーになったのか、ガバツ！ と飛び起きたアリアが、キンジに人差し指をつきだした。

「全部！ 100%！ あんたのせいよ！ なんとかしなさい、バカキンジ！」

アリアがガバメントに手をかけているのを視認したキンジは、慌てて白雪の説得に取りかかった。

風穴をあけられたくはないのだ。

「あー、白雪。俺達は武偵のチームを組んでるだけで、そんな関係では…」

「…！ キンジ！」

「…なんだよ、レイン」

説明の途中で口を挟まれたのだからいい気分はしないだろうから仕方ないが、答えるキンジの声はどこか刺々しかった。

「ポケットポケット！」

小声で言われ、キンジは自分のポケットに目を向けた。

左側ポケットから、先日アリアと一緒にUFOキャッチャーでとった『レオポン』なるぬいぐるみ型ケータイストラップがはみ出していた。

「これがなんだってんだ？」

首を傾げながら呟いたキンジが持ち上げた、レオポン。そのレオポンと全く同じものが、アリアのポケットからもはみ出している。

「ペ、ペアルックしてるー！」

白雪の叫びが響き渡り、キンジは溜め息をついた。

「そんなんじゃないって。白雪、俺の言うことが信じられないのか？」

キンジが若干汚い手を使い始めている。

だが、とめてやる必要も理由も無かったため、レインはそのまま放置した。

「そ、そんな事、ない、よ……」

白雪の態度が軟化していくので、レインはほっと一息ついた。

改めて、部屋の散乱具合を確認する。

テレビは…無事。

机は…真つ二つ。恐らく白雪の仕業だ。

他にも、アリアのガバメントが火を噴いたのか、ソファに穴が空いていたり、観葉植物がズタズタに引き裂かれていたり、と台風の後のような光景だった。

その原因、アリアと白雪を交互にジト目で見てみると、白雪が確認するようにキンジに聞いた。

「じゃあ、キンちゃんのアリアはそういう事は一切してないんだね？」

「そういう事って？」

「その…キ、キス、とか……」

また始まったか、とレインは密かに溜め息をつきながら、さてどれから片付けるかと辺りを吟味しようとして 気づいた。

「……」

アリアとキンジ、二人のチームメイトが固まっている事に。

石像のように動かない二人に、もしか、もしかと、しどろもどろレインは口を開いた。

「…したの？ キス」

「「！！！！」」

二人は全くの同時に、真っ赤にさせた顔を背けた。

それが肯定しているのと同義である事を理解しているのかは甚だ疑問だが。

さて、これからどう弄くつてやるうか、とレインが思索していると  
状況を打開するためか、アリアが未だに真っ赤な顔を白雪とレインに向けた。

「だ、大丈夫よ！ こ、ここ、こ…」

何故か『こ』を連呼する（かんでるだけだが）アリアは、予想だにしない、とんでもない事を言いはなった。

「子供は出来て無かったから！」

ヒュウ。

その超爆弾発言を聞いた瞬間、白雪の何か魂的な何かが抜け出してお空へ登っていきそう（逝きそう？）だったので、レインはそれはしつこを掴んで白雪の身体に押し戻した。意識はまだ戻らないが、どうやら魂的なものは身体に定着したらしい。

「お前っ…何んでもない事いつてんだ！」

「何よ！ 私、あれから結構悩んだからね！？」

コントのように後ろで絶叫する二人を眺めながら、白雪の応急処置を終えた（魂を戻したただだが）レインは、微笑ましいといったような瞳でキンジとアリアを見つめていた。

その視線に気がついたのか、キンジはレインの方を向き、

「レインも、勘違いするな！ 俺達は何もやましい事なんかしてない！」

と必死に訴えるが…

「『っー、っー…がちゃ。』 あ、情報科の立花さん？ 面白い情報ネタがあるんだけど…そうそう、今旬のアリア×キンジネタなんだけど、

「十万でどう…」

「…っざけんな(るな)ー！ー！」

情報科の仲良し、立花 ミチルに連絡したレインのケータイは、アリアとキンジにより没収、通話を切られてしまった。

「何友達を売ろうとしてんだ！」

「そうよ！ そもそも、本当にそんな仲じゃない！」

「冗談だよ。仕方ないなあ、俺はSSRに星伽さんを運んでいくから…よっ、と」

白雪をお姫様抱っこで抱え、玄関へ向かう。

後ろでは、レインを追いかけてようとしたらしいキンジが、アリアに絡まれてまたコントが発生しているのが聞こえたが…とりあえずはこの武装巫女様を運んでやらねば、とずり落ちてきた白雪を軽く持ち直した。

「んん…キン、ちゃん…？」

「違う違う。成瀬 レインハートだよ」

きつちりフルネームで自分の名を言うと、白雪はハッ、とした表情でレインの顔を見上げ、わたわたと慌てだした。

「な、成瀬くっ…！ あ、あ、あの、もう大丈夫だから、降ろして下さい！ おろ、降ろして…！」

「わ、分かったから暴れないで！」

暴れる白雪をそつとその場に立たせ、レインは両手を上げた。

「はあ、はあ、はあ…あ、あの、キンちゃんは？」

目覚めての第一声が『キンちゃん』なところも、白雪のキンジへの依存性を顕著に示している。

「落ち着け。自分の部屋だ」

「……………キンちゃん…ぐすっ」

「！」

自分の部屋…キンジとアリア、ついでにレイン レインは今自分と一緒にいる…キンジとアリアが二人きり、という事を連想したのか、

白雪は悲しさからか悔しさからか、ポロポロと涙を流して泣き出してしまった。

「ほ、星伽…じゃなくて、白雪！」

「ふえ？」

突然、名前を呼ばれたのに戸惑ったような声をあげて、白雪はレインの方に向き直った。

レインとしては、突然呼び方を変える事でこちらに興味を引かせる作戦だったのだが…予想以上に上手くいった。

「心配しなくても、あの二人は断じてそういう関係じゃない！」

確信などどこにもないが、あの二人が言うのだから間違いではないだろう、とレインは断定するように言った。

「そう…なの？」

「ああ。てか、俺がいるんだから、そういう事出来ないだろ？」

「でも…もしかしたら、成瀬君がいない間に…」

「だーいじょうぶだよ！ それに要らぬ疑いをかけると、キンジにだって迷惑かかるよ？」

優しく、諭すように先ほどのキンジのような汚い手口で、レインは白雪を納得させた。

「…そう、だよな！ うん、分かった！ ありがとう、成瀬君！」

私、頑張るよっ！」

そう言い、白雪はレインに短く敬礼し、スタタタターとその場を去っていった。

「ふう…なんとか切り抜けたか」

レインは安堵の溜め息をつき 白雪の後ろ姿を見つめながら自分の寮の部屋に戻った。

第24弾 火のないところに煙は立たない(後書き)

感想お待ちしています)

## 第25弾 アドシールド…出場る？

第25弾 アドシールド…出場る？

翌日。

「成瀬君、隣、いいかな」

キンジとレイン、アリアが同席して昼食をとっていたテーブルに、突然の来訪者が現れた。

「不知火。もちろんいいよ。よつ、と…」

その来訪者、不知火のにこやかな笑みを向けられたレインは、キンジの方へトレイを寄せ、不知火の座れる分のスペースを作った。

「ありがとう、成瀬君。…ああ、口にソースがついているよ」

そう言い、不知火は備え付けの紙ナプキンではなく、自らの高級そうな青いさわやかなハンカチでレインの口のソースを拭った。

その瞬間に、周囲の女生徒の

『キヤアアアアア！』

という悲鳴と歓声が混ざったような声が上がった。

不知火の親切な行動をなにやら勘違いしたのだろう。

ちなみに、不知火もレインも容姿は上の上、見える人にはその様子は周りに花畑が見え、背景が桃色に見えるそうだ。

この武偵高は腐女子まで完備しているらしい。

これも余談だが、不知火はそんなに容姿がいいのに女性との噂が全く立たないのだ。不自然な程に。

そのため、腐女子達からは『男専』などと呼ばれている事はレインの知るところではない。

「んぐ…ありがとう」

「どういたしまして。…ところで、遠山君」

不知火はレインに女子を卒倒させるイケメンスマイルを向けて、く

る、とキンジの方に向き直した。

「聞いたぜキンジ。ちよつと尋問させてもらつぜ、逃げたら轢いてやる」

不知火のセリフを代弁するように向かいの席に座ったのは、車輛科の優等生、武藤だ。

その顔はどこか不機嫌そうに見える。

何かキンジは彼を怒らせるような事をしたのだろうか？

と入学以来結構キンジと行動を共にしていたレインは不審に思った。

「尋問つて…何を？」

「星伽さんと喧嘩したんだつて？」

今度は武藤を代弁するように言った不知火の言葉に、キンジは苦い顔で首を横に振った。

「喧嘩なんてしてない。アイツが勝手に押し掛けてきて帰っただけだ」

「アリアとキンジの仲を見せつけられて、ね」

事実を知っているレインは、キンジのはぐらかしたような解答にズバリ一言付け加えた。

「~~~~~！」

「れ、レイン！ お前…」

アリアとキンジが赤面しているのを横目に、レインは悠々自適にチャールハンを口に運んでいる。

そのレインを恨めしそうに見つめるキンジに、武藤の追撃がかかる中…不知火がレインに、アリア達に悟られない程度の声で話かけた。

「さっきの話、本当なのかい？」

「一応、ね。絶対秘密だけど、キスマでいったらしいよ」

「本当かい？ …ふふ、それは良かった」

「アリアが『子供は出来て無かった』なんて言ってたけど…あれはアリアの勘違いで間違いなさそう」

「そうか…ありがとう、成瀬君」

ニコツ、と微笑んだ不知火はキンジ達に向き直し、安心したように



目を細めて彼らを見ている。

頼れるお兄さん　そんな形容が似合う不知火の横顔を、レインはまじまじと見つめていた。

「（　アイツも…）」

そこまで考えて、レインは頭を振った。

余計な事を考えるな。

俺は、アイツになんの情もかけず、ただ死刑台に送ればいい…

例えそれが、自分の

「聞いているの！？　レイン！」

アリアの呼ぶ声に現実に取り戻されたレインは、ハッと顔を上げた。

「あ…えと、ごめん。なんだっけ？」

「もう。ちゃんと人の話を聞きなさいよ」

言われたレインと隣のキンジは心の中で『お前が言うな』と見事にハモったが、口には出さなかった。

風穴をあけられたくはないのだ。口答えするのは得策ではない。

しかし、沈黙を守るのも得策とは言い難いので、キンジが助け船を出す事にした。

「アドシアードの事だよ。レイン、お前はSSRで何か出るのか？」

「うーん…どうするかな？　あんまり派手な事はしたくないんだけど…」

「ふうん…でも、アドシアードの代表って、色々特典がつくらしいけど？」

「うーん…」

不知火のセリフに、レインは腕を組んで考えるポーズを作った。

そして、アリアとキンジの方をちら、と見て…

「やくめた。面倒臭いし」

腕を頭の上で組み直し、なんでもない事のように言い放った。

アドシアードの特典など、初めから眼中に無かったかのようなあっさりとした言葉に、その場にいる全員が微笑した。

後日、朝のレイン達の部屋。

「さーで、キンジはアリアと修業だし…何しよっかな？」

そこには、今日という日の計画を立てながら武偵高の防弾制服に袖を通す、レインの姿があった。

「うーん、暇そうな奴と言えよ…」

武藤…電話にでない。x。

不知火…昨日忙しいとか言っていたのでx。

情報科の立花…は、やめておく。理由は割愛。

そうして、めぼしい名前を見ていくが、皆忙しいのか電話に出ない。ちよっと飛ばし気味にアドレス帳を見ていくと…その名前が目に入った。

峰 理子。

自分が恐山に行っていた間に、いつの間にか姿を消していた少女だ。レインは、つい本来の目的を忘れ、幼馴染みである理子に電話をかけた。

『フー、フー…たたい』ガチャ。

しかし、理子は出られないようだ。

やけに通る機械音声を耳に通す前に、レインは通話を切った。

「理子、どうしたんだろ…」

ケータイを閉じながら、小さな幼馴染みの姿を思い浮かべた。

「あいつ…どうしてまたいなくなっちゃうのかな…」

それは、レインがまだ幼い頃…

レインは、その頃から雷神としての才能に目覚め始めていて、その身体に触れる者はみな電気の痛みを感じていた。

「お前となんか遊ばねーよ！ このビリビリ野郎！」

そんな心無い元友人の言葉に、子供ながら人知れずに泣いていた。そんな時に現れたのが、彼女、理子だった。

「君…なんで泣いてるの？」

突然の言葉だった。

その少女の顔は、不自然な程痩せほそっていた。

虐待 そんな言葉を連想させるようだったが、そんな事は幼いレインには分からない。

「みんな、僕と遊んでくれないんだ…ビリビリするからって」

「ビリビリ…?」

首を傾げながら、少女はレインの首を触ろうとする。

しかし、それは他ならないレインに妨げられた。

「駄目だよ！ 僕に触っちゃ！」

電気によって相手が嫌な思いをするから、という理由ももちろんあった。

しかし、本音はせつかく自分と話してくれる友達が出来たのに、それを手放すのが嫌だったのだ。

「……………」

しかし、少女は無言でレインの首に手を回し 抱き寄せた。

「……………！ ……なんで…！」

バチバチと、彼女を痛めつける電流の音が聞こえる。

それが、彼女を痛めつける証に思えて。

それでも、彼女の痩せ細った身体は温かくて。

レインの瞳からは、一筋の雫がこぼれ落ちていた。

「大丈夫だよ。こんな痛いのがこぼれ落ちてるじゃあ…」

そう言う少女の声は、震えている。

「もちろん、辛いときは泣いていいんだよ。でも、泣くときは、必ず誰かと一緒に泣こう？ でないと、とても寂しいよ…」

少女の瞳にも、涙が溜まっているように見える。

「…君の、名前は…?」

「私？ 私は…」

「…だああああ！」

赤面。そう、レインは赤面していた。

アリアの専売特許だと思っていたが、理子とのこっ恥ずかしい過去

を思い出した事で、レインにも発動したようだ。

「あーもう忘れよう！ それがいい！」

レインは気持ちを切り替えるため、散歩にでた。

この武偵高は、歩いてるだけで何かハプニングが起こるため、暇なときには散歩に限る。

…事件に巻き込まれる事も多々ありだが。

第25弾 アドシード…出場る？(後書き)

当人のいない場所で、理子フラグがバツキバキに立ってますね

第26弾 魔剣て…アイツ？（前書き）

今回は少し長いかもです。

## 第26弾 魔剣て…アイツ？

第26弾 魔剣て…アイツ？

暇潰しの散歩をしにきたレインは、依頼でもこなそうかと依頼板を眺めていた。

大した人間でもなさそうな要人警護。

迷子の猫探し。

挙げ句の果てには部屋の掃除…報酬は5万。

全く面白味のない依頼ばかりで、レインは思わず溜め息をついた。

「はあ…暇だな」

そのまま、大した事のない依頼をペラペラと捲っていく。すると、突然後ろから声がかげられた。

「ねえ、そのあなた？　もしかして『紫電の雷神』、成瀬　レインハートじゃない？」

聞きなれたセリフに、レインは嫌々振り返った。

この手の輩、要するに野次馬精神溢れる青春を無駄な時間に費やしていると思えない不健康極まりない人種は、正直苦手だった。

「何か御用ですか？」

見たところ（主に雰囲気）先輩らしかったので、敬語を使いながら答える。

するとその女生徒は口元を緩ませてトコトコとレインに歩み寄ってきた。

女生徒の動きで起こった風に、彼女の甘いオレンジのような香りに思わず頬を紅潮させてしまったので、レインは顔を背けた。

見た限りでは、美少女。

薄い空色の髪に、色素の薄い白磁のように白い肌。

目は大きく、それが放つ光は星を思わせる。

恐らくデフォルトでその輝きを放つ彼女に、レインは当初の警戒心を緩やかに解いていった。

「暇って言ってたよね？ あのね、手伝って欲しい仕事があるの」「はあ…それじゃあ、身分証明と依頼内容をお聞きしても？」

一応、着ている服から武偵高の人間だと分かるだろうが、ここ最近武偵高に潜入している犯罪者もいたらしい。念を入れて損はないはずだ。

「うん。 情報科3年Aランク、霧矢 綾瀬よ」

「へー、どちらが苗字か紛らわしいですね」

「よく言われるわ。さて、依頼内容なんだけど…」

少し纏う雰囲気シリラスなものにした綾瀬は、一枚の依頼状を取り出した。

「…『デュランダル魔剣』の調査、ですか」

内容を反芻するように呟いたレインに、綾瀬は無言で首を縦に振った。

「調査というなら、諜報科に依頼した方が適切ではありませんか？」

確か、有能な1年が入ったと聞きましたか」

その1年は確か名前が 有明 悠。性格は内気だが、1年にしてSランクの武偵である天才少年らしい。

天才少年、ね…

かつて冠していた、いや現在も自分が冠する称号にレインは気がつかない程度で顔をしかめた。

自分のした表情で他人に気を遣わせたくは無かったかのだが、どうやらすぐに顔に出る癖は段々と克服出来てきたらしい。

「あゝ、私も最初はそうしようと思ったんだけど…彼、内気だから合わないのよねえ、私と」

確かにその通りだと思う。

レインの頭の中では、悠がおどおどしているのをイライラした綾瀬が無理矢理引つ張っていく光景が再生されていた。

「困ったものよね。『魔剣』の情報のレポートを綴先生に提出した



ら、『じゃあ、引き続き調査しといてくれ』って頼まれちゃって」  
綴先生というのは教師科の先生で、尋問の能力が日本だけ世界だから（多分日本だ）で五本（あれ…三本だっけ？）の指に入る人だ。  
しかしその厳つい肩書きとは裏腹に、彼女は常に全身を黒い服で覆っていて、とてもじゃないが小説等の媒体では書けないようなお薬的なものを使用しているらしく、年中目が据わっているという、完全危険人物だ。  
その綴先生からの頼みは例え教師科強襲科担当の蘭豹さえ断れないらしい。

「そりや大変ですね…さて、魔剣の調査の件ですが…協力しましょう」

レインの一言に、綾瀬は驚きの表情を浮かべる。

断られるのを前提に聞いたのだろうか？　と思わず聞きたくなかったが、今そんな事を聞く必要はないため口をつぐんだ。

「いいの？」

「ええ。困っている女性が居たら助ける主義ですので」

「ふふっ、紳士なんだね？」

「いえ、それに少なからず魔剣の方にも興味はありますしね」

借りも、ね。

心の中で呟いたレインはにこやかな笑みを浮かべ、綾瀬の手を取った。

「具体的には…何をすれば？」

「じゃあ…まずは、魔剣を探しましょう」

魔剣は剣の達人で、しかも超偵を誘拐するという。

その手口は様々だが、今回はなんと武偵高に潜入してくるらしい。

「…だから校内パトロールというのは…些か単純過ぎるのでは？」  
というか、何時何処で誰に何をするのか、それが分かってない状態でパトロールをするには武偵高は広すぎる。

「うーん…でも、他に方法無くない？」

「せめて魔剣の何について調査するのかくらいは…」

「ああ、確か魔剣はあなたと星伽さんを狙ってるらしいから」

ズリッ、と肩を落とし、レインは呆れ顔で綾瀬の方を向き直した。

それが本当なら、今まで自分達がやってきた事は（校内をお喋りしながら練り歩いただけが）全くの無駄だった事になる。

「…そういう事は先に言ってお下さいよ。まあ、そうと決まれば話は早いです。先輩、白雪の居場所を突き止めて下さい」

「ええ、なんで私が？」

「あんた情報科でしょうが！？」

ぶー、と頬を膨らませながら、綾瀬は持っていた小型ノートパソコンを立ち上げ、凄く速度でキーボードを叩きはじめた。

その手慣れた様子は、さながらピアノを弾く奏者の如く、早く、速く、速い。

「教師科ね」

「…あんなところに？ 呼び出しでしょうか？」

「そうね。…というか、あなたも呼び出し食らってるわよ」

「！？」

衝撃の新事実だった。

そういえば、今朝は通り過ぎる人毎に自分を見て、ヒソヒソと何か囁いていた気がする。

それは白雪と一緒に呼び出された事であらぬ噂を立てられたのだと、今更ながらレインは額に手をやった。

コン、コン。

「失礼します、成瀬です」

「おーう、入って」

やる気を感じられない言葉を耳にして、レインはその扉を開いた。

「何か御用でしょうか、綴先せ…って、アリア、キンジ？」

綴、そして白雪の隣にいたのは、午前中真剣白羽取りの練習をして

いたアリアとキンジだった。

「どうしてここに？」

「どうしてもこうしてもない……」

キンジが諦めたように呟いた。

レインはそれを見て、今までのキンジの不幸を鑑みるにああ、またアリアに巻き込まれたんだなあ、と他人事のように予測する。

キンジも大変だな、と同情の視線をキンジに向けると……アリアが、口を挟んできた。

「私たち、あんたと白雪の護衛するから！」

「……は？」

他人事のような視線をキンジに向けた報いか　あるいは必然か、キンジと同じ独裁者様<sup>アリア</sup>のドレイであるレインは、またまた事件に巻き込まれる事となった。

「……という訳で、こいつらをあんた達の護衛にするから」

「先生、手抜きしないで下さい。どういう訳か説明してもらってません」

『……という訳で』という省略法で、話を無理矢理省こうとしたが、それが有効なのは小説の中の話だ。実際問題、今しがたきたレインは何一つ事実を把握していない。

「綴先生。はあ……俺が説明しますよ」

バトンタッチし、巻き込まれた憐れなキンジが説明役を買ってでた。今までの流れを説明すると、

白雪とレインが魔剣に狙われているらしい。

そこで綴先生ら教師科は、学園の秘蔵っ子である白雪、そして世界最強の超偵の一人に数えられるG（読み方はグレード、用途は超偵の超能力の規模等の目安）の超偵、レインを危険に晒したくはないらしく、護衛を付けようという話になったらしい。

しかし、そこで白雪が護衛を拒否。理由は、魔剣なんて都市伝説のような犯罪者だ、存在するはずがないというのだが、レインの予想

だとそれは建前。本音はキンジの世話をするのに邪魔だからだろう。ともかく、それで綴と白雪に一悶着あったところで…天井から、アリアとキンジが落ちてきたらしい。本当に、最近の彼らはよく落っこちるな…というレインのどうでもいい思考は割愛しよう。

アリアとキンジは、レインに励まされ何を勘違いしたのか、アリアをキンジと引き離そうとした白雪の暴走に困っていたらしく、白雪の弱味を握るべく隠れていたらしい。

激しくどっちもどっちな気がするが、アリアが『魔剣』の二つ名を聞いた瞬間、アリアと白雪の利害が（キンジの事を除けば）一致したらしい。

アリアとキンジが護衛につけば、白雪はキンジの世話を甲斐甲斐しく行える。

そしてイ・ウーの一員である魔剣を捕まえれば、イ・ウーに冤罪を着せられているアリアの母、神崎 かなえさんの刑を減らせるらしい。

そんな訳で、白雪の護衛をアリアとキンジ（無理矢理）が買ってやったのだ。

そんな説明を受けて…レインは呟いた。

「…俺の人權は？」

第26弾 魔剣て…アイツ？（後書き）

感想お待ちしています

第27弾 あれ…部屋が埋まっていくぞ…(前書き)

戦闘シーンを上手く書けるようになりたいです。

## 第27弾 あれ…部屋が埋まっていくぞ…

第27弾 あれ…部屋が埋まっていくぞ…

と、いうわけで。

「お、お邪魔し、します…」

緊張からか噛みに噛みまくった白雪が、レイン達の入ってきた。いや、住み込んできた。

キンジに何やら話している 今、約90度のお辞儀をした その間に、アリアが部屋の要塞化を図る。

あらゆるところに手榴弾やら何やらを仕掛けている。窓ガラスの近くにも設置しているが…ガラスが割れるのではないだろうか？

そんなレインの懸念を嘲笑うかのように手榴弾は次々と設置されていく。

天窓にも罾を設置しようとしたアリアの頭に金ダライが落ちてきた。ガツン、というドリフで聞けそうな音の後、アリアが頭を両手で押さえていた。

「アリア、大丈夫…じゃ無さそうだね。ここは俺がやっておくよ」  
呻くアリアを無理矢理退けて、レインもトラップ設置に協力する。

「おいおい、レイン。お前までそんな事しなくてもいいんだぞ？」  
キンジの呆れたような言葉に、レインは首を傾げ、アリアは犬歯を剥き出しにして食らいつくようにキンジに詰め寄った。

「あなたは黙って白雪の護衛してなさい！ 私とレインはトラップを設置してるから！」

言いながら、アリアはキンジを追い出した。ここは元々キンジの部屋である事などとうに忘れて いや、はなから頭に入れてない、入れる必要もない事だったらしい。アリアにとっては。

着々とトラップを設置していく中、ふとレインはアリアに話かけた。

「そういえば、キンジ達を放っておいて大丈夫なの？」

「それについては問題無いわ。レキを雇ってるからね」

「パートだけだね、と付け加えたアリアのケータイに、着信音があった。

アリアは着信を見て、

「ほらね」

と『レキ』と表示されたディスプレイをレインに向けてくる。

狙撃科は対象を遙か彼方から狙撃する。

そのため、護衛対象たちの行動に目を光らせ、場合によっては、発砲して戦闘をサポート…という感じだ。

そのため、対象を遠距離から認知するための能力（何か）が必ず要らしい。

今回はその能力を最大限活かしてもらって、レキには白雪の周辺を監視していてくれるらしい。

無論、キンジが白雪から離ればアリアに連絡がいくのだ。今の ように。

「じゃあ、私はバカキンジを捕まえにいくから、あんたはSSRで対超能力者用の道具を買ってきなさい」

手錠は絶対必須よ、と言い残し、アリアはドアを半ば蹴破るように出ていってしまった。少し機嫌が悪いらしい。

アリアに蹴破られてギィ…と音を立てるドアを見て、レインはふとある事に気づいた。

「…お代は？」

まさか自腹なのだろうか？ そうだとすれば非常に性質が悪い。対超能力者の銀の手錠は結構値が張るものなのだ。

「…まあいいや」

レインは中学時代から貯めてあった軍資金。そんなレベルの額ではないが、を頭に思い浮かべ、軽い足取りでSSRへ向かった。

「たまには散財でもしますか…」



「オーイ、キンジ…って、うおっ!？」

ロキシーという学園島唯一のファミレスにキンジがいると聞き、足を運んだのだが…キンジがアリアにドロップキックを食らわされている真っ最中だった。

「あら、レイン。…って、何よその荷物…」

「言われた通り、色々買ってきたよ」

ほれ、と絶対必須らしい銀の手錠をいくつか取り出してアリアに渡す。

「…いくらしたのよ？」

「? うーん、覚えてない」

アリアがレインをジト目で見る中、状況が掴めていないキンジはレインに小声で説明を求めてきた。

「おい、レイン。そのいかにもオカルトグッズはなんなんだ？」

「対超能力者用の武装らしいんだけど…」

「レイン。ちょっとこっちにきなさい」

キンジの質問に答えた直後、今度はアリアに呼び出される。

レインはアリアに近づくと…ガチャ!

「ん…? 手錠?」

何故か銀の手錠をかけられた。片手だけなので不自由はないが…

「え? どうしろと?」

「外に出て、適当に技をだしてみなさい。手錠の効力が分かるわ」

「よし…雷神化するぞ」

レインの確認するような言葉にアリアが頷き、レインの身体に紫電の雷が纏わる。

しかし、その雷は普段のように強いものではなく、弱々しい電流が流れているだけだった。

「…何これ? 全然力が出せない」

「手錠の効力よ。今はレインの超能力が強すぎて力を押さえる程度にしかならないけど、普通の超能力なら一発で超能力が全部押さえ込まれるわ」

「へ…じゃあ、早く取ってくれ」

「分かっているわよ…って、あれ？」

アリアがポケットやら何やらをガサガサと探っている。…レインには嫌な予感しかしない。

まさかとは思うが、まさか、まさか

「鍵、無くしたのか？」

キンジの怪しむような言葉に、アリアの肩がビクッ！ とはね上がった。凶星で間違いないだろう。

「え、えーと、あの…その、ね？ …ごめん」

色々なんとか誤魔化そうとしていたらしいが、今は100%自分が悪いと認めたのか、普段からは想像できない恥じらいの表情で謝ってきた。ちよつと涙目にも見える。プライドの高そうなアリアは、自分がこんな単純なミスをしたのが情けないと思う反面、レインに迷惑をかけてしまった罪悪感が働いたのだろう。

素直なアリアを微笑ましそうに見つめ、レインはポン、とアリアの頭に手をやった。

「大丈夫だよ、アリア。俺がこの程度の事でどうにかなると思うか？」

「でも…」

アリアがまだ自分の失敗を悔やんでいるようだ…そこに、助け舟が出された。

「じゃじゃ〜ん！ お困りのようだね、レイレイー！」

レインにとってはそれほどありがたくもないが。

「立花さん…何しにきたの？」

「レイレイが手錠かけられたって聞いて飛んできたのさー！ ぴよーん」

言いながら軽くジャンプするミチルをみて、レインは露骨に溜め息

をついた。

「野次馬ね…綾瀬さん、貴女情報ですか？」

レインが言った瞬間、後ろの茂みがガサツ！と揺れた。

そこから、レインに言われた通り出てきた綾瀬がばつが悪そうにできた。

「いやあ、困ってるみたいだったから、助けてあげようと思って」  
誤魔化すように言った綾瀬は、手からピッキングの道具を取り出した。

「先輩、ピッキング出来るんですか？」

「鍵穴の情報を持つてるからね」

どうやら、鍵穴の形が分かっているために素人程度の腕でいけるらしい。ミチルが差し出したパソコンとにらめっこしている綾瀬を見て、この戦姉妹アミカの情報集めのスキルが武偵高でも1、2を争うという噂は、満更でもないかもしれない。そう考えている間に、レインの手錠が開いた。

第27弾 あれ…部屋が埋まっていくぞ…（後書き）

オリキャラ出しすぎてそろそろ収集つかなくなってきましたね〜ア  
リア達の出番を減らさないよう頑張らないと

第28弾 百合は花の名前です(前書き)

あはは…何このハーレム…(女キャラふえ過ぎだろ…)

ハッ！ まさか一章毎にヒロインが増えるのか…？ 自分ならやりかねないので怖いです…

## 第28弾 百合は花の名前です

第28弾 百合は花の名前です

徒友 アミカ。

男の徒友を徒兄弟 アミコ、女の徒友を徒姉妹 アミカと呼ぶ。徒友とは、武偵高に通う生徒達が先輩後輩で組むパートナーのようなもので、基本的に先輩が後輩に指導する形になる。

また、先輩が後輩に徒友を組もうと言い出す事はあまり無く、後輩が先輩を誘う方が遥かに多い。

そのため、人気のある二年生以上の生徒には徒友に誘われる事が多い。

しかし、この二人は珍しく先輩から後輩に徒友を言い渡した珍しい徒友だった。

「来ちゃった」

「お邪魔しまーす」

情報科の3年Aランクの霧矢 綾瀬と同じく情報科の2年Bランクの立花 ミチルの二人が、それぞれの挨拶を終えてレイン達の部屋に入ってくる。

「…なんで貴女達までここに？」

部屋の主の片割れであるレインは、心底呆れ返ったような視線を二人に向けた。

正直な話、アリア、白雪と居候（しかも女性）が二人いるのにこれ以上自分達の部屋が埋まる（しかも女性で）のは人徳的にも物量的にも困る。

それはキンジも同じ事だ。もつとも、彼の場合はヒステリアモードという持病（？）のためなのだが。

「決まってるじゃない。魔剣の調査。あなたが引き受けたんじゃない

い

「…それはそうですが…わざわざ部屋に来る必要は無いのでは？」

「甘いね〜レイレイ！ 標的を狙って何かしてくるなら、標的の近くにいたのが一番情報拾いやすいじゃん！」

「立花さん…そういうものなの…？」

「ミチルでいいつつ〜の〜」

「はあ…了解」

二重の意味で了解したレインはドアを全開にして、中に入るよう促す。

トラップの位置等を教えると、二人は器用にトラップを乗り越え、リビングにたどり着いた。さすがは情報科で、一度教えた『情報』はそうそう忘れないらしい。

ジト目で見てくるキンジに片腕をあげて謝罪の意を示し、レインはおもむろにソファに腰かけた。

「はあ…どうするんです？」

「何が？」

「そりゃあ、寝床とか、シャワーの時間とかですよ」

「わお レイレイえっちいね」

アリアと白雪が赤面しているのを無視し、レインは片手で形の良い唇を押さえるミチルに、嘆息混じりに注意を促す。

「そんな場合じゃないよ、ミチル。実際問題、布団も足りてない」  
そう、このレイン達の住むこの探偵科の寮の一室、四人で住む事を想定して作られている（というか四人部屋なんだが）ので、六人など部屋に入らない。

念のため用意してある布団も一枚だけだ。

よもやまたしても自分達は追い出されるのだろうか？ という懸念が一瞬頭を過るが、そうでもないらしい。ミチルが不敵な笑みを浮かべているのだ。多少不安を煽られるが、何かいい案があるに違いない、とレインは彼女の言葉を待つ事にした。  
期待に応えるかのように、ミチルが口を開く。

「大丈夫だよ」

私と綾先輩は一緒に寝るから」

.....

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?」

全員が全員、他所様の迷惑も鑑みず、絶叫。

アリアと白雪は、何故かキンジをチラ見して顔を赤く染めている。

「? なんで叫ぶの?」

本当に何故彼らが叫んでいるのか分からない、といった様子でミチルがレイン達に視線を送る中、唯一彼女のストッパーになり得そうな女性（しかもこの中で最年長）、綾瀬が彼女の肩に手をおいた。ミチルの暴走を止めてくれる。そんなレイン達の淡い希望は、しかし粉々に打ち砕かれる事となる。

「大丈夫よ、ミチル。この人達はまだ初心つぎなだけ。私達がこういう関係なのが理解出来てないだけなの」

「貴女が黒幕ですか?」

聖母のような笑みをミチルに浮かべている綾瀬に、思わずレインが全力で突っ込んだ。

「いいじゃない。誰に迷惑がかかる訳でもなし」

「その桃色の空気の中生活する俺達の事を考えて下さい!」

「そうよ! そそそ、それに女子同士だからって、そんな事...」

アリアがレインに協力するように彼女らに突っ込みを加える。彼女も徒姉妹を持つ身らしいので、その徒姉妹と自分の関係が根底から覆される事を恐れたのだろう。

しかし、その言葉は更なる反撃の火種となった。

「あれえ、アリア。そんな事ってどんな事?」

「~~~~!」

アリアが顔を真っ赤にして二人から目を背ける。

そこで終始無言を貫いていたキンジを視界に入れたアリアは、更に



顔を赤くし、キンジに今日二度目のドロップキック。キンジは気絶し、そのままアリアは白雪との大怪獣戦に発展していった。

次々と仲間が倒れて（？）いくなか、レインは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、銃弾と斬撃が飛び交う中未だに桃色の空気を放つ二人に目を向けた。

「貴女達はとりあえず自室から布団を持ってきて下さい」

「え〜。レイレイのいけずう」

「リアル電気イスを食らってみたいのかな？」

「ごめんなさい、今すぐ行きます！」

少し白けた視線で言うと、ミチルはダラダラ冷や汗をかきながらダツシユで部屋を出ていった。

戻ってきたミチルが布団をベッドごと持ってきたのを見て、彼女の腕力も一般的なそれを遙かに越えている事を知ったのは余談だ。

「はあ…なんだか疲れたな」

「そうだね…」

キンジの呟きのような小言に、レインも賛同する。

あの後、美少女四人が一堂に会しているとあつて色々大変だったのだ。

白雪が占いなど始めるので、占い等に敏感な女子達は物凄い盛り上がりを見せた。

自分達が幼少期、ロボットの合体などでテンションを異常に上げていた時、周りの女子は丁度こんな気持ちになっていたであろうと考えると、やるせない気分になる。

しかも、彼女らは先述した通り美少女なのだ。

ちびっこくてピンクのツインテールで赤紫の瞳、可愛い系の美少女アリア。

黒いロングの髪の大和撫子で性格もよく、家事もできるおっとり系美少女白雪。

快晴のような爽やかな空色の、天然でウェーブのかかった髪。白磁

のように白い肌はまさに白魚のようで、しかも目が大きな童顔。頼れるお姉さん、とまではいかないがちょっと小さなお姉ちゃんといった感じの守ってあげたくなる系美少女、霧矢 綾瀬。

薄く短い紫の髪を、自身の髪より濃い紫の、花の形の髪止めでとめていて、常に笑顔を絶やさない、イタズラ好きな美少女立花 ミチル。

もうこれでギャルゲーが出せるのではないかというラインナップにヒステリアモード持ちのキンジだけでなく、レインも結構疲れていた。もちろん、精神的に。

「さあ！ 枕投げだー！」 『おおー！』

すっかり意気投合したらしい彼女らは、枕投げを始めた。

迷惑極まりないな、とレインは黙って目を閉じていたのだが、誰かの枕が彼の顔を捉えた事によって、彼も枕投げに参加する事となった。

四段ベッドの中には、ヒスらないよう（『ヒステリアモードにならないよう』の略。また、『ヒステリアモードになる』を『ヒスる』と略したりする）に布団に潜るキンジのみとなった。

「はあ…眠い」

翌日、キンジの目の下に隈ができる事となった。

第28弾 百合は花の名前です（後書き）

そろそろ静奈とも絡ませたいです…

第29弾 レインとキンジのドタバタ劇 パート2 (前書き)

このシリーズ第2弾！

## 第29弾 レインとキンジのドタバタ劇 パート2

第29弾 レインとキンジのドタバタ劇 パート2

翌日：白雪の強い要望により、キンジが白雪の、アリアがレインの護衛をする事となった。ちなみに、ミチルと綾瀬は別口で探りを入れている。

また、キンジは白雪が出席するアドシアードの準備委員会に同席するらしい。ゆえに、レインは今心底不機嫌そうなアリアの横を歩く事となっていた。

「ねえ…」

「なによ」

「機嫌なおしてよ…キンジが白雪のところに行ってて寂しいのは分かるけどさあ」

レインの何気無い言葉に、アリアは顔をぶあぁ、と赤くしてレインの言葉を否定する。

「な、な、な、何言ってるのよ！ キンジがいないからって、寂しくなんてないわよ！ 大体、あんたがいるじゃない！」

「お。嬉しい事言ってくれるね」

そっつい、アリアの頭を撫でると…

「か、風穴ー！ー！」

照れたアリアが、両手にガバメントを抜き、乱射してきた。

「おわっ！ 何するのさ!？」

「うるさいうるさいうるさい！ 私を子供みたいに扱う奴には、風穴祭りよ！」

「俺、一応護衛対象なんだけど！」

「あんたがこれくらいで死ぬ訳ないでしょ！」

「お誉めに預かり光栄ですねぇ！」

アリアの弾丸はなんと対超能力者用の銀弾で、超能力を受け付けな  
いらしい。というか、銀を磁力で防ぐのは無理だ。そこで…  
「ちっ！」

悪態を吐きつつ、手に電磁力を発生させ、近くの鉄製の看板を盾に  
する（店長さんには後で謝ろう）。それも、薄い一枚ではなく何枚  
も重ねたものだ。銃弾も通さない。

やがて、アリアの息切れと共に銃弾の雨がやんだ。

「…せっかく買ってきたのに」

「じ、自業自得よ！ あんたが私を侮辱するからいけないんだわ  
「侮辱って…」

大げさに言い過ぎだろう、と思ったが、彼女のジト目を見て止めて  
おいた。ただでさえ銃弾を無駄にしているのにこれ以上銃撃戦はこ  
勘弁だ 接近戦もお断りだが。

「何よ」

「いや、キンジ達はどうしてるかな、ってね」

特に他意は無かったのだが、アリアは少し不機嫌そうに顔を背けた。

「別に。とても楽しんでるんじゃない」

「ふーん…そんなもんか」

「そんなもんよ」

ふてくされたようなアリアを見て苦笑しつつ、レインは空を見上げ  
た。買い物をしている内にいつの間にか夜になっていた。

「…ただいまー」

レインとアリアが自室（アリアはただの居候だが）に帰ってきて、

同時にそう言った瞬間、

ドタンバタン！

といかにも怪しい物音が聞こえてきた。強盗か？ と一瞬身体から  
微弱な雷を放ったレインであったが、それもすぐに勘違いだと分か  
り、終息していった。理由は、物音の源がバスルームであると判断  
したからだ。バスルームに強盗にくるアホはいるまい。魔剣である

可能性もあつたのだが、わざわざ人数的にも土地勘的にも負けている場所にわざわざ入り込む訳がない。実際、アリアも手榴弾等のトランプは牽制程度の意味合いで設置していたに過ぎない。

さて、キンジは次は何をやらかしたのかな？ といった期待と好奇心の入り雑じつた視線をバスルームに向けつつ、その場所へ向かう一歩を踏み出した 瞬間。

「キンちゃん、やめて！」

「大人しくしろ！」

…とんでもなく。何か、とんでもなく聞いてはいけない言葉が聞こえてきた気がする。

聞き間違いかな？ などという淡い希望は、隣で顔を真っ赤にしているアリアが粉々に打ち砕いていた。

「アリア：俺は白雪の…そういう姿は見たくない。白雪もそうだろうし…何よりキンジのためだ、行ってきてくれ」

アリアと正反対に顔を真っ青にしたレインの言葉を、アリアが聞いていたのかは定かではない。ともかく、アリアは躊躇なくバスルームに飛び込んで行った。

しばらく銃声とキンジの断末魔が聞こえない事を祈りつつ、聞き耳を立ててみる。

しばらく音声のみで何が起こっているかご想像下さい

「待て、アリア！ 誤解だ！」

「うるさい！ このバカキンジiiiiiiii！」

バキュン！

「うおっ！」

「強狼魔！ 死ね！」

バキュンバキュン！

「待て、話せば分かる！」

「あんたって奴は…本当に、ケダモノ！」

ガシャアアアン！ ゴロン！

「あ！ レイン！ 助けてく…何故防弾下駄箱に隠れる！？」

「俺はまだ死にたくないよ！」

「俺もだよ！」

「うるさい！ あたしに強姦した次は白雪！？ このド変態！」

「違うの、アリア！ 私達は同意の上だったの！」

「ど、同っ…！ だ、だとしても、依頼人とそんな関係になるなんて、武偵失格よ！」

ズダン！

「痛あ！」

「あんたは大人しく寝てなさい！ キンジ！ もう逃げられないわよ！」

「ちよ、待て！ ここのガラスは強化ガラスじゃな」

「問答無用！ その海でたっぷり頭を冷やしてきなさい！」

バリバリバリバリイン！

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアア…」

ザパン…

大変見苦しい文章を読んで下さってありがとうございます。次からは普通の文章です

東京湾にキンジを沈めたアリアは、息を荒げて肩を上下させていた。

「はあ、はあ、はあ…バカキンジめ…」

アリアはその赤紫の瞳を怒りに染めて、ギロ！ と隠れていたレインを見る。彼女としては睨み付けた覚えはないのだが、視線を向けられたレインはあまりの怖さに敬礼。その歯がガチガチと音を立てているのは…聞き違いだろう。多分。

「レイン。夕食にするわよ」

「サー！ イエッサー！」

「サーじゃないわよ！」

サーでは不満らしいアリアは、頬を膨らませていた。その可愛らしい動作とは裏腹に、その雰囲気はどこか苛立ちを孕んでいるようだ



った。

だが、そんなアリアの気迫にも物怖じしない者が、一人いた。

「！」

アリアは咄嗟に身を翻し、その斬撃を避けた。刀の延長線上にあった窓ガラスの生き残りが、真つ二つになり落下、ガシャンガシャンと音を立てて崩れる。

家の窓ガラス、全滅だな…などどうでもいい事を考えながら、レインは防弾下駄箱から出てきた事を今更ながら後悔した。キンジがアリアに制裁を加えられたからと言って、安全になるなど誰かが言ったのか？ 答えが返ってくるはずもなく、レインは深々と溜め息をついた。

「キンちゃんを…よくも！ この毒婦！ 泥棒猫！ 私とキンちゃんの仲を引き裂こうとしても、そうわいかないもん！」

先ほどの剣撃の主…白雪が、アリアを鬼神のごとき気迫で睨み付けている。

というか、魔剣は剣の達人で超能力者らしいが、この武装巫女様に襲撃を仕掛けて勝てると思っっているのだろうか？ 白雪もSSR、すなわち超能力者なのだ。その上、今みてる通り剣技も達人並みだ。というレインの疑問は、白雪の超能力の精度次第、という事でとりあえず終息を迎えた。

「レイン！ 手伝いなさい！」

「成瀬君、一緒にキンちゃんの仇を！」

…二人の鬼神に助けを求められた憐れなレインは、おもむろにケータイを耳に当てた。

「…綾瀬さん、ミチル、早く帰ってきて」

第29弾 レインとキンジのドタバタ劇 パート2（後書き）

原作だとキンジも同じような目（両方から助けを求められる）にあ  
ってたんですが、この小説だと描写して無かったかもです。

### 第30弾 ハーレム×決裂（前書き）

ついに30話いきました！

これも普段からこのような駄文を読んで下さる皆様のお陰です！

ありがとうございますm（――）m

## 第30弾 ハーレム×決裂

### 第30弾 ハーレム×決裂

武偵高、強襲科の体育館。

そこで、レイン達は所謂バンドの練習をしていた。

ギターをかき鳴らすのは中央の不知火、右手のキンジ。ベースを弾く、左手のレイン。不知火の後ろでは、武藤がノリノリでドラムを叩いていた。

珠のような汗が体育館の窓から射し込む光に反射して、宝石のように光り、飛び散る。

このバンド、即席なのでレベルは最高とまでは言えないが、アマチュアとしては高レベルと言っているいい演奏をしていた。

ボーカル&ギターの不知火は歌唱力抜群、キンジはギターを、レインはベースを少しかじっていて、武藤は女子にいいところを見せようと努力を欠かさない。

その上に、ビジュアルがいい。言わずと知れた不知火はもちろんの事、転校以来不知火と同レベルの美少年（不知火は美青年だが）とされていたクォーターの帰国子女、レイン。ネクラや昼行灯などと言われてはいるものの、時に女子を異常にときめかせる発言・行動をし、容姿もそれなりに良いキンジ、ガサツだが人当たりが良く、ワイルドな顔立ちの好青年、武藤。

アルカタのチアの練習中の女子以外の大半が、陰から見物している（キンジ、武藤は気づいていないようだ）程だ。とりあえず練習を終えた彼らは、思い思いに休憩に入る。

スポーツドリンクとタオルを片手に持ったレインは、キンジの体調がよろしく無いように映り、心配そうに声をかけた。

「キンジ、大丈夫？ 病み上がりなんだから無理しない方がいいよ」

キンジはアリアに上半身裸の状態で夜の東京湾にぶち落とされて、風邪をひいた。お陰で翌日、キンジは38度前後の熱を出していたらしく、『特濃葛根湯』なる代物でようやく治したらしい。

「ああ、もう大丈夫だ。少し屋上で日に当たってくる」  
そう言ったキンジは、レイン達の返事を待たずに階段を上がっていた。

「遠山君、大丈夫かな？」

「分からないけど…良くきく薬を飲んだらしいから大丈夫じゃないかな？」

話しかけてきた不知火に応えつつ、ベースの調整をする。その手が止まった。目の前に、ちっこい足が見えたのだ。

「レイン！ キンジはどこ？ あたし、用事があるんだけど！」

その足から段々と視線を上に向けていくと…アル「カタのチアの格好をした、アリアの姿があった。まあ、それ以前にキンキン響くアニメ声（アニメキャラのような声の略）で誰かは分かっていたが。

「キンジなら屋上に行ったっばいけど…」

「そう。ありがと。あ、あと」

普段ならそこで振り返りもせず目的地向かうはずのアリアが、何故か振り返った。レインが首を傾げる中、アリアはほんのり口元を緩めた。

「あんた達の演奏、凄く良いわ。その調子で練習しなさい」

滅多に聞けないアリアの誉め言葉に、レインはキンジに言ってやれよ、と思いつつ…

「…了解っ」

軽く、頷いた。

「レイレイ〜！」

「差し入れ持ってきたよ〜」

情報科の百合…じゃなくて、徒友である二人が、体育館を走りながら声を上げる。

「ミチル、綾瀬さん。今日は静奈も一緒なの？」

その二人の後ろで腕を組んでいるのは、先日の合宿の時に世話になった静奈だ。どこか慥然としている気がする彼女に声をかけると、彼女は不機嫌そうに、そっぽを向きながら応えた。

「私がいると不満か…？」

「いや、そんな事全然ないよ。静奈も差し入れ持ってきてくれたの？」

「あ、ああ…ほら」

言いながら静奈が差し出したのは、可愛らしい小さなお弁当箱だった。

「わあ、ありがとう！ お腹空いてるんだ、食べてもいいかな？」

「も、もちろんだ。…そのために作ったのだから」

許可を貰い、弁当箱を開ける。途端に、香ばしい香りが漂ってきて、それが食欲をそそらせる。

入っていたハンバーグをつまみ、一口食べようとするのだが…

「…静奈、あんまり見られると…」

「あ、ああ！ 済まない、少し他所を向いていよう！」

食べづらい事を理解してくれた静奈は、明後日の方向（？）に向きなおした。それでもレインの方をチラチラ見ているが。

もう気にしても仕方あるまい、とレインはハンバーグを一口食べた。モグモグ……………

「……………ど、どうなんだ!？」

レインが何も言葉を発しないので、もしや口に合わなかったのかと心配した静奈の発言に、レインは弁当と静奈を交互に見ながら、答えた。

「…滅茶苦茶うまい」

「！ そ、そうか！」

後ろでは不知火が微笑み、ミチルと綾瀬が静奈を、武藤がレインをジト目で見ているのだが、静奈は嬉しさで気がつかない。

「もつと食べる！ まだまだおかわりはたくさんあるぞ！」

「弁当におかわりつてあるの？」

「五月蠅い！ 黙って食え！」

…… イライライライライライラ。

そんな擬音が聞こえてきそうな空気に最初に気づいたのは、武藤だった。いや、気づいたのは不知火も一緒だったが、反応したのが武藤だったのだ。

思わず、本当に思わず振り返ると、そこには

「へへ、レイレイ、静ちゃんの弁当ばかり食べるんだあ」

「仲が良いのねえ、うふふふふ」

満面の笑みを浮かべているのに、全然笑っているように感じない、ミチルと綾瀬の姿があった。

振り返らなければ良かったと後悔しながら、武藤はギギギ、ときこちなく首をレイン達の方へ向けるのだった…

「ああ…お腹いっぱいだよ…」

倒れ伏すレインが武藤に弄られているのを横目で見ながら、三人は少しやり過ぎたか、と密かに反省していた。

あの後、痺れを切らしたミチルが、

「はい！ 蜂蜜レモン！」とスポーツ選手の大好物(?)をデザートという名目で大きめのタッパー5個分程食べさせ、それならと綾瀬も弁当を携え便乗し…大食いのレインも、ダウンしてしまったのだ。

苦笑いしながら天井を見上げていると…

ババババババン！

乾いた破裂音。

それが発砲音だと気づくのに、この面子なら一秒とかからない。

それが屋上から発せられていると気づくのに、更に一秒をかけた彼らは、逸早く駆け出したレインの背を見送る形となった。

雷神化したレインは、階段をかけ上がりずジャンプで飛び越えた。

普段のキンジとアリアなら、発砲など日常茶飯事と言っても過言で

はないし、魔剣は超偵ばかりを狙う誘拐犯だ。危険は薄いだろう。まさかとは思うが、万が一にも魔剣と遭遇したとも考えられる。自然と、レインの拳に力が入った。

「アリア？」

そこから少ししたところで、アリアが向かいから走ってきた。見た限りでは、外傷もない。キンジがないのが気にはなったが、大丈夫だろうと安堵する。

アリアは顔を俯かせたまま、レインの横を通り過ぎた。

「！？ アリ…」

ひき止めようとアリアの肩を掴もうとするが…気づいた。

アリアの目が、赤く腫れている。

「…っ」

レインは、アリアの肩を 掴め無かった。

そのままアリアは、窓から屋根づたいに渡っていき、姿を消した。

「キンジ…お前、何をしてるんだ」

レインは、恐らくアリアが泣いていた原因を作った人物…キンジの下へ急いだ。



第30弾 ハーレム×決裂（後書き）

感想お待ちしています。

**第31弾 それぞれの護衛（前書き）**

宿題をほったらかして小説を書いている今日この頃です。あと2日です。あつちよつと無理臭いです。

### 第31弾 それぞれの護衛

第31弾 それぞれの護衛

ギィ…

重々しいドアの開く音と共に、眩い光がレインの瞳に降り注ぎ、屋上に出た事を知らせてくれる。その光に目を細めながらも、レインは屋上の端に寄りかかっている人物、キンジの下へ歩み寄った。

「キンジ、お前、アリアと喧嘩したの？」

「喧嘩なんてものじゃない。アリアが勝手に怒っただけだ」

そう言うキンジの表情は、表面的には憮然としているが、内面では後悔などの弱々しい感情が入り雑じっている。

こりゃあ重症だ、とレインは溜め息をつき、とりあえず状況を掴む事にする。

「どうして喧嘩なんてしたの？」

「…あいつが真剣白刃取りの練習しろって言ってただろ？ でも、あれは達人技だ。一朝一夕でできる技じゃない。とてもじゃないけど、俺じゃできなかつたんだ。だから、俺はもう止めようって言うただけだ」

レインは腕組みをし、顎に手を当てるといってテンプレートな仕事をしながら、思考の海に身を投じる。成る程、それはキンジが正論だ。ただし、正論だからと言って正しいとは限らない。矛盾しているようだ、実際に正論ばかりを振り翳す行為はあまりよろしいと思う者はいないだろう。

アリアの瞳に涙が溜まっていたのがいい例だ。

それでも、今のところはキンジが正しいとも思える。

レインは短く頷き、大人しく次の言葉を待った。

「そしたら、魔剣は剣の達人で、鋼さえも切り裂くから白刃取りは

必須だつて言つたんだ。…魔剣なんて、都市伝説みたいなものだ。居るわけじゃないじゃないか…」

……成る程。

レインはキンジの言葉から、ある程度その後の展開を予測した。

アリアが魔剣の話をして、キンジがそれを否定。アリアがどうして信じてくれないのか、自分の勘では魔剣はいるのに、と訴えるが、キンジはそれを更に否定　恐らくは、キツイ言葉で。

「…らしくないよ、キンジ。どうしてアリアを傷つけるような事を」

「…その前に、アリアが『白雪と結婚しちゃえば!?!』なんて言つてきて、そのまま頭に血がのぼつてな…情けねえ」

「…どういう事?」

レインはキンジがその程度で頭に血をのぼらせる事、何よりアリアのその発言に違和感を覚え、更にキンジに経緯を聞いて　愕然とした。

白雪が、特濃葛根湯を用意してくれたお陰で風邪が治った　だと? 特濃葛根湯。薬の効きにくいキンジに目覚ましい効果を発揮するという薬だ。

アメ横にしか売ってないらしいそれは、断じて白雪が買ってきたものではない。何故なら。

レインは先日、アリアの付き添いでアメ横に行っていたのだから。その際、アリアが悲しげな表情で言った一言は未だに鮮明に思いだせる。

『キンジに悪い事しちゃったな…早く治して上げないと』

普段からキンジに厳しく当たっていたアリアは、やはりキンジに好意を寄せている、という事を実感した瞬間だった。

それを、なんて勘違いをしているのだ、とレインは目の前に座る大馬鹿を睨み付ける。

「…な、なんだよレイン。顔が怖いぞ」

とはいえ、アリアがこんな告げ口のような事を好むはずがない。その上、直接ものが言えない、情けない奴だと思われる、と感じるか

もしれない。

結局、その事については当人らに一任し、何も言わず屋上を後にした。

「…くそ」

部屋に戻ると…

「…なんでお前までいるのかな？ 静奈」

「わ、悪いか？」

「いや、そうじゃないけどさ…」

人の家に押し掛けておいて、その態度はどうなのだろうか？ と思っただが、誰かさんのお陰でこういう事には慣れてしまい、さして問題にするような事ではない。

「ちゃんと生活必需品は持ってきた？」

「ああ。歯ブラシ・着替えその他」

指を折りながら持ち物を確認する静奈を横目に見つつ、レインはこつそり溜め息をついた。女子寮でもないのに自分の部屋から女の匂いがするのは、なんだか自分が女だったらしになったような気がしてあまりいい気分ではない。まあ、女子が住んでいるのだからそれも当然の話なのだが。

「はあ…俺、シャワー浴びてくるから」

レインは彼女らが入ってこないよう予め断りを入れて、バスルームに行こうとする。そこに、

「じゃあ、私が背中流してあげるよ〜レイレイ！」

そう言いながら、ミチルが抱きついてきた。

一瞬、女らしい匂いにクラツときたが、すぐさまミチルの顔を押しさえつけ離そうとする。

「けっ…こ…う…で…す！」

「むぎい〜〜！」

なにやらよく分からない叫びを上げながら、ミチルは更にレインに抱きつく力を強める。

メキメキメキ！

「ぐっ…ほお！　ぎ、ギブギブ！　分かった、分かったから！」  
骨が軋む音が聞こえてきたところで、タップ。パツとミチルが手を離し、レインは地面にひっくり返った。

「本当！？　よっしゃあゝ！」

盛大にガッツポーズを取り、ミチルはバスルームに向かうレインの後を追った。

「…って、待てー！ー！」

…ところで、今まで傍観していた二人に呼び止められた。

「？　どうしたの？　静ちゃん、綾先輩？」

「俺、早くシャワー浴びたいんだけど…」

「おおお、男の背中を流すなんてお前には早い。私が代わってやる…私には超能力もあるしな」

「静ちゃん？　あなたも同い年でしょ？　ここはやっぱり、お姉ちゃんである私が…」

顔を真っ赤にさせながら、二人もレインの背中を流そうとアピールしてくる。そこにミチルが

「私が許可もらったんだから私なの〜！」

と割って入ったため、大乱戦状態だ。

レインはといえば、

「（なんでみんな俺の背中を流したがるんだろう…？）」

と疑問を覚えていた

キンジの鈍感さに呆れていたのに。

「へきしっ」

くしゃみをしたのは、パジャマ姿で外を彷徨くという珍しい体験をしているレインだった。

結局、あの後三人の戦いを他所に、レインは一人でさっさとシャワーを浴びてきた。

それを見た三人に銃を乱射されたため、レインは部屋から転がるように逃げてきた…という訳だ。

「うっ、寒っ」

髪がまだしつとりと濡れていて、夜風がレインの体温を奪っていく。あ、これは本当に洒落にならないな、と感じたときには時既に遅し、備え付けのトラップを作動させた彼女らの要塞（元自室）は侵入困難となっていた。というか、キンジと白雪は大丈夫なのだろうか？

「ああ…俺、死ぬのかな…」

誰かに泊めて貰えばいいのだろうが、生憎ここは探偵科の男子寮。いきなり押し掛けて泊めて貰えるような親しい人間はまだいない。武藤のいる車輛科、不知火のいる強襲科は随分遠い。

仕方なく、とりあえず暖まるうと自販機の前まで来たのだが…

「金が…ない」

そろそろ学習しても良さそうなものだが…いや、唐突に追い出されるのだから学習も何もあつたものではないだろう。

そろそろ本格的にまずいな、と思い始めた時　女神は、舞い降りた。

「どっかなさつたんですか」

機械のように、平淡で抑揚のない声。相手は分かっていたが、振り返る。そこには、

「…レキ」

そう、ロボット・レキの異名をとるレキの姿があつた。

「また部屋を追い出されたのですか」

別に前回は追い出された訳ではない、という突っ込みをする体力さえもつたいなかったため、レインはあえて突っ込まずに頷いた。レキよりも口数が少なくなっている事に少し心が折れそうになる。それに耐えていると、レキが　とんでもない事を言い出した。

「そうですか…なら、私の部屋に泊まっていけますか？」

………

「え？」

第31弾 それぞれの護衛（後書き）

感想お待ちしています



第32弾 水月（前書き）

感想・アドバイス・駄目だしその他お待ちしてます）（言い方を変えてみました）

### 第32弾 水月

第32弾 水月

レインは今、正座していた。いつものように強制ではなく、自分から。

理由は、ここがレキ 女の娘の部屋だからだ。

「（どうしよう…何を話したらいいか全然分かんない…）」

レキがその機械のように希薄な感情の瞳を、真っ直ぐに向けてくるためなお居心地が悪い。

「あの…レキ？」

「なんででしょう」

「…なんで、こんなに殺風景なのかな？」

改めてレインが辺りを見渡すと、目に入るのは剥き出しの壁、何も敷かれていない床。家具など何も無い。かろうじて隣の部屋に銃の整備用具が揃っているだけだ。

「必要ないからです」

あっさりと自分が生活必需品だと思っていたものを必要ないと言われ、レインは苦々しい笑いを溢す。レキは本当にスティックに、必要最低限のものだけで生活しているのだ。

自分がどれだけ裕福な生活をしてきたか実感したところで、レキにも少しは贅沢…という程のものではないが、美味しいものを食べてもらいたくなる。

「レキ…冷蔵庫の中身貰っていいかな？」

数十分後…レキとレインの前には、様々な、しかも実に美味しそうな料理が並んでいた。幸いにも、レキの冷蔵庫の中身はちゃんと色々なものがあった。隣にカロリーメイトの山があったのは見なかつ

た事にして、レインはその食材を頂戴し、目の前にある料理を作った。

料理が出来るのは行く先々で自炊していたため、洋風和風、中華料理となんでもありだ。

一応、和風料理で統一したのだが、レキの表情に変化はない。気に召さなかったのだろうか？ と少し心配しつつ、レキが口に運ぶのを待つ。

「……………」  
無言でレキは口に運び…口を開いた。

「とても…美味しいです」

「そうか…良かった」

ニコツ、と満面の笑みを返すと、レキは少し顔を俯かせた。…？  
ほんのり頬が紅潮しているようだ。もちろん、料理にアルコールは入ってはいない。

「（どうしたんだろう？）」  
とレインが首を傾げていると…

「ただいま…って、なんであなたがここにいるのよ」

玄関からの、アニメ声。

何故かアリアが、レキの部屋に帰ってきたのだった。

「部屋から逃げてきたんだが…この有り様だ」

「ま、それは良いわ。むしろ護衛しやすいわよ」

アリアはどうやらキンジを避けてここに転がりこんだようで、カロリーメイトの山を見て桃まんの買い出しに行っていたらしい。

冷蔵庫の隣に、カロリーメイトと桃まんの山。シユール極まりない光景に愕然とする中、アリアは桃まんを頬張りつつ今後の方針を伝える。

「任期はアドシールドが終わるまでだから、それまでに魔剣を誘き出すわよ」

「…俺の護衛なんじゃないの？」

「あんたがその程度の奴に負ける訳ないじゃない」

一見、自分の仕事を放棄したかのような言い草だが、アリアはレインの事を信頼しているからこそ、そう言ったのだ。それはレインも弁えていたため、何か言う事も無かった。

「まあ、白雪が襲われる前に相手を叩けるのは良い事だし、アリアとしても早くかなえさんを助けたいだろうからね」

アリアの作戦の意図を補完するようなレインの言葉に、アリアは窓から見える探偵料の寮、その一室に視線を送った。

「あいつも、あんたくらいあたしの意図を理解してくれれば…」

「…キンジだつて、やるときはやるさ」

キンジのフォローも忘れず、レインは食器を片付ける。

「キンジは…なんで本気を出さないのかな…?」

アリアの、キンジに本気を出して欲しいといったニュアンスのセリフに、レインは食器を洗いながら　レキもやるうとしたが、無理矢理座らせた　アリアの問いに答える。

「キンジの家　遠山家の人間は、何かのスイッチが入ると人が代わったように強くなるんだ。恐らく、キンジはまだその切り替えが上手く出来ないんだよ」

どうやってら切り替わるのかは知らないけどね、と付け加えて、レインは食器を洗い終え、レキの隣に座った。

「そう…そうね。キンジはまだ未熟者。私もまだ未熟者。なら、尚更頑張つて貰わないとね」

そう言ったアリアの瞳は、斜陽で緋色に染まっていた。血のような、深い緋色に　。

『』

「ん…ケータイか」

着信音から、自分のケータイが鳴っている事に気づいたレインは、特殊仕様のカバーからケータイを取り出す。ちなみに着信音はアドシールド閉会式で演奏する予定の曲だ。普段から、少しでも曲を聞

いて慣れておきたいというプロ意識からなるものだ。

ディスプレイに表示される相手の名前（自身のケータイに登録されているなら、だが）を見て、レインは知らず知らず顔をしかめた。

「誰からのの？」

「悪い、少し席を外す」

アリアの問いには答えず、レインはパジャマ姿のまま、レキの部屋から出た。

部屋の外に出て、雷神化し屋上へジャンプする。

誰もいない事を確認し、一端ケータイをカバーに戻し、彼の力で強力な磁場を形成する。もちろん、下の階には被害を及ぼさない程度で。

磁場を解除し、再びケータイを取り出し、着信履歴から電話をかける。

これが、普段『あちら』から電話がかかってくる度にする手順だった。

『もしもし。遅かったわね？』

「…申し訳ありません、姉上」

『いいのよ、気にしないで。貴方と私は兄弟なんだから』

腹違いの、ね。

そう吐き捨てるように言いたい衝動を押さえ、レインは姉に次の言葉を促す。

「それで…御用件は？」

一瞬、電話の向こうで沈黙した姉は

『…レイン。貴方、今すぐにこれるかしら？』

質問という形の帰省命令を出した。

「何故です？ 俺は『夜雲』からは疎ましい存在なのでは？」

『…否定はしないわ。でも、現在、貴方が『夜雲』で最強の術者なのは事実よ』

「なにを今更…俺は今、成瀬 レインハートです。夜雲の名はとうに捨てました」

レインの言葉に、再びあちらでは沈黙が流れる。

『 ハレヤ。 』

「ッ！」

その名が出た瞬間、ケータイがミシミシと音を上げ、レインは必死に雷神化を押さえる。

そんな彼に追撃を掛けるように、姉は続ける。

『 あの人のいる組織 イ・ウーが、近々大きな動きをするわ

そして、ハレヤも動く。必ず、ね 』

「確証は…？」

『 貴方の師匠からよ 』

その言葉に嘘があるかまでは分からないが、彼の師匠の言葉なら間違いは無い。これは絶対だ。

『 …だから、貴方に渡すのよ 』

続けられたセリフには 驚愕するしか無かった。

渡す 何を？ この話の流れから来て、答えは一つしかない。夜

雲家に伝える名剣が一、

『 『水月』を』

### 第32弾 水月（後書き）

なんかオリジナルストーリーぽいですが、ちゃんとレインは魔剣戦に参加させるつもりですので心配は御無用です。

第33弾 レインハートの過去（前書き）

今回は少し長いかもです。



### 第33弾 レインハートの過去

#### 第33弾 レインハートの過去

「はあ……」

アンニユイな溜め息をついたレインは、目の前に聳える大きな和風の建物を忌々し気に見つめた。

「なんで俺が……」

チャイムではなく、呼び鈴を鳴らしてから30秒。あと3秒以内に来なかったら帰ろう、そう心の中で決め、声に出さずにカウントダウンを始める。

3…

ドタドタ。

2…

ドタドタドタ。

1…

「ごめんね……待たせて」

0…どうやら彼女は間に合ったらしい。

「いえ…広い家なのだから仕方ない事でしょう、氷華姉上」

レインは出てきた女性　ちなみに、先日の電話の女性と同一人物

氷華に作り笑いを向けた。

相手もにこり、と笑いを返す。

「上がって。お父様がお待ちよ」

「……………はい、氷華姉上」

こうして、レインは何年ぶりにかの夜雲家に足を踏み入れる事になった。

長く、重々しい廊下。

その端の何やら無駄に高級そうな棚の上には、鬱陶しいくらい眩しい、金色に光る何かの彫像。瘡に障る。

レインが睨み付けるように、埃一つない廊下を眺めていると、女中らしき人物らがこちらを見ながらなにやら小声で話している。不快な事この上ない。

電源装置らしきものが置いてある部屋が見えた。一瞬、この家の電力全部落としてやろうかと考えるも、レインは頭を振り子供じみた考えを振り払う。

しかし、彼は実感していた。

駄目だ。

この家の、人物、風景、内装、状態、空気、空間、何もかも、全てが彼の神経を逆撫でし、今にもこの家とその場にいる人間全てを消し炭にしたいという欲求が彼を支配しようとする。

だが、彼ら（・・・）はそれを望んではない。絶対に。だから誰も殺さないし、殺さないよう武偵にもなった。素晴らしい師匠に、素晴らしい友人達に出会った。

レインは自分がこの世で最も嫌いな空間と言い切れる場所で、怒りに狂いそうになる衝動を押さえ、ただ歩いた。永遠に思える長い廊下を。

長い廊下を歩くと、やがて仰々しい襖が見えてくる。

その奥から感じる、なんて事のない、威圧感。

少しでも自分に威厳を示したいのだろうな。そう考えたレインは、馬鹿馬鹿しいにも程がある、と鼻を鳴らした。

威圧感っていうのは…こっやって出すんだよ！

レインが自身の威圧感。殺気は押さえてある。を放つと、周囲の窓が割れ、威圧感は質量を伴う風となり、氷華、ひいては奥にいるであろう彼の父を萎縮させる。

「ッ！」

「何をしているんですか？ 早く参りましょう、姉上。お父様がお待ちですよ？」

獰猛な笑みを浮かべ、レインがそう促すと氷華は苦々しい表情をし、気を取りなおした。

襖に手がかかる。

断りを入れないのは、彼女が焦っているからだろ。滑稽だな、とレインは心の中で呟き、襖が開くのを待った。

すうー

奥にいたのは、レインの父親、夜雲 龍三。レインからしてみれば、名前負けの情けない親父だった。

「父上様、レインハート、ただいま帰りました」  
嫌みたらしく、レインは慇懃無礼に挨拶する。

頭を下げているため相手の顔は見えない。しかし、苦い視線をこちらに送って来ている事は容易に想像できた。

「…よく来たな、レインハート」

自分の名前がこの家の雰囲気、ひいては龍三が発するのに似合わないものである事で、自分の名前に感謝させられる。

「いきなり呼び出して悪かったな」

「いえ…」

内心、早く本題に入れと苛立ちを覚えながらも、レインは大人しく目の前に座る父親の言葉に生返事を返していった。

「さて、そろそろ世間話も止めにして、本題に入るとするか」

世間話をしていたのはあんただけだろ。

つくづく自分とは話の合わない男だ、と彼と自分との血の繋がりを否定したくなる。だが、これはDNA鑑定の結果であり、覆しようのない事実。今更どうしようとは思わない。

「氷華が既に話しているとは思いが、お前に『水月』を授ける」

水月。

夜雲家の秘宝、『五月』が一。

五月とは、夜雲家の当主、並びに当主に認められた才ある本家の者にのみ与えられる、名剣。

その一角、水月を自分に渡そうとする意図が、なんなのか。レインはそれを確かめるため、ここに来ていた。

「…何故、私に五月の一つを？」

とは言ったものの、大体の検討はついている。

「…お前を、本格的に夜雲の一員にしようと私は考えている」

…そう。この男達は、欲しいのだ。レインが。

理由は単純。

逃げられたからだ。

次期当主、夜雲 晴夜に。

だから、龍三は本妻との子でない自分を夜雲に向かえ、次期当主に仕立て上げようとしているのだ。

そう、自ら捨てたも同然の子供を

レインの母親。彼女の名前は、レインは知らない。

レインが産まれた時、死んだと聞かされた。

当然、レインは父の家である夜雲家に引き取られた。

龍三は息子達を優秀な武偵にしたかったらしく、夜雲家では毎日厳しい戦闘訓練をさせられたが、中々結果には恵まれ無かった。

晴夜、氷華と毎日拳、刀を合わせていたのに、レインだけが、全く伸びなかった。

やがて、彼は家中から『出来損ない』と呼ばれ、擲擄され、卑下され、罵倒された。

父はそんな彼を助けようともせず、ただ放って置いた。

兄は自分を助けようと尽力してくれたが、当時の兄には全く権力が無かった。

学校でも、この頃から微弱に発せられた電撃のせいで避けられ、いじめられていた。

自分はどこにも居場所がない　そう実感し始めた。  
そんな時だった。

成瀬　蒼介と出会ったのは。

彼は、レインの母親の友人で、レインに彼女の面影を見たらしい。  
レインの境遇を聞くと、単身夜雲家に殴り込み（武力行使はしていないが）、レインの親権を譲ってもらった。

元々、自分になんの興味もない父が渋る訳も無かったのだが、それでもレインは、蒼介に憧れた。

その凛々しい姿に、堂々たる風格に。

彼には家族があった。

優しい奥さん、博識な父、可愛い息子、産まれたばかりの娘。

彼らはレインを、なんの躊躇いもなく歓迎してくれた。幼い頃から罵詈雑言をかけられてきたレインには、どうしようもなく温かかった。

蒼介は、武偵だった。

Sランク武偵　それがどれほど凄い事なのか、幼いレインには分からなかったが、彼の技が美しかったのは鮮明に覚えている。

そんな彼に憧れ、武偵になろうとした。

あるとき、レインの電撃を目の当たりにした蒼介は、彼に超偵になる事を薦めた。

レインが蒼介の薦めを蔑ろにするはずもなく、レインは超能力の訓練を始めた。結果として、わずか10歳程度の少年がG13という強力な超能力ちからを手にした。

しかし、それがいけなかった。

レインの努力の成果を知った夜雲家が、レインを返せ、などというふざけた事を言ってきたのだ。

当然蒼介、そして成瀬の人達は拒絶した。

後に聞いた話だが、その時龍三は頭を悩ませていたらしい。どうしたらレインを自分達の下におけるのか　そして、その愚痴を晴夜が聞いていたのも。

ある日、レインは一人で買い物に行っていた。

その日は蒼介の誕生日で、ケーキとプレゼントを買ってきたのだ。

喜んでくれると嬉しいな。

レインは微笑を浮かべながら、帰路についた。

家に帰ると、様子がおかしい事に気づいた。

血の、臭い。

恐る恐る、ドアノブに手をかけ　開いた。

誕生日のケーキがグシャリ、と音を立てて床に落ちる。

目の前には　蒼介。

その濁った瞳が、首だけとなってもこちらを向いていた。

~~~~~!!!!!

頭がおかしくなりそうだった。蒼介が、あんなに強く、優しく、凛々しい蒼介が。

殺された。

妻も、子供達も、祖父も。

皆、屍となっていた。

どうして…!

リビングの、ベランダの前。

そこに、血に染まった刀を持つ、一人の男がいた。

兄、さん…!?

男　晴夜は、レインに歩み寄ってくる。

あんたが…殺したのか!

レインが放った電撃は、彼に傷一つ与えない。

晴夜は、レインの細い手を掴み、耳を顔の近くに寄せた。

帰って来い、夜雲に。

晴夜の言葉には、大きな、どす黒い何かに乗っていた。自分を助けようとしてくれた、兄。その面影はどこにもない。

ふざけるな！ 蒼介さんを…父さんを、返せ！

そう言うと、晴夜の顔は一瞬憤怒に染まり

そうか、残念だ。

その言葉を最後に、レインの意識は途切れた。

その後、レインが目覚めたのは病院のベッドだった。龍三から話を聞くと、晴夜は五月の一つ、『月影』を持ち出し、武偵法9条武偵は任務中であっても、
いかなる理由があろうと人を殺してはならない を侵した。夜雲家には戻って来ず、そのまま勘当された、と。

そんな事はどうだっていい…！

僕は…俺は、必ず奴を 死刑台におくる！

龍三は意外そうな顔で、殺す、ではないのか、と聞いてきた。

滑稽な話だ。武偵法9条のある武偵をやらせるために、レインを育ててきた人間がそれを破るのを促すとは。

俺の父さん（・・・）は、武偵だったんですよ？

もうすぐ11歳とは思えないレインのセリフに、龍三は啞然とすると同時に、自分にも責任がある、と心の中で自分を戒めた。それをレインが知る必要はない。レインは、自分達を恨んで当然なのだから。

後日、退院したレインは、成瀬家の墓の前にいた。

雨が降りしきる。彼の瞳から流れる一滴の雫は、雨粒が、それとも

父さん…！

雷鳴が轟き 彼の身体を貫いた。

彼の身体から、紫電が迸る様は、まさしく『雷神』。
後に世界中の犯罪者を震え上がらせる超偵、『紫電の雷神』が誕生
した瞬間であった。

第33弾 レインハートの過去（後書き）

親と一緒にアニメ緋弾のアリアを見る今日この頃です…（なんて事してんだ）

一話のキンジのセリフ、

「空から女の子が降ってくると思うか？」

父のセリフ。

「ないないWW あり得ないからWW」

おい父。

第34弾 二つの家族（前書き）

十萬文字突破しました！

応援して下さいの皆様のお陰です。ありがとうございます。

もしよろしければ、これからも紫電の雷神をよろしくお願いします。

第34弾 二つの家族

第34弾 二つの家族

「御言葉ですがお父様、私は夜雲家に戻るつもりなど小指の甘皮程度もありません」

そう、レインは頭を下げて言う。その瞳には、明確な拒絶の意思が宿っていた。

率直な物言いに面食らう龍三を見詰めながら、レインは尚続ける。

「確かに『水月』を頂けるのは大変ありがたいですが、それがないとあの男を倒せない、という訳ではありません」

確実性は薄れますがね、と付け加えて、レインは相手の反応を待つ。さあ、ここからどうやって自分をひき止めにかかるか…見物だ、と。

「お前は元々、夜雲の流派の剣を使うではないか。なら、夜雲に戻るのには当然の事ではないか？」

少し焦ったような父親を目にし、レインは心の中で嘲笑した。

何を今更、碌に使えない剣の流派などといった話を持ち出したものだ、と。

「お父様。私はこの『紫電の雷神』と呼ばれるようになってから、いえ、成瀬家に引き取られてからは、一度だって夜雲流を使用した事はありませんよ」

父親の顔がひきつるのもいとわず、レインは次々と正論を並べ、振りかざした。父親の顔が、ひきつったものから怒りへ変わるの目に見えていたが、彼程度の実力では本気のレインには敵わない。さして気にも留めず、レインは止めに釘を差す。

「もう一度言いますが、私は夜雲に戻る気はありません」

「何故だ！ 何故それ程の力がありながら、なんの名誉にもならない成瀬の名を…」

「…あの人は俺の父親です。…それでは不満ですか？」
レインは、ただ蒼介の姓を父の息子として、当たり前前に使っているだけだ。

そして夜雲家に戻るのには、蒼介に対しての裏切りだと考えている。それを察したのかどうかは知らないが　龍三は、憤怒の表情を消し、突然立ち上がった。

レインは面を上げ、その顔に視線を向けた。

その顔は、寂しそうに笑っている、ように見えた。

龍三は奥に飾られていた三本の刀の一本を取り出し、レインに差し出す。言われずとも解る。これが、『水月』である事が。それ程の重圧、存在感があった。

「…持つていきなさい」

そう言った父の声はとても優しくても、それでも、レインは彼が許せなくて。

「…お礼は言いませんよ」

素っ気ない態度で、刀を受け取った。

ズン…

龍三が手を離れた瞬間、重厚感が手に伝わってくる。

鞘を抜くと、そこには日本刀でありながら、全く剣気を感じない刀があった。

夜雲家の五月は、一本を除いて全てが業物とされている。

そして、その業物でない一本こそがこの刀、水月なのだ。

欠陥品、という訳ではない。使いこなせば、五月の中でも最強の刀と言われているが、今まで使いこなせた者がいなかっただけなのだ。それに、この刀はまるでレインが持つ事を前提にしたかのような特殊な作りになっている。

「これが…水月」

ヒュン、と軽く水月を振り、鞘に納める。

まるで長年自分の相棒であったかのようなその刀は、自分の身体の一部と錯覚するくらいだった。

「レイン、一つだけ…頼みがある」

龍三の、どこか優しい声に振り返ると…龍三が、自分に頭を下げていたのだ。

！？

あり得ない事だ。

実子とはいえ、あの夜雲家の当主が、自分でもガキだと思っている少年に、頭を下げるなど。

事の重大さが分かっていたレインは、憎んでいる龍三の話とさえも聞かない訳にはいかなかった。いや、事の重大さなどではない。

ここで話を聞かないのは、人の理に反する。

龍三が口にしたのは、ある程度は予想していたものだった。

「晴夜を…助けてやってくれ」

…分かっている。

龍三だつて人の子だ。息子の命が惜しいのは。分かっている。

「…大丈夫ですよ、お父様。私は今、武偵です」

結果として、レインは自分の意志を建前でくるみ、本音を押し隠す事になった。その事を彼が自覚していたかは 分からない。

その夜、武偵高に帰ってきたレインは、実行委員の皆様にごつてり絞られた。仕事を押し付けられて大変な事。

それに、バンドの仕上げ練習にも参加できなかった。

とりあえず、苦笑いする不知火に教えられ、閉会式で演奏する曲を一応マスターしたレインは、くたくたで寮に帰ってきた。

「…遅いっ！」「」

女子一同に怒られた。

「レイン。私はお前と一緒に花火大会に行きたかったのだぞ」

「なんか夜雲家に行ったらしくけど、どういう関係なの？」

「ていうか、その蔵ついで刀、何？」

質問責めにされるまま、レインはソファに腰かける。

その表情が今までと違い、どこか憑き物が取れたようなものになっているのに気づいた三人は、何も言わない。いや、それはレインの雰囲気だけではないだろう。

「そう慌てなくても大丈夫だよ、みんな。花火はここからだって見える」

そう言ったレインの背景の窓が、ドン！ という景気の良い爆発音と共に花火がうち上がる。

その銀の髪を色とりどりに染める花火、そしてそれを横目で眺めるレインが余りに画になっていたため、言葉が出なかった。

アドシールド当日。

レインは、大量の単3電池が散らばる部屋で、悲しいかなその単3電池をくわえていた。

別に遊んでいる訳ではない。レインは電池からも充電できるのだ。落ちてる単3電池はレインの食い散らかし（？）である。

何故こんな子供のような真似をしているか？ 理由は簡単だ。

「な〜にが電力不足だよ…その辺も計算に入れておけつての」
そう、装備科が簡単なロボットを作ったのだ。

しかしその簡単なロボット、数が多く異常に電力を食う。会場のブレーカーが落ちかねない程に。

なので『紫電の雷神』ことレインが電力を供給してやろうという話だ。

そのための充電（完全に気休めだが）をしていたところに…ブー、ブー。

マナーモードのケータイが小刻みに震える。

見れば、綾瀬からの電話だった。彼女が電話してくるのは珍しかったため、折り返すという選択肢は浮かばず、直ぐに出た。

『…レイン君！？ 大変よ！』

…どうやら、何か緊急を要する事態のようだ。普段冷静な綾瀬が取

り乱している様から想像できる。

「落ち着いて下さい。何があっただんですか？」

レインの、なるべく穏やかにした声に安心したのか、向こうからは先ほどのような混乱は感じられない。

『…ごめんなさい、取り乱して』

「いえ、それより何があっただんですか？」

同じ質問を続けるのは好きでは無かったが、何か胸騒ぎがしたため、彼女の言葉を促す意味で質問を繰り返す。

返ってきたのは、想像もしない 衝撃的な、言葉だった。

『いなくなっただ…白雪が！』

第34弾 二つの家族（後書き）

もうすぐ修学旅行（6月中旬から下旬ですが）です。そのときに更に穴が空くかもで心配です。

予約掲載でいけるでしょうか…？

第35弾 魔剣の襲撃（前書き）

駆け足で魔剣戦突入！

第35弾 魔剣の襲撃

第35弾 魔剣の襲撃

「レイン！」

バン！

電池室と呼んでもいいその部屋のドアが、叫び声と共に勢いよく開けられる。その叫び声の主は、息を切らし肩で息をする静奈だった。

「ケースD7だ！ 内容は――」

「もう綾瀬先輩に聞いた！ 俺達も探しに行こう！」

恐らく全力で走ってきたであろう静奈の負担を軽減するため、みなまでは言わせない。

ケースD7とは、アドシールド中の武偵高内での事件発生を示唆する符丁だ。

意味は、『事件であるかは不明確で、連絡は一部の者にのみ行く。なお、保護対象者の身の安全のため、みだりに騒ぎたててはならない。武偵高もアドシールドを予定通り継続する。極秘裏に解決せよ』。

つまり、今回の、十中八九事件であるこれに教務科は愚か、限られた人間しか動けない。

今のところ連絡が行ってるのはレイン、静奈、ミチル、綾瀬、武藤、不知火、レキ。そして、アリアとキンジ。

広い武偵高を探すのにはどう考えても人手が足りない。おまけに、レキの出る狙撃科の競技が始まる。

「くそつ、白雪……！」

キンジの部屋は 自分と一緒にだった。というか、『失踪』なのだ。からいつも居そうなところを探しても駄目だ。

レインは走りながら、火照る身体で思考を冷やそうとする。

恐らく、白雪は魔剣に拘束・拉致、もしくは脅迫等それに準ずる何かをされていて、どちらにしろ魔剣と接触しているはずだ。ならば、逆に考えればいい。

魔剣にとつて都合がいいのは？

アドシアードで手薄になつている校舎　駄目だ。一応、教務科の化け物教師らが二人一組で巡回している。リスクがでかすぎる。

強襲科　論外、教務科　これまた論外。

そこまで考えたところで、レインが最近ミチルに聞いた話を思い出す。

武偵高には三大危険地域とかいう場所がある。強襲科、教務科、そして、地下倉庫。文字通り武偵高の地下にあるそこは　火薬庫。

まずい！

「静奈！　地下倉庫つてどっち！？」

突然大声で呼ばれた静奈は一瞬硬直したが、すぐに持ち直し現在地を確認する。

「…くそ、真逆だ！」

「ちっ！」

この広い学園島で真逆の方向に行くには、結構な時間がかかる。焦り始めたその時
ブー、ブー。

「ッ！　ケータイ…レキ？」

『レインさん、話は聞いています。あなた方の目的地には、既にキングジさんを向かわせました』

「そうか…ありがとう、レキ」

『…レインさん、雷神化を。私が場所をオペレートします』

「で、でもケータイがぶつ壊れる！」

確かに雷神化すれば速いが、そうした場合電流が流れてケータイが壊れる。レキのオペレートを受けるのが不可能になる。

『…私は、一発の銃弾　』

「…？」

なにやら呪文のような声が聞こえ　　パァン！
発砲音。そして、続いてズギュン！　とレインの足下の地面が抉られる。

『…銃弾に続いて下さい』

「成程ね…！」

レインはケータイを切り、カバーに戻す。

バリイ！

紫電が瞬き、レインは雷神化し　　常人を遙かに越えたスピードで走り出した。

レキの射撃は正確で、とんでもないスピードで走るレインの更にその先、常に進むべき方向に銃弾を撃ち込む。

数分後には、レインは地下倉庫の入り口にいた。

「この冷気…やっぱりアイツか」

地下倉庫、その中でも大倉庫と呼ばれるだっ広い倉庫。

そこには大小様々な火薬が無造作に保管されていた。

「（これじゃあ銃は使えないな…）」

息を殺し、兄の形見であるバタフライ・ナイフを取り出す少年
キンジ。

その視線の先には、キンジからは姿の見えない魔剣と相対する白雪の姿があった。

魔剣は、先ほどから白雪と話し込んでいる。

キンジは彼女らの会話に、耳を傾けた。

「私に続け（フォロー・ミー）、白雪。私が今から、イ・ウーに連れて行ってやる」

イ・ウー。

その単語が出た瞬間　　ドグン！

ヒステリアモードとはまた違った、血の流れを自覚する。怒り

兄を、『武偵殺し』、理子・峰・リュパン四世を使って殺した、組

織　！

握った手の中のバタフライナイフが、カタカタと音をたてる。

「それともう一つ…今回の事に、誤算があった…お前は奴を呼んでいる。」

そう言った魔剣は、明らかな殺気を　キンジに、向けていた。

気づかれてたのか！

「白雪逃げる！」

叫びながら飛び出したキンジは、バタフライナイフを振り上げて魔剣に向かう。

火薬への跳弾の恐れがあるため、互いに銃は使えない。

自然、銃弾が飛んでくるはずがない　そう油断したキンジに、白雪から声がかかる。

「逃げてキンちゃん！　武偵は、超偵には勝てない！」

白雪の言葉に反応したかのように、キンジの足下に、サーベルのような小剣、ヤタガンと呼ばれる銀色の刃物が突き刺さった。

かわそうとした際に倒れたキンジに、魔剣は嘲笑を浮かべる。

「『ラ・ピュセルの枷』」

女の声が続いて、小剣から何か白いものが広がっていき、パキ、パキとキンジの足を床に張り付ける。

これは…氷か！？

氷によって立ち上がれないキンジを放置し、魔剣は白雪へ意識を切り替えた。

突然、室内の非常灯が消え、辺りが完全な暗闇となる。

「や、やめて！　何をするの　うっ…！」

チャリチャリ…ガチツ。

金属音が白雪の方から漏れる。

何をされているのか分からないまま、キンジはもがくが、氷はびくともしない。

「くそっ…！」

その挙動に気づいたのか、向こうから、シャツ！

暗闇でも分かる、明確な殺意。

これは先ほどの小剣で、このままでは自分は死ぬ　そう、キンジが直感し、目を瞑った瞬間

「へえ…ならここは」

「バトンタツチね！」

キーン！

暗闇の中、一瞬火花が散り

バババツ！

突如として降り注ぐ、天井の照明の光。それが大倉庫の闇を白く塗り潰し、キンジの目の前に現れた二人の姿を現す。

「そこにいるわね、『魔剣』！　未成年略取未遂の容疑で逮捕するわ！」

「ついでに殺人未遂、ね」

「アリア、レイン！？」

そこに立っていたのは、水月の柄に触れているレインと、黒銀のガバメントを構える、アリアとレインだった。

「ホームズに『紫電の雷神』とは厄介な…！」

魔剣の姿は火薬に隠れ、同時に奥に連れ込まれた白雪も視認できない。

シヤシヤツ、とまた小剣が二本投擲されるが、それも空中で火花を散らし、地に墜ちる。

何が起きたか、キンジには理解できなかった。が、

「ちっ…雷神か」

「流石ね」

と、いう二人のセリフから、レインが何かしたのだろうと臆気に分かった。

「百本でも二百本でも投げてきなよ。全部打ち落としてあげるから」
にこ、と笑ったレインは、片手に握る水月を持ち上げた。

小剣を打ち落としたのは、彼の超能力とは無関係だ。

彼はただ、刀を抜き、その勢いで小剣を打ち落とし、刀を鞘に戻し

ただけ。つまり、居合い抜き。

それが、目に留まらない程のスピードで繰り出されたのだ。

蒼介から教わった剣技と、レインが師匠から教わった剣技を彼流にアレンジした剣術。その剣技は、剣の達人である魔剣でさえ目を見張るものだった。

「さあ…白雪は返してもらつよ」

第35弾 魔剣の襲撃（後書き）

友人に聞いたんですが…アニメのARIAって2クールなんですか？
確かに武偵殺しのところで5話かかってますし…でも確証が無いん
ですよ…

第36弾 超能力の使い方（前書き）

緋弾のアリアAA買いました〜あかりが可愛かったので、登場させたいです〜

第36弾 超能力の使い方

第36弾 超能力の使い方

「…って、格好つけてる間に逃げられちゃった」

レインが刀を下ろし、白雪に駆け寄る。彼女は重厚な錠で縛られていて、口には猿轡をされていた。レインはそれをほどいてやり、キンジ達も駆け寄ってくる。

「はあっ！ き、キンちゃん、大丈夫！？」

キンジはどうやらアリアによって救出されていたようで、氷による凍傷等の怪我は無い。それを見てほっとしたようである白雪の錠は、なかなか取れそうではないが。

「…くそ、駄目だ。アリア、そっちは？」

「…こっちも、すぐには無理ね」

解錠は難しく、今すぐには出来そうもない。錠がかかっているパイプを切ればなんとかなるかも知れなかったが、特殊な工具でもない限り無理そうだった。

どうするか、と思索していると…足下に、水が溢れて来ていた。

「ん…？ 海水が漏れてきてるぞ！」

「魔剣の仕業ね…！」

排水口はその役目を果たすどころか、逆に海水を吐き出している。

この勢いなら、部屋が海水に浸かるまで十分とあったところか。このままでは白雪が溺れ死ぬ。そうならないためには、二人が錠を外すのに専念、一人が魔剣を追うのが最善だ、とレインは判断した。

「魔剣から鍵を奪おう。アリア、先に行つて。俺達は白雪の錠を

「

「いや、白雪は俺が助ける」

レインの言葉を遮ったのは

「…キンジ」

そう、強い意思を瞳に宿した、キンジだった。隣で白雪が啞然としているのも意に介さず、キンジは続ける。

「俺がバカだったから、今白雪は死にそうになってる…なら、俺が助ける。助けなくちゃならない。それが、俺のケジメだ！」

それはキンジの責任感からなる言葉だったが、白雪が隣で赤面している。それが良い塩梅に場の空気を和ませたところで、レインはキンジに、一言言及した。

「絶対生きて、白雪を助ける！」

「…了解！」

アリアとレインは、刻一刻と水没の危機がせまる大倉庫を後にし、魔剣のいる上の階に向かった。

暫く歩くと、重厚な扉に行き着いた。開いた痕跡があるため、ここに入った可能性が高い。

「…開けるわよ」

レインはアリアが扉を開けるのを銃を構えながら見守る。

ガチャ！

扉が開いた音と同時に、銃を部屋の中に向ける。

トラップは無かったようで、何も飛んできたりはしなかった。が…アリアが日本刀の一本で空を切るような動作をすると、プツッ、と何か切れたような音がした。

その正体は、

「ワイヤーか？」

「ええ。あんたと私の首の位置に仕掛けてあったわ。御丁寧に」
用意周到な奴だな、とレインは他人事のような考えをしていた。

つい先刻までキルトトラップを仕掛けられていたにも関わらず、だ。
キルトトラップ　こんなものは、自分には山道の小枝程度のもので
しかない。

レインが言わずともそう思っているように感じて、アリアは改めて『紫電の雷神』の強さ、そして頼もしさを実感した。

「コンピュータルームみたいだね」

レインの言葉に、アリアも部屋の中を見渡す。

高性能そうな 実際には高性能なんだが 大型コンピュータが立ち並ぶそこは、ちょうどコンピュータが壁のようになっていて、魔剣の姿は見えない。

「…どうする？」

「決まってるでしょ？ 二手に別れるわよ」

考えるそぶりすら見せず即答したアリアに苦笑した。その意味合いとしては、魔剣という強力な犯罪者相手に二手に別れる事になんの躊躇いもない彼女の強さ故だったのだが…アリアは、どうやら何か別の考えに至ったようで、頬を膨らませていた。

アリアと別れた後、レインはブローを納めて水月を握っていた。速度のある居合い抜きのために、刃は鞘に入れてある。

「（コンピュータがあるからあんまり派手に暴れない方がいいかな？）」

そんな事が頭に浮かぶが、レインは頭を振った。

何を言っている（正確には考えてる、だが）のだ、と自分を戒める。だが、彼の頭には、全力でやらなきゃ相手に失礼だとか、全力でやらなきゃ勝てる相手じゃないとか、とにかく全力を『出さなきゃならない』という考えは砂粒一つも無かった。なら、何故彼はこの場所ですべての力…とまではいかずとも、暴れるくらいはしようという気になったのか。それは

「（向こうだつて暴れるのに俺が大人しくしてるなんて不公平じゃないか）」なんとも、子供のような考えだった。

「さて…かくれんば再開するかな」

そう言つて歩き出したレインの足が 止まる。

「…アリア」

そこには、キヨロキヨロと辺りを探るアリアの姿があった。どうやら鉢合わせしてしまったらしいな、とレインは溜め息をつきながら彼女に駆け寄る。

「おい」

「ヒヤアッ！ れ、レイン！ おどかすんじゃないわよ！」

「ごめんごめん。で 魔剣は見つかった？」

「まだよ。ていうか、こう暗くちゃ無理よ。そんなに早く見つけるなんて」

その言葉に レインは、笑みを壊さずに続けた。

「へえ…無理、か…ねえ」

「何よ？」

怪しむような彼女の視線に、しかしレインは笑みを崩さない。

笑顔のまま、レインは

「その言葉、嫌いじゃなかったっけ？」

居合い抜きを浴びせる。

彼女もそれを予想していたようで、咄嗟のところを刀を回避し、アリアの声をやめて、恐らくは地声で話す。

「全く貴様はいつもいつも…私がかかわせなかったらどうするつもりなんだ？」

皮肉を浴びせられたレインは、微笑を浮かべながら水月の刃の部分を指でなぞってみせた。血が、出ない。

「なんだそれは…？ なまくら、というより刀ですらないではないか」

明らかな嘲笑を浮かべる魔剣に、レインは先ほどからの微笑で返す。

「これは武偵のためにあるような刀だからね」

そう、武偵法9条を守るにはうってつけの刀なのだ。これは。そして、同時にこの刀は、レインが晴夜を捕まえる際に殺さないという

意思表示のようなものでもある。

「さて…始めようか」

レインが水月を抜く。

その刀身は、薄い紫色に妖しく光り、鏡のようにアリアの姿の魔剣を映す。

それに気圧されたのかは知らないが、魔剣は向かって来なかった。いや、むしろ

「…逃げる気？ 生憎だけど、逃がさないよ」

「ふっ…安心しろ、雷神。貴様の遊び相手はちゃんと用意してある」
そういつた魔剣の足下から、パキパキパキ…と氷の張るような音がして、目の前に、恐山の襲撃者にして、目の前にいる女 ジャンヌ・ダルク30世の輪郭の、氷の人形が出来る。数も一つではない。パキパキ…と、一つ、また一つと出来上がっていく。

数は、…500はいるだろうな。狭い部屋でないにしろ、とてつもなく暑苦し…くはない。これが氷なので、逆に涼しいくらいだったが、やはり見た感じは暑苦しい。

「これと戦えつて？ お人形遊びが好きだなんて、可愛いところもあるんだね」

レインが、勝ち誇った笑みを浮かべるジャンヌを見据え、苦笑いしながら皮肉…のつもりで、言った。

「か、かわっ!?!」

…ジャンヌは別のところに反応したが、その言葉を発した本人は「川？」と首を傾げているため、気づいていない。

「う…だ、だが！ 貴様が雷を使えば、足下の海水で皆感電するぞ！ 雷を使えない貴様がこの氷の兵隊に勝つのは不可能だ！」

そういつたジャンヌの言葉に逆らうように、レインはダガーを投擲する。

氷の兵隊は、一体も動こうとしない。ジャンヌも、だ。

動けないのではなく、動かない。何故なら、

「…何処を狙っている？」

そのダガーは、兵隊の間を縫うように、誰もいないところに放たれたからだ。

続けてレインは、ダガーを全部の指の間に挟み、八本のダガーを、全て兵隊の間に投擲。スコン、と小気味良い音と共に壁に突き刺さる。

「…ふざけているのか…！」

ジャンヌの怒りのこもったセリフに、しかしレインは動じず、

「これで分かってくれるかな？」

そう呟き、地面を蹴る。突然の出来事に、兵隊がレインに続いて飛び上がったのと、同時。

紫の雷電が、兵隊を後ろから（・・・）貫いた。

なす術も無く、兵隊は四散する。

「な…！」

「『雷線』…ここはもう、俺の独壇場だよ。さあ」

そう、先ほど放ったダガー、あれに雷刃で付加した電撃、それを新たに水月に電撃を加える事で、元の場所に戻るかのように雷電が引き寄せられたのだ。

レインは、靴に仕込んだ補助刀剣を天上に差し、逆さ吊りになりながら、獰猛な笑みを浮かべた。

「派手に暴れるよ」

第36弾 超能力の使い方（後書き）

AAだとアリアがやたらと強い…！

そしてパラシユートの件など裏話にはとてもくるものがあります！

第37弾 星伽巫女（前書き）

十万PV突破しました！

皆様のお陰です。紫電の雷神を読んで下さってありがとうございます。
す。

これからも、どうかこの駄作者をよろしくお願いします。

第37弾 星伽巫女

第37弾 星伽巫女

「（今ので十体は減ったな…）」

相手の被害状況を確認しつつ、レインは水月を兵隊の一体に突き立て、振り抜き様にもう一体、向かってきた二体を跳んでかわし、頭を回転蹴りでノックアウト。

「雷線…！」

再び雷線を発動させ、更に次は数十体削る。

「（ジャン又は…アリアの方か）」

小さく舌打ちしつつ、レインは更にダガーを投擲、更にそこから雷撃を放つ。

先ほどより規模を増した雷線は、兵隊を五十程削った。

「（この調子なら全滅まであと…三分くらいかな？）」

敵戦力と自己の出せる力からそう判断したレインは、水月を握る右手の反対、左手に愛銃ブロウを抜いた。

「邪魔だよ」

パパパパン！

マズルフラッシュが瞬き、兵隊に穴を穿つ。

水月の刀身が一瞬煌めき、兵隊を両断する。

雷線の雷撃が走り、兵隊達の身体を貫く。

レインは、500の兵隊の全てを、塵でも払うかのように蹂躪していった。

レインが戦っている場所から離れた、コンピュータールームの一角。そこでは、東西最強クラスの刀剣を携える二人の超能力者の姿があ

った。

「もう止めよう…私は、誰も傷つけない」

片方 東の刀、イロカネアヤメを持つのは、キンジによって救出された白雪。

「…笑わせるな。原石に過ぎんお前が、イ・ウーで研磨された私を傷つける事など出来ん」

嘲笑を浮かべるのが、西の剣、聖剣デュランダルを持ったジャンヌ。二人の刀は、それぞれが圧倒的な硬度、そして切れ味を誇る。それ故、二人がそれぞれの刀剣に持つ信頼も高い。つまり

「（この勝負…恐らく超能力とか以前に、相手の刀剣を折った方が勝つ…！）」

負傷したアリアを庇いながら白雪を見守っているキンジは、無駄だと分かりつつもベレッタを構える。

超偵は、自己の精神力によって超能力を生み出しているらしい。

つまり、信頼をおいている刀剣が折られたとき そのショックは、その分でかいはず。恐らくは、超能力が一時的に使えなくなる程に。

「私のGは17なんだよ」

そう言った白雪に、ジャンヌは今度は嘲笑を返さない。

「ブラフだ。G17など、この世に数人しかいない…もつともあの男はG30オーバーだがな」

忌々しげに呟いたジャンヌは、自らが来た道 レインが戦闘を続けていてる方を向いた。

「…あなたも感じるはずだよ。星伽には禁じられてるけど、この封じ布を解いたときに」

「…仮に真実であつたとしても、お前は星伽を裏切れない。それがどういふ事を意味するか、分かっているならな」

「ジャンヌ…策士、策に溺れたね」

白雪の声に、瞳に、今までにない強さが宿る。

「それは、今までの私。でも今は、私に星伽のどんな掟だつて破ら

せる 破らせてくれる、特別な存在が後ろにいる。私は彼を護りたい その気持ちの強さまで、あなたは見抜けなかった。」

白雪の言葉に、ジャンヌは声を発しなかった。彼女の計画が、狂い始めているのだ。他ならない、さらおうとした白雪によって。

「 やってみる。Gの高い超偵は、その分精神力を早く失う。持ちこたえれば私の勝ちだ」

言いながら、ジャンヌはハイジャックの時の理子のように、ベリベリと被っていた特殊なマスクを剥いだ。その銀色の髪、サファイアのような蒼い瞳を露にする。 本気を出す、つもりなのだ。

「キンちゃん…ここからは、私を見ないで…」

「白雪…？」

震える声で言った白雪を、キンジは心配そうに見つめる。

「これから、私は超能力を使うよ。でも、それを見たらキンちゃんは…私の事、怖くなる。ありえない（……）、って思う。キライになっちゃう」

キンジは、震える白雪に歩み寄り…ぼん。

その頭に、軽く手を置いてやる。

「白雪、安心しろ。俺がお前をキライになる？ それだけは、ありえない（……）」

そのキンジの言葉に僅かに肩を震わせた白雪は、キンジの低い声に背中を押してもらおうように…シュラッ。

白いリボンを、解いた。

「すぐ、戻って来るからね」

そう言った白雪の刀の先端に、緋色の光が煌めいた…その直後。ポウッ！

光が刀身に走り、刃全体が燃え上がる。

これこそが、白雪の切り札。

硬直するジャンヌに、白雪は カツッ！

下駄を鳴らし、一瞬で距離を詰める。

ヒステリアモードのキンジは、その急加速が足下に焰を爆発させ、その勢いで起こしたものだという事をその瞳に捉えていた。

「！」
白雪が逆袈裟斬りの要領で放った斬撃を、ジャンヌは上体を逸らし紙一重でかわす。

緋色の光が走り、ズパアッ！ ジャンヌの背後、大型コンピュータが両断される。

「なんて切れ味…！」
アリアが上げた驚きの声に、キンジは賛同すると同時に、それは相手も同じなのだ、と気を引き締める。

「このイロカネアヤメに斬れないものはない…あなたの刀も、斬ります」

「…舐めるな、聖剣デュランダルに断ち切れぬものなどない」
二人がそれぞれの刀剣を構えた 次の瞬間。
焰と氷が、互いを飲み込んだ。

「！」
異変に気づいて、身体を強張らせたのは、氷の兵隊を全て片付けたレインだった。

「この気…白雪、か」
しかも、彼ら感覚ではG20に届く程の、およそ高校生には扱えないような（自分を柵に上げて）超能力。

それをいきなり解放して、身体がついていけない訳がない。相当無理をしているはずだ。

「白雪…！」
レインは、いつの間にか蒸発していた 恐らく白雪の超能力の影響だろう 海水、その残った塩を見て安全を確認し、雷神化。彼女らの下に急いだ。

「はあっ、はあっ……」

数分間ジャンヌと切り結んだ白雪は、体当たりをしてジャンヌを押し倒す。ジャンヌは背中を壁に打ち付け、尻餅を着いた。

だが…息を切らしているのはジャンヌではなく、白雪の方だった。

彼女の刀からは、先ほどまで燃え盛っていた焰が、灯火程度しか発せられていない。

「…私の勝ちだ!」

「きゃあっ!」

ジャンヌは白雪を突飛ばし、温存してあつたらしい超能力を使った。辺りが白銀に染まっていく…ダイヤモンドダスト銀氷という現象。

「白雪っ!」

彼女らの人智を越えた戦いに割って入ろうとするキンジを、アリアが手で制した。

「まだ駄目よ、キンジ! ジャンヌはまだ力を残してる。そしてそれは 白雪も同じ。そして二人の超能力は、あと一回が限界のはずよ」

そう、一見冷静に観察しているように見えるアリアだが…その手は、震えている。

彼女も、助きたいのだ。白雪を。

今すぐジャンヌとの間に入って、その身が断ち切られ、氷付けにされようとも、彼女は白雪を助けたがっている。

だが それは、ジャンヌの超能力が切れる前に自分達が死ぬ事が、命を賭け、そして星伽の掟を、長い間ずっと守ってきた星伽の掟を、今やっと破った白雪の覚悟、それを無下にしてしまう。

アリアは齒を噛み締め、事の顛末を見守っていた。だが…ジャンヌが腕を振り上げた。

「『オルレ안의氷花』 銀氷となって、散れ!」

ジャンヌのデュランダルが、先ほどの白雪のように白い光を纏っていく。

キンジは直感する。あれは、まずい。

「　　アリア！」

「私に続きなさい、キンジ！」

慌ててアリアも駆け出すが　距離がありすぎる。白雪が、二人を巻き込まないように戦ったツケがきた。

「（間に合わない…！）白雪っ！」

ジャンヌが振り上げたデュランダルを　下ろした。

その刀から放たれた蒼白い光の奔流は、白雪を飲み込み、氷の花のように彼女を凍りつかせる　はずだった。

バチバチ…バチツ、バリイ！

その蒼白い光は　紫電によつて、かきけされた。

「　　！」

「やれやれ…間に合ったみたいだね」

ジャンヌのデュランダルと刃を合わせるのは、水月を逆手で抜刀した、レインだった。

「久しぶりだね、ジャンヌ」

第37弾 星伽巫女（後書き）

そういえば、この間ガッツの映画を見に行きました。いやあ…案外参考になりました（笑）

戦い方は普通に人間…というか、リアルな戦い方（相手に何回も肘鉄したり頭掴んで顔面を鉄板に叩き付けたりと）でしたので。もちろん、身体能力は超人でしたが。

第38弾 魔剣戦決着、蠢く陰謀（前書き）

今回、最後の方にオリジナル話が混じってます。
場所は：原作ファンの方なら大体わかるかと。

第38弾 魔剣戦決着、蠢く陰謀

第38弾 魔剣戦決着、蠢く陰謀

「ジャンヌ…今回は逃げられないよ」

にこやかな笑みを浮かべるレインに、ジャンヌは笑みを返した。

「逃げる？ 舐められたものだな…：貴様らを全員倒せばいい話だ」

デュランダルを構えた彼女は、自分に言い聞かせるように言葉を発する。

「試してみるかい？」

レインは雷神化、ジャンヌを挑発する。

彼女はそれに乗り、デュランダルの切っ先をレインに向けた。

「『オルレアンの氷花』」

彼女の最大出力で放たれたそれは、レインを呑み込む勢いで襲い掛かる。

が、レインはそれを前に全く身動きしない。

ブロウを抜き、引き金を唯一度引いた。

「『雷砲』」

磁力によりローレンツ力を利用し、超音速で銃弾を吐き出す。

雷の奔流は、いとも簡単に氷の波を打ち砕く。

「な」

「…ジャンヌ、俺の勝ちだ。大人しく捕まってくれ」

「…まだだ！ 私は、まだ負ける訳にはいかない！」

ジャンヌの悲痛な叫び。その言葉を聞いたレインは…：一步、下がった。

ジャンヌが怪しげな視線を送ってくるなか…バババン！

キンジがベレッタを抜き、三点バーストでジャンヌに銃弾を放つ。

三回の銃声が一瞬で響き、ジャンヌに襲いかかる。

「ちっ！ ただの武偵ごときが！」

悪態をついたジャンヌは振り向き様にデュランダルを振り抜き、弾丸を三発、全て断ち切った。

「はあっ！」

ジャンヌはキンジに向かって走りだす。

アリアがスライディングし、二刀流で足下を払うがジャンヌは跳躍、軽々とかわす。

空中では動けないだろう、とキンジはジャンヌに発砲する。

「甘い！」

しかし、ジャンヌはデュランダルを盾にするように銃弾を弾き、その衝撃で空中で一回転。勢いを更にましたデュランダルが、キンジの脳天に一直線に下ろされる。

「！」

キンジもこれは想像していなかったらしく、驚愕の表情をしている。レインはジャンヌ、の持つデュランダルに攻撃の標準を合わせるが……その手を、下ろした。

「（大丈夫だね、キンジ）」

キンジの、いつもと違う表情を見て確信したレインは、事の顛末を見守る事にした。

ジャンヌのデュランダルが振り下ろされる瞬間、ヒステリアモード

レイン曰くジゴロモード になったキンジの瞳には、全てがスローモーションに見えていた。

この状況でデュランダルを防ぐ方法は、一つだけある。

だが、それは両手を使う。ベレッタを握る右手は離す訳にはいかな……ならば、と。キンジは、左手をデュランダルに向け、パシィッ！

「な、なんだと……!?」

片手 人差し指と中指で、真剣白刃取りをやってみせた。

そしてキンジは、右手のベレッタをジャンヌの首に突きつける。

「もういい子にした方がいいよ、ジャンヌ」

「…武偵法9条。武偵は、人を殺せない！」

ジャンヌは未だ闘争心を失っていないようだった。だが

「いいやジャンヌ、チエックメイトだよ」

そう言ったレインの視線の先、そこには…

「キンちゃんに、手をだすなあっ！」

刀身に焔を宿したイロカネアヤメを居合い抜きのように下から上に振る。白雪の姿が緋色の光に照らされ、

「緋緋星伽神　！」

デュランダルを通過した焔が、ドガアアアツ！

天井に届く程長く、縦に渦巻き、壁や天井もろともデュランダルを断ち切った。

「な…！？」

最後の最後に、心の拠り所としていた剣が断ち切られた。その事実
に放心していたジャンヌの手首に、ガチャン！

「魔剣！　逮捕よ！」

アリアによって、対超能力者用の手錠が掛けられた。

「だからいつたろう？　いい子にしてた方がいいって」

キンジのセリフに苦い顔をするジャンヌに、今度はレインが話かける。
「…」

「ジャンヌ。お前の敗因は、俺がいた事じゃない」

思っていた事を当てられたのか、ジャンヌが硬直する。そんな中、
レインは更に続けた。

「お前は、最後まで『武偵』を侮っていた。その程度じゃあ、俺や
白雪にはまだまだ追いつけそうもないぞ？」

レインの言葉に、ジャンヌはそっぽを向き、ふん、と鼻を鳴らす。

「まあ…認めてやろう。奴等は強かった」

「…それが認められたなら、お前は更に高みに登れるよ」

ぼん、とジャンヌの頭の手をおき、レインはにっこりと微笑んだ。

「もう、犯罪者なんてやめろよ？」

「…余計なお世話だっ」

顔を真っ赤にしたジャン又はレインから顔を逸らした。不覚にも、緩んでしまった頬を隠すように。

その後日、アドシールド閉会式。

大舞台のステージに立ったレインとキンジはベース、ギターをかき鳴らす。不知火のボーカルがやけに会場に響き、アル〓カタが始まる。

曲がサビに近づくと共に、アップテンポになっていき、チアガール達が会場に上がってくる。

見知った顔もちらほら。

チアガール姿でも花の髪飾りを外さないミチル、それをジト目で見ながら完璧に動く綾瀬、ポニーテールを上下に揺らす静奈。レキ、理子は出ていないようだ。

そして、舞台袖では…アリアと、未だにモジモジしてる白雪の姿がこの白雪がこんな人前に出るとは、キンジも驚いていた。だが、同時に嬉しそうな表情もしていて、レイン達見ていた者をも和ませたのは…余談だろうか？

とにかく、曲のサビに突入し、アル〓カタも終盤に来ていた。

チアのボンボンを上空に放り投げ、銃を取り出し…バババン！ボンボンを撃ち抜いた。

これが無ければ、普通にイメージアップは結構簡単なのではないだろうか？ とは言うまい。これも、武偵高らしいと言えばその通りなのだから。

レイン、キンジ、不知火、武藤の演奏が激しさを増し、いよいよアドシールド閉会式も終わりに近づく。

チアガール達が、一カ所…アリアと白雪に集まっていき、組体操のようなポーズをとった。

そして、あらかじめ用意されていた銀紙の紙吹雪が、そのチアガール達の周りに巻き上がり…曲も終わる。アドシールド閉会式はこれにて 終了。

激しいアルカタのチアに息を切らした白雪は、屈託の無い笑みを浮かべている。その周囲を、キラキラ…と、紙吹雪が舞い散る。彼女の新たな人生を祝福する 白い、雪のように。

日本付近、某所…：教会のような、ステンドグラスが見える場所。

「やれやれ…まさかジャンヌが捕まるとはな」

黒衣を纏った男 夜雲 晴夜が、忌々しげ…というよりは、ウズウズしているように言う。

それを間近で見っていた、彼と同じく黒いフードを被っている男が口を開いた。

「次は私が行きます…それに、ブラドもね」

「…お前とブラドか。だが、大丈夫なのか？ 理子はイ・ウーを『退学』になったのだろう？」

心配しているようなのは口調だけであり、晴夜の表情はそれとは正反対といてもいいものだった。

対して、男は…：笑みを崩さない。

「別に、イ・ウーを退学になったからといっても私の支配下を離れる訳ではありません。今はただ、泳がせているだけです。知っていますか？」

男の瞳が 血のように、紅く光る。

「高いところから落とす方が、人間は深い絶望を味わう」

くくつ、と邪悪な笑みを浮かべた男に、晴夜もまた笑みを崩さず、注意を促した。

「そうか…：だが、精々気をつけろよ。理子は、アイツ（…）の幼馴染みだからな」

「…：親バカならぬ、兄バカですか。感心しますよ、ブラドと同じ、

No.2さん？」

悪戯っぽくいった男に、晴夜が何か言う前に彼は姿を消していた。静寂に包まれた教会、その巨大な十字架に向けて、晴夜は手を合わせた。

「主よ、我を救いたまえ……」

その瞬間、ベギベギ……バギツ！

突如、十字架が砕けた。

別に、晴夜が何かした訳ではない。

これは、十字架を不快に思うあの男の行動だ。

「人が折角神に祈っていたというのに……相変わらず不粹な男だ、

『無限罪』。さて、レイン。お前はこいつらをどう倒す？」

不敵に微笑んだ晴夜の、周囲。そこに近づいた十字架の破片は、悉く塵となった。奇しくもそれは、同時刻のアドシールド閉会式と同じように 白い、雪のようだった。

第38弾 魔剣戦決着、蠢く陰謀（後書き）

さあさあ、次回からはブラド編ですが…実は、ブラド編の時間軸に並行したオ리지ナル話をやるのかなあと考えていたりします。そこであかりとかも登場させようかなあと。

第39弾 幼馴染みが帰ってきた！(前書き)

ブラド編、突入です！

第39弾 幼馴染みが帰ってきた！

第39弾 幼馴染みが帰ってきた！

大波乱（といっても、事件は秘密裏に処理されたため表沙汰にはなっていないが）のアドシールドも終わり、レイン達は部屋でのんびりと寛いでいた。

「はあ、何にしても良かったよ。ユツキーが帰ってきて」

「そうだ。もう勝手にどこかへ行ったりするんじゃないぞ」

「ご、ごめんね二人共。心配かけて……」

ミチルと静奈の言葉に白雪は、例によってオドオドと挙動不審になつて答えていた。

「……そういえば、キンジ君とアリアは？」

「アリアは知りませんが、キンジはアリアに呼び出しを食らつたつていてましたが」

「それはアリアはキンジ君を呼び出した、でいいんじゃないの……？」

怪しむような目で見てくる綾瀬に、そっぽを向きながら口笛を吹くといういかにもな仕草で答えてみせる。綾瀬が呆れ返って頭を押さえていたため、少し悲しくなった。

その晩、女子共が寝静まり、ようやくぐっすり寝られる、とレインは頭を布団から出した。

最近の悩みと言えば、女子が夜中でもうるさいのと、違和感なく女子と一緒に寝られるようになってきた事に若干の恐怖を抱いていた事だ。ここのところ、毎晩隣の部屋に、女子が寝泊まりしていたため、もう慣れてしまったのだ。

「（……せめて、もう一人は男が要るよなあ）」
レインは今更ながら、女子と男子の人数バランスがおかしい事に気づき始めていた。だが、これ以上人数が増えるのも正直キツいところだ。いくら部屋が多いとはいえ、なんというか……モラル的にふと、隣の無人ベッドに目をやる。
そのベッドの主、キンジは今いない。もうすぐ11時にも関わらず、それはアリアも同じだった。
「（……まさか、ね）」
一抹の不安……と同時に期待を覚えつつ、レインは真っ暗な天井に目を向ける。
いつの間にか、レインは深い眠りに堕ちていた……

翌日。

「レイン起きろ、朝だぞ」
「レイレイ、だらしないよ」
「レイン君、朝ご飯何がいい？」
「……ヨーグルトで」
とりあえず、綾瀬に朝食のリクエストをしてからレインはベッドから重い身体を起こす。すると、何故か静奈とミチルが、
「とおっ!」「」
「うわっ!?!」
レインに飛びかかってきた。あまりのスピードに潜在的に恐怖を覚えたレインは、その二人の攻撃(?)をかわす。若干目が血走っているのが余計に怖い。
「なんのつもりなんだよ、二人共……」
「いやあ、着替えさせてあげようと思って」
少し顔を赤くしながら頭をポリポリとかくミチルが答え、その隣では静奈がバツが悪そうにそっぽを向いていた。
「いやいや、自分で着替えくらいできるから!」

「ええ、良いじゃん！ 私達に着替えさせたって！」

「良くないだろ!？」

「わ、私はお前が構わないなら別に良いがな」

「だから構うって言うてるんじゃないか！」

レインの精一杯の突っ込みに、二人は渋々レインの寝室から引いた。

「やれやれ……何なんだろうね……」

咳きながら、速攻で着替えを終えたレインが戸をあけた瞬間　　バ

チャツ。

天から、ヨーグルトが降ってきました。

「……………」

「ああ、ごめんなさいレイン君！ 私の不注意でレイン君の制服が汚れちゃったね！ 仕方ないから、私が新しい制服に着替えさせてあげる！」

その、綾瀬の酷すぎる棒読みに　　ブチッ！

そんな擬音が聞こえてきそうな、般若のオーラがレインから放たれた。

冷や汗をダラダラ垂らしつつ、綾瀬はぎこちない笑みを浮かべ、どうにか誤魔化そうとするが……

「あ、あのね、レイン君。ほら、新しい制服　　」

「……………どうです霧矢先輩。マツサージでもしますか？　電極マツサージ」

爽やかに笑いながら、彼が言うと心底物騒であるセリフを口にしたため、

「え、遠慮しとくね！」

綾瀬は、全力で退散した。

その様子を陰から見ていた二人にも、

「早く準備しないと、学校に遅れるよ？」

そう忠告　命令、ではないと彼は自負している　　し、ヨーグル

トを拭き取り、ようやく登校する事にした。

「レイインっ！」

「ん…？」

登校中、探偵科の寮を出る前に、後ろから愛称を呼ばれたため振り返る。そこには、声で分かっていたが……

「理子！ 久しぶり！」

そう、フリルだらけの魔改造された防弾制服をはためかせる、峰理子だ。

「レイン、久しぶり〜！ 会えなくて寂しかったよ、レインレインレイナー！」

レインの名前を叫ぶ、というより連呼しながら飛びついてくる理子を軽く抱擁し、レインはきちんと地面に立たせてやる。

「レイナー」

満面の笑顔で、理子はその小さな背丈で精一杯背伸びし、レインの胸板に頬擦りしてくる。

「こらこら、早く学校に行かないと遅刻して更に内申下げられるよ？」

レインもレインで悪い気はしなかったため、優しく諭すように理子に注意を促す。だが理子は相も変わらず頬擦りを続ける。

「ええ〜？ さーみーしーいー」

そう言った理子は、レインに上目遣いで頬を膨らませるといふ一般男子なら一発KOな可愛らしい顔を見せる（魅せる？）が、レインはそれはそれ、というように理子の襟足を掴み、丁度仔ライオン、または仔猫を移動させる親の如く校舎に連行する。

「駄目ったら駄目、だよ」

レインが最終的に呆れ気味に言った事で、理子もようやく自分の足で歩く事にした。

「あ！ レイン先輩〜！」 先ほどのデジャブを誘う声に、レインは

振り返る。そこには、もちろん理子ではなく（というか彼女はレインの隣にいる）、

「確か……間宮 あかりちゃん？」

「正解です！ 凄いですね、まだ1、2回しか会ってないのにもう覚えてくれたんですか!？」

「君はチャールミングで印象的だったからね」

端からみたらキザな奴状態のレインだが、これも幼い頃から外国と日本を行ったり来たりしていた故の、いわば外国風のスキンシップであり、彼に他意はない。

「あ、ありがとうございます」

顔をほんのり赤くして、あかりはレインを　そして、その斜め後ろでちよつと不機嫌そうな理子を見た。

あかりはその気迫、あるいは雰囲気^{キョウキ}に若干気圧されているが、それは幸い（？）レインには気づかれなかった。

「レインー、この娘だれえ？」

怪しむような視線を向けてくる理子に、レインは苦笑しながら答える。

「お前も知ってるはずだよ？　アリアの徒姉妹の間宮　あかりちゃん。探偵科なら知ってると思っただけ……」

そう、この間宮　あかり。何を隠そう、あの超スパルタSランク鬼武偵、神崎・H・アリアの徒姉妹なのだ。

（綾瀬から）聞いた話では、アリアとキンジが出会った少し前、というかほぼ直前にアリアと徒姉妹契約を結んだらしく、アリアがキンジをチャリジャックから救出した際使用したパラグライダーも彼女が縫ったものだったとか。

だが、驚くべきはそこではない。

彼女は、キンジと同じくEランクの武偵である。

だが、彼女はアリアと徒姉妹契約を結んだのだ。その何がおかしいのか？　単純な話だ。その、契約方法。

徒姉妹契約、というか徒友契約を結ぶためには、『エンブレム』と

いう試練を突破しなくてはならない。ルールは簡単、上の徒友から下の徒友が、30分以内にエンブレムを取ればいい。

そう、ルールは簡単だが、彼女はEランクにして、これをアリアというSランク武偵相手にやり遂げたのだ。

つくづく、この学園の審査基準を見直すべきだとレインは感じていた。

「あ、私、またアリア先輩に呼び出されてますので！ 失礼します！」

「ちょこん、と一礼したあかりは、とことこと若干駆け足でその場を去っていった。

「……………ふうん、アリアがねえ」

……………？

理子の不敵な笑みの正体は、この時のレインには分からなかった。

キーンコーンカーンコーン。

「！？ やばい、予鈴だ！ 急ぐよ、理子！」

突如として鳴り響いたチャイムに反応し、レインは理子をお姫様抱っこ。そのまま全力で駆け出した。

……………その際、理子が頬を赤らめていたのは、言うまでもないだろう。

第39弾 幼馴染みが帰ってきた！（後書き）

早口言葉のコーナー！

『アリアのアミカはマミヤあかり』

作者が挑戦したところ…

アリアのアミカはマミヤあかり アリアのアミカはマミヤあかり
アリアのマミっ！

……出来ませんでした。

第40弾 レインVS白雪（前書き）

修学旅行、自由行動の際に行きたい場所を書けと言われ、

『京都国際マンガミュージアム（うる覚え）』

『アニメイト』

と書いたところ、班長に『駄目に決まってるんだろ』的な事を言われ、ボツりました。

ちなみに、昨年度には自由行動の時アニメイト行って、GPSで場所特定されて捕まった猛者がいたらしいです。

流石先輩達だ、と思いましたさ。

第40弾 レインVS白雪

第40弾 レインVS白雪

「みんなあゝ！ りりりんが帰ってきたよあゝ！」

『うおおおおお！』

教室に入っただけで、理子は自分の帰りをアピールする。すると、クラスの人間……声から、そして理子の容姿等からは男子が多いように思われるだろうが、実際にはクラスのほぼ全員が盛り上がった。ミチルや武藤といったテンションの高い数人が盛り上げ、案内ノリの良い静奈もめちやくちゃにテンションを上げている。端から見ても、嗚呼、青春だね。の一言で片付けられる異様な熱気を放つ、東京武偵高2年A組は今日も元氣だ。

少し離れたところで我関せず、といった様子のキンジとアリアを横目に見ながら、レインは一応グループの輪に入りつつもそこまでテンションを上げてない不知火に話しかけられた。

「遠山君達、機嫌悪そうだね」

「あいつら……なんで理子を睨んでるんだろう？」

そう、隠そうとしても『紫電の雷神』、レインにはバレバレの明らか敵意のような視線を、彼らは理子に送っていたのだ。

「……まあ、喧嘩でもしたんだろうね」

テキストに話を切り上げ、レインは教科書の準備をする。次は英語アリアとレインは寝ていても何の問題もないが（むしろ先生にご教授できるレベルだろう）、一応内申を下げられるのは拙かったため、きちんと授業を受ける事にした。

「……で、また合宿か」

今、レイン 並びに白雪、静奈。つまり、SSRの面子は島根にいた。先ほどレインが独り言のように呟いた通り、合宿なのだ。つい先日恐山に合宿に行つてたのにまた合宿。レインがぼやくのも仕方ない事かも知れなかった。

「成瀬君、あなたは確か合宿に来なくても良いって言われてなかった？」

「はあ!？」

白雪の全く予想外の言葉に、レインは間の抜けた声を上げた。

「なんだ? 聞いていなかったのか」

呆れたような声を漏らす静奈の方を向きながら、レインは溜め息をついた。

千鶴先生(あの人)か……

そう、あの適当教師、凰 千鶴、あの人管理不行き届きだ。

「ま、まあ、合宿のご飯は美味しいし!」

白雪のフォローがかえって場の空気を更に重くさせたのは余談だ。

SSRに何故合宿が多いかといえば、超能力を高めるためには霊的な力の強い、あるいは集まりやすい場所、所謂パワースポットなる場所で訓練するのが効果的と言われているからだ。つまり、というか大体の合宿というものは訓練のためにあるものであり、既に熟練とされているレインが合宿に参加する必要はない。

だが、教師の管理不行き届きという悲しい理由により、合宿に参加せざるをえない状況であるレインは、半ばやけくそだった。

「で? 今回は何をすれば良いんですか?」

そろそろ慣れてきた、といった感じのレインの声に、事の発端こと千鶴は、

「うーん……まあ、とりあえず」

パチン、と指をならす。

すると、ブォン……というモニターが作動するような音とともに、辺

りの景色が移り変わる。

「ちよつとバトつてもらおうか」

その景色は、まさに武偵高強襲科のバトルフィールドだった。

「さて……じゃあ、まずは」

言いながら、なめ回すような視線を生徒達に送り続ける。誰を戦わせようか、と吟味しているようだ。

「星伽と成瀬。バトれ」

やっぱりか。それが、レインの感想だった。

そりゃあ、世界最強の超能力者の一人であるレインと渡り合える者などそうそういる訳がない。唯一、良い勝負……は、出来なくとも、食らいつけそうなのは武偵高のホープ、星伽 白雪その人しかいないだろう。それが、千鶴とレイン、その他SSR共通の認識だった。

「わ、私じゃ無理ですよ！」

オドオドと、困ったように辺りをうろろるとさ迷いながら狼狽えている白雪を見て、先日の魔剣戦は夢だったのでは？ という懸念を抱いたレインだったが、しかしその疑惑は即座に霧散した。

白雪の頭にちよこん、と結んだ白いリボン。

あれをとればあら不思議、彼女は世界に数人しかいないG17の超能力者に早変わりするのだ。

ちなみに、リボンを外していない時のGは10くらいらしい。充分強い。

「良いよ、白雪。俺にはこれがある」

言いながら、レインが手に着けたのは……先日、アリアに命令されて大量に購入しておいた銀の手錠。対超能力者用のそれを付けると、レインの力は急速に弱まっていた。

「ほら、これなら問題ないでしょ？」

これでレインの現在のGは7程度。端から見れば十分に強いが、レインから見れば弱すぎて欠伸が出る程度だった。

「そ、そういう問題じゃなくて……」

超能力の面では白雪が勝っていたはずだが、それでも白雪は決して

いた。レインは溜め息をつきながら、仕方なしに秘密兵器を使う事にする。

「そういえばさあ、キンジはこの後もイ・ウーと戦うんだよねえ」

「！」

白雪の肩が一瞬、ビクッ！ と跳ねる。

それを心の中で笑いながら見て、レインは更に唆すように白雪に追撃を仕掛けた。

「もし雷使いのイ・ウーの犯罪者とキンジが戦うその時、俺みたいな雷使いとの戦闘経験がある奴がいると、彼はどんなに頼もしく思うだろうね？」

まあ、そんな時は俺が速攻で倒すけどね、とは言わず、白雪の反応を待つ　必要はなかった。

「成瀬君、お手合わせ願います」

白雪は既にイロカネアヤメを抜刀　居合い切りを放ってきた！

「うお！？」

対するレインは、白雪のいきなりの襲撃に驚きつつも水月を逆手で抜刀、その紫の刃で白雪のイロカネアヤメを受け止める。

ガキイン、と赤い火花が散り、レインはすぐさま飛び退いた。

白雪が反転、逆向きの刃を頭に浴びせようとする。いくら刃の方じゃないからって、当たると結構痛いのだ。白雪は例の焔をブースターにしているため、尚更だ。

レインは雷神化し、その高まった動体視力で刃を視界に捉える。

水月を斜めに構え、イロカネアヤメをいなす。その勢いのまま、白雪に突きを放つ。当たれば骨折は免れないだろうが、そこは訓練のため、二人ともそういう攻撃は相手が避けられる速度で放つようにわきまえていた。案の定、白雪は水月の刃を回避し、イロカネアヤメを地面に突き刺しブレーキをかける。

これまでの攻防で、二人はほとんど超能力を使用していない。互いに精神力の消耗を抑えようとしていたのだが、それはどうやら無理らしい、と二人は刀を握る手に力を込める。

「行くぞ（行きます）！」

二人の声が重なり、レインの水月、白雪のイロカネアヤメが再び火花を散らす。

「……ッ！」

今回、先に飛び退いたのは……白雪だった。

バチバチ、とレインの水月から、その刀身と同じ、紫の雷が音を立てて迸る。

それが、白雪に武器を通して流れてきたのだ。もちろん、治癒系統の超能力者の存在を考慮した上での事だ。

「もう降参する？」

「まだ……まだ、です！」

白雪は更に焰を拡大させ、イロカネアヤメの切れ味を高めていく。

白雪は、イロカネアヤメを振りかぶった。

まずいな……。

「はあっ！」

白雪の、鈴の音のような声と同時に、レインの防弾、防刃制服が裂け、少し切れる。

「……やるね……！」

レインは喜色をたたえ、白雪と再び斬り結んだ。

「はあっ！」

カーン！

けたたましい金属音と共に、白雪の手からイロカネアヤメが離れる。レインは水月のあつてないような刃を、白雪の首筋に突きつけた。

「……俺の勝ち、でいいかな？」

「ありがとう、成瀬君」

残念そうに力なく笑った白雪を見て、レインは鞘に水月を納めた。すぐさま白雪とレインに治癒系能力者が駆け寄るが、レインはやはりと断った。意図としては、単純に傷がすぐに治るのがなんだか

怖いという、なんとも自分を棚に上げたものだった。

「全く、とんだ馬鹿者だな、お前は」

静奈に叱られ苦笑いしつつ、レインは満足気に伸びをした。静奈は救急箱を片手に持っていた。どうやら手当してくれるらしく、レインも彼女の厚意に甘える事にした。

手錠を外す。途端に、力が溢れるように自分の内からふつつと沸き上がってくる。

「たまには、こういうのも良いものだよ」

レインは、静奈に絆創膏を貼られている間にも、外した手錠をくるくると回していた。

第40弾 レインVS白雪（後書き）

SSRの合宿が多すぎて、原作と絡めないのを危惧した作者の苦し紛れの作戦です……なんか、完璧後付けですが気にしないのです。

第41弾 人助けは人を呼び込む（前書き）

アニメのARIA5話……何故、何故キンジのあの名ゼリフをカットしたんだああああ！

『俺がBGMくらいにはなってる！』
個人的に滅茶苦茶格好良かったのに！

第41弾 人助けは人を呼び込む

第41弾 人助けは人を呼び込む

白雪との試合やら何やらを終え、レイン達は武偵高に帰ってきた。今回も様々な不幸というか災難というかに見舞われたものの、前回のジャンヌほど特筆すべき事ではなかったため割愛。そういう訳で、レインは部屋に帰るべく武偵高近くのレインボーブリッジを通っていた。

「さて、帰ったらキンジ達と任務にでも行くかな……！？」

レインは退屈そうにタクシーの窓から外を眺めて 気づいた。

トラックが横転し、煙を上げている。その近くで、激しい銃撃戦が行われている。

恐らく車輛科、諜報科、通信科辺りの武偵高の生徒達だろう。あの面子を見る限りでは、犯人の護送中に犯罪グループの襲撃を受け、戦闘経験の薄い彼らは非情に困ってるようだ。そういえば、とミチルに聞いた話を思い出す。ここ、レインボーブリッジはこういう事件が多い。武偵高で捕まえた犯人の護送には、レインボーブリッジがよく使われるからだ。また、アリアとあかりが徒友を組むきっかけとなった事件もここで起こった。

それはともかく、犯罪が多いなら警備をちゃんとするなり護送に強襲科をつけるなり手段はそれなりにあると思うが、そんな事を考えている場合ではない、それはレインも弁えていた。

「運転手さん、お釣はいりません」

そう言ったレインは、諭吉五枚を置き、運転手が首を傾げる中バン！

運転中のタクシーのドアをあけ、外に飛び出した。

「強襲科の奴等はまだか!？」

怒鳴るように叫ぶ車輛科の男は、トラックの陰に隠れながらも相手の様子を伺っていた。

相手は六人、対して彼らは、車輛科のこの男、通信科の女子、そして諜報科の有明 悠の三人だ。

「くそっ! 有明! なんとかならないか!？」

男が頼ったのは、一年生にしてSランクの武偵、悠。だが、彼の戦闘方法ではこのただっ広い場所では最大の力を発揮できない。

「ぼ、僕は……」

そのオドオドした態度に軽く舌打ちし、男は拳銃を構える。しかし、犯人グループとの戦力差は明らかであり、牽制程度の意味も持たない。

「まずい……! もう、「駄目だ、そう言おうとしたであろう男の上を 紫の光が、通り過ぎた。」

「!??」

悠達護送組と犯人グループの驚愕に染まった顔を眺めながら、レインは雷神化、円状に辺りを警戒していた犯人グループ、その中心に着地する。

「ッ! このっ!」

一人の男が発砲する。それをレインは容易く避け、男の腹に掌底をぶち込む。その衝撃に加え、微弱な雷が男の身体を駆け巡り、強力なスタンガンを食らったように男は痙攣し、その場に倒れ伏す。

「『雷掌』……」

レインは低く、そして静かにその技の名を告げる。雷を手に纏わせ、直接相手に流し込むというレインの最も単純な技であり、それと同時に一番こうい輩を逮捕しやすい技だ。

「てめえ!」

レインの力量を理解したのか、次は全員でかかってくる男達。いや、訂正しよう。この男達は、レインの力量など理解していなかった。これは例えるなら、蟻が五匹、龍に挑むようなものだ。

当然 勝ち目は無い。

「『雷線』」

レインの断罪の宣告と同時に、男達は後ろから走る紫電に貫かれた。レインが円の中心に着地する寸前、彼らの背後にダガーを投擲していた事に気づいていなかった故の、犯人らの完全な油断だった。

「大丈夫、後遺症は残らないよ」

最早聞こえていないであろう男達に、それでもレインは安心させてやろうと声をかける。すると、意外な事に一人の男がそれに反応した。風貌からして、彼がリーダー格だろう。

「てめえ……まさか、『紫電の雷神』か……!？」

「……まあ、ね」

一瞬戸惑いつつも、レインは男の問いに答えた。男は苦虫を噛み潰したような、悔しそうな顔でレインを睨み付けていた。

そのレインの、背後。

駆け寄ってきた車輛科の男、通信科の女、そして諜報科の悠。

呆然とする一年生を放っておいた二人の武偵は、すぐさま犯人グループの拘束に取り組んだ。

その後ろで、レインの背中を見詰める悠。彼の口が、僅かに動いた。

「『紫電の雷神』……成瀬 レインハート」

その日、夕方になって漸く帰宅したレインは愕然とした。理由は、レインとキンジの部屋、その扉の前に……なんか、モジモジして突っ立っている人がいた。

なんだかよくわからないが、インターホンに手を伸ばしたり戻したりしていた。多分、インターホンを押したいのだろうという事くらいは容易に想像できる。だが、レインがわからないのはそこではなかった。

じい〜……

そー……

ぱっ。

じい〜……

そー……

ぱっ。

さつきから続いていたインターホンを押そうとして戻すのを、延々と繰り返している。

その行動に、レインは、こめかみに青筋を作りながら、完全に苛立っていた。

「（なんなんだよ！ 押すなら早く押せばいいでしょ！？ ああ、もう見てて面倒くさっ！）」

苛立ちが頂点を遙かに越え、そのまま大気圏外まで飛んでいきそうだったため、レインは結局インターホンを押さなかつた少年に声をかけた。

「ねえ」

「ひああっ!？」

レインの言葉に、少年は女のような甲高い叫び声をあげる。

「あ、な、成瀬、先輩……!」

どうやら少年はレインの事を知っているようで、様子から察するにレインに用があつたようだ。

「お前は……確か」

そしてレインも彼の顔には見覚えがあつた。

肩にかかるくらいの、男子にしては長い茶髪で、女と間違えそうな端正な顔だち（童顔）。その顔は、確かに

「有明 悠、かな？ 1年諜報科でSランクの」

そう、先ほどの犯人護送襲撃事件（仮）の現場にいた人物であり、レインが言ったように一年生にしてSランクである優秀な、いや、天才と称される少年だった。

「あ、その……そ、そうです」

……レインが聞いていた話によれば、彼は『極度の緊張しい』だとか、『超絶な内気』だとか、挙げ句の果てには『弱々しさSランク』

などとまで言われていて、さすがにそんな事はないだろう、と腹を括っていたのだが……どうやら、今回はかりは真性の情報らしい。ソースはレイン自身だ。

「で？ 何か用でもあるのかい？」

内気な彼を警戒させないよう、努めて優しく声を出したのだが……

「ほう、すいません、すいません！」

作戦失敗、謝らせてしまった。というか、この作戦を一発で成功させられる者などイ・ウーにもいないだろう。だからといって、ここで

『あーもういいから！ 用件は！？』

などと強い口調で言ったが最後、彼は委縮しきり、最悪泣き出しかねない。何故だか、そんな直感があった。仕方なしに、レインは少し女性に出すような甘い声を出す。その方がリラックスできるだろう、という配慮の結果であり、決して他意は無い。

「謝らなくてもいいよ、悠。それより、俺はお前が俺に何を話したいのかが知りたいな？」

「あう、は、はい……」

多少戸惑っているようだが、悠は話してくれる気になったようだ。

彼は、その小さな唇を動かし、レインが想像もしていなかった要求を突きつけた。

「成瀬先輩…… 僕の徒友アミカになって下さい」

第41弾 人助けは人を呼び込む（後書き）

最近、外出する機会が少ないです……ブッコフとメイトが恋しいよ。

第42弾 エンブレム(前書き)

アリア10巻早く出てほしいです。滅茶苦茶続きが気になる。

第42弾 エンブレム

第42弾 エンブレム

「徒友……ね。分かっているの？ 悠。徒友の契約を交わすには

「わ、分かっています。エンブレム、を30分以内に、先輩から、取ればいいんですよね……？」

かみかみながらも、悠は徒友契約の際の試練（儀式でもOKだ）の概要を説明してくれた。

レイン、そして上級生達が持つ星形のワッペン、通称『エンブレム』

それを二人が同意した上で上級生が身体の一部に着け、30分以内に下級生が取る。尚、それが出来なかった場合は相性不適正とみなされ、二度とその二人は徒友契約を結べない。ちなみに、レインは今まで何人も徒友を求められてきたが、全て蹴った。もちろん、エンブレムを行って。

「（どいつもこいつも、根性が無いんだよなあ……）」
教務科からは『必ず上級生は手加減するように』との通達が来ている。

だが、そのどいつもこいつもと言われる下級生らは、レインが少し雷を纏えば怖じ気づき、早々とリタイアしていった。中にはゴム手袋などというものを使用してくる者もいたが、そいつらも結局はレインを捕まえられず、当然エンブレムは手に入れられない。今までレインが断った徒友候補の下級生の数は、実に30人以上。だが、
「（……どうも、他の連中とは一味違うみたいだね）」

悠が瞳に宿す気迫に、レインは今までの輩との違いを実感していた。

ガチャツ。

レインは超能力を抑えるための銀製の手錠を、自らの手首にかける。教務科からのお達しであるからだだったが、その説明を受けていない下級生、悠はこの行為を挑発と受け取ったらしく、先ほどまでのオドオドした様子が一变、まだ少し落ち着きがないが、瞳に炎を宿している、とでもいうべきか。

彼の気迫は、流石Sランク、そう手放しで言える程度のそれだった。レインはエンブレムを防弾制服、その胸ポケットに着けた。ここがいつもエンブレム戦を行う際、レインがエンブレムを着ける場所だった。その前方から丸見えの場所にエンブレムを着ける事で、レインの実力、自信を表しているようだった。

「じゃあ、始めるよ」

言いながら、タイマーをセットした時計を悠に見せる。夕焼けが、彼らのいる屋上を赤く染めていく。

「スタート！」

掛け声と同時に、悠は爆発的な加速を見せ、瞬時にレインの懐に入る。

「！」

有明式歩法ノ参、『雨隠し』。

実際の速度はそこまで速くない。

が、相手に悟らせない重心の移動で、予想外のスピードで移動する。その歩法は、急加速が売りの技。

謂わば瞬発力。

驚きながらも、レインは咄嗟に身体を翻し、伸ばした手を避けた。その手に自分の腕を絡ませ、勢いを殺さず逆に利用し、悠を空に放り投げる。

悠は体勢を立て直し、衝撃を殺して着地した。

「着地したらすぐに動く！ 狙い撃ちにされるよ！」

その瞬間、レインの叱責と共に三発の銃弾が悠の防弾制服を捉えた。

「ぐっ…！」

苦悶の表情を浮かべたのも一瞬で、悠は即座に銃を抜き、射撃を行ってくる。

「無駄弾を撃たない。」

君の歩法なら、相手の隙が窺える位置から撃つのが定石かな」

悠の弾丸は、レインの身体にかすりもしない。

レインは通り過ぎていく銃弾に一瞥もくれてやらず、懐から出したスロージングダガーを両手に持ち、投擲。

計八本のダガーが悠に襲いかかるが、彼はそれを、片手に持ったナイフで全て弾いた。

「いいナイフ術だ。だけど」

悠はダガーを弾いた後、気づいた。やけに、レインの声が近い！

「集中しすぎだよ。」

もう少し余裕を持っていい」既に悠の目の前にいたレインは、ナイフをダガーで弾き飛ばす。更に軸足を刈り、悠を地面に倒れさせた。

「……まだ、やるかい？」

「まだ、まだです……！」

レインの言葉に、悠は更に闘志を燃えたぎらせ、這いつくばった状態から逆にレインの軸足を刈る。

「ッ！」

「貰っ…！」

体勢を崩したレインからエンブレムを奪おうとした瞬間　バチィ！

「あっ！」

声をあげ、悠は手を下げた。手に走る、静電気のような痛み。その正体は、言わずとも分かった。

レインの身体から、雷が放たれていたのだ。

「対超能力者の事も考えておきなよ？　でなければ、俺の徒友は務まらない」

そう言ったレインは、雷神化していた。

「（これが、雷神化……！）」

悠は、目の前にいる少年の、自分と一つ違いとは思えない気迫に、思わず気圧された。

それでも彼は、実力の四分の一も出していないのだ。ならば、本気を出せば一体どれほど

そのまま思考に頭を溺れそうになるのを、悠は頭を振って回避した。だが、そんな隙を見逃してやる程、レインはお人好しでは無かった。「敵を目の前にしてそんな隙を作るなんて、愚の骨頂だよ」

レインは防弾制服にブロウの銃弾を計六発、吐き出した。

「うっ！」

衝撃に耐えきれず、悠は後ろに吹っ飛ぶ。背中をフェンスに打ち付け、悠は力なく頭を垂れた。

「……気絶したかな」

レインが、そのままピクリとも動かない悠に近づいていく。

しゃがみこみ、悠の顔色を伺おうとした、その瞬間、

「ッ！」

レインは、雷神化して強化された身体能力で跳躍した。レインがいた空間を、後ろから（……）のナイフの一閃が通過する。

「これも外れ……！」

息を切らしながら悔しそうに呟いたのは、もちろん悠だった。

六発の弾丸を食らったあの瞬間、朦朧とした意識の中、彼はワイヤ―でナイフの一撃を仕掛けておいたのだ。

「今の攻撃は良かった。だけど、まだ俺を倒すには至らないよ」

レインは瞬時に悠の懐に潜り込み　パンツ！

雷掌を悠に打ち込む。

「うあ………！」

「………！？」

レインが驚愕の表情を浮かべる。強力なスタンガンのような電撃をくらい、悠はそのまま倒れる、はずだった。だが

「僕は、貴方と徒友を組みます………！」

その瞳に宿る闘志は未だ消えず、彼は懐からナイフを二本取り出し

た。

ダブル。アリアは双剣^{カトラ}双銃と呼ばれている、その原型。刀剣、及び拳銃を両手に持ち使用する高等技術だ。それが伊達や酔狂でない事は、彼のナイフ捌きが証明していた。

だがしかし、レインが驚いたのはダブルでも、ましてや手加減した雷掌を受けて起き上がった事でもない。

「お前、まさか」

レインがあまりの衝撃に言葉を失い、硬直していた。好機。

それを肌で感じ取った悠は、二本のナイフを交互に繰り出していく。その片方が、呆けていたレインを捉えた。

「うっ！？」

レインがよろめき、体勢を崩した直後。彼に馬乗りになるような体勢で、悠がレインを押し倒した。両手をしっかりと押さえられ、足も封じられレインは文字通り手も足も出ない。悠が電撃の苦痛に顔を顔をしかめる事は、無かった。レインは雷神化を解除していたのだ。それを不審に思いながらも、悠はレインの胸ポケットのエンブレムに手を伸ばし エンブレムを、取った。

「と、取った……？」

自分の手中にあるエンブレムと、自分の真下にいるレインを交互に見て……悠は、歓喜の声をあげた。

「や、やりました！ やりましたよレイン先輩！」

嬉しさのあまり飛び跳ね、悠はレインに抱きついた。だが 何故か頬を紅潮させたレインは、とんでもない衝撃の事実を口にした。

「悠、お前……」

女だったの！？

ピシッ。

そんな効果音が聞こえてきそうな程、悠は硬直した。

「ななな、何を言つて、いるんですか。ははは、そ、そんな訳あるわけないじゃないですか!？」

滅茶苦茶動揺している悠に、レインは自分が感じた事実、同時に謝罪の意味で一言、付け加えた。

「その……さっきの掌底の時……む、胸が」

顔を真っ赤にしながら言つたレインを見て、悠は一瞬意味がわからない、といったように呆け　彼、いや彼女も顔を赤く染め、胸の辺りを押さえた。理解したのだ。彼は先ほどの掌底を悠に浴びせた際、彼女の　胸を触っていた事を。

「き……」

「!?!?　ちょ、ちよつと待つた!」

レインの制止も届かず、彼女、有明　悠は

「きゃあああああああ!」

探偵科男子寮全域に、悲鳴を轟かせた。

そう、一年生にして諜報科Sランク武偵である天才少年、有明　悠は、天才少女だったのだ!

第42弾 エンブレム（後書き）

嗚呼、またヒロインが増えた……

第43弾 徒兄弟改め徒兄妹結成！（前書き）

という訳で、またヒロインが増えました。

また、更に出したいヒロインがいるため、また増える可能性が……！
これ以上増やしたら出番が無くなるでしょうが！

第43弾 徒兄弟改め徒兄妹結成！

第43弾 徒兄弟改め徒兄妹結成！

「すみませんでした」
土下座。

土の下に座ると書いて、土下座。それは最上級の謝罪の意味を持ち、同時に屈辱の代名詞でもあったりする。それを、下級生にしているのは『紫電の雷神』という凄腕の武偵として世界に名を轟かせる男、成瀬 レインハートその人だった。何故彼が下級生などに土下座しているのか？

「せ、先輩！ もう頭をあげて下さい！」

目の前のオドオドした少女、有明 悠と徒友契約のためのエンブレム戦を行った際、

「でも……その、胸、触っちゃったし……」

その時の事を思い出したのか、レインは再び顔を赤く染める。

「確かにびつくりしましたけど……もう大丈夫ですよ」

悠の言葉に、レインが頭を上げるが、悠の顔を直視出来ないでいる。悠は今、男装をやめ、素の女の子の格好をしていた。

元々中性的な容姿の美少年だと思っていたが、それでも美『少年』だと思えたのは男のような肌のためであった。だが、それは彼女のメイクの賜物で、それを洗って落とした彼女の肌は白く、驚く程にすべすべとしていた。

武偵高の臙脂色の制服が彼女の赤みがかかった茶髪を引き立たせ、服を着替えた事によって身体のラインがくっきり見える。それは、高校生にしては随分とおうとつのあるものだった。

「そ、それよりも！」

まじまじと彼女を見つめていたため、急に彼女に顔を覗き込まれて、

レインは少々顔を赤らめた。そんなレインに、悠は手に持ったワッペン……エンブレムを、つきだした。

「これで、私達徒友ですね！」

「……そうだね。じゃあ、はいこれ」

レインは、熊のぬいぐるみ型ストラップのついた鍵を差し出した。徒友は、まず条件として互いに部屋の鍵を交換しなくてはならないのだが……

「あ、悠はいいよ」

「へ？」

自室の鍵を手にしたまま首を傾げる悠に、レインは理由を説明する。要約すれば、こうだ。

悠は何らかの理由があり、転装生チェンジをしていた。転装生というのは、男子が女子の、女子が男子のふりをする事の武偵高用語だ。だが、彼女が女である事がばれていないところを見ると、彼女は一人部屋なのだろう、と。それは悠に確認した結果、正解だった。つまり、よく昔から言われている『女の一人暮らしは危ない』状態なのだが……ここは武偵高。未来の優秀な武偵が集まるこの学園は、それなりのセキュリティがあるため、そこは大した心配にはならない。問題は別にある。

「ほら、なんか……間違いを起こしたくはないからさ」

そう、この二人も男と女。その女の方が、徒友を結んでいるとはいえ男に部屋の鍵を渡すのは非常に心許ない。その点、レインの部屋には部屋の主であるキンジの他にも居候のエリア、何かにつけてキンジの世話を焼く白雪。余談だが、彼女は魔剣の事件の後、キンジやレインと同じくエリアのドレイ3号となった。まあそれは置いておき、レイン達の部屋にはまだ、ミチル、綾瀬、静奈といった女性陣が数多くいる（いつでもいる訳ではなく、出入り自由なだけだが）ため、心配ない。

「で、でも、先輩に鍵、持ってたほしいですっ！」

珍しくはつきり自分の意見を言う悠を不審に思いながらも、レイン

は渋々彼女の部屋の鍵を受け取った。

「じゃ、じゃあ、教務科に、徒友の申請しにいきませんか？　だ、駄目ですか？」

「そんな訳ないよ。じゃあ、行こうか」

レインはそう促し、悠と一緒に教務科に向かった。

「なんや。また別の女連れてるんか、成瀬え」

「人聞きの悪い事を言わないで下さい、蘭豹先生。それにこいつは男です」

教務科についたレイン達は、とりあえず一番手近にいた先生、蘭豹を捕まえて（もちろん、逮捕や拘束といった捕まえてではない）徒友申請書を提出しようと考えたのだが、蘭豹が碌でもない事を言い出したため、レインは露骨に呆れたような表情を浮かべた。

「事実やないか。それも、情報科の百合姉妹に狙撃科のヘッドホン、SSRの時代錯誤の大和撫子と男口調。それに探偵科の改造制服、そして強襲科の神崎。いちにーさん……七人もつれ回して、もう一人連れてきたってことなんか？」

「だから違います。皆とはそういう関係ではありませんし、こいつは男です。あと、アリアと白雪は俺じゃなくてキンジです」

「ほお、なら残りはお前の、と……」

あまりに蘭豹がしつこいため、レインは溜め息をつく。案外、この戦闘意外に興味の無さそうな強襲科の先生は恋愛沙汰が大の好物らしい。そこら辺はやはり女性なのだろう。それなら、とキンジが前にしていた話を思い出す。この蘭豹、所謂出会い系サイトなるものをしていて、ハンドルネームが『らんらん』。恐らく蘭豹からとったのだろうが、本人から全くもってかけ離れたメルヘンチックな名前となっていた。聞いた時、レインが思わず爆笑してしまった程だ。しかも、彼女は年齢を詐称しているらしい。まあ、蘭豹は本性を知らず、その背中を刀を下ろして身支度やら化粧やらを整えれば、そ

の年齢で通るくらいに見える。ばれなければ問題はないだろう。武偵がそんな犯罪（そういうには些かオーバーな気もするが）に手を染めていいのか？ との声がよく上がるが、実は大半の武偵は少しばかり犯罪をおかす、というよりは法律の外で活動するため、あまり小さな事でお咎めはない。キンジはベレッタを違法改造しているが、これは犯人をより安全に逮捕するためであり見逃されている。蘭豹の年齢詐称にしたって、潜入捜査だと言えば、はいそうですかで話が終わる。

話が脱線したが、レインは変わらず蘭豹の茶々を流していた。

「もうそれでいいです。これ、徒友の申請書なんで宜しく願います」

ひら、と一枚の紙を蘭豹に手渡し、そそくさとレイン達は帰ってしまった。

その帰り道。救護科の校舎を通っていると……ドタンバタン！

「ん？」

上から何か物音がしてきた。今日は救護科には誰もおらず、当然今のような音がするはずもない。もしか強盗だろうか、という危惧がレインの頭をよぎる。だとしたら、これが彼女、悠との初任務になるだろう。

それなら、少し彼女に経験を積ませるためにもある程度は……などと、頭の中で作戦をたてる。

すると、物音がした部屋に動きがあった。

ガラララ！

窓が開けられ、そこから身を乗り出していたのは

「キンジ……あいつ、何をしてるんだ」

そう、何やら焦った様子のキンジ。彼は中にいる誰かに向けて何事か言った後、七階はあろう救護科の窓から飛び降りた。

「あっ！」

悠が声をあげるのも仕方ない。ベルトに仕組まれたワイヤーではあそこまでの長さはカバーできない。宙ずりになったキンジの姿を思い浮かべたのだろうか？　そこまで心配する事でもないだろうに。

「大丈夫だよ、悠。見て」

キンジは当然、そうならないよう策を講じてある。鎖鎌のようなものとワイヤーを併用し、見事地面にふんわりと着地したのだ。

「（あの鎖鎌……成程、中にいるのは白雪か）」

キンジの周辺のことを監察して彼にふりかかった災難の正体を予想する。

「キンちゃん！」

すると、窓から予想通りの人物、白雪が顔を出した。しかも、

「この続き（……）はまた今度！　今度ね」

やたら続きを強調し、そう叫ぶと顔を部屋に戻した。

そんな中、一連の流れを見ていたレインは神、

いや悠に感謝する。なんとまあ、ネタにしやすそうな出来事だろう！　既に事の終始はケータイに納めてある。後はこれをいくらかでミチルや綾瀬、もしくは理子に教えるだけだ。

「くく……ハーツハツハツ！」

高らかな笑いを響かせるレインに　9ミリ弾丸が飛来する。

当然のように居合い抜きでそれを弾き、レインは怒り浸透のキンジ（……）の方を向いた。

「レイン……全っ部聞こえてたんだが？」

どうやらキンジに心の声が全て筒抜けだったらしい。いや、それは悠も同じだったが。要するに、彼は自分の作戦をぺらぺらと自ら吐露していたのだ。

「まあ、わざとだけど」

「……？」

二人が首を傾げるのも意に介さず、レインは言葉を続けた。

「冗談だよ、キンジ。俺がそんな非道な事をする訳ないじゃないか」
にこやかな笑みを浮かべ、レインは自分の以前の行為をおもいつき

り棚上げした。彼はアリアが子供は出来てなかった発言をした際、ミチルにその情報を十万で売ろうとしたのだ。そりゃあ、信憑性が薄いはずだ。

「まあともかく、部屋に戻ろう。彼の事も紹介しなきゃだしね」
そう言ったレインは、悠の手を取り自室へ向かう事を促した。

第43弾 徒兄弟改め徒兄妹結成！（後書き）

A Bの方が滞っております……どうしたものか。

第44弾 お決まりの展開（前書き）

はい、タイトル通りお決まりの展開です。

第44弾 お決まりの展開

第44弾 お決まりの展開

「……と、という訳で、レイン先輩の徒兄弟にさせて頂きました、有明 悠です。よ、よろしくおねがいます」

ペコリ、と頭を下げた悠に、部屋にいた綾瀬、ミチル、静奈は品定めをするような視線を悠に送る。

「へえ……君はレインのエンブレムを取ったのか」

「凄いね〜超凄いね〜」

静奈とミチルが手放して称賛の言葉を送るため、悠は畏縮している。そんな中、そういえばといった風に綾瀬が悠に声をかける。

「有明君。一年生だからって丁寧にわざわざ徒兄弟アミンコって言わなくてもいいのよ？ 徒姉妹アミカと徒兄弟の総称が徒友アミカなんだから、徒友でいいんじゃないかしら？」

彼女は悠にリラックスして貰おう、という意図で、まずは砕けた態度をとらせようと考えた結果の言葉だったのだが、悠、そしてレインの身体がピシッ！
と一瞬間まる。

「そそそ、そうですよね！ 以後気をつけますう！」

「いや、わざわざ無理に変えなくても……」

「いや、確かに不自然だったからな！ そもそも紛らわしいし、徒友ミカで統一しよう！ なあ悠（ボコを出さないためにも！）！」

「はい、先輩！」

二人は自然、肩を組みながらぎこちない笑いを浮かべ始めた。

徒兄弟と強調しすぎると、ただでさえ中性的な容姿で、ときたま『男の娘』と称される悠だ。何かの拍子に女だとバレルか、もしかしたら不審に思われるかもしれない。そういう訳にはいかないだろう。

「変なの……あ、ところでアリアとキンジ君は？」

思い出したように辺りを見回す綾瀬に、レインはバレずに乗りきった安堵から溜め息をつき、呼吸を整えてから答えた。

「さっき会った時は、アリアとどこかへ出掛けるとか言っていましたか」

「成程。デートね」

「……！！！！」

綾瀬の核心をついたセリフに、静奈、ミチル、悠が顔を赤くしながらレインを見つめる。

レインはといえば、そこで赤くなるのは拙いだろう、と悠に心の中で突っ込みを入れていた。

「どうしようかしら。後を追おうか、それとも……」

「先輩。何か恐ろしい事を考えてませんか」

会話の途中で、何故か突如黒い笑みを浮かべ、不敵に微笑む綾瀬に若干の戦慄と大半の恐怖を抱きながらも、嫌な予感しかしなかったため一応レインは止めに入っておいた。

「ええー、ボケる前に突っ込むのは反則よ、レイン君」

「そう言ってる貴女のケータイのディスプレイは綴先生を示してますがね」

尋問の超天才の先生、綴 梅子。あの人に吐かせられない犯罪者がいたら、もう日本には吐かせられる尋問科がないだろうとまで言われる実力者だ。尋問の。

この人はキンジ達をこの人に尋問させるつもりなのだろうか。

「冗談よ、冗談」

「全然冗談に聞こえませんがね」

レインなそんな言葉もどこふく風、綾瀬は悠と話し始めてしまった。頼むからボ口を出さないでくれよ、そう神、いや悠に祈りつつ、レインは女だらけのリビングから退避、自室に戻った。

翌日 武偵高救護科、とある一室の前。

レインは、薄っぺらい一枚の紙を手にしたまま、その部屋の前にいた。

「再検査、ねえ……」

そう、再検査。それこそがレインがこの場所に呼ばれた理由である。何の再検査かと言えば、単なる血液検査だ。何故それで再検査などさせられるのか分からなかったが、恐らくはまた教務科の不手際だろう。レインのあやふやな記憶によれば、確か救護科の担当は臨時の小夜鳴。美形な好青年だ。

「あの人、なんか女性関連で黒い噂があるんだけど……」

呼び出された人物に、多少不安を覚える。確か、小夜鳴は自室だから研究室だけに女生徒を連れ込み、その女生徒はフラフラでそこから出てきたという。だが、レインが戦慄を覚えたのは、そこでもあるがそこではない。

レインはふと、近くの窓に映る自分を見る。

……大丈夫、男だ。

360度どこからどう見ても、男だ。決して、女ではない。なんだか近頃似たような人がいた気がするが、その件に関してはスルーした。

彼にはこの件に関して、多少のトラウマがあった。といっても、最近の話だが……

レインは別に、中性的な容姿な訳ではない。

ただ、美形なのだ。

そのため、先日、何故かそういう話になった際、面白半分で女生徒に女装させられ、そしてそれが ストライク ど真ん中。

騒ぎを聞きつけた周辺の生徒達までもが、自分の事を見る。女子からは『お姉様〜！』と甲高い声で叫ばれ、男子からは『お姉様〜！』と野太い声で狂信される。

あ後は逃げおおせるのに大変だったものだ。しかし、これが後々、俗に言う同窓会的なノリでは『いい思い出』で片付けられるのだろ

うか。正直、レインにその自信は無かった。

「まあ……大丈夫だよ、きつと」

小夜鳴先生にそういう（……）属性が無ければ。

とりあえず全力で警戒しつつ、レインはその扉に手をかけ、ガラララ！

一気に開け放つ。するとそこには、

『……きゃあああああ！』

「うわあああ！」

色とりどりの、美女子達（しかも、レインが一瞬見渡した限りでは、一部を除き皆高名な血統の）がいました。なら何故悲鳴をあげているのかって？ それは、女子が血液検査のはずが何をしてるんだか
下着姿だったからだ。

レインは慌てて扉を閉め、扉に向けて、嘆かわしい事に最近する機会が多くなつた、土下座を発動させる。

「すいませんでしたあ！」

土下座するレインが、恐る恐る上を見上げると、そこにはやはり物言わぬ扉。だが、その重厚な扉に　　パン！

「……………」

乾いた破裂音と共に、穴が穿たれ　　レインの頬から、血が滴る。
ガラララ。

穴が空いた扉が、再び開け放たれたそこは、最早保健室などといった安全な場所ではなく

「……………何してるのよ、この」

地獄の閻魔様やら魔王様やら、いや魔王は違うか、のいらっしやる

「バカレイナー！」

地獄の門だったのだ。

閻魔様の文字通り鉄で、いや鉛で鉄槌（あれ？　意味不明じゃないか？）を下される。要するに、銃弾の雨。

「ぎゃああああ！　ち、ちよっとタイム！　アリア、これには深い

事情があゝ

「問答無用ー！ー！」

「人の話を聞けー！ー！」

アリアのガバメントの弾丸を超能力をまじえながらも必死で回避し、弾切れになったところでアリアに肉薄。銃を蹴りあげ、アリアから銃を奪う。

「死ね！ このバカレイン！ あんたまで強猥男だったなんて……」

男は皆ケダモノよ！」

アリアがそんな事をギャアギャア叫び、そろそろ女子らの視線が痛くなってきたところで、ようやくレインをこんなところに呼び出した元凶が現れた。

「おや？ 何をしているんですか？」

女子を卒倒させる、不知火ばりのイケメンスマイルを放つ眼鏡をかけた若い男性、小夜鳴は小首を傾げた。

第44弾 お決まりの展開（後書き）

最初は更新不定期だとか言ってた割に、何気に毎日更新してます……
結構がんばってます。

第45弾 狼…といってもあいつではない(前書き)

お気に入り登録数がいつの間にか100を突破していました！
皆様の応援のお陰です。

ありがとうございます。

第45弾 狼…といってもあいつではない

第45弾 狼…といってもあいつではない

小夜鳴の登場によって、いい具合に場の緊張がほぐれ、レインもようやく落ち着きを取り戻した。

「先生…：なんで女子ばかりの中、俺まで呼び出したんですか？」
気を取り直したレインは、溜め息混じりの瞳を小夜鳴に浴びせる。
実際問題、それが原因で死にかけたのだ。それなりの説明をしても
らわない事には、納得できるはずもない。

だが、小夜鳴の答えは『それなり』でもなんでもない、至って普通の事情だった。

「いやあ、単なる書類上のミスです。私の不注意でした。すみません」

ペコリ、と丁寧なお辞儀を見せる小夜鳴は余裕綽々な表情を見せていたが、対して謝られる側のレインは、目上の者の謝罪の言葉に、少し焦り気味だった。まさか、ちよつとからかうつもりがここまで丁寧な反応で返されるとは思っていなかったのだ。

正直 調子が狂う。

それを実感しながらも、しかしレインは年長者に対して頭が高いのは落ち着かない上拙かったため、小夜鳴に頭をあげるように促す。
小夜鳴は笑顔を浮かべながら、下げていた頭をあげ、姿勢を正す。
その長身は、頭がレインの一個や二個分でかい。

「それにしても、その…：服は脱がなくていいんですよ。血液をとるだけですから」

その言葉を聞いた瞬間、女生徒達は制服を着始めた。心なしか、その顔はほんのり赤い。

ちなみに、幼い（高校生になって幼いはどうかと思うが、世間一般

には幼いというレベルだ）女の武偵はときたま、武偵娘と呼ばれるが、彼女らは原始人レベルに羞恥心がない、と揶揄される事があるらしいが……どうやら、そんな事は全然ないようで、皆そそくさと着替える。

いや。一人だけ、ただ一点をひたすらに見つめて、微動だにしない女子が一人。
レキ。

『ロボット・レキ』と呼ばれる事もある程感情に乏しい少女。その実、狙撃科のSランク武偵であり、その銃弾は2キロ先の空き缶を射抜く。

そんな彼女の双眸は

「いいよ、レキ。……俺がやる（……）」

レインは動こうとしたレキを手で制し、歩み始めた。一步、また一步と……ロツカーに近づいていく。

ガラララ。

ロツカーをあけると、そこには……

「やあキンジ、武藤。そんなところで、タイムマシンでも探してたのかな？」

キンジと武藤がいた。

まず武藤、このバカは100%女子の再検査を覗きにきた。有罪だ。だが、レインにはキンジがここに潜入した意図が分からなかった。

彼は女嫌いと言高（レインから見たら、嫌いというより避けているようだ）キンジが、こんなところに入ってもメリットなど無いだろう。何か事情がある、そう判断したレインはキンジの処分はアリアに任せる事にした。それは死刑に処するようなものだが。

ともかく、レインはキンジと武藤を放置し、そのロツカーを蹴り飛ばした。

「!?」

全員、いや、レキ以外が驚愕する中、先ほどロツカーがあつた壁が、バリイ！

耳をつんざくような音と共に、何者かに突き破られた。

その正体は、

「お、狼……!?!」

そう、狼。王のような気品すら漂わせる殺気、そして100キロはあるつかという巨体。レインの記憶によれば、絶滅危惧種、コーカサスハクギンオオカミ、それも成獣だろう。

キンジと武藤が嘘だろ、と呟いているが……そう呟くのも仕方ない事だ。何しろ、ここは日本。狼なんて動物園でも拝めない狂暴生物、教本でしか見たことがないはずだ。まあ、

「……レイン!?!」

突然出現した巨大な狼にも臆さず、真っ直ぐに向かっっていくレインは、とある面倒な犯罪者のお陰で狼を見馴れていたが。

その件で多少狼に恨み、とまではいわなくともいい思いはしないので……ヒュン!

狼に向けて掌底を放つ。もちろん、雷を纏わせてある。

だが、相当訓練されているのか、狼はレインの掌底をかわしこの時点で先日の犯罪者共よりも戦闘力が高い事が証明された、あちらもレインの戦闘力を察したのか、逃亡を選んだ。本来なら、逃げる動物は追わない主義（犯人はもちろん逃がさない）だったが、さすがにあんな馬鹿でかい狼を、武偵高とはいえ東京にほつたらかしにしておいたら間違いなくパニックになる。最悪の場合、死傷者も出るだろう。

レインはプロウを抜き、狼を追おうと走り出す。

「レイン! その茂みに俺のバイクがある! 使え!」

武藤が叫びながら投げた鍵をキャッチし、急いで外に出た。

「おいおい、武藤……どこまで逃げるつもりだったのさ?」

保健室の外の茂みの向こう、そこには、世界最強のエンジンを搭載したネイキッド・バイク、BMW・K1200Rが、その重厚な存

在感を露にしていた。アリア達から逃げるには、確かにこのくらいは必要かもしれないが……

レインが呆れながらキーを挿し、電源を着けた瞬間　ドラグノフ狙撃銃を背負った、レキがエンジンを噴かすレインに二人乗りをしてきた。下着姿で。

「レキ……どうするつもり？」

「あの狼を追います。貴方と共に　貴方では、狙撃対象を探せない」

「せめて防弾制服を着てほしいところだけど……仕方ないな、一つ約束させてくれ」

レインの溜め息混じりの言葉に、レキは小首を傾げた。そんなレキを見ながら、レインはレキの感情に乏しい瞳に視線を向けた。そして、

「お前を守らせてくれ」

レインのその言葉に、レキはいつものように平淡な声で、

「……分かりました」

しかしどこか嬉しそうに、頷いた。

「人工浮島の南端、工事現場です」

その超人的な視力で地面についた足跡を追うレキのナビゲートの通りに、バイクを反転させ狼の居場所へ向かう。

その後ろで、レキがカチャカチャ、とドラグノフに弾を込めている。

「……麻酔弾なの？」

「いえ、持ち合わせがありません。通常弾で仕留めます」

レキのその言葉に、自然、レインの表情が曇る。武偵の仕事の一端で、狂暴な動物を殺す事は多々ある。だが、レインは正直この仕事が苦手だった。無闇やたらと命を奪うのは、レインとしてもいい気

分はしない。なにより、自分より（体格が）小さな女の子が、なんの躊躇いもなく狼を 命を、撃てるという事実が彼の心を決める。

「……大丈夫です。策はあります」

「えっ？」

レインの表情から、今の心境を察したのが、レキはそう呟いて、後ろに目をやった。

「……レインさん、後ろです」

「…随分頭がいいね」

レキの言葉の意味を聞く前に、レインは彼女と同じく後ろをバックミラーで見た。そこには、狙撃対象である狼が、こちらへ向けて走っていた。

レキが見た足跡を、丁寧に踏んで戻っていたらしい。

狼がこちらに突進してくるのを、レインはバイクを反転させる。

「残念だけど、お前の相手は俺だ」

レインは狼の出前にブローのフルオート射撃で真一文字に穴を穿ち

パチン。

指を鳴らすと、地面から激しい紫電が空へ立ち上る。

『雷壁』。

雷を纏わせた銃弾を地面、もしくは壁に列にして撃ち込み、壁のように放電させる雷線の派生技。

その雷の壁を越える事は出来ないと判断したのか、狼は恐らく相当に訓練されているのだろうヒットアンドウェイで即時撤退。

人工浮島にできたクレバスを飛び越え、向こうに飛び去った。

対してレインは、

「嘗めるな！」

そう一喝し、レインはブローで工事現場の足場を即席ジャンプ台にして、ブン！

急加速。一気に、狼の方へ飛ぶ。そんな中、後ろのレキは

「私は、一発の銃弾」

いつもの、対象を狙撃する際の呪文のような言葉を、

「銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない」

跳躍するバイク、その座席をまたいで立ち上がった。いた。

「ただ、目的に向かって飛ぶだけ」

それはまるでレキの心を映すかのように、平淡で機械的な発砲音だった。

レキの弾丸は空に螺旋を描き、狼に、チュンツッ！

かすった。そう、直撃しなかった。

狙撃科のSランク武偵、『ロボット・レキ』の異名をとるあのレキの銃弾が、対象を直撃しなかった。それは、東京武偵高の人間なら大抵驚くであろう事だ。それほどに、レキの射撃の腕は異常なのだ。彼女の前で、レインも例に漏れず驚きを隠せずにいる。しかし先述したのは、別の意味で。

「レキ……お前は本当にあんな事をやってのけたのかい……？」

「ええ」

思わず出たセリフに、レキが頷きで返す。二人は無言でバイクを降り、狼の下へ向かった。

狼は、その巨体を地に伏せ、うずくまっていた。麻酔が聞いてきたのだ。麻酔。それを、麻酔弾など持っていなかったレキが、狼にかけられた理由

「貴方の脊髄と胸椎の間を銃弾で圧迫しました。五分は動けません」
レインにはなく、人語が理解できるかもわからない狼に、レキは淡々と事実を述べる。そして、

「……主を私に変えなさい」

そう、狼に告げた。

狼は 一瞬、身体をビクッ！ と震わせたものの、すぐにレキに、服従の証に跪いた。

「……レキ。武偵高ではペットは飼えないよ？」

「大丈夫です。武偵犬にしますから」

武偵犬とは、武偵用の警察犬のようなもので、人ならざるパートナーだ。鼻で犯人を追ったり、時に犯人を自力で捕まえたりする。

だが……

「……レキ。そいつはどう見ても狼だよ」

「問題ありません」

断固として言い張るレキに、彼女は意外と頑固な一面があると新たな発見をしたレインは、溜め息をついた。

「……近所迷惑にならない程度で、ね？」

「はい」

レキに釘をさして、レインはバイクにまたがった。その後ろでは、早速レキになついたらしい狼に、レキが『ハイマキ』という名前をつけていた。

そんなレキに防弾ブレザーを貸してやり、レインはレキを乗せてバイクのアクセルを噴かした。

第45弾 狼…といってもあいつではない(後書き)

感想お待ちしています)

第46弾 え？ デート？（前書き）

ブラド編がなんだか長くなりそうな予感がします

第46弾 え？ デート？

第46弾 え？ デート？

「はあ……」

あの後、レキはハイマキを自室で療養していたらしく、しばらく顔を見せなかったが、一応電話を入れてくれたので無事は確認済だった。まあ、ハイマキとレインのフリスビーは少々ハードだったため（最早フリスビーというより円盤の全力での投げ合いだった）、さしたる心配は両名にする必要はない、そう結論づける事にする。なので、しばらくは最近の疲れを癒そうと、部屋でゆっくりTVでも見てようか、と思っていたレインだったが……

「おおレイン。帰ったか」

そこには、TVを録画再生モードにして某人気バラエティー番組をご覧になっている、朝露 静奈その人がソファに寝転がっていた。完全に人様の部屋だと忘れていようだ。というか、レインにとつてスカートの中が見えそうで非常に困る体勢だったため、突っ込みも出来ない。慌てて目を逸らす始末だ。

「し、静奈……」

そんな仕草に首を傾げた静奈だったが、レインの視線の先、自分の格好を見て……バツ！

顔を真っ赤にして、姿勢を正した。

「ば、馬鹿……！ そういう事は、もっと早く……！」

口をあぐあぐ言わせる静奈は、結構無茶ぶりしてくる。たった今帰ってきたのに、どう注意しろと言うのか。結局、レインが選んだのは、

「し、ごめん……」

……沈黙。

レインが男らしくリードしてやればいいものを（主人公だからといってそれは無茶ぶりだろうか？）、変に言葉を詰まらせるものだから会話が続かなくなってしまうている。

だが、そんな男らしさを持ち合わせる女の子、静奈は沈黙に耐えきれ無かったのか痺れを切らしたのかは知らないが、顔を赤くしながらも、レインに、はつきり告げた。

「れ、レイン……ちょっと付き合ってくれないか？」

正直、チャンスだ。

それが、レインが部屋に戻った時の静奈の考えだった。なにせ、ここには静奈自身、そしてレインしかいないのだから。

誰にも邪魔されず、レインを誘うチャンスだ。

「（で、で……デートに）」

静奈は正直、成瀬 レインハートという男が分からなかった。

飄々としているようでどこか抜けたところもあり、だが、自分のピッチには全力で助けてくれる。……まあ、そんなテンプレートなヒーロー漫画のヒロインのような理由ではなく、本当はただ……優しい

かった。彼は、誰より。

それが自分へのみ向いているものではない事など百も承知だった。

だが、彼の笑った顔に、かけてくれる優しい言葉に、自分を包む優しい感触に。

嗚呼、この人を、この人の心を、自分にだけ向けられたらどれだけ幸せだろうか。

そう、考えてしまった。そうしたからには、もう止まらない。次々に案が浮かんだ。静奈としては、目標は、とりあえず キス。

高校生にもなつてどれだけ初心なんだ、とは言うまい。何故なら、彼女はこの最近まで一切そういう事には無縁な生活を送っていたからだ。

そんな彼女では、デートにどこに行けばいいかわからないのでは？

という心配は無用だ。デートとは、大抵男がリードするものだ。静奈は考えおり、自分がどこかへ引つ張って行かずとも、自然にレインが流れに乗せてくれるはず、そんな非常に身勝手な考えが静奈の頭に浮かんでいた。だが、彼女は思い出す。目の前に突っ立っている馬鹿のアホぶりを。

こんな類稀なる鈍感男（所謂唐変木）がそんな器用な真似が出来るはずがない。勝手にあてにしておいて、勝手に落胆されるといふな。んとも理不尽極まりない扱いを受けている事は、幸いにかレインにはわからない。

とりあえずは、あてにならないレインを放置し、バラエティー番組を見ているふりをしながら少女漫画を読みふける。漫画と現実を混同するのは静奈としても良しとはしないが、他に参考になりそうな本媒体がないのだから仕方ないだろう。

「し、静奈……」
ビクッ！

静奈は自分の肩が跳ね上がるのを自覚する。なにしろ、こちらから話そうと考えていた相手が、いきなり話かけてきたのだ。そう考えれば、仕方のないかもしれない。

「（な、なんだレインのやつ！ い、いきなり話かけてくるなんて、もしかして私をデートに……！）」
勢い余ってそんな妄想をし始める静奈だったが、そんなものはすぐに淡い空想だと思い知る。

レインが顔を真っ赤にして背けているのを、そして自分の警戒心の欠片も感じられないはしたない格好を、それぞれ見て、レインが顔を背ける理由をようやく把握した。

「ば、馬鹿……！ そういう事は、もっと早く……！」
「ご、ごめん！」

顔を赤くして、慌てて姿勢を正した静奈の方に、同じく顔を赤くしたレインが向き直る。だが……

……沈黙が流れる。

「（そこは男がどうにかするところじゃないのか!？）」

もつともな考えを抱くも、声に出していないため当然レインには届かない。しかも、更に顔を赤くし視線を泳がせるレインについて静奈は、

この臆病者め！

と目の前のヘタレ（レイン）を睨み付ける。

だが、その顔は尚も朱に染まっており、怒りの代わりにポジティブな思考が頭をよぎる。

そうだ、顔を赤くしているのだから、自分をきちんと異性として見てくれているのではないか？

と。もちろん、それは間違っていない。静奈は元々美少女であり、異性として見られない方がおかしいのだが、レインの態度に自分はただの友人、しかも男友達と同じレベルとしてしか見られていないのではないか？ という懸念を抱いていたのだ。

だが、その考えはどちらも半分当たりという結果だった。レインから見た彼女は、『可愛らしい女友達』であり、それ以上でもそれ以下でもない。なので、女子の敵のような感じだが、自分から好感度等を上げにいかないと当然振り向かない。

なんとも面倒な人を好きになってしまったものだ、そんな他人事のような考えを抱きつつ、静奈は意を決する。レインの性格上、日程を合わせれば断られる心配は皆無。そんなしょうもない後ろ楯は、しかし恋する乙女の背中を力強く押ししてくれた。

「れ、レイン……ちょっと付き合ってくれないか？」

「（えーと、つまりどういう事？）」

首を傾げるレインが今いる場所、そこは学園島の商店街。隣を歩くは、何故か武偵高の制服から着替えた（といっても防弾なのは変わらない）、艶やかな私服を身に纏った静奈。

かくいうレインも、防弾仕様の私服に着替えていた。

「レイン、どうした！ ほら、どこへ行きたいんだ！？」
やたらテンションの高い静奈はしきりにレインの腕を引っ張ってく
る。

なのでレインは、引っ張られるまま静奈の問いの答えを考える羽目
になった。それでも、それなりにオシャレなところに行きたいだろ
うな、とそれなりの気配りをしようと、レインはらしくもない小洒
落た服屋を選ぶ事にした。ちょっと服でも買ってやるか、そんな軽
い気持ちで、レインは服屋を指差す。すると静奈は想像以上の盛り
上がりを見せて、レインも気配りの甲斐があった、と満足気な表情
を浮かべた。だが。

彼は忘れていた……この世で最も恐ろしい、テンプレートな展開と
いうものを。

と、いう訳で。

レインの両手には、大量の紙袋（もちろん全部服）が抱えられる羽
目になったとき。

第46弾 え？ デート？（後書き）

ブラドの屋敷って確か二週間滞在でしたっけ？
長いなあ……

第47弾 可愛いあの娘は雨女？（前書き）

最近、伸び悩んでいます……むむう。
内容がまだ稚拙なのでしょうか？

第47弾 可愛いあの娘は雨女？

第47弾 可愛いあの娘は雨女？

「静奈……」

「何だレイン。もうバテたか？」

両手に高く積み上げられた紙袋を持ちながら、歩くだけで曲芸状態のレインにそぐわない言動だが、今のレインにそれを突っ込む余裕も元気もない。

「いや、それは平気なんだけど……」

「そうか。だったら次にいくぞ」

そう言つて静奈は先に進み始める。駆け足で。

「（鬼かつ、鬼畜かつ！）」

そんな悪態を（胸の内で）つきつつも、レインも負けじとダッシュ。ときたま聞こえる拍手の音が、何故か耳に痛い。

別に、腕力や財力、バランス感覚、まして体力の問題でも無かつた。無かつたのだが……

通りすがりの方々の視線がレインに突き刺さる。ある者は感嘆の、ある者は賞賛の視線を送ってくれるが、大体の人間が苦笑、もしくは爆笑。爆笑した者に殺意を覚えつつ、レインは走る。静奈は人混みを掻き分け上手く進むが、レインの方は勝手に人が道をあける。

「ちよつと待て、静奈！」

「ふふつ、頑張れ、レイン」

東京武偵高、商店街。

そこでは美少女を荷物の山が追いかけるといふシュールな光景が出来る上がつていた。

「ん……雨か」

雨はまずい。別に傘を持っていたとしても、この状況では関係ない。「やばいな、買った服が濡れる」

慌てて服をどうにかしようとするが、レインの持つ袋は多すぎて雨から守るのは不可能。そう考え、近くの建物に避難しようとして気づいた。

雨粒が、自分を避けて落ちてきている。

「（これは……）」

思い当たる節があったため、レインは静奈の方に踵を返す。

静奈は、レインが予想した通り手から青い光を放ち、それがレインと両手の袋、その少し上を丁度傘のように覆っている。

『激流の奏者』。

いつかの会話を思い出す。レインがその能力、便利だね、と言ったら、彼女はそうでもないさ、と答えたが、雨の日には傘要らずではないか。

レインはこちらを見て首を傾げる静奈を一瞥し、荷物を持ち直す。

「静奈。ずっと超能力ちからを使っているのは疲れるでしょ？ ロキシー

でも雨宿りしようよ」

超能力者が自身の超能力を使用する際、必要となるのはゲームのMPなどではなく、自身の精神力だ。

そのため、一般的な超能力者（超能力者に一般的も何もあったものではないと思うが）は、超能力を長時間使用すると全力で走った後のように疲弊するのだ。静奈もその例に漏れず、あまり長時間超能力を使用させ続けるのはレインとしては気が進まなかった。故に、レインは武偵高唯一のファミレス、ロキシーに誘ったのだ。

「し、仕方ないな。お前がそう言うならな」

静奈が口の端を吊り上げながらそう言った事に、こういう男女関係に鋭い方だ、と自負するレインは気がつかなかった。

ロキシー内、レインはハンバーグやらステーキやらといった肉料理を五人前程、静奈は Pasta と小さめのサラダをそれぞれ注文する。人があまり居なかつたためか、料理は注文して間も無く運ばれてきた。

もちろん、伝票はレインが持っている。金がありあまっているという側面ももちろんあるが、女性に代金を払わせるのはレインの主義、更にいえば師匠の教えに反するからだ。

「……悪いな。なんでも奢ってもらってしまつて」「
「気にしないで。俺が好きで奢つてるだけだからさ」

バツが悪そうにゆっくり Pasta を口に運ぶ静奈に、レインは明るい笑顔で返す。

「そ、そうか……」

「そうだよ。大体、こういう場合は男が奢るものでしょ？」

そうレインが言った瞬間　ガシャン！

「あれ？　どうしたの？」

「い、いや、なんでも……ない……」

顔を真っ赤にする静奈に首を傾げながら、レインは既に四人前目に突入した肉料理にがつついた。

「（こ、こういう場合は男が奢るもの……？　それって）」

レインが無神経にも肉料理を口に放り込む中、満足気な表情をしているのをチラ見し、静奈は思考を続ける。

「（で、デートだときちんと理解しているのか……！？）」

そう、静奈はレインがこれを『デート』だと認識していると考えたのだ。

買い物に誘ってくれたり自分を気遣ってくれたりとそれなりにいくつか理由もあったが、やはり決定打は先ほどの一言。静奈が胸の内を復唱した、『こういう場合は男が奢るもの』。

デート（仮）に誘う前、静奈が読んでいた少女漫画にも似たような

事が書いてあった。つまり、レインは自分と同じく、こつこつという事＝デートと認識しているのではないか、という事だ。

そして、それが事実だとすれば最大の好機でもある。曰く、デートというのは好きな相手としか行かないらしい。このときのデートの定義は、両名共にこれをデートだと認識している場合に限る。つまり、好んでデートに行くという事は互いに相手を想っているという事に他ならない。そう静奈は考えたのだ。……ちなみに、参考資料は全て少女漫画だ。

「（こ、これはもしかして……いけるのではないだろうか……）」
静奈は、レインの唇に目を向ける。肉を食べた後の彼の唇には脂が少しついており、それが蛍光灯の光を反射して艶かしい。ごくり、と自身の喉を鳴らすのを自覚するも、彼女の視線は文字通りレインの唇に釘付けになっていた。

「……えと、俺の口に何か着いてるかな？」

「！？」

静奈はいきなりの事態に思わず声にならない悲鳴をあげる。

いきなりレインが顔を除き込んできたものだから、色々テンパっていたのだが、まず最初に思ったのが、

「（そ、その上目遣いは反則だろう！）」

レインは下を向いていた静奈の顔を除き込んだため、自然にそういう形になったのだ。だが、今の静奈にとっては間違いなく爆弾。

そんな爆弾を目の前に放り込まれて只でさえおろおろしていた静奈に、レインは更に追撃（爆撃？）を仕掛ける。もちろん、彼に他意はない。

「大丈夫？ 顔赤いよ？」

そう言ったレインは、静奈の目にかかるくらいに伸びた前髪を額の上まで書き上げ、ぴた。

「~~~~！？」

額と額を合わせ、自分の体温と静奈の体温を比べる。レインからしたらそういった意味合いの行動だったが、静奈にとっては……

「（か、顔！ 顔が近い！）」

レインの顔が、すぐ目の前にある。

銀の髪、瞳。端正な顔立ちに、綺麗に通った鼻筋。それに、どこか良い香りがする。

目の前全てに広がる、成瀬 レインハートという存在。

それはあまりに近く、手を伸ばせば今すぐにも届き

「（……キス、できそう……）」

静奈は目を閉じ、レインに気づかれない程度に唇に力を込める。

レインの息が、静奈にかかる。肉を食べたばかりだというのに、くらつ、とくるような良い香りが静奈の鼻孔をつく。

レインの唇が、静奈の唇に近づく。それが、静奈には目を閉じていても分かった。

「（レイン……！）」

二人の唇は

「むぐつ!？」

重ならなかった。理由は、レインが静奈の口に手をやったためだ。

要するに静かに、そういった意味であろうその行動に、静奈は目を白黒させる。

「しっ! ……伏せて」

二人は身を屈め、レインが指差す方を見た。そこには……

「（ッ! 何故あいつがキンジと一緒にいる!?!）」

そう、片方はキンジ。そして静奈のいうあいつとは

「……ジャンヌ」

イ・ウーのメンバーであり、魔剣として名高いジャンヌ・ダルク30世だった。

第47弾 可愛いあの娘は雨女？（後書き）

とりあえずブラド編ではヒロイン達と絡めたりしてみようかなあなんて思っていたり。

第48弾 理子の真実（前書き）

静奈……頑張れ！

静奈ああああ！

第48弾 理子の真実

第48弾 理子の真実

ロキシীরテーブル席に身を屈め、レインと静奈は入ってきた二人……片やお馴染みのキンジ、片や先日彼らと死闘を繰り広げたジャンヌ。まさかこの二人がなあなあとファミレスでランチという訳でもあるまい。この二人みたいに。

「そうか……ジャンヌはどうやら司法取引を済ませて出てきたようだね」

キンジとジャンヌが戦闘を行った様子がない事からそう判断する。司法取引は長らく日本では良しとされていなかったが、近年の凶悪化する犯罪に対抗するために設けられたシステムだ。

その内容は、犯罪を犯した人間に犯罪者を逮捕させるなど事件を解決させ、その手柄次第で減刑……もしくは、罪を無かった事にできる。

つまり、予測の域を越えないとはいえ、今のジャンヌは犯罪者でない可能性が高い。それをジャンヌの戦闘痕の感じられない、臍脂色の防弾制服が肯定しているようだった。

「（とにかく、今は様子をみよう）」
二人は頷き合う。

レインとしてはそれほどジャンヌに危機感、警戒心を抱いている訳ではない。故にこんな真似をする必要も本来ないのだが、静奈とジャンヌは恐山で顔を合わせていた。静奈が警戒心を持つのは当たり前だったため、ここは静奈に合わせてよう、とレインは息を潜めた。

「おいジャンヌ、そっちの席に座るぞ」

キンジの不機嫌そうな声が聞こえてくる。その内容から、キンジはジャンヌに無理矢理に近い形でつれてこられたらしい。

ドリンクバーで何やら喧騒をしていた後、都合のいい事にレイン達の席の真後ろに二人は腰をかけた。

何やら話があるようで、盗み聞きは好ましく無かったが魔剣であるジャンヌの話をおいておいて損はないはずだ。しかし、レインが聞いたのは思いもよらぬ人物の話だった。

「……で、理子は何のために強くなるうとしたんだ？」
理子。その名前を聞いた瞬間、レインの表情が曇った。

何故、キンジとジャンヌの会話に理子の名が？

その答えを口にしたのもまた、キンジだった。

「イ・ウーで（……）」

その言葉に、レインの顔が今度こそ驚愕に染まる。

イ・ウー。イ・ウーで、理子が？

強くなるうと……？

何だ、何を言って

「レイン！」

「ッ！」

静奈の一言で我にかえる。だが未だ驚きは抜けきれておらず、レインの思考能力は鈍っていた。

更に、落ち着き切れてないレインにジャンヌの言葉が突き刺さる。

「……自由のためだ。理子は少女の頃、監禁されて育ったのだ」

ッ！

少女の頃。つまり、レインが泣いていて、理子が慰めてくれたあの時には

そこに思考が至った瞬間、レインは拳から地を流した。ギリギリ……と、強く、強く握りしめた拳が悲鳴をあげる。だが、そんなものは今のレインの耳に、瞳には入らない。

それからジャンヌの話は続いた。

理子が小柄なのは当時碌な食べ物を買えなかったから。

理子が衣服に対して強い拘りがあるのは、ボロボロの布切れしか着るものが無かったから。

聞いていく内に、自分の内から怒りが洪水のように溢れてくるのを実感しつつ、レインは更に耳を傾ける。

「……誰に監禁されてたんだ」

キンジの問いに　ピクツ。

それまで拳を握りしめ、歯を食い縛るだけだったレインが反応を示した。

その瞳は、怒りに満ち、下手をすればその相手を殺しかねない。それを煽るように、ジャンヌはキンジの問いに答える。

「『無限罪のブラド』、イ・ウーのNo.2だ」

……『無限罪のブラド』。

レインはその名を脳に刻み付け、ジャンヌの話聞き続けた。

その後の話は特に理子の話が出る事もなく、重要な話はブラドが『鬼』である事、そしてブラドの弱点は目玉模様の四カ所の部分だけで、それ以外は回復してしまう事。

それを聞き終えたレインは頭をクールダウンさせ、静奈に片手をあげて謝罪の意を示す。

静奈としてはレインの心の内が今少し混乱しているのが分かったため、少しユーモアをまじえた答えを適当に返した。

「（……キス、できなかつたな……）」

静奈は、レインに気づかれないうつそつとため息をついた。

「……………」

理子。

幼い自分を救ってくれた理子。

ブラドから逃げるために、力をつけるためにイ・ウーに入った少女。その理子を傷付ける、ブラド。

「……ブラド……！」

「~~~~~」
「~~~~~」
軽やかなピアノの音。

雨音といい具合に調和し、なんとも言えない心地よい音色が耳を通して全身に浸透する。上手い。多少ピアノを聴く機会が多かったレインでも、そう手放しで言える程の技量だ。

「~~~~~」
「~~~~~」
どうやら曲は音楽室から流れているようだ。というか、武偵高にここ以外でピアノが弾ける場所があるのか疑問だが。

とにかく、人気のない音楽室から発せられる音色に引き寄せられ、レインは窓から中の様子を除き込んだ。

そこにいたのは……

「……久し振り、でもないな。『紫電の雷神』。先ほどファミレスとやらであつたばかりだからな」

そう、先ほどキンジと一緒にファミレスにいた、

「ジャンヌ……やっぱり気づいてたの？」

ジャンヌ・ダルク30世だ。

「気づいていたなら声をかけてくれればよかつたのに」

「遠山が五月蠅かつたものでな。一曲聴いていくか？」

ジャンヌの問いに、しかしレインは首を傾げる。

「え？ いいの？」

ジャンヌはレインやキンジ、アリアに白雪に逮捕されたのだ。恨まられて当然のレインは、自分が何故ピアノを聴かせて貰えるのかさっぱり分からなかった。

「声をかけなかった詫びだ」

「……律儀な奴だなあ」

「五月蠅い。曲は……当ててみせろ」

雨の中、現代のジャンヌ・ダルクによるピアノの演奏が始まる。

「~~~~~」
「~~~~~」
ジャンヌの指が踊る。その音色は、奏者の様を映すように美しく、引き寄せられる。

しばらくそれに聞き入っていると……曲が終わりに差し掛かる。ジャンヌの動きが一層激しく、しかし一層滑らかなになる。そしてフィニッシュ。

レインは、あまりに美しいピアノの音色に聞き入り、ジャンヌに思わず拍手をしていた。

「『火刑台上のジャンヌ・ダルク』」

「……正解だ」

残念と歓喜が半々に混じったような正解のコール。

その後、ジャンヌは理子について懇切丁寧に教えてくれた。

理子が『武偵殺し』である事、シージャックやチャリジャック、バスジャックに、アリアとキンジが巻き込まれたハイジャックも理子の仕業だったそうで、アリアを狙ったのは初代リュパンを越えるため、だと。

「……そうか。ありがとう、わざわざ」

「……ふん、別に感謝される筋合いはない。私は理子のために話したのであって、お前のために話したのではない」

「そうか。……ジャンヌ」

「……何だ？」

怪しげな視線を向けてきたジャンヌに、レインは笑顔で応える。

「ありがとう」

「……ッ！」

顔を真っ赤にして何かを言おうとするジャンヌを尻目に、レインは窓から飛び出した。

面倒事はごめんだ。言いたい事は言って早めに逃げるのが得策。それがレインが最近の対人関係で学んだ一つの方法だった。という訳で、レインはダッシュでSSRに急いだ。

第48弾 理子の真実（後書き）

ジャンヌ可愛いよジャンヌ。

第49弾 訓練・対談（前書き）

レキ好きの皆様！

レキのターンですぜ！

第49弾 訓練・対談

第49弾 訓練・対談

パアン！

「……またはずれか」

レインは愛銃、ブロウを軽く振りながらため息をつく。

「もっと集中して下さい、レインさん」

近くのベンチに座る少女、レキに注意されレインは再び向かい直す。強襲科の射撃訓練場。そこにある大量の的に、レインは能力を使わずに挑んでいた。

何故レキが隣にいるのかといえば、精密な射撃には色々コツが要るため、無理をいって（といっても、レキは快く受け入れてくれたが）射撃をみてもらっているのだ。

「難易度を下げましょうか？」

「いや、これくらい出来なきゃあいつは倒せない」

「了解しました。では、難易度を上げましょう」

「ちよつ、レキ!？」

レキはレインの制止も聞かず、レベルを一つ引き上げた。

「どんな無茶ぶり!？」

次々と出てくる人型の的の、白い線が重なる部分を打ち続ける。

「（くそ、追い付けない!）」

雷神化すれば簡単なのだろうが、レインは基礎力向上のための訓練のため、それをせずひたすら的を打ち続ける。だがやはり、数十分後にはくたびれ果ててレキの座るベンチに座り込んだ。

「レインさん、身体と腕が流れています。しっかり狙いを定めて下

さい」

「うん」

「それと、発砲の際衝撃を殺しきれませんでした。次弾発射の際の障害になります」

「とすると、課題は筋力か……？」

レキ先生からありがたくご教授頂いたレインは、早速改善に乗り出します。

「……レインさん」

腕立て伏せ（片手、指二本バージョン）を始めようとすると、レキから声がかかった。レキが自分から話かけてくるなんて珍しいな、そんな事を考えながらレインは筋トレを続けたまま聞き返す。

「なに？」

「少し休憩にしましょう。息抜きも大切です」

そのセリフに、今度こそレインは筋トレする手を滑らせずこけた。あり得ない。あの『ロボット・レキ』と言われる程に淡白であり、そういう楽しみみた感情に最も遠いレキがそんな事を言うなんて、思いもしなかったのだ。

「う、うん、ありがとう……」

レキがコクリ、と小さく頷く。

「（もしかして心配してくれたのかな……？）」
隣にちょこんと座るレキの横顔を見る。

CGで作られたかのように端正な顔立ち。しかし、その可憐なレキからは表情が読み取れない。

「（……な訳ないか）」

レインはレキの頭にぼん、と手をやり、

「レキ。じゃあ、息抜きに遊びに行こう」

表情の読めないロボットさんに、娯楽を教えてやる事にした。

「いらっしゃいませ……って、成瀬様。また別の方ですか？」

「色々語弊を招く言い方ですね……」

笑顔で迎えてくれたのは、先日静奈と一緒に来た服屋の店員だ。ちなみに女性で、歳は二十歳と割と近い。

「とりあえず、この娘に合いそうな服を」

静奈の時は勝手に服を選んでくれた（そのお陰であんな荷物を持つ羽目になったのだが）が、今回はそうはいかない。なにしろ、レキもレインもそういう、所謂ファッションには全く経験、知識がない。そうなってくると、自然、専門家である店員さんを頼る部分が多くなる訳で。

「くすつ、かしこまりました」

微笑した店員さんはレキを連れて奥の方へ行ってしまったため、レインは近くの椅子に腰をおろす。

暇潰しに携帯ゲームでもやっていようかとも考えるが、何だか寂しい奴のようだから止めておいた。

仕方なくレインはケータイを弄る事にする。かといって特にする事もなく、イヤホンをつけて動画でも再生しようか、と考えまた首を横に振る。レキ……はまあ置いといて（レキが大声を張り上げるなど想像できない）、レキの服を選んだ店員さんが呼んでいるのに反応できないのはあまり良くないだろう。レインは本当にする事がなくなつたため、仕方なく辺りの服を眺める。

……やはり、さっぱりわからない。というか、私服はそれほど必要はないのではないだろうか。そもそもレインは部屋着はジャージ、学校はもちろん防弾制服。

休日は週二日しかないため、やはり必要性が薄れてくる。

女子じゃないんだから、自分が洒落た格好をする必要はない、そうとりあえずの結論をつけ、レインは素直にレキの帰りを待つことにした。

幸いにも、それからすぐにレキ達は戻ってきた。

「こちらはいかがですか？」

店員さんは勿体振って隠していたレキをレインの前につき出す。

「……おお」

思わずそんな間抜けな声が出る。しかし、それも仕方ない事だろう。それほどにレキの姿は可憐で、麗しかった。

「……」

「よ、よく似合ってるよ、レキ」

終始無言のレキに、レインは慌て気味に称賛の言葉を出す。返事は返ってこない。体調が芳しくない、という訳でも無さそう。なら何故、レキはレインに返事を返さないのだろう。疑問に感じたレインは小首を傾げる。

「……レインさん」

「ん？」

突然、黙りこくっていたレキがその平淡な声をかける。

「可愛いですか？」

「……え？」

絶句。

その言葉が異様にしっくりくるような表情をしていたレインは、目の前にいる小さな少女に目を見開いた。

可愛いか？ レキが？

そう問われれば、答えはイエスだ。これはレインに限らず、世の男なら百人に聞いても百人が答えるであろう答え。

だがしかし、レインが驚いているのはレキのセリフ、ではなくその言葉を発したのがレキだという点。

あの無表情・無愛想なレキ。部屋には洒落た家具どころか壁紙すらないレキ。あの、ファッションなんてものには無縁だと思っていたレキが。

自分の事が可愛いかと聞いてきた。

これは天変地異の前触れか？

世界がひっくり返るのか？

そんな空想さえしてしまおうような衝撃を受けたレインは、質問されているというのに硬直してしまう。

いや、レインが硬直したのは、レキが可愛いかと聞いたからとか、そんなちやちな理由では断じてない。

「……可愛く無かったですか」

レインの無言を否定と捉えたのか、レキがどこか残念そうな、もっといえは悲しそうな表情を浮かべているのを目の当たりにし、レインは思わず立ち上がる。

「レキ」

レインの発した、いつもより低く、耳から頭に直接流れ込むような声に、レキはゆっくりと振り返る。

「レキ。ごめんね、少し驚いて声が出なかったんだ」

「何に驚いていたのですか」

「レキがそんな事を言うなんて、あまりに　可愛らしくてね」

レキが自分の格好、可愛さに興味を持つ。それは、あの殺風景な部屋で毎日を銃と過ごすレキに女の子らしさを与えられるのではないか。

それはとても、レインにとって喜ばしい事だった。

「そうですね……ありがとうございます」

レキはそのままくる、と踵を返し、試着室に向かおうとする。

「レキ。着たままでいいじゃないか」

「しかし……」

「ね？」

レインが放つ、有無を言わせない、そんな雰囲気。

それをレキも感じ取ったのか、少し躊躇いながらもコクリ、と首肯する。

「じゃあ、店員さん。いくらですか？」

「四万六千五百九十八円になります」

女性の服は異常に高い。それを先日の静奈との件で知っていたレインは、財布に大量の諭吉を装備してきたのだが、その判断は間違っ

て無かつたらしい。

というか、昨日はあれだけかっても十万で済んだというのに、レキの服は1セットで約五万。

恐らく静奈は気を使って安い服を頼んだのかも知れない（それでも十万はいじめだと思いが）。そう考えるとやるせない気分になるが、静奈は量が量だ。気にせずレキの服の代金を払う。

「レインさん、服のお代を返します」

「いいよ。こういうのは男が奢るものだしね」

「しかし……」

「息抜きに付き合ってくれた依頼料。つて事ならいいかな？」

渋るレキに釘をさし、レインはささっとお代を済ませる。

「……い、です……」

………？

レジに向かい合うレインの後ろでレキが何か言った気がしたが、それはレキの敬愛する『風』に儂くかき消え、レインには聞こえなかった。

第49弾 訓練・対談（後書き）

やっぱりレキは可愛いなあ。ジャンヌも可愛いけど。

第50弾 50話到達記念！ 今更ながらオリ主のプロフィール（前書き）

今回はただの企画ですので、短めです。

第50弾 50話到達記念！ 今更ながらオリ主のプロフィール

第50弾 50話到達記念！ 今更ながらオリ主のプロフィール

成瀬 レインハート（旧姓 夜雲）

身長 176

体重 52

年齢 16

血液型 B

誕生日 6月25日

容姿

銀髪、銀の瞳で髪は男にしては少し長め。

背はそれほど高くないようだが、筋肉はまあある方。

美形で、容姿は上の上であり、転校してきて30秒でファンクラブが出来たという伝説(?)を持つ。

二つ名 紫電の雷神

所属

東京武偵高2年SSR

ローマ武偵局4年殲魔科

ニューヨーク武偵局2年強襲科

装備

・FNブローニング・ハイパワー 一丁

・スロージングダガー 15〜20本

・『五月』の一本、『水月』

雷を扱う超能力者で、主に雷撃、磁力、肉体強化の3つを用いて戦う。Gは30オーバーであり、世界最強の超能力者に数えられる。

概要

夜雲当主、龍三と外国人女性（国籍・年齢・名前などは一切不明）との間に生まれ、幼少期を夜雲家で過ごす。その際、兄である晴夜、氷華と共に武偵になるための修練を積むも、あまり結果はついてこず、出来損ない扱いをされる。

また、夜雲家での訓練合宿の際、なんとか外国に行ったりきたりしていたため、5ヶ国語程話せる。
ちなみに、理子とは訓練合宿の際出会う。

その後は母の友人だという成瀬 蒼介に引き取られ、生来のものだった超能力の才能を開花させ、同時にただの武偵としての実力も充分なものとなる。この時点で10歳、G13。

それを知った夜雲家は、レインの親権を返すよう蒼介に話を持ちかけるも当然拒否。

後日、夜雲家の家宝『五月』の一つ、『月影』を盗みだした晴夜に蒼介らを皆殺しにされ、晴夜を死刑台に送ると誓う。

その後は世界を転々として武者修行の旅を続け、立ち寄ったローマ武偵高に所属、後に彼が師匠と呼ぶ人物に出会い、更に実力をつける。尚、武者修行と師匠との修行の際に大量の凶悪犯罪者を逮捕し続け、様々な依頼をこなしてきたため莫大な資産（彼は『小遣い』と称している）を持つ。

その後は師匠の薦めでニューヨーク武偵高に転入、約一年を過ごす。その際は強襲科だったのだが、強襲科としての実力はBランク程度だった。しかし、現在では水月の扱いに関してはSランク並。

また、超能力は使用すると精神力を消耗するのだが、同時に口径で個人個人に必要なエネルギーを摂取しなくてはならないが、彼は基本飯を食べれば回復する。最悪栄養食品でも大丈夫。また、電池や

本物の雷など、あらゆる電気を自分の力に還元できる。

性格

師匠の教えもあり、男性もだが、女性には至極優しい。

悪人だろうが基本的に人には優しいが、自分の仲間や大切な人間が傷つけられたら容赦は一切しない。

嫌いな人間には冷たい。

唐変木。

好きなもの（人、事）

食べ物、お菓子、曇り空、いいにおい、早朝、真夜中、優しい人、女性、散歩、技の開発、お節介を焼くこと。

嫌いなもの（人、こと）

反則行為、ずるいこと、苦いもの、胡散臭いもの、人の心を踏みこむ人、人を簡単に傷つける人。

以上です〜

でも、これだと文字数が少ないなあ、という気がしてきました。

うーん、何しようかな……

そうですね〜、では、丁度上にレインのプロフィールが載っている事ですし……

オリ主貸し出しでもしますかね？

と、そういう訳で、とんでもなく軽いノリで自分のオリ主、成瀬レインハートを貸し出したいと思います。もし『レインを俺の小説に出してやってもいいぜ！』的な人がいたら、感想にてご通知下さい。あ、別に緋弾のアリアでなくともいいです。

自分もサザンクロス様にオリキャラを貸し出していただいたときには楽しかったです。あれみたいな感覚になればいいかななんて考えたりします。

第50弾 50話到達記念！ 今更ながらオリ主のプロフィール（後書き）

という訳で、レインを貸し出します。ご希望される方は感想にてご通知下さい。

第51弾 幼馴染みとサポート（前書き）

最近戦闘シーンが減ったよう！

何故か今、戦闘シーンが異常に書きたいです。

第51弾 幼馴染みとサポート

第51弾 幼馴染みとサポート

レキとの訓練と息抜きを終えた夜、レインの部屋にはミチル、綾瀬の百合カップル、そしてレインの徒友である悠がいた。静奈は先日の件が引っ掛つているのか、顔を出してくれないらしい。更に、アリアとキンジは潜入ミッションがある。と、表向きはそうなっているのだが……

「（今頃は紅鳴館とやらでドロボーの真似事、か……）」
いや、正確には今は（・・）執事とメイドの真似事かもしれない。ジャンヌから聞いた話だが、今回アリアとキンジは紅鳴館にはハウスキーパーとして潜入、理子の宝物を奪い返しに行くらしい。盗みが犯罪である点に関しては問題ない。イ・ウーの人間に対しての犯罪行為は罪にならないからだ。
だが、本来ならイ・ウーの尻尾を掴む事さえ容易ではないため、この事を知るものは少ない。
とまあ、閑話休題。

当然、怪盗アルセーヌ・リュパンの末裔である理子も参加するはずだ。だが、彼女は幼い頃からブラドに監禁されていた。顔も割れてるだろうし、リスクが高すぎる。今回はサポートだろう。
ダガーを懐とベルトのホルダーに、ブロウを同じくベルトのホルダーに。

それぞれ装備したレインは（水月は基本腰に標準装備されている）、
「悪い。今日は遅くなる」
と言い残し、綾瀬とミチル、悠が首を傾げる自室を後にした。

現在12時03分。

「さて……もちろんいるよな？」

ピンポン。

夜中なのに悪い、とは思ったが、部屋の前なのにケータイからかけるのもどうかと思い、レインは仕方なくインターホンを押した。

誰の部屋の前にいるか？ そりゃあ……

「ふにゆう……だあれ？ こんな夜中に」

「理子。俺だ。レインだよ」

そう、理子の部屋の前だ。

「……ええ！ 来てくれたのお、レイン！ 待ってて待ってて、すぐ開けたげるから！」

改めて理子の言葉を聞くと、違和感を覚える。

あのアホらしいリアクションをとる前のごく短い間。あれは、恐らくリュパンの血が警戒心を騒ぎ立てていたのだろう。

ほどなくして、理子の部屋の扉が開け放たれる。そこには、いつもと変わらぬ笑みを浮かべている理子の姿があった。しかし、今はその笑顔も過去を隠すための仮面に見えてならない。

「はい！ レインいらっしやい！ お一人様理子りんルーム入りませーす！」

いつものように訳のわからない言葉を発しながら、理子はレインの中に招き入れた。

「レイン、今日はいきなり来てくれてありがとねえ。でも、どうして来たの？」

理子は普通に話すようにここに来た理由を聞いてくる。まあ、自分の部屋に突然上がり込まれて聞かない人間はいないだろうが、やはりそのセリフにも警戒心が見え隠れしていたため、レインは実直に、正直にありのままを話す。

「理子……いや、峰・理子・リュパン・4世」

レインが発した、自分の本名を聞いた瞬間、理子の肩がビクッ、と跳ね上がる。

「……ジャンヌから聞いたね」

「ああ。悪いけど色々聞かせて貰ったよ」

忌々しげに聞いてくる理子に、レインは謝罪を交えつつ返事を返す。その間にも、理子の表情は曇りの色を増していく。

「要件は何？」

「協力したい」

「……はあ!？」

理子が驚きのあまり声を上げるが、レインはさして気にする様子もなく、勝手に中のソファに腰掛ける。

そんなレインの一連の動作を眺めていた理子は、我に帰ったかのようになりにレインに詰め寄る。

「どういう事だ。レイン。お前、犯罪者、しかも犯罪行為に加担する気が」

「口調が変わってるよ、理子。お前にとっては悪い話じゃないと思うけど？」

「そういう話じゃない!」

ダン! 理子が拳を下ろした事で、テーブルが鈍重な音を、静寂に包まれていた部屋に響かせる。

理子がお前を続ける前に、レインは更に付け加えた。

「理子。俺はお前に感謝しているんだ。あの時、俺を救ってくれたから……」

あの時。

幼少期、自分が『異常』である、と自覚し始めた頃、その異能を気味悪がった心無い人間達からの罵倒、畏怖、罵詈雑言。

精神に限界が訪れようとしたレインを抱きしめ、自分が傷つきながらも救った少女 理子。

「だから、今度は俺がお前を救いたい」

ブラドから、そして リュパンという枷から。

レインの真摯な態度、あるいは真っ直ぐな瞳か、あるいはそれら全てか。

ともかくレインの行為が理子に届いたのか、彼女は、

「作戦会議は夜中2時からだよ」

いつものおバカキャラの喋り方でレインに指示を出し、自分の仕事を始めた。

レインはその間、理子のコンピューターの整備等を手伝ったり、自身の武器を調整したりなど、色んな事をしながら2時を待った。

「そういえば、ブラドって『鬼』なんでしょ？ 銀弾^{ギン}効くかな……？」

ジャンヌの話だと死にはしないらしいが、有効な手段であるなら持つていくべきだろう。だが、理子は首を横に振った 二重の意味で。

「銀弾は効かないよ。いや、普通の銃弾と同じ効果しか得られない、って言った方が正しいかもね。そしてブラドは鬼じゃない」

理子は苦虫を噛み潰したような表情をしていた。ブラドに監禁されていた理子は、ブラドに対する恐怖が未だ身体に染み着いているのだろう。

小刻みに肩を震わせる理子に、ポン。

頭に手を置いてやる。

すると落ち着いたのか、理子は顔をほんのり赤くしながら、一旦「ほん、と咳払いして、先ほどの言葉の続きを紡いだ。

「あいつは、『吸血鬼』だ」

「ドラキュラ……て事？」

「そう。あいつは、ルーマニアのドラキュラ伯爵。理子の曾お爺様とジャンヌの祖先二人が相手でも倒せなかった相手だよ」

でも、ドラキュラとはニンニクや紫外線、更に先ほどの銀弾、その銀が苦手なはずだ。

レインとしてもおよそ役に立たなそうなSSRの講習が、こんなところで生きてくるとは思わなかった。

「あいつに、教本に載っているような弱点は効かない。気には障るらしいけど」

「となると、銀弾はいらないかもね……」

「とにかく、ブラドに気づかれないようにキー君やアリアに盗んでもらおうか」

理子がレインの話をスルーしてケータイ電話を開く。どうやらケータイの4人通話機能を使うらしい。

ケータイなんて高が知れている！　なんて言う人物がたまにいるが、現在普及されているケータイは結構複雑な回路をしており、盗聴などが無性に難しい。

その辺を考えた上でのケータイなのだろうが……

レインは、釈然としない様子で自分もケータイを取り出しながら、レインは理子に質問する。

「ブラドを倒す、じゃ駄目なの？」

！

理子の目が大きく見開かれ、理子が声をあらげる。

「だから、ブラドは私の曾お　」

「はいはい。曾お爺様の話はいいから」

レインは食いかかるうとする理子を横目で見ながら、いい放つ。

『リュパン』が勝てなかったからって、お前が勝てない理由なんてどこにもない。なんなら、俺も協力するしな」

「ッ！」

理子のやりきれない表情を眺めながら、レインはブラド対策を練りながら、時計に目をやる。

あと数分で、作戦会議が開始される。

レインは、ケータイを開いた　そして、聞こえてくるであろうキンキンのアニメ声に備えて、改めてソファに座り込んだ。

第51弾 幼馴染みとサポート（後書き）

結局紅鳴館には潜入せず。

ヒロインとの話とかでも進めますかな？

第52弾 徒友訓練（前書き）

超眠い……最近いつも深夜に書いてる気がします。これも塾が学校のテスト対策なんてするからだ……

第52弾 徒友訓練

第52弾 徒友訓練

「……アリア、理子、聞こえてるか」
ケータイからキンジの声が流れてくる。

「天気が多少悪いからか、それとも4人同時通話の影響かは知らないが、その音声は若干不明瞭だ。」

「聞こえてるわ。そっちはどう、理子？」

「うっう〜！ ダブルオツケーだよ〜！ レインの方は？」

「俺の方も問題はないよ。三人ともよく聞こえる」

「レインが理子からの確認に回答する。理子に返答するだけなら隣にいるのだから、直接言えば良いのだろうが、キンジたちを驚かせたというちよつとした遊び心から前ふり無しで声を発した。」

「レイン！？」

「あんだ、なんでそこに……理子！」

「アリアは理子のケータイからレインの声が漏れたのを聞いたらしい。質問する相手をレインから理子に変える。」

「レインは私に協力してくれるんだよ〜」

「悪い話じゃないでしょ？ ブラドは俺のターゲットでもある」

「別にアリアや理子の助けがなくなるとも、レインはブラドを瞬殺する自信があった。しかし、ブラドの尻尾さえ掴めていない以上、理子たちに協力するのが現在最も有効な手段であり、同時に理子の目的、即ち彼女の宝物を取り戻したい、そういう理由からの言葉だった。」

「別にいいんじゃないか？」

「キンジも納得しているようだ。まあ、断る理由もないだろう。戦力、それも強力な者が増えるに越した事は無いのだから。」

「うっ……分かったわよ！ 好きにすればいいじゃない！」

アリアはどこかご立腹のようだったが、これは彼女がイレギュラーな事態を恐れたと見て間違いはないはずだ。

『話は纏まったね？ じゃあ、作戦だけど』

その後はしばらくの間はあーだこーだと騒がしい作戦会議だったものの、結局は理子の案が通る事になった……というより、もとよりそのはずだった。今晚の感想としては、収まるところに収まったな、といったところだ。

「じゃあ、期間は3週間。それがアリアたちが潜入する期間だからね」

「オーケー、何回も聞いてるよ。」

念を押すような理子のセリフに不審感を覚えるが、自分は勉強があまり得意で無かった事を思いだし、眉をひそめるだけにとどまる。

「さて……部屋に帰るとするかな」

ぐん、と伸びをして、レインは自室を目指す。しかし、ケータイの時計が3時35分を告げているのを視認し、しまったという風なため息をついた。

これでは朝帰りだ、とミチルや綾瀬（恐らく悠はそんな事はしないだろう）に弄くり回されるに違いない。そこで何処に行っていたかと問われ、『理子の部屋に行っていた』などと言おうものなら、いかに『紫電の雷神』と言えど死は免れないだろう。それも、肉体的だけでなく精神的、社会的な意味で。

余談だが、綾瀬・ミチルの徒姉妹の情報科としての実力が、Aランク、Bランクでありながら東京武偵高の中でも指折りだ、という事は先述しただろう。

情報科にもSランク武偵はいる。でありながら、彼女らがそう呼ばれる理由。それは、彼女らの力量がSランク相当のものだからだ。なら何故、AランクとBランクに収まっているのか。

それは……非常に残念な話だが、彼女らの行動が度を越えていた事

にある。

彼女らは任務の際、あらゆる情報を盗む。そう、政府の極秘資料だろうが（流石に最上位の極秘資料や文献は無理だが）マフィアの激ヤバ情報だろうが、誰にも気づかれず、痕跡を残さず完璧に盗む。だが、それはさしたる問題では無かった（いや、これを問題無いという事自体些か問題だが）。第一、痕跡を残さないのだから問題もなにも無い。

彼女らの恐ろしいところは別にある。

彼女らは依頼された人間の、引いては依頼した個人情報徹底的に調べ上げる。指紋、声紋、DNAまで。更に性質が悪い事に、気に入った相手、興味をもった相手までも調べ上げるのだからたまったものではない。

更に（まだあるのか）、この二人は某とてもニコニコしている動画やら某なんとかチューブなど、様々な動画サイトで大人気な利用者なのだ。神とか称される程に。

下手を打てば、そこに個人情報、更には恥ずかしい動画やらなにやらが事故という名目で流出しかねない。そうなればもうアウトだ。この情報化社会、一度流出した動画を全部回収、消去するなんて不可能。間違い無くその人の人生は終わるだろう。そんな最悪以上の事態が起こりかねないため、レインは仕方なしに色々代案を立ててみるが、全くだいい案が思い浮かばない。

「はあ……こっそり部屋に帰るかな……？」

「あれ？ レイン先輩、何をしてるんですか？」

ため息をついて諦め気味に遠くを見据えていたレインに、最近聞き慣れた声が背後からかかる。この、ようやくオドオド感が抜けてきた声は……

「悠、か……お前こそ、こんな遅くに一人で出歩くのは良くないよ？」

女の子なんだから、とぼそり、誰にも気づかれない程度で囁く。耳の極近くで。

「い、いえっ！ ちょっと飲み物を買いに……！」

レインとしては、深夜とはいえどこは武偵高。誰が何をしてるか分かったものではないため、他人に聞かれるリスクを減らすための行動に過ぎなかったが、悠が何故か頬を朱に染めるので頭の上に疑問符を浮かべた。

「そうか。送っていくよ。まあ、武偵高でそんな滅多な事は起こらないだろうけどね」

「あ、ありがとうございます！」

悠が大きく頭を下げてくる。レインはそれを苦笑いして見ながら、ポン。

頭の上に手を置く。

「紳士だからね」

そう言い、軽くウィンクしてみせるレインから、恥ずかしそうに悠は顔を背けた。もちろん、例によってレインに他意は無い。いつもの外国・紳士流の挨拶程度の事だ、とレインは自負している。

それが異様に彼にマッチし、なおかつ彼がそんな事するのは女性にとって反則並だ、という自覚は無いだろう。

悠は目の前にいる首を傾げた先輩をジト目で見ながら、気づかれなようにため息をついた。

「へえ……一人部屋にしては広いね」

レインは今、悠の部屋に上がっていた。最初は遠慮（男女がこんな夜中と同じ空間で互いを意識しているのは拙いと思ったからだ）していたのだが、悠は先ほどのレインの言葉を余程重大に受け止めていたらしく、部屋に泊めてくれると言うのだ。

いやいや、さすがにそれはまずいだろう、とは言えなかった。

悠の小動物のごときすぎるような上目遣いにより、レインは硬直。そのまま部屋に引きずり込まれた。

まあ、徒友同士は親交を深めるために互いの部屋に泊まるのはよく

ある事だ。アリアや白雪、静奈や綾瀬やミチルがレインとキンジの部屋に泊まりにくるのは完全に例外。

まあ、そんな訳でレインが悠の部屋に泊まるのには何の問題も無い。徒友のルールのには。

しかしレインは、武偵の規則やら徒友のルールやら以前に、人としての道を踏み外そうな気がしていた。そのため気をまぎらわせようと、さしあたりの無い話題を選んだのだが……

「あ、でも寝室は一つしかありません」
思わずレインはずっこけそうになる。何か？　一緒に寝るというのだろうか？

レインとしてはそんなゴシップはキンジとアリアで充分だったため、そうそうに別の部屋に移ろうとして　ガシッ。

「ッ！」

悠に抱きしめられた。後ろから。

「ゆ、悠………？」

「先輩。ジュース買いに行ったのって、嘘です……ちょっと、寂しくて……」

悠は恥ずかしげに指先を弄りながら下を向く。

それが彼女が眠れなかった、というセリフを代わりに示すようで、レインは思わず苦笑した。

「わ、笑わないで下さい！」

「ごめんごめん。悠が可愛い事を言うものだから……」

悠が「か、かわっ!？」と声を裏返しているのを眺めながら、レインは片膝をついて悠の手をとる。

「そういう事なら、悠が寝付けるまで、俺が手を握っているよ。それでいいかな？」

「……よ、よろしくお願いします」

顔を更に深い赤に染めながらも、悠ははっきりと告げた。レインはここ、と笑みで返した。

その晩は、悠が寝付けるまで更に30分かかり、レインは結局他室

の床に寝る事にしたため、あまり休めたとは言えなかったが……充実した一日だった、そう思いつつ、目を閉じる。幸いにも、すぐに心地よい睡魔に身を任せ、深い眠りにつくことができた。

第52弾 徒友訓練（後書き）

うーん、最近毎日更新がきつくなってきたので、放棄しようか悩んでいます。でもまあ、極力頑張りますよ。

第53弾 両手に百合の花

第53弾 両手に百合の花

翌日……レインは自室に戻ると、いきなり飛びかかられた。

「べほっ！」

「レイレイ！ どこ行ってたんじゃあああ！」

朝から元気なものだ。

ミチルが間接技を極めてくるので、レインはタップしながら後ろでやれやれ、といった風に苦笑いしている綾瀬の方に目を向けた。

「綾瀬先輩。help me」

「ごめんなさい、私英語苦手なのよねえ」

「あんたイギリス人にお得意様がいるでしょうが！」

「ああ、まあ朝帰りして心配させたレイン君なんてどっち道助けないけどね」

「ぐぬう……！」

綾瀬はレインの助けにはなってくれないようで、いい加減意識が落ちそうになってきたため、手がだらんと垂れる。

それをきちんと察知したミチルは、間接技を緩める。緩めるだけで外しはしないが。

お陰で意識が戻ってきたレインは、あらかたの事情を（もちろん理子の件は伏せてある）を話し、なにもやましい事はしてないと説明し、更にあらかじめ二人の機嫌をとるために用意しておいた紙を懐から取り出した。

「ほ、ほら……これ、一緒に行こうよ」

レインの手に握られていたのは……

「ドリームワールドのチケット!?」「」

ドリームワールドとは、ここ最近近場にできたアミューズメントパークであり、同時に人気のお祭りチケットが全然手にはまらない事でも名の知れた遊園地だ。

「よ、よく手に入ったわね……?」

「まあ、それなりのコネがありますから」

レインのコネは、ぶっちゃけると一高校生の領分を遥かに越えている。た。

各国の要人は勿論の事、某大国の大統領、某王国の国王まで、世界中に様々なコネをもつ。レインからしてみれば故郷であり、同時に極小さな国である日本にこれくらいのコネはあつて当然、そんなレベルだった。中には、彼が頼めば他国と戦争するのも、それを止めるのもいとわれないという国さえあるくらいだ。当然レインが戦争を指示する事は無いが。

「ともかく、今日なんだけど……早速いく?」

時計をちらと見れば、まだ開園には50分程ある。移動するにも充分な時間だ。もちろん、二人の返答は、

「行く!」

レインの予想通りのものだった。

「レイレイ! 綾先輩! ひつろいよ!」

たたた、と駆け出し小高い場所で手をふってくるミチルに、レインは笑顔でふり返す。

「元気ですね、ミチル」

「そうね、レイン君」

ちなみに今、レインは綾瀬に手を絡ませられている。ベタベタくつきそんな余裕染みたセリフを吐いているため、レインの背後からは『リア充爆死しろ』という感じの視線が送られてくるが、レインはそれを完全には察知できず、鳥肌をたてるだけに留まった。

「その……レイン君? こうしてるの、何か夫婦みたいじゃない?」

綾瀬がいつものクールビューティーに似合わず、顔をほんのり赤くしながら聞いてくる。レインは、ああ確かに、と頷いた。

「そうなってくると、さしずめ俺が夫で綾瀬先輩がお嫁さん、ミチルが俺たちの子供みたいですね」

レインは、おままごとで役を割り振ったようなノリで言っただけだったのだが……

「こ、こど……！ レイン君、気が早いわ、もう……」

綾瀬は一瞬慌てふためき、しかし満更でも無い様子で軽く咳払いした。

そんな綾瀬の行動に疑問を感じながら、レインはお子様を呼び戻しにいった。「ああ、そんな、あなた……」とどこか遠くを見詰めている綾瀬を引つ張りながら。

レインは綾瀬に妄想癖がある事をこの時初めて知った。

「何に乗る？」

「当然、ジェットコースターでしょー！」

「アイスも食べたい」

「はいはい、順番に回っていきましょうね」

「はい」

そんなこんなで、綾瀬とミチルが一々あっちこっちに引つ張るものだから疲れ果てたレインは、どす、とベンチ（ちっこいリスみたいなキヤラクターが乗っかっている）に座る。

「じゃあ、後は何に乗る？」

「そりゃあ、あれしかないでしょー」

ミチルが指差したのは……観覧車。

遊んでいる内に日が落ちてしまったため、豪華なイルミネーションを取り付けられており、幻想的な光を放つ。

「おお、いいじゃん。じゃあ、早速」

「綾先輩」

「え、二人共何を……」

「ジャンケンポン！」

訳もわからないまま、レインは二人の手元を見る。ミチル、グー。

綾瀬、チヨキ。

「にやああああ！」

負けた綾瀬は猫のような悲鳴をあげている。猫なで声には程遠いが。

「何のジャンケンをしたの？」

「どっちがレインと一緒に乗るか」

「……はあ？」

何で二人きりでないといけないのだろうか？ そもそも、三人で来ているのに一対二で回るのは理不尽過ぎるだろう。

そんな言葉をミチルにぶつけようとするが、それは、他でもない綾瀬によって遮られた。

「綾先輩……！」

「ミチル……あなたの勝ちよ。胸を張ってレイン君と観覧車を楽しんで来なさい。私は、二人のゴンドラが蟻のような小ささに見えるような低いところで応援してるわっ」

「何かやたら表現重くないですか」

この茶番に水を差そうとするが、既に役者モードに入っているのか、綾瀬とミチルは気にもとめない。

「さあ！ 行くのよミチル！」

「はいさ〜！」

そう言った綾瀬は、やりきった！ と言わんばかりに親指をつきだしてきた。

「（いや、そんな事されても）」

とりあえず、レインは綾瀬を置いてミチルと共に観覧車の列に並んだ。

30分程待つと、レイン達の番がきた。乗る際に後ろをちらと振り

向くと、沢山の人が並んでおり早く並んでおいてよかった、と心の中で安心した。

「そう言えば……ちゃんと話すのって久々だよね、レイン（・・・）」

「……まあ、久々というか俺が来たのは極最近なんだけどね」

シリアスモードに入ったミチルにそう返し、レインは窓に視線を向ける。

確かに、先刻綾瀬が言った通り人が蟻のように小さい。

「ねえ……レイン」

シリアスモード。

別にキングのヒステリアモードのように体質な訳ではなく、単に雰囲気を意識的に変えているだけの事だ。だが、この時の彼女はいつものような元気な彼女でなく、妖しい雰囲気をもった危ない少女に変わる。

「……何かな、ミチル」

観覧車の景色が流れるのが、縦から斜めに変わってくる。

「あのね、私……」

そして、ゴンドラの位置が最高に差し掛かり

「私、あなたの事」

ドン！

「！」

光が瞬く。

ミチルが慌てて外を見れば、花火が打ち上げられていた。

「……何？」

観覧車が頂点を過ぎ、下降を始める。

レインが小首を傾げているのを見て、ミチルは嘆息し……

「……何でもなく、いよ、レイレイ（・・・）！」

普段の状態に戻り、他愛のない雑談に興じるのだった。

やがて観覧車は一周し、レインの手を借りながらミチルはやけに恋しい地面に足を着けた。

レインが手をふる綾瀬の方へ向かっていく。自分の手を掴んで。そんな彼の後ろ姿を見ながら、彼女は決心する。

いつか 必ず。

その後、レインは左手を綾瀬、右手をミチルに取られる形で帰宅した。

それはまさに、両手に花、という言葉がふさわしいだろう。

第53弾 両手に百合の花（後書き）

さて、そろそろブラドとの戦闘が始まりますかな……？

第54弾 打ち合わせ（前書き）

今回も寝惚け書きです。すいません、意味不文多くて。

第54弾 打ち合わせ

第54弾 打ち合わせ

そんなこんなで、例によって深夜。

レインは最近の習慣となった理子の部屋への訪問の真っ最中だ。なお、心配すると言っていたミチルらには任務の打ち合わせがしばらくある、とテキトーな理由で誤魔化してあるため、悠の部屋で毎日寝ている訳ではない。というか、そんな事態になればただでさえ目の下に隈生活なのに、睡眠不足で過労死する。紫電の雷神といえど疲れには勝てない。

「うつうつ！ お疲れちゃ〜ん」

作戦会議が終了する頃には、既に時計の針は3時を示していた。

「レイン、お疲れ。眠そうだね？ 早く寝た方が良いんじゃない？」

「ふぁ……そうするよ。お前も早めに寝なよ？」

「いやいや〜、理子りんは色んな準備で今晚は徹夜なのです！」

「はあっ!?!」

レインが思わず大声を上げてしまい、口を押さえる。こんな真夜中に大声、しかも男の声がするのは拙いだろう。

「（でもお前、ここのとこる毎日寝てないんじゃないか？）」

「（いやいや、そんな事ないよ〜それに理子は夕方からレインが来るまでくらの間寝てるもん）」

それにしたって、あまりに辛いだらう。よくよく見れば、理子の目元にはファンデーションで上手く誤魔化されているが、くつきりと隈が見える。それは、一日二日の徹夜で出来るものじゃない。

はあ、とレインは露骨にため息をついた。どうして自分の周りにはこう、意地っ張りな女性が多いのだろうか？

「理子」

気がつけば、レインは理子の手をとって、低くそう呟いていた。赤面する理子を見上げるように、更に言葉を紡ぐ。

「明日、俺と一緒にどこかへ行かないか？」

「ど、どこか……？」

「どこでも良い。いや、理子が行きたいところなら、どこでも」

我ながらくさいセリフだ、とはレインも思う。だが、リュパンの血を引き、警戒心の高い彼女にはこれくらい言っただけでやらないと効果は薄いだらう。少しでも理子の疲れを軽減させたいレインとしては、話を長引かせるのも良しとはしない。

意外にも、返答はすぐに、しかも明るく返された。

「いいよ〜！ じゃあね、明日は秋葉に行こう！」

まさか秋葉原に行く事になるとは考えてもいなかったが。

レインが去った部屋。理子は安心したように、しかしどこか憂いを帯びた表情で、先ほどまでレインが座っていたソファに倒れこむ。

『……いいのか、理子？』

不意に、繋いでおいたケータイから声　キンジの声だ　が漏れる。

「……うん。これで良いんだよ、キー君」

『だが、あいつがいれば、ブラドとかいう奴だって』

「それじゃ駄目なの！」

理子の叫びが響き、再び夜の静寂がこの場を支配する。

「駄目、なんだよ……私は、好きな人をこんな事に巻き込みたくない」

『理子……』

『いい加減にしないで、キンジ。一番辛いのは、一番助けて欲しいのが誰だか分かってるでしょ？』

未だ何か言おうとしたキンジに、アリアの声が重なる。

『だけど……いや、分かった。済まない、理子』

反論しようと、恐らくケータイの無効で拳に力を入れたであろうキングジの言葉は、要領が得られぬままフェードアウトしていった。彼も気づいたのだらう。彼女のために余計な心配をするより、彼女のためにさっさと任務を達成した方が遙かに理子のためである事を。『……二人共、ありがとう。じゃあ、作戦だけどね』

「お帰りなさいませ、お嬢様、ご主人様」「」
「ただいま〜！」

「ご丁寧にも」

理子は笑顔で腕をぶんぶん振り回し、レインは笑顔で軽く会釈し中に入る。途端に、メイド服姿の女性らが駆け寄ってきた。

仕事はどうした、とも思ったが理子はこのVIPであり、しかも女性に対してそんな不粋な事を言うのもどうかと考え、自重した。

「理子様のデザインされた服、とても評判が良いんですよ」「
「でしょでしょ!」

「新しいスイーツが出来たので、試食していただいてもよろしいですか?」

「いいよ〜! ダーリンの分もね?」

「ダーリンですって!」

キャア、とかなんとか言って遠めにこちらを見てくるので、レインは作り笑顔で会釈で返す。

すると全員真っ赤になり、各々の仕事に戻って行った。それを見た理子は、急にレインの腕に抱きつく。振りほどこうか、という考えも一瞬よぎるが、今日の目的は理子の息抜き。彼女の好きにさせるのが一番得策だらう、とレインは思い直した。

「言っとくけどお、この人は私のダーリンなんだからねえ? ね、
ダーリン」

やたら発音良くダーリンを強調してくる理子に苦笑しながら、レインは彼女の頭を撫でてやる。

「（乗った方が良いのかな……でもなあ）さあ、新作のスイーツとやらがきたみたいだよ？」

そのまま話題を逸らし、レインは理子の意識をダーリンという単語から離れさせる。だが。

「理子様、こちら新しく入った『ダージリントイー』です」
ダージリンとダーリンってちよつと似てる。

そんな完全に余談以下のどうでもよさ極まる事を頭の隅に浮かべながら、レインは人の悪い笑みを浮かべるメイドさんをジト目で見てみたりする。

バツが悪そうに顔を赤くしたその女性は、トレイで顔を隠しながらどこかへいってしまった。

「……レイン。今日は私の付き合いなんだから、その辺を考えといてねえ？」

こちらは顔が笑ってるのに心が笑ってない。

「分かってるよ、理子。それと、カフェラテ二杯貰えるかな？」

理子の機嫌を損ねないように、軽くカフェラテでも用意しよう、そんな感じで次々と軽食を進めていく中。

「なあ理子」

「何、レイン？」

「お前はいつからイ・ウーに入ってたんだ？」

そんな核心をついてくるレインを見て、理子は一瞬首を傾げたが彼女はさして大した問題でも無いように答える。

「レインと出会ってしばらくしてからだね」

理子はそんな程度の情報しかくれなかったが、レインはそれからもいくつか質問をして。

「……お前は今、満足か？」

レインの唐突な問いに 理子は一瞬、眉をあげた。

「楽しいに決まってるじゃん。何せ、ダーリンが隣に」

「そういう話じゃない。別に今日に限った話じゃなく、最近だよ。俺たちという、理子、お前の今の生活だ」

そのレインの問いに、しばしの考察の後、

「……そう、だね！ うん、とっても楽しいよ！」

「そうか、それが聞ければ充分だ」

思う存分、お前とお前の楽しめるこの生活を守る
そうは口に
出さず、レインは静かに理子の頭を撫でた。

第55弾 動き出す吸血鬼

第55弾 動き出す吸血鬼

アリアとキンジが紅鳴館に侵入してから二週間。
レインは理子に休暇を貰い、普段の疲れからか部屋でベッドに突っ伏していた。

「ああ、疲れた……」

そのまましばらくすると、睡魔が襲ってくる。

レインはそれを振りほどく事もせず、流されるまま深い眠りについた。

「……………い、先輩」

誰かの、声が聞こえる。

ああ、これは……

「レイン先輩っ！」

「ふあ……………どうしたの？ 悠」

そう、彼の徒友であり、男を装う女の子である、チエンジ通称転装生。

「先輩、ケータイがさっきからなり続けてますよ？」

「んあ……………ありがとう」

今は……………もう日が落ちかけていて、潜入しているキンジ達もまだ仕事中にはず。だが、そんなに何回もケータイを鳴らしてくるとなると、彼らが関係していないとも思えない。

ケータイを少し早めに開き、受信ボックスにカーソルを合わせる。

そこには、アリアからのメールが、十件程入っていた。

「ッ！」

まさか、ブラドが帰ってきたのか？

そう危惧したレインだったが、一番新しい文面が

『ちよつと！ 聞いている！？ 居眠りなんてしれるようなら風穴空けるわよ！』

だったため、居眠りを見破られた事、風穴の事に冷や汗をかきつつ、とりあえず一番古いメールから見る事にした。

「……………！ くそ！」

メールを見るなり、血相を変えたレインは銃とダガー、そして防弾制服の準備を済ませる。

「ちよつ、レイン先輩！」

「済まない、悠！」

レインは窓を開け、雷神化　そこから飛び降りる！

ダン！

コンクリートの地面に罫が入るのもいとわず、レインはそのまま海の上、否、空を駆けた。

『雷歩』。

自身の足、そしてその下の空間に対極の磁場を形成、その反発力で空を蹴る。

身体能力のカバーにも使える汎用性のある技だ。

余談だが、はたから見れば少年が海の上を駆けるその光景は、しかし彼のお得意様である政府の圧力によって、マスコミに取り上げられる事は無かった。

メールの内容はこう。

『理子の言ってた作戦期間は嘘。本当は今日が最終日であり、そして同時に作戦実行も今日』

メールの内容から失敗した様子は無かったようだが……………もしもの場合もある。やがて、紅鳴館に着くと、レインは門の陰に隠れ、愛銃・ブローを抜いた。

「……………？」

だが、それはすぐに下ろされた。

アリアやキンジどころか、人の気配なんてどこにも無い。

どうやら作戦失敗は杞憂のようで、アリア達は理子と合流したようだ。確か合流予定地はランドマークタワー。自分もそこに向かおう

そこまで思考が至った瞬間、

「……ッ！」

レインは身体を翻し、その一撃を避ける。

「あつぶな！ って、まあたお前達か……」

レインの視線の先には、灰色の絨毯、もとい、狼の群。

彼らは飛び上がり、赤みの残る空を灰色に染めて　飛びかかってきた。

「ったく、馬鹿正直に！」

レインはダガーを八本投擲し、急所を外して狼達に当てる。途端に、狼達は感電して落下してくる。それを流暢にかわしながら、レインはブローを抜き、雷歩を応用した反発力での跳躍で飛び上がり、フルオートで銃弾を吐き出させる。

ババババン！

刹那、マズルフラッシュが煌めき、狼達が感電し、次々と倒れ伏す。

「さて、こんな足止めをしてくるって事は……」

レインは狼の攻撃をかわしながら、片手を顎にあてる。

「ブラド達はもうキンジ達のところ……！？　やば！　失敗った！」

狼達がすれ違う瞬間に、レインは雷掌を浴びせる。

そして、全部の狼が倒れたのを確認すると、レインは再び、闇が映え始めた夜の空を蹴った。

約束の場所、ランドマークタワー屋上。

そこでは　理子が、キンジとアリアとにらみ合うように対峙して

いた。

理子の首には、青い十字架が月光を浴びて輝いている。

「くふふっ、ごめんねえ、キー君。理子、悪い子なのお。この十字架さえ戻れば、もう全部オーケーなんだあ」

「……理子。約束は全部、嘘だったんだね？」

対するは、ヒステリアモードのキンジ。

「まあ、でも……許すよ。女性の嘘は、罪にはならないからね」

およそ武偵のセリフではないような言葉を口にしつつ、けれどもベレッタに手をかける。

「……でも、俺のご主人様は、理子を許してくれないみたいだね」

「キンジ！ 鬪るわよ！ 合わせなさい！」

キンジは短く首肯する。それを確認してか、理子はワルサー二丁を抜いた。

「先に抜いてあげる。ここは武偵高の外。その方がやりやすいですよ？」

なるほど、これでキンジ達が銃を向けても正当防衛になり、犯罪にはならない。逆に、そうしてまで理子はアリアたちと戦いたいとわかる動作だ。

理子と同じように、アリアは両手にガバメントを握る。

「理子。なんでそんなモノが欲しかったの？ ……ママの形見っただけじゃないんでしょ？」

十字架を銃で指しての問いに、理子はワルサーをあげ、口元を歪める。

「この十字架はただのアクセサリーでも、ましてやお守りでもないんだよ。これは、理子の大好きなお母様が、『これは、リュパン家の全財産とも釣り合う宝物なのよ』って下さった、一族の秘宝なんだよ。だから理子は、これだけはずっと隠し続けてきたの。これだけはとられないように、ずっと口の中に隠し続けてきた。そしてあの夜 気づいたんだ。」

理子の髪が、その言葉に反応したかのようにワサワサ、と揺れる。

ハイジャックの時に見せた、あのメデューサのような動きを見せる。
「この十字架……いや、この金属は、理子にこの力をくれる。この力で理子は檻から逃げ出せた。この力で……！」

理子は、いや、理子のツインテールの髪は背中のランドセルから、大きめのナイフを取り出した。

その両手には、ワルサーが二丁。

そのツインテールには、ナイフが二本。

アリアとは違う、理子の『双剣双銃 カドラ』。

「オルメス。キンジ。お前たちを倒して、私は今日、曾お爺様を越える。理子は、理子になる！ 自由になるんだ！」

ゴロゴロ……

遠雷が鳴り響く。

その音にアリアが肩をビクツ！ と震わせ　それが、開戦の合図となった。

両のワルサーでキンジ、アリアに標準を合わせた理子が、
「お前たちは、私の踏み台になれっ！」

叫び、引き金に手をかけた　瞬間。

バチツツツ！

何かが弾ける音。

小さな雷鳴のようなそれは

「…なん、で、お前が……！？」

半分だけ振り返った理子は、その男の姿を見て、驚愕するも　　が
くん、と倒れた。

理子の身体が倒れた事で、その男が姿を現す。

それは、その男は、ばかにでかいスタンガンを携えた

「小夜鳴、先生……！？」

救護科の臨時教師、小夜鳴だった。

第56弾 現れる無限罪、姫を護るは紫の雷（前書き）

ついにブラド来た！

ようやく戦闘が書けます！

第56弾 現れる無限罪、姫を護るは紫の雷

第56弾 現れる無限罪、姫を護るは紫の雷

小夜鳴は、アリアに自分の名を呼ばれるとスタンガンを離した。ガラン……そのスタンガンの落ちる音が、不気味に思える。それほど、普段の雰囲気とは明らかに違う小夜鳴の醸す空気。何か、何か嫌なものがある。

「遠山君、神崎さん、動かないで下さいね？」

その言葉の意味は、動いたら理子を殺す、そういう意味だろう。うかつに動く訳にはいかない。

キンジが小夜鳴を睨み付ける目を細めると、小夜鳴の後ろから、武偵高の保健室に現れたのと同じ種類の狼が姿を現す。

「君たちが私に近づくと襲うように仕込んであります。リュパン4世を殺すのもつたいたいですし、そのまま動かないで下さいね」
小夜鳴はリュパン 理子の本名を出した。理子がリュパンの末裔だという事を知る人間は少ない。だが、ずっと理子を監禁していたブラドが理子の素性を知らない訳がない。なら、小夜鳴はブラドに理子の事を聞いたと見てほぼ間違い無いだろう。

「ブラド……彼は間もなく、ここに来ます」
ブラド。

キンジはその単語に初めて焦りを覚える。

イ・ウーN.O.2であるブラドがこの場にくれば、いかにアリアとヒステリアモードのキンジといえど、勝ち目は薄い。だが、キンジは同時にとある希望も抱いていた。

「そうだ、遠山君。君は確か、生物の単位が足りてませんでしたね。丁度いい、補講してあげましょう」

勝手に他人の成績をばらすな、そんなツツコミができる雰囲気でもない。

キンジは口を閉じたまま、小夜鳴の時間稼ぎであろうと与太話に乗る事にする。それはすなわち、賭けに出た事を示す事に他ならない。ブラドが、この曇天をそのおぞましい姿で覆い隠すのが先か、それとも、あの男がこの天を覆う雲を紫の雷で蹂躪するのが先か。

そんなキンジの胸中を知っているのかは定かではないが、小夜鳴が一方的に話を始めた。

「遺伝子とは、気まぐれなものです。父と母、それぞれの長所が遺伝すれば有能な子になります。しかし、全く逆　短所ばかり遺伝した場合、その子はいわば欠陥品です。このリュパン4世のように、ね」

小夜鳴は嘲笑を浮かべると、倒れたままの理子の頭を、邪魔だと言わんばかりに、蹴る。

そんな人外の行為に、キンジな唇を噛み締めた。だが、うかつな事をすれば理子が殺される。

理性と怒りの狭間、そんな危ういバランスの上でキンジはただ、立ち尽くしていた。

「この子、リュパン4世は　」

「……やめる……言うな……！　オルメス達には、関係ない……！」
理子の、腹からようやく絞り出したような弱々しい言葉は、小夜鳴には届かない。

「優秀な能力が、全く遺伝していなかったんですよ。要するに、この子は無能、欠陥品なんです」

そんな非道な罵倒を受けた理子は、額を地面に擦りつけるように、涙を流していた。溢れる嗚咽が、静寂を保っていた屋上に響く。

「さて、これは返してもらいます。あなたには、このガラクタがお似合いですよ」

理子の十字架を取り上げると、小夜鳴はダミーの十字架を、理子の口の中に押し込んだ。

しかし、怒りに混じって、キンジの頭には疑問が浮かんでいた。
何故そこまで執拗に理子を責める？

「いい加減にしなさいよ！　なんで理子をそこまでいじめるのよ！」
それを考えた、というよりは怒りのままに言ったようなアリアは、
小夜鳴に怒号を飛ばす。

「絶望が必要なんです。ブラドを呼ぶためには、ね」

そう言った小夜鳴の雰囲気　変わる。

おぞましい。それしか言葉が出ない程に。

逃げ出したい。この場から今すぐに。

潜在的な恐怖を煽る、絶対的強者　いや、人ならざる空気。

「く、くくく……これで彼が呼べる。遠山君、神崎さん。最後にイ・

ウーの講義をしてあげますよ」

イ・ウーの名を出した小夜鳴は、その手を額に当て、脂汗をかいて
いる。

だが、苦悶の表情はしておらず、何かを我慢するような感じだ。

「知っているでしょうが、イ・ウーは能力を教え合う場所です。し
かし、それは4世らの低い階梯の者達のおままごとに過ぎません。

現代のイ・ウーは、能力を写す場所なのです。ブラドの能力　吸
血、を真似てね」

にい、と笑った小夜鳴は、自らの歯を見せる。確かに、犬歯がやけ
に尖っていた。

「なるほど……ブラドはドラキュラ伯爵だった訳ね」

「正解です。よく出来ましたね、神崎さん。ご褒美と言っては難で
すが……彼と拝謁できそうですよ」

ピカッ！

遠雷が轟き　小夜鳴の口元が、歪む。

「さあ　かれ　が　きたぞ」

小夜鳴の不気味な、重なったような声と同時に　彼が、彼の魂がこ
の場から消えて失せ、代わりに奴が、来る。

びり、びりびり。

スーツが破れ、その下の肌は赤褐色に変色していく。筋肉が異様に
盛り上がり、服もほとんどが破れ、その不気味な体色を露にする。

「初めまして……だな。今の俺は、ブラドだ」

その声は何重にも重なったような低い声。

その瞳は鈍い金色でこちらを見据える。

「……なるほど、擬態ってやつか」

「……？ どういう事よ」

アリアの怪しむような問いに、キンジは自分が声に出していた事を反省しつつ、あちらにも聞こえるように話を始める。

「ブラドは元々、あの姿だった。しかし、進化の過程で 恐らくは、人間の血が必要になったんだろう。だから、人に擬態するようになった。その擬態は高度で、小夜鳴という人格さえ作り出すように、な」

「なるほど……それで、吸血鬼の姿と人格を隠して、人間になりきってたのね」

アリアがブラドに向けてそういうのを、彼は面倒そうに

「ああ、そんなところだ」

と返す。彼の意識がこちらに向いて、理子から一步離れた瞬間

「（今だ！）」

パパパン！

キンジのベレッタからマズルフラッシュが閃き、全てが腕に命中した。だが、顔をしかめたのはブラドでなく、キンジ。

穴があいた腕が、一瞬で何事も無かったかのように元に戻ったのだ。

「……ッ！」

キンジが狼狽、驚愕どちらともとれる表情をしていると、

「う……」

理子が目を覚ました。どうやら、銃声が耳に響いたようだ。

だが、まずい。それで、ブラドの意識が理子に向いてしまった。

「おう4世。久しぶりだな」

そう言ったブラドは、何か思いついたように、理子の頭を軽くつまみ、持ち上げる。ブラドのあの巨体は握力も当然化物のはず。このままでは、理子は

！

「ぶ、ブラド……！ 騙したな……！ オルメスの末裔を倒せば、私を開放するって、や、くそく……したのに……」

「お前は犬とした約束を守るのか？」

ブラドは盛大に笑い始めた。嫌悪感ばかりが滲む、下卑た笑い。

「いいか4世。お前は逃げられねえんだ。お前の居場所は世界のどこにもねえ。お前の居場所は、檻の中だけなんだよ！ ゲバツ、ゲバババツ！」

ブラドに振り回される理子の瞳から 涙が溢れる。

理子はきつく目を閉じ。

自分の大好きだった、彼を思い浮かべる。

「……レイン」

その名を、絞り出すように呟き

「たす、けて……」

泣きながら、そう言った 瞬間。

「ああ。助けるさ」

理子の身体が、突然浮遊感を感じとる。ブラドの腕と共に。

「ぐおっ!？」

刹那、ブラドの切断された腕が消し炭になり、重力により落下した理子は、彼の手に抱かれる。

「理子。ようやく言ってくれたね。これで」

顔を上げた理子に微笑んだ彼、レインはニコツ、と優しい笑みを浮かべ、理子を座らせる。

「思う存分、お前を助けられる」

そう言い、ウインクして見せたレインの背後。

腕が回復したブラドは、拳をレインに向けて振りかざしていた。

「レインっ！」

キンジが叫ぶ。それよりも早く。

「ぐああ!？」

ブラドの手が、消し炭となる。

「理子。ちよっと座っていて。すぐに終わらせる」

理子は、レインの背中を見つめ、首肯した。

レインはブラドの方を向き、見えてはいないはずだが　どこか、笑っているように見えた。

「ブラド、貴様は俺の大切な人を傷つけ過ぎた。貴様の名の通り、無限に値する罪を犯した。だから俺が審判を下そう。この『紫電の雷神』が」

レインの圧倒的な気迫。キンジ達が初めて見る、怒りの表情。

その雰囲気は、ブラドとは比較にならない程、純粹な『力』。

「始めようか。貴様の刑を」

第57弾 圧倒的な実力（前書き）

オリキャラ達と自分で二つ名メーカーというのをやってみたので、載せてみたいと思います。

成瀬レインハート

『精霊乱舞 エメラルドパラボックス』

朝露静奈

『鎖状微塵 チェインレクイエム』

立花ミチル

『不死憎悪 エターナルビースト』

霧矢綾瀬

『嗜虐実験 ヒドウンプレイス』

有明悠

『精霊密室 エメラルドクレイドル』

プーモ（ハンドルネームのプーモでやりました）

『妄想暴虐 クラッシュブレイン』

プーモ（本名でやりました）

『次元刹那 アンノウンディメンション』

自分の本名の方かっこよ。

そしてプーモの方。的を得すぎて笑えました。

第57弾 圧倒的な実力

第57弾 圧倒的な実力

「お前が……『紫電の雷神』だと？」

ブラドが訝しげに口を開くのを、レインは相手の挙動全てに注意を払いながら無言で返す。

ヒュン。

水月を軽く一振りし、ブラドの血を落とす。

そんなレインの行動に、キンジは目を見開いていた。

水月に血が付いているという事は、ブラドの腕を切り落とした武器は水月という事になる。

だが、水月は切れ味が皆無の刀。それでブラドを斬ったそのカラクリは、恐らくは雷による超振動。そして、キンジのその予想は的を射ていた。

水月の元々紫の刀身が、紫電を浴びてより深い紫の光を放つ。

その光が強まり……レインは駆け出した。

「はっ！」

レインはブラドに飛びかかり、水月を振りかざす。

ブラドは先刻再生した右腕を突き出す。

だが、レインは雷歩を使用して空を蹴り、突き出された拳を、手首ごと切り離す。

「ぐあああ！」

「まだまだあ！」

叫ぶブラドの傷が回復する一瞬、その間にブラドの上に上昇。その脳天から鉛弾をぶち込む。

銃弾は身体の中で静止し、そして穴が空いたはずの頭は赤い煙を吹き出し、一瞬で塞がる。

「（やっぱり駄目か……）」

ジャンヌに聞いた話なら、ブラドを倒すには4つの目玉模様を同時に攻撃しなくてはいけないらしい。試しに、狙っている事がバレないように左脇にあつた目玉模様を他の場所を巻き込みながら銃弾で撃ち抜くと、なるほど、そこだけやけに回復が遅い。誤差は三秒程度だが。

「なるほど……ねっ！」

目玉模様をこれ以上攻撃すれば狙いがバレる。だからといって目玉模様を狙わなすぎれば逆に勘繰られる。だからこそ、

「雷線！」

レインの得意分野、エリア攻撃。

レインはダガーをブラドの周りの地面に突き刺し、先ほど腹にぶちこんだ銃弾に向けて雷を一直線に走らせる。だが、これもやはり無限再生によつて回復されてしまう。

「（やれやれ……全部纏めて消し炭に出来たらどんなに楽な事か！）」

「

レインは悪態を吐きながら雷砲を放つ。

ブラドの半身が消し飛び、苦悶の表情を浮かべる。

「（くそ、最後の一カ所は何処なんだ！？）」

レインは既に3つの目玉模様、その在処を押さえていた。だが、どうしても一カ所見つからない。

「チヨロチヨロとお！」

ブラドが叫び声を上げ、急激に胸が膨らんでいく。それは、今にも張り裂けそうな程に。

あれはまずい！

「耳を塞げ！」

レインが突如発した声に反応できたのは、アリア、理子だけだった。残るキンジは、身構える事しか出来ない。

「（それじゃあ駄目なんだ……！）」

だが、レインがキンジの耳を塞ぐよりも早く。

「ワラキアの魔笛に酔え　　！」
ウオオオオオオオン！

一瞬遅れて。

これがブラドの叫び声だと理解する。

音が衝撃となり、ランドマークタワーの屋上から響き渡る。

床が捲れ上がり、武偵高の制服をはためかせ　　キンジはよつやく

耳を塞いだ。だが。

「（これは……ヒステリアモードが！）」

『ワラキアの魔笛』。

それは、音波攻撃にヒステリアモード解除効果を持つ、ブラドの咆哮。

「アリア！　キンジと理子を連れて下がれ！」

ヒステリアモード　　レイン曰くではジゴロモード　　が解除されたキンジ、そして傷を負った理子は今この場では的になる。

だからこそ、アリアが頼みの綱だったのだが　　それが、致命的な計算違いだった。

ワラキアの魔笛をくらい、ぐらり、と倒れたキンジにアリアが駆け寄っていく。キンジはアリアの想い人であり、その彼が倒れたのだからアリアが駆け寄るのは当然の反応だ。だからこそ。

理子が、無防備に倒れ伏す状態になってしまった。

ブラドがこれぞ好機、と言わんばかりに拳を振りかざす。

分かっていた。ブラドは理子を殺さない。だが、身体は勝手に、彼女を守るよう動く。

分かっていた。ブラドは、レインが理子を庇う事を。

「理子っ！」

レインは理子を抱きかかえ、身を丸めた。

ザンツ！

「ぐっ！」

ブラドの鋭い爪が、レインの背中を抉る。

その衝撃は凄まじく、レインは抱いていた理子ごと、ランドマーク

タワーの屋上から吹っ飛んだ。

「レイン！」

「理子！」

理子が落下していく。

「さ、せ、る、か！」

レインは雷歩で一瞬で理子の下へ移動し、彼女を再び抱きかかえる。

「理子！」

「レイン。よく聞いて」

心配は無用、そう言うように理子は表情を強張らせる。レインもそれを察し、黙って理子の言葉を待った。

「ブラドの目玉模様　魔臓は、あいつの無限再生を司るもの。あそこを叩けば、ブラドは吸血鬼として全ての弱点が戻る」

「だけど、その残り一カ所が分からないんだ」

そう、如何に魔臓が弱点だとしても、4つ全てを同時に破壊しなくてはならないのだから、全ての場所が分からなければ意味は無い。

「理子は知ってるよ。ずっと一緒に暮らしてたから。あいつの胸の中央、そこに魔臓があるんだ」

確かに、ブラドの胸の中央は白い十字架のような模様があり、目玉模様が判別し辛い。

しかし、そうだとしても全ヶ所同時に攻撃する方法が、

いや、あった。

レインは飛び上がり、キンジ、アリアの近くに降り立つ。

「理子。キンジ。アリア。手伝ってくれ。アイツの目玉模様、あれを各人で撃ち抜く。いい？」

恐らくアリアと何かあったのであろう、再びヒステリア化したキンジ、理子、アリアが頷く。

「でも、銃が足りないわ。私のは残弾が一発しかないし、キンジも同じ。銃は三丁しかない」

理子のワルサーは……ブラドが壊したようだ。銃が四丁あるのが怖いのだろう。

「大丈夫。理子が一丁隠してる」

「そうか……なら、俺の合図で、各人発砲してね。じゃあ……いくぞ！」

レインが叫ぶと、四人はブラドの標準を定めさせないよう、散り散りになる。

「面倒だ……コイツで纏めて相手をしてやる！」

ブラドは近くの鉄骨をむしりとり、棍棒のように回し始める。

だが、それは、『紫電の雷神』、レインを相手どるこの状況下では自殺行為以外の何物でもない。

「馬鹿だね……まあ、好都合だ。『雷弾』」

そう言ったレインは、指でピストルのような形を作り 指の先から、紫の雷がレーザーのように放たれ、鉄骨に高圧電流が流れる。

「ぐおおおお！？」

「今だ！」

レインの合図と共に、四人が発砲する。

レインの弾丸は、正確に魔臓に向けて飛んでいく。

一つ目、クリア。

だが、予期せぬ事態が起こった。

ごろごろ……ピシヤッ！

レインの十八番、雷が瞬き、アリアの恐怖心を煽り、手を震わせる。その弾丸が、魔臓への軌道から僅かに逸れた。

「（まずい！……いや、まだ修正できる！）」

だが、ヒステリアモードのキンジは常人を越えた絶技で、アリアの弾丸の修正を試みる。

パン！

キンジのベレッタから閃光が瞬き、銃弾が放たれた。

その銃弾は、アリアの銃弾に向かっていく。

ギーン！

金属音が鳴り響き アリアの弾丸の軌道が、正確に魔臓へと修正される。

同時に、キンジの銃弾も弾かれ、そのまま別の魔臓に向かい 両方、目玉模様のど真ん中に穴を穿つ。

「（やるね……キンジ！）」

キンジの活躍により、二つ目、三つ目、クリア。

そして残る一つを狙う理子は、曇る空に飛び上がった。

理子の銃弾は、ブラドの胸の中央を性格に狙っている。

が ブラドの表情。

あれは、弱点を狙われている者の表情ではない。

違う！

レインは直感する。

ブラドの挙動 常に頭を守るような戦い方。

そして、頭で唯一見えない場所。

魔臓の在処を理解したレインだったが、理子はもう引き金を絞っている。

もう理子が標準を変えることは不可能。

ならば

レインは磁力で、理子の超小型拳銃、デリンジャーの銃口から吐き出された銃弾の向きを操作。ブラドの魔臓の在処に向け 磁力で、引き寄せる！

銃弾の速度を損なわないよう、絶妙な加減で修正された銃弾は

「4世いいい！ 成瀬 レインハートおおおおお！」

ブラドの大口が開かれ 銃弾が、その中に吸い込まれた。

理子はそのまま、ブラドの頭を踏みつけると……ベー。

可愛らしく、あっかんべーをブラドに向ける。

ブラドは、あが、あが、と開いた口を塞ぐ事が出来ない。

その口の中の、舌。

そこにあつた、まぎれもない目玉模様には 穴が、空いていた。

「4、世、4世、4世4世4世4世、4世いいいいいいいいいい！」

そのままブラドは顔を歪め、筋肉が収縮していく。

「ぐっ、うおおー！」

筋力が低下し、鉄骨を支え切れなくなったブラドは、自分から振り回していた鉄骨に押し潰される。

「皮肉だね……ブラド。お前自身が振りかざしていたモノに、お前は押し潰されたんだ」

ブラドはほとんど縮んでいき……ガチャン。

レインは対超能力者用の銀の手錠をかけた。

「そつだ、お前に一つ良いことを教えてあげるよ、ブラド」

レインはそういうと、理子の十字架をブラドから取り上げた。

「人間には、お前には想像も出来ない可能性がある。それこそ、『無限』にね。分かった？ 無限罪さん」

理子に十字架を渡すと、レインは彼女を抱え上げ、アリアとキンジのいる場所へ向かった。

抱えられる理子の手で、その青い十字架は月光に反射し、きらりと輝いていた。

第57弾 圧倒的な実力（後書き）

さて……そろそろ原作四巻に入れそうです。

第58弾 番外編 く無限に広がる蒼く（前書き）

今回の番外編もゲストキャラ登場です！。

第58弾 番外編 無限に広がる蒼

第58弾 番外編 無限に広がる蒼

突然だが、これは2年程前、つまりはレインが中学生である頃の物語。

ある部屋……豪華な家具が並び、明らかに上流階層が住んでいるであろうそのソファには、美しい銀色の髪をした少年、成瀬 レイン ハートが横たわっていた。

今日は彼の敬愛する師匠が、レインの知り合いでもあり、先輩でもある女性と任務にいくらしく、彼も付いていこうとしたが少人数の方が都合がよいと断られてしまい、彼は一人寂しく自室に籠っていた（つまり、この部屋はレインのものだった訳だ）。

「……暇だー」

そう、暇。

彼は暇だったのだ。だからソファを飛び降りて、立派なアンティークの家具で筋トレを始めるなんて暴挙に走ってしまったのだ。あとで師匠に起こられる事請け合いだ。

友達を呼ぶことは出来ない。皆、自分を怖がるためだ。

「（そんなに怖いかな……？）」

心の中でぼやきつつ、レインはケータイを開く。しかしそこに友人の名はほとんど無く、仕事関係やら貴族やらお得意先やらばかりだ。反射的にケータイをぶち折りたくなるが、さすがにそれは憚れた。しかし、レインはそこである事に気づいた。

「……あれ、師匠から着信だ」

仕事に出たはずの彼の師匠からの連絡。仕事関係で何やらトラブルだろうか。とりあえずは折り返してみる。

前にも何回かこういう事はあり、その大体が対超能力装備の不足だったため、レインの足は自然に整備室に向かっていた。

「『……ガチャツ』……あ、師匠ですか？ 何か電話が来てたんですが……え？ ああはい、ローマ武偵局へ？ ……はあ、分かりました。では、失礼します」

電話の内容は、レインの師匠にローマ武偵局からの依頼があったのだが、それをレインが代わりにやる、という事らしい。

どうせ暇だったし、という理由からか、レインはダガーを懐にしまい、ブロウをホルスターに納める。

今回の任務は、犯罪グループが潜伏している可能性のある地域に潜入、捜査、そして可能なら逮捕。レインにとっては楽な任務である。

はずだった。

今レインがいるのは、例の依頼の潜入先の廃工場であり、犯罪グループのアジト。

相手の力量から察するに自分との戦力差は明らかだったが、油断や驕りをする者は足下を見ず、思わないところで転ぶものだ。だからこそ、レインは一分の油断などしていなかった。何が起きようとも、動じないように。

そのためか、衝撃は少なかった。

レインの目の前には 死体の、山。

「！」

ある者の腹からは臓物が飛び散り。

ある者の眼からは白い液体が滲み。

ある者の頭は吹き飛んでいた。

「誰が、こんな……」

レインが一步退き、片手を口に添えた、瞬間。

「俺だよ」

「！？」

突如として後ろから放たれた声、同時に

「（殺気！）」

バツ！

レインは最高出力の雷歩で、思いきり上に跳んだ。その刹那、ズガアアアアッ！

爆音と共に、先ほどレインのいた場所、そしてその延長線上にあった死体の山が、消し飛ぶ。蒼いエネルギーの弾丸によって。

焼いたでもなく、壊したでもなく、何処かに転送したわけでもなく、ただ純粹に、無に帰す。

「（なんて威力だっ……！）」

あれをまともに食らっていたら、そう考えると背筋に悪寒が走る。

そして、そのエネルギー弾の射手……少年、を見た。

蒼い髪に、蒼い瞳、蒼い服。

そして、少年の纏う雰囲気さえ、蒼く見える気がする。

少年は、まさに『蒼』、そういった感じの美少年だった。

「ククク……あれをかわすかあ。ひさしぶりに、中々手応えのある相手に会えた。アア、タノシイ」

そういった少年は、先ほどのエネルギー弾を放とうと、指をピストルの形にしてこちらに向けてくる。

「くたばれ」

少年が放った弾丸は、先ほどよりも、

「（速い！）」

レインは先刻のように雷歩で移動してなんとかかわす。

「ハハアッ！ そいつもかわすか！ いいよお前、サイコウダ！」

少年は 左右の手でピストルの形をつくる。

まさか ！

「オラオラオラアァー！」

彼の両の指先から、またも蒼いエネルギー弾が放たれる。しかも、先ほどのスピードは衰えていない。

「ちっ！」

だが、さすがに二本のエネルギー弾は、それぞれの威力が半分に分割されていたため、片方を雷砲でなんとか相殺する。

そして、もう片方をかわすために形成した磁場を踏みつけ、左にかわした。だが。

クンツッ！

蒼いエネルギー弾が、レインに向けて折り曲がった……………。

「追尾型 ホーミング ！？ くそ！」

レインは片手を蒼いエネルギー弾に向け、

「雷弾！」

紫の高圧電流のレーザーを放った。

それが蒼いエネルギー弾にぶつかると、ドゴオオオオン！
爆発が起き、レインが爆炎に飲まれた。

「おいおい、まさかその程度じゃねえだろうな？」

少年は、爆発に吞まれたレインの方を獰猛な笑みを浮かべて見ていた。

そんな中、紫の雷が黒煙を切り裂いた。

「当たり前だろ！」

レインは先ほどの少年のように両手の指先から、雷弾を雨のように浴びせる。

「やるねえ！ だがだが甘え！」

対する少年は、強烈な一撃でレインの弾丸を消し飛ばす。

「（遠距離じゃジリ貧だ……なら！）」

レインは雷神化の出力を最大にし、雷歩で二回三回、稲妻のような軌道で少年の懐に入る。

「はっ！ 俺がガチで出来ないとしても思ってたのか？ ああ！？」

そう言った少年は、刀を四本、上空に投げ ジャグリングの要領で、持つ手と刀を変えながら、レインに斬りかかる。が。

「お前こそ、甘いよ！」

レインもそれを真似て、ダガーを八本　・　でやってみせる。しかも、雷刃のオマケ付きで。

「は……ははは！　面白え面白え面白え！　面白えよお前！」

少年は更に、拳銃を二丁　・　ジャグリングに加え、一本、二本と次々とダガーを撃ち落としていく。

「そりゃどう……も！」

しかし、レインの計算通り。

「雷線式……『綾取・雷塔』！」

碎かれ、空に散ったダガーの破片、それに残留する紫電を繋ぐ。綾取のように。

「ぐっ！？」

少年が、初めて苦悶の表情を浮かべる。

少年の身体にはレインの雷が流れ、現在一時的に麻痺している。つ

まり　好機！

「はああああ！」

全力で、少年の腹に雷掌をぶち込む。

「ぐ、ふう……！」

少年は口から血を流す。

「名前は知らないが、殺人の罪で逮捕させて貰うよ」

レインがそう言っつて、手錠をはめようとした瞬間、気づいた。

少年の雰囲気が変わった。

「ひ、ひゃ、ひゃはははは八八八八八！　血だ！　血だ血だ血だ

！　何年ぶりだ！？　そうだ、こいつが、オレノ血ダ！」

刹那、少年の身体が蒼く光る。

「ッ！」

慌ててレインが飛び退くが、

「何！？」

その背後　・　から、蒼く光る少年の拳が放たれる。

「ぐっ……！」

ズザアアアアア!

ダガーを地面に突き立て、ブレーキを掛ける。

「ククク……クハハハハア!」

狂った笑い声を上げながら、少年はツカツカと歩いてくる。

「どおした? まだまだ遊び足りねえんだけど」

レインはダメージが大きいようで、立ち上がるので精一杯だったが

「まだ、まだあ!」

レインは最大出力で雷砲を放った。

「!」

少年は反射的に蒼いエネルギー弾を横に放ち、レインの一撃をかわす。

雷砲は、ドゴオオオオン!

という爆音と共に彼方へと消えていく。

その際に少年の頬を掠めたらしく、血が滴っていた。

「く、ククク……ここまで出来るなあ、最高だ! いいぜ、及第点だ。今回は見逃してやる。だが、次にお前と会ったときは コロシアイだ」

そう言った少年はくるり、と踵を返し、レインの空けた大穴へ向かっていく。

そんな中、外からローマ武偵局所属とおぼしき武偵達が入ってきて、少年を取り囲む。

「貴様…… 無限蒼 インフィニティブルー」か!

「ああ? 日本語で喋りやがれ。まあ、言ってる事は分かったがな。おい、そこのお前。俺は『無限蒼』。名乗れ」

ローマ武偵局の男の問いに答えた少年 無限蒼は、首をレインの方に回した。

「…… 『紫電の雷神』だよ」

「なあるほど。てめえが雷神か」

「そういうお前も、無限蒼だったとはね」

二人はにらみ合い

「いずれ決着を着けてやるよ。それまで精々死ぬんじやネエぞ」
「お前も、ね」

少年はそれを聞いた瞬間、獰猛な笑みを浮かべて、バシユツ！
蒼い光と共に、その場から消えた。

「…………『無限蒼』、か」

後日。

「もしもし…………師匠。あのですね、依頼の件ですが…………ええ、はい。
結局みんな死んでて誰も逮捕できず…………いえ！ 失敗にはなっ
…………は？ 帰ったら特訓？ そんなまさか」
ピンポン。

「すいませんでしたあああああああ！」

その日、レインのGは3程レベルアップしたらしい。

第58弾 番外編 無限に広がる蒼々（後書き）

beats様に偏に感謝です。

第59弾 師匠との再会（前書き）

今回は自分の大好きなあの人が登場したりします。
まあ一番はレキで次がジャンヌですが。

第59弾 師匠との再会

第59弾 師匠との再会

あの後、ブラドはやって来た武偵局の人間によって逮捕された。あの鉄骨は随分な重さだったらしく、どかすのが大変だったそうだ。ついでに言えば、あれだけ暴れ回ったのにも関わらず、あのランドマークタワー屋上での戦闘は、表向きには落雷事故という事になっている。

英国の貴族であるアリアや日本政府やらにお得意先がやたらというレイン、極めつけには相手がイ・ウーのメンバーであった事などが相まって揉み消されたようだ。

だから今、レインは特に取り調べなんかを受ける事もなく……

「レイン〜！ こっちこっち〜！」

理子と青海に遊びに来たりしていたのだ。

「はあ……理子、怪我してたんだからもっと安静にしてた方がいいよ？」

「レインも怪我してた癖にい」

「俺は男だからいいのっ」

「えー、意味分かんない」

ぷくう、と頬を膨らませた理子に苦笑いしながら、レインはファーストフード店に入るのを促した。

「さて、これからお前は どうするんだ？ 自由になったんだろ？」
レインがハンバーガーを口に運びながら聞くと、対して理子はドリンクをストローで吸い上げながら答えた。

「まあね。 だけど行くとこなんて考えて無かったしなあ」

「ははっ、 自由過ぎて何をしたらいいか分からない、って訳だ」

「くふふつ、贅沢な悩みだよね」

二人は笑いながら互いに昼食に手を伸ばす。

.....

数秒の間を空けて、理子が口を開いた。

「私、武偵高に残ろうと思う」

「.....そうか。良かった」

「へえ、理子りんがないと寂しいの？」

「まあね」

からかったつもりが、素直にそんなことを言われるものだから、聞いた理子の方が赤面してしまった。

それを隠すように理子は俯いて、その言い訳じみた理由を自白し始めた。

「ほ、ほら！ まだアリアやキー君との決着も着いてないし、それに.....レインも、いるし」

最後のセリフはポリウムが小さかったが、レインの耳にははっきりと届いた。レインは多少顔を赤くしながら、

「あ、ありがとう.....」

と返すのみ。

つまり、再びの沈黙。

.....

気まずい空気が流れる。

そんな状況を打開しようとレインは理子に話かけるが、

「あのさっ（あのねっ）！！」

見事に声が重なり、互いに委縮してしまう。

「あ.....先にいいよ」

レインが譲れば、

「い、いいよ.....レインが先で」

理子も譲る。

それを延々と繰り返す、埒があかないと考えたのか、理子が先に言葉を発する。

「あのね、レイン……助けてくれて、ありがとう」

「その事なら言わなくてもいいよ。俺だってアイツが許せなくてやったところもあるしね」

ブラドは、幼い理子を監禁し、ボロ雑巾のように扱っていたのだ。一度は殺したいとまで考えた相手を逮捕した程度で感謝されると、良心が痛む。

「ううん、レインは理子を助けてくれたんだ。レインが、理子の檻を壊してくれた。本当にありがとう」

理子が必死になってそう言うってくるため、さすがにこれ以上意地を張る理由も道理もない。レインはにこやかに、

「どういたしまして、理子」

と言い、感謝の言葉を素直に戴く事にした。

「そうだ。理子、俺もお前にお礼が言いたい。小さい時、助けてくれてありがとう」

さっきレインが言おうとしたのはこの事で、理子が幼いレインを包容し、心を癒した時のお礼が言いたかったらしい。しかし、当の本人である理子とは言えば……

「ええ！？ あ、あれは別にそんなつもりじゃ……」

片手を顔の前でブンブン振り否定のポーズをつくるが、レインはそんな事はお構い無く続ける。

「いや、間違いなく俺はあの時お前に救われた。ありがとう」

先ほど、自分もレインに促したのを思い出したのか、理子は素直にレインの感謝を受け取った。

「考えれば、お互いに助け合ってたんだね」

「そうだね……」

感慨に耽りながら、レイン達は昼食を終え、武偵高に帰っていった。

「ビー、ビー。」

「……ケータイか」

レインはマナーモードにしていたケータイをカバーから取り出し、受信ボックスを確認した。

「！」

その、相手の名前を見て、顔を一瞬驚愕の色に染めた。が、それは一瞬の事。レインはすぐに気を引き締めて、メールに書かれていた場所へ向かった。

メールの内容は、至極簡単なものだった。

内容は（・・・）。

実際には普通の友人のする会話のような文面だったが、それは暗号文になっており、解読するところという話だ。

『潜入 終了 午後 六時頃 空き地島 にて』

対してレインは、同じ暗号で

『了解』

と返した。

レインはベランダの窓を空けて、磁力を利用して鍵を閉める（こんな超能力者がいた時のためにもう少しセキュリティを厳しくすべきだとレインは考えていた）。

そして目視できる距離にある、壊れた飛行機 ハイジャックの際にアリア達が乗っていたものだ が未だ撤去されずにある、空き地島へ向かって空を駆ける。

一分とかわからずそこに降り立ったレインは、待ち合わせの相手を探し始めた。その人物はマメな正確なため、既にこの場にいるはずだ。

「ひさしぶりね、レイン」

案の定 聞き覚えのある声がかげられる。

その声が見上げた方を見上げると、そこには、

「……師匠ししやう、いや、カナ師匠せんせい」

絶世の美女、そう称するに相応しいワンピース姿の女性が、壊れた飛行機の羽根、その先端に腰かけていた。

その瞳は、エメラルドよりも深く、美しい翠。

その髪は、夜の闇よりも優美で、麗しい黒。

髪は腰まである長い三つ編みで、長い睫毛の間から見える瞳は、それそのものが引力を持っていているようですらある。

「いつ以来かしら。貴方とこうして直に話すのは。会いたかったわ」「直接会って話すのはもう2、3年ぶりですね。俺もです、師匠。それより、イ・ウーは如何でしたか？」

彼が師匠と呼ぶ女性、カナはここしばらくイ・ウーに潜入していたのだ。夜雲に戻るきっかけとなった晴夜が動くという情報も、彼女からのものだ。

「あまりいい気分はしなかったけれど……成果はあったわ。イ・ウーを倒壊させる方法が見つかったの」

「本当ですか!？」

イ・ウーのリーダー、『教授』は相当な猛者だと聞いた。その彼の目を欺き、そこまでの情報を得てくるとは、カナの武偵としての優秀さが窺える。

レインとしても、いくら師匠でもそんな情報まで掴んでくるとは思わなかったたく、驚愕と歓喜が半々に混じったような、しかし一番は尊敬の目をカナに向けていた。

「ええ、だからレイン、手伝ってくれる？」

カナの、自分の師の問いに、間髪入れずに肯定の返事を返そうとし、レインが顔を上げた　瞬間。

思いもよらぬセリフが、カナの桜の花びらのような唇から発せられた。

「一緒にアリアを殺しましょう」

第59弾 師匠との再会（後書き）

すみません、突然ですが一週間程更新が滞ります。

理由はと言いますと、テストが近いんです。

本当に申し訳ありません。

自分の学力ではちゃんと勉強しないと地獄に落ちるかもしれないので……

本当に申し訳ありません。

第60弾 対峙・反乱（前書き）

レインはカナの弟子だった訳ですね。はい。

一応、中学卒業までローマ武偵中学にいて、一応殲魔科でした。っていう、50話のプロフに書いてある補足です。

第60弾 対峙・反乱

第60弾 対峙・反乱

「な……何を言ってるんですか、師匠！」せんせい

レインは夕暮れをバックに飛行機の不安定な翼に座るカナに、思わず狼狽の声を上げる。

おかしい。

レインにとつて、カナは圧倒的な存在だった。力が？ 否。カリスマ性が？ 否。美貌が？ 否。

どれもカナに形容されるに相応しいものだが、どれも彼女の本質を言い表すものではない。

彼女を表せる言葉があるとすれば、それはただ『正義』。それも、誰も殺さず、殺させず、何よりも泣かせない。

それがカナ、レインが敬愛した彼の師匠の自らに課した掟だった。なのに、何故 ！？

「キンジと、同じ事を言うのね。レイン」
キンジ。

その単語が出た瞬間、レインは背筋に嫌なものを感じ、カナの足下を注視する。そこには。

「キンジっ！」

武偵高の防弾制服に身を包んだ、キンジが横たわっていた。

「師匠、貴女まさか、実の弟に……！」

「大丈夫。気絶してるだけよ」

「そういう問題ではありません！ キンジに『不可視の銃弾』インサイジブルなんてやり過ぎです！」

自分の師に向けて叫ぶという行為自体に齒を噛み締めながらも、叫ばずにはいられない。

「御名答よ。だけど先に銃を向けたのはキンジ。仕方ない事だった

わ

「！ キンジが……！？」

キンジの方を向く。

キンジは、レインと同じくカナを敬愛していた。いや、下手をすればレインよりも、ずっと深く。

にもかかわらず、キンジはカナに銃を向けた。恐らくは、アリアを守るために。

『貴方は……手伝ってくれるわよね？』

先ほどのカナの問いが、レインの頭に甦る。

あれは、キンジに断られたからあんな言い回しだったのだ。

カナは自分を信頼しているようだ。

いや、キンジもレインと同じくらい信頼していたに違いない。

だが、キンジは恐らくアリアの事を想っている。長らくキンジと離れていたカナがそんな事を知れるはずもない。断られたのが余程シヨックだったのだろう。

だが、レインはどうだ。

アリアを想っている訳でもなく。

カナには助けて貰い、修行をつけて貰った身。

カナが正しく無かった事など一度だって無かった。今回だって、多分アリア一人の犠牲で、何千、何万もしくはそれ以上の人間が助かるような事に違いない。

ああそうだよ。師匠は、正義だ。

なのに、何故俺は

「……そう、残念だわ」

レインは、ブローを抜き、カナに向けていた。

「師匠。確か師匠と最後に闘ったのは、俺の中学の卒業前日でしたよね」

「ええ。結局傷一つ負わせられなかった、って嘆いていたわね」

「その時と一緒だと思わない事です」

バチバチ……バチツ。

レインの身体から、微弱な雷が放たれる。

「雷神化……その纏う雷は消すべき、と教えたはずよね？ 相手に一目見られただけで能力がバレるから、ってね」

カナの、レインに対する眼に一瞬肩を強ばらせる。

刹那。

カナの手元が、光る。

『不可視の銃弾』^{インヴィジブル}！

気がつけば身体に銃弾が届いている、文字通り見えない銃弾。故に、不可視の銃弾。

それがどんなカラクリか、以前はさっぱり分からなかったが、ギイン！

水月の一振りで、不可視の銃弾を切り裂く。

「視えた……不可視の銃弾！」

そう叫んだレインは、驚きに眼を見開くカナの目の前に、一瞬で距離を詰める。

最大出力の雷歩。

カナが反応するよりも早く、レインは水月を振るう。

ガキイン！

しかしそれは、カナのもう一つの技、これも不可視の何かだ、

一「サソリの尾 スコルピオ」によって防がれた。

カナがしたのは、髪を靡かせただけ。

にも関わらず、レインの水月はいとも簡単に弾かれる。

「師匠……！」

「駄目よレイン。貴方の力は確かに私と互角、いえ、それ以上。だけどそれは勝敗に関わり得ない。」

「……ッ！」

カナのセリフと共に、レインの背中に、バットで殴られたような衝撃が走る。

何が起こったのか、それを把握しようとするよりも早く、レインの意識は途切れた。

「……はあ、だから貴方は甘いよ、レイン」
先ほどの勝負、レインが全力を出していたならカナの勝ち目は薄かった。

しかし、彼はカナの身体を気遣うあまり、そして恩義のある相手に、全力を出せずにいた。

だからこそ、彼はこうして目の前に倒れているのだ。

「……私はそんな貴方は確かに良いと思うわ。理子やジャンヌが気に入るのも頷ける」

カナはその黒い髪を揺らし、瞼を閉じているレインの顔を覗き込むように顔を近づけた。

仰向けにしてやり、目に掛かっていた銀髪を掻き分ける。

「……でも、この世界で生きて行くには、あまりに甘い。甘過ぎるわ」

カナは、その細腕からは想像も出来ないが、大の男二人　レインとキンジ、二人の弟（一人には子の字がつくが）を担ぎ上げ、斜陽により緋く染まった空き地島を後にした。

「レイン……貴方が大切な人を守りたいなら　　」
ざざぁん……

カナが最後に呟いた言葉は、東京湾の荒波に打ち消され、ついに誰にも聞かれる事は無かった。

「……師匠！」
ガバツ！

レインはベッドから飛び起きる。

「（……そうだ、キンジとアリアは！？）」
時間を確認すると、最悪な事に7時半近い。

カナの性格から、もうアリアを殺している、なんて事は充分に有り

得る事だった。

キンジは、幸いな事に自分のベッドの下に寝ていた。寝息がするため、とりあえずは大丈夫なようだ。目立った外傷もない。

「……ッ！、アリア！」

だが、寝ている友人に対して失礼なようだが、今はアリアの保護が最優先だ。

キンジが起きるかも、とかそういう事は一切考えず叫ぶ。すると、

「な、何よレイン！ いきなり呼ばれたらびっくりするじゃない」
ドアから、長いピンクのツインテールと、アニメ声。

アリアだ。

「無事だったんだな！ 良かった……怪我とかしてないか？」

レインが随分慌てて駆け寄ってくるのを、アリアは「はあ？」といった風に首を傾げながら見てきた。

「どうしたのよ？ 私がどうかした？」

アリアの口振りから どうやら、カナとの接触はまだだったようだ、とレインは安心からのため息をついた。

途端に、力が抜けてその場にへたりこみ……

「……うっ！」

背中を押さえた。

その痛みが、昨日の空き地島での事が夢では無かった事が把握できた。

ならカナは、『あの時期』に入ったのか、それとも

「ちよつと！ 大丈夫なの？」

アリアが慌てた様子で話かけて来ているのを聞いて、ようやくレインは現実に引きもどされた。

とにもかくにも、目の前でキャンキャン喚くアリアはどうやら夢でも偽者でもなく、アリア本人のようだ。無事だった事が何よりも救いだった。

だが、油断は出来ない。

レインは気を引き締め直す。また、カナが襲ってこない訳がないのだから。

だからこそ、

「……ごめん、少し出てくる」

「あ、ちよっと！」

アリアの言葉を無視し、玄関に向かう。

だからこそ、今度は己の師匠にすら負けないために。
もっと、力をつけなくてはならない。

第60弾 対峙・反乱（後書き）

レインは案外知り合いが多かったりするかもです。世界を回ったりしてたので。

第61弾 イ・ウーの勧誘（前書き）

すみません、テスト期間にも関わらず、60話61話と投稿してしまいました……

我慢できなかったんです。

第61弾 イ・ウーの勧誘

第61弾 イ・ウーの勧誘

駄目だ。

今レインがいるのは、とある山奥、その少し開けた森の一端。

駄目だ。

その場所では、バリバリバリッ！

という雷鳴が轟き、森を震わせ、木をなぎ倒す。

駄目だっ！

ドガアアアアッ！

雷砲、雷弾、雷花、雷雨。

無茶苦茶に、でたらめに、がむしゃらに持てる技を放ち続ける。

空っぽになるまで。

「荒れてますね、レイン」

「……ああ、そのようだ」

そんな彼を遠目で眺めるのは、氷華と龍三。

夜雲家現当主である龍三と、今や次期当主候補筆頭にまで持ち上げられた氷華。

この二人が何故、この場にいるかといえば……

「しかし驚いた。レインハートの方からこちらに赴く日がくるとは」

「内容は単に暴れられる場所を貸してほしい、そういう事でしたがね」

そんな二人は、レインが次々と木をなぎ倒していく様子を見ながら、ため息をついた。

これは、力が足らず悩んでいる武偵、もしくはその見習いにはとてもいえるような内容ではない。

要するに 強すぎるのも大変だ、という事だ。

レインの場合、彼の超能力の象徴は雷なのだ。そんな強大で、なおかつ人に危害が加わりやすい力をそうそう使う訳にもいくまい。

それだけでなく、彼は雷の副産物として磁力を多用したりする事もある。

その磁力でさえ、公衆の集まる場では使えない。

現代社会の象徴と言っても過言ではない、ケータイという精密機械にそんな強力な磁力を浴びせられたら、間違いなくお陀仏だ。

「普段から溜め込んでいたものを吐き出して、たまにはストレスを発散しないといけないのも分かりますが……」

「……さすがにやりすぎだろう」

爆音と共に岩山が消し飛ぶ。

まるで映画の怪獣が通った後のような惨事に、龍三らはただ苦笑するしか無かった。

レインはその場に倒れ込み、握った水月の刀身をまじまじと眺めた。

その紫は、日光を反射して煌々と輝いている。

自分はまだ、この刀の力を引き出せていない。

確かにブラド戦では、自身の能力を利用した上で相手の腕を切り裂く程度の切れ味を引き出す事には成功した。

だが、この刀には、まだレインが想像も出来ないような力が込められているはずだ。

「……」

レインは無言で、自身の超能力で水月を高速振動させ、切れ味を引き出した。

木を斬り倒す。

岩山を切り刻む。

Sランク武偵ですら真似るのは容易ではないその剣技。

だが、晴夜が使っている『月影』に比べれば劣るのもまた事実。

「（くそ、くそ、くそっ！）」

自らの修練のために、切る。切る。切る。

だがそれは、自身と標的の力量の差を再確認する事となる。

「強く、なりたい……！」

それだけが、今のレインの心の内を占め、支配していた。

彼の力を求める欲求が、どれだけ危ういバランスの上で成り立っているかも分からない程に。

ただ無機物を切り刻むだけでは、型の鍛練にはなっても水月の力を引き出すには至らない。

かといって、動物虐待の趣味を持つてゐる訳でもない。

しかし、自分に合わせられる強さを持つ人間が周りにはいない。かつて稽古をつけてくれた師は、仲間、アリアを殺そうとしていた。

今のところは思い留まってくれているようだが、いつまで持つから分からない。

碌な鍛練方法も見つからない。

もうすぐ昼。武偵高に帰らなければならない時間帯だ。

だがしかし、自分がまるで成長していない気がして、その歩みは遅かった。

そんな中。

「ふむ。君はどうやら、力を欲しているようだね？」

！

気。

彼の後ろから放たれたそれが、レインを自らの間合い以上に後退させ、なおかつ雷神化させた。

殺気でもなく、敵意でもなく。

ただただ、純粹な『気』。

覇気、威圧感といつてもいいかもしれなかった。

だが、そういった大層な名称を使う事すら億劫だ、とまで思わせるその気は、レインの後ろ、ベージュでチェックの入った、所謂探偵のテンプレートのような格好をした、若い男。顔は目深に被った帽子で窺い知れないが、声に張りがある、この男が放ったものだ。

「あんたは……？」

「ふむ……名を名乗ってもいいが、こちらの方が『今の』君には伝わりやすそうだ。初めまして、『紫電の雷神』。私は、『プロフェッショナル教授』だ」

……教授……！

教授とは、イ・ウーのリーダー、その肩書き。

つまり、この男はあの理子やジャンヌ、フェンリルやブラド達を束ねている。

当然、組織での戦闘力はダントツで高い。

恐らく、No.2（ブラド）なんか相手にならない程に。

「その教授様が、俺に何かようかな？」

努めて平常心を保とうとするが、レインの手は自然、水月の柄に伸びていた。

「やれやれ……物騒だな。まずは、警戒を解いてくれないかな？」

「ッ！」

レインが声にならない声をあげた。

一瞬の内に教授が、目の前で視界を覆っていたからだ。

そのまま、教授はレインが水月を握っていた右手を取る。

「『紫電の雷神』、いや、成瀬 レインハート君。イ・ウーに

来ないか？」

「……何だと？」

何を言ってるのか、理解できない。

散々自分たちの仲間を逮捕したレインを、世界最強の武偵に数えられるレインを。

仲間に引き入れたい？

「君の兄、夜雲　晴夜は私が罰そう。どうだい？」

「ふざけ……！」

「君がイ・ウーと敵対するのは、お兄さんを逮捕したいからじゃないのかい？」

「ッ！」

確かにその通りだ。

正直、レインにとっては晴夜以外のメンバーなど、逮捕しようがしまいがどうでも良かった。今までは成り行きで戦っていたに過ぎない。だが。

「……お前たちはアリアの母、神崎かなえさんに冤罪を着せている。それに、犯罪組織なんて逮捕する理由があっても馴れ合う理由なんてない」

辛辣な、しかし正論を返す。

先ほどの言葉の応酬から、相手は正論や建前の好きな手合いだと判断した結果だ。

しかしその予想は当たっていたようで、すぐさま反論が返ってくる。「神崎かなえの刑期はなんとかできる。私ならね。それに、君にだってメリットはある。知つての通り、イ・ウーは互いを研磨しあい、互いに技術を高めあう場所だ。　今より、必ず強くなれる」

「……！」

先日までのレインなら、軽く流したであろう、その言葉に。

しかし現在のレインは、耳ざとく反応した。

力。今、レインが最も求めるもの。

「君には特別に、直々に私が稽古をつけてもいい。何せ、君には才能がある。お兄さんより、ずっとね」

教授の言葉は、甘い蜜の味の毒となり、ゆるりとレインの思考に溶け込む。

特別。

彼直々の鍛練がどれほどそうなのかは知らない。

だが、自らそういう程度には優遇された扱いなのだろう。

才能。

才能がある、と言われた。

それも、幼少期に比べられる事の多く、一度だって敵う事もできなかった兄と比べて。

俺は、俺は……………

「どうかかな？ 悪い話ではないと思うんだがね」

彼、教授はそう言うと、レインの手を握る右手に力を込める。

「……………」

レインは黙りこくってしまふ。

今までの彼なら、一蹴していただであろうその言葉に、しかし彼は返答できずにいた。

「……………返事は今すぐで無くともいい。もうすぐ、再び君たちに会える、そう推理したから、その時にでも返事をくれればいい」

教授の一方的な言葉に、レインは結局返答できず、彼が去るのを、ただ立ち尽くして見ている事しかできなかつた。

第62弾 戸惑い迷い（前書き）

6月は忙しいですね

テストの次は修学旅行です……

その間にも更新できるよう、ストックを作れるように頑張りたいと思います。

第62弾 戸惑い迷い

第62弾 戸惑い迷い

教授との邂逅の後、レインはまだ四時限目が始まらない頃に、自室のベッドに頭から飛び込んでいた。

とてもじゃないが、授業などまともに受けれる精神状態じゃない。せめて、SSRの授業になるまで待とう、そう考えたレインは起き上がり、シャワーを浴びる事にした。

装備をはずし、防弾制服を脱いで、レインはシャワールームに入った。

やがてシャワーを終えて洗面所に出ると、自身の能力が割と便利な事を、改めて思い知る。

ドライヤーだって自家発電だ。

「俺は……」

ごうごう、そんなドライヤーの音を耳に入れながら、レインは教授の言葉を思い出す。

イ・ウーに來ないか

「……ッ！」

頭を振る。

何を馬鹿な事を考えているんだ、と。自分を戒める。

それでも、力を求める自分は確かにいて。

どうしようもなくて。

「（……一旦落ち着こう。コーヒーでも飲んで）」

レインは部屋着に身を包み、キッチンへ向かった。

「……ん」

レインはケータイが音を発してる事に気がついた。

メールを着信したらしい。
面倒そうに、ケータイを開くが……文面を見た瞬間、レインの表情が蒼くなる。

メールの差出人は理子、内容は

アリアがカナと戦っている。

「アリアっ！」

レインは最大出力の雷歩で、探偵科の寮を飛び出す。

向かう先は、強襲科の校舎、コロッセオ闘技場。

ここでは、アリアとカナの『試合』、つまりは模擬戦が行われていた。

「はあああっ！」

アリアは、そのピンクのツインテールを揺らしながらカナに肉薄する。

片手には日本刀、片手には黒のガバメント。

アリアにしては珍しい、ガンエッジと呼ばれる戦い方だ。

アリアのガバメントから、鉛弾が吐き出される。

それは、しかし ジュイン！

「あっ！」

カナの手元が光を放った瞬間弾かれ、カナの弾丸はアリアに命中する。

「……おいで、神崎・H・アリア。もうちょっと貴女を見せてもらん」

カナがそう言って、再び不可視の銃弾をアリアに放つ。

「うっ！」

その銃弾をかわす術はない。故に、アリアにこの銃弾が当たるのは必然。

よける事も弾く事も防ぐ事もできず、腹に銃弾を食らったアリアは片膝を地面に着けた。

防弾制服は銃弾の貫通性を削ぐ事ができるが、衝撃が消えない訳ではないのだ。当たりどころが悪ければ死ぬ事だつてある。

だが、アリアはそれでも起き上がった。

止めを刺そう、そうカナが歩き始めたその時。

「やめろ、カナ！」

カナを制止する声、その声を発したのは、

「……キンジ」

そう、ここまで走ってきたであろう、息を切らしたキンジだ。

その瞳は、戸惑いや怒り、様々な感情が入り乱れ、けれどもカナを見据えていた。

「くおらやめろ、遠山！ 授業妨害すんなや！」

そう言つて、ズガッ！

強襲科教師の蘭豹は、ドでかい銃 『象殺し』をあだ名される大型拳銃、M500だ で、キンジの足元に穴を開ける。

その光景を静視していたカナに、アリアは顎めがけて蹴りかかる。

が、そんな苦し紛れの攻撃がカナに通用するはずもなく、カナが首を傾げるだけで、アリアの攻撃は掠りもしない。

「まだ、まだあつ！」

一旦距離を置いたアリアは 日本刀を、投げつけた。

「！」

まさか日本刀を投げるとは思わなかったのだろうカナは、驚きの表情を浮かべ、それを見たアリアは、勝利を確信したように微笑んだ。

「 甘い」

だが、その日本刀は、ガキイッ！

と空中で火花を散らして、地に落ちた。

サソリの尾、だ。

これもカナの見えない何か。

「はあ、はあ……あんたの銃撃、『ピースメーカー』ね……？ な

んでまた、そんな骨董品を……」

アリアはまだ闘争心を失ってはいなかった。

今度はガバメント二丁を構え、カナに向かう。

「……よく分かったわね。そう、私の銃は『ピースメーカー』。……もつとよく見せてあげる」

カナは、今度はマズルフラッシュを二閃　不可視の銃弾、それが二発アリアに迫る。

ギイン！

「……早かったわね」

「……師匠」

銃弾を切り裂いたのは、紫電を纏った、

「レイン……!?!」

レインだった。

キンジが驚愕する。

レインが不可視の銃弾を切り裂いた事に、そして、カナ　いや、遠山　キンイチ、即ち彼の兄を師匠せんせいと呼んでいる事に。

カナ、彼女　いや、彼の本名は遠山　キンイチ。

理子、『武偵殺し』のシージャックにあい死亡したとされていた、遠山家最強と謳われた男。

彼はヒステリアモード、HSSを常に発動ヒステリアサヴァンシンドロームさせる術を持っていた。

それ即ち、自ら絶世の美女に化ける事。

そういう訳で、キンイチであるカナはキンジの兄（姉、と言っても否定は出来ない）である。

そのカナの弟子が、レインであるというのだ。驚きは大きいだろう。「……アリアをどうする気ですか」

キンジのそんな心情を知る由もないレインは、カナに憂いを帯びた表情で問いかける。

「……さあ、分からないわ。少なくとも、今は、まだ」

「なら、何故こんな事を！」

「私は、『第二の可能性』があるかどうか、確かめたかっただけ」

「『第二の可能性』……?」

レインが首を傾げ、カナに詰め寄ろうとした瞬間。
ピイイイイ!

「!?!」

ホイッスルのけたたましい音が鳴り響く。

「こらあ、何をやってるんですか!」

闘技場の外から、やけに背の小さい婦警が駆けてくる。その手に、じゃらじゃらと手錠がいくつも持っている。

「全員逮捕します!」

婦警が近づくと共に、蜘蛛の子を散らすように野次馬と化していた強襲科の生徒達が逃げていく。

何が悪いのか、といえば、この模擬戦だ。

いくら授業の一環とはいえ、実弾、真剣を使っているのだ。

その条件下での模擬戦では、C装備の着用が義務付けられている。

これは武偵高に限った話ではなく、日本の武偵庁もそう公言しているため、れっきとした武偵法違反なのだ。

当事者であるアリア、カナはもちろん、看過した蘭豹、観客まで。

止めに入ったキンジとレインはノーカン……のはずだ。

それをこの婦警が把握しているのなら、だが。

「……ふあ」

当事者であるカナは、欠伸をしてしまう。

言うならば、それほど今の生徒達の様子は滑稽なのだ。

この事に気づいていないのは、現在ではアリアとキンジだけだ。

「……師匠。興が冷めましたか」

「私もそろそろ『時期』に入るから……とりあえず帰るわ。じゃあ、また近い内に」

そう言い、カナは姿を消した。

「……で、まあたコスプレか? 峰」

蘭豹の呟いたようなセリフに、キンジとアリアは首を傾げる。

そんな二人を見てレインはため息をつき、婦警に歩み寄った。

「くふふ、さつすが蘭豹先生。香港一の武偵は伊達じゃないね」

そう言った婦警、いや、理子は顔の特殊メイクをベリッ、と剥がす。

「……理子。警察の制服はコスプレなの？」

「サー！ イエサー！」

両手でビビシッ！

と敬礼した理子に苦笑いしながら、レインは「こういう訳」と仕草でキンジ達に伝え、蘭豹に軽く会釈する。

「遠山。いくら強襲科を離れてたからって、昼行灯にも限度があるで。あのアマ、峰の猿芝居でシラケる前から、殺気なんぞ無かったやろが」

蘭豹は勘の鋭さで有名な武偵だ。時に探偵科の推理すら上回る時がある程に。

「あの女の技術はいい教育になる、そう思ったからやらせたんや。

もし本物の殺気があつたら とつくに、ウチが殺つとるわ」

そつとい口角をあげる蘭豹に、レインは心の中で「あんたじゃ無理だ」、そつはつきり告げた。

自分の師匠の實力は、まだまだあんなものではない。

それを蘭豹が知っているかは定かでは無かつたが、それでもレインは、カナの實力を考慮した上で、そつ判断した。

カナには、まだ見せてない技、そして とつておきがある。

それを見て、蘭豹が同じ事を言えるだろうか？

レインは、いつのまにかカナの擁護に回っている事に気がつき、頭を振った。

とにかく、アリアを救護科に運び、自室でゆつくりキンジと話でもしよう キンジの視線が、そつするように訴えてくる事も含めて、そつ思った。

第63弾 兄、弟、弟子

第63弾 兄、弟、弟子

あの後、キンジにアリアの手当てを任せ（救護科、衛生科の面々は実習で不在で、二人で甲斐甲斐しく手当てするのめどうかと思いついたのだ）、レインは彼が出てくるのを待った。

がいっつ！ ごんっ！

という音がしたあと、キンジが頭にたんこぶを作って出てきた。

そんな軽傷のキンジとレインは探偵科の寮にある自室に帰宅していた。

階段を二段飛ばしでのぼりながら、キンジはレインに訝しげな視線を送る。

「レイン。一緒にこの仕事やらないか？」

「うん？ カジノ警備、定員五人……いいけど、他にあては？」

「とりあえずはレキに白雪、それに……」

「アリア、だよな？ 師匠の事もあるし」

キンジのセリフを遮り、師匠と口にしたレインに思い出したように、今度はキンジが質問する。

「いつからカナと知り合いなんだよ？」

「中学に入った頃からだから…… 4年前くらいかな？」

「カナの秘密も知ってるのか？」

「まさかあんな美人が男性だなんて思わなかったよ」

キンジの問いに淡々と答えていくレインは、自室の鍵を開き、扉を開けた。

「まあ、ゆっくり話そう。夜は長い……だ？」

そう言い、一足先にリビングに行ったレインは……顔を、しかめた。

「どうした？」

キンジが若干慌ててレインの視線の先に目をやる。するとそこには、
「か、カナ!？」

そう、先刻アリアと模擬戦を行い、完膚無きまでに叩き潰した、キンジの兄（姉?）にしてレインの師、遠山 キンイチことカナが、そこに寝転がっていたのだ。

「ん……キンジ、レイン？」

カナが目を閉じたまま聞いてくる。

カナは一度眠りにつくと暫く起きれないはずだが、キンジがあとずさつて頭をぶつけた音で目が覚めたらしい。

ちなみに何故起きれなくなるかと言えば、身体に過大な負担をかけるヒステリアモードになり続けていたためだ。

キンイチは、カナになつてる間中、常にヒステリアモードの状態で見られる。

ただでさえ（キンジのように数十分の使用でも眠くなるくらいには）疲労が溜まるヒステリアモードを常に発動している反動、リスクとして、『睡眠期』という状態に入る。

初めに数十分ずつ寝たり起きたりしながら、半日のうちに10日前後の睡眠期に入る（レインは睡眠期云々は知っているがヒステリアモードの事は知らされていない）。

しかし、まさか自分たちの部屋にくるとは考え無かつたであろうキンジは、呆然としている。

「起こしてしまいすみません、師匠。まさか師匠が部屋にいるとは考えず、足音を消していなかった俺の失態です」

深々と頭を下げるレインに、カナは眠そうに眼を擦りながら答える。
「いいわ。そんなに気にしないで、レイン。それよりキンジ、あなた救護科で怪我を直してないみたいね。おいで」

「……いいよ、別に」

キンジがぶつきらばうに断るが、隣のレインはカナ、自分の師匠がこんな事で主張を曲げたりしない事をよく知っていた。

だからこそ、一歩下がってにやけながら事の顛末を見守るつもりだ

ったのだが……

「レイン、あなたもよ。似非鬼道術で治りかけてるのは分かるけど、あなた一回復 そっち 系はさっぱりでしょ？」

少しは成長してるみたいだけど、と言及しながらの言葉に、レインはうぐ、と顔をしかめる。

彼は星伽でいう鬼道術、すなわち超能力を回復や力に変換する能力、その回復が苦手なのだ。

「い、いいですよ（いいって）」

キンジとレインがハモリながら答えようとするが、

「……こんなの掠り傷だ」「」

見事に、カナに被せられる。

ばつが悪そうに顔を背ける二人に、クスッ、と微笑したカナは、手招きをしてくる。

レインは恥ずかしそうに頭をかきながら、キンジはぶっきらぼうに目を逸らしながら、それぞれカナの左、右に揃って座る。

「ふふっ、本当に兄弟みたい」

カナは笑いながら、キンジたちを手当てする。

薬や湿布だけでなく、鍼なんかも使いながら。

レインはそんなカナを見て、中学時代を思い出す。

カナは強襲科で任務にあたる際、怪我をした仲間に衛生科の代わりによく手当てをしていた。

それはもうそこらの救護科よりも巧みで、衛生科よりも上手に。

カナは本当は、治す方が得意なのだ。

……だからこそ、カナがアリアを傷つけるような事をしたのが信じられなかったのだが。

「……キンジ、単位は足りてる？」

急に世間話を始めたカナの言葉で現実に引き戻される。

レインは、黙って兄弟の会話を聞いている事にした。

「足りてる訳じゃないけど、カジノ警備の任務を取った。カナは何も心配しなくていい」

キンジの態度が、どこか軟化している気がする。無理もない事だが、まだ油断は禁物のはずなのだが……そこはやはり、敬愛する兄の言葉だ。仕方ない事だろう。

「じゃあ、ヒス」

「ちょ、ちよつと待て！ ここにはレインが！」

カナのセリフに、キンジが慌ててカナの口を押さえようとする。だが、それはヒラリとかわされキンジはベッドに頭からダイブする羽目となった。

レインが首を傾げていると、カナは不敵な笑みを浮かべながら彼を見てくる。

「私も話してなかったけど……大丈夫よ、キンジ。そろそろ話しても。この子は他人にそう軽々しく話す子じゃないわ」

「……分かったよ」

ニコツ、と笑ったカナから顔を背けながら、キンジは諦めたようにため息をついた。

その後、カナからひとしきりヒステリアサヴァンシンドローム（略称HSS）……レインとしてはヒステリアモードの方が言いやすいその説明を受けた。

「へえ……俺はてつきり二重人格か何かかと」

「まあ、凄い変わりようだしな」

キンジのフォローを受けつつ、レインはカナをまじまじと見詰めた。何故女装するのか、興味深かったらしいが……そんな秘密があるとは思わなかったのだろう、納得したようにうんうん、と頷いている。

「とにかく……キンジ、HSSは上手く使えてる？」

カナは何事もなかったように話を戻した。

キンジが黙秘したところをみれば、あまり上手くは行ってないらし

い。

レインからみればハイジャック、ジャンヌ戦、ブラド戦と割と使いこなせている気もするが……それでは不十分なのだろうか。

「あなたは女の子に奥手だからね……才能だけなら私より、初代遠山よりもHSSに長けているはずなんだけどね。いうなら、『やる気の無い実力者』ってところかな？」

レインがキンジが照れたようなもどかしいような、複雑な表情を浮かべているのを横目に見ていると、

「レイン。あなたは……きちんと、心を静かに保てるようにしては駄目よ」

カナは、レインにも話をしてきた。

レインとしては、兄弟水入らずになるように空気になっていた（出ていくとカナに怒られる）つもりだったのだが、どうやら不必要だったらしい。

「あなたの力は、世界最強の超能力者に数えられる程なのよ。ただ、あなたは若すぎる。そんな強大な力を持ちながら、本来そのレベルに立つ者がもつ『心の強さ』が無い。言うならば、『世界で一番強い子供』ってところかしら」

「子供、って……」

苦笑いしながら、レインはカナのセリフを反芻する。

しかし、カナのセリフが的を得ていたのもまた事実。

思い出すのは、またも教授の言葉。

イ・ウーに來ないか

「……はい。精神力は超能力を使う上でも重要ですしね」

「そういう事じゃないんだけどね」

カナは苦笑しながらレイン、キンジの頭を撫でる。

それは本当に兄弟のようで……でも、自分は彼らと血は繋がってなくて。

ほんの少し、キンジに嫉妬している自分がある事に、劣悪な感情を抱くより微笑ましく感じるあたり、言うほどレインは心が未熟な訳

ではないはずだ。レイン自身は、その事に気づいていないようだが。ピリッ……

だが、そんな和やかな雰囲気は、カナの放った張り詰めた空気によって壊される。

「……気を付けなさい、キンジ、レイン。あなたたちには……敵が、迫ってる」

カナのセリフに、キンジが問おうとするのを、レインが手で遮る。

「……外、ですね。師匠、自分が行きます」

そのままレインは、ベランダに足をかける。

「気を付けなさい、レイン。一発、いえ、破片でも食らったら駄目よ」

「心得ました」

そのままレインは、空を蹴りながら緋色の夕暮れに消えていく。

「……？」

キンジがレインの背中を見詰めている間に、ガチャ。

扉を開ける音と共に

「ただいま」

アニメ声、が。

玄関から、聞こえてきた。

第63弾 兄、弟、弟子（後書き）

なんか……ブランクを感じます。
書きづらい事この上ないです。

第64弾 徒姉妹の姉妹愛

第64弾 徒姉妹の姉妹愛

武偵高から少し離れた、東京湾の上空。

そこで武偵高を背に、日が落ちかけているのを見据えるのは、雷歩で宙に浮くレイン。

対して、彼に向かうのは

「多すぎだよね……どう考えても」

黒い、雲。

いや、違う。

その正体は、目視で数えるのが難しい程の、

「スカラベかな？」

コガネムシのような昆虫、スカラベの大群だ。

ぶつぶつぶ……

スカラベの羽音が、耳をつんざく。

「鬱陶しい……」

レインは、ブロウをスカラベの大群に向ける。

そして、その銃口から紫の雷が放たれた。

ズガンツ！

雷砲が通った後に、そこだけ斜陽で赤く染まった円ができる。

しかし、すぐにスカラベの大群によってその穴は塞がれた。

「（きりがいな……）」

レインは雷神化、ダガーを粉々に砕き、辺りに散りばめる。

「雷線式…… 『綾取・雷球』」

そのダガーからそれぞれ紫電が発せられ、それが球状に繋がっていく。

スカラベの大群を取り囲んだ球体に向けて、パチン。

指を鳴らすと、轟音を立てて炸裂した雷球は、スカラベの大群を一息で塵にする。

「こんなところかな……」

恐らく別個で潜入している虫もいるだろうが、それまで処理をしろ、というのはいさか酷な話だ。

「それにしても……」

レインは、スカラベを粉々にした空間をみる。

そこには、黒い砂がざらざら、と東京湾に落ちていくのが見えた。

「環境破壊、になるのかな……」

心底面倒そうな顔をしながら、レインは帰路についた。

「……キンジ。それは謝った方がいいよ」

「分かってる。でも、『話しかけるな』オーラがすげえんだよ……」
あれから何日か経つが、未だアリアは部屋にこない。

原因は、レインが飛び出した直後に、アリアが部屋に来たのだが……

…カナがいたその場にアリアを入れるのはまずい、そう考えたキンジはアリアに出ていくよう促したのだが、それをアリアが勘違い。

カナとキンジがグルでアリアを遠ざけようとしたんだろう、とキンジに飛びかかるも、キンジが強襲料で習っていた『興奮した犯罪者を押さえつける方法』、すなわち足元への発砲を反射的に行ってしまった事で、アリアは泣きながら帰った、と……

「とにかく、俺の方からもフォロワー入れてみるから、キンジは7日に備えておきなよ」

7日、とは7月7日。七夕だ。

その日は、キンジは緋川神社という場所でアリアとデート（恐らく二人の性格から、『警備だ』という言い訳が漏れるだろう）する事になっている。まあ、ほとんど武藤と不知火が原因で。

「ああ……済まないな、レイン」

「気にしないでくれ、好きでやってるだけだから」

そう言ったレインは、とりあえずアリアの居そうな場所を探す事にする。

アリアの部屋は、いない。

キンジが謝りに行ったらしいが、留守（居留守の心配は無かったそ
うだ）だった。

となると、前にも泊まっていたレキの部屋か、あるいは……

レインはケータイを取り出す。

「あの子のどこかな？」

電話帳から、『間宮 あかり』を選択。4コール目であかりは電話に出た。

「……あ、もしもし。成瀬だけど、あかりちゃん？」

『は、はい……あの、ほ、本日はどのようなご用件で……』

ガチガチになっているあかりの様子から、電話の向こうにはピンクのツインテールで怒髪天を衝くを地でやってるアリアがいるのだから。

そう確信したレインは、

「アリアに代わってくれるかなあ？」

とかまをかける。さすがにこれで引掛かる訳はないと思うが、拳動不審になればよりアリアのいる可能性が

『え、あの、今は駄目 っアリア先輩！ どうしてケータイ取ろうと……キャアッ！』

ドタンバタン。

「……ゲロつちやったよ」

アリアはあかりの部屋にいるらしい。

レインはゆっくり、強襲科女子寮に向かって歩き出した。

「あれ？ 成瀬先輩。ちわーす」

「ライカちゃん。今日は早いね」

「いえ、今日は少し用事があるもんで……」

この少女は火野 ライカ。あかりのグループの女子で、男勝りな性格であり一年強襲科の有望株だ。

金髪のポニテで、顔も整っているため男子からの需要が割とあったりする。

「成瀬先輩はどうしたんですか？」

「いや、チームのリーダーが逃げちゃってね。あかりの部屋にいらしいんだけど……」

「あ、ならアタシもあかりの部屋行くんで、一緒に行きませんか？」

「ああ、部屋分からなかったから丁度いい。頼むよ」

という訳で、レインは臆面もなく女子寮に入る。

まあ、あまり男子が女子寮に入るのは良いことではないが……それも言ってられない。

知ってる顔と何回かすれ違いながらも、レインはあかりの部屋にいた。

「おい、入るぞー」

「ライカちゃん、インターホンというものを知ってるかい？」

ライカは勝手に扉を開けて、中に入る。

いや別にいいが、この子は『親しき仲にも礼儀あり』という諺を知っているのだろうか？

とジト目で彼女を見ていると……

「うおっ!？」

ライカは突然、床を転がるようにして何かをかわした。

ちなみに、位置関係は廊下、玄関にライカ、開いてるドアを挟んで

レイン。

つまり。

「手裏剣!？」

ライカがかわした手裏剣は、そのままレインに飛んでくる訳で。

カカカッ!

「あ、危なっ!」

レインはなんとか、白刃取りの要領で全てキャッチした。

「こんな仕掛を用意するのは……っ、そこか！」
ヒュン！

受け止めた手裏剣を天井に投げ返す。

すると、『きゃうっ！』という声と共にアリアとあかりが落下してきた。

「いたたた……あ、ライカ」

「バカレイン！ 何すんのよ！」

「こっちのセリフだよ……実に巧妙なトラップ仕掛けといてね」

アリアはむむう、と押し黙り、それでもそっぽを向く。

「何しに来たのよ！ キンジはカナと一緒にいたし！ あんただってカナの弟子なんですよ！ 何よ、みんなカナカナカナ……あんな女のどこがいいのよ！」

「落ち着けアリア、後輩の前だ」

「アリア先輩、大丈夫です。私はアリア先輩の戦妹ですから」

「あかり……」

「あれ？ 無視かい？」

華麗にスルーを決め込まれたレインはライカの方をチラ見するが、彼女もまたやれやれ、という感じなのでまあ仕方ないだろう。

「で、アリア。少し話を聞いてくれるかな？」

「……まあ、バカキンジよりはバカレインの話の方が聞いてあげなくもなくなないけど？」

アリアのセリフに苦笑しつつ、あかりとライカは別室で話をさせて、アリアとレインもカナについての話をする。

もちろん、重要な部分はぼかして。

「とりあえず説明しとくよ。カナは別にキンジと恋愛感情があるわけじゃない。あと、確かにカナは俺の師匠だけど、だからどうこうじゃない」

「根拠は？」

「キンジにとって、カナは恋愛対象というより姉や兄のような存在なんだ。愛情より尊敬が近い。俺も、ね」

男だし、とは死んでも言えない。

言ったが最後、カナにどうされるか分かったものではないのだ。

「ふーん……」

アリアはそれでも顔をしかめる。

どこか納得してないような、そんな表情だ。

「……ブラドの屋敷に潜入した時、理子が変装したカナを見てデレデレしてた」

「……あーあー」

理子め、余計な事しちゃって……と頭の中でぼやきながらも、

「キンジはカナは死んでた、って聞かされてたんだ。驚いたんだよ。事実を一部ぼかしながら告げるが……アリアはまだ納得してないどころか、更に不審に思ったように眉を寄せた。

「……詳しい事情は聞かないでやってくれるか？」

「……分かったわ。一応、キンジと7日にお祭りにいくから……その時にでも話すわ」

「じゃあ、この事はオフレコで頼む」

「オフレコって……」

アリアに突っ込まれるのをスルーしながら、レインは窓から外に出る。

最近これがパターン化してきてる事に軽く戦慄を覚えつつ、雷歩ばかりも芸が無いな、とベルトに仕込んだワイヤーで降りた。

「……そういえば、7日七夕だったな……誰か誘うかな」

同時刻、別の場所。

静奈「ハッ！ 何だか、レインを七夕に誘わなければいけない気がする！」

悠「ぼ、僕もです！」

更に別の場所。

綾瀬「虫の知らせてやつかしら……」

ミチル「負けませんよ、綾先輩」

更に更に別の場所。

レキ「……………七夕、ですか……………」

更に更に更に別の場所。

ジャンヌ「理子……………日本は七夕を祝うらしいが、どこか洒落た場所はないか？」

理子「うーん、緋川神社とかかな……………レイン誘おっかな？」

各々、レインの電波（超能力は関係ない）を受信していた……………

第64弾 徒姉妹の姉妹愛（後書き）

AAか原作の新しいの、早く出て欲しいです……

第65弾 七夕祭り

第65弾 七夕祭り

「（どうしてこうなった……）」
レインはため息を、つかなくった。
理由は簡単だ。

バレルから。

「レイン、どうした？」

「体調が悪いのですか」

「情けないぞ。それでも雷神か」

「でも、レイレイ顔色悪いよ」

「先輩、大丈夫ですか!？」

「ほら、これでも食べなさい」

「レイン、まさかあ、女の子に囲まれてちょっと酔っちゃった？」
七人の話を同時に聞くなんて、聖徳太子、もしくはカナヤヒスつて
るキンジじゃないのだから無理だ。

「（というか、理子に悠が女だと話してないはずだけど……）」

まあ、理子の事だから事実を知ってるか、もしくは中性的な容姿の
悠は、『男の娘』のようなノリで女扱いされているのだろう（実際に
女なのだが）。

……とまあ、それは置いておこう。

今、レインの隣、いや、周囲を取り囲んでいるのは先ほどのセリフ
順に言えば、静奈、レキ、ジャンヌ、ミチル、悠、綾瀬、理子だ。
大所帯の上、男が一人（悠は女扱い）しかない。

男連中とすれ違う度、『リア充氏ね』『爆死しろ』という視線、殺
気を送られてくるため、いい加減辟易しているのだ。
それだけではない。

「あら……レイン、私綿あめ食べたいかも」

「いいですね！ レイン先輩、僕も行きたいです！」
綾瀬と悠の珍しいコンビに左に引っ張られ。

「えー、金魚すくいって言ったじゃーん。ねえ理子りん？」

「そうだよー。金魚みんなで百匹掬おうってさ」

やけに気が合うミチルと理子に正面に引っ張られ。

「ちょっと待て。私はシャテキとやらがやりたいぞ」

「私もだ。武偵なら射的だろう」

恐山のいざござはどこへやら、何気に仲良くなったジャンヌと静奈に右に引っ張られ。

「……………」

レキに黙って後ろに裾を引っ張られる。

「……あのねえ。俺の身体は一つしかないの。順番にしか回れないの。OK？」

最初に「じゃあみんな好きなどこ回ってきなよ」と言って殺されかけた。

具体的には足をジャンヌの氷で、両手をミチルと綾瀬に拘束され、理子のワルサーとレキのドラグノフが火を噴き、悠のナイフと静奈の水で形成した槍が身体を貫く直前、というところだ。

それに若干トラウマを覚え、レインは自分の身を危ぶめる言動を自重するよう努めているのだ。何がスイッチなのかは未だあまり理解していないようだ。

地獄だ。

レインはそう思った。

今年の七夕はやけに危険だ、そう感じて。

それというのも、屋台に行く度にひどい目にあったりしてるからだ。金魚すくいでは金魚百匹ほんとに掬わされて、親父に睨まれた。

綿あめ屋の親父にシめられるところだった（もちろん返り討ちにし

だが、周りの屋台の親父ら全員がかりでかかってきたため手間がかかった)。

射的では全員が全員、一屋台を潰しまくったため周りから睨まれた(レインだけ)。

災難に災難が重なった上に更に災難が災難に災難して……つまりは、災難だったのだ。

「(厄日だ……)」

そう思いながらも、口には出さない。

先刻のようになるのは目に見えているから。

言いたい事も碌に言えない状況を早く打開したい。

だからこそ、

「みんな。短冊に願い事を書きに行こう」と提案する。

短冊に願い事を書きに行くのは最後にする予定だった。

それはつまり、今日はもうお終い、という合図になる。

「……そうだな、そうしよう」

「夜も遅いですし」

皆の了解を得たところで、レインは微笑しながら人垣が少なくなってきた笹の葉のある場所に向かった。

「……よし、と」

「レイレイ！　なんて書いたの？」

「ばっ、見るなよ！」

ミチルが奪い取ろうとする短冊を、一番高いところに裏向きでくくりつける。

これで、警戒してれば他の人にも見られずに済むはずだ。

「……怪しいわね」

「レインさん、教えてくれないのですか」

「ああ、恥ずかしいからね」

むう、と女子の面々が膨れっ面になっている。

そんな彼女らに「なら自分の短冊を見せてよ」と言うと、何故か頬を赤らめて隠された。

レインは疑問符を頭に浮かべ、そそくさと短冊を笹にくくっていく少女らを眺める。

峰 理子。

朝露 静奈。

レキ。

有明 悠。

ジャンヌ・ダルク。

立花 ミチル。

霧矢 綾瀬。

その誰もが、笑いながら自分と一緒にいる事が、何より幸せなのだ。だからレインは

「レイン！ あっちで星見ようよ！」

「……ああ、そうだね」

ミチルに言われ、皆について来てたどり着いたのは……森の中で、そこだけ木を取り払ったような空間。

つまりは、上に満天の星空が見える。

「……天の川が見えます」

「うん……」

その流れに遮られて、所謂織姫と彦星は一年に一度しか会えないという。

だが、その川はそんな二人にとって忌まわしい存在であっても、自分たちにとっては心踊らせる、素晴らしい景色。

「（……俺は、皆と……）」

レインは、短冊に書いた内容を思い出しながら、誓う。

彼女らを傷つけるなら、

どんな相手でも倒そう。

彼女らが助けを求めるなら、どこまでも助けに向かおう。

彼女らが望むなら、どんな願いでも叶えよう。

だから この娘たちと、一緒にいたい。

レインは、色とりどりの花火に彩られた天の川を見上げながら、願う。

それを叶えるのは織姫でも彦星でもなく自分自身だが……気分の問題だ。

誰にだって、自分の確固たる意思を誓う時はある。

それが偶々、今日だっただけだ。

今宵も星は、煌々として輝いている。

織姫と彦星の再会を祝っているのか、はたまた

おまけ。

「そついえば、みんなはなんて書いたの？」

『ビクッ！』

「れ、レイン。なな、何故お前に教えなければならぬんだ」

「そつだよそつだよ、べべべ、別にレイ」

「とつっ！」

「ぐぶっ！？」

「み、みんな！？ 何故ミチルの鳩尾に肘鉄を食らわせるんだ！？」

「せ、先輩。女の子のプライバシーを覗こうだなんて最低ですよ」

「い、いや今はそつという話では……まあいいや。

なら悠、お前の教えてよ」

「ええっ！？」

「ほらほら、お前は男だから大丈夫だろ？」

「くっ……！！（転生生なのを良いことにつ！！）」

「レイン君。他の人の短冊の内容を知ろうだなんて、不粋だと思わないの？」

「そ、それは……って、貴女に言われたくありませんよ!」

「女性には適用されないわ」

「理不尽すぎる!?!」

「とにかく、お前らの短冊を」

「見せるかつ!」

「ちえっ」

ちなみに。

理子の短冊

『あの人のお嫁さんになれますよーに!』

レキの短冊

『私は、ずっとあの人に手を引かれて行きたい』

ジャンヌの短冊

『いつか、必ずあいつの隣を、共に走れるようになる』

ミチルの短冊

『あの人を振り向かせられますように!』

綾瀬の短冊

『彼の、唯一無二の存在になりたい』

悠の短冊

『あの人と一緒に、ずっと歩んで行きたい……です』

静奈の短冊

『あいつの心の中に、いつまでも在り続けたい』

レインの短冊

『この娘たちと、ずっと一緒にいたい』

第65弾 七夕祭り（後書き）

ちなみに、作者の去年の短冊。

『金持ちになれますように』

……泣けますね。

第66弾 変装Ⅱ コスプレ

第66弾 変装Ⅱ コスプレ

七夕のお祭りの後、レインたちは皆で武偵高に帰り、各々の部屋に戻った。

彼もその例に洩れず、キンジ、居候アリアと一緒に探偵科の部屋に戻ったのだが……

「ただいま……って、キンジ、その箱何？」

レインが部屋に入ると、ちょうどキンジが何かの箱を開けている最中だった。

「ああ、この間カジノ警備の仕事紹介しただろ。その変装用の服だ」

変装用、とは客の気分を害さないために、よく経営側が客・店員を装ってほしい、という話だろう。

歓楽施設ではよくある事だ。警察の彷徨してる店では落ち着かないのと一緒だ。

なるほど、箱から取り出したスーツはやけに仰々しい。

あからさまな変装は逆効果ともなり得るとは思うが……素人ばかりであろうそこらのカジノ（日本では割とでかいカジノだが、レインにとってはちんまりしたカジノ、と言っても過言ではない）に、そんな心配は無用だろう、と口を閉じる。

「ああ、俺は普通のスーツで行くからいいよ」

というのも、キンジが開けた箱に残っていたスーツには、蝶ネクタイが付けてあった。

アホか、そう思いながらレインは自分のクローゼットから少しばかり使い古したスーツを取り出す。

「レインは自分でもスーツ持ってるのか？」

「ああ。よくパーティーに誘われた事とか会ったから。主に仕事関係で いや、なんでもない」

「？」
キンジが首を傾げるのを余所に、レインは危ない危ない、と心の中でほっ、と胸を撫で下ろす。

本当はあの後、『カナと一緒に』という語句が入る予定だったのだが、それはさすがに今の状況下、アリアがカナに狙われている
憚られた。

その間にもキンジはぎこちない手つきでスーツを着ていくので、レインは慣れた手つきですぐに着替えた。

そして、てこずってるキンジを手伝ってやる。
すると、扉からガシヤアアアン！

という、恐らく誰か、アで始まってアで終わる女の子がずっとこけた
であろう音に、ため息をつく。

もちろん、また掃除をしなくてはならない、という億劫さからくる
ものだ。

啞然とするキンジを尻目に、レインは音がした場所と自分のいる場
所を隔てる扉を、容赦なく開け放った。

するとそこには、予想通りと言えば予想通りだが……何故か毛布に
くるまったアリア（しかも目しか見えてない重装備だ）が、廊下に
飾ってあったちよつとした工芸品を割っていた。

ちなみに全て大した額ではないので、その辺は心配いらぬ。

「……アリア。何をしてるのかな？」

「だ、だって！ あんたたちが変な事してるから」

「はいはい。いいから、早くそごい。毛布にも破片が付いてて
危ないから」

そう言つて、レインは破片を片そうとするが……アリアが顔を若干
しかめたのを見て、眉を寄せる。

「どうかしたの？」

「え、えーと……」

アリアにしては、珍しく歯切れが悪い。

「いいからもお、よっと！」

「~~~~~！」

レインが構わずアリアの毛布をひっぺがす。

「……………！？」

思わず、言葉を失った。

アリアの頭には　ウサギの耳が、生えていたのだ。

「アリア……………お前、それ……………」

口をあんぐりと開けて、もうただ驚愕しているレインの目の前では、アリアが、バニーガールの格好をしていたのだ。

騒ぎを聞き付けてきたキンジも、後ろで絶句している。

「み、見るんじゃない！　この変態！　エロキンジ！　チカンレイン！」

「誰がエロキンジだ！　やったのはレインだろ！」

「ご、誤解だ！　キンジ！　友達を売るなんて酷いよ！」

キンジが「お前が言うな」的な視線を送ってきているのはまあ、おいていて……………

「あつ、背中は見ちゃダメ！　見たら風穴あけるわよ！」

アリアに言われて、それとなく背中を見てみると（それを人は勇気とは呼ばない。無謀と呼ぶ）、古い……………弾痕があった。

だが、武偵に傷があるのは普通の事だ。
寧ろ、傷のない武偵の方が珍しい。

「アリア。武偵、特に諜報科や強襲科は潜入任務、つまり変装が多い。

今の内に慣れておいた方がいいよ」

優しく、諭すようにレインが言うと、アリアは「う~~~~」とうなり、こちらを涙目で見てくる。

するとキンジは、

「ア

ずむっ！

ア、その一言、否、一文字を発した瞬間、アリアの前蹴りに地に沈んだ。

あまりの早業に、レインはキンジが何を言おうとしたか理解する事はかなわなかった。

辛うじて、最初にアリアの名を呼びかけた事くらいだ。

「パットは、ファクション！ おしゃれ！ 無罪！」

「（ああ、パットしてるのか）」

見れば、確かにいつもより大きい気が……しないでもない。

元が小さいから、あまり変化に気づかなかったようだ。

そのままアリアは、キンジの顔を踏みつけにかかるが、キンジが、逃れようとしてるんだろが……仰向けになった。

キンジは間違いなくヒスる、そう確信したレインはキンジが後悔しないよう、一撃で沈めようと水月の柄に手をかけたところで……

バン！

ドアが、開かれた。

そこに佇んでいたのは……

巫女装束で、いつの時代からタイムスリップしてきたのか、風呂敷包みを背負った、白雪だ。

アリアが、キンジにまたがってるところに、白雪。

……部屋の、崩壊。

「アアアアアア……？」

うふ、うふふふふ……

と、瞳孔のかつ開いた目でこちら（レインも何故か巻き込まれている）に、生気を感じられない鋭い眼光を放つ白雪は……

「キンちゃん、ただいまあ」

そう一言、キンジに言う。

「ごめんね、キンちゃん。」

私、占いでキンちゃんに悪いのが出たから、こんな事もあるつかと……『あれ』、持ってきたんだあ」

「あ、あれはやめる白雪！ そもそもあれは銃刀法違反だぞ！」

あれ、とは何の事なのか？

そうレインが疑問に思ったのも、一瞬だった。

「……………なっ！ M60マシンガン！？」

レインが悲鳴に近い叫びをあげる。

あんなのをぶっ放されたら、大変な事になる。

主に、レインとキンジの部屋が。

「くたばれアリア！ これは天誅、天誅なのです！」

あはははははは！

と狂った笑い声を張り上げながら、白雪は本当にぶっ放してきた。

ばりばりばりばりばりばりばりばり！

M60が火を噴き、あたりのものが次々と蜂の巣になっていく。

「うわ、危な！」

言いながらレインは、磁力で銃弾を詰まらせる。

危ない危ない。

アリアは既に天井に退避しており、キンジは窓から決死の飛び降りを行っていた。

キンジの身体能力が若干上がっているのは、かかりの甘いヒステリアモード…………『一メザ 甘い・ヒステリアモード』というやつだろう。

とまあ、白雪の暴走が止まったので、レインはその重い腰を上げ、玄関を開く。

「どこいくのよ、レイン？」

「……………ちよつと口止めに、ね」

さっき、窓から望遠スコープの反射光が見えた。

一部始終を見られてたら、口止めしなくてはならない。

……………まあ、あの部屋の主がそんな俗っぽい真似をするとは限らないが、念には念だ。

レインは、夜中にあまり行きたくない場所……………第2女子寮、その最上階に向かった。

第66弾 変装Ⅱコスプレ（後書き）

おまけ。

ミチル「レイン。レインの名前の漢字を考えたよ!」

レイン「どういう事?」

ミ「このういう事〜発表!」

『成瀬 零音^{レイン}心臓^{ハート}』

レ「……勘弁してくれ」

第67弾 女子寮は女子の匂いがする

第67弾 女子寮は女の匂いがする

第2女子寮、最上階。

ナンバープレートも無し威圧感溢れるその部屋の前で、レインはインターホンを押しまくっていた。

ピポポポポーン。

それでも出ない。

この部屋の主の性格上、もう出てもいいはずだ。どうやら留守らしい。

あの後、買い物にでも行ったのだろうか。

そんな事を考えながら、彼女に電話しようとしてケータイに手をかけたレインは、背後からの気配に振り返る。

すると……銀の体毛がふかふかしてる、狼が飛びかかってきた。

先日のブラドの手下の狼の時のように、避けたりはしない。なぜなら……

「ハイマキ！」

その狼とは、知り合いだったからだ。

ハイマキはレインに飛び付いて、頬擦りしてくる。

「お前が外って事は」

「ハイマキ。落ち着きなさい」

レインの言葉を珍しく遮って言ったのは、ドラグノフ狙撃銃を背負い、手にはコンビニのビニールをぶら下げていて、普段からつけているヘッドホンをしているレキだった。

レキに抑揚も無く言われたハイマキは、仔犬のような弱々しい声をあげて残念そうにさがった。

可哀想なので、頭を撫でてやる。

すると今度は、気持ちよさそうな声を鳴らすのだった。

そんなハイマキの反応を楽しみながら、レキの方を向く。

「レキ。おかえり。」

ちよつと話があるんだけど……」

「……」

レキは無言で、部屋のカードキーを通す。

『入れ』と、そう言う事らしい。

レインは、言われてもいない言葉に甘える事にし、ハイマキと一緒に薄暗い部屋に入っていた。

そこは、相変わらずの殺風景。

いや、一カ所だけ変わった点があった。

それは……クローゼットが置いてあるところだ。

中には恐らく、武偵高の替えの制服や……この間、レインが買ってやった服が入っているのだろう。

いや、もしかしたらあれがきっかけでオシャレに目覚めて、服をいっぱい買い込んでいるのかもしれない。

そう考えると、嬉しくなる。

ただでさえ、『ロボット・レキ』なんて女子はあまり嬉しくなさそうなあだ名をつけられているのだ。

レキが女の子らしくなっていく事は、レインにとっては大変喜ばしい事だった。

だから、

「レキ、もつと女の子らしい部屋にした方がいいよ」

こんなお節介を焼いてしまふのだろう。

「何故ですか？」

「だって、レキは可愛いんだから。」

可愛い女の子はオシャレしなくちゃいけないって、法律で決まっているんだよ？」

「私の記憶にはありません。」

確か全て記憶したはずなんですけど」

そりゃあ、武偵は警察の代わりに犯罪者を逮捕したりするんだから、法律を覚えているのは当然だ。

だが、そんな冗談に冷淡に突っ込む（本人は突っ込みだと思ってなさそうだが）レキに、おいそれと引き下がる訳には行かなかった。法律は嘘だが、レキが可愛いのは本当だ。

カナの教えでは、可愛い女の子にはオシャレさせる、という格言があり、それはレインには法律並みに重要な事だと思わさせられただけだ。

「これから制定されるんだ。

……まあ、この話はいいや。とりあえず、ドラゲノフのスコープで俺たちの部屋を見てたよね」

「はい」

反省は無しかい、という突っ込みは省こう。

何よりレインの体力が持たない。

「その話は誰にもしちや駄目だよ？」

「はい」

さつきから「はい」しか応えないレキに軽く辟易しながらも、レインは用件を済ませ、帰宅しようとするが……

「レインさん」

レキに、呼び止められた。

「あなたもカジノ警備の仕事をされるようですが、気をつけて下さい」

「……分かった。

いつもの『風』かな？」

「ええ。

熱く、乾いた邪悪なモノです」

熱く、乾いた。

それを聞いたレインは、先日のスカラベの大群を思い出し、顔をしかめる。

スカラベの生息地は熱く乾いた場所、砂漠だ。

スカラベの残骸から、黒い砂、それも呪いがこもったものが落ちていたあたり、恐らくは砂を使う超能力者。それも、Gは20は下らないであろう、実力者のものだ。

そんな条件が当てはまる人間は、一人しかいない。

『砂礫の魔女』。

非常に厄介な相手だ。

何がまずいって……レインとの相性だ。

超能力には相関図のようなものがあり、その相性が悪ければ、最悪攻撃が全く効かない時がある。

実際、レインもスカラベのサイズで無ければ一撃で消し飛ばせた自信がない。

「……ああ。充分気を付ける

わざわざありがとう」

「いえ。

……ところで、話とは部屋での一件だけですか」

ああ、と言おうとした口をつぐんだ。

レキの、そのCGみたいに整いながら、一切の感情を読み取れない顔から……例えるなら、アリアがむくれたような、若干の怒気を感じる。……気がする。

だが、それは正直まずい。

アリアならガバメントが弾切れするまで撃たせてやれば問題は無い。だが、レキのように普段怒らない娘が怒るのは非常に弱る。

対策法も分からない上、いつ区切れがつくかも分からない。

故に……

「い、いや、晩御飯作らせてくれない？

ほら、カロリーメイトばかりだと身体壊すよ」

こうして、機嫌をとろうと頑張るのだ。

「カロリーメイトは栄養バランス食品であり、栄養はきちんとくれるので問題はないはずです」

うぐ、と正論っちゃあ正論のセリフに、レインは押し黙る。

だが、カロリーメイトばかりなのも芸が無い、というか飽きるだろう。

味のバリエーションだって少ない。

「いいから。」

たまにはカロリーメイトじゃなくてもいいじゃないか」

レインはレキをそのまま座らせ、せつせと料理を作り、台所へ向かった。

料理を作っていると、ハイマキが寄ってきた。

そういえば、ハイマキには何を与えているのだろうか？

ドッグフードは犬の食べ物だし……

レインは狼の事はよく知らなかったか、ソーセージとかで大丈夫だろう、と適当なフライパンにソーセージを投げ入れる。

その芳ばしい香りに、ハイマキは尻尾をふりふり、ふりふり……と振り始めた。

よっぼど嬉しいようだ。

とりあえずハイマキをおとなしくさせたところで、レインは料理を仕上げた。

もぐもぐ。

目の前の光景に……レインは、呆然としていた。

もぐもぐ。

こうしている間にも、一枚、また一枚と皿が空になっていく。

「れ、レキ。食べるの早いね」

「そつでしようか？」

そう言ってる間にも、ひよいばく。

結構ボリュームのある角煮を、一口で食ってしまつ。

一体全体、この娘の腹はどうなっているのだろうか？

「ご馳走さまでした」

「お、お粗末様でした……」

あつと言つ間、とはよく言ったものだ。

実際、レインが「あつ」と言つてる間には、レキは料理一つを完食している勢이었다。

「レインさん」

「何？」

レキが片付けようとするのを片手で制し、レインは一人黙々と食器を運ぶ。

「うん、ハイマキ。手伝ってくれるのはありがたいけど、涎で食器がぐちゃぐちゃだからいいよ」

こうして、レインは今晚の晩御飯をレキの部屋で頂いた。

……帰る直前。

「レインさん、帰る前にその電気を消して下さい」

レキに言われ、レインはスイッチに手をかけた……が、レインの頭に疑問符が浮かんだ。

「え？ その体制で寝るの？」

「？」

レキが、「え？ むしろこの体制以外で寝れるの？」みたいな顔で見ってくる。

「はいはい……じゃあ、おやすみ」

諦めたレインは、レキにそう言つと……レキは微笑し、

「おやすみなさい、レインさん」

そう返してくるのだった。

思わず笑みが零れたのは、ここだけの話。

第67弾 女子寮は女子の匂いがする（後書き）

ミチル「いやあ、出番が少ないねえ、私たち！」

綾瀬「ちなみに、しばらくは戦闘だから私たちに出番は無いわよ」

悠「そんな!？」

ミ「作者ぶっ飛ばしてくる!」

綾「あらあら……」

悠「僕の方が出番少ないのに……」

綾「仕方ないわよ、作者が原作ブレイクが苦手なチキンだもの」

悠「（絶対怒ってる）」

第68弾 カジノ警備

第68弾 カジノ警備

7月24日、昼。

燦々と輝く太陽の下……のカジノ。

そこでカジノ警備に勤しむのは単位の足りていないキンジと、その手伝いであるレインだった。

「はあ、何が楽しくてこんな事を……」

「何を今更。そもそも、お前の単位のためじゃないか。」

なあ、『青年IT社長』君？」

今、キンジはカジノ側から客の一人、『青年IT社長』としてGメンをして貰う、という話になっている。

「そういうお前は、何で『紫電の雷神』そのままなんだよ。」

確か来場者の気分を害さないよう変装するんだろ？」

「いや、俺は自慢じゃないが、こっち（カジノ）方面でもちよっとは名がある方だからね。」

警戒どころか、寧ろ歓迎されるさ」

「……お前はどれだけ顔が広いんだ」

ちなみに余談だが、レインは最近新しいケータイを買った。

というのも、最近友人が増えたため、プライベート用と仕事用の二種類に分けたのだ。

そのため、ケータイを両ポケットに入れるという面倒な事態になっていた。

今いる依頼主であるカジノ、『ピラミディオン台場』はその名の通り、ピラミッドの形をした建物だ。

噴水のあるエントランスを抜け、カジノ・ホールに向かう。

「両替を頼みたい。

今日は青いカナリヤが窓から入ってきたんだ。
きつとツイてる」

キンジはチェンジカウンターで合言葉を口にし、カジノから支給された偽札一千万をチップに換えて貰っていた。

「じゃあ俺も頼む。

今日は少し稼ぎたい気分なんだ」

ちなみに、レインのこの言葉は合言葉でもなんでもない。

予定と違う行動に、キンジが啞然としながらも……レインは、持っていたアタツシユケースを差し出した。

「1億分。頼む」

レインが開けたアタツシユケースには……諭吉のおっさんが、大量に並んでいた。

「やり過ぎだろ……」

キンジが頭に手を置くのも意に介さず、換えたチップやらコインやらを手持ちぶさに弄るレインは、とりあえずスロットマシンに何枚かのコインを入れる。

ガシャン！　くるくるくる……

回り始めたスロットを、レインが凝視する。

そんな彼の様子を見て、キンジはため息をつきながら真剣な友人に声をかける。

「おいレイン。

いくらお前の動体視力がいいからって、スロットをそれで当てるのは不可能だろ」

こういった機械は、鍛えられた武偵の対策のため、色々仕組んである謂わば完全に運のゲームだ。

だが……

ポチ。7。

ポチ。また7。

ポチ。またまた7。

フが真一文字に並ぶ……所謂、スリーセブンだ。
ジャラララララ!

という小気味のいい音と共に、レインの使っていたスロットがコインを雪崩のように吐き出す。

「まあ、可能なんだな、これが」

レインはウインクし……指の間に、紫電を走らせて見せた。

既にバケツから溢れる程のコインを獲得したレインは、それを一旦預けキンジの元に戻った。

と、キンジが海に繋がるプールを眺めている。

と、そこにちっこくてピンクいバニーガールが歩み寄る。

あの背丈に髪型で思い当たる人物は一人しかいない。

そのバニーガール……アリアは、キンジの耳を摘まみ、ぐっ！と引き寄せる。

あれはやられたら相当痛いはずだ。

「あ、アリア！ 何するんだ！」

「うるさいこのバカキンジ！」

何やらしい目で見てんのよ！」

「声がでかいよ、アリア。」

それにキンジはきつと、バニーガールみたいな派手な格好に興味は無い」

キンジがうんうん、と頷く中……

レインはアリアの耳元で、

「本当は、アリアみたいな娘に似合う……ゴニョゴニョ」

「！ ちょっと、それ本当なの、レイン！」

もう少し詳しく……ゴニョゴニョ」

「おいレイン。何を吹き込みやがった」

キンジがヒステリアモード顔負けの迫力で睨んでくる。

だが、レインはそんな視線はなんのその。

わざとらしく口笛を吹きながら、キンジの問答をのらりくらりとかわしながら、呆然と立ち竦むアリアを放置したまま、キンジと共にカジノの奥に向かう。

奥には、トランプやマネー・ホイールといった高額チップを賭ける場所があった。

そこには、ギャンブルを楽しむだけでなく、ギャンブルを真剣でやっている者もいる。

明らかに堅気ではない奴もいる。

そいつらにキンジは警戒しているようだが……心配せずとも、この手の輩はそんなに警戒する必要はないのだ。

見たところ、立場は中くらいの組織の上の下くらいだ。

この辺の奴が一番、自由に動きにくいのだ。
上と下からの圧力やらなにやらで。

まあ、『砂礫の魔女』が近くを彷徨っている以上、どの方面にしろ警戒するに越した事はないのだ。

レインは特にキンジに何を言うでもなく、押し黙る事を選んだ。

そのキンジは、シャンデリアの辺りのジャズバンドの前をうるちよろしている。

少し悪目立ちしているが、普段の彼はEランク武偵なのだから仕方ない事だ。

警戒心が高いだけ及第点を与えてやってもいい、といつでもフォロ―可能なレインはぎこちないキンジを眺めていた。

ざわざわ……

……？

ざわめきが聞こえた方にレインが振り向く。

直前に、彼も気づいたのだろう、キンジもそちらを向くのが見えた。レインは器用に人混みを掻き分け、キンジを連れて人だかりの中央に足を踏み入れた。

すると、なんだかむさ苦しい男共が盛り上がっている。ケータイで写真を撮っている奴もいるのだ。

キンジは「アイドルでも来てんのか？」と首を傾げるが、レインの脳裏にはあの和撫子が無表情娘しか思い当たらない。

「カクテルウエイトレスの撮影はご遠慮下さい！」

「入口にご注意事項として書いてあります！」
という声が聞こえる。

その声を発したバニーガールのお姉さま方に引っ張られて出てきたのは、真っ赤になった顔をウサギ耳で隠そうとする、白雪だった。

「やれやれ……キンジ。」

白雪は確か、バックヤードの仕事だったよね？」

「確かにそうだが……」

「まあいいや。好都合だ」

「？」

キンジがレインの方を不思議そうな目で見てくるが、

「キンジ。白雪のいるスタッフルームに行こうか」

「え？ あ、ああ」

キンジが疑問を口にする前、つまり頭での処理が不十分な状態でレインが引っ張るものだから、頭がごちゃごちゃしたまま、キンジはレインと共にスタッフルームに向かうのだった。

「白雪。バックヤードやれっていったら」

「う、ごめんなさい……」

白雪は肩をすぼめ、しょぼん、という風に今度は肩を落とす。

「あまり目立つ事はしちゃ駄目だぞ、白雪。」

客の気分を害さないために隠密行動するのが、依頼側の希望だ」

キンジもそんな白雪を見てあまりキツイ言い方はできないのだろう、いつもより口調が少し優しい。

だが、お説教中にレインの方をちらっ、と見て、段々声のポリュー

ムが下がっていった。

さんざん目立ってたレインを棚上げしてる気がして、いまいち踏み切れないようだ。

だが、レインにとっては好都合。

「いいよ、白雪。」

バックヤードはレキがやってくれるさ」

だからキンジとベタベタしてろ、とそういった意味合いだったのだが……

「ご、ごめんね成瀬君。」

迷惑かけちゃって……」

と、どうやら悪い意味にとられたらしい。

レインは苦笑いして軽くフォローを入れてから、白雪をキンジに任せ、再度パトロールを続ける事にした。

次の場所は、最低掛け金が百万、会員パスを持っている金持ちだけが賭けに参加できる、カジノの二階 特等ルーレット・フロアだ。二階そこから微弱な気、即ち超能力の片鱗を感じたレインは、少しだけその歩を早めた。

第68弾 カジノ警備（後書き）

綾「そういえば、作者がもうすぐ修学旅行に行くらしいわよ」

悠「え？ また更新に穴あくんですか？」

静奈「努力はするらしいが、期待薄だな」

綾「うちの作者がダメダメでごめんなさいね」

第69弾 蟲人形・アヌビス

第69弾 蟲人形・アヌビス

ルーレット・フロアに足を踏み入れたレインは、すぐにその一角、ひとだかりのできた大きなルーレット台に視線を送る。

そこには、金ボタンのチヨッキを着た、小柄なディーラー……レキがいた。

「では、プレイヤーは次のベットをどうぞ」

レキの平坦な声を聞きながら、レインはこっさりため息をついた。どうやら、このルーレットは先にプレイヤーがベットし、ディーラーがルーレットに玉を放る順で行われるらしい。

だが、レインが見てて呆れたのはそれに関してではない。レキの手元。

そこには、色とりどりのチップが、山のように積み重ねられていたのだ。

「は、ははは……こんなに強くて可憐なディーラーは初めてだよ。

この僕が一時間も経たない内に3500万も負けるなんてね」

そんな開き直ったような言葉を発する男に、レインは見覚えがあった。

確かどこぞの小物青年IT社長で、女に目がない。

名は覚えていないが、確か日本のビル・ゲイツだとか呼ばれているらしい。

「後の手持ちは、3500万ある。

これを全部、黒に賭けよう！」

若社長は、一枚百万、つまり35枚のチップを全て、黒のマスに置いた。

その顔から、興奮状態なのが一目で分かる。

「では、この手球が黒に落ちれば配当は二倍です」

「いや、配当は要らない。代わりに、君をもらおう」

その言葉に、周囲がどよめき……レインの額の筋が一本、プツリ、と切れた。

彼がレキに下手な口上をたれている間に、レインは彼に歩み寄り、「おい若旦那。まだ懲りてないみたいだな」
いつもとは違う、強面な口調で若社長の肩を掴む。

「誰だ貴様……ッ、あ、あんたは!？」

若社長が狼狽する中、レインは手持ちのチップを百枚、つまり1億分を赤の25（誕生日の日付だ）に賭ける。
途端、わあっ！ という歓声が辺りを包む。

「その昔、ラスベガスで伝説のギャンブラーと謳われた……『紫電の雷神』!？」

その若社長の言葉は、更に周りを盛り上げるに充分なものだった。
周囲からは既に、雷神コールが起こっている。

「か、勘弁してくれ！」

僕はもう破綻したくない！」

その昔、レインがラスベガスにいた頃……この男は今のよう、ディーラーに自分のものになるよう、勝負をけしかけていたのだ。
女性をもののように扱うその若社長の態度に、レインは大激怒。

今のように1億をポン、と賭け、勝って勝って勝ちまくり、若社長を破綻させるまでに追い込んだのだ。

そんなある意味トラウマを持った若社長は、体裁など知ったことか、という風に腰を抜かして逃げ出してしまった。

3500万を残して。

「やれやれ、仕方ないな……すみません皆様、一旦ご退場下さい」
その様を見ていた観衆に、レインは一礼して階段を降りるのを促す。
周囲が戸惑う中、更にレキが、

「お引き取り下さい。今日はもう帰った方がいいですよ」
その口振りに、観衆は皆首を傾げる。

ピリッ……

その空気の変化に、気づける程の手練れは、この一般的な金持ちの

中にはいるまい。

「良くない風が吹き込んでいます」

レキがそう言った瞬間、彼女の後ろから、ぱっ！

銀の狼が飛び出した。

レキの飼っているハイマキだ。

ハイマキはそのまま、フロアの片隅からこちらに向かってきた異形に、体当たりをかました。

異形は吹っ飛ぶ。

その姿に、レインは眉を寄せた。

全身が黒塗りで、腰には短い布を巻いたそいつは　頭部が、人間のモノではないのだ。

恐らくはジャツカルの頭部。

古代エジプトに伝わる、『アヌビス』　その風貌に瓜二つだ。

「使い魔か……！」

しかも、半月型な斧まで持っている。

そのアヌビスは、ハイマキの体当たりを食らって吹っ飛ぶが、逃げる観衆を尻目に、むくりと起き上がった。

驚くべきは、その馬鹿力だ。

ハイマキ　バイク程の重さのある銀狼を、首に噛みつかせたまま立ち上がっているのだ。

アヌビスは、頭をぶん、と振り回し、ハイマキを床に放り投げて振りほどく。

そいつがこちらを向く前に、レインはアヌビスに肉薄していた。

アヌビスは無言でその半月型の斧を振り上げる。

が、遅い。

レインは刹那、隠していた水月を抜刀　高速震動でアヌビスを、一刀両断した。

「（このスカラベ……やはりあの魔女か）」

アヌビスが崩れ落ち、砂鉄になる。

その中で真つ二つになっているコガネムシのような昆虫、スカラベ

にレインは一瞥をくれてやり、すぐにレキとハイマキに視線を戻す。
「大丈夫、レキ？」

「私もハイマキも問題ありません。しかし
レキは、ガシヤン。」

ドラグノフの先端に、銃剣を取り付けた。

「おいレイン、どうなってる！」

「成瀬君、レキさん、大丈夫！？」

続いて、キンジ、白雪が駆け寄ってくる。

そんな中、レインは斜め上を凝視し、舌打ちする。

「蟲人形……！」

次いで、レインの視線の先を向いた白雪がそんな事を口走る。

視線の先、豪華なシャンデリアの向こうの天井には 先ほどのア
ヌビスが、十体程張り付いていたのだ。

「キンジ！ ベレでサポート頼む！ ナイフは使っな！」

レキは狙撃、白雪はこれ使え！」

キンジとレキに手早く指示を出し、イロカネアヤメを盗まれたら
しい白雪には、愛銃・ブローウを投げる。

巫女札の鬼道術での応戦は属性的な問題で厳しいだろう、という配
慮のためだ。

そのままレインは、雷歩でアヌビス達の前に一呼吸で移動する。

「はっ！」

そのまま水月を振り、アヌビスの一体の胴体を切り離す。

無論、超能力を感じる中心部を狙っているため、中から出てきたス
カラベも両断されていた。

「そらよっ！」

続けて、水月と同じく高速震動させた二本のダガーを投擲、寸分の
違いも無く二匹のアヌビスの心臓部、スカラベを射抜く。

レインが更にもう一体に向かおうとすると、三体のアヌビスが飛び
上がり、レインに掴みかかろうとした。

しかし、レインは振り返る事をしない。

アヌビスはレインの寸前まで迫るが、三回のマズルフラッシュが瞬き、アヌビスは全員仰け反った。

キンジ、白雪、レキによる援護射撃だ。

「あらよつと！」

その内一体のスカラベを射抜き、レインは一旦呼吸を整えようとバツクステップで距離をとった。

アヌビスがこちらを、その赤い眼で睨んでくる中……

「はあ、またこういうタイプね？」

天井からの、アニメ声。

見上げると、シャンデリアに乗ってそのピンクのツインテールをはためかす

「アリア！」

キンジが叫んだのにやや遅れて、アリアの愛銃、黒と銀のコルト・ガバメントから、45ACP弾が吐き出される。

その銃弾を食らって、アヌビスの一体が砂鉄に変わる。

レインは雷歩で上昇し、アリアの元に歩み寄った。

「やあアリア。随分こっちの戦いに慣れてきたみたいだね」

「あんたは鈍ったんじゃないの？」

ささつと消し炭にしちゃえばいいじゃない。『ゴレム』でしょ、こいつら」

ゴレム。白雪がアヌビスの使い魔を『蟲人形』と呼んでいたのと同じ事で、その欧米の呼び方であるに過ぎない。

要するに、超能力で操る人形。蟲人形とは、蟲を媒体に使う人形、という意味だ。

「属性の問題で、雷があんまし効かないんだ」

「ふーん、まあいいわ。」

残り四匹ね。あんたはあと一匹でいい。

残りは私たちがやる」

「了解、つと！」

レインはシャンデリアから飛び降り、ダガー二本を構える。

「そら！」

レインはダガーをアヌビスに向けて放るが、こいつらにも知能はあるらしく、同じ手は通じない（攻撃したのは別の個体のはずだが）。器用にも身体を翻し、ダガーを半月型の斧で弾き返した。

「面白い！」

啖呵を切ったレインは、水月で同じようにダガーを弾き返す。

さすがにこれは想定していなかったようで、アヌビスはダガーを避けると白兵戦を仕掛けようと肉薄してくる。

「遅い！」

だが、レインはその瞬間には刀を鞘に戻していた。

そして、ギイーン！

一瞬の金属音。

そのすぐ後に、アヌビスは地に倒れ伏し、砂鉄へ帰る。

半月型の斧が弧を描きながら落ちてくるのを、レインは片手でキャッチした。

「さて、俺のノルマは達成した訳だが……」

いいながら、レインはアリアの撃ちこぼしであろう倒れたアヌビスの心臓部を斧で貫き、砂鉄へ帰す。

そうしながら、状況を確認。

レキ、白雪は無事で、客の避難や誘導を行っている。

対して、アリアとキンジは……

「っ、使い魔相手に深追いは禁物だぞ！」

なんと、窓を割って外に出たアヌビスを追いかけってしまったらしい。外に逃げた客を襲いかねないから追おうとしているのだとしたら、とんだ見間違いだといえる。

何故なら、あのアヌビスたちははなから客を狙っていた訳ではない。狙いは恐らく

「アリアっ……！！」

苦虫を噛み潰したような表情で、レインもキンジたちを追う。見晴らしのいい場所にだけは行ってくれるな、と祈りながら。

第69弾 蟲人形・アヌビス（後書き）

悠「ところで、この会話形式はシリーズ化されてるんですか？」

静「もう三回目だが」

綾「随分今更よねえ」

ミ「まあ、私たちは出番少ないからありがたいけどね」

三人「言うなああああ！」

第70弾 兄弟対決

第70弾 兄弟対決

あのアヌビスは困だ。

そもそも無限魔力とやらを持つ砂礫の魔女は、あんな使い魔を作ってもなんら消耗しない。

故に、あの使い魔がいくら葬られようが、問題はない。

その場合、その『捨て駒』をどのように活かすか、という戦法をとると見て間違いはないのだ。

事実、アヌビスの気配は海上 絶好の見晴らしのそこを移動している（恐らくでたらめに海上を走っている事だろう）。

そんな格好の狙撃地点にアリア、キンジを行かせるのは危険過ぎる。レインはピラミディオン台場を飛び出し、海の上を駆けようと、足に意識を向けた。

瞬間、

「!?!」

背筋に悪寒が走り、レインは咄嗟に雷歩で海上を駆けるのではなく、空を蹴り、急激に上昇した。

先ほどまでレインがいた空間を、ニメートルに及ぶ日本刀が通過する。

見覚えがあるその刀は、間違い無い 夜雲に伝わる秘宝、五月が

一、月影。

それがここにあるという事は

「……レイン。久方ぶりだな」

「夜雲、晴夜……!」

成瀬 蒼介とその家族の仇、夜雲 晴夜が姿を現した。

「アンタがどうしてここにいるんだ!？」

レインの叫びに、晴夜は静かに答える。

「お前をイ・ウーに迎えにきた」
その言葉を聞いた瞬間、

先日の『教授』の言葉を思い出す。

『イ・ウーに來ないか』

ああ、正直自分は迷っていたんだな、と実感する。
いまでも、強くなりたいと思ってる。

次に思い出したのが、七夕の祭り。

共に過ごした少女らの顔を思い浮かべた。

ああ、何だ。

迷う必用なんて、どこにもなかったんじゃないか。

レインは肩の力を抜いた。

それを肯定の返事と取ったのか、晴夜もまた警戒を解く。

が、それも一瞬。

レインの身体から紫電が迸り、彼の銀色の瞳、髪を紫に染め上げる。

「俺は彼女らを守りたい。そのためには、力が必用だと思っていた」
レインの独白に、晴夜は言葉を返さない。

「だけど、『傷つける力』で守られたって、彼女らは言ばない」

目を閉じて、再び少女たちを想う。

そこに在るのは、ただ笑顔。

それを泣き顔に変えないためにも レインは、水月の切っ先を晴
夜に向ける。

「女を悲しませるような真似は出来ない。

だから、俺は俺なりに強くなるさ アンタら全員ぶっ飛ばしてね」
イ・ウー

晴夜は無言で、月影を構えた。

「……邪魔するなら、アンタからを殺人罪と窃盗罪で逮捕する！」
一瞬の緊迫。

レインの額から滴り落ちた玉のような汗が、ピチヨン、と音を立て
た。

それが、開戦の合図。

レインはダガーを二本取り出す。

それを上空に放り投げ、雷歩で一瞬で距離を詰めた。

晴夜の月影と同じく五月が一、水月を抜刀。

水平に振るった水月を、晴夜は月影で受ける。

ギイン！

激しい火花が散る。

次いで、上に放って回転していたダガーが、突如高速で晴夜に向かう。

そのダガーは、しかし晴夜に届く前に弾かれた。

レインは一旦距離をおき、ダガーを四本放る。

一本はまっすぐ晴夜に向かい、残り三本はそれよりも早く晴夜の真横に投擲され、レインの操る磁力によって、急速に晴夜に引き寄せられた。

四方向からの同時攻撃。

しかし、晴夜はその場を動かこうとしない。

ガキイ！

聞こえたのは、火花の散る音。

それは即ち、晴夜が全てのダガーを撃ち落とした事を示していた。

「（迅い……！）」

一般人から見れば、ほとんど動きもせずにダガーが勝手に弾かれたように見えるはずだ。

しかもそれは、レベルの高い武偵でも同じ事が言える。

だが、雷神化したレインの紫に光る瞳には、明確にその剣技を捉えていた。

それは、特別な技だとか、超能力を使用したとか、そんなちなけなものではない。

ただ、斬ったのだ。

それが、眼に映らない程高速で行われていただけ。

夜雲の麒麟児。

かつてその称号を欲しいままにした晴夜の力は、その当時より更に別格。

Sランク武偵でも並々ならぬ相手だろう。

レインは手に紫電を走らせる。

それでピストルの形を作り、人差し指の先からレーザーのような雷が放たれる。

雷弾、レインがそう呼ぶその技を、晴夜はさも何でもないように斬り裂いた。

雷を斬り裂く。

そんな常人離れ、というより人外の業の秘密は、恐らくは夜雲家の家宝、五月の一つ、月影によるものだ。

随分昔、龍三に聞かされた話、五月の秘める力について　そこでは、月影は『斬れぬものをも断ち斬る、必斬の刀』と呼ばれていたはずだ。

その言葉の意味は当時分からなかったが、なるほど超能力ですら断ち切る刀のようだ。

「今度はこちらから行くぞ……はっ！」

晴夜が肉薄し、月影で斬りかかってくる。

対してレインは、水月でそれを受け流し、その勢いを利用して突きを放つ。

だが、晴夜はそれを首を傾げるだけでかわし、あまつさえ追撃で水月を振り下ろそうとするのを、いなされた勢いを更に利用して、踵落として水月の勢いを殺す。

「甘い！」

レインが一喝すると、先ほど弾かれたダガーから紫電が迸る。

「雷線！」

その紫電が、引き寄せられたように水月の先端に文字通り、雷の線を描く。

だが、その有効範囲に既に晴夜はいなかった。

「甘い」

雷線の本を斬り裂き、回避していた晴夜は拳銃から銀弾を吐き出した。

「ッ！」

対超能力者用のその弾丸は、銀製という事もあっていつものように磁力で跳ね返す事ができない。

それを頭より直感で理解したレインは、水月で銀弾を弾いた。

「忘れたのか？」

その銃弾が以前にも効いていなかった事を「

レインが晴夜の方を向いて問い掛ける。

レインとしても皮肉の色が強かったため、あちらも皮肉で返してくるか、はたまた黙秘を貫くか。

その程度に考えていた問答は、しかしレインに予想外の答えをもたらす結果となった。

「以前……？」

何の話だ、ふざけているのか「

晴夜のそのセリフに、レインは絶句する。

言ってる意味が分かっていない？

違う。晴夜は昔から聡明であった。

ふざけている？

これも違う。

彼は本気で分からない、というような感じだ。

なら、考えられるのは……記憶喪失？

それが一番しっくりくる。

だが、ならば何故、彼はこうしてこの場に立っている？

分からない。

レインの手が止まり、思考までも放棄しようとした瞬間。

「戦場で油断とは愚の骨頂だな」

はっ、と気がついた時には、月影が目の前に迫っている！

レインは咄嗟に水月を滑らせ、月影のガードに持っていく。

が、いかんせん晴夜の勢いが強い。

レインは吹っ飛ばされ、水月を引くのが精一杯だったためか受け身も取れずに地面に叩きつけられた。

「ぐっ……!?」

肺に溜まっていた空気がいつぺんに外へ吐き出される。朦朧とする意識の中、かろうじて見えた第二撃を防ぐ。

「はあっ、はあっ……!!」

レインは油断した自分を戒めながら、焦りを覚え、晴夜の足下にダガーを投擲。

雷壁で晴夜の視界を塞ぎ、手近な木陰に隠れる。

この距離、刀との戦闘でブrouがないのは、正直痛手だった。

「（雷雨、雷砲はブrouが無いと厳しいし、雷線式はまだ使えない……それなら）」

レインはダガーを二本構え、木陰から飛び出した。

水月を一旦鞘に仕舞い、手数で攻める。

無論、両方の刃に雷刃を掛けてある。

その右に持ったダガーで斬りかかり、左に持ったダガーを投擲。

晴夜は片方のダガーを受け流し、もう片方のダガーも弾いた。

だが、レインも受け流されたダガーを更に晴夜に投擲、同時に水月を抜刀し、斬りかかった。

晴夜は身を屈めダガーを避けると、カァン!

ダガーを斬るのではなく、峯で打ってレインに刃部分を向けさせた。

「ッ!」

レインはなんとか身を翻し避け、その勢いそのまま回転、真一文字に水月を滑らせる。

晴夜は上体を逸らしその一閃を避け、更に月影でレインに逆袈裟斬りを放つ。

レインは水月を後ろに投げ、バック宙で月影をかわす。

着地する際、水月を片手でキャッチし、再び晴夜に肉薄した。

「はああああ!」

「来い、レイン。」

お前は成瀬（その名）を語るべきではない事を教えてやる」

「ほざけ!」

ギイン！

レインと晴夜、二人の月は再び斬り結んだ。

第70弾 兄弟対決（後書き）

悠「それにしても……」

綾「どうしたの？」

悠「僕らメインの話はいつになるんでしょうかね？」

綾「それを聞いたらおしまいよ……」

ミ「作者曰く、『原作に追いつきそうになったらやる』という話だよ」

第71弾 第二の可能性

第71弾 第二の可能性

レインと晴夜が兄弟対決を繰り広げている頃、もう一つの兄弟対決が行われようとしていた。

「『緋弾のアリア』 か。夢い夢だったな」

巨大な黄金の船のデッキにいるのは、カナの本来の姿、遠山 金一。キンジの兄だ。

彼が発した、『緋弾のアリア』 その意味も理解せぬまま、キンジは兄の姿を見て、齒ぎしりする。

その後、アヌビスを倒す事は出来た。

だが、『砂礫の魔女』によってアリアは狙撃され、そのまま彼女に連れ去られてしまったのだ。

「兄さん……俺を、騙したのか！」

アリアを殺すのはやめたって言ったじゃないか！」

「俺はただ看過しただけだ」

「詭弁だろそんなの！」

あんたが助けってくれば、アリアはっ……!!」

キンジのその言葉に、金一は砂礫の魔女から渡されたガラス細工を取り出す。

それは小さな砂時計で、さらさら……と微かに砂が落ちてきていた。

「あれは『砂礫の魔女』 パトラによる『呪弾』だ。」

今から24時間は生きている。」

キンジが答えられずにいる中、尚も金一はその冷ややかな視線をキンジに向けた。

「パトラはその間に、『教授』と交渉を行うだろう……自分にイ・

ウーを渡さないと、アリアを殺す、と」

「な、何故そんな事をする必要があるんだ！」

その交渉とやらは成立する訳がない、キンジはそう思った。

何故、イ・ウーの犯罪者を何人も捕まえた怨敵であるアリアを、むざむざ助ける必要がある？

そんなの、むしろ殺して下さいとお願いされてもおかしくはない話だ。

しかし、金一はその漆黒の髪を振るわせ、首を横に振る。

「イ・ウーの無法者共を束ねる存在が、『教授』と呼ばれる男だ。

しかし、この教授の存在で成り立っていたイ・ウーは近々、大きな動きを見せるだろう。」

教授が、寿命で死ぬからだ」

教授、その男を知らないキンジでも、あのブラドより、ジャンヌより、理子より強いと言つのは理解していたためその男の強さを想像し、肩を震わせる。

「イ・ウーには、二つの派閥がある。『主戦派』と『研磨派』だ。

特に厄介なのが主戦派で、こいつらは教授の死後、イ・ウーの力を振るい 世界へ攻撃を仕掛けようとしている」

世界へ、攻撃。

それは即ち、世界征服を企んでいる、と。そう言う意味だろう。

「そんな昔の漫画みたいな話が……！」

「ある。それすら可能だと思わせる場所なのだ。

イ・ウーという場所は。

だが、それを良しとしない者たちもいる。

それが研磨派だ。

こいつらは『教授』の死後、組織が分裂するのを阻止するため、次のリーダーを決めようとした。

そこで白羽の矢がたったのが、アリア」

キンジは改めて絶句する。

何故、そこでアリアに話がくるんだ、と。

だが、それよりも問題点が一つある。

「アリアがイ・ウーなんかの言いなりになる訳がない！」

「言いなりになる。『教授』の前ではな。

アリアは必ず『教授』に従う」

確信を込めた金一の言葉に、キンジは声を詰まらせる。

「俺はイ・ウーを殲滅するため表舞台から消え、奴らを倒す方法を探した。

それが、フォーリング・アウト『同士討ち』」

同士討ち。

武偵用語であり、その意味は、強大な犯罪組織と戦う際、組織に潜入・工作を行い、内部分裂させ、敵同士を戦わせて組織を弱体化させる手法だ。

だが、それは自らの命をとられる可能性が非常に高い、危険な戦法でもある。

「同士討ち　そのためには、リーダー不在の状況を作り出す必用があった。

その可能性は、二つ。

『第一の可能性』は、教授の死と同時期にアリアを殺し、イ・ウーから一時的にリーダーを消し去ることだ。

そして、『第二の可能性』とは、今代のリーダー、教授の抹殺だ」
金一、カナが言っていた『第二の可能性』とは、イ・ウーを崩壊させる可能性の事だったのだ。

それも、リーダーを殺す、というより困難な可能性。

それを知り、キンジは己の拳を強く握る。

もつと、自分に力があれば……！

「『第二の可能性』の先には、教授との戦いが待っている。

お前たちならもしや、と思ってもう一度『第二の可能性』に賭けた。

が……パトラごときに不覚を取るようでは、『第二の可能性』はない。

ならば俺は、『第一の可能性』に戻るまでだ」

『第一の可能性』、それが示すのはアリアの抹殺。

それを止めようとキンジが身を乗り出すと、『太陽の船』が微細な

砂に帰っていく。

金一は、踵を返した。

それが、イ・ウーへ行き、アリアを殺す宣言に思えて、キンジは

「……帰れ、キンジ。」

イ・ウーはお前の手に負える組織ではない」

兄の言葉に、キンジは黙り込む。

そうだ、所詮エランク武偵である彼に太刀打ちできる相手ではない。そんな事は分かっている。

だが、そんな事は関係ない。

今、彼が考えるべきは、兄が巨悪を討とうとしていて、そのためにアリアが殺されようとしている。

なら、決断しなければならぬ。

兄に従い、アリアが死のうと、遠山家の男として義を守る、正義の道か。

アリアが兄に狙われようが、イ・ウーが存続しようが問答無用でパートナーを助ける道か。

彼はその二つの道の間で、揺れる。

誰も、彼に正しい道を教える事のできる者はいない。

まだ立ち去らぬ彼に、金一は背を向けたまま、もう一度　恐らく、最後の通達を言い渡す。

「帰れキンジ。犠牲になるのはアリア一人で充分だ」
アリア！

その言葉を聞いた瞬間、キンジは引き寄せられるように金一の『太陽の船』に飛び乗り、金一の元へ向かった。

太陽の船の甲板で、彼は振り向いた。

途端、キンジの背筋に冷たいものが走る。

金一は、怒っている。

その本気の殺気は既に人間の領域を凌駕していた。

今までキンジが金一に本気で怒られたのは、彼が自分の身を危険に晒したときだけだった。

「兄さん！ あんたは間違ってる！」

正義を謳うなら、誰も殺しちゃだめだ！」

「キンジ。それは俺も百万回考え、百万回悩んだ。

だが、力なき民、世界を護るためには犠牲を伴う事もある」

「だからって、諦めて良いわけがない！」

キンジが選んだのは、修羅の道だ。

例えここでアリアを助けられたとしても、その先にはイ・ウーの面々、更には教授をも倒さなければならぬ道だ。

だが、それでもキンジは引かない。

引くわけには行かない。

何故なら、アリアはずっと 独唱歌ひとじほうちでイ・ウーと戦ってきた。

そのアリアの 力になりたい！

キンジは、無言でベレッタに手を伸ばした。

何もかもを断ち切るように。

第71弾 第二の可能性（後書き）

よっしやあああ！

予約掲載万歳！

（今作者は京都ですのでコメントできません。すみません）

第72弾 黒い雷

第72弾 黒い雷

ギイーン！

夕闇が一带を染めようとする中、レインの刃と晴夜の刃が、赤い火花を散らし、互いに距離を取った。

「……俺がここに何をしにきたと言ったな」

晴夜は月影を振りかざし、地面を蹴る。

降り下ろされる月影を、レインは水月の刃でいなし、雷掌を打ち込む。

しかし、晴夜はそれをしゃがんで回避、同時に軸足を刈ってきた。

レインはそれを跳んでかわし、雷歩で更に空を蹴り、上昇。

「……お前を向かえにきた」

「……ッ！」

レインは思わず、拳を握り締める。

だが、それも一瞬。

レインはすぐさま指をピストルの形に持っていく、紫電を放った。

その雷撃は、すぐさま月影で断ち切られる。

「余計なお世話だつての！」

叫びながら、レインは次々と雷弾を発射していった。

対する晴夜の刀も、それに応じて動きが早くなっていく。

「やれやれ……俺はお前がそこにいるのを相応しくないと考えているんだがな」

晴夜は銃口をレインに向け、銀弾を放つ。

レインはそれを水月で弾きながら、尚も雷弾を浴びせ続ける。

「お前は窮屈な思いをしている。」

一瞬で殺せる相手を、むざむざ生きたまま捕らえなければならぬ。

力が強すぎれば、疎まれ、利用される。

武偵なんて得にならない仕事は、早くやめるべきだ」

「……余計なお世話だって、言ってるんだろ！」

レインはダガーと水月を抜刀、ダガーを投擲し、先行させつつ彼も雷歩で肉薄する。

「殺し合いでならお前は、世界最強だというのに……何故、武偵なんだ！」

「アンタが知らないはずないだろ……！」

俺は、父さんの代わりに武偵になって、アンタみたいなのを捕まえるんだ！」

「お前はまた……蒼介蒼介蒼介！」

あの男がお前を完璧から遠ざけると、何故分らない！」

晴夜は叫び、月影を居合い抜きのようにして振るう。

それに対し、レインは水月で受け、ダガーを磁力で晴夜に向けさせる。

「こんなものが、今更……！」

言いながら、晴夜は月影を振るおうとして 気づいた。

月影を持つ手に、黒い砂のようなものが巻きついている。

砂礫の魔女、パトラ。

一瞬彼女の裏切りを考えたが、違う。

黒い砂には、紫の雷が迸っていた。

砂鉄か！

「遅い！」

レインは水月を振りかざし、晴夜に渾身の一撃を叩き込んだ。

「ぐっ……！」

防刃制服依然に、水月には刃がない。

そのため、晴夜の肩は斬れず、衝撃を与えるだけの結果だ。

だが、それでいい。

防弾・防刃制服は衝撃を緩和する事が出来ない。

故に、晴夜の肩は当然骨折以上のダメージを負っているはずだ。

しかして、その読みは的を得ていた。

「まさか、パトラの使い魔の砂鉄を利用するとはな……」
晴夜は肩を押さえながら、憎々し気に言う。

先ほど晴夜の腕に巻きついた砂鉄は、砂礫の魔女・パトラの使い魔から流れ出たものをレインが磁力で操ったものだったのだ。

「殺さないぞ、俺は武偵だから」

「……甘いな、甘い。つくづく甘い」

「……何とでも言え。とにかく、これで終わり　ッ！」

レインは、晴夜に手錠を掛けようと近づいた瞬間、雷歩で全力で左に飛び退いた。

瞬間。

スッ……

そんな、静かで、聞き逃してしまいそうな程儂い音。

それに振り返ると、そこには　景色が、直線に抉り取られていた。電柱は縦に裂け、しかし倒れない。

木も同様だ。

地面には、一直線に裂け目が続いている。

あまりの、一斬味　きれあじ　。

「肩を壊したくらいで終いとは、随分甘いな、レイン」

そう言った晴夜の姿は、異形、そう呼ぶ他に無かった。

いや、少なくとも左半身は普通の人間となんら遜色はない。強いて言えば、顔が非常に整っている事くらいだ。

だが、彼の破壊された右肩、そこから腕の先まで。

そこには、銀色に光る何かが蠢き、彼の右腕を包み込んでいたのだ。それに、瞳。

彼はオッドアイで、右目が金、左目が銀という日本人にはあり得ないような瞳の色をしていた。

だが、彼の金色の右目は、左目と同じ銀色に染まっていた。

「なっ……!!」

「驚いたか？」

晴夜は口角を釣り上げ、その銀色の何かに侵食された腕を、レインに向けた。

途端に、その銀色の何かは蠢き出す。

形を変えていくそれは 刀の、形となった。

「まさか、それは……！」

「ああ、月影だ」

月影、彼 夜雲 晴夜が持ち去った、夜雲の秘宝の一つ。だが、あれは刀だ。

少なくとも、あんな形状になるなど、あり得ない。

「『五月』には、特殊な力がある。

その水月は、何も斬らず、斬らせない『無斬の刀』。

この月影は、全てを断ち切る、『必斬の刀』。

だが それより更に高みがある。

それが、これだ！」

晴夜は叫び、月影を振るう。

すると再び、スツ………という音。

「がっ………!？」

それと共に、レインの身体から鮮血が噴き出した。防刃制服の上から。

「この刀こそ、月影第二形態 『月影・乱空』」

レインは水月を地面に突き立て、何とか立ち上がる。

だが出血がひどく、足元がおぼついていない。とても戦闘ができる状態でない事は明らかだった。

「無理をするな………殺しはしない。

お前をイ・ウーに入れるのが今回の目的だからな」

今度は先ほどと逆に、晴夜がレインに近づこうとする。だが、晴夜は立ち止まった。

レインから、雷が発せられている。

それが、晴夜が一步を踏み出すのを憚らせた。

今更レインの雷がどうか、そんな感情は晴夜には一切無かっただ

ろう。

その雷が、普段と同じだったなら。

晴夜は飛び退くより先に、月影で防御のために膜を作った。
だが。

「ぐっ!？」

レインから発せられた雷は、いとも容易く晴夜の防御を、彼の身体を貫いた。

「な、何が……起こっている!？」

レインから発せられたのは、黒い雷。

普段の彼の紫の雷よりも、深い深い、闇色をしていた。

同時に、彼の髪も、その黒を反射して、黒く輝いている。

だが、その美しさは逆に晴夜に根源的な恐怖を与えた。

確認した限りでは、水月は地面に落ちている。

少なくとも、あれの影響であるとは考えにくい。

「なんだ……それは!？」

レインは答えない。

代わりに、と言ったところか　レインは、先刻のように手を銃のように形作った。

「まずい!？」

それを本能で直感、理解し、晴夜は月影・乱空により可能となった武器の形態変化を利用。

刀を伸ばし、離れた地面に刀を突き刺し戻す事で、一瞬でそこに移動した。

刹那、ドゴオオオオン!

爆発音と共に、黒い雷の余韻が、抉られた地面から迸る。

「な……!？」

晴夜は絶句した。

その雷は　晴夜の隣の空間を、根刮ぎ奪い取っていった。

廃墟だったのが救いだだが、あんなものを人間が受ければ、間違いなく、木端微塵どこれでなく、消し飛ぶ。

あれだけ人を殺したがないレインが、力の調節を間違っはすもない。

故に、考えられるのは

「意識が飛んでるのか……！」

晴夜はそう言い、未だ黒い雷を纏うレイン、その瞳を見る。

そこには、闇よりも深い、光の無い黒い双眸が、ただ呆然と前の空間を見据えているのが見てとれた。

第72弾 黒い雷（後書き）

静「申し訳ない、作者が修学旅行で更新が多少滞った」

綾「なんとか気合いで予約掲載できるようストックしたらしいけど

……」

ミ「それ故の駄ぶ^んごはっ!？」

悠「そこを突っ込んだら怒られますよ……作者に」

第73弾 鏡撃ち（前書き）

すみません、更新がとろとろしてて。

という訳で、修学旅行から帰還しました。

こんな感じで時々穴が空きますが、どうかご容赦下さい。

第73弾 鏡撃ち

第73弾 鏡撃ち

「兄さん……いや、元武偵庁特命武偵・遠山金一！俺はあんたを、殺人未遂罪の容疑で逮捕する！」

キンジはベレッタを、金一の胸に向けた。対する金一は

「……良いだろう。」

お前のHSS、見せて貰おう」

HSS ヒステリアモード。

金一はそれを、見せてみる、そう言った。

「この船が沈むまで、残り15秒といったところか。」

その間で、俺はもう一度、お前と『緋弾』の絆を確かめる」

金一は動かない。

だが、それはイコール構えていない、という式は成り立たない。

構えたのだ。

無形の構え、『不可視の銃弾』

！

パン！

辺りを照らすマズルフラッシュに続いて、銃声。

キンジの防弾制服に、不可視の銃弾が突き刺さった。

あまりの痛みに意識を手放そうとしてしまうが、なんとかキンジは踏みとどまった。

「何故避けなかった」

「わざと……食らったんだよ。」

ようやく視えたぜ、『不可視の銃弾』

！

その言葉 ボロボロのキンジからは、今や負け惜しみに聞こえなくも無いセリフに、しかし金一は僅かに眼を見開いた。

「アンタの銃はコルト・ピースメーカー……拳銃史上、一、二を争

「う早撃ちに適した銃だ」

回転弾倉のそれは、ほとんどの面で近代的な自動式拳銃に劣る。しかし、それらを犠牲にしてまで速さを追及したのは

「アンタは、人間の領域を遙かに越えたヒステリアモードの反射神経で 目にも留まらぬ速度で発砲した。それが、『不可視の銃弾』のからくりだ」

「……さすが、俺の弟だ。」

見抜いたのは、レインとお前の二人だけだ」

金一は噛み締めるように、どこか嬉々とした表情で言う。

「だが、キンジ。お前の戦闘技術は俺が全て教えたものだ。」

その中に、不可視の銃弾を防ぐ術はない」

確かにその通りだ。

キンジの戦闘技術で、金一が知らないものは皆無。

ならば 作るしかない。

金一の知らない、アリアと過ごした日々の中から。

「キンジ。お前はこれを、かわす事は出来ない。

いかにHSSのお前とはいえ、放たれるまでに1/36しかないこの銃弾をかわす事など不可能だ。

例え俺でも、かわせない」

考える、考えるキンジ……！

ヒステリアモードの活性化された頭で、アリアと共に戦った、いくつもの戦闘を思い出す。

銃弾切り、ヒステリアモード、ダブル、ガバメント、爆弾、銃口、

銀氷、白刃取り、カドラ、銃弾撃ちヒシヤード！

あつた！

「 浅はかな」

金一と同じ、『不可能の銃弾』の無形の構えを取ったキンジに、金一はため息をついた。

「見よう見まねで『不可能の銃弾』を使うつもりか。だが、お前の銃では俺の銃に追いつけない」

俺は今、兄さんを越えた。

キンジは確信する。

勝てる、そう頭の中でリピートし続ける。

砂の船は今にも崩れそうで、海風で砂が吹き荒れる。

「眠れキンジ。兄より優れた弟など、いない」

『不可視の銃弾』！

ヒステリアモードのキンジの瞳が、世界をスローモーションで捕らえる。

見える。

金一の腕が、砂を払う軌跡が！

キンジは金一の動きをそっくりそのまま、ベレッタを構える。

まるで、鏡の中の自分に向けるように。

どこかで道を違えた、自分自身を倒そうとするように。

キンジのベレッタは特別製だ。

装備科の天才、平賀 文が改造した、不具合のある3点バースト。

トリガー1引きで銃弾が2発同時に出るモードだ。

パァン！

ガウンツ！

キンジの銃声が一瞬遅れて 金一の銃弾が、キンジの心臓に向けて

飛来する。

だが、それは

ギイインツ！

ブラド戦の『銃弾撃ち』の改良型で、真正面から跳ね返され、金一

の銃口へ向かって、飛んでいく。

『鏡撃ち』。

相手の銃弾を、相手の銃口へ撃ち返す技だ。

直後に、ガウンツ！

二つ目の銃声が鳴り響き、2発目の銃弾が、弾かれて戻ってきたキ

ンジの銃弾を、『銃弾撃ち』で斜めに弾く。
バガツ！

銃口に戻った銃弾が、ピースメーカーを破壊する。
そして、キンジの銃弾は、シュツ、と袖を掠め、キンジの真横を通り過ぎていった。

破壊されたピースメーカーを落とした金一は、その顔を歪める。
その時、ついに二人の乗っていた砂で出来た『太陽の船』が水没した。

砂の足元は崩れ、キンジ、金一は二人とも海に墜ちる。

その顔が、どこか儂げで、しかしどこか嬉しそうで

キンジの意識は、そこで途切れた。

「っ、時間切れか……まあ、助かったか」

晴夜は肩で息をしながらそう言うと、未だ黒い雷を纏うレインに目を向けた。

「お前のその力が何なのかは分からないが　今回は見逃してやる
う」

レインはその虚ろな目のまま、晴夜に指を向けた。

「済まないが、もうお開きだ」

晴夜はそう言うと、自ら海に飛び込んだ。

すぐに、けたたましいエンジンの音が聞こえてきた。

恐らく小型の潜水艦が何かを配置してあったのだろう。

レインも、それ以上は撃たなかった。

黒い雷が消え　地面に倒れ伏す。

「うっ………？」

俺は一体………？

ッ、晴夜！

ガバツ！

と起き上がるが、すぐさま尻餅をついてしまう。

足に力が入らない。それどころか、全身から力が抜けてしまったよ
うな脱力感。

「いない……？」

「一体どうしたんだ？」

レインは冷静に頭を冷やし、自分が目覚める前までの事を思いだそ
うとする。

「（確か、晴夜が月影を右手に着けてて……で、俺は斬られて……）」

斬られた身体に目をやる。

「え……？」

レインは目を見開いた。

先刻、レインが斬られてから十分程度しか経っていない（本人はそ
れよりも短く感じているが）。

にも関わらず、傷口が塞がりかけているのだ。

「なんだ……？」

「どうなってる？」

レインは首を傾げ、まあいいか、と水月を杖代わりに立ち上がる。

先ほどと比べ楽になった。

「やばいな……キンジ達、無事でいてくれよ」

でも、見失ったな……とレインが途方に暮れていると、海の方から
ザザザザ……という、何かが崩れる音が聞こえてきた。

「あれは……キンジに師匠ししやう！？」

ちなみに、レインは金一の事を、金一状態の時は師匠ししやう、カナ状態の
時は師匠せんせいと呼ぶ（他ならぬカナの頼みだ）。

まあそれは置いておく。

その金一と、何故かキンジが二人一緒に船から落ちている。

見たところ金一は問題無さそうだったが、キンジは完全に気絶して
いる。

「助けないと……！」

アリアがない事に一抹の不安を覚えながらも、レインはとりあえ

ずは目の前のキンジを助ける事にした。

雷歩で空を蹴る。

その際、違和感を覚えた。

「(……?) いつもより雷の色が濃いような……?」

普段のレインの雷の紫色が、黒っぽく濃い色になっている気がした。

「……まあ、大丈夫だろ」

レインはそのまま、いそいでキンジの元へ向かう。

その足元に、黒い雷が微量に残留していたとも知らずに。

第73弾 鏡撃ち（後書き）

悠「あれ？ 作者、前書きに出てるよ？」

静「しばらく前書きは音沙汰無かったというのに……」

綾「前書きは作者、後書きは私達で構成されてる訳ね」

レキ「……」

ミ「レッキー、何で前書きに向けてドラグノフ構えてるの……？」

第74弾 突入準備

第74弾 突入準備

「キンジっ！」

レインが叫ぶ。

慌てて引き揚げようとするが、それは憚られた。

キンジの兄、金一が既に彼を引き揚げていたからだ。

「し、師匠……！」

お久しぶりです！」

レインは衝撃やら痛みやらで軽いパニックになっていたのか、まずそんな言葉から出てしまった。

「レイン。挨拶は後だ……まずはキンジを運ぶのを手伝ってくれ」

金一の視線が、レインに突き刺さる。

別に金一が睨んだ、とかそう言う話ではない。

金一はレインの姿を見据えただけだ。

「は……はい！」

正直な話、レインはカナの時の金一よりも、今の金一の時の方が尊敬していた。

故に、金一の言葉はカナの言葉よりも、あらゆる意味で重い。

「成長、しているのだな……お前も、キンジも」

「師匠、その銃は……」

「ああ。キンジだ。やられたよ」

……！

戦慄を覚え、レインは目を見開く。

が、金一から渡されたキンジを抱えているため、あまり呆然としてはいられない。

すぐに気を取り直し、金一と共に陸地に戻った。

「師匠。キンジは……？」

「気絶しているだけだ。

俺に勝てた事で余程安心したのだろうな……」

キンジが、金一に勝った。

カナの状態でないとはいえ、それはキンジの成長を十二分に表している事に他ならない。

現に金一のピースメーカーは破壊されているし、金一はHSSヒステリアモードになっている。

少なくとも、実力の6割は出せているはずだ。

「（でも俺は……）」

キンジは自分の兄を倒した。

対して、レインは兄を倒すには至らなかった。

劣等感、それが今のレインの心境を表すのもっとも適切な表現だろう。

「……気にするな。お前は強い。」

無意識に殺さないようブレーキを掛けすぎているだけだ」

「え？」

突然の金一の慰めの言葉に、レインは多少間の抜けた声をあげる。

心を読まれたかのような いや、実際読まれているのだろう

その言葉に、思わず狼狽した。

「その傷……その治りの早さ、そして『王雷』。

それがお前の本来の力だ」

「黒い雷？ し、師匠。それはどういう」

「済まない、レイン。」

そろそろ交代する」

交代。

金一がカナと入れ替わる際の呼称だ。

その場合、金一はすぐにスイッチが代わったようにカナになるので、その前に男性女性の両方は、その場から消えなくてはならない。

レインも木陰に隠れ、交代を待つ。

その間に、襲撃者 晴夜との戦闘を、思い出す。

彼は、恐山での戦闘を忘れていたようだった。

彼は、五月の第二形態とかいうものを発現させていた。

彼は、何故か気絶していた自分をイ・ウーに連れて行かなかった。

分からない事が多すぎる。

それに、金一が言っていた言葉も気になった。

『王雷』。

レインの超能力であり、代名詞である紫の雷ではなく。

それは一体、どういう事なのか

「っ痛！」

思考がそこまで及んだ瞬間、それを許さないかのように身体中に鈍痛が走った。

筋肉痛のようなその感触に、レインは顔を歪める。

「どうかしたの？ レイン」

レインの様子を察したのか、カナの姿となった金一が心配そうに彼に話しかけた。

「せんせい師匠。」

いえ、何故か筋肉痛みたいな感じがしてですね……」

「やっぱり、さっきの気配は『王雷』……これも天命かしら」

「師匠、さっきからなにを言って」

「ごめんなさい、レイン。今はまだ話せないわ」

「ッ、分かりました……」

先ほどの通り、レインはカナより金一の方が尊敬してる。

だが、どちらにしる彼の恩師である事に代わりない。

故に、彼女（彼？）のそのくらいの頼みを、軽々しく断れるはずも無かった。

「ところで、アリアは……」

「ええ、パトラに連れ去られたわ」

やはり、あれだけ見晴らしの良い場所では容易に捕まってしまったようだ。

「くそっ……パトラはまだ近い。追います」

「待ちなさい、レイン。」

今のあなたが敵う相手じゃないわ。

精神状態も不安定、怪我もしてる。

自ら命を捨てる事は一番愚かしい事だ、そう教えたはずよ？」

「……すみません」

「やる気があるのは大変結構。」

ジャンヌと理子には連絡してあるから、武偵高に一旦戻りなさい。

私は、少し別行動を取るわ」

「了解しました」

カナを見送ると、レインはキンジを抱えて、多少覚束ない足元のまま雷歩で武偵高に戻った。

『レインッ！（キンちゃんっ！）』

武偵高に帰った瞬間、女性らに歓迎（？）を受けた。

「お前、血が出てるじゃないか！

待ってる、私の氷で止血してやる！」

「いや、ここは私の『激流の奏者』で！」

「レイレイ〜ぐすつ、心配したよう」

「あんまり女の子を心配させるものじゃないわよ、レイン君」

「先輩！良かった……！」

「無事でなにより！だよ」

「……おかえりなさい、レインさん」

「あ、ああ。みんなありがとう」

七人の女子に取り囲まれるレインの横で、白雪はキンジを揺さぶっている。

キンジはどこか苦しそうだ。

当然、女性の恋を応援するレインは彼女の邪魔になるような事はしないが。

レインは砂礫の魔女がアリアを拐った事を話し、キンジが起きるまで待つ事にした。

突入場所、突入方法に関してはジャンヌ、理子、ミチルや綾瀬に悠レキに静奈がなんとかしてくれるという話だ。

そんな大掛かりな作戦中に、ジャンヌが話しかけてきた。

「レイン。キンジがカナを倒したというのは……」

「多少語弊はあるが、正解だよ」

「なんと……！ お前といい、とんでもない奴だ」

「ああ。なんたって俺の相棒だからね。」

突入は俺とキンジでやる。

お前は……その怪我也有事だしね」

言いながら、レインはジャンヌの足を見た。

ギプスの当てられたそこは、骨折している。

「気をつける。」

奴、パトラは遠隔の呪いでさえ私に骨折させる程の術者だ」

「ああ。ありがとう、心配してくれて」

レインがいつものようにそう言うと、ジャンヌは顔を真っ赤にしてしまう。

「なっ……！！？」

わ、私は魔女だ！ お前の心配などしていない！」

「お前が魔女？ そんな訳ないじゃん。」

俺にはどちらかと言えば……ちょっと気丈な女騎士、かな？」

「なんだそれは……まあ、死んでくれるなよ。」

無事に帰ってこい」

「りょーかいっ」

そっぴいはいにかむと、ジャンヌは満足したように頷き、その場を去っていった。

「先輩っ！」

「レインっ！」

言いながら飛び付いて来たのは、悠、理子だ。

理子は性格的にまだ分かるが、悠は初めの人見知りからは想像も出来ない行動だったため、多少驚いた。

「ほい！ 悠ちゃんが作りたい、って言うから、理子りん手伝っちゃった〜」

「れ、レイン先輩。どうぞ……………」

「これは……………お守りかな？」

良くできてるね」

ロゴが『交通安全』と『恋愛成就』なのは気になったが、そこはあえて突っ込まない事にした。

「悠ちゃんったら、可愛いんだよ〜」

お守りの中にねえ……………」

「わーわー！ 何言ってるんですか、理子先輩！」

「えー、そう言う悠ちゃんこそ、カミングアウトは早い方がいいよ？」

「そ、それは関係ないじゃないですかっ！」

そんな話を聞きながら、「あ、理子にやっぱりバレてたのか。」なんて考えながら、レインは苦笑する。

「何笑ってるんですか！」

「え！？ いや、これは……………」

「レイン先輩、帰って来なかつたら徒友契約切りますからね！」

「……………それはやだな。」

りよーかい、絶対帰ってくる。

そうだな……………このお守りに誓って」

「じゃあ、がんばって下さいね」

そう言い、理子と悠もレインのいる場所を後にした。

第74弾 突入準備（後書き）

静「変なところで区切って済まない。まあ、それはともかく……私達！」

みんな「再・登・場！」

綾「いやあ長かった……」

悠「でも、レイン先輩はすぐに出ますからね……」

ミ「私達は参加出来ないのかなあ？」

静「無理だ、戦闘能力が低すぎる」

第75弾 送り出し

第75弾 送り出し

「レイン君、怪我は大丈夫なの？」

綾瀬が話しかけてくるのを、レインは苦笑しながら答える。

「この程度、なんでもありませんよ」

実際にはかなり深い傷を負っていたのだが、黒い雷の影響か、傷が治るのが早くなっていた。

「レイレイ、脱げ脱げ、私達が手当てしてやんよ!!」

「えーと……まあ、お言葉に甘えようかな」

ミチルの目が微妙に血走っているのに戦慄しながらも、なんとかそれを飲み下し大人しく手当てを受ける。

「ところで綾瀬先輩、ミチル。作戦中なのでは？」

「問題無いわ。私達を誰だと思ってるの？」

「そーだよそーだよソースだよ!」

「……意味分からないよ、ミチル」

そんなミチルのボケ(?)に辟易しつつ、綾瀬は先ほどのレインの問いに答える。

「現在、ハイパーコンピューターを走らせてるわ。

悠君は既に船の種類、レキさんには風向きとか海面の状況とかを教えて貰ってるから、後は居場所の特定だけ。

それも、理子ちゃんの発信器と白雪さんの占いで大体の位置は掴めるから、すぐ終わる。

それが終われば、船の進行方向・速度・距離全て把握できるわ」

「流石ですね。」

つと、ミチル、ありがとう」

ミチルが包帯を巻き終えたのを見て、レインは防弾制服を羽織る。それを見て頷いた二人に片手を挙げ、レインは立ち上がった。

「レインさん、白雪さんからこれを預かりました」

歩いて行くと、レキがいつものように平坦な声でそう言い、愛銃・FNブローニング・ハイパワー、ブロウを渡してくれた。中にはきちんと銃弾が込められており、少し磨かれている。白雪はキンジにつきっきりだったため、レキが預かったようだ。

「それと、替えのダガーです」

続けて、ダガーを十本程渡される。

それも全て、綺麗に磨かれていた。

「ありがとう、レキ。」

ブロウの整備はお前がしてくれたのかな？」

「ええ。不服でしたか」

「いや、自分でやるより随分出来がいいな、と思ってね」

「……ありがとうございます」

そう言つと、レキは顔を少し俯かせた。

「そうだ、レキ。」

突入方法とか聞いてないか？」

「いえ、それは後に説明されるそうです」

「そうか……じゃ、ありがとうね」

レインはレキにお礼お言つと、彼女はコクリ、と頷き、皆のところに戻って行った。

「おい、レイン」

「ん？ 静奈、どうしたんだ？」

またもレインが声を掛けられ、振り返る。

そこにいたのは、どこか浮かない表情の静奈だった。

「お前……何かあったのか？」

「何がさ？」

「なんだか、いつもと何かが違う気がするんだ……」
彼女のセリフに、僅かに肩が上がった。

それを自覚しながらも、レインは誤魔化そうと笑みを浮かべる。

「いや、少し昔の知り合いにあっただけだよ……」

大丈夫、行ける」

レインのその表情から、無理をしている事がよく分かった。

しかし静奈は、敢えて何も言わない。

彼だって、色々なものを背負っている。

戦わなくては、ならないのだろう。

だから静奈は、レインを笑って送り出す。

「……やれやれ、早めに帰ってくるんだぞ？」

帰って来なかつたら、ひどい目にあわせるからな」

「ははっ、そりゃ勘弁かな。」

まあ、精々死なないよう頑張るよ」

多少ユーモアが含まれる会話で落ち着いたのだろう、レインは軽く

伸びをした。

その後、キンジが起きたのは朝の7時。

それを見計らい……車輜科へ向かい、ジャンヌから説明がなされる。

「まずは砂礫の魔女、パトラの呪いについて説明しよう。」

理子は今、右目に眼疾を患っている。スカラベに呪いを掛けられたのだ。

私のこの足も同様だった」

「ジャンヌ、そのパトラって奴は」

「ああ、名前の通り、クレオパトラの子孫だ」

キンジは軽いため息をついている。

大方、ホームズ、リュパン、ジャンヌにドラキュラと来てクレオパ

トラ、さすがに辟易したのだろう。

「パトラは元はイ・ウーのNo.2だったが、素行が悪くて退学になったんだ」

「パトラは主戦派で、イ・ウーの次期リーダーは自分だ、そしたらエジプトを支配して、いずれは世界を征服してやるー、って言うてたら、ね」

キンジの驚きは、レインが思ったより少ない。

恐らくは師に聞いていたのだろう、と一人納得し、説明を受け続ける。

「行けるのは二人です。」

相手が超能力者である事を考慮して、レインさんが白雪さんが適任ですが……実力で考え、レインさんです」

「待ちくたびれたよ、キンジ」

「済まない、レイン。」

でも、なんで待っててくれたんだ？」

キンジの問いに、レインは苦笑しながら答える。

「キンジ、お前が助けなきゃ意味ないでしょ？」

心配しなくても、俺がついてる。ソッコーで助けられるぞ」

アリアもそれがいいだろうしね、とは言わず、レインは軽くウィンクして、完全に回復した身体を馴らし始めた。

「キンジ！」

海水の匂いがする車輛科のドックで、何かの乗り物に乗り込んでいた武藤が顔を上げた。

「この乗り物は『オルクス』。私が武偵高に侵入した時に使ったものだ……武藤、何ノットまで出せる？」

「まあ、170ノットってとこだな」

「素晴らしい。一晩までそこまでできるなんて、お前は天才だ、武藤」

まあな、と武藤が照れたように頭を掻く。

そして、キンジの方をちら、と見た武藤に、キンジは質問する。

「聞いたのか、武藤。」

俺たちの……」

「馬鹿いえ。そんな野暮な真似はしねえよ。」

お前はホント、鈍感な奴だよな。」

俺たちが何も知らないとしても思ったか。」

目を見りゃ分かるさ。」

ここ数ヶ月のお前が、危ねえ橋を渡ってたって事くらいよ。」

武藤が作業を続け、バトンタッチするように、武藤の手伝いらしい

不知火が代わりに話す。

「みんな薄々感づいてたよ。武偵だもん。」

武偵憲章4条 武偵は自立せよ。要請なき手出しは無用の事。」

だから、心配してたんだ。手伝える時が来て、嬉しいよ。」

いつものように爽やかな笑みを浮かべる不知火に、背中をポン、と

叩く武藤。

何も聞かず手を貸してくれる友人に、キンジは本当に感謝していた。

「……ありがとう。」

それだけ言い、キンジとレインはオルクスに乗り込んだ。

「じゃあ、行くぜ……!!」

武藤がオルクスを起動させる。

外の様子はほとんど見えていないレイン達は、しかし何の不安も無

く乗っていた。しかし……声は、聞こえる。

「静奈、ジャンヌ！」

頼むぜ！」

「ああ！」

「任せろ！」

「え……?」

静奈、ジャンヌは超能力者だ。

それも、水、氷を操る。

「（潜水艦だから、海に潜るはずだ。

頼む、そうだと行ってくれ!）」

「行くぞ!」

静奈の手から、青い光が発光し　オルクスの浮いていた海水が、持ち上がった。

「行っけええええええええええ!」

「ええええええええええええ!?!」

ヒュン!

海水ごと放り投げられたレインとキンジは、もっただ叫ぶ事しか出来ない。

「ジャンヌ!」

「分かっている!」

その勢いのまま、オルクスは、なんと氷の張った水面を、摩擦の無いまま滑り続ける。

風向きはレキに聞いて対策万全。

「お前らああああ!」

覚えてろよおおお!」

聞こえるはずも無いが、レインは叫びながら近くの機材にしがみつく。

やがて、ザブン。とオルクスが海に沈むと、オルクスは安定してスピードを上げ始めた。

第75弾 送り出し（後書き）

静「いやあ、飛んだ飛んだ！ あっはっはっは！」

ミ「機材はぶっ壊れないのかな？」

綾「平気よ、ラストはギャグパートだったもの。それで全部許されるわ」

悠「またメタで悪どい事を……」

第76弾 砂礫の魔女・パトラ

第76弾 砂礫の魔女・パトラ

武藤が手を加えたららしいオルクスは、操縦がほとんど必用のないありがたい代物だった。

キンジ、レインはあまり操縦が得意分野ではないので、尚更。

操縦、と呼ぶには些か簡単すぎる操作をしているのは、キンジが起きる間に説明を受けたレインだった。

「キンジ。パトラってどんな奴だった？」

「ああ、やけに美人だったな。」

あと、派手な格好に、『妾がくゝなのぢや』って口調だった」

「滅茶苦茶個性的だね……さすが、イ・ウーの元No.2」

正直レインは偉そうな人間は好きではない。

だが、好きだろうと嫌いだろうと、どちらにせよ戦わなくてはならないのだから、むしろ嫌いな方が都合だった。

それが、イ・ウーのNo.2程なら尚更だ。

「まあ、あいつは推定G25の実力者だし。」

その上、ピラミッド型の建造物の近くでは無限の魔力を司る、らしいね。

俺との相性もあちらが有利だ。雷は砂に弱いから」

パトラ、砂礫の魔女は砂を使う能力者だ。

レインの雷はもちろん、白雪の焰との相性も彼女に分がある。

相性が良さそうなジャンヌは怪我をしているし、静奈では相性が良くて力量に差がありすぎる。

それ故のレインの抜擢だった。

「へえ……どんな感じ？」

「例えるなら、白雪やジャンヌ、静奈が普通の鉄砲で、パトラが弾

の尽きない戦車」

「レインは？」

キンジのただ純粋な興味からくる質問に、レインは至極真つ当な表情で答える。

「俺は、無尽蔵の核爆弾を搭載してるけど使えない戦闘機、つてとこかな」

そんな話を真面目にするものだから、キンジの頬が緩むのも仕方のない事かも知れない。

「自信があつて結構な事だ」

キンジにそう言われ、レインはむっ、と頬を膨らませると、オルクスのスピードを上げた。

10時間後、アリアの呪弾のタイムリミットまで、後一時間。

搭載されていたセンサーに引つ掛かったのは、巨大な船だ。

クジラたちが潮を巻き上げ、それにより発生した霧の先には……

「おいおい、これは……」

「あ、アンベリール号！？」

そう、去年12月、浦賀沖で『武偵殺し』による襲撃を受け、沈没したはずの豪華客船、アンベリール号だった。

金一が世間的に死ぬ事になったこの船に、キンジは開いた口が塞がらない、といった様子だ。

状態はあまり良好とは言えない。

サルベージされたのを最低限修復し、ほぼ海に浮かべているような状態だ。

だが、レインが驚いたのはそこではない。

「こりゃ、あまりにも外観が合わないんじゃない……？」

アンベリール号の甲板の上には、金色に輝く、豪華なピラミッドが爛々と聳え立っていたのだ。

ピラミッド、それはパトラの無限魔力を発生させるための立方魔法

陣。

それがここにある、という事は

「当たり前みたいだよ、キンジ……！」

突入するよ！」

「おう！」

レインは手近な場所でオルクスを降り、キンジを抱えると雷歩で空を蹴り、ものの五秒で甲板へと降り立った。

「凄いな……これは……かなりアレンジされてるけど、古代エジプトのアブシンベル神殿かな？」

全部魔力で造ってる」

「俺にはさっぱり分からん。

それよりレイン、壊せないか？

そうすればパトラの超能力は弱まるんだろ？」

キンジがそう提案するのを（彼も段々、こついつた戦いに慣れてきたようだ）、レインは首を横に振った。

「無理だね。

魔力による呪避けが発動してる。

こいつは本来、何カ月、下手したら何年も掛かる代物だ。

いくら俺でも、ある程度下準備がないと、超能力で傷はつかないだろうね。

物理攻撃なら分かんないけど、頑丈すぎる」

何やら専門用語が出てきてキンジは若干たじろいだが、とりあえずレインの雷ではこのピラミッドは壊せないらしい事、

それは理解出来たので、余計な事をこれ以上口へは出さず、大人しくピラミッドの入口へ向かう事にした。

超能力の感覚を頼りに、ピラミッドを上へ上へ登っていく……なんて事はしなかった。

誘導するように、壁に灯火が点いていたからだ。

畏も無く（少し道がでこぼこしていてキンジは転びそうになっていたが）、ピラミッドの一室、重厚な扉の前にたどり着いた。

「キンジ、奥にはパトラがいる。」

お前はソツコーでアリアを救出しろ。

俺の心配は無用だ」

「あ、ああ」

ヒエログリフで『王の間』と書かれたその扉は、触れてもいないのにぎぎぎ……と音を立てて開いた。

『王の間』の内部が明らかになり、その光量に目を細める。

そこは、何もかも、床も、天井も、柱も、奥の巨大なフィニクス像も。

全てが眩い黄金で形造られており、煌々と輝いている。

更に、フィニクス像の真下には、アリアを収めたであろう、黄金枢があつた。

それを眺めていると……奥から、金の装飾を施した派手な格好をした、おかつぱ頭の美人が歩いてきた。

言わずとも、その強者の気配から判断できる。

この女が、パトラだ。

「よく来たな、極東の愚民共よ……だが、お前たちは殺す」

「いきなりだね、女王陛下？」

何か気に障る事でもしたかな？」

いきなりのパトラの殺人予告に、しかしレインはたじろぐ事なく柔和な笑みを浮かべ、問いかける。呼び方に若干の皮肉が混じっている気もするが。

「ふん、男なぞ皆キライぢやからぢや。」

男が近くにいると、変な気分になる。

ぢやから、妾が女王になった暁には、側近は美女で固める。

それを考えて、後で使う予定の女たちは殺さず、呪って封じておいたのぢや。

武偵高とやらには見目麗しい女子が多い。そやつらも奪っていく。

しかし お前らは男ぢや。情けはかけん。
今、ここで、殺す」

素晴らしい、キンジの方を指差したパトラに レインは、一瞬で斬りかかる。
ズバツ！

軽快な太刀の音と共に、パトラの上半身と下半身が切り離された。

「れ、レイン！？ 何もそこまで」

「やれやれ……挨拶も無しに斬りかかるとは、無礼極まりないのう」
「！？」

顔を蒼白にして叫んだキンジは、言葉を失う。

たった今、レインに殺されたはずの、パトラの声が聞こえてきたのだ。

「……偽者に挨拶させて、自分は顔を出さないのは無礼とは言わないのかい？ 女王陛下」

呼び掛けられた本物のパトラは、ズザザ……

床に散りばめられた、砂の中から姿を現した。

「はて、愚民に王である妾が礼儀を教える義務があるのかのう？」

その手には イロカネアヤメが、握られていた。

「星伽に没収されたのをパクったのか……それは白雪に返してあげないとね」

「渡す気はないぞ？」

「僭越ですが、お借りしますよ。無理矢理にでも」

キンジの存在を無視し パトラの意識が、レインに流れ始めた。

度重なる挑発とも取れる行動に、我を失い始めているのだろう。

レインは片手を後ろに向け、キンジにサインを送る。

『隙を 見て アリア 救出』

それだけ手早く伝えると、レインはパトラに向かって駆けた。

「愚かな！」

パトラが手掌をレインに向けると、部屋を飾っていた黄金は、その全てを砂金へと姿を変える。

「へえ……さつすが陛下」

「侮るなよ！ 小僧が！」

パトラの叫びと共に、砂金が夥しい数のナイフに形成され、一気にレインに襲いかかった。

刹那。

ギイイイイイン！

「パトラ。お前は触れてはならないものに触れた。

そいつは、俺に本気を出させるって事だ」

レインから放出された雷は、全ての砂を射抜き、霧散させた。

「なっ　！？」

「武偵高には、俺の大切な人たちがいる。

その娘らに手を出そうって事なら……黙っては、居られないな」

レインは、紫に光る水月の切っ先を、パトラに向けた。

「来なよ。

この俺に、高が相性程度で勝てるかどうか、分からせてあげるから」
「ふん……面白い！」

見せて貰おうかの、『紫電の雷神』。

貴様が、無限魔力の前についてまでいきがっていられるかをの！」

パトラが叫ぶのと、同時。

レインの水月の一閃が、パトラの砂金の盾とぶつかった。

第76弾 砂礫の魔女・パトラ（後書き）

ミ「え、私達拐われちゃうの？」

悠「大丈夫ですよ。レイン先輩が守ってくれます」

ミ「うん……あれ？ 悠ちゃんは男の子だから平気じゃない？」

悠「ギクッ！」

綾「違うわミチル、彼は男の子じゃなくて、男の娘よ」

ミ「なる程」

悠「助かった……」

第77弾 ヒーローは遅れてやってくる

第77弾 ヒーローは遅れてやってくる

「はあっ！」

レインは、ダガーを両手に構えてパトラに投擲する。

雷による高速震動により切れ味をましたそれは、パトラの黄金の盾を二枚貫いたところで、三枚目に弾かれた。

「ほほっ、やりおるの。」

「ちやが、甘いわ」

パトラはそう言うと、貫かれた盾を小型の鳥に形成、レインに四方から向かわせる。

「こんなもので！」

レインは水月を抜刀、その場で横に一回転するようにして、全ての鳥を切り裂く。

パトラが再び鳥を形成するより先に、レインは水月を持ちかえ、ブロウを抜き、籠めてあつた銀弾を発砲した。

しかし、その銃弾は砂金の盾にいとも簡単に防がれた。

「今更そんなものが効くとも思ってたか？」

「まあ、ちよつとはね」

レインはブロウから銀弾の入った弾倉を抜き、高速で新たな通常弾の弾倉を入れる。

そして、ブロウから抜け落ちた銀弾の弾倉を、油断しているパトラへと蹴り飛ばした。

「！」

大した攻撃ではないはずだが、驚いた反射でパトラは黄金の盾を目の前に移動させた。

それ故、パトラの視界から、一瞬レインの姿が消える。

「（それで充分だ！）」

パトラが慌てて盾を退かした時には、そこにレインの姿は無い。パトラは、後ろから肌寒いものを感じ、咄嗟に身を屈める。

「ちっ！」

そのパトラのいた空間を、レインの水月が通過する。

悪態をついたレインは、このまま肉弾戦に持ち込むべく、パトラに肉薄。

水月を振りかざすが、パトラは奪ったイロカネアヤメで難なく受け止めた。

「なっ！？ 近接もできるの！？」

「ほほ。これくらいできずして、イ・ウーのNo.2になれると思うてか」

だが、やはりそこまで慣れてはいないようで、砂金のサポートが随所に散りばめられていたが、それでも充分過ぎる。

しかも、得物は切れ味抜群のイロカネアヤメ。

正直キツイ、とレインは水月を一旦鞘へ納め、ダガーを二本抜いた。

「ダブラか……？」

お前は強襲科は苦手だと聞いたがのう

「酷いなあ、誰情報？」

「夜雲 晴夜ぢゃ。」

あやつにはカジノでお前の足止めを依頼してあったのぢゃが……妾は、あやつがあまり好きではのうてな

「奇遇だね……俺もだよ！」

レインはダガーに雷を走らせ、尚も斬りかかる。

それをパトラはイロカネアヤメで防ぐ。

思った通り、聖剣デュランダルと同じくこれくらいの切れ味があれば、一回の接触で刀を折られる事はないようだ。

そのダガーをパトラに至近距離から投げつけると、彼女は身を翻して避けイロカネアヤメで斬りかかる。

レインは振り下ろされるそれを抜刀した水月で斜めにいなし、隙が

出来た左脇腹を狙い横薙ぎに水月を振るう。

しかし、その一撃はパトラの盾に防がれ、彼女には届かない。

「ああ、もう面倒ぢゃ！」

パトラは小競り合いに苛立ったのか、レインの水月とイロカネアヤメを一瞬交錯させ、後ろへと飛び退いた。

「食らえ！」

パトラの足元から砂金が立ち上り……巨大な黄金の大蛇となる。

それは身体をうねらせ、レインに向かってきた。

その巨躯、速さは人間が刀一本で受け止める事のできる規模ではない。

レインは雷歩で上昇し、床に頭をぶつけた大蛇にブロウの銃弾を浴びせる。

ビスビスビス！

という音と弾ける砂金で、大蛇の体内に銃弾が入った事を確認する。

「雷線式式、『綾取・雷塔』！」

レインの術が発動し、大蛇は身体の中から炸裂する。

「この程度で俺を捉えられるとでも？」

「ちっ……！」

「まだまだぢゃあ！」

今度は様々な動物に変化した砂金を、レインは全て破壊してパトラに肉薄した。

「（埒があかない……なら、少し仕掛けてみよう）」

レインはブロウを抜き、雷砲を放った。

その閃光でパトラの視界を奪い、尚且つ盾で自分の姿を視界から消させる。

その間に、レインは今度はパトラの真上に上昇。

先刻は後ろにまわって失敗したからだ。

パトラは盾を退かすと、さっきのように後ろを向きはせず、レイン
のいる上空を見据える。

「そこか！」

パトラは軽く舌打ちし、砂金の盾を展開させる。

「かかった！」

「何！？」

パトラはレインのセリフを聞き、気づいた。

いつの間にか、彼女のいる辺りの床に、サークル状にダガーが突き刺さっている！

そのダガーが、バチ、バチと。

弾けるような音がした、瞬間。

「雷線式……『綾取・雷円』」

レインの小さな唇から、その技の名が紡がれ……

バリッ！

パトラに向けて、円状の雷が走る。

「ぐっ！？」

パトラは、スタンガンを食べらったように海老逸りになり、片膝を床についた。

「キンジ、頼む」

「え……？ あ、ああ！」

その技のあまりの威力……いや、紫電の美しさにか、呆然としていたキンジに声を掛け、レインは改めてパトラと向き合う。

彼女はまだ麻痺しているであろう身体を、必死で動かそうとする。

「無茶は禁物だよ。」

電圧強めにしといたから、強力なスタンガンより強い痺れがお前を襲ってるはずだ。

とてもじゃないけど、戦闘ができる状態じゃない」

「……ふ、ふふふ」

「……？」

レインは、眉をひそめる。

自分の忠告に、パトラは、笑っている？

「……っ、キンジ！」

そこで、気づいた。

今、動けないパトラが自分に勝利する方法、それは

「ぐっ……ああ！」

「キンジ！」

人質、だ。

キンジは、『王の間』の奥、アリアの黄金枢の真上にいた巨大なスフィンクスに握られていた。

「さて……形勢逆転、ぢゃの？ 紫電の雷神？」

勝ち誇った笑みを見せるパトラに、レインは歯を噛み締める。油断した。

パトラが、無防備に黄金枢を晒している事に、早く違和感を感じるべきだった……！

「武器を捨てる、紫電の雷神。

さもなくば……分かるぢゃろ？」

スフィンクスは、ご丁寧に握ったキンジを持ち上げて見せる。

こうなれば、レインに抵抗する術は無い。

レインは、まず水月を下ろそうと鞘を腰から外した。

だが……その手が、止まった。

「馬鹿、レイン！」

そんな事をしてないで、早くパトラを倒せ！

従っても、どうせ二人共殺される！」

「キンジ……」

「うるさいぞ、トオヤマ キンジ」

パトラが喚くキンジを睨むと……スフィンクスが、キンジを握る力を強める。

「ぐっ、ああ……！」

「キンジ！」

「俺の心配なんてしなくていい……！」

それより、レイン。

お前は、早くパトラを倒してアリアを助ける。

それが今回の任務のはずだっ……！」

「だ、だけど……」

「いいから早くしろ！」

こうしている間にも、アリアのリミットは迫ってるんだぞ！」「
キンジの叫びに……レインは、答えられない。

確かに、今回の任務はアリアの救出だ。

だが、レインは……

「……ごめん、キンジ。

俺には……出来そうもない」

水月を、床に下ろした。

次いでブロウを、ダガーを。

「な……レイン！」

「ほほっ！ 美しい友情よのう！」

褒美じゃ。今すぐは殺さん。避けるなとも言わん。

精々 足掻け」

パトラが、そう言うと……辺りの砂金が盛り上がり、カジノ・ピラ
ミディオン台場で見たとようなアヌビスが、より屈強となって姿を現
す。

「こやつらの相手をしろ。

いい余興になるぢやろつて」

「……ッ！」

そのアヌビスの一体が、砂金で形成された金の刀を持ち、斬りかか
ってくる。

それを避けたレインは、アヌビスを足払いし、零距离で頭に雷弾を
当てて、そのアヌビスを消し去る。

「流石、ぢやの。

いい戦士ぢや。いくら男でも殺すのは惜しい……

お主は特別に、側近にしておいても良い」

人質を取られている、この状況だ。

キンジを傷つけないためにも、レインは色好い返事をするだろう

そうパトラは考えていた。

しかし、それはとんだ見当違いだったと言わざるを得ない。

「残念だけど、お断りだ」

「……なんぢやと？」

「聞こえなかつたかな？」

「断る、と言つたんだよ」

「……貴様、この男がどうなつても……！」

そこまで言つて、パトラは 気づいた。

ブオオオオン……という、何かがこのピラミッドの外壁を登る音。

そして、その音が止み

ドゴオオオオオオン！

ピラミッドの壁、その一部が破壊される。

そうして出来た穴から、一筋の影が弾丸のように飛び出し、スフィ

ンクスの腕をいとも簡単に切り裂く。

その影とは

「なっ……！」

「困るわ、パトラ。」

私の弟子を、そう簡単に奪おうとしちゃ

「に……兄さん！」

そう、臙脂色にたなびく武偵高の防弾制服に身を包んだ、遠山 金

一、カナだった。

「さて……反撃と行きましようか」

第77弾 ヒーローは遅れてやってくる(後書き)

ミ「カナさんカツケええええ！」

綾「レイン君の師匠……挨拶しとこうかしら」

静「『弟子をそう簡単に奪わせない』とか言っていましたしね……」
悠「それは多分意味違うと思います」

第78弾 神技発動

第78弾 神技発動

パトラに宣戦布告し、キンジに何事かを言っているカナに、レインは急いで駆け寄った。

何故かキンジが頬を赤らめているのに疑問を感じつつも、レインはカナの方に向きなます。

「せんせい師匠！」

すみません、手間を掛けさせました」

「気にしないで、レイン。」

それより、アリアのリミットが迫ってるわ。

あなたはキンジの道を作りなさい。時間がないから一撃で、よ。

アヌビスは私がやる」

「了解しました」

そう言うと、レインはアヌビスから背を向け、スフィンクスと向き合う。

それは丁度、アヌビスと向き合ったカナと、背中合わせで戦うように……酷く、懐かしさを覚えた。

「さて……キンジを傷つけた罪、償って貰うよ、デカブツ」

レインはちゃき、と水月を蹴りあげ、片手でキャッチしスフィンクスへと切っ先を向けた。

当然、返事が帰ってくるはずも無いので、レインは返事を待たずに駆け出す。

「（一撃で決める、か……どうせあいつは生物じゃない……なら、あれを使うか）」

スフィンクスはあまり機動力が高くないようだ。

また、大した攻撃もしてこない。

恐らく、規模の大きすぎる攻撃はピラミッドを破壊しかねないからだろう。

それが、裏目に出たようだ。

スフィックスの攻撃を地面を蹴って避けたレインは飛び上がり、スフィックスの真正面で水月の鞘に手をあてる。

「『らいきり雷斬』！」

水月が抜刀され その刀身から、雷の刃が伸びる。

何メートルからもなるそれは、いとも容易くスフィックスを両断した。

雷斬は、そのなの通り『雷』を似非鬼道術で刃に形成し、『斬』る技だ。

しかし、威力が高過ぎて対人戦闘では扱えなかったため、レインはこの頑丈な無生物であるスフィックスを破壊するのに絶好の技、と判断した。

思惑通り両断されたスフィックスは、断面から砂金を排出し、すぐにその全体を砂金へと変えた。

「キンジ、今だ！」

俺は師匠と一緒にパトラを抑える！」

「分かった！」

そのままアリアの事はキンジに任せ、レインはパトラの下へ向かった。

ビスビスビスビスビス！

六発分のマズルフラッシュが、黄金に反射して部屋を覆う。

『不可視の銃弾』インビジブル。

その六発同時発射、『ファイブシックス6連射』に、六体のアヌビスは砂金へと帰る。すつつ……

鮮やかに着地したカナの手には、燻し銀のコルト・ピースメーカーが握られていた。

「トオヤマ キンイチ……！」
「い、いやぢゃ！ 妾はお前と戦いとうない！」

「パトラ。あなたは獣のように獰猛に見えて、実はとても頭のいい子。」

幾つもの物を思念動で動かせる。

でも、その集中力には限界がある」

言いながら、カナは。

ばらっ、と空中に六発の銃弾をばらまき ジャキン！

ピースメーカーを、空中の銃弾にぶつけるように払う。

すると……ピースメーカーの回転弾倉には 銃弾が六発、きちんと収まっていた。

空中リロード。

ヒステリアモードの反射神経、身体能力があつてこそこの技も、常時ヒステリアモードであるカナの状態では容易い事なのだ。

「見せてみなさい……あなたの、本気を」

再び、マズルフラッシュが瞬き、カナの不可視の銃弾6連射は、パトラの盾六枚に防がれた。

「お、お、お前なんか大ツキライぢゃー！」

パトラの周りには……黄金の鷹が、20頭程。

それらがカナの周りを、交錯するように飛び交い……一匹が、カナの髪紐を切り裂いた。

カナは、その細い髪を靡かせると……ガチャガチャガチャッ！

髪の中から現れた、濃紺の金属片を組み立てていく。

それは、一本の棍のようになり、更に大きな曲刃が、それに連結される。

「よくやったわ、パトラ。」

私にこれを出させたのは、あなたが初めてよ。

『サソリの尾（スコルピオ）……砂漠によく似合うでしょ？』

ジャキン！

と構えたそれは、死神を連想させるような、禍々しい大鎌。

その気に気圧されたのか、パトラは

「わ、妾が……この妾が、お前ごときに！」

様々な動物を砂金で形成し、四方八方からカナに向かわせる。
だが

「……無駄だよ、パトラ。」

カナは、その程度じゃかすり傷一つつけられやしない」

レインの呟きに反応するように、カナは大鎌を手首、指、腕……と、回転させていく。

その速度は徐々に早まり……やがて、カナの周りにいるだけで、砂金の動物は弾け飛ぶ。

バンツ！

大鎌の先端から、発砲したような音が上がり始める。

先端の速度が、音速を超えているのだ。

その超音速の刃に触れた空気中の水分が凝結。

パツ、パパツ！

と円錐水蒸気が発生する。

それは、まるで桜の花びらのような形をし、カナの周囲を乱舞する。黄金の動物たちは、最早カナに触れるどころか、近づく事さえ叶わない。

あまりの衝撃波に、ただただ、弾け飛ぶ。

「この桜吹雪、散らせるものなら散らせてみなさい？」

強い。

それしか、言葉が出ない。

圧倒的、とはこういう事を言うのだろう。

カナは、その最早無敵の状態で、一步、また一步とパトラに近づいていく。

まさに、攻防一体。

「（やっぱり凄いな……俺は必用なかったかも）」

と、カナから視線をキンジに移したレインは……顔をしかめた。

「まずい！ キンジ！」

キンジは、柩の確保に成功している。

そしてキンジは、柩を開けて……アリアの顔を、確認しているようだ。

「キンジ！　そこから離れる！」

レインが叫ぶが……遅い。

柩は、砂金に沈んで傾き、キンジの足も砂金に取られていた。

所謂、流砂という現象だ。

あそこは、誰かが近づくとああなるように仕掛けてあった。

もう膝までが砂金に埋もれているキンジは、それでも諦めず柩に登る。

だが、アリアを助け出そうにも、蓋が開ききっていないため不可能だ。

「キンジ！　アリア！　くそおおお！」

レインが最大出力の雷歩で向かうが、間に合わない。

どころか、事態は更に深刻になっていく。

ガタン！

キンジの体重からか、流砂が激しくなったのかは分からないが……

柩が急激に斜めになり、大きくずれた蓋で、キンジが足を踏み外した。

それがなんの因果か　いや、運命と言った方がいいかもしれない

柩の中に落ちてしまう。

「き、キンジ!?」

しかも、今度こそキンジの体重で、柩が逆側に傾いて、蓋が閉まる。

「くそ、くそ、くそおおおおおお！」

レインが、黄金柩に手を伸ばす。

今にも流砂に吞まれそうな、黄金柩は……

レインの手が届く前に、どぶん。

流砂の中に、消えた。

「……………つ、ちくしょおおおおおお！」

ガン！

レインは、もう流砂の痕もなく……ただ、金色に光る床に、拳を叩きつけた。

第78弾 神技発動（後書き）

静「どうなってしまった、二人は？」

綾「案外、二人の愛の力で黄金枢が吹っ飛ぶのかも！」

悠「さすがにそれは……」

ミ「まさかねえ？」

第79弾 覚醒

第79弾 覚醒

「キンジ、アリアああああ！」

レインの叫びは、虚しく『王の間』に響き渡る。

目の前で、親友を、仲間を、救えなかった。

罪悪感、無力感、虚無感 様々な感情が入り雑じり、レインの心に穴を穿つ。

どうして、そればかりが疑問で、それはすぐに怒りに変わって。

誰の所為だ。

誰の所為で、キンジと、アリアが。

レインの視線に パトラが、映った。

「オマエか」

ドウツッ！

「ぐうつ！？」

「レイン！？」

レインの短い、しかしそれ故に憎悪が嫌と言う程凝縮された、その言葉が耳に届いた次の瞬間には、レインの身体は、黒い雷に包まれていた。

その雷は、この世のものとは思えない、言葉では形容し難い禍々しい光を放ち、黒く輝いている。

「これは一体……！？」

身体が震える……妾が、恐怖している……！？」

レインの、今や黒く濁った瞳は、真っ直ぐにパトラを見据えていた。やがて、その手から……黒い雷の、刃が伸びる。

「！」

「避けなさいパトラ！」

しかし、パトラは黄金全てで盾を作り、防御の体勢を作っていた。避けられない、そう悟ったカナは、パァン！

「ぐっ！？」

パトラの黄金の衣装、ほぼ面積が無いと言っていいそこに、正確に『不可視の銃弾』を浴びせる。

弾は防がれた（カナに当てるつもりははなからないが）が、衝撃までは殺しきれず、パトラは右に吹っ飛ばされた。

刹那。

バリツ……！

一瞬の、雷の弾ける音。

パトラの、最大出力の黄金の盾、その全てが粉々に切り刻まれていた。

「まさか、ここまで……！」

苦虫を噛み潰したような表情をしたカナは、サソリの尾を構える。

が、この程度で何とかなる相手ではない事は、火を見るより明らかだった。

どうすればいい、どうすればレインを止められる。

そればかりを考えていたカナは　気づいた。

この感触。

間違い無い。

覚醒が、始まっている。

キンジ……！

確信したカナは、パトラの下へ向かったレインの前に立ち塞がり、行く手を阻んだ。

同時に、自分へと注意を向けさせるために。

「レイン、目を覚ましなさい。

キンジとアリアは、まだ生きているわ」

キンジと、アリア、が。

生きている。

ビクッ！

それが聞こえたらしいレインに、変化が訪れた。
身体が一瞬、激しく浮き上がり……黒い雷の色が褪せ、普段の紫に
戻っていった。

「アリア、キンジ……ッ！」

「レイン！」

カナが、レインが戻ってきた喜びからか、歓喜の声を上げる。しか
し、それも一瞬だった。

ドゴオオオオオオン！

「これは……爆発！？

師匠！ 一体何が起こっているんですか！？」

「考えられるとすれば……パトラね」

カナの説明に寄れば、パトラはカナ、引いてはレインに勝てないと
悟り、アリアを回収した後、ここを脱出するつもりなのだろう、と
見れば、確かに既にパトラの姿は無い。

「キンジとアリアは？」

「恐らく下の階ね。急ぎましょう」

カナに急かされ、レインは所々に綻びができた床、その空いた
穴から一気に下の階に降りる。

すると ダア ン！

銃声。

「ッ！」

この発砲音は、明らかにガバメントやベレッタの音ではない。

考えられるとすれば、これはパトラの、狙撃銃。

レインは音のした方へ駆け出す。

そこには、予想通り、狙撃銃WA2000を持ち、勝ち誇った笑み
を浮かべる、パトラ。

その少し下に、アリアが泣きながらキンジの顔を覗き込んでいる。

キンジの、顔を。

撃たれたのは キンジ。

恐る恐る、顔を確認する。

キンジの顔は……血まみれだった。

だが、先ほどのような怒りはレインに込み上がらない。

悲しすぎて怒る気力も無いのか？

そういう訳でもない。

何故、レインは平然としていられるか、それは……気づいたからだ。

「やれやれ……キンジ、お前も随分化け物じみてきたね」

「お前には……うつぶ！ 及ばないさ」

何事もなかったかのように、起き上がったキンジは……ぺつ。

口の中から、銃弾を吐き出した。

どうやら……こういう事らしい。

キンジは、ヒステリアモードの反射神経で、パトラの銃弾を噛んで止めたようだ。

銃弾をただ止められる訳もないので、恐らく虫歯治療の銀歯やら硬質セラミックなんかを着けた歯で。

まあ、それでも弾丸の勢いを止めるには至らず、恐らく頭を打った衝撃だかで鼻血を盛大に撒き散らし、なんとも紛らわしい事になっていた、と……

キンジが起き上がったカラクリに気づいたレインは、キンジ、の奥。アリアの姿を見て、思わず後ずさった。

「……………」

キンジは首を傾げる。

どうやらパトラも似たような反応をしているらしい。

だが、それも仕方のない事だ。

何故なら、彼女は……圧倒的過ぎる。

アリアは、普段の彼女とは全く違う雰囲気醸し、その瞳は瞳孔が開いたようになっていて、

赤い紅い、緋色の瞳。

その色が全身に行き渡ったように、彼女の身体からは、微弱な緋色の光が放たれている。パトラの側面のガラスを割り、入ってきた力ナも、その目を見開いてアリアの方を向く。

違う。

あれは、アリアではない。

目の前にいる少女は、アリアであるが、アリアではない。

そんな訳の分からない感覚に襲われたレインは、ぎよっとする。

……すつ、と。

彼女は、右腕を上げ、人差し指を、パトラに向けた。

まずい。

あれは、まずい！

パトラは、先刻のレインの時のように震えるが……今度は力が働かないらしい。

尻餅について、パトラはただ恐怖で染まった表情をしているだけだ。対し、アリアの人差し指、その先端からは……小さな、光が。緋色の光が、徐徐に膨れ上がっていく。

まるで、小さな太陽のように。

「緋弾……！」

カナのそのセリフが、あの指先から放たれている光の名称を指している事が、なんとなくレインには分かった。

ぱあつ。

輝きを増していた『緋弾』が、彼女の指先から離れた。

瞬間。

「避けなさい！」

さっきの、レインの雷の時のように、カナはパトラに警告するが、間に合わない！

「くそおおおっ！」

咄嗟に、レインは　パトラと『緋弾』の、間に入り込んだ。

「なっ……！？」

「レインやめなさい！　死ぬわよ！」

カナの悲痛な叫びも、今のレインの耳には入らない。

たとえばパトラがどんなに悪いやつでも、これが自殺行為だとしても、「手を伸ばさずにはられない！」

つくづく自分は損な性格をしている、そう自虐気味に考えながら……レインは、全力で雷弾を放つ。

「くっつ！」

『緋弾』の圧倒的な力を、改めて思い知る。

G30を超える世界最強の超能力者、レインの全力でも弾き返せない。

どころか、押されている。

「くそっ、パトラ早く！」

レインに促され、パトラは戸惑いながらも何とか射程から離れる。

それを見て安心したようにため息をつくが、更に勢いが強まり、レインは真正面に向き直る。

「（思ったより、キツイ……もう、駄目かもしれない……）」

レインの力が、段々弱まっていく。

ああ、ここまでか。

なんの感慨も無く、そんな事を考え始め、目を閉じると……ドゲン。……？

鼓動が、早まった。

熱く、熱く、熱く。

鼓動が心地よい音を奏で、全身に力がみなぎる。

何かの間違いかと思った。だが。

「（……？ な、なんだ！？ 押し始めている……！？）」

自らの優勢を告げる感覚に、そっ、と目を開く。
黒。

視界一面に、黒が飛び込んできた。

これは 雷。

真っ黒な、禍々しいとも形容できる雷が、レインの身体を覆っていた。

第79弾 覚醒（後書き）

綾「緋色の弾丸に黒い雷の覚醒……どうなるのかしら？」

悠「どうでもいいですが、言い方カッコいいですね」

ミ「厨二入ってない？」

静「（私もそんなん考えてたんだが）」

第80弾 最強の襲来

第80弾 最強の襲来

「黒い、雷……!?」
知らない。

レインは、この雷を自分の意思で出したのではない。
黒い雷など、今までレインも一度もだした事は無かった。
これは一体、なんなのか。

レインはそれを考察しようとするが、そんな暇なんて無かった。
再び、『緋弾』に押され始めたからだ。

「なっ!? まだ上がるのか!？」
負けじとレインも黒い雷の出力を上げようとする。

「!?!」

だが、コントロールが効かない。

出力を上げる事は、出来ない事もない。

しかし、下手に出力を上げれば、間違い無く『緋弾』を吹き飛ばし、
確実にアリアを消し去るだろう。

「そんな事……させて、たまるかあっ!」

レインは無理矢理、雷の出力を少しずつ上げ始めた。

やがて、互いの力が拮抗し始める。

「(だけど……このままじゃジリ貧だ……!)」

レインは、繊細な雷のコントロールに全神経を集中させ、今にも潰
れそうな状態。

対するアリアは、汗一つかいておらず、余裕のある状態。

どちらが優勢かは明らかだった。

どうすれば……!」

「レイン! 逸らさない!」

逸らす！

だが、真正面からぶつけ合っている今、どうしたら逸らせる？
考える、考える、考える……！

………！
レインは雷のコントロールに集中しながらも、考えに考えた結果……
一つだけ。見つけた。

絶大威力の『緋弾』を、今の状態から逸らす方法……！
だが、下手を打てば、確実にレインは死ぬ。

「だからって、迷ってる暇なんて無い！」

レインは、黒い雷で放った雷弾を、自らの意思で限界まで弱め、消し去った。

「（真正面から撃つのが駄目なら……！）」

レインは、『緋弾』を弾くために、限界まで身を屈める。

そして水月に、黒い雷を纏わせた。

「（撃ち直せばいい！）」

水月は切れ味の無い、『無斬の刀』。

その紫の刀身には、特別な鉱石を使用しているのだ。

架空の物質と言われた、『オリハルコン』。

その鉱石の特徴は、圧倒的な硬度と……電気を蓄積しやすい点だ。

故に、どれだけ強い電流・電圧だろうが、黒い雷だろうが、耐えられる……！

『緋弾』は、既に目の前に迫っている。

レインは、水月を構え、振り抜いた。

「『雷閃』！」

レインは、雷を纏わせた水月で、一閃。

黒い雷神化で放つ最速の刃は、音を置き去りにして……文字通り、
雷の速さで、『緋弾』を弾く。

「うおおおおお！」

そのまま、高エネルギーの奔流を弾き飛ばそうと進み続ける。

「だあっ！」

そして、レインの刃は振り抜け、『緋弾』を弾き飛ばした。弾かれた『緋弾』はそのまま天井に飛んでいき……バシユツ！ 熱を発する訳でもなく、ただ、ピラミッドの壁を消滅させた。破壊、ではなく、消滅。

その威力の凄まじさは、壊れたピラミッドの天井から覗く星々が物語っており、同時にレインのした事のとんでもなさが分かる。

「ははっ……どう、だ……って、力入んないや」

レインは、ぺたん。

とその場に座り込んでしまう。

黒い雷の副作用か、その顔色はどこか優れない。

ぐうぐう。

「腹へったな……」

しかし、そんな一言でキンジもカナも、レインの心配は不要だと判断したのか、次にいつ『緋弾』が来てもいいように、カナはアリアの方を向いたまま、動かない。

しかし、当のアリアは、フラッ、と糸が切れたように、倒れた。

それをキンジが慌てて支えるのを見ながら、レインは気づく。

建物の倒壊が限界に近い。

恐らく、爆弾と、ピラミッドが破壊された事によってパトラの無限魔力が消失したのが原因だろう。

その原因であるパトラは、勝ち目が無いためだろう……逃亡を試みている。

しかし、そんな簡単に事が運ぶはずもなく。

「どこへ行くのかしら？」

大鎌を振り回しながら、落ちてくる黄金を吹き飛ばしていたカナは……ガアン！

落ちてきた黄金枢を、ホツケーのように弾いて滑らせると、黄金枢はパトラの背を掠めた。

「きゃうっ！？」

と、さつきとは比べ物にならない程弱々しい いや、可愛らしい

と言ってもいいかも知れない　声を上げながら、両足を上げて黄金枢の中に、すっばりと入ってしまう。

「ピラミッドって言うのは、元々お墓なんだろう？」

いつの間にか、パトラが落としたらしいイロカネアヤメを持ちながら、キンジは黄金枢の蓋を梃子の要領で、空中に弾き上げる。

キンジがウインクしてくるのに、意図を理解したレインは、同じくウインクで返し、ブロウから銃弾を吐き出し、軌道修正する。

「な、何をしておる！」

妾はフアラオ　「

何かを喚いているパトラの頭上に　ズウン。

黄金枢の、蓋が閉まった。

フアラオは、ピラミッドで眠るものだ。

収まるべき場所に収まった、という事だろう。

「お墓では静かにするものだよ、パトラ」

パトラは黄金枢の中からもギヤアギヤアと喚いてうるさかったが、カナに何かを言われ、ついに黙りこくっていた。

無事にアリアを助け出したレインは、突入時は夜だったが、戦闘の間に夜も終わったのだろう、朝焼けが映える空を、達成感を感じながら眺める。

その顔には、清々しい笑みが見えた。

アリアとキンジの、カナとパトラの喧騒の一部を耳に入れながら、レインはそっぴいえば突入する際にいたクジラ、それをもう一度見ておこう、と身を乗り出した。

！

感じたのは、強烈な悪寒。

圧倒的な『何か』が、こちらに向かってくる。

それも、とんでもないスピードで……！

レインが見ようとしたクジラも、更には魚、うみねこも、いない。

皆、恐れているのだ。

これからこの場に現れる、絶対的な存在を。

カナもその存在に気づいたようで、顔を蒼白にさせる。

それだけで、相手の異常な強さが窺える。

「キンジ、レイン、逃げなさい！　今すぐ、ここから離れるの！」
カナがここまで動揺しているのを、レインは始めて見た。

という事は、相手はカナの知り合いであるのだろう。

レインも、相手の力量が、今まで戦ってきた者達とは別の次元にある事など把握している。

だが、その圧倒的存在と、もう一人……いや、もう何人もの気配を感じる。

内一人は、自分が戦わなくてはならない相手なのだ。

引く訳にはいかない。

やがて、気配の動きが止まる。

警戒は解かない。寧ろ、強めた。

それが止まっているのは……目の前、なのだから。

ザパアアアアアッ！

その海面が、持ち上がる。

滝のように流れる海水から、黒いその『船体』が、姿を現した。

およそ300メートルはあるつかという艦体。

その側面には、漢字とアルファベットが一文字づつ、ペイントされていた。

一文字は、『伊』。

かつての日本で、『潜水艦』の意を表す暗号名だ。

もう一文字は、『U』。

こちらにも、ドイツで『潜水艦』という意味で通っていたコードネームだ。

イ・ウー。つまり、伊・U。

イ・ウーとは、巨大な潜水艦だったのだ……！
それだけではない。

この潜水艦は、恐らくはボストーク号。

確か武藤の話では、進水直後に事故で行方不明になったはずの、超アクラ級原子力潜水艦だ。

「そう、これは、かつてボストーク号と呼ばれた、戦略ミサイル搭載型・原子力潜水艦、『イ・ウー』。

ボストーク号は沈んだのではないわ。盗まれたのよ。

史上最高の頭脳を持つ、『教授』に……！」

ボストーク号の艦橋に、その男が見えた瞬間、カナは、キンジ達を庇うように、一番前に立ち塞がった。

「『教授』！」

止めて下さい！」

悲愴なその声は、しかし『教授』には届かない。

ビシュッ！

カナは、男 『教授』の、見えざる手に殴られたように弾かれる。

キンジが呆然としつつ、カナを受け止める。

カナは、出血していた……！」

恐らく、装甲貫通弾だ。

防弾制服をも貫通するそのA-TNK弾。

国際的に開発を禁止されているはずのそれが、カナの 恐らくは、

心臓を穿ったのだ。

しかし、レインは振り返らない。

装甲貫通弾を使用した事もそうだが、それよりもっとまずいのは

……先ほどの銃弾、レインが反応出来なかったのだ。

そんな銃弾は、一つしかない。

『不可視の銃弾』。

あの絶技を、狙撃銃で放ったのだ……！」

だとすれば、第2射が来たら、全神経を集中させなければ防げない。

必死で振り返りたい衝動を押さえ、レインは男を凝視する。

そして 絶句、する。

男、『教授』の 一度会った時は、目深にかぶった帽子によって

見えなかった、その容姿に。

瘦せた、しかしどこか手強い雰囲気のある身体。

鷲鼻、少し角張った顎。

パイプをくわえ、ステッキをついているその男は、武偵の原型とさえ言われる、その男と瓜二つ、いや、そんな冗談のような話では断じて無い。

まさに、その男。

イ・ウーのリーダー、『教授』。

何故か20歳程度に見える、その男は。

「曾、お爺様……！？」

アリアの曾祖父であり、武偵の原型　シャーロック・ホームズ一世だったのだ。

第80弾 最強の襲来（後書き）

皆「シャーロック・ホームズウウウ!?」

静「まさかシャーロックホームズとは……」

悠「僕なんて神崎先輩がシャーロックホームズさんの子孫って事も知りませんでしたよ」

綾「ホームズ家って、今もイギリスでは貴族なのよ？」

ミ「貴族かぁ……憧れるよねえ！」

第81弾 教授

第81弾 教授

シャーロック・ホームズ……！

ポストーク号の艦橋に立つその男は、微動だにせずこちらを見据えている。

狙撃銃による、装甲貫通弾での『不可視の銃弾』。

技の発案者であり使い手のカナは、キンジを庇うようにして倒れた。今、あれを防げるとしたら、自分だけだ。

そういつたある種の責任からか、レインはカナに代わり一番前に立っていた。

皆を、守るためだ。

だが……そのレインより前に、フラフラと覚束無い足取りで歩いて行く者が一人。

シャーロックの子孫、シャーロック・ホームズ四世、神崎・『ホームズ』・アリア……アリアだ。

「曾お爺様……」

アリアは、シャーロックの方へ一歩、また一歩と踏み出す。

まずい、危険すぎる。

「戻れアリア！」

俺達は攻撃を受けているんだぞ！」

キンジがアリアを怒鳴りつけるが、アリアの耳には入らない。仕方のない事ではある。

誰よりも憧れ、焦がれた史上最高の武偵が、曾祖父が、目の前に現れたのだから……！

その男が、今、イ・ウーのリーダーなのだ。

アリアの心が着いていける訳が無い。

レインは歯を噛み締め、それでもシャーロックから目を離さない。だが……更に、事態は悪化していく。

イ・ウー……ボストーク号からこちら、アンベリール号に向かって、白い軌跡が二本、向かってきている……！

「魚雷！？ くそっ！」

レインは咄嗟に雷弾を放とうとするが、海に向けて雷を放つなど、生態系などの問題上してはならない事だ。雷弾を放つ事は出来ない。レインの手が一瞬止まると、魚雷はアンベリール号の船体に直撃した。

ズウウウウン！

鈍い衝撃・炸裂音に伴って、アンベリール号の船体が激しく揺れる。

「くそっ、キンジ、大丈夫!？」

「あ、ああ！」

キンジはカナを支えながらも、しっかりと先の揺れに対応していた。アリアも……見たところ外傷は無い。

だが、このままではいつ狙撃されるか分かったものではない。

レインは、アリアを後ろに下からせようとするが……彼女は、依然としてそこを動かない。

レインは、仕方のないか、という風に、アリアの横に立つ。

最悪、彼女が撃たれそうになれば自分が身代わりになればいい、と。だが、そんな事をシャーロックがするつもりが無い事も、充分分かっている。

いや、今思い出した、と言った方が正しい。

シャーロックは、カナに負けたレインが修行している際に、レインを勧誘してきた。

それは即ち、レインがイ・ウーに必要な人材、という事に他ならない。

また、キンジの話では、アリアは次期イ・ウーのリーダーというレッテルが貼られているらしい。

最初こそ疑問に思ったが、現在のイ・ウーのリーダー、『教授』が

シャーロック・ホームズであるならなんとなく納得がいく。自らの子孫に、自らの地位をあげたいと言う人間は何人も見たことがあった。

もつとも、あのシャーロック・ホームズにそんな常識が当てはまるのかは疑問だが。

と　　レインがシャーロックへの警戒を徐々に緩めている最中。ガン！

という鈍い金属音と共に、後ろの黄金枢の蓋が蹴破られた。

中からは、パトラが、最早ファラオなどと言った威厳など無くしたように、獣のようにカナ　いや、ヒステリアモードが解けて、金一に戻った彼に、飛びついた。

「キンイチ、キンイチ……ああっ！」

カナは金一の銃創に手をそつとあてがう。

すると、そこから蒼白い光が放たれた。

恐らくは、星伽と言う鬼道術、その回復の技だろう。

だが、ピラミッドが無く無限魔力も無い今、パトラの超能力で致命傷が治せるのかは分からない……いや、出来ない確率の方が高いだろう。

パトラに金一を任せながら、レインは改めてシャーロックと向き直した。

イ・ウーが放った魚雷によって、ここは今火の壁で守られている。

「（どうくる……シャーロック・ホームズ……！）」

シャーロックの実力を見定めるべく、レインは彼の一挙手一投足に気を配る。

そんな彼の、隣。

そこに、ヒラヒラと白く輝く、羽のような何かが舞っていた。

「雪……？　いや、氷か！」

一瞬で、レインは理解する。

イ・ウーとは、互いに能力を教えあい、教わりあい、超人を育成する集団だ。

つまり、これは元々ジャンヌの銀氷。

それをコピーしたのが、リーダーであるシャーロックなのだ。

彼は、その銀氷で爆炎を擦じ伏せ……現れた。

ハッキリと視認できる。

随分と若々しい　それが、初めての邂逅で抱いた感想だった。

それもそのはず、齢150を越えているはずのシャーロックは、ど
ういう訳か20歳程度に見える。

黒い、つまり白髪のない髪をオールバックに纏め、漆黒のスーツに
身を包んでいる彼は、鼻も高く、端正な顔立ちをしていて……とて
も、手強そうだった。

彼が一步を踏み出すそこは、黄金の階段。

あれは、パトラの錬金術……！

次々に新たな事実が紡がれていく。

シャーロックは、金を彼の技、『不可視の銃弾』で倒した。

加えてジャンヌの銀氷に、パトラの錬金術。

彼が齢150を超えながら未だ健在なのは、ドラキュラ・ブラドの
コピーだろう。

イ・ウーは天賦の才を持つ者たちが集い、能力の写しあいが行われ
ているはずだ。

その末には、イ・ウーの頂点、即ち彼ら全員的能力を持つ完成形が
在る。

それが、『教授』、シャーロック・ホームズなのだ。

「……もう逢える頃と、推理していたよ」

「……！」

シャーロックの一声に、キンジの身体が硬直する。

レインは一度会った事もあり、慣れも手伝って平然としていたが…

…彼のプレッシャー、いや、圧倒的な存在感はやはり凄まじい。

「卓越した推理は、やがて推理を越えて予知に近づいていく。」

僕はそれを『条理予知』と呼んでいるんだ。

僕はこの状況を、既に知っていた。

だから、遠山 金一君の胸の内も、僕には推理できていた」

シャーロックは、爽やかな笑みで、何事でもないかのように金一に告げる。

金一は僅かに唇を動かすも、それは耳には届かない。どころか、喀血してしまった。

読唇術で読み取った言葉は、『そうかよ』。

金一の声こそ聞き取れなかったが、その言葉、表情からはまだ戦闘の意思が残っている事が窺えた。

「さて、成瀬 レインハート君、遠山 キンジ君。

レインハート君にはもう会っているが、君には『教授』としか名乗っていないかったね。

僕の事はもう知っているだろうが、可笑しな事に、僕は君達に、こう言わなければならない。

今ここには、僕を紹介してくれる人が一人もないようだからね」

随分と、回りくどい言い方をするシャーロックは……

「初めまして、僕はシャーロック・ホームズだ」

そう、名乗った。

疑う余地も無い。

本物だ 理性、本能、その他諸々、全身の細胞がそう叫ぶ。

偽者に、こんな雰囲気醸す事ができるはずもない。

シャーロックは、やがて……レインの方に、向き直った。

「レインハート君。

その表情から推理するに、返答は分かっているが……イ・ウーに来ないかい？」

シャーロックは、レインににこやかな笑みを浮かべて、そう言った。

キンジ、恐らくは金一にも……戦慄が走る。

レインはシャーロックとの事を話していない。

彼らにはレインがいきなりイ・ウーに勧誘、しかも前から話をして

あつたように映つただろう。

だが、シャーロックの推理の通り

「貴方には悪いが、答えはNOだ」

レインは、シャーロックの誘いを、堂々と断つた。

第81弾 教授（後書き）

悠「ええっ！ レイン先輩、イ・ウーに勧誘されてたんですか!？」
ミ「静ちゃんは入れる?」

静「無理だな。」

確かに私の能力は武偵高では割と高いが、イ・ウーはレベルが違いすぎる」

綾「それでも、いつかは貴女だって同じくらい強くなれるはずよ。
頑張って」

静「はい！ ありがとうございます!」

第82弾 二人のホームズ、二人の遠山

第82弾 二人のホームズ、二人の遠山

「れ、レイン……！」

キンジは、目の前の光景　レインが、シャーロックの誘いを堂々と断った事に、驚愕していた。

いや、レインがイ・ウーへの勧誘に乗ったりしない事は分かりきっていた。

それでも、シャーロックの雰囲気の前には曖昧な返事をしたり、少しは戸惑ったりするのが普通の反応のはずだ。

だが、レインはそれをしなかった。
堂々と、淡々と、しっかりと、きっぱりと、シャーロックの誘いを断った。

レインの、世界最高の男にも物怖じしない態度に、キンジは密かに頼もしさを覚えるのだった。

「そうか、君は『抑止力』になれる器だったから、『緋色の研究』が暴走した時に　いや、よそう。」

可能性の話ばかりしていても仕方無いのだからね」
と、シャーロックは、結果が分かっているような口調で質問した割

に、残念そうに肩をすくめた。

その際、金一を一瞥する。

可能性の件の話は、金一への皮肉でもあった、という事だろうか。

「さて……アリア君」

シャーロックは金一から目を逸らし　自らの曾孫、アリアに声をかける。

対するアリアは、ビクツ、とその小さな肩を僅かに震わせたのみ。

そこに、言葉は無い。

しかし……一瞬の、血族同士の視線の交錯。

それは、少なくとも赤の他人が言葉を交わすより、ずっと深いところで、意思を共有したような　そんな感覚。

キンジはパートナー、いや、想い人がシャーロックに取られそうになっっているからか、ベレッタの銃口を僅かに上げようとする。

しかし、それは憚られた。

「用心しないといけないよ。

鋭い刃物を弄んでいると、いつかは自分の手に怪我を負うものだからね」

という、未だアリアの方を向くシャーロックの、しかし明らかにキンジに向けられた言葉からだ。

完全に萎縮してしまったキンジを尻目に、シャーロックは尚もアリアに話を続ける。

「アリア君。

君はホームズ一族で最も優れた才能を秘めた、天与の少女だ。

なのに、ホームズ家の欠陥品と呼ばれ、一族に認められない日々は、さぞ辛かっただろうね。

だが、僕は違う。

僕は、君を迎えに来たんだ。僕の後継者として」

そう、シャーロックに言われたアリアは……もう、抗えるような精神状態ではない。

シャーロックという誰よりも憧れていた存在に、レインやキンジが知り得なかった　辛い、過去を慰められ、更に、憧れたシャーロックの、一族の正式な後継者になれる、それを他ならぬシャーロックに言われた。

それは最早、一種の人心掌握術と言っても過言ではない。

まずい、レインは直感する。

こういった暗示の類のものに、アリアは弱い。

事実、彼女は目の前に迫った、イ・ウーのリーダー、『教授』を逮捕しようとはしないのだから。

「……っ、聞いちゃだめだ、アリア！」

見かねたレインが、アリアを庇うようにシャーロックの間に入る。シャーロックは表情を変えず、ただレインを見据える。

『お手並み拝見』とでも言うような視線に、レインは歯を噛み締めながらアリアに目を覚ますよう促す。

「冷静に考えてくれ、アリア。」

目の前にいる男がシャーロック・ホームズだとしても、彼がかなえさんに罪を着せている事に変わりはない。

彼を捕まえて、かなえさんを助けよう」

なるほど、アリアはずっと母、神崎 かなえのために戦ってきた。

恐らく、かなえの冤罪を晴らす為なら、アリアを今の状態からイブンくらいに持つてくる事ができるはずだ。

「ママ……？」

ママ アリアの母、かなえ、それを聞いて、アリアの瞳から僅かに戸惑いが晴れる。

だが、このままアリアに戦闘意欲を持たせるのは中々に難しい。そして

「アリア君」

シャーロックが、何も言つてこないはずがない。

「イ・ウーは確かに君の母、神崎 かなえに冤罪を着せているが…

…私なら、君の母を助ける事ができる」

「ママを……助けられるんですか!？」

アリアの意識は、シャーロックの方に傾き始めた。

その反応が予想 いや、推理通り、とでも言うように、シャーロックはアリアの手を優しく掴み、そのまま、ヒョイツ。

お姫様抱っこをした。

アリアは、抵抗しない。

ただか細い声を上げるだけだ。

そのまま、シャーロックは無抵抗のアリアを抱えたまま、イ・ウーの艦体へくるり、と踵を返した。

まるで

「さあ行こう、アリア君。

君のイ・ウーだ」

これから彼女が手に入れる、強大な力を見せつけるように。

シャーロックは、軽く地面を蹴る。

すると、人間には考えられない跳躍力で、イ・ウーの艦体まで飛び移ってしまう。

そんな彼の、コートの裾。

それは、まるで生き物のように蠢いていた。

理子の、髪を操る超能力、その派生形だろう。

だが今は、そんな些細な事は問題ではない。

シャーロックの化け物っぷりは、先の邂逅で疾うに認知している。それよりも問題なのは、

「あ、アリア！」

キンジの叫び通り　アリアが、シャーロックに連れ去られた事だ。しかも、パトラの時とは状況がまるで違う。

今のアリアは、自らの意思での反抗が出来ない、つまりは相手に従っている状態だ。

いや、あるいは、自らそれを望んでいる場合だってある。

「（なのに俺は……助けるのか、無理矢理？）」

アリアが、もし、万が一、このままシャーロックからイ・ウーを継承し、かなえを何の危険も無く助ける道を選ぶとしたら……？
だとしたら、自分に彼女を助ける権利があるのだろうか？

いや、それ以前に、アリアを連れ戻す、それはアリアにとって助けられた、という事に、本当になるんだろうか？

キンジが何かを叫ぶのが聞こえる。

だが、葛藤しているレインの頭には入らない。

「（俺は、どうすれば……！）」

レインが迷いから、目を瞑り、歯を噛み締めた時……

ゾクッ！

背中に、戦慄が走る。

背後から感じる、気配。

見知った二人の気配……！

いきなりの強者の雰囲気、レインは思わず振り返った。

一人は キンジ。

ヒステリアモード……ではない。

キンジは、パトラとの戦闘の時、既にヒステリアモードになっていた。

加えて、いつものヒステリアモードのキンジに比べ手強そうで……

どこか、荒々しい。

そして、もう一人……！

「シャーロック……っ、バカめ、心臓を撃ち抜いた程度で、もう義を制したつもりかっ……！」

「し、師匠！」

レインの師であり、キンジの兄……金一だ。

彼はカナの時の服を脱ぎ捨て、漆黒のアンダーウェアを露にする。

だが、胸からの流血は止まっていない。

誰がどう考えても、無謀なのは明らかだった。

「立つな、キンイチ！」

まだ傷は癒えておらぬ！」

金一に超能力での治療を施したパトラですら、金一を止めている。

それでも金一は立ち上がる。意味深な言葉を吐きながら。

「これでいい これ以上、治すな」

その、カナの時のような、しかし鋭い刃物のような雰囲気。

金一も、ヒステリアモードになったようだ。

だが、瀕死の重傷を負い、ヒステリアモードの鍵となる性的興奮など感じていられないはずの金一が、どうやってヒステリアモードになれたのか、それがレインには分からない。

「レイン、キンジ、覚えておけ……HSS、ヒステリアモードには成熟や状況に応じた派生系がある。」

今の俺は、ヒステリア・アゴニザンテ」

ヒステリアモードの、派生系……！」

ヒステリアモードは、通常のそれでさえ、使用者の反射神経を30倍にする状態だ。

もし、それを凌駕する派生系が、今の金一、キンジの状態で、そこにレインが加われば……シャーロックにでも、勝ちの目はある。

「別名を、『死に際の（ダイニング）ヒステリア』。

瀕死の重傷を負った男が、子孫を残そうとする本当を利用してなるのが、このヒステリアモードなのだ」

「……！」

兄さん！ それじゃあアンタは、自分の命と引き換えに……！」

「止めて下さい、師匠！」

それ以上は命に関わります！」

キンジとレインが金一の思惑に気づき、止めようとするが……金一に、手で制される。

「止めるなキンジ、レイン。

この客船は日本船籍。

その船上では日本の法律が適用される。

シャーロックは、ここで未成年者略取の罪を犯した……これは、シャーロックを合法的に現行犯逮捕できる、唯一無二の好機だ……！」

「！」

「ですが……！」

「覚えておけ。

好機の一瞬は、無為な一生にも勝る……！」

金一は……立ち向かおうとしている。

心臓を撃ち抜かれ、治る傷を治さず、ただシャーロックを逮捕する『義』を貫き通すために、戦おうとしている……！」

自らの師、金一の覚悟を肌で感じ取ったレインには……最早、迷いは無い。

キンジ、金一、二人の遠山。

彼らと共に、シャーロック、アリア。
二人のホームズの元へ……！
そして、シャーロックを、逮捕する

！

第82弾 二人のホームズ、二人の遠山（後書き）

静「ヒステリアモードか……なんというか、随分と女に都合のいい能力だな」

綾「それを利用しよう、なんて女子生徒達に振り回されたいわね、中学時代」

ミ「キンジーはその所為でヒステリアモードにトラウマをもったらしいよ」

悠「うわあ……だから隠してたんですね、あんな凄い能力を」

第83弾 VSシャーロック

第83弾 VSシャーロック

「聞け、キンジ。」

さっきのお前の叫び声、あれで確信した。

今のお前のヒステリアモードもまた、通常のものではない。

『ヒステリア・ベルセ』。

通常のヒステリアモード……ヒステリア・ノルマーレが女を守るヒステリアモードだとすれば、ベルセは女を奪うヒステリアモードだ」
キンジはただ、金一の説明を黙って聞いている。

その様子からは、自分でも自分の状態を分かっていたらしい。
い。

しかし……金一は、知っているようだ。

彼もまた、ヒステリア・ベルセになった事があるのだろうか？

「気をつける……ベルセは通常のヒステリアモードに、自分以外の男に対する憎悪や嫉妬、その他諸々の悪感情が上乘せされる危険な状態だ。」

女に対してさえ、時には力尽くでその全てを奪おうとさえする。

ベルセはノルマーレの1.7倍の力を出せるが……その代償として、思考が攻撃一辺倒となる。

制御は……初めてでは難しいだろう。

っ、どうやらこれ以上は警告していられないらしいな……！」

金一はそういい、胸の辺りを押さえる。

シャーロックに撃ち抜かれた心臓を、治さずにいるのだ。

「……船体が後1メートル沈んだところで跳ぶ。

キンジ、レイン、合わせる……！」

その鋭い、有無を言わせぬ眼光。

レインが何度も、彼と共に戦った時の瞳だ。

「はい……！」

一方のキンジは、兄に協力を求められてか、多少戸惑っているようだった。

だが……

「シャーロックは、俺一人では倒せない。

だが、ヒステリアモードの俺とキンジ、そして、最強の超能力者のレイン、三人がかりでなら、勝てる！」

その金一のセリフに、背中を押されたキンジは……表情を、変えた。あれは、戦う者の眼だ。

「行くぞ、二人共！」

まずはアリアを救出し、シャーロックを逮捕する！ 続けッ！」

叫んだ金一は、ヒステリアモードによる超人的な跳躍力で流氷に飛びうつる。

続いてキンジも、兄と動揺の跳躍を見せ、流氷に飛びうつった。

そして、レインも 雷をその足に走らせ、雷歩で空を、正確には形成した磁場を踏みつけ、駆ける。

アリアを、シャーロックから救出するために。

キンジ達が銀氷のダイヤモンドダストの中、流氷を走る間 レインは、空中を移動してきたため、一足先に目的地へついた。

黒い雷は、今は引っ込んでいるようで、いつもの紫の雷を纏ったレインは、雷神化する。

「シャーロック！」

レインはプロウを抜くと、雷砲、所謂レールガンを放つ。

音速の三倍で放たれるそれは、正確にシャーロックの中央に向かう。人間に避けられる技ではない。

が、シャーロックはこの技を何らかの形で防ぐだろう。

でなければ、アリアを巻き込むような攻撃をする事などレインはし

ない。

予想通り、シャーロックはアリアを抱えたまま、持っていたステッキを一閃。

雷砲は弾け飛び、シャーロックが笑みを浮かべてこちらを見てくる。感電は……していない。

『条理予知』でレインとの戦闘も推理していたのだらう、手にはグローブ 恐らくは、防電性を嵌めている。

レインはブロウを下ろし、ホルスターに納めた。

「シャーロック、アリアを下ろしてくれ。

全力で戦えない」

「ふむ……確かに、アンフェアではある。

それに、僕としてもアリア君が傷つくのは都合が悪い。

ならば、レイン君……君の提案に乗ろう」

「随分物分かりがいいな……」

シャーロックは、またも遠回しな口調でそう言うと、アリアを下ろした。

瞬間、レインは指先から紫の閃光 雷弾を撃った。

「不意打ちはあまり良くないよ？ 紳士としては」

「あんたが言えた義理かい？」

その閃光は容易に弾かれ、明後日の方向へ向かっていく。

だが、レインはそれでも構わず、二発、四発、十発、二十五発……

と、ひたすらに雷弾を撃ち続ける。

シャーロックは涼しい顔で、雷弾を弾き、弾き、弾く。

埒が明かない、そう考えたレインは、左手の雷弾を止めず、右手の指の間に、ダガー四本を構えた。

やがて左手の雷弾も止め……レインは、再びブロウを抜いた。

四本のダガーを投擲、シャーロックの頭、ステッキを握る左手、機動力を奪うべく両足へと向かわせる。

シャーロックはステッキで三本のダガーを弾き、頭に向けた一本は避けた。

レインは舌打ちし、雷砲を放った。

シャーロックがダガーを弾くべく振り上げたステッキを撃つつもりだったが、『条理予知』で推理されていたらしく、見抜かれた。

ステッキをくるり、と回したシャーロックは、その勢いのまま雷砲を弾いた。

「やっぱ凄いな……大概の攻撃は弾かれる。なら……」

「『避けられない攻撃を放つまでだ』、かい？ それは確かに正解だ。」

だが……分かっているだろう？」

レインの言おうとしたセリフを先に口走ったシャーロックが、またも遠回しに言った通り　レインは今、シャーロックを確実に捉えられるであろうレベルの広範囲攻撃を出来ずにいた。

理由は簡単で、アリアを巻き込まないようにしているから、それだけだ。

それでもレインは、アリアを傷つけないでシャーロックを倒すべく、水月をシュラツ、と抜いた。

その紫の刀身が銀氷、砂金に反射し、眩い輝きを放つ。

「なら……『刀』で行かせて貰うよ」

「私の型はフェンシングが主なんだがね……」

シャーロックの愚痴を聞き流し、レインは雷歩で一気に距離を詰めると、横薙ぎに水月を一閃。

シャーロックはそれを、ステッキで受けた。

その勢いのまま水月を受け流すと、シャーロックは軸足を刈ろうと、左足で蹴る。

レインは振られてきたシャーロックの足に、手をのせて逆立ちすると顔面に蹴りを入れようとする。

シャーロックは顔を傾けて避け、右手でレインの足首を掴むと、その細腕からは考えられない力で、レインを投げ飛ばした。

「うわっ!?!」

更に、狙撃銃による『不可視の銃弾』で追撃を仕掛けてくる。

それを電磁力を利用して弾き返し、雷歩を応用して磁場を形成、そこを磁力を帯びさせた右手で掴み、空中で止まる。

「流石だね、レインハート君。」

『紫電の雷神』と呼ばれるだけある」

「アンタこそ相当だよ、『世界を股にかける男』、シャーロック・ホームズ」

銃技に超能力、果ては格闘技まで並みの武偵……いや、並みの達人以上とは、やはり彼は常軌を逸している。

「まさかアンタがイ・ウーのリーダーだったとはね……暇があれば、経緯を聞きたいものだよ」

「ふむ、残念だが私は寿命が近くてね……恐らくは出来ない。申し訳ないね」

「そりゃ残念だ、よっ！」

レインは再びシャーロックに肉薄し、水月を振りかざした。

シャーロックはステッキを横に倒し、水月と切り結ぶ。

「甘い！」

レインはその勢いのまま、シャーロックのステッキを掴み、軸にするようにして回転、踵落とする。

シャーロックはそれを、真正面から受けた。

「!?!」

レインは違和感を感じ、反射的に雷歩で飛び上がった。

足からくる感覚と視界の情報、一致しない。

レインが飛び上がった後には、シャーロックが崩れ（・・）、砂金になっているのが見えた。

パトラの、錬金術　！

「君も、少々甘かったようだね」

シャーロックの声がある方に振り向くと、彼は既に狙撃銃をこちらに向けていた。

対処が、間に合わない。

狙撃銃から、銃弾が吐き出された。
しかし、レインは動こうとしない。
ブロウに手を掛けた。

どう考えても、発砲は間に合わない。

ならば、何故？

ガイン！

その答えが明かされるかの如く、金属音が鳴り響いた。
銃弾が、飛来したのだ。

そして、その銃弾が銃弾を弾く。

狙撃銃から放たれた装甲貫通弾が、元の軌道からそれてレインの頬
を掠めた。

そこから赤い血が滴り、甲板に落ちる。

ピチヨン。

その音と同時に、レインはシャーロックに雷砲を撃った。

！

ドゴオオオオオン！

耳をつんざく爆発音。

レインは空中で一回転し、その銃弾を放った男……金一の元へ降り
立った。

「ありがとうございます、師匠」

「気を抜くな、レイン。」

「ここで終わる程度ではない……追撃をかけるぞ」

第83弾 VSシャーロック（後書き）

皆「シャーロック強すぎ（です）！」

静「凄すぎる……なんて体さばきだ！」

綾「惜しむは作者の戦闘シーンが稚拙過ぎて上手く読者様方に伝わってない事ねっ！」

ミ「どうか……どうかこの興奮を伝えられないものかなっ！」

悠「うう……原作を読んで戴くか、他の作者さんに任せるしかありませんね……」

第84弾 霧乗弾幕戦、兄弟対決再び

第84弾 霧乗弾幕戦、兄弟対決再び

追撃を掛ける、そう言った金一は、無形の構え、即ち『不可視の銃弾』の構えを取る。

まだ晴れない爆煙、その中心に向けて金一は『不可視の銃弾』を放った。

銃弾の先には、シャーロックの姿、いや、影が見える。

当たる　そう確信する。

しかし、そう簡単にはいかないようだ。

ガキーン！

耳障りな金属音と共に、『不可視の銃弾』が彼方へと飛んでいく。

『銃弾撃ち（ビリヤード）』　キンジがブラド戦で披露した、遠山兄弟の銃技の一つ。

銃弾を銃弾で弾くという離れ業をシャーロックが使った事には、さして驚きは無い。

金一がイ・ウーに潜入していたのだから、彼がマスターしていてもおかしいところはない。

それでも、レインは眉をひそめた。

銃弾を吐き出したはずの銃が、見えなかったのだ。

つまり、シャーロックは『不可視の銃弾』で『銃弾撃ち』を行ったのだ。

一つでさえ相当な集中を要する絶技を、二つ同時に。

人間離れたその銃技に面喰らうが、それでもレイン、キンジ、金一は引かない。

「レイン、キンジ！」

「はい！」

「分かつてる！」

最早この三人の集中力の前に、言葉によるコミュニケーションは不要。

金一は再び『不可視の銃弾』をシャーロックに撃った。

シャーロックはそれを『銃弾撃ち』で弾く。

「うおおおおお！」

キンジが雄叫びをあげ、ベレッタから銃弾が吐き出される。

ベレッタの銃弾は、シャーロックの弾いた銃弾を更に弾き返し、シャーロックに向かわせた。

だが、ガキーン！

シャーロックは、更にそれを『銃弾撃ち』で撃ち返してきた。

「俺だって『銃弾撃ち』は使えるっ！」

その銃弾を、更にレインが『銃弾撃ち』で撃ち返した。

しかし、更なるシャーロックの銃撃で、またも銃弾は彼方へと飛んでいく。

「く、くそっ！」

「やっぱり駄目か……」

悔しがる二人に、シャーロックは……アリアを抱えたままの右手、その人差し指をあげ、チツチツと。

人差し指を横に振った。

「……上等おお！」

額の血管がぶちギレたレインとキンジは、シャーロックに向けて発砲する。

金一も、残っていたピースメーカーの銃弾四発を一気に『不可視の銃弾』で吐き出す。

加えて、空中リロードで弾倉に納めた六発の銃弾、更に隠していたもう一丁のピースメーカーに入っていた六発の銃弾を、全て『不可視の銃弾』で放つ。

16発の『不可視の銃弾』に加え、二発ずつの銃弾。

計20発の銃弾が、シャーロックに襲い掛かる。

しかし ギギギギギン！

シャーロックは、その全ての銃弾を弾き返した！
金一とキンジは、対抗するように『銃弾撃ち』に、キンジが金一を倒した『鏡撃ち』を織り混ぜて銃弾を弾く。

それに続いて、レインも銃弾を弾き返し始めた。
ギギギギギン！

返しては返され、返しては返される。

最早、目の前には黒い銃弾の嵐しか見えない。

シャーロックに近づくべく、一步を踏み出す。

その度に、銃弾の数は累乗的に増えていく。

その度に、対処する猶予が0.1秒ずつ減っていく。

後にキンジは、この戦いを『冪乗弾幕戦』と呼んだ。

やがて、銃弾の数が700を超えた辺り。

「レイン！」

金一からの、指示が出た。

「待ってました！」

レインは、シャーロックのいる空間に、強力な磁力を発生させる。

すると、銃弾は勢いをそのまま、巻き戻すようにシャーロックへと

向かって行った。

計700もの銃弾が、シャーロックを襲う。

如何に彼と言えど、避けれる人間など皆無だ。

シャーロックは地を蹴って空を切り、着地したが、磁力によって銃弾はなお引き寄せられた。

彼がそのまま銃弾に追われ続けてくれるはずも無く、やはり対処法を取ってくる。

ステッキを一閃し、その空間にあった銃弾全てを薙ぎ払う。

しかし、薙ぎ払うだけでは、磁力によって動いている銃弾を止めるのは不可能であるはずだ。

シャーロックは、そのステッキの軌跡に、砂金をばら蒔いていた。

それが巨大な膜となり、銃弾全てを止めた。

「くそっ、これも防がれたか！」

「もう一度だ！」

金一の怒号に、レインとキンジは再びシャーロックに銃口を向けるが……引き金に、指を掛けられなかった。

「……………っ！　アリア！」

そう、シャーロックの目の前には……………へたりこんだ、アリアがいたのだ。

今撃てば、アリアに被弾する……………！

そんな迷いから、レイン達が引き金を引くのが遅れた。

それが、致命的な隙となる事になった。

シャーロックの胸の辺りが、風船でも膨らませたかのように膨張していく。

あれは　ランドマークタワー屋上で見た、ドラキュラ・ブラドの、『ワラキアの魔笛』だ！

「まずい！」

レインとキンジは、反射的に耳を塞いだ。

特にキンジは、ヒステリアモードを解かれる訳にはいかない。

絶対にこの技を食らう事は出来ない。

そんな中……………レインは、気づいた。

金一は、耳を塞いでいない！

恐らくは『ワラキアの魔笛』自体を知らないのだろう。

だとしたら最悪だ。

もう、シャーロックはヒステリアモード破りの雄叫びをあげようとしているのだ。

「くそっ！」

避けんでは間に合わない。

レインは自らの耳を塞ぐのを止め、金一の耳を塞ごうと走る。しかし、それすらも叶わなかった。

「ッ！」

「……………！」

晴夜が放った、圧倒的な殺気。

それを間近で感じたレインは、キンジに下手に加勢するより、この男を野放しにしておく方がまずい、そう直感する。

だからといって、キンジだけにシャーロックを任せるのは危険過ぎる。

レインは、雷神化　目の前にいる、晴夜を倒す事に集中する。

「行くぞ、夜雲　晴夜……………長年の因縁なのに悪いけど、すぐに終わらせる」

紫に光る水月の刀身を、晴夜に向ける。

「あまり兄を舐めるなよ、レインハート……………お前をシャーロックと遠山の元へは向かわせん。」

俺に従わないと言うなら……………力尽くでも、分からせるまでだ」

対する晴夜は、その金と銀のオッドアイでレインを睨み付け……………白

銀の刃、月影を構えた。

第84弾 冪乗弾幕戦、兄弟対決再び（後書き）

静「今日は作者から重要なお知らせがあるらしく、それをお送りする」

悠「どうやらシャーロック・晴夜編の後にオリジナルストーリーを予定してるらしいんだけど……」

ミ「そのオリジナルストーリーに出演してくれる、読者の皆様のオリキャラを募集したいらしいんだ」

綾「俺の小説のオリキャラをプーモに貸してやってもいいぜ！」
つて方が居れば、是非感想までお願いします！」

はい、オリジナルストーリーです。

しかも出演キャラ募集です。集まらなかつたらどうしよう……
本格的なのは初めてです……色々大丈夫でしょうか？

第85弾 成瀬対夜雲（前書き）

今回はご都合主義多目でお送りする事になるかと思われ
ます。すみません……文章力・構成の向上を目指します。

第85弾 成瀬対夜雲

第85弾 成瀬対夜雲

「うおおおお！」

レインは叫び、水月を振り抜く。

晴夜はそれを月影で受け、衝撃に耐えきると水月を弾き、レインの
から空きの脇腹を狙って一閃。

しかしレインは、それを跳んでよけ、月影の刀身に飛び乗った。

そのまま晴夜の首を目掛けて、水月を振るう。

晴夜は身を逸らして避け、月影の上に乗るレインにハイキックを打
ち込む。

それを両腕を交錯させてガードしたレインは、衝撃のあまり後ろに
吹っ飛んだ。

「……やるな」

そう言った晴夜の口元から、つい……と一筋の赤い雫が滴り落ちた。

「そりやどうも……」

レインは吹き飛ばされる際、晴夜の頬を回し蹴りしていたのだ。

レインは、両腕に、バチバチ……と高圧電流を纏わせ始めた。

食らえば、意識が飛ぶ。

晴夜はより一層警戒を強め、レインとの直接の接触を避ける。

「……行くぞ！」

駆け出したのは、レイン。

長引かせるのは得策ではない、そう判断しての先攻。

晴夜は月影を構えると、真っ直ぐ向かってくるレインに打突する。

レインはそれを跳んでかわし、月影を踏みつけると晴夜の左側頭部
に向けて横薙ぎに水月を振るった。

晴夜は月影を持つ手を離し、しゃがんで水月を避ける。

「!?!」

足場に使っていた月影が急に重力に従い落ちるものだから、レインはバランスを崩した。バランスを取るうとするレインの腹に向けて、晴夜は銀弾を打ち込む。

レインはそれを身を翻して避けようとするが、距離が近く、避けるのは不可能だった。

防弾制服に銀弾が突き刺さり、レインが苦悶の表情を浮かべる。

「……ッ！ ああッ！」
痛みに耐えたレインは、晴夜にダガーを投げつけ、一旦距離を取った。

容易くダガーを避けた晴夜は、落ちた月影を蹴りあげ、右手に持ち直した。

「なんでアンタは……俺と戦う？」

「……何がだ」

突然、それも戦闘中の質問に、晴夜は眉をひそめた。

「アンタの目的だよ。」

何故アンタは、俺と戦う？

何故アンタは、俺をイ・ウーに入れようとする？

何故アンタは……父さん、蒼介を殺した！？

答える、夜雲 晴夜！

「……知れた事！」

晴夜は月影を、その場に降り下ろす。

途端、月影がその形を歪ませ、晴夜の右腕に絡みつき、刀の形を形成していく。

『月影・乱空』。

月影が持つ、二つ目の形態だ。

「俺は……奴からお前を取り戻す。」

お前は俺の弟だ！

お前は父の息子だ！

断じて、奴の家族なんかじゃない……！

イ・ウーで、お前を高みへ連れて行く！

それが、兄としての勤めだ！」

晴夜は月影でレインに斬りかかり、レインはそれを水月で受け止めた。

擦れる二つの刀から、火花が飛び散り辺りを赤く染める。

「アンタに、アンタ等にそれを言う権利があるのか！

俺を落ちこぼれだと蔑み続けた、アンタ等に！」

「それでもお前は諦めなかった！」

レインは水月で晴夜を押し返し、後ろへ飛び退いた。

「それは結果論だろ！」

俺は蒼介のお陰で今、ここにいる！」

「黙れ！」

お前が、お前の口からその名を出すなああああつ！」

晴夜は怒りに任せ、月影を振るつた。

その延長線が、剣圧で両断されていく。

やがてそれはレインの元へ差し掛かり、レインはそれを水月で受ける。

ガキーン！

刀が重なったような感覚。

レインは地面を踏み締め、衝撃に耐えた。

「俺は既に殺人者だ！」

だが、お前は違う！」

お前だけでも、俺は夜雲へ帰す！」

「違う！」

俺は成瀬 レインハートだ！

俺が帰る場所は、成瀬の家だけだあああああ！」

「ならば、力尽くてもお前を連れ戻してやる！」

レインは叫び、両手から雷弾を放ち、続けて雷砲、更に水月を抜刀し肉薄する。

晴夜はそれを全て月影を形態させた盾で防ぎ、水月と月影は切り結

ぶ。

「お前は俺には勝てない！」

夜雲の力こそ至高だと、何故理解出来ない！」

「いや、勝つ！」

アンタに勝って、蒼介が正しかった事を証明してやる！」

「できるものなら……やつて見せる！」

晴夜は月影で水月を押しきると、レインの腹を蹴り、更に接近して切り上げる。

レインはそれを水月でそらし、晴夜にダガーを投擲する。

それが弾かれると、レインは接近、水月の刀身が晴夜の脇腹に吸い込まれる。

「ぐっ!?!」

晴夜は、呻き声をあげながらもレインの脇腹に蹴りを叩き込んだ。

「ッ! ……まだだ！」

顔を苦痛に歪めるレインの叫びに反応するように、弾かれて地に落ちていた何本もののダガーが紫の光を放つ。

目標は、水月の先端。

「雷線！」

その技の名を、紡ぐ。

雷鳴と共に、晴夜を紫の雷が貫いた。

「俺の……勝ちだ！」

レインは、晴夜の脇腹に水月を突き立てた。

だが……固い、感触。

はっ、としてレインは目の前を仰ぎ見た。

晴夜の姿が、グニヤリと歪み、その姿を白銀の物体に変えた。

月影！

晴夜はいつの間にか、月影で形成した自らの分身と入れ替わっていたのだ。

晴夜は月影を更に形態変化させ、無数の刃でレインを突き刺した。

「がっ……!?!」

数多の切っ先から血が流れ、赤い水溜まりを作った。

晴夜はそのまま、レインの意識を刈ろうと顎に拳を叩き込む。

レインはそれをなんとか避け、無数の刃を抜け、なんとか後退する。血が、足りない。

「くそっ……！」

朦朧とする意識の中、水月を杖のようにしてなんとか立ち続ける。

「無駄だ。」

月影・乱空の前に、未だ第一形態の水月で勝てる道理など無い」

晴夜はそう言い、月影を構える。

しかし 顔を、歪めた。

「何故……笑っている？」

その原因、レイン。

彼は、今から止めを刺されようとしているにも関わらず、笑みを浮かべていたのだ。

「ははっ……失言したな。」

『水月が第一形態なら勝ち目は無い』……それってつまり、『水月が第二形態なら勝てる（……）』って事じゃないのか？」

「……戯れ言を聞く気は無い。」

仮にお前が既に水月の第二形態を会得してるとして」

「いや、俺は水月の第二形態なんて、有る事すら知らなかったさ」

晴夜の言葉を遮り、馬鹿正直にそんな事実を告げたレインは……「チヤキツ。」

水月を、鞘に納めた。

「だから……会得するんだ。今から」

晴夜は眉をひそめ、月影を構える。

その顔には、どこか焦りがあるようにも見えた。

「無理だな。」

水月の第二形態を発現できた者など、夜雲の歴史上存在しない。

それに……俺が、それをさせると思っのか？」

「思わないな。」

だから……一瞬だ。

この一瞬で、俺は、アンタに勝つ……！」

レインは水月を握る手を強める。

「……面白い。」

なら……やって見せろ！」

晴夜は叫び、散々形態を変えてきた月影を、純粹な刀の形に変える。元の月影との形の違いは、鞘が、鍔が、柄が無い事くらいだ。

だが、その力は通常の月影とは別次元。

まさに、『必斬の刀』を冠するに相応しい剣気。

対し、レインは……目を、閉じた。

「行くぞ……！」

晴夜が地面を蹴る。

レインは尚、目を閉じたままだ。

「（頼む、水月……俺に力を貸してくれ！）」

第85弾 成瀬対夜雲（後書き）

綾「勝ちなさい、レイン君……！」

悠「頑張って下さい、レイン先輩！」

ミ「レイレイ、負けたらただじゃおかないからね……！」

静「私達はお前を信じている。

だから無事に帰ってこいよ、レイン……！」

第86弾 飛躍（前書き）

はい、今回もご都合主義満載でお送りします。
というか、自分がオリ話書くと必ずご都合主義です。すみません。

第86弾 飛躍

第86弾 飛躍

目を、開いた。

しかし、レインの瞳は、本来映るはずの光景　晴夜が、自分に向けて斬りかかる光景を映してはいなかった。

夜、そうとしか思えない、黒い闇。

それを、金色に輝く満月が照らしている。

足元には、レインの僅かな動きにさえ波紋を立てる、足首まで浸かる程度の水深の、水平線も確認できる、水面が見えた。

その水面は、夜闇を爛々と照らす月を反射し、揺らめいていた。

「ここは……どこだ……？」

そんな言葉が口について出る。

まあ、先ほどまでとは場所と時刻が異なる上、レインは今までこんな場所に来たことが無いのだから、仕方がない事ではある。

そんな戸惑う彼の前に……パチャツ。

空から、花が落ちてきた。

蓮の、花。

極楽浄土を連想させるその花に、レインは一瞬『自分は死んだのではないか？』という懸念を抱き、身体を硬直させる……が。

幸いなのは分からないが、それはすぐに解けた。

「貴様……何をしている、こんな所で」

「……」

声を掛けられた　自分以外、人が見当たらなかつたため、自分だと判断した　レインは、首を傾げながら、ゆっくり振り向いた。

そいつは、言葉、一言で言い表すなら　『黒』。

そう言っつていいほど、真っ黒な、無骨な黒い布切れに全身を包み、

月の明かりがなければ視認が難しいほど、黒かった。声や肌の感じから、まだ20代を過ぎてはいないだろう。

「アンタは？」

「人に名乗る時はまず、自分から名乗るのが道理……そう言いたい
が、我は既に貴様を知っている。

貴様もまた、同じ」

「…………？」

意味がよく分からない事を言われ、レインは頭に疑問符を浮かべる。そんなレインを見た『黒』は、失笑し、愉快そうに口元を歪め、こちらを向いてきた。

「意味が分からない、と言った様子だな……まあ良い。

敢えて名乗るとすれば 『王』だ、我は」

「王、つて……王様？」

「ああ、その王だ」

「ふーん……」

さした感銘も無さげなレインの態度に、『王』はムツ、としながら、再び先の言葉、その続きを紡ぐ。

「貴様は水月の力を引き出し、夜雲 晴夜を倒さねばならぬのだらう？」

「水月の力、か……」

どうやって引き出せばいいのか、正直全く分からないよ」

レインは軽く手を振ると、『王』はやれやれ、と言った風に、自らの身体を避けた。

「…………ッ！ それは…………！」

その黒い布切れをはためかせた『王』、その背後から姿を現したそれは 紫の刀身をもった、刀。

水月 その第二形態、だろう。

だろうというのは、普段の水月とは何処か違う雰囲気を醸しているからだった。

まるで、—そこに在るのにそこに無い)……………(

かのような錯覚を覚える。

それ故儂げで、しかしどこか一本の芯が通ったような、存在感。

「引き抜いてみせる」

『王』の言葉に、レインは水月の前に歩み寄った。

その柄の部分に触れると……分かった。

この刀に出来る事、この刀に出来ない事。

この刀の存在意義

「引き抜く事が出来たなら、貴様は『ソイツ』に認められた、そういう事になる」

「そうか……ありがとう、色々教えてくれて」

「礼には及ばん。

我は王だ。

愚民を導くのはもちろん、時には愚民に力を貸すのも当然の役目だ」

「そうか……ありがとう、王様」

レインは『王』に礼を言い、水月の柄を握る力を込めた。

「弱いぞ！

もっと死ぬ気で引け！」

「分かってる！」

分かってるけど……！」

レインは全力で引っ張った。

しかし、水月は微動だにしない。

まるで刀の先から巨大な根が地面に張っているような感覚に、額から汗がこぼれ落ちた。

それでも諦めず、全力で引っ張り続けると……

バギン！

「な……！？」

空が……割れた。

まるで、空を映した鏡を砕いたように、星の破片がレイン達に降り注ぐ。

「くっ……！」

拒絶反応か……！

おい、愚民！ まだか！」

「まだだよ！」

それにさっきから、貴様とか愚民とか……！

俺の名前は 成瀬 レインハートだ！」

「うるさい！」

ああもう、面倒な！

失礼するぞ！」

『王』はそう言うと、レインの身体に黒い布切れを被せて……とい
うか、着せてきた。

「ぶはあっ！ 何する……！？」

『王』に文句を言おうと振り返る。

が、誰もいない。

すると、突如『王』の声が聞こえてきた。

直接、頭の中から。

『済まないな。』

悪いがお前の中に入れて貰った。

…… っと、やはり動かしやすいな』

「どういう……！？」

レインは問おうとするが、またしてもそれは憚られた。

レインの身体から、自分も一度だけ見たことのある、黒い雷が覆っ
ていたからだ。

「こいつは……？」

『我の力だ。』

…… 我は貴様が気に入ってな。

仕方無し、本当に仕方無しに、今だけほんのちよっぴり力を貸して
やっても 』

「ありがと王様！」

行くよ……雷神化！」

バリイ！

辺り一面には、蓮の花が数え切れない数多、咲き誇っていた。

『行ってこい、レインハート。』

今の貴様は、兄ごときに負けたりはしない。

我が保証してやるさ』

「ああ……行ってくるよ！」

『王』はレインに、親指を立てて突き出して来た。

つくづく王様らしくない人だ、とレインは苦笑し……こん。

同じように親指を立てて、その拳を合わせた。

次の瞬間、レインの身体は光に包まれた。

第86弾 飛躍（後書き）

綾「え？ これどこのBL ACH?」

ミ「あの王様、どこの斬 さん？」

斬魄刀ですか？」

悠「というか、ツンデレですか？ なんてあざとい」

静「ぼ、ボロクソに言ってるな……作者だって随分悩んだんだぞ」

第87弾 鏡花水月（前書き）

今日は七夕です。

やっほい！

短冊代わりに……ここで書かせて貰います。

『時間がいっぱい貰えますように』

……悲しいかな中学生の悩み……

第87弾 鏡花水月

第87弾 鏡花水月

「……………!?!」

晴夜は振り上げた月影を止め、反射的に飛び退いた。

レインの身体が、雷とは違う、薄い紫の光を纏い始めていた。
この気配

「馬鹿な……………!」

五月が第二形態を発現する、前兆!

「させるかあああああつ!」

刀の形を取った『月影・乱空』、その鋭さを増した刃が、レイン目掛けて降り下ろされた。

対するレインは、目を開けていた。

その瞳に映るは、今自らに降り下ろされんとする刃。

「やるぞ……………『鏡花水月』……………!」

レインが、その刀の名を紡ぐ。

水月第二形態 『鏡花水月』、発動。

「うおおおおおおおおおおお!」

晴夜が雄叫びを上げて斬りかかってくる。

そもそもに爆発的な威力を有する月影・乱空、その威力を収束させた最強の一撃は、水月を構えて尚、貫通しえる威力を有している。

無論、それが分からないレインではない。

が、レインは避ける動作をしない。

避ける必要が無い。

レインは鏡花水月を横に構え、動かなかった。

「舐めるな!」

啖呵を切り、晴夜はレインに月影を降り下ろした。

その一撃は水月の防御を突き破り、レインの身体に一筋の太刀傷を

負わせる　はずだった。

「……ッ!?」

二本の刀が火花を散らし、一瞬の均衡の後、二本の刃は距離をおく。離れたのは、そして、苦悶の表情を浮かべるのは……晴夜。

その胸板には、本来レインにつくはずだった太刀傷が、生々しく赤黒い血を滴らせる。

「ぐっ……なるほど、な……」

それが出来るなら、確かに水月は五月、いや、世界で最強の刀だ」

世界最強　確かにその通りだ、とレインも思う。

相変わらず、この刀には切れ味というものが皆無。

加えて言うなら、オリハルコンの硬度ももちろん健在だ。

しかし、鏡花水月は今までの水月とは一線を画す境地に立っている、そう言ってもなんら過言ではない。

鏡花水月の能力、それは

「相手の攻撃を跳ね返す、なんてな……」

正しく、絶対防御。

そう呼べる　能力シロモノだった。

「ああそうさ。」

正確にはこの刀は、『俺に危害を加えるモノ』を全て跳ね返す。

この刀身に当たれば、石ころだろうが斬撃だろうが銃弾だろうが雷だろうが、隕石だって跳ね返す。

それが、鏡花水月の力……!」

あまりに、絶対的すぎるその力に　しかし、晴夜は動じない。

「なるほど、跳ね返す、か……だが『跳ね返す』にはタイムラグが存在する上、どうやら致命的な弱点が二つ存在するようだ……」

言いながら晴夜は……チン、と、月影を鞘に納めた。

代わりに、とは言い難いが……レインの雷対策の、防電グローブを、キュッ、と締め直す。

「……流石。」

確かに、この鏡花水月には弱点が存在する。

それを一回の攻防で見破られるなんて、思わなかったけどね」

「俺はお前の兄だぞ？」

「それは認められないな。」

けど……アンタが強いのは認めるよ」

「……随分褒められるな？」

お前は俺を恨んでるのでは無いのか？」

「そりゃそうだよ。」

俺は今もアンタを許せないし、正直夜雲も好きじゃない。

けど……分かったんだ。

俺は今まで、ずっと復讐を目的に生きてきたんだ。

アンタを、捕まえるために」

レインの独白に、晴夜は黙って耳を傾ける。

その顔は、至って真剣であり、とても他人が口を挟めるような雰囲気ではない。

「でも……武偵高に転入した。」

俺は、可愛いしい友人に、一緒にふざけていつも怒られる悪友、それに何も聞かずに手を貸してくれる優しい友達に出会った。

そして 大切な人達を見つけた」

レインは、戦闘の最中だというのに……心底嬉しそうに、語る。

「俺は、あの娘達と一緒にいたい……」

そのためなら、なんでも出来る。

世界を敵に回しても、構わないと思った。

そう思えるくらい……彼女らが、大切なんだ。

だから俺は、あの娘達と一緒にいるために 復讐に取り憑かれた

俺と決別するために。

俺はアンタを捕まえる」

レインもまた、鏡花水月を鞘に納める。

そして、ダガー二本を逆手に構え、X字に構える。

「……何故水月を仕舞う？」

「それじゃあ不公平だろ？」

それにアンタもあれの弱点に気づいてるみたいだし」

「……本音は？」

「これでやっと、アンタと決着をつけられる……！」

晴夜は苦笑、いや、微笑し、懐から……アリアが普段使用するような、寸詰まりの日本刀を二本、構える。

銘は知らないが、業物である事は剣気が教えてくれる。

「夜雲流剣術免許皆伝、夜雲 晴夜」

始めに晴夜が名乗りを上げ……

「成瀬・遠山流剣術共に免許皆伝、成瀬 レインハート」

それに応えるように、レインもまた、名乗る。

「いぞ……」

「尋常に……」

二人の距離が縮まり、

「「参る！」」

同時に、叫ぶ！

轟！

刹那、レイン、晴夜を中心として、突風が舞い起こった。

「はあああああ！」

「おおおおおお！」

ギーン！

金属音と共に火花が辺りを赤く染め、レインのダガーと晴夜の日本刀が切り結ぶ。

レインは左手のダガーで晴夜に斬りかかるが、晴夜は容易く日本刀で逸らす。

複雑に交差する手と手、刃と刃。

レインは敢えて力を緩め、均衡を崩した。

晴夜が押しきってくる隙間を縫い、レインは晴夜の懐に入ると、人差し指指をピストルのように突き出す。

紫の高圧電流のレーザー、それが指先から光を放ち、晴夜に向かって飛び出した。

「ッ！」

晴夜はそれを、なんと日本刀をあてがい防いだ。防電グローブあってこそその荒業ではあるが、やはりそれを実行できる度胸は充分に評価に値するものだった。

帯電し紫の光を纏う日本刀を振るう。

晴夜は今、レインのの上にいる。

そこから降り下ろされた日本刀の重さは、晴夜の筋力も相まって、雷神化しているレインの両のダガーで防御させるに十分な威力を持つていた。

案の定、レインは両手のダガーを交錯させるように防御に回る。

それで出来た隙を晴夜は見逃さず、から空きの土手っ腹に足裏の蹴りを決める。

「……っ、ぜあああ！」

レインは歯を噛み締め、両手で日本刀を押し返すと、ダガーを握った拳を、晴夜の腹に叩き込んだ。

本来の戦闘なら感電して終わりだが、晴夜が防電装備でないはずがない。

レインは続けて横腹に回し蹴り、更に続けてブローを抜き、発砲する。

晴夜はなんとか耐え、銃弾を切り裂くとその日本刀で斬りかかる。

それをレインは紙一重でかわし続けるが、随所に斬撃が走り、防弾に加え防刃性能のある武偵高の制服をやすやすと切り裂き、レインの身体に傷をつけた。

レインは軽く舌打ちし、腕の傷から流れ出る血を、晴夜に飛ばす。

それをかわした隙を突き、レインはダガーで晴夜の胸のと真中に打突する。

それを日本刀で受け吹っ飛びながら、晴夜は発砲、銀弾をレインに浴びせようとする。

レインはそれをダガーで弾き、その勢いで右のダガーを投擲、新たなダガーを引き抜きながら肉薄した。

晴夜は日本刀でダガーを弾くと、右手が銃、左手が剣のガン・エツジと呼ばれる戦闘方法でレインを迎え撃った。

晴夜が銃を撃つと、レインはスライディングのようにかがみながら滑って避け、晴夜を下から蹴り上げる。

「ちいっ！」

悪態をつき、晴夜は日本刀をレインに突き出した。

それを身を翻して避け、レインはダガー二本を上空に放り投げると、雷弾を二発撃ち放った。

晴夜はそれを左へ転げるようにして避けると、差し替えたロングマガジンから、フルオートで銀弾を乱射してくる。

レインはその何発かを回転しながら落ちてきたダガーを持ち直し弾くが、やはり全てを捌ききれず一発貫ってしまう。

「……っ、まだまだあ！」

レインは叫び、再び晴夜に接近する。

第87弾 鏡花水月（後書き）

皆「大切な人、か……／＼／」

静「ま、まあ私限定な訳ではないのは分かってるが……」「ニコニコ

悠「そう言われるとやっぱり嬉しいですねえ」「ニコニコ

ミ「ジャンヌちゃんやレッキー、理子りんにも教えてあげないとね」

ニコニコ

綾「貴方達……はあ、まあ良いわ……」「一人黄昏る

第88弾 不可避の一撃（前書き）

通知が遅れましたが、感想の制限を無くしました。

これまで感想が書けなかった！ なんて方も、よろしければお願いします。

第88弾 不可避の一撃

第88弾 不可避の一撃

レインはダガーで晴夜に斬りかかり、片方を投擲。

それを晴夜が屈んでかわすのを見ながらブロウを抜き、雷砲を放った。

月影を抜かず、晴夜は右に飛んで避ける。

そこにもう一本のダガーを投げると、晴夜は日本刀でそれを弾く。攻撃、防御、攻撃、回避。

埒が空かない、そう思いながらもレインは雷歩で跳躍し、晴夜の上空に躍り出た。

ジャキン！

一瞬でブロウを仕舞い、懐から両手の指の間に計八本、ダガーを構える。

それを全て晴夜に投擲する。

八方からのダガーに、逃げ場はない。

故に、晴夜はこの攻撃を弾くしかない事は分かっている。

レインの予想通り、晴夜は片手の日本刀でダガーを三本、片手の銃撃で五本を弾き、砕いた。

更にそれだけでなく、銃弾を三発、レインに当てる。

防弾制服は衝撃までは吸収しきれない。

銃弾が当たればバットで殴られたような痛みが走るし、当たり所が悪ければ死ぬことだってある。

その銃撃が、三発レインに突き刺さった。

故に、晴夜は自らの勝ちを確信し、レインへ歩を進める。

が……口から血を吐き出したレインは、笑っていた。

「それを待っていた……！」

レインの眩きに、晴夜は辺りを見渡す。

紫の、雷が……辺りに散らばった、ダガーの破片を走っていた。

これは……！

「いくらアンタでも、これを避ける事は出来ない。

これは避ける事の出来ない、雷の奔流だ」

レインの身体を覆う雷が、更に激しくなる。

「俺の技で最強の威力を誇る、『雷神の裁き』……これは、その次に強力な技。

範囲はそれより広い。

アンタに、いや、人間に避ける術は無い。

『雷霆』……それが、この技の名だ」

レインは、腕を前に突きだした。

長かった物語に、終止符を打つように。

対し晴夜は、瞼を下ろした。

長かった物語に、幕を下ろすように。

パチン。

終わりを告げるその鐘が鳴った瞬間、レインの、晴夜の視界が紫の光に包まれた。

バリイ！

「……！」

「な、何？ 何の音？」

シャーロックと相対する、キンジ、そして……救出された、アリア。シャーロックはハッ、としたように音がした方を向く。

「ふむ、どうやらレインハート君の雷か……こんな奥の手を隠していたとはね。

僕でも推理出来なかった……夜雲君が居てくれて助かったかな」

「レイン？」

レインがどうしたんですか、曾お爺様！」

「落ち着けアリア。」

「どうやら今のは、レインの技だったらしい。」

「だが……威力がでかすぎだ。」

「多分、船が限界に近い」

「喚くアリアを押さえつけ、キンジはシャーロックに向き直す。」

「さて……あっちも終わったようだし、こっちもラストダンスと行こうぜ。」

「早くパートナーの借りを返さなくちゃいけなくなったしな」

「ヒステリア・ベルセ　普段より凶暴化するそのモードのためか、キンジの口調はどこか荒々しい。」

「ふむ、その通りだ……」

「君が言うなら止めはしないが、僕に一撃を食らわせるのは、今の君では」

「出来る。」

『桜花』　兄さんも知らない、絶対にかわせない一撃。

「俺のとおっておきだ」

「シャーロックのセリフを遮り、キンジは獰猛な笑みを浮かべ、兄から貰ったバタフライ・ナイフを構える。」

「ふむ……どうやら君の自信は、その正体不明の技から来ているようだ……」

「シャーロックは言いながら、ステッキをカッン、と床にあてがう。するとステッキはひび割れ、中から直刀に近い形の剣が現れた。」

「その形状は、所謂『スクラム・サクス』と呼ばれる片刃剣で　また、銘刀である事も、鋭い剣気から容易に気がついた。」

「いい、刀だな」

「銘は聞かない方がいい。」

「これは昔、イギリスの王女陛下から借り受けた大英帝国の至宝でね……この刀を相手にしただけで、君の一族が末代まで蔑まれかねいからね」

「そう言ったシャーロックの表情は、自らの玩具を自慢するような子」

どもっぽさが有って 思わず、苦笑してしまっ。

「勿体振るなよ。」

あれだろ、ラグナロクとかエクスカリバーとか、そういうのだろ」「キンジが照れ隠しのようにぶっきらぼうに、ゲームやマンガに出てくる刀の名を適当に言っ。

すると、シャーロックは『どうして分かったんだい?』と言った様子で、目を見開いた。

「ははっ、素晴らしい推理力だ。」

君には名探偵の素質がある。」

僕が保証するよ」

「そりゃどうも……さて、決めようぜ。」

アンタにどんな理由があれ、曾孫 アリアを撃った事に変わりはない。

しかもアリアは俺のパートナーだ。

パートナーが受けた借りは、一発返すのが決まりだ」

「僕にも、推理出来ない事がある。」

どうやら君のその非倫理的な行動の遠因は 恋心、なのかも知れないね」

っ！

キンジは、がむしゃらに駆け出す。

後ろでアリアが何かをいいかけようが、お構い無しに。

この一撃を、絶対に食らわせるために。

キンジはまず最大速で駆け、時速36キロを造る。

「この桜吹雪……散らせるものならっ！」

叫びながら、キンジはヒステリアモードの反射神経を利用し、爪先で時速100キロ、膝で200キロ、腰と背中では300キロ、肩と肘で500キロ、更に手首で100キロ、瞬間的にとんでもない速度を生み出す。

それらを一瞬だけ、全く同時に動かせば……合わせて時速1236キロ

超音速の、一撃となる！
「散らしてみやがれッ！」

パアアアアアン！

キンジのバタフライ・ナイフから、銃声のような衝撃音が響く。
音速の壁を破ったナイフの背から、桜吹雪のような円錐水蒸気が散る。

更に、超音速を出した事によるソニックブームでキンジの腕が引き裂かれ、鮮血が吹き出した。
それはまるで、血のような緋い、桜の花びらが散るようにさえ見える。

その一撃は、人間には絶対にかわせない。

シャーロックもそれを理解したようである。かわす代わりに、左拳を突き出して来た。

バチッ！

シャーロックは、かわせない一撃を……受け止めた。

人差し指と中指の間に挟む、真剣白刃取り、その片手版で。

「惜しかったね、キンジ君」

シャーロックはそういうと、スクラマ・サクスをキンジに向けて振る。

それをキンジは　バチッ！

同じく、片手版真剣白刃取りで受け止めた。

「惜しくねえよ」

キンジとシャーロックは、両手を塞がれ、互いに身動きの取れない状況に陥っていた。

将棋で言う、千日手。

しかし、キンジには

「そつくる事は……」

まだ、秘策があった。

大きく息を吸い込み、頭を後ろに反らす。

「分かってたんだからな！」

先祖代々石頭の遠山家に伝わる、正真正銘の隠し技

！

ガスツツッ！

キンジの頭突きが、シャーロックの額に、クリーンヒットした。

シャーロックは、ぐら……と揺れ、右手のスクラマ・サクスを落としながら、ゆっくりと倒れた。

同時にキンジも……バタツ。

世界最強の名探偵に一撃食らわせた安心感からか、右手の傷がいたむのか、はたまた、アリアの借りを返せた嬉しさからか……その場に、仰向けに倒れた。

その顔には、どこか安堵という感情が見てとれた。

第88弾 不可避の一撃（後書き）

ミ「ええええええ！？ 頭突き！？」

綾「頭突きって……痛そうね」

静「うーん、それでシャーロックを倒したのは凄いな」

悠「先輩方……『桜花』の方も評価してあげましょうよ……」

第89弾 空から女の子が降ってくると思うか？（前書き）

今回は原作読んでない人には意味不展開になりかねません……ああ、
元々か。

第89弾 空から女の子が降ってくると思うか？

第89弾 空から女の子が降ってくると思うか？

「キンジ！」

キンキンのアニメ声を響かせて、アリアは倒れたキンジに駆け寄る。しかし、キンジはそれを手で制し、アリアをシャーロックの方に向かせる。

シャーロックを尊敬、下手をしたら崇拜している彼女には辛い事かも知れないが、キンジもそれは百も承知だ。

アリアは倒れたシャーロックに、不安気な足取りで歩み寄る。

「曾お爺様……いえ、敢えてこう言います。

シャーロック・ホームズ卿。

貴方を逮捕します」

そついいい……アリアは、ガチャツ。

銀の、対超能力者用の手錠を掛けた。

「いやあ、危なかつたよ」

「……？」

そのアリアの、上空。

そこから、聞こえるはずのない声が、確かに聞こえた。

慌ててアリアが手錠を掛けたシャーロックを視界に入れると……サラサラ、と。

彼は砂金となり、既にその輪郭を失っていた。

「先ほどまでの若々しい私なら避けれたかもしれないが……老いには敵わない、という事かな」

「……シャーロック！」

キンジが叫んだ先 ICBM、世界のどこからでも発射でき、どこにでも届く、大陸間弾道ミサイル。

それを改造し乗り物にした、今にも飛び出しそうなロケットの先端、そのハッチの上に乗るシャーロックは、ニコリと微笑んでキンジ達を見下ろす。

しかし、その額には赤い血が一筋、タラ……と滴っていた。

先のシャーロックのセリフ通り、キンジの一撃は確かに当たった。

だが、キンジが倒れ、アリアの視線がそちらに向いた一瞬で、砂金の偽物と入れ替わったのだ。

「アリア君、そしてキンジ君。

よくやってくれた。

さて、後は君たちに任せるとしよう。

『緋色の研究』を　　」

『緋色の研究』。

シャーロックは意味深な単語を吐くと、ガチャッ！

ロケットの、ハッチを閉めた。

「待って下さい！

曾お爺様！」

！

最後の最後にシャーロックに情が移ってしまったらしいアリアは

発射されそうになり、下から風が吹き荒れているような危険なロケット、その側面を、日本刀で突き刺しながら昇っていつてしまう。

「アリア！ 戻ってこい！」

「駄目よ！ 曾お爺様が……曾お爺様が……！」

アリアに止まる気配は無い。

加えて、アリアはもう降りられない高さまで昇っていつてしまっている。

お前は猫か！

と怒りまじりに叫びたくなる衝動を抑え、キンジもまた、アリアを連れ戻すべくナイフと剣でロケットの船体を昇る。

そして、キンジがロケットの船体中頃まで到達した時、ロケットは

発射された。

ぐんぐん海が遠くなる。

レインの姿は見えなかった。が、今にも倒壊しそうだったイ・ウーの船体は、あれほど巨大であったにも関わらず、今は豆粒大になっ
てしまっていた。

「くそっ……アリア！」

キンジは風圧とGに負けないようナイフを握る手を強め、アリアに
叫ぶ。

が、当のアリアはシャーロックに呼び掛けてばかりで、キンジの方
を振り向かない。

すると……スピーカー越しのような、ノイズの掛かったシャーロッ
クの声が聞こえてきた。

『……まさかここまで着いてくるとはね。』

敬老精神は良いことだけど、新しい自分を見詰めるのも大切なこと
だよ、アリア君。

降りて、また新しい人生を歩みなさい。

この老体に付き添うのは、無機質なロケットで充分だからね』

「でも、でもっ……！」

まだ駄々をこねるアリアに、シャーロックは苦笑いしてしまう。

目に見えた訳ではないが、キンジにはなんとなくそんな気がした。

『……キンジ君、済まないが……この娘を頼んでも？』

「別にアンタに頼まれなくても、俺はアリアを助ける」

『そうか……済まないね、キンジ君』

「アンタに謝られる筋合いは無い」

『そうか……では、こう言い直そう。』

ありがとう』

「ッ！……どういたしましてっ！」

そうは言ってみるが……ボンッ！

という音と共に、ロケットは雲に突っ込み……更に上昇する。

地平線が丸みを帯びていて、空気もあるか分かったものじゃない高々度の世界。

そこには、白い、綺麗な線が見えた。ロケット雲、というやつだろうか。

イ・ウーから発射されたであろう、キンジ達と同じロケットが、四方八方に向けて空を駆けている。

そしてそれはに

イ・ウーの残党が、乗っているのだろう。

それにキンジが気づいた時には　ズツ。

！

キンジのバタフライ・ナイフ、拝借したシャーロックのスクラマ・サクスが、機体から外れてしまう。

アリアの刀も限界のようで、キンジと同じくロケットから空へ放り出されていた。

そして、白い煙と赤い噴射炎を吐くだけのロケットは視界から遠ざかり　代わるように、空からアリアが落ちてきた。

空から女の子が降ってくると思うか？

アリアは、空中で身をよじると……キンジに、手を伸ばしてくる。

キンジもそれに応えるように、背中を下に向けて、アリアに手を伸ばす。

二人の距離が、縮んでいく。

それは不思議で特別なことが起きるプロローグ

アリアが、その小さな身体で必死に手を伸ばす。

キンジも、重力に逆らうかのように手を伸ばす。

「キンジ……！」

「アリア……！」

そして、その手が繋がった。
そのままキンジはアリアを引き寄せ、アリアは空を滑るように。
互いに、抱き合った。

二人が出逢い、後にレインとも出逢う事になる朝、チャリジャック
の時に初めて抱き合ったときと同じ姿勢で。

現実のそれは危険で、面倒な事に決まってるんだ

この速度だ。

落ちれば、まず助からないだろう。

だが俺、遠山 キンジは

こいつのためになら、この身を危険に晒してやろうと思う。

恐らく、世界中の男たち……世界中の、主人公たちと同じ

ように！

「キンジ……ごめんね、こんな事に付き合わせちゃって」

「ハッ、何を今更」

謝るといつより、どこか嬉しげに語るアリアに、キンジは照れ隠し
で返す。

「ありがとう、ありがとう。」

あたしのパートナー。

あたしは、あんたを誇りに思う

「
アリアの改まった、そんなセリフに……キンジは顔を赤くし、少し
背けた。」

「武偵憲章第10条 諦めるな。武偵は決して、諦めるな。」

キンジ。あたしは 何度も諦めかけた。

でも、あんたが前を向かせてくれたから、あんたが諦めなかったか
ら……あたしたちは、今！ まだ！ 生きてる！」

言うつと、アリアは……バサッ！

ピンクの、ツインテールが。
翼のように、広がったのだ。

恐らく、シャーロックの言うイロカネである『緋弾』、その力だ。
それが、理子の髪のようにそんな動きを見せた。

凄いな　この力でなく、咄嗟にこれを思い付き、実行できるアリ
アが。

キンジは思う。

そうこなくては　お前は俺の、パートナーなんだからな。

眼下を見ると、パトラと、傷の治療をしてもらい一命を取り止めた
らしい金一が、驚いた顔でアリアとキンジを見上げていた。

「き、キンジ。」

あたしにもあんたが必要だわっ！

ぶ、武偵憲章第1条！」

「1条……『仲間を信じ、仲間を助けよ』……か」

「そ、そうよっ。

だからキンジ！」

ああなるほど、とキンジは納得する。

アリアは泳げない。

そして、羽ばたけないこのアリアの髪では、やがて金一達が下につ
くより先に　海に、落ちるだろう。

「と、とりあえず浮き輪になりなさい！」

ザブン　！

アリア分の重みで、海中から空を見上げると　煌めく太陽が、キ
ンジの視界を銀色に染め上げた。

これは、アリアとキンジ、そしてレインの新たな戦いの始まりでし
かない。

そして　ここより別の場所では、また新たな始まりが生まれよう
としていた。

第89弾 空から女の子が降ってくると思うか？（後書き）

悠「いいなあ……キンジ先輩とアリア先輩」

ミ「ロマンチックだよねえ」

静「羨ましい……」

綾「諦めなければその内チャンスくらいくるわよ」

三人「マジですかっ!？」

綾「きやあっ!？」

ち「近いわよ!」

第90弾 終わりと始まり

第90弾 終わりと始まり

紫に染まった視界は徐々に開けて、蒼い空を映し出す。その空を、レインはただ呆然と見上げていた。

目の前には、まだ身体に雷の余韻の残る、晴夜の姿が。彼の装備は防電製だが、それを全身くまなく装着するのは不可能であり、全身を飲み込む雷霆の前には意味をなさなかった。

「……………いや、防電製じゃなければ死んでいたかもしれないな……………」

晴夜の装備に感謝しながら、レインは彼に歩み寄った。

「夜雲 晴夜……………アンタを逮捕する」

レインは手錠を取りだし、彼の手に掛けようとしている。対し、痺れでか身体の動かない晴夜は、レインを鋭い視線で睨み付けた。

「……………レインハート……………何故お前は、俺を殺さない？」

「俺の勝手だろう？」

「……………まあな。」

敗者の俺には死ぬ権利も無いのか……………」

「代わりに、生きる義務が出来た。」

俺はアンタを生かすよ。

それに……………親父も、アンタを殺さないでくれってさ」

そう告げると 晴夜は、少し驚いた表情になった。

大方、殺人を犯し逃げた自分は、とうに見離されていると考えたのだろうが……………自分の子どもを心から憎める人間なんて、いない。

龍三は、晴夜を……………もう一度、家に引き入れるつもりだろう。

「そうか……………親父が……………」

晴夜は仰向けになると、顔に手をあてて隠した。

瞳から溢れた、光る雫を見られないように。

レインが、ゆっくりと晴夜に手を掛けようと身を屈めると
バチャツ。

血、が。

レインの顔に付着し、防弾制服を赤く汚した。

レインの血液ではない。

これは、目の前で倒れ、鮮血を撒き散らす　　晴夜のものだった。

「……………!？」

嘘だろ……………!

晴夜!　晴夜!　くそ、どうなってる!？」

この切り傷、恐らくは剣圧による斬撃だろう。

その斬られ方から、斬撃の方向を予測し、そちらを向いた。

今にも倒壊しそうなイ・ウーの艦体、その頂点。

レインの視界に映ったのは、銀色の髪。

雪のように白く輝く銀色の髪を靡かせ、ダイヤモンドのような光を
放つ白銀の瞳でこちらを見下ろす、美しい、女性。

その女性の顔に、レインは見覚えが無かった。

しかし……………レインの心に浮かぶ、懐かしいという感情。

「(なんだ……………!?)」

俺は、この人と会ったことがある……………!?)」
分からない。

レインはその恐怖から、進化した水月に手を掛けて臨戦体勢を作り、
いつでもこちらを見下ろす女性に対応できるように　　する前に。

「嫌よ、私の可愛いレイン。」

私にそんな物騒なものを向けちゃ」

「!？」

今の今まで、イ・ウーの上から自分達を見下ろしていたはずの女性
が　目の前に、いた。

その手は、レインが水月を掴もうとする手を優しく握っていた。

しかし、今のレインには……………否、今の状況を間近で見る者には、こ

れは『動く右手を破壊する』、そういう意味に取れた。

「晴夜……アナタの役目はお仕舞い。

よく頑張ってくれたわ。

レインに鏡花水月を発現させてくれた。

まあ、『王雷』を引っ張り出してくれたら言うことは無かったんだけどね」

何を言っているのか、理解出来なかった。

晴夜に、よくやった？

鏡花水月を発現？

王雷？

レインが混乱しパニックに陥っている中、女性は晴夜にニコリ、と微笑んだ。

「お前は……何故此処に、いや……何故生きている……!？」

対する晴夜は、彼女が存在している事に驚いているようだった。

何故生きている、という意味深な言葉と共に。

「晴夜……この人は、一体……」

彼女の正体を知っているらしい晴夜に聞くが……

「あら、レイン、水臭いわよ。

そんなの私に直接聞けばいいじゃない」

女性が、自分で答えるらしい。

抵抗する術の無いレインは冷や汗を流しながら頷き、女性の間を窺う。

というのも、この女性、気ままに振る舞ってはいるが……その実、全く隙がない。

まるで弱点や油断などは全てどこかに置いてきたかのような、完璧さを感じさせる。

「では……貴女は、どちら様ですか？」

「固いわよ、レイン」

ギリ……

と右手が嫌な音をあげる（痛みはない。彼女の手による演出だろう

か)ため、レインは汗を流して言い直した。

「貴女は誰なの？」

精一杯砕けた口調で言うと……彼女は、良くできました、と手を離し、レインに微笑む。

「久しぶり、レイン。」

私の名前はアリス

貴方の姉よ」

「……………ッ!？」

言うと彼女、アリスは……………チュツ。

レインの頬に、唇をそっと当てた。

「なっ……………!？」

「ふふっ!

可愛いなあ、可愛いなあレイン!

ああ……………全部私のものになりたい……………」

うっとりとして、恍惚とした表情で言うアリスに、キスされたレインは

顔を真っ赤に染めて、一步後ずさる。

そんなレインを正気に戻したのは、晴夜だった。

「どうということだ、夜雲 アリス……………!

お前はレインとお前の出産の際、母と共に他界したはずだ!」

……………!

その事実には、レインは少し驚いた。

母が自分を産んですぐ亡くなったとは聞いていた。

しかし、それは彼女の身体が弱いか、そういう理由だとばかり考えていたが……………今の口振りから、アリスはレインの双子の姉だと推測出来た。

「ふふっ、晴夜。

貴方ってマヌケね。レインとは大違い。

まあレインと他の人間、あ、私以外ね。

は、どいつもこいつも有象無象のマヌケばつかなんだけどね」

くすつ、と含み笑いをしながら毒舌つぶりを発揮するアリスは、ああ可らしい、と一人でに笑い出すと……晴夜に向き直る。

「ああ、ごめんなさい。」

アナタの低能な質問の最中だったわね。

うーん、あんまりいい答えが見つからないけど……私、産まれた時に脈が止まってたんでしょ？」

確認するように聞かれた晴夜は、首肯で 体力の消費を極力抑えるためだろう 返した。

「それで、私の死体はいつの間にか消えていて、お墓に入れてない……そうでしょ？」

段々、話が怪しげな方向に向かってきたところでアリスは質問し……晴夜は、尚も首肯を続けた。

「そうだよね。」

ふふつ……脈の件はまあ、仮死状態だったのよ。そもそも、なんで赤ん坊の私しか見てない貴方が私をアリスと判断できるのよ。

ま、それは置いといて、そしたらね、私の特別な力が発動しちゃって……アナタたちの前から消えた、それだけよ」

「……………？」

レインも晴夜も、似たような表情を浮かべる。

要するに、疑問の表情だ。

どんな能力なんだろうとか、とレインが聞き逃すまい、と耳を傾けると……

「じじいじこ・と」

「うわっ!？」

レインが、振り返った。

そこには 先ほどまでレインたちの目の前にいたアリスが、レインの耳に息を吹き掛けていた。

「な、な……………！」

「まさか……………！」

慌てふためくレインと、真剣に顔を歪める晴夜。

二通りの反応に目を細めながら、アリスは答えを告げる。

「私の超能力、それは……俗に言う『瞬間移動^{テレポート}』よ。

厳密には少し違うけどね」

瞬間移動。

その単語に、レイン、晴夜は驚きを隠せない。

そんな超能力は、聞いた事も見たこともない二人は沈黙したまま、アリスの行動を見詰める。

「私は瞬間移動で飛んで、優しくて善良な一般のお医者様に仮死状態を治して貰ったの。

まあ、自分の意思でやった訳じゃないけど……なんだか覚えているのよ」

赤ん坊なんだから当たり前だ、というツッコミをする事すら憚られ、レインはむず痒さを覚えた。

「いやあ、それにしてもレインは可愛いなあ。

頑張りに頑張って、晴夜を倒しちゃうんだもん。

おねーちゃん感心しちゃった」

えへ　とアリスが言うのに……レインは、何かの違和感を覚えた。その正体に気づかないまま、アリスの言葉を聞き続ける。

「だいたいさあ、

子供の晴夜が蒼介を殺せる訳ないじゃん」

……！？

「どういう……意味だ……？」

レイン、が。

絞り出したように言葉を紡ぐ。

その表情をうつとりとした視線で見詰めながら……

「蒼介を殺したのはあ、

わ・た・し」

「……ッ！」

レインは怒りで水月を抜刀。

しかし……それは、空を斬る。

「駄目じゃない、レイン。」

私にこんな物騒なもの向けちゃ」

「アンタが……蒼介を殺したのか……！」

レインの怒りを現すかのように、バリバリ、と雷が彼の身体を覆う。

「はあ……レイン……いい、いいよ、その瞳。」

最高……やっぱり私にはレインしかないわ」

「そんな事はどうでもいい……！」

晴夜は、アンタに濡れ衣を着せられたただけなのか……！？」

「違うわ。」

彼は晴夜に挑んで返り討ちにされた。

それを、私が操って再戦させただけよ」

「操って、だと……！？」

アリスのその言葉を反芻すると、アリスは軽く微笑んだ。

「そうよ。」

私の超能力でね」

……！

あり得ない。

晴夜が知らなかったのだから、彼女がイ・ウーにいたという可能性

は薄い。

だが……能力の、重複。

これは、余程の事がない限り、そうそうできるものではない。

彼女は一体……！？」

「なら……俺がレインと会った覚えのないことも……！」

「ああ、恐山の？」

あの時、アナタがレインを傷つけるような事いうからイライラしち

やった。

まあ、傷つくレインも可愛かったからいいけどね」

「……俺たちは、アンタの手の上で踊ってたただけだっていうのか…

…?」

「うーん、ちよつと違うかな……

つと、もうこんな時間ね。

じゃあ、また会いましょ、私の可愛いレイン」

アリスは今度は投げキッスをすると……踵を返した。

「っ！ 待て！」

レインが再び水月を振るうが……やはり、虚しく空を斬るだけ。

アリスの姿は、どこぞへと消えて失せた。

「ちくしょう……!!」

レインは崩れ落ち……空を仰いだ。

忌々しい程、突き抜けるような、蒼い空だった。

第90弾 終わりと始まり（後書き）

皆『よし、殺そう』

理「くふふっ、誰が私のレインなの？」

綾「ふふ、アリスちゃん、姉弟が結婚出来ないって知ってるのかしら？」

悠「それよりも探しましょうよ。」

早くあの腐れビッチを捕まえとかないと

レ「……………」

ジャ「む、レキがドラグノフを構えているぞ！」

ミ「そつちだよ！」

その方向にあのアバズレがいるんだよ！」

静「身の程を……思い知れえっ！」

皆『戦じゃあー！』

白「何このテンション怖い」

第91弾 悪戯好き

第91弾 悪戯好き

あの後、レインは晴夜を呼んだ救護科に任せ、キンジたちと合流した。

が、金一、キンジも傷が深く、彼らもまた救護科に連れ去られた。アリアはその付き添いで救護用ヘリに同乗し、パトラは武偵庁の人間に連れていかれた。

なので、レインはキンジ、アリア、金一の乗るヘリに同乗する事にしたのだった。

ババババババ……

段々倒壊するイ・ウーから離れていき……レインはそれを、肘をつきながら眺めていた。

「キンジ、全治1ヶ月なんだって？」

「面目ない……」

全治1ヶ月。

キンジの怪我の度合いだ。

色々身体に無茶の掛かる戦い方をした故の、ある意味当然の結果だった。

特に酷いのが『桜花』を使った右腕で、治るには治るが相当危ない状態だったらしい。

レインからしてみればどうやったらそんな傷 『桜花』の衝撃波によって稲妻の形で負った傷 ができるのか、と聞きたかったが、怪我人にそんな不粋な話をするのもなんだから、と自重することにする。

リアにギャアギャア言ってる間に、先ほどちゃっかり卓袱台返しに参加していたレキにこっそり耳打ちする。

「レキ。」

白雪が来ないか見張っててくれない？」

「はい……どうしてですか？」

言わずとも分かると思うが……白雪はキンジにゾッコンである。

更にキンジに寄る悪い虫は……排除、するのだ。

その際、白雪曰く悪い虫であるアリアも反撃するのだが……

アリアが家具に風穴を空け。

白雪が部屋を太刀傷だらけにする。

まるで嵐の後か、怪獣大戦争の痕かのような荒れに荒れた部屋に何度溜め息をついたか分かったものではない。

災害は、防げるなら未然に防ぐのは当然の話なのだ。

「ここは病院だからね……」

「？」

レキの質問に直接は答えず、レインはそれだけ言ってキンジたちの喧騒の中に舞い戻った。

「キンジ、1ヶ月も空けて単位は大丈夫なの？」

「ああ、そのためのカジノ警備だからな」

そのカジノ警備を途中で投げ出した事を完全に忘れてるようだ。

「そうか……ならいいんだ」

敢えてそれを指摘せず、レインは悪戯っぽい笑みを浮かべてその話を打ちきった。

単位が足りてないと知ったときの顔が楽しみだ。

まあ、ギリギリには教えてあげるけど。

そんな事を考えながら、レインはキンジに断りを入れ、病室を立ち去った。

病院の小綺麗なロビー、薬品の匂い？ を感じるその場所で、レイ

ンはアンニュイな溜め息をついた。

レインの胸中を占めるのは　アリス。

自分の実の姉である彼女は……晴夜を操り、蒼介を殺した張本人だ。蒼介を殺したのになんの目的があったのかは分からないが、とにかく彼女はレインが心から敬愛する人間を殺した女である。

レインは無機質な自動販売機に向かい、硬貨を三枚入れて一本、炭酸飲料水を購入する。

ガコン、という小気味の良い音を鳴らし、炭酸飲料水が落ちてきた。プシュツ、という炭酸が弾ける音を聞きながら、レインは一気に喉に流し込んだ。

口内がシュワシュワと鳴り、小さな刺激がいくつも口の中で弾ける。

「はあ……」

彼女は、いくつもの超能力を重複して使えるようだった。

イ・ウーに入っていた訳でもないのに、どうしてそんな事が……そこまで考えて、レインは首を横に振った。

今そんな事を考えても仕方がない。

彼女と再び邂逅した時に、また捕まえればいいだろう。

別段、アリスを捕まえろという任務を受けている訳でもないので、

レインはアリスの問題を一旦頭の隅に追いやった。

蒼介を殺した相手にこんな悠長に構えるなど、昔のレインには考えられなかっただろう。

もし、昔の自分と会う事が出来たなら、何故そんなにゆっくりしていられる、あいつが憎くないのか、お前の蒼介たちへの愛情はその程度だったのか、などと罵詈雑言を吐かれる事だろう。

しかし……レインはそれでも、悠々とした態度を崩さない。怒ってはいる。

しかし、怒りに狂いはしない。

今は、大切なものを見つけたのだから。

「（蒼介の敵はもちろんとる。

でも……だからって、そのために今の日常を壊す事は出来ない）」

レインは、飲み終えた炭酸の缶を片手でゴミ箱に放った。
シュツ、ガコン。

……上手く入らなかったので拾って入れ直したのは余談だ。

「失礼、成瀬 レインハート君かな？」

自分の名を呼ぶ声に、レインは振り返った。

視線を鋭くしたまま。

男の声、背中越しでも分かる気。

結構な実力者だ。

目の前に立つ男は、真っ黒なスーツを着た男で、30代くらいの年齢に見える。

「何か御用でしょうか、ミスター？」

「突然済まないね。」

私は法務省に所属している、赤坂^{あかさか} 勝也^{かつや}と言う者だ」

言いながら彼、勝也は手帳を見せてきた。

「へえ……」

思わずそんな声が漏れる。

『武装検事』。

それが男の役職だ。

別に手帳に書いてあった訳ではないが……

法務省所属でこの実力と言われれば、思い当たる節は絞られてくる。
それが武装検事。

『公安0科』と呼ばれる、仕事にも殺人を許される『殺しのライセンス』を持つ連中と同等の戦力を持つ組織だ。

両方の構成員が、FBI捜査官百人からでも逃げ切れると自負するヒステリアモードのキンジでも、一人相手にするのに勝利は覚束無いという化け物組織である。

その二つの組織が日本で最強である事は周知の事実。

その構成員（恐らく末端だが）がこちらに用がある、と言ってきて、

警戒しないレインではなかった。

「あまり警戒しないでくれ……というのは無理な話か。済まないが、少し話を聞かせて貰っていいかな？」

「イ・ウーについてだ」

「なんだそんな事が、とレインは警戒を解いた。」

「まあ、元々戦闘能力ではレインが圧倒的に上だったため、そこまで警戒する必要はなかったのだが……」

「しばらく、イ・ウーの事件について詳細を話した。」

「もちろん、アリスの事は伏せてある。」

「……そうか、ご協力感謝する、『紫電の雷神』」

「そりゃどうも。」

「……ああ、えと赤坂さん？」

「？」

レインに呼び止められた勝也は、訝しげに振り返った。

レインはそんな彼の態度に苦笑しながら、用件をささっと伝える。

「シユウに言っておいてくれないかな？」

「部下はもつと鍛えた方がいいよ、って」

「なっ……！？」

武装検事構成員の友人の名を出しながら、レインは驚く勝也を尻目に雷神化する。

「バライ！」

という紫の閃光と共に、勝也の前から姿を眩ました。

第91弾 悪戯好き（後書き）

ミ「武装検事かあ〜」

綾「どうかしたのミチル？」

ミ「実は私のパパは武装検事さんなのでーす」

悠「ええ！？ 凄いじゃないですか！」

ミ「まあね〜」

静「しかし、武装検事も動いていたとは……やはりイ・ウーとやらの存在は大きかったようだな」

第92弾 緊急任務

第92弾 緊急任務

「うわあ……………」

「やばいわよ、静奈……………」

「先輩……………」

レインが病室に帰ると……………なんだか不穏な空気が流れていた。しかも静奈がどうかしたらしい。

どういう事なんだ、とレインが声をあげかけるが、当人らしい静奈の言葉に声を潜めた。

「うっ……………このままじゃ皆と一緒にられない……………」

「!?!」

ますます分からない。

皆といられない?

もしかして転校か何かか!?

「静奈!」

「うわっ、レイン!?!」

いきなり声を張り上げたレインに、静奈を初めとする皆が目丸くする。

「静奈、どどういう事なの!?!」

一緒にいられなくなるって!?!」

レインがそう言うと……………シーン。

……………?

皆が黙りこくってしまった。

レインが?? と頭に疑問符を浮かべている中……………静奈が顔を真っ赤にして、言いづらそうに答えた。

「あ、あのな?」

実は私……単位が足りてないんだ」
こけた。

リアルでこけるなんて思いもしなかった。
それほどある意味衝撃的な告白に、レインはただただ、頭を押さえた。

レインたちの通う東京武偵高は単位制で、単位が足りなければ悲しいかな、卒業やら進級やらが出来ないのだ。

一応、真面目に授業を受けて任務も色々していたはずの静奈が単位が足りてない事に多少の疑問を感じながら、レインは安堵と勘違いによる辟易から、ほう、と溜め息をついた。

「……まあ、転校とかじゃなくて良かったよ」

「そうだったら皆のリアクションももう少し良かったですよ」

「ああ……確かに」

彼女らの視線は、完全に哀れみの目だ。

絶対に転校する仲間を送り出そう、引き留めようなんて雰囲気ではない。

「まあ、2学期までには時間があるし……いくつ足りてないんだ？」

「0.5単位だ」

「まあ、緊急任務を受ければ問題は無いかもね」

単位が足りない場合のために、武偵高側もキッチンと救済措置をとってくれる。

それが、『クエスト・ブースト緊急任務』である。

この時期になると、単位的大幅に出る任務が任務板にたくさん張り付けられる。

夏休み10日前……キンジの怪我が治る頃には売り切れているだろうから、先刻の告白はある意味良いタイミングだったと言えるだろう。

「じゃあ、とりあえずSSRに任務探しに行こうか」

「済まない……」

申し訳なさそうに顔を俯かせる静奈に苦笑しながら、レインは自身

と静奈の学科、SSRの館へと向かった。

「……で、なんでお前たちもついてきたの？」

「別にいいだろう。」

「私たちも静奈を手伝いたいという気持ちは一緒だ」

と、女子らを代表しジャンヌが告げる。

「代表し、というのは……それに続きうんうん、と頷く綾瀬、ミチル、理子、悠、レキも同じ気持ちなようだからだ。」

「へえ、そりゃ心強いね。」

「……じゃあ、0.5単位以上の任務を探そう」

とは言うが、0.5単位以上の任務などいくらでもある。

緊急任務は本来、単位が1、最悪2不足している生徒のための救済措置だ。

故に、1単位を越えるものも多く、結果として選択肢が多すぎて迷う事となっただろう。

彼女が一般の科であったなら。

「参ったな……」

「そういい、彼女は目の前に並ぶ任務表を見て顔をしかめる。」

「お札の生成……は、専門知識が無いからだめだろう。」

「解説も専門外。」

「人を呪う……のは任務にいれちゃだめじゃないか。」

「教務科は何をしているんだ。」

と、心の中で愚痴りつつ、レインも静奈に出来そうな任務を探す。

別に、静奈の力が弱い訳ではない。

寧ろ、一般としては強いと考えていいだろう。

「能力を封印しているとは言え、静奈は白雪と同じAランクなのだから。」

「ちなみに、Gは6くらいだ。」

「こちらも一般としては高いくらいで、恐山でジャンヌに襲われたの」

は、レインは無理でも静奈は行けるかも知れない、という考えもあつての事だったのは、今となってはどうでもいい話だ。

「うーん、じゃあ結界張るのは？」

「パスだ。」

私は細かい作業は苦手なんだ」

「……我が儘は良くないよ、静奈」

「う、うるさいな。」

出来ないものは出来ないのだから、仕方がないだろう」

「はいはい……」

むすう、と膨れてしまった静奈を横目に見ながら、レインは再び依頼板を見渡す。

「じゃあこれは？」

唐突な提案に驚きながら、レインは声を発した少女、アリアの手の依頼に目を向けた。

「『超能力犯罪者への強襲、逮捕』……か。
却下」

「なんであなたに言われなきゃいけないのよ！

静奈、どう？」

「ああ、それなら私にもできるかも知れないな。

ありがたく受けさせて貰おう」

静奈はアリアの提案を鵜呑みにし、彼女から依頼紙を受け取るが…

…レインは未だ、眉をよせている。

「……静奈、危ないからやめた方が良くないか？」

それは静奈を心配しての事だったのだが……

「お前は私の保護者か。」

心配せずとも、武偵ならこれくらい逮捕できずにどうする？」

静奈はやれやれ、という風に心配性なレインを制す。

レインは静奈に言われ、渋々引き下がった。

静奈が任務を受注するのひ横目で見ながら、やっぱりやめた方がいいんじゃないか、という気持ちになったレインだった。

任務は4人で受けれるとの事で、静奈、レイン、アリア、レキが受ける事となった。

何故この面子かといえば、まず静奈は受注者なのだから当たり前で、レインは静奈の（強い）推薦による。

それなら、とレインとキンジのパートナーであるアリアが立候補したからである。

レキは、狙撃手は入り用というアリアの意見を組んでチームに入つて貰った。

本当はキンジも誘いたかったが、怪我人を無理に誘う必要も無く、この3人に落ち着いた訳だ。

もちろん、綾瀬やミチル、理子たちにも手伝ってもらおう。

逮捕する　つまり、武偵用語で強襲を掛ける要員は3人だけだが、事前に彼女らにその超能力者とやらの詳細を調べさせ、悠やジャンヌにオペレートしてもらおう方針だ。

何故そんな事をする必要があるかと言えば、依頼主の勝手だった、という話だ。

全くもって迷惑な話だ、とレインは溜め息をついた。

よくこれで教務科が通したな、という意味合いも強かったが、何よりやめるべきだといつても、静奈が止めようとはしなかった事に対しての。

彼女がどうしてここまでこの任務に固執するかは……分からなかった。

レインは、依頼主から送られてきた（依頼主との立ち会いは静奈が行ったらしい）資料を手にとり、眺める。

最近、依頼主の周辺では超能力犯罪者による事件が多発している。

それも、店などを無差別に対象にし、無差別破壊を行っているらしい。

なんでも、容疑者は身元、能力その他一切不明なのだ。
そして、レインが最も危険視している原因が、とある一枚の写真だった。

犯人は必ず、破壊する場合は粉々にする訳でも輝を入れる訳でもなく、両断するのだ。

何もかもを、真つ二つにし、そして切り刻む。

レインが危惧するその一枚に写っていたのは、とある宝石店。

ぐちゃぐちゃになり、赤や青、緑なんかの鮮やかな色の宝石が切り刻まれている中……一際強い輝きがあった。

それは……世界最強の硬度を誇るとされていた物質、ダイヤモンド。それが、両断されている写真だった。

これは、少なくとも素人の犯行ではない。

いや、熟練された達人クラスか　何か、特別なモノを持っているか。

どちらにせよ、気を引き締めなければならぬだろう。

レインは、水月を腰に掛けたのを確認し、辺りへの集中を深めた。

第92弾 緊急任務（後書き）

静「申し訳ない……」

綾「いいのよ静奈、私たちは怒ってる訳じゃないわ」

悠「そうですねよ、それに任務があるんですから早くレイン先輩と合流した方がいいですよ」

静「うう……済まない、行ってくる」

ミ「うーん、それにしても……なんだか、また出番が減りそうだな予感（ピキーン！）」

第93弾 襲撃者（前書き）

最近、またオリキャラが増えてきました……收拾つくのか、これ……

第93弾 襲撃者

第93弾 襲撃者

依頼主が住んでいるのは、東京の郊外の街だった。

そんなところで派手な行動を起こすなどかつての日本では考えられなかったが、現在の凶悪化した犯罪者は違う。

武偵や警察に足を掴ませないと豪語する者や、撃退できる、などと妄言を吐く輩も増えた。

そんな訳で、レインたちも警戒を怠る事なく、大規模でもないが小さくもない、街の商店街を歩いていた。

今までの犯行が無差別なら、犯人は愉快犯である可能性が高い。

愉快犯は人の反応を窺う節があるため、自然人の多い場所での犯行が増えてくるはずだ。

事実、レインが気にしていた写真の宝石店も、その商店街にあるものだった。

その商店街。

レキを一番高いビルに配置させ、アリアと静奈、レインの二組で辺りを巡回する事となった。

レインはふう、と溜め息をつき、改めて辺りに集中する事にする。まあ、端から見れば何が変わったのかは分からないだろう。

レインは、身体から微弱な電磁波を放っている。

周りの電化製品に一切の影響を及ぼさない程度に。電磁波の反射による周辺の把握能力だ。

それにより、あやしい行動をとる人間は察知できる。

そして……レインの感知の網に、あやしい人影が入り込んだ。物陰から、こちらを見つめてくる形でいるそいつは、レインが動く

とそれに合わせ、ベストな監視の位置を取っていた。

気配で察知できなかった事からも、相当な手練れだと考えられる

少なくとも、先日の武装検事、勝也程度には。

レインは、建物の角で曲がって、踵を返して静止した。よくあるパターンだが、慌てて追ってきた追跡者を、曲がり角を曲がる隙について捕縛しよう、という魂胆だった。

しかし、それは失敗、いや、中止に終わる。

レインが止まると　追跡者もまた、それを察知したように止まったのだ。

「！」
失敗しくった。

相手にも周辺、もしくは広範囲感知能力があったのだ。

当然、レインの目論見に感じた相手がとる行動は　逃亡。

「っ、待て！」

待つはずもない、お決まりなセリフを吐きながら、レインは雷神化、雷歩で空を駆ける。

男は、全身を黒いコートで覆っていた。

まるで恐山での晴夜のようなその格好で、レインの方を振り向かず走る。

が、所詮は地を這う蛇と、空を舞う鷹。

障害物に苦勞する追跡者を、いまや自分が追跡者となったレインが、ブロウの射程範囲に捉える。

「神妙に……」

レインはブロウを抜くと同時、引き金を引いた。

「お縄につけっ！」

ガウガウガウン！

三発の弾丸が発射され、レインの撃った弾丸は、地を駆ける追跡者には必中の銃弾。
の、はずだった。

チュイン！

聞こえたのは、地面のアスファルトを穿った銃弾の音。

追跡者の呻きも、防弾服に銃弾が突き刺さる嫌な音もしない。

そして、追跡者は目の前にいない。

幸いにか、先刻の電磁波を放ち続けていたレインは、背中に水月を構えた。

ガキーン！

という金属音と共に、背中水月が火花を散らす。

咄嗟だったもので、鏡花水月の発動が間に合わなかった。

だが、防ぐには、更には反撃するには十分な間を得た。

振り返り、雷弾を気絶する程度に抑えて放つ、つもりだった。

振り返ったレインは、己の目を見開いた。

そこに映るのは、かつての相棒が、愛用していた斧。

無骨な黒い装飾が僅かに施されてはいるが、簡素な、しかしそれ故

威厳を感じさせる。

この斧は　！

「よお」

黒いコートの男が、口を開いた。

「しばらく見ねえ内に、弱くなったんじゃないのか、レイ（・・・）」

「

レインを、レイと呼ぶ少年。

彼は、目深に被っていたフードを取り払った。

たぎる血のような、紅い髪が露になる。

薄いピンクのアリアとも、赤みがかった茶髪の悠とも違う、赤。

「アレックス……」

アレックス、とレインに呼ばれた少年は……その切れ長の碧眼を、

愉快そうに細めた。

バギイイイイ！

耳障りな、破壊音。

「アリア！」

「静奈！」

エンジンをやられたらしい自動車が、真つ二つになった。

現在街を警戒中の二人の武偵娘は音のした方向に振り返り、悲鳴を上げながら向かってくる人の波を避け、両断された自動車の前にたつた。

「これは……!?」

「静奈！」

警戒を怠っちゃ駄目よ！」

真つ二つにされた自動車を、呆然とした目で眺める静奈に、アリアはガバメント二挺を抜きつつ叱責、とまでは言わなくとも、注意を促した。

もともと、アリアの想像以上に、静奈の目の当たりにした惨状は、彼女にとって小さくない意味を持っていた事は、アリアはまだ気づいていない。

アリアは、静奈が目の前に両断された自動車が、逆に言えば相手の力量が自動車を両断する程ある事に直結する、そう考えていた。それはあながち間違いではない。

しかし、目の前の惨状依然に、参考資料として様々なもの 最終的にはダイヤモンドまで が、切り刻まれていたのは、静奈も重々承知のはずだった。

ならば、目の前の惨状を目にした静奈がこんなリアクションをするのは、アリアの考えとは微妙に異なると考えられた。

静奈が着眼しているのは、両断された自動車、ではなかった。

視界に入っただけはいた。

しかし、注視していた訳ではない。

彼女が注視し、おののいたのは その、切り口だった。

その、鮮やか過ぎる切り口。

地面にもその痕跡が残る、過剰とも言えるような斬撃。

だが、それらよりも遙かに目についたのが 微弱に残る、自身と同質の超能力の残り香、だった。

「……静奈!？」

どうしたのよ、静奈？」

未だ警戒を解かない、寧ろ強めるアリアに言われ、静奈は自分の身体が震えている事を自覚した。

「あ、アリア……怖い……私、は……怖い……！」

「お、落ち着きなさい静奈！」

この自動車が破壊されたのはたった今！

敵はすぐ近くにいるのよ！

だから警戒を……うっ！」

アリアが静奈を立ち直らせようとしたセリフは、しかし遮られた。

アリアの腹を、『何か』が貫いた事によって。

「あ、アリア！」

「静奈！」

警戒を怠らないで！

死ぬわよ！」

「っ！」

アリアの、今度こそ強い叱責に、静奈は伸ばした腕を引っ込め、常に形態している水の入った、大きめの瓶の蓋を取った。

これは、超能力を上手く水に伝播させる謂わば良導体である水だ。

だが、別に純水な訳ではない。

よく書道で、その日の朝に、草から零れた雫で書をする、などという事がある。

それはSSR的な視点で言えば、微弱な超能力の一種である、と考えられている（高がまじないのようなものだが）。

それを、水を自在に操る静奈は利用したのだ。

もっとも、こんな気休めのものは通用しない、という事は分かっていた。

静奈は、ゆつくりと、頭上　超能力を一際強く感じる　へと、

面を上げた。

そこには、漆黒と純白が入り交じった髪をした、まだ若い男性が立っていた。

浮………している水の上に。

「……………静奈。」

体調は……………大丈夫そうだな。
なによりだ」

頭上から降る声に、アリアは上を仰ぎ見、静奈は肩を抱えて震え始めた。

「あんた……………何なのよ！
なんで静奈の名前を知ってるの!？」

叫んだのは、言うまでもなくアリア。

対す男は、冷笑、そう呼ぶに相応しい冷たい笑みを浮かべ、自らの名を語った。

「君とは初対面だったな。」

私の名は 朝露 あさつゆ 信季 しんき。

静奈の兄だ」

「なっ……………!？」

反応する間もなく。

アリアの首から上に、球状の水が張られた。

「……………!」

息の出来ないアリアは必死にもがくが、手で離そうとしても水に手を突っ込むだけ、動いても水は離れない。

確実に、アリアの体内の酸素は奪われていった。

「殺しはしない。」

気絶してもらっただけだ」

そして、アリアの身体の動きがほとんど鈍ってきた。

そろそろか、と信季がアリアを無表情に眺めていると……………

バシユッ!

水が、切り裂かれた。

「ぶはっ!

はあ、はあ……………あ、あんたたち!」

アリア、信季、そして未だ呆然とした静奈の前に現れたのは……………

「遅れちゃってごめんね、アリア、朝露さん」
言いながら、ほうっ……

と刀、イロカネアヤメに焰を灯す、白雪と。

「月並みだが……助太刀に来た」

聖剣デュランダルをザクツ！

と地面に突き刺し、地表を凍らせる、ジャンヌの姿であった。

第93弾 襲撃者（後書き）

ミ「今回は静ちゃんが色々大変なため、私たちが喋ります」
綾「静奈、大丈夫かしら……兄に酷く怯えていたようだけど」
悠「先輩の方も、アレックスさんで誰なんですかね……？」

第94弾 雷神の元相棒

第94弾 雷神の元相棒

「アレックス……お前が、どうしてここに……!?」

レインは目を見開き、赤色の髪を靡かせるアレックスに問い掛ける。

「ああ？ いちゃ悪いのかよ。

連れねえなあ、レイ。

ひさびさの再会だったのに、よっ！」

「ッ！」

その返事は、斧による再度の一撃によって聞くことはままならなかった。

「なら、どうして俺を尾行するような真似をしていたんだ！」

「どおでもいいだろ、んなこたあ！」

それよりレイ、久しぶりに遊ぼうぜ？

鍛え直してやるよ」

「……上等だ！」

片手を上げて挑発してくるアレックスに、レインは水月を構えたまま突っ込んだ。

「おいおい！」

無防備過ぎんぜレイさんよお！」

言いながら、その場で斧を一閃。

轟！

という音と共に、激しい風が吹き荒れ……バシユバシユッ！

レインの身体の至るところに、赤い血を滴らせた。

だが、レインは顔をしかめながらも止まらない。

「どうしたあ！」

その程度、俺といたときなら余裕で避けてただろおが！」

言いながら、アレックスは斧を構える。

すると……その先端に、竜巻のように風が集まった。

「おらぁ！」

それを降り下ろす。

竜巻が、名の通り竜のごとき形を作り、レインに迫る。

しかし……

「……まずったか？」

冷や汗をかいているのは、アレックスの方。

その原因は、ニヤリ、と微妙に口角を上げたレインであった。

何か来る　！

それを直感し、アレックスは人間にはあり得ない跳躍を見せ、その場から離脱した。

レインの真上。

指を二本ずつ重ね、彼の超能力を放とうとする、が。

「『鏡花水月』！」

叫び、鏡花水月で先の竜巻を、アレックスに向けて反射させる。

「……！」

くそがあ！

そんなのありかってのお！

驚いたのも一瞬で、すぐに平静を取り戻したアレックスは、先の指先から、見えない何かを放った。

ズシャアアアアア！

二つの技が交錯し、それを相殺した。

威力は竜巻の方が上だったが、レインと接触した分威力が落ちていたようで、なんとか相殺できた。

アレックスがほう、と安堵の溜め息をつく……バシユッ！

もうもうと立ち込める煙を切り裂いて、レインがアレックスの後ろに回り込んでいたのだ。

「はあっ！」

「ちいっ！」

レインが鏡花水月を振ると、アレックスはそれに反応して斧でガードした。

今回はアレックスがガードした側なので、鏡花水月の反射は適應されない。

「……………」

しかし、アレックスは先の竜巻を反射した刀の一撃を貰い、骨折の想像もしていたためか、意外感が大きかった。

「何呆けてんだよ！」

レインは、呆然とするアレックスを回し蹴りで吹っ飛ばした。

近くの廃ビルの窓を割りながら飛んでいくアレックスを、レインは雷歩で空を駆けながら追う。

「……………レイよお。」

前言撤回だ。お前は強えよ。

だが……………注意力なんかは直ってねえみたいだな」

「……………」

レインは、訝しげにアレックスの話を聞いているだけ。

そんなアレックスが……………口を、開いた。

「今回の事件に関わってんのが、俺だけだとも思ったか？」

「……………」

アレックスお前！ 静奈やアリアに手を出すつもりか！」

「アリア……………へえ、あっちのチンマリしたのはホームズのガキだったのか……………なら、ぶっ殺す」

「！ 待て、アレックス！」

お前の相手は俺……………ぐっ!？」

アレックスを追い掛けようとしたレインは、身体を翻してその一閃を避けた。

が、防刃制服の上から切り裂かれた腕から血が滴り、苦悶の表情を浮かべた。

この感触……………高速振動して切れ味を上げる、レインの雷刃と似た『高周波ブレード』だろう。

先のアレックスと同じように、黒いコートを羽織った者が、3人。
「なんだお前たち……そこを退け！」

男たちはレインのセリフに答えず、一人 先ほどの高周波ブレードの男とは別の男 はアレックスに視線をやった。

「おい、『風神』。」

アリアを殺すようなら、俺がお前を殺すぜ。

よく覚えておけよ。

俺が、俺たちがあの男に従っているのは……」

「へいへいオーケー分りましたあ。

まあ、てめえごときじゃあ俺を殺せる訳あねえがな」

男の一人のセリフを遮り、アレックスはその男を罵倒してみせる。

心なしか、いや、確実に、雰囲気は剣呑なそれになっていく。

「舐めるなよ……俺には、お前を倒す『切り札』がある」

男の『切り札』という単語に反応したのか……アレックスの口元が、
邪悪に歪んだ。

「上等だ。

何なら、今ここで ツ！」

恐らく、男との戦闘を始めようとしたであろうアレックスは、飛び退いた。

刹那、チュイン！

と、コンクリートの床が火花を散らし、穴を空けた。

反射的に窓から外を見る。

視認は出来なかったが、恐らくレキの銃弾だろう。

「狙撃ねえ……興が冷めた、ってこういう事かよ。

まあいいや……ボコすだけにしといてやるよ！」

「ッ！ 待て！」

黒いコートの男が袖から、腕時計のような黒い機械を見せる。

が、そこから何が射出されるかは、分からなかった。

発射されなかったからだ。

「……ちっ、撤退命令か。

どうやら、朝露の姫の奪回に成功したらしいな。

仕方ねえ、ホームズのガキを殺すのはまた今度にしてやるよ」

そのまま、アレックスはくるり、と踵を返した。

「待て！」

朝露の姫、って静奈のことなのか！？

奪回ってどういう事だ！

おい、アレックス！」

「またな、相棒」

それだけ言い残すと……アレックスは窓を伝って外に飛び降りた。
続くように、黒いコートの男たちが続いていく。

「くそっ！」

レインが駆け寄ろうとするが、男の一人が、掌を向けてきた。

その掌から、轟炎が吐き出される。

「ッ！」

咄嗟に鏡花水月を盾にするが、それで炎を反射した時には、目の前に男たちの姿は無かった。

「……ちくしょう……！」

レインは窓から外へ出て、レキの待機しているビルへ向かった。

幸い、レキに襲撃者は無かったらしく、レキにオペレートされるまま、レインはアリアと、居るかは分からない静奈の元へ向かった。

惨状。

それが、目の前を表すのにもっとも適した表現だろう。

激しい戦闘痕。

隕石が衝突したかのようなクレーターがそこかしこにあり、それよりも目立つのが、無数の太刀傷だった。

「……！」

アリア、白雪、ジャンヌ！」

倒れた3人を発見し、抱き起こした。

「ごめん……レイン、静奈は、拐われたわ……」

「……傷が深い、喋るな……！」

アリア、ジャンヌを抱きかかえると（白雪はレキが連れてきたハイマキに任せてある）、レキが呼んでおいたという、救護科のヘリが飛んできた。

その中から、心配そうにこちらを見つめてくる、理子、綾瀬、ミチルを見て、そして、静奈が拐われたにも関わらず、立ち往生している自分の無力感を感じて。

レインは歯を噛み締め、一人で、虚空を見据えて呟く。

「静奈……っ！」

第94弾 雷神の元相棒（後書き）

悠「という訳で……皆様からお借りしたキャラの登場です」

ミ「今は敵方だけど、ちよっと我慢しててね」

セリフからも分かる通り理由ありきで悪役って訳じゃないし、その

内…… な展開にもなるから」

綾「それ、私たちが言っている事なのかしら……伏せ字だし。

ああ、これもご都合主義って奴？」

ミ「違う違う。」

私たちは本編とは別時空からお送りしているから」

悠「先輩、またメタな……」

第95弾 朝露の鬼才（前書き）

新しいオリ話を思いついてしまいました……！

やばい、書きたい！

その内予告編でも書きたいですね。

第95弾 朝露の鬼才

第95弾 朝露の鬼才

レインがその現場に辿り着く、少し前。

「ほう……聖騎士、ジャンヌ・ダルクの子孫に、卑弥呼の末裔、星伽の巫女か

……相手としてはもの足りんな」

一瞬で自分たちの正体を見破り、更に、もの足りん、と罵倒しつつも更にその気迫を強めた信季に、ジャンヌ、そして白雪はそれぞれの得物、東西最強クラスの刀剣を握る手を強めた。

「アリア……下がってて、なんて余裕な事は言ってられないみたい。隙を見てサポートして」

普段ならキンジを巻き込むいざこざで、絶対にアリアと合わせようとしないう白雪が、自分から支援を要請してきた。

それがどのくらいの意味を持つのか、分からないアリアではない。

同時に、ジャンヌが隣にいるにも関わらず、だ。

アリアは無言でホルスターから弾倉を抜き、新たに、ガバメントの銃弾のサイズに合わせた銀弾の入った弾倉に挿し換えた。

「ふっ……私たちではもの足りん、か。

その言葉……すぐに改めさせてやる。

行くぞ、白雪、ホームズ……!!」

ジャンヌが、先陣を切って駆け出す。

「はあああああ!!」

デュランダルは刀身を銀氷が覆う。

そのまま辺りを凍らせたジャンヌは跳び、デュランダルを信季に降り下ろした。

「聖剣デュランダル……なるほど、良い剣だ」

その切れ味を一目みて理解した信季は受けることを放棄し、身体を

翻してかわした。

「それで避けた……つもりか！」

ジャンヌはデュランダルを刺さった地面から引き抜き、その勢いのまま信季に逆袈裟斬りで斬りかかる。

信季はそれを屈んで避ける。

「甘い！」

ジャンヌの一喝と共に、彼女の背から、イロカネアヤメに焰を灯した白雪が、既に刀を振りかぶった状態で現れた。

その頭の封じ布は解かれており、序盤から本気である事が窺えた。

「星伽候天流 緋火虞鎚！」

白雪がその剣技の名を紡ぐと同時に、紅い焰が信季に襲い掛かった。しかし、白雪とジャンヌの顔には未だ警戒の色が見て取れた。

「……中々、いい斬撃だ。」

だが……やはり子供か」

バシユツ！

ジュウ……

白い水蒸気を上げて、白雪の焰が消火された。

立ち込める水蒸気の霧が、風を受けて晴れた先。

そこには、何事も無かったかのように悠々と佇む、信季の姿があった。

「……！」

「狼狽えるな、白雪。」

確かにこの男の力は脅威だが、勝ちの目はある」

そう言ったジャンヌのこめかみにも、冷や汗が滲む。

信季の力が、予想を遥かに上回っていたのだ。

そんな焦る二人をまじまじと見つめ、信季は何事もないかのように呟く。

「ふむ……君たちは中々美しいな」

「……？」

美しい。

そんな事を真面目に（どこか白々しくも聞こえるが、それ故茶化したりそういうものではない事が分かった）言われ、二人は赤面する。だが……それは、すぐに冷める事となる。

それもまた、他ならぬ信季の言葉で。

「今引くなら、君たちには手を出さないと約束しよう。

心配せずとも、俺は静奈の兄だ。

静奈を渡してさえくれれば、すぐにここを
「
ピッ。」

流暢に話し始めた信季の頬を、生温い液体が零れ落ちた。

「白々しい事を。」

私たちが何も知らずに貴様と闘っていたとでも思ったか？」

「……なんだと？」

ジャンヌの挑発気味のセリフに、信季の眉がつり上がった。

それに続くように、白雪が言葉を発した。

「『海神』 ですよね。」

貴方の目的は「

「……そうか、知られていたのか」

「朝露さんを渡す訳にはいきません。

もちろん、彼女が『鍵』だからという理由もありますが……それ以上、彼女、静奈さんの友人として」

言い、白雪は静かにイロカネアヤメを、腰に据えた。

「私も同意だ。」

何より、貴様は既にホームズに手を出している。

誰が信じると言うんだ？」

ジャンヌも、デュランダルを肩上に据え、信季に切っ先を向けた。

「そうか……残念だ」

轟！

信季の言葉を聞いた途端、ジャンヌと白雪の身体が強張る。

強者の秀囲気に飲まれた二人は、しかし直ぐ様、反射的に体勢を立て直した。

信季が、高速で肉薄してきたのだ。

「ッ！」

一步後ずさるジャンヌに対し、一步後退する白雪。

白雪が臆病風に吹かれた訳ではない。

彼女は、ジャンヌが信季を相手取る一瞬で、自身最強の技の準備を整えた。

対しジャンヌは、白雪の技のために、自身最大の技を相手にぶつける。

互いに互いを信頼してなければ、少なくとも咄嗟には出来ない陣形。かつて敵として対峙した二人の、新たな関係が感じられる一幕だった。

「『オルレアンの氷花』」

ジャンヌの聖剣デュランダル先端から、青白い光が瞬き

「！」

咄嗟に信季は水で盾を（もしくはバリアか）造るが、それも狙い通り。

信季の水を、ジャンヌの氷が凍らせた。

「白雪！」

「星伽候天流、緋緋星伽神、二重流星　！」

刹那、爆音がその場を支配する。

およそ相手のサイズに合わない巨大な焰が、辺り一体を飲み込んだ。

「……………油断するなよ、白雪。」

あれを食らって動けるとはさすがに考え難いが、あいつは強い。

少なくとも、私や、お前よりも遙かに」

ジャンヌはデュランダルの切っ先に青白い光を灯し、いつ信季が出てきてもいいように構える。

白雪、アリアも同様だ。

やがて、白雪の一撃で立ち上った炎、その黒煙を切り裂いて、信季が出てきた。

「……………無傷……………！」

白雪が、驚愕に顔を染めた。

自身最大の一撃は、信季に傷一つつけていなかった。その衝撃が
らか。

反応するのは、超能力感知に劣るアリアより一瞬遅かった。

目の前に、信季が迫っている！

「ッ！」

咄嗟に信季にイロカネアヤメを突き立てる。

それは確かに、信季の腹を通過した。

しかし、白雪の手には、視界を覆う状況と一致しない情報が送られてきた。

斬った感触がしない。

それを感じたのを合図としていたかのように、信季の身体が、ザパ
ア、と音を立てて崩れた。

水面に映った、影　！？

自分が斬ったものの正体に気づき、後ろを振り向こうとした白雪の
首筋に、とん。

静かな、一撃。

「……………あつ……………！」

白雪は弱々しい声を上げて、その場に倒れ込んだ。

その白雪に、水で形成した槍を向ける。

「…させるかあつ！」

二人同時の叫びに、しかし信季は動じない。

アリアが両手のガバメントから吐き出した計六発の弾丸は、全て信
季に当たる前に粉碎された。

レーザーのように一直線に放たれた水だろう。

対超能力者用の銀弾は、しかしその役目を為さなかった。

驚愕するも一瞬で立て直したアリアは、もう一度銀弾を放とうとする。
る。

が、先の白雪と同じように、一瞬で間合いを詰められ、首筋への一

もな。

腕利きばかり雇ったが……」

「……！」

白々しい、と静奈は吐き捨てるように心に思った。

この男の言う『雇う』には、大抵なにか相手が反抗できないような条件を伴うものなのだ。

「さて……そろそろ行くか。」

公安の犬やらに追われても面倒だ」

そついい、立ち去ろうとする信季、それに続く静奈。

しかし……

「静奈……いつちや駄目よ……！」

アリア、が。

掠れた声で、そう訴えかけてくる。

「あんだ……レインを信じてるんでしょ。」

なら、そんな奴の言うこと聞いちゃだめよ」

アリアの、強い意思を秘めた瞳を見据え　しかし、静奈は踵を返した。

「済まない、アリア。」

だが　私は、お前たちを巻き込みたくない」

その言葉に、信季が満足気に頷く。

そして、水の道が、二人の前に現れた。

去っていく信季、静奈。

アリアは、意識を手放す寸前に、見た。

静奈の口が僅かに動き、目から涙が溢れるのを。

強襲科で習った読唇術を当てはめると、その言葉は、

さよなら

そして　アリアの意識は、途切れた。

第95弾 朝露の鬼才（後書き）

綾「……………」

悠「……………」

ミ「……………静奈、泣いてたよ……………」

悠「……………レイン先輩、早く静奈先輩を助けないと、徒友契約を切り
ます」

綾「……………信じてるよ、レイン君」

第96弾 救出作戦（前書き）

オリ話からのく決戦！？
展開早い……我ながら。

第96弾 救出作戦

第96弾 救出作戦

救護科のへりに同乗し、レインは一旦武偵高に戻った。

レインはミチルに部屋に呼び出され、自室にいる。

「レイン。」

静ちゃんが拐われたんだよ。

いつまでもボサツとしてないで、早く作戦立てるよ」

言いながら、ぽむぽむ、とミチルがソファを叩く。

今この場にいるのは、レイン、ミチル、綾瀬、悠、理子、レキ。

そのそれぞれが、レインを囲むように配置されていた。

「ああ……頼む」

覇気の無い声。

しかし、そこにやる気の欠落や、ましてや落ち込みなどの負の感情は一切見てとれない。

「……随分落ち着いてますね？」

「……早く静奈を助けなくちゃいけないから。」

あいつは、泣いてた。

助けて欲しいんだ。

なら、一刻も早く助けなくちゃいけない。

迷ってる暇なんてどこにもないさ」

レインは静かに、それでいて揺るぎ無い意思を感じさせる口調ではつきり告げた。

皆、口元には微笑を浮かべている。

今、自分たちより静奈が優先されている事など、とくに彼女らの頭からは弾き出されている。

これでこそ、自分が惚れた男だ。

そう胸を張って言える、そんな雰囲気醸すレインを、満足気に見

詰める少女たちであった。

「はい！」

静ちゃん奪還作戦会議、司会は理子りんでお送りします！」

シリアスな空気を和ませる程度の軽いノリで、理子がホワイトボードの前に立つ。

目の前の机には投影機があり、そこから細かな映像が映されるようだ。

「じゃあまず、朝露　信季がなんで静ちゃんを拐ったかを説明しないとね」

理子がそう言うと、信季の姿が映された映像がホワイトボードに映し出される。

「信季は、静ちゃんのお兄ちゃんなの。」

元々は落ちこぼれとか呼ばれてたくらい、朝露の家では厄介者扱いだったんだ。

それが原因で、彼が中学の時家を出た。

それだけなら丸く収まったんだけど……数年後、静ちゃんが中学の頃、朝露に強襲を仕掛けたんだ。

馬鹿な話だよ、朝露は日本でも指折りの名家なのに。

でも、信季は朝露本家の人たちの十分の一を相手取り、更にその内半分を殺害した。

静ちゃんは奥の間にいたらしいけど。

その後、信季は重傷を負いながら、朝露の秘伝書を持ち出して逃走した。

そして、それが今回静ちゃんを狙った目的なんだよ」

理子は一旦言葉を区切り、ミチルと綾瀬にバトンタッチする。

彼女たち、東京武偵高でもトップクラスの情報科二人で調べたのなら、名家の秘伝書の中身だろうが容易に手に入ったはずだ。

「信季が持ち出した秘伝書には、とある古代兵器が記されていたん

だよ。

海神　つまり、ポセイドン、って名前のね」

「古代兵器……？」

「ええ、遙か昔、朝露の始祖が異国の友と協力して製造し、しかし強力過ぎて二人に封印された、最凶の兵器よ。」

しかも最悪なのが操縦法で、海王を動かすには朝露の若い女を捧げなければいけないの。」

恐らく、それが静奈が拐われた理由」

古代兵器、そんなものを動かしてまで、信季は朝露に復讐がしたいのか。」

そんな考えは、レインの頭によぎるところか、掠りさえしなかった。そんな下らない兵器を動かすために、静奈を犠牲にしようと言うのか　許せない。」

レインは拳を握り締め、二人の次の言葉を待った。

「信季が向かった先は、太平洋沖合い、その深海にある神殿、海ノ都　『アトランティス』。」

レインたちも潜入してもらおうよ」

コク、と頷き了解の意を示す。

尚、古代兵器を封印しているだけあり、その神殿は海中に入り口のある遺跡のようなもので、中に入って暴れても全く傷がつかない程の強度と、地上と変わらない活動のできる酸素があるらしい。」

「問題は私たちと敵方の戦力よ。」

今潜入できるのはレイン、理子、レキ。

私たちがじゃ実力が違いすぎて足手まといになるから、今回は（も）お留守番ね。」

対して相手は、信季に『風神』アレックス、謎の男3人。

あの男たちは、細かな情報を照合しても世界中の人間に当てはまらなかった、本当に謎の存在よ。」

それを差し引いても、単純計算で3対5。」

結構厳しい」

「ちょっと待って下さい。

俺も行かせてもらいますよ」

敵との戦力差に、顔をしかめて見せた綾瀬の言葉を遮ったのは

「キンジ!?!」

防弾制服に身を包んだ、怪我人であるはずのキンジだった。

「私とジャンヌもいるわよ。」

白雪はまだ起きれてないけど」

「アリア、ジャンヌ!」

更には、先の戦闘で傷ついたはずのアリア、ジャンヌまで戦闘参加の意を示してきた。

その瞳を見れば……怪我をしているから寝てる、なんて言うのは野暮ってものだろう。

「……ありがとう、3人とも」

レインは素直に、3人の協力をただ感謝した。

「さて……俺は『風神』って奴をやらせて貰う。

パートナーへの殺人予告を、黙って見過ごしてはられないからな」

「私もキンジと一緒に戦うわ。」

自分の身は自分で守る。

それに、パートナーが私の戦ってくれるなら、私もパートナーのために戦わないとね」

二人は微笑しあい、拳をコツン、と合わせた。

「なら、私とレキユ、ジャンヌは黒服3人の内誰かを相手取って、もちろんレインは……」

「ああ。静奈の奪還、信季の逮捕、だよな。」

皆に譲る気は無いし、絶対負けないから安心して任せてくれ」

この場にいる全員が、言われなくても、そう言いそうになる口をつぐんだ。

潜入メンバーはレイン、キンジ、アリア、理子、レキ、ジャンヌの六人。

彼らは今、武偵高車輜科のドックにいた。少し前、パトラのアンベリール号に向けて、過激な送り出しが行われたのはまだ記憶に新しい。

そんなトラウマを掘り起こされそうになりながら、レインは使用する小型潜水艦、それを弄る武藤がこちらに気づいたのを見て、意識をそちらに切り替えた。

「よおレイン、朝露が大変らしいな。さくつと助けてこいよ」

「ははっ、簡単に言うね、武藤。

そっちの手筈は？」

「バツチりだ。」

乗れよ、居心地サイコーだぜ」

言われるがまま内装を確認すると、確かに中々居心地が良さそうな空間だった。

「ほお……やはりお前は天才だな、武藤。

何故お前がAランクなんだ？」

ジャンヌがそれとなく聞くと……武藤の顔が、僅かに曇った気がした。

それにいち速く気づいたレインは、慌てて話を逸らす。

「ジャンヌ、それ以上はNGだよ。」

武藤、いつも済まないね。

ありがとう」

「良いつて事よ。」

俺だって単位貰ってるし、仕事の内だ」

武藤は照れ隠し気味に笑い、最後の仕上げ、と潜水艦の調整を終えた。

「さて……じゃあ、突入するよ、皆」

レインのセリフと同時に、突入メンバーが潜水艦に乗り込んだ。
目指すは水中都市、アトランティス。
潜水艦は僅かに音を上げながら、静かに発進した。

第96弾 救出作戦（後書き）

悠「なんか僕、いつも出番少ないような……」

ミ「キャラ多いんだから仕方ないよ」

綾「恨むなら全員を上手く動かせない作者を恨みなさい」

悠「でも……」

ミ「当初は悠も戦闘に参加させるつもりだったらしいけど、弱すぎて中止したらしいよ」

悠「ちよつと作者殺してきます」

第97弾 水中都市・アトランティス

第97弾 水中都市・アトランティス

どのくらい水中を進んだらうか。

操縦を理子に丸投げしたレインは、じっとしたまま、潜水艦の壁に寄りかかっていた。

レキ、ジャンヌも同じで、後はアリアとキンジが中央でいつものようにイチヤイチャコントをしていただけだった。

「ん〜、そうだキー君。

これあげる」

操縦している理子が片手をあげ、キンジに一枚、折り畳み式のカード？ のようなものを渡していた。

「なんだこれ？」

「いざ、って時に開けるといいよ。

良いものが入ってるから」

キンジが「武偵弾が何かか……？」と呟いているが（ちなみに武偵弾とは武偵が使う必殺兵器で、一発百万は下らない一流の武偵にのみ流通する銃弾。閃光弾、炸裂弾、音響弾など種類は様々で、銃弾職人にしか作れないらしい）レインの予想は多分違う。

あれはもつと、何と言うか……マズイもんだ。

理子の悪どい笑みを横から見ていたレインは、キンジに陰から合掌した。

そんな一幕もあり、いい具合にリラックスできた一同の船は、アトランティスのある海域に到達した。

その外観が明らかになり……思わず、感嘆の声を洩らしてしまう。

「凄い……」

正に、城。

ゲームの世界にあるような城が、そのまま海中に沈められたような感じだ。

しかも見る限りでは、地中にもそれは繋がっているらしく、規模がですぎて分からない。

「お誂え向きかもね、拐われた姫様を助けるには」

「違ういな」

ジャンヌの賛同を受け、冗談半分だったレインは苦笑した。

「どこから入るんだ？」

「あそこだよ」

キンジの問いに答えた理子が指差した場所には……何も無い。

「どういう事？」

「……皆さん、しっかり掴まっていた方がよろしいかと」

「……？」

レキの言葉に、レイン、キンジ、アリアは首を傾げる。

レインは言われた通りキチンと手近な取手に掴まっているが、キンジとアリアはボサツとしていて反応出来てない。

やがて、何もないように思えた場所に潜水艦が近づくと……グアン！

「うわっ！？」

潜水艦が、急に速度を上げ、横向きに動き出した。

キンジやアリアはひっくり返っているが、頭は守れているようだ。

「今のって、まさか……」

「そ。海流だよ。」

これで、中まで一直線に運んで貰うの」

「ッギヤアアアア（キャアアアア）！」

反論する間もなく、右へ左へ、時には上に下に、潜水艦が揺れる揺れる。

常人なら普通に乗る物酔いするであろうそれを、シートベルトもつり革も掴むところも無しに立っていたアリア、キンジは最早もみくちゃになっている。

「！ 見えてきたよ！」

理子のセリフに、二人はようやく掴まった……互いの裾に。
小さな、ぎりぎり潜水艦が入れるような正方形の穴に、ボディを削りながらもなんとか入る。

そのまま滑るように進んでいき……光が見えてくる。

「~~~~~!」

二人もそろそろ限界のようなので、助かった。

……などと思うのは総計だったようだ。

スポーツ、なんて音が聞こえそうな勢いで四角い水路を飛び出した潜水艦は……宙を、舞っていた。

「……………え？」

重力に逆らわず、潜水艦はそのまま真下に落下していく。

「死ぬううううう!?!」

ザッパァン!

しかし、どうやらそのすぐ下に排出された水があったようで、潜水艦が激しく上下に揺れただけだった。

しかし……

「キンジ、お前……………」

掴まっていたレインたちは無事だったものの、互いの裾を掴み合っていたアリア、そしてキンジは……アリアの胸に顔を押し付ける形で倒れていた。

「う、う〜ん……………やっとついた……………って、ききき、キンジ!?!」

あんた何してんのよ!?!」

「ふう……………ごめんよ、アリア。

君を下にしてしまうなんて……………どうにかして償いたい」

キンジはどうやらヒステリアモードになったようだ……………まあ、その方が都合のいい事も事実だけでも。

「そ、そういうことじゃなくてえっ!」

「ハイハイ、イチャイチャすんのはそれくらいにして、行くよりア充さん」

キンジとアリアの微笑ましい空回りは、理子の一言で一先ず止む事

となった。

ジャンヌの超能力で海水の上に道を作り、潜水艦から出た一同はアトランティス内部への潜入に成功した。

さっきの潜水艦を止めた場所には、どうやら刻印術式によって半永久的に海水を外と内に循環させており、アトランティス内部に海水が入らないようにしてあるようだった。

そんな場所からぼっかりと開いた入り口から入った一同は、先頭からレイン、キンジ、理子、レキ、アリア、ジャンヌの順で進んでいた。

レインが先頭なのは電磁波によるソナー擬きで敵、及びトラップを感知するためという理子の提案であり、そしてそれは最善の判断だったと言えよう。

レインが片手をあげる。

あらかじめ決めていたストップの合図だ。

レインがダガーを一本取り出し、シュツ、と静かに投げる。

スコン、と小気味のいい音が響いた刹那、横の扉が開き、ダガーに容赦無く火炎を吹き掛けた。

「……………」

皆が両手で炎の光から目を守る中、唯一人銃を構えていたレキが、引き金を引いた。

炎の中を貫通し、見えない目標へ向かったそれは、ガキーン！

という金属音から鑑みるに、弾かれたのだろう。

炎に遮られ見えないはずの銃弾を弾くとは、相手の力量が窺える。

「はあ……やっぱ 火炎放射器じゃあ無理か」

溜め息混じりのセリフ。

それが聞こえた後、一瞬遅れて 炎が、燃やされた……………。

炎を飲み込んだ炎は、血のように紅い色をしている。

その炎が左右に分かれ、出てきたのは赤い刀身のサーベルを握った、赤い髪の少年だった。

「この炎……炎を焼いてる……!?!」

「その通り。」

こいつは『地獄の業火』^{ヘル・ファイア}。

さて……悪いが、俺にも帰るべき場所があつてな。

焼かせて貰うぜ」

少年が片手をあげ、掌から紅い炎　地獄の業火を放ってきた。

先頭にいたレインは避けようと身体を僅かに動かしたが、それは憚られた。

バシユツ!

氷の盾を、地獄の業火が熱し、蒸発させた。

「ジャンヌ、お前……」

「目には目を、超能力者には超能力者を、だ。

何も言うなよレイン。」

こいつは私がやる」

レインの前で、彼を守るように立ち塞がったのは、『銀氷の魔女』、

ジャンヌ・ダルク30世だった。

「……分かった、任せる。」

絶対無理はしないでね、ジャンヌ」

「レイン、お前は誰に向かって言っている。」

私はお前に負けてから、日々研磨を絶やした事は無い。

かつての私と同じに考えていると　凍るぞ」

ピキィ……ン。

ジャンヌのセリフが具現化したように、少年の左右で燃え盛っていた炎を凍らせた。

「……わ、分かった。」

じゃあ、頼んだよ!」

ジャンヌは聖剣デュランダルを抜き、少年に斬りかかる。

少年は赤いサーベルでデュランダルを受けて、獰猛な笑みを浮かべ

た。

レインたちが横を通るが、彼の視界には既に入っていないかった。

「地獄の業火を凍らすか……面白え。」

お前、名は？」

「ジャンヌ・ダルク30世、そして聖剣デュランダルだ」

「ほお……あの聖騎士の末裔か。」

俺は……イア。

そして相棒、フィアンマ・ベーゼ。

さあ……燃えて行こうぜ！」

イアが叫ぶと、彼のサーベル……フィアンマ・ベーゼに炎が灯る。

負けじとジャンヌもデュランダルに氷を纏わせ、互いに切り結んだ。

第97弾 水中都市・アトランティス（後書き）

悠「キンジ先輩……なんだか残念です」

ミ「まあそれはともかくとして、今回登場したイア君はファントム
レイン様の作品から拝借したキャラだよ」

綾「ファントム様、ご協力ありがとうございます。」

気になる部分がありましたらプーモまでご通知下さい」

第98弾 対決(前書き)

さあ……バトるぜえええッ！

第98弾 対決

第98弾 対決

イヤという少年をジャンヌに任せ、レインたちはアトランティスを進んでいた。

古代都市という割には、トラップというものがまるでない。いや…… あったのだろう。

しかし、信季たちが突破、あるいは破壊し、結果としてレインたちの通る道を作る事になった。

その道を通っていくと、やがてやたらと広い空間に出た。

そこは様々な高さの柱が立ち並んでおり、その上には皿のような石板が設置されていた。

また、床には水が張っていて、歩けば音が鳴るような場所だった。

「よう…… 『紫電の雷神』。

待ってたぜ」

その柱の上に立つ、男。

女性と間違っような端整な顔に高い声に、思わずレインは……

「あれ…… 女？」

踏んでしまった。

彼の地雷を。

ピクピク、と彼のこめかみが動いた直後、彼は両手を交錯させ、ホルスターに手を突っ込んだ。

「だあれが…… 女だこの野郎！

俺だってなあ！

男らしい顔に生まれたかつたんだよ！」

取り出したのは、炎の装飾がなされた赤いガバメント二丁。

双銃ダブルと呼ばれる技術だ。

彼はガバメントの三点バースト×2で、計六発の銃弾をレインたちに浴びせるように撃つ。

それをレインは鏡花水月で跳ね返し、理子は髪を操作しナイフで弾き、残りをキンジが銃弾撃ちで全て逸らした。

「うお!？」

跳ね返して、んなのありかよ……」

だが、その銃弾は彼が指を僅かに動かすと、弾かれたように別方向へと飛んでいった。

「(超能力……じゃあないな)」

レインは相手が超能力を使用していない事を確認し、どうしようかと思案する。

が それは、一発の銃弾によって遮られた。

「レキ……?」

ドラグノフから放たれた、一発の銃弾。

それが彼の頬を掠めた。

「へえ……中々やるな」

ペロ、と滴る血を舐める彼は、ガバメントの片方をホルスターに仕舞った。

「レインさん、先に進んで下さい。」

この地形では、私が戦うのが有利でしょう」

「待ちなよ、レキ。」

狙撃手が一人で戦うなんて危険過ぎる。

せめて相手と距離を充分離してからじゃないと」

「行って下さい、レインさん」

レキにしては珍しく、他人の言葉を遮ってまでの叱責。

それに、レインは一瞬驚くが、すぐに頷き、先に急いだ。

「悪いが、先には行かせられな って、危ッ!」

レインたちを止めようとする男を、レキはドラグノフの銃弾で牽制した。

滑り込むようにアリア、理子、キンジ、そしてレインが次の場所に

進む扉を抜けるのを見送り、レキは、チャキ。

ドラグノフ狙撃銃を構えた。

「よう、レキ。」

俺はお前の事知ってるんだが、お前は俺の事知らないだろうから自己紹介しとくぜ。

俺の名は椎名 優希だ」

「……なら、私も自己紹介を。」

レキです」

「だから知ってるってのに……まあいいか、ほんじゃま、お前を傷つけるつもりも無いし……気絶くらいは勘弁してくれよな」

優希は空いた右手を斜め下に向けると、袖口の機械からワイヤーを発射した。

「！」

驚く程の速さで柱から柱へ移動する優希は、その手に持ったガバメントで威嚇射撃を行う。

が、レキは柱の陰に隠れてその銃弾には当たらなかった。

ターン！

反撃の一発。

しかしそれは虚空を穿ち、肝心の優希には当たらない。

「こつちだ！」

ワイヤーで細かに素早く移動していた優希は、レキが柱に隠れた一瞬でその柱を迂回、レキの真後ろに降り立った。

そのまま、手刀。

それはレキの首の裏を刈り、意識を闇に沈める、はずだった。

バシィ！

「ッ……痛！」

手に激しい衝撃が走り、優希は思わず飛び退いた。

防弾装備なので貫通したりはしないが、バットで殴られたような衝撃が彼の腕を襲っていた。

だが、レインたちは先に行ったはずで、レキは今日の前で、優希と

は別方向を向いている。

この銃弾は、一体誰が　？

その疑問は、幸いにかすぐに霧散した。

着弾の角度から計算した、銃弾が飛んできた先。

そこには、一本の柱があり……それに、明らかに真新しい傷がついていた。

「……跳弾、だな」

「はい、さっきの銃弾はあなたが私の後ろにたち、手刀で意識を刈りにくると分かっていたので私の後ろに銃弾が跳ぶように撃ちました」

そんな離れ技を淡々と述べる辺り、レキの無感情・無愛想さに拍車がかかって見える。

「相変わらず凄いな……さて」

優希は溜め息をつき、漆黒のコートを翻した。

中から、数ヶ所に装備されたワイヤー射出装置が姿を現す。

「次のは速いぜ。」

着いて……来られるかっ！

ワイヤーが数ヶ所同時に飛び出し、それぞれが柱に突き刺さる。

右手から射出されたワイヤーを引き戻し、レキとの距離を詰めることがバメントで牽制、レキはそれを柱に隠れてかわす。

「隙だらけだつての！」

レキが隠れた柱の周囲が、光を反射して一瞬光った。

かと思つた瞬間、レキの身体は柱に括りつけられた。

ワイヤーで縛られたのだ。

「悪いな、お前を傷つけたくないからつてこんなところに縛りつけてよ」

「……………」

「おつと、下手に動かないでくれ。」

お前を撃つなんて真つ平ゴメンだからな」

レキは銃剣を取り出し、ワイヤーを切断しようとしたが、優希のガ

バメントがレキに向けられ、彼女は手を動かすのを止めた。

「……さて、悪いけどそろそろ気絶して貰うぜ。」

あいつら追っかけなくちゃいけねえし」

「……残念ですが、それは出来ません」

「!?!」

レキのセリフに危険を感じ取った優希は、ワイヤーを使って後ろに跳んだ。

ピン。

レキが親指で銃弾を弾く。

それは空中で、眩い光を放った。

「ぐっ! (武偵弾……閃光弾か!?)」

優希はなんとか柱に身を隠し、一時的に失明した瞳に手を当てた。

「(まじい……レキ相手に、加減が過ぎたか)」

一方、レキは優希が隠れている間に柱に飛び移り、距離を稼いで狙撃手が有利な状況を作っていた。

「(……仕方ねえ、こいつだけは使いたくなかったが……)」

優希は 既に視界が戻り始めた目を、閉じた。

「(1、2……)」

そのまま、秒読みを始める。

彼の『切り札』の一つ……『戦闘狂モード』への移行の。

「(12……13……!)」

タン!

その間にも、優希の腹をレキの銃弾が穿つ。

「……ッ! (落ち着け……集中しろ……23、24……!)」

レキはその間に、ドラグノフの弾倉を取り換えた。

そして、再びターゲットたる少年に標準を合わせようと、スコープを覗き込む。

「……?」

異変を感じたのは、僅かな時間だった。

タン!

いつも通り、必中の銃弾を放った。

空に螺旋を描き、目標へと飛翔するその銃弾は、辺りの柱を何重にも反射して優希に向かう。

しかし……チユインツ！

優希は僅かに身体を動かすと、銃弾は彼に当たらず地面に火花が散った。

「……………」

レキは動じない、が優希がした事は常軌を逸していた。

銃弾を弾くならともかく、避けた。

射手も見えない音速の銃弾は、反応できた瞬間には身体に叩き込まれているはずだ。

が、彼は避けた。

通常の間ではあり得ない反応だ。

だが、それにもレキは表情を変えず、スコープ越しに彼を見た。

レキは、今度は直線上に優希を狙い、引き金を引こうとして……気づいた。

優希が、こちらを睨み付けている。

先の、超長距離に加えた何重もの反射させた狙撃を分析し、射手の居場所を突き止めたというのか。

「……………悪いが、もう手加減できねえぜ」

聞こえるはずもない、そう分かりながらも、優希は一人で呟いた。

第98弾 対決（後書き）

悠「狙撃をかわすって……どんだけ人外なんですか」

ミ「ワイヤーで移動でカッコいいよね。」

私もやってみたいなあ」

綾「（そういえば、前に敢行して自分のワイヤーに拘束されてたわね、ミチルは……）」

悠「椎名 優希君は草薙様からお借りしました。」

草薙様、ご協力感謝です。」

キヤラ崩壊等ありましたら、プーモまで御願います。」

第99弾 双剣双銃（前書き）

さて、ついに99話です。

今回はちよっとした企画、というか予告をしたいと思います。
例のオリジナルストーリーの。

第99弾 双剣双銃

第99弾 双剣双銃

ジャンヌ、レキ、と既に二人の仲間が交戦状態に入った。このペースで次の部屋に行けば、まず敵が出てくるだろう。

「……理子、頼むよ」

「任せて、レイン。」

今回は私が助ける」

理子はランドセルを揺らしながら、軽快に地面を蹴る。

髪に隠されているのは、大振りのナイフ二本。

ブラドとの戦闘時以外彼女の戦闘を見たことがないレインは、理子の実力を正確には知らない。

だが、それでもレインは理子に敵の一人を任せる。

理子を、信じていた。

「……見えてきたぞ」

キンジがベレッタを構えながら言うのに反応し、レインも水月の柄に手を触れた。

やがて光源たる部屋にたどり着くと、そこは水晶が辺り一面に広がり、柱までもが水晶でできた、美しい部屋だった。

その中の一つの水晶、その先端に立つ一人の少年。

高周波ブレードを携えているところを見れば、黒いコートの襲撃者の一人なのだろう。

「……なんだよ、全員いねえじゃん。」

ああ、一人一殺の精神か。

一々全員で相手してたら間に合わないもんな」

自分の疑問に疑問で答えた少年は、頭を掻く。

「君の相手は……理子だよッ！」

そんな少年に向けて、理子は右手で構えたワルサーを向けた。銃口から鉛弾が吐き出され、少年に向かう。

「落ち着けよ、理子・峰・リュパン4世」

しかし少年は動じることなく、高周波ブレードで銃弾を両断した。「行っていいぜ、雷神。」

俺はこいつの相手してれば、『契約』違反にはならないからな」

「……なんだか知らないが、お言葉に甘えさせて貰うよ。」

理子、ここは頼んだよ」

「あいあいさー、ってね」

理子がふざけてみせるのを微笑しながら見たレインは、奥の扉へと駆け出した。

「……さて、ぼちぼち始めるか。」

俺は雛菊 京助。

さて……どれにしようかつと」

言いながら、京助は高周波ブレードを仕舞った。

そして、彼が取り出したのは、二本の槍。

連結式の金属片を組み立てて出来たそれは、片方が先端が十字になった、神々しい白い光を放つ槍。

もう片方は、二股の矛先が螺旋状になっている、禍々しい黒い闇を思わせる槍。

「白い方が『神の槍』クルス・スピアで、黒い方が『神殺しの槍』ロンギヌスだ。」

まあ……気楽にやろうぜ！」

言いながら、京助は両の槍を突きだし、理子に突撃してくる。

それを理子は、水晶の一つに髪を絡め、自身の身体を引っ張ってそれを回避。

京助は地面に突き刺さった槍二本、その柄を軸にして縦に回転し、理子に踵落とすする。

理子はワルサーを持つ手を交差させ、踵を受ける。

手に鈍い衝撃が走り、そのまま地面に向けて墜とされるが、理子は髪をクッションのようにして衝撃を緩和、加えてバネのように髪で

地面を押し、反作用で勢いを増した蹴りを京助の腹に叩き込む。

「……………」

やるじゃねえか！

でも、まだだ！」

京助は握っていた槍を手放し、懐からガバメント一丁を取り出し、すかさず発砲。

それが理子の脇腹を掠め、彼女の顔を苦痛で彩った。

「やあああああッ！」

理子は痛覚を無視し、髪で大振りのナイフ二本、両手にワルサー二丁を構える。

これこそ、アリアよりも進化した、理子の『双剣双銃^{カトラ}』。

「ちっ！」

この戦術の厄介さに気づいたのか、京助はなるべく距離をとってガバメントで牽制を続ける。

が、それが槍二本を取るためのフェイクである事分からない理子ではない。

理子は悉く京助の前に立ちはだかり、その度にワルサーを連射し、

徐々に京助を追い詰めていく。

「（やべえな……………このままじゃ槍は期待できねえぞ。

んなら……………」

京助はワルサーを仕舞い、先の高周波ブレードと、小振りな高周波ナイフを持ち出した。

「行くぜ！」

そのまま、何を思ったのか 京助は、理子に肉薄した。

無謀だ、誰もがそう思うだろう。

何しろ、如何に高周波ブレードとて、リーチに分がある拳銃、それも二丁にでは勝ち目は薄い。

加えて、理子は髪を自在に操り、ナイフで迎撃してくる。

それは、伸縮自在の手に持ったナイフ二本、剣よりリーチが長い拳銃二丁、計四つの武器に対して、手数とリーチの不足した攻撃を仕

掛けるのは、正気の沙汰ではない。

が、彼もまた正気、いや、常軌を逸した存在だった。

「らあああああ！」

「なっ！」

正攻法も何もあつたものではない。

ただ突つ込んで来る目の前の少年に、理子は戸惑いながらもワルサーを二丁で乱射する。

同時に、髪をヘビのように複雑に動かしナイフで斬りつける。

が、京助は地面を蹴り、身体をくねらせて横に一回転、高周波ブレードと高周波ナイフで銃弾を弾き、理子のナイフは片手を地面につき、半身で避ける。

ナイフを足蹴にし弾いた刹那、驚異的な強さで手首を返し、理子に肉薄する。

「ッ！ このおっ！」

理子はバリツの応用で回し蹴りをかまそうとするが、それよりも早く京助の一撃が、理子の腹に入った。

「女を蹴るのは俺の趣味じゃねえが……しゃーなしだな」

「くふ、くふふ……仕方ないなあ、理子も……本気を出す」

理子の口調が変わった。

今の理子は、表の、バカみたいに騒いで、空気を和ませる理子ではない。

戦闘狂 戦闘を楽しみ、斬り、斬られ、穿ち、穿たれ、刃を交え、銃弾を交錯させる事に悦楽を感じる人種。

キンジ曰くの、『裏理子』。

「……ッ、やっべえ、怒ったか!？」

「行くぞ、雛菊 京助！」

リュパン一族の秘宝が真の力、見せてやる！」

理子はツインタールに纏めた髪を解くと、ナイフを十本、十束に纏めた髪で握っていた。

「こりゃ無理ゲーだろ……」

「らああああ！」

「ぜやあああ！」

ガキーン！

デュランダルとフィアンマ・ベーゼが鎬を削り、火花を散らした。デュランダルを握るジャンヌは、銀氷をデュランダルに纏わせると地面を蹴り、イヤの前に接近した。

そのままデュランダルを薙ぐが、イヤはベーゼを斜めにずらし、ジャンヌの刃を逸らした。

その間にベーゼに炎が灯り、デュランダルを振り抜いたままでいたジャンヌの腹に打突する。

が、ジャンヌは大気中の水分を氷結させ、氷の盾を作りそれを防いだ。

「ちいッ！ 厄介な氷だな！」

イヤは足から地獄の業火を発生させ、空を蹴る。

足から離れた赤い炎は、曲がりながらジャンヌに向かった。

「お前の炎の方が……ッ！」

ジャンヌは再び氷の盾を作る。

ジュワッ！

氷の盾が蒸発する音を聞き、ジャンヌは身を屈めて駆け出す。

激しく発生した水蒸気が、互いの視界を奪っている。

互いにとつての悪状況は、今のジャンヌには好機に思えた。

相手の実力は相当高い。

正直、勝てるかどうかは五分五分……いや、四分六分程度だろう。

だからこそ、互いが悪状況での奇襲。

ジャンヌはデュランダルの刀身を隠すようにして、駆ける。

イヤの姿、その輪郭を確認すると、ジャンヌはオルレアンの氷花の準備段階に入った。

そして、白い水蒸気を切り裂き、イヤの前に出ると 彼も、超能

力を刀に込めているのが分かった。

「！」

「ちっ！」

予想外の事態に悪態を吐きつつも、ジャンヌはデュランダルを横薙ぎに振った。

オルレアンの氷花　その一撃は、対象を花のように凍らせる。

対し、イヤもちょうどジャンヌと逆の形でベーゼを振るった。

獄炎　その一撃は、対象を美しき炎に包み、地獄の業火で焼き尽くす。

バシユツツツツ！

互いの技が、互いを打ち消した事を示す水蒸気が、再び互いの姿を隠した。

第99弾 双剣双銃（後書き）

ミ「京助君、武器が多彩だね」

悠「普段は重くないんですかね？」

綾「そこはきつと大丈夫よ。」

補正されているわ」

悠「？」

ミ「雛菊 京助君は888様からお借りしました。

888様、ご協力ありがとうございました」

第100弾 100話到達記念、オリジナルストーリー予告（前書き）

初めに言っておきます。

後でも言います。

やらかしました

では、いつになるか分からない予告編スタートです。

第100弾 100話到達記念、オリジナルストーリー予告

第100弾 100話到達記念、オリジナルストーリー予告

「あれ……どじじじ?」

突如現れた見慣れぬ風景。

とある事件に巻き込まれ、レインたち一同がたどり着いたのは……

「うむ?

君たちは……」

『じゃ、シャーロック!?』

150年前の、ベイカーズストリート!?

『劇場版緋弾のアリア 紫電の雷神』 時を越えた邂逅』

「曾お爺様!?!」

「……?」

誰の事だい?」

過去の住人に色々聞かれると、世界が改変されかねない!?
そんな思いから、レインたちは

「いえいえいえ!

なんでもありません!」

誤魔化そうと奮闘するも……

「ふむ、すると君たちは遠い未来からやって来た私の曾孫と、そのパートナーたちだと」

「……はい、すみませんでした」「」

天才探偵を前に、あっけなく正体を見破られる。

一方……

「曾お爺様！」

「ん……誰だお前は？」

理子の先祖、アルセーヌ・リュパン登場！？

ジャンヌも双子のジャンヌ・ダルクと邂逅したり、

「「その氷……我々の血縁の者か」」

「君たちに僕のパートナーを紹介しよう。

ワトソン君、来たまえ」

シャーロックの最高のパートナー、J・H・ワトソンとも出会った
り！？

そんなぶっ飛んだ超体験を、面白可笑しく楽しんで……しかし、過去の世界でも厄介事に巻き込まれ続ける一同。

「「ブラドおおおお！」」

因縁の対決、リュパン一族・ジャンヌ一族対吸血鬼一族。

「俺たち吸血鬼は不死！」

絶対の存在！」

貴様ら、下等な人間風情が、俺たち高等種に敵うものか！」

吸血鬼たちの晩餐会。

「俺様も……混ぜろやあああああッ！」

激しい戦いの最中、乱入してくる『風神』アレックス。

「二度目だな……お前と戦うのは！」

「吸血鬼とは、厄介な相手だ」

「キンジ！」

左の二匹をやりなさい！」

私は右の奴らを！」

「レインさん、伏せて下さい」

レイン、キンジ、アリア、レキ。そして……

「やれやれ……僕が君に手を貸す日が来るとはね」

リュパンに手を貸す、シャーロック。

終わりは始まり。

一つの事件が終われば、また新たな事件の幕があがる。

「ジャック・ザ・リッパー……『切り裂きジャック』か！」

婦女虐待事件、発生。

狙われる、ミチル、綾瀬、悠。

「させて……たまるかあッ！」

「お前たちの肉は、どんな感触がするんだろうな」

切り裂きジャックを逮捕すべく、各々が動き出す。

「彼は僕とワトソン君だけでは捕まえられないかも知れない。
手を貸してほしい」

頭を下げる、かつての最強の敵、シャーロック。

「……頭を上げるよシャーロック」

「手伝ってやるぜ……切り裂きジャックの逮捕！」

更に、続々と現れる加勢。

「お困りのようだな、レイ」

『風神』アレックス。

「シャーロック、お前に借りを作ったままなど虫酸が走る。すぐに返済させて貰うぞ」

大怪盗、アルセーヌ・リュパン。

「我らが子孫の窮地、助太刀させて貰おう」

双子のジャンヌ・ダルク。

そして……決戦。

「お前は、何故そんな簡単に人を殺すんだ！」

「楽しいからだよ！」

人の肉がちぎれ、潰れ、擦りきれる！

泣き叫び、助けを求め、命乞いする！

私に！

私に私に私に私に！」

「ふざけるな！」

お前の悦楽のためだけに、人が殺されてたまるか！

命は尊いものなんだ！

誰にも、ましてやお前なんかには奪う権利なんてある訳がない！」

「権利も義務も知ったことか！」

私は、私のためだけに……私が生きるために、人を殺し続ける！」

「させない！」

俺は……俺は、アンタを止めてやる！」

「今止めたとしても、私は生き続ける限り人を殺し続ける！
それが私の運命だ！」

それが許せないなら、私を殺してみろおッ！」

「俺はアンタを生かす！」

もう二度と人を殺させず、それでもアンタを生かし続けてやる！
そんな事も出来ずに、何が『紫電の雷神』だ！」

「やれるものなら……やって見せる！」

「まずはアンタを……この手で倒す！」

『劇場版緋弾のアリア 紫電の雷神』 時を越えた邂逅
時期未定。

乞うご期待！

レイン

「いやあ、やらかすなあ、作者も」

静奈

「まあ、あの駄作者だからな」

ミチル

「モリアーティ教授とかも出るのかな？」

綾瀬

「原作のどこまで進んでからなのかも考えものよね、これからも色
んなキャラが出てくるもの」

悠

「まあ、それはともかく、劇場版って……映画じゃないんだから
プーモ

「いいじゃん、その場のノリで着けたんだから」
皆

『うわっ!?!? 駄作者!?!?』
プーモ

「駄作者と書いてプーモと読むなああああ!」

原作 緋弾のエリア、緋弾のエリア 〈紫電の雷神〉

総監督

プーモ

助監督

プーモ

その他

プーモ

出演

成瀬 レインハート

朝露 静奈

霧矢 綾瀬

立花 ミチル

有明 悠

アレックス

原作キャラ

その他

やらかしました

第100弾 100話到達記念、オリジナルストーリー予告（後書き）

すみませんすみませんすみません……謝るしかありません。
時期未定でとんでもない事を予告しちいました……

第101弾 相棒対決開幕

第101弾 相棒対決開幕

「さて、残るはアレックスに信季だけだ。

急ごつ」

レインの言葉に頷き、キンジ、アリアは足を速める。

「キンジ。」

その……まだ大丈夫か？」

「？」

アリアがレインのセリフを訝しげに見る。

仮にも武偵なら、この程度の距離を歩んだところで疲れはしないだろう、そういう意味での視線。

しかし、レインはその視線を冷や汗をかきながらスルーし、キンジの方を向いたままだ。

レインが聞いたのは、ヒステリアモードの持続時間。

アリアがいる手前、聞き出すのに手間がかかったが……ヒステリアモードの持続時間は通常で数十分間程度と聞いた。

かれこれ十分程走り続けている現状、キンジのヒステリアモードが解けかかっているのではないか、と危惧していたのだ。

「レイン、心配しないでくれ。」

俺は大丈夫だ。

アリアと共に『風神』を止めてやる」

「そうか、ありがとうキンジ」

そのまま走る足に力を込めようとする。が。

「待ちなさい、レイン」

それは、アリアの制止によって憚られた。

「教えなさい。」

なんで『風神』がアンタを『相棒』って呼んでるのか」

「……お前には関係ない話だよ」

「関係あるわよ。」

私とキンジはアンタのパートナー、相棒なの。

なのに、アンタが知らないところで相棒みたいな存在がいるのなら、白黒ハッキリしなくちゃならないわ」

随分物騒な言い回しだ、そう思いつつもレインは表情を崩さない。

「教えなさいレイン。」

私は……アンタの相棒よ」

「……ハア、分かったよ」

アリアの気迫と粘りに、レインは溜め息を吐きながら両手を上げ、降伏のポーズを取った。

静奈を一刻も早く助けるために、走りながら話すよ、とジエスチャ―して、レインは思い口を開き始めた。

「さて……何から話したものかな。」

ただ、あいつは確かに相棒だった。

一年前、俺がニューヨーク武偵高にいた頃の、ね」

「……何かあったの？」

アリアが、意味深なレインの言葉に思わず聞かすが、レインは困ったように両手をあげ、フルフル、と首を振っていた。

「いや、俺が悪いんだよ。」

俺があいつら（・）に何も言わず転校してきただけなんだ。

別れの挨拶も何もなく……」

「……そういえば、さ。」

レインはどうして東京武偵高に転入してきたんだ？」

重苦しい空気に耐えきれない、そう言うようにキンジが強引に話を逸らした。

いや、転入の理由を聞く事は即ち、アレックスたちに黙って転入してきた理由を聞いているようなものだから、あながち逸らした、とも言えない。

「……俺は、師匠から近い内にイ・ウーが日本で派手な活動を始め

る、そう聞いて飛び出して来たんだよ。

イ・ウーには晴夜がいたから……」

彼は復讐のために、己の過ごした学校を捨ててまで東京武偵高にきた、という訳だ。

だが、結果として素晴らしい仲間たちに出会えた、後悔はしていない。

「そう……じゃあ、あっちがまだアンタを相棒と思ってても不思議じゃないわね」

「……なんで？」

俺はアレックスたちを裏切ったんだよ？」

「馬鹿ね。」

そりゃ怒ってるに決まってるけど、本当の仲間がそれくらいで縁を切る訳ないじゃない」

「……！」

アリアの言葉に……レインは、そうか、と微笑し、前に振り向いた。その目尻には、僅かに光るものが見えたのを、指摘する術を持つものはこの場にはいなかった。

「分かれ道ね……」

アリアの言葉に僅かに頷き、キンジは左右に首を振る。

「どっちに行けばいいんだ？」

「キンジ、アリアは右に行つて。」

俺は左に行くよ」

「分かつた」

疑いもせずに間髪入れず答える相棒に、レインは思わず微笑を洩らす。

まだ少し赤い目が細まるのを横目で見ながら、アリアはレインに寸詰まりの日本刀の切っ先を向けた。

「レイン！ キッチリ静奈を助けて来なさい！」

でないで風穴空けるんだから！」

「……ははっ、了解。」

心配しなくても、俺は静奈を助けて戻ってくるさ」

レインははにかみ、キンジに向きなおす。

「キンジ。」

アレックスは通り名の通り、風使いの超能力者だ。

半端じゃ勝てないよ」

「いらぬ心配だ。」

俺は年下以外の男には手加減しない主義だ。

加減は相手のプライドを傷つけるからね」

「……頼んだよ」

「任せろ」

コッソ、と拳と拳を合わせ……レインは振り返り、自分が進むべき道を見据えた。

「……じゃあ、いくよ」

「ああ……」

「……武運を祈る」「」

「んー？」

なあんでレイが居ねえんだあおい？」

進んだ先で、キンジ、アリアはアレックスのいる場所に辿り着いた。

姿が見えた瞬間、こう言ったアレックスに対し……チャキ。

3つの銃口が向けられる。

「悪いが、相棒は姫様を助けに行っててね。」

不在なんだ」

「代わりと言っちゃなんだけど……私たちが相手になるわよ」

銀色に輝くベレッタを構えるキンジ、黒銀のガバメントを交差させるアリア。

その眼に宿る光を目にしたアレックスは、心底愉快そうに顔を歪めた。

「面白え……！」

決めようぜ！

どっちがレイの相棒に相応しいかをなあ！」

「上等おおおお！」

先に動いたのはアレックス。

斧を構えながら、豪快に突進してくる。

それを跳んで避けるアリア、半身になり紙一重でかわすキンジ。

アレックスは近いキンジでなく、わざわざ上に避けたアリアを狙った。

キンジの存在を無視して。

「！ 舐めるなあ！」

キンジはバタフライ・ナイフを取りだし、アレックスに突き立てる。が、そのキンジの身体は後ろに吹っ飛んだ。

「（突風……！）」

「ジ・エンドだホームズ！」

アレックスは斧を振りかぶり、アリアへの一撃を放とうとする。

が、突如飛来した剣にそれは弾かれ、アリアの防弾制服の薄皮を軽く切り裂いたのみに留まった。

「邪魔すんじゃあ……ねえよ！」

アレックスは斧をキンジに投擲し、日本刀を両手に構えて襲いかかってくるアリアに対し、袖口から伸ばした二本の剣で応戦する。

アリアが左右から挟み込むように斬りかかるのに対し、アレックスは腕を交錯させてそれを受け、腕力に劣るアリアを容易に蹴飛ばし、片手の剣を袖口に戻す。

斧をかわして突貫してくるキンジに、ブーメランのように戻ってきた斧を右手で掴み、左手の剣とでキンジの剣を防ぐ。

「はっはあ！」

良い刀じゃねえの！」

「借り物だけどな！」

アレックスの斧と斬り結ぶは、先日の戦いでシャーロックが置いていき、そのまま拝借したままになっていたスクラム・サクス。

その切れ味に多少の驚きと歓喜、そして賞賛の意を示すアレックスを、キンジは刀ごと押し返し、ナイフを一瞬で仕舞うとベレッタを抜き、三点バーストでアレックスの腹、左肩、左手を狙う。

「んなもん効くかってのお！」

アレックスは手首で斧を回転させ、飛来する銃弾三発を弾くと左手から伸びる剣を、振り向き様に迫ってくるアリアに斬りつけた。

「ちいつ！（上手く分断されてる……！）キンジ！」

左右から同時に攻めるわよ！ 合わせなさい！」

「合点！」

キンジはアレックスを点として見た点対象にアリアと位置を合わせ、アリアが斬りかかるのに少し遅れてスクラム・サクスを突き出した。アレックスはアリアの突貫をかわすと、斬りかかってくるキンジに向かわせる。

アリアは跳び、キンジが身を屈めてスクラム・サクスをアレックスに向ける。

「！」

互いに刺し合うとばかり思っていたアレックスの反応が一瞬遅れ、迫るスクラム・サクスを斧の中心で受けさせた。

「しまっ……！」

アレックスが目に向けた先。

キンジの上で片手をついたアリアは、小振りの日本刀二本を指で挟み、投げつけてきた。

ザクザク！

しかし、それはアレックスの身体を傷つけなかった。

防刃使用である制服の、T N K 繊維の薄い部分を狙ったその二撃は、アレックスの身体をアトランティスの石壁に縫いつけた。

すかさず、アリアはガバメントをフルオートの状態に持っていき、

全弾をアレックスにはら蒔いた。

「（銀弾っ……かよ！）」

まずい、アレックスは直感し、目を閉じる。

「仕方ねえ……！」

ズパッ！

という切断音。

それと共に、アレックスは前に転がり、斧を盾にして銀弾を防いだ。が、何発かは食らったようで、顔を苦悶に染めていた。が……

「……防刃服が、破れた……？」

いや、破れたなんて生半可なものではない。

切断されたのだ。

紙をハサミで切るような、否、達人が丸太を綺麗に切断するような切り口。

「ちっ……」

こいつはレイ以外に使うつもりはなかったんだがよあ……

まあ、ホームズをぶっ殺すためなら仕方ねえかあ？」

轟！

という音と共に、アレックスの周囲から突風が吹き荒れた。

「そっぴゃあ名を聞いてなかったな。

アレックスだ。名乗れ」

アレックスが斧を向けると、アリア、キンジもまた各々の武器を構えた。

「神崎・ホームズ・アリアよ」

「遠山 キンジだ」

「そっか……んじゃあ、お披露目タイムだ。

しっかり見とけや、『風神』アレックス様の神技ってヤツを」

第101弾 相棒対決開幕（後書き）

悠「先輩はニューヨーク武偵高にもいたんですか……」

ミ「ローマ武偵高にもいたらしいよ」

綾「ニューヨーク武偵高には相棒、ローマ武偵高には師匠がいたのね」

第102弾 朝露の兄妹（前書き）

今回は何だかいつもより長いです。
なんでこんな長くなったんだろう……

第102弾 朝露の兄妹

第102弾 朝露の兄妹

ドウウウウウウン……

「……この、音は？」

弱々しい声を発したのは、質素で何もない通路を歩かされている、
静奈。

「戦闘音が……成瀬が乗り込んできたか」

それに答えた信季の言葉の一部、成瀬 レインの名を聞いて、静
奈の肩が僅かに上がる。

それを横目で見ながらも、何も言わず信季は歩き出した。

それに、静奈はついていく。

別段、物理的な何かが彼女の身体を拘束している訳でも、超能力で
身体を動かしている訳でもない。

だが、信季は静奈に、見えざる枷を着けていた。

それがどのようなものであるかは……静奈の、今にも壊れそうな表
情が、雄弁に物語っていた。

「兄上……本当に、海神の封印を解かれるおつもりですか」

「ああ、そのつもりだ」

「ですが、あれは禁術」

ザン！

言いかけた静奈の頬に、鋭い痛みが走った。

自分のすぐ横に、水の槍が突き刺さっている。

「黙れ……！」

お前は黙って、俺に従っていればいいんだ、魔女め……！」

「……！」

わ、私は……！」

「ほう、言い訳する気か。」

面白い、是非とも聞かせて戴こう」

強い口調で、信季は静奈を突き放す。

まるで、誰かの仇でも見るような、射抜くようなその視線に、静奈は、顔を俯かせた。

その目尻には、涙を浮かばせていた。

「わ……私、は……！」

嗚咽を洩らしながら、その場にへたりこむ静奈。

それを、ゴミでも、害虫でも見るかのような、寒気がするほど、恐ろしく冷たい目で見下ろす、信季。

その信季が

「……！」

突如、飛び退いた。

紫の、閃光。

まるで、信季と静奈との間の壁になるように、信季に立ち塞がり、静奈に背中を向けたその少年は、

「えぐ……ぐっ、レイ、ン……！」

静奈の、泣き声混じりの声から分かる通り……成瀬 レインハートだった。「ほう……『紫電の雷神』、噂に違わぬ実力だ」

信季の挑発混じりの言葉など、今のレインの耳には入らない。

「どうだ？」

良ければ、今から俺と共に、朝露に ツー！」

信季が、戯れ言を口にする前に。

レインは、その腹に一発の掌底を叩き込んだ。
バリー！

「ッグアアアアアア！」

激しい電流が、信季の身体を駆け巡った。

「……泣いてた」

「ガアあああ……ああ……」

返事は、返ってこない。

静奈の能力発動の際見せる光にたそれは、彼の超能力の発動を示す。

彼が腕を振ると、左右五本、計十本の高圧水流が、レインを細切れにすべく彼に向かう。

が、レインはそれを鏡花水月で、自身が避けれる最低限だけ切り裂いた。

鏡花水月に反射された高圧水流は、物理法則を無視してそのまま信季に向かう。

「っグアアア！」

なんとか避けたものの、肩口に手酷い傷を負った信季は、苦痛のあまり叫ぶ。

が、レインはそんな叫びでは彼を許すことは出来ない。

馬鹿な話だ。

言えばここまで苦痛を与えず、ただ逮捕で許すものを。

意気地になっているのか、興奮と苦痛のあまり忘れたのかは知らないが、レインの怒りを一旦は納められるその言葉を、しかし信季は言わなかった。

「さて……最後通告だ。

静奈に謝れ」

つくづく、自分をアマちゃんだと思っ

が、やはりどれだけ凶悪な犯罪者でも、どれだけ自分の大切な人を傷つけようと、彼は人間だ。

痛みを感じ、恐怖を感じる人間だ。

故に、レインはチャンスをやった。

だが、目の前に倒れる愚者は、みすみすそのチャンスを手放した。

巨大な、通路を覆わんとする、水の槍。

馬鹿だ。

こんなものが、鏡花水月の前に意味をなさないことも分からないというのか。

いや……跳ね返せば、自分が死ぬから相手は跳ね返せない、とでも

思っているのか。

だとすれば、救いようがない。

が、自殺志願を止めてやるのも一応は武偵の役目だ。

レインは、鏡花水月の標準を信季の足元に集中させた。

鏡花水月は、攻撃を放った相手に反射する能力であり、他人や検討
違いな方向に跳ね返す事は出来ない。

故に、機動力を削げ、なおかつ死にはしないだろう足を狙う。

水槍が向かってくる。

レインは刃を立て、それを跳ね返す。

……が。

「……………」

跳ね返らない。

だからといって、そのまま攻撃が貫通するでもなく、ただの水（い
や、海水のようだ）となり、レインの防弾制服を濡らしていくだけ
なるほど、鏡花水月はレインに危害を加えるモノを反射する能力だ。
つまりは、今の水槍に攻撃力は皆無であり、別の目的がある、とい
う話だろう。

そしてその目的は、水槍で不明瞭になっていた視界、加えて気配の
消えた信季を鑑みるに、逃亡の手段だった、という結論に至った。

「…………… 静奈、大丈夫？」

「ああ…………… 大丈夫だ。」

それよりレイン、どうしてここに？」

「え？」

静奈の的はずれな質問に、思わずすっとなきょうな声を洩らしてし
まう。

「そりゃ、お前を助けるために決まってるだろ？」

「…………… そうか、ありがとう」

……………？

静奈の空けた妙な間に、レインは奇妙な感覚を覚える。

まるで、何か申し訳ないような 仲間を助けにくるのは、仲間な

ら当たり前だと言っのに。

自問が勝手に解消されていく中、レインはまた新たに頭から出た疑問を、思わず口に出してしまう。

「そう言えば、その……信季が言ってた、『魔女』、って何なの？」

「ッ、……」

「あ、ごめっ……！」

答えたくなかったら答えなくても！」

自分の失言に気づいたレインは、即座にそれを訂正しようとするが、しかし静奈は首を横に振る。

「いや……聞いて欲しい。

レイン、お前に」

その一言で、レインは自然に静奈の言葉に耳を傾け始めた。

「……昔、私は朝露では天才と呼ばれていたんだ」

朝露は、代々水を司る超能力を伝える家だ。

先に生まれた兄は、私が生まれる少し前から、超能力の訓練をしていたらしい。

しかし、やはり子供だった彼は、思ったよりも力が伸びずにいた。

その時はまだ、子供なのだから仕方ない、と大人たちも、渋々だが兄も、納得していた。

だが、そこに私が生まれた。

私は、生まれた時、産湯を超能力で動かしたそうだ。

それで、私は朝露で天才、神童と賞賛され続けた。

七つ年上の兄は、私に劣等感を覚えていた。

がむしゃらに努力を続けたが……私が五歳になる頃だ。

兄が、試合を申し込んできた。

周りの大人が困惑気味に見守る中……私は、兄を完膚無きまでに叩き潰してしまった。

兄は、泣いていた。

当時五歳の私は、その時は分別など分からない、どうしようもない

くらい子供だった。

あるうことか 兄の、涙を。

玩具のように、操った。

それは、明らかかな、敗者に対する侮辱だった。

兄は、私を避けるようになった。

私は、何故兄が私を避けるのか分からず……つきまとい続けた。

兄は、どれだけ苦しんだらうか？

兄は、どれだけ私を憎んだらうか？

兄は、どれだけ力を欲したらうか？

幼い私には、分からない。

心を痛めたらしい兄は……家を出た。

そして、ある事件が起きた。私が、小学生高学年の時だ。その日は、うだるような真夏だった。

心なしか、家中がピリピリした空気。

誰しもが、暑さに苛立ちを覚えていたのだらう。

そんな日に 兄が、家に強襲を仕掛けてきた。

私は奥に隠され、兄が家の人たちと戦う音だけを聞いていた。

やがて、音が止み……あるうことか、私は外の様子を窺った。

視界に入ったのは……赤。

血、だった。

血塗れになった人々。

そんな中、ただ一人だけ立ち尽くしていた、兄。

彼がこれをやった、そう感じた瞬間……世界が、ブラックアウトした。

次に見た光景は、見る眼も当てられない、散々に破壊され尽くした家。

そして、片腕を失った、逃げる兄だった。

私は、あまりのショックに……自害しかけた。

が、それは両親によって止められた。

私が暴れても、幸い死人は出なかった。

が、重傷者も多かつたらしい。
そして私は、強すぎた力を封じられ……中学を惰性で過ごし、東京
武偵高に入った。

「……というのが私の過去だ。」

なるほど、魔女と呼ばれても納得できるだろう?」

自嘲気味に、力ない笑みを浮かべる静奈。

そんな彼女を見て……レインは。

「……バツカじゃねえの?」

静かに……吐き捨てるように。呟いた。

「……なんだと!？」

もう一回言ってみる!」

「何度でも言ってみよう!」

馬鹿だ! お前は馬鹿だよ!」

「この……ッ!」

相手が好きな人だろうが、お構い無しに、静奈はレインの頬を叩いた。

それを意に介さず、レインは言葉を続ける。

「そんなのは、誰のせいでもない! 事故だ!

超能力の制御がどれだけ難しい事か、理解しているのか!？」

大きすぎる力は、より制御が難しい事を理解しているのか!？」

しかも、制御失敗原因を作った兄自身が!

そんな力を、高々十やそこらの子供がコントロールに失敗して、言

うに事欠いて魔女だと!？」

ふざけるな!

そんなの、例えお前自身が許しても、この俺が許さない!」

「……だが、私が皆を傷つけたのも、事実なんだ……!」

レインの言葉に……静奈は、泣き崩れた。

「私の力が!

皆を、皆を……!」

「ああ。確かにそうだ。
でもな……だからって、お前が『魔女』なんて呼ばれて言いはずがない。

お前には、静奈って名前があるんだからね」

レインは、静奈の涙を指で拭った。

その指が温かくて……静奈は、思わずその手をとる。

そのまま、紅潮した頬を隠さずに、笑って見せる。

「ああ、ありがとう……レイン」

「……」

レインは、バツ！

と振り返り、「ど、どういたしまして」と短く答えた。

「（そ、その笑顔反則でしょ……！）」

思わず顔を逸らしてしまい、気まずい空気になったが……幸いとは
言えない、放送がその場に響いた。

『紫電の雷神！

聞こえるか！』

「！この声……信季！」

正直忘れていた静奈の兄が、恐らく心臓部から掛けてきた放送。

それが響くと……前方から、大量の海水が流れてきた。

『トラップを発動させた！

溺れ死ぬがいい！』

「っ、小癪な……！」

迫りくる海水は……突如、その勢いを止めた。

「静奈！」

「行け、レイン！」

兄上は海神を起動させるつもりだ！」

海水を超能力で止める静奈にレインは頷き、反対の通路を進もうと
するが……

「なっ！」

その通路からも、海水が流れてきた。

力を封印された静奈は、反対の海水を止めるので精一杯だ。

『さらばだ……紫電の雷神』

信季の言葉が聞こえた、直後。

レインと静奈の身体は、海水に飲まれた。

第102弾 朝露の兄妹（後書き）

悠「静奈先輩……！」

そんな過去を背負ってたのですか……！？」

ミ「うん……なんて可哀想なんだろう」

綾「……私たちも、静奈を支えましょう」

第103弾 目覚めるは海の女神（前書き）

はい、ご都合主義満載です。

どうか生温い目で流してやって下さい。

第103弾 目覚めるは海の女神

第103弾 目覚めるは海の女神

ガバツ！

口から酸素が漏れだす。

口から水を肺に飲み込む。

息が、出来ない……！

「（静奈……ッ！）」

手を伸ばした。

静奈もまた、手を伸ばす。

その距離、あと1メートル、トル……！

が……ゴポツ。

レインは、ついに酸素が頭に回らなくなり……意識を、手放してしまった。

「（レイン！？）」

レイン！ くそっ！」

静奈はこの状況下で、なんとか水の流れをコントロールする。

レインを彼女に差し出すように、彼女はレインに向かうように。

そうして、意識のないレインの手を取る。

が、レインは息をしていない。

「（……やるしかない。」

……まさか、こんな形でお前とする事になるとは、最初あった時は考えてもみなかったな……）」

静奈は、『激流の奏者』の力で海流を操り、静奈とレインの周りを海水の届かない空気のカプセルのようにした。

レインは、意識が無いままだ。

彼を通路の床に寝かせ、静奈は、すうー、と深呼吸する。

二重の意味で覚悟を決め……

静奈は、レインの唇に、唇をつけた。

自分の頬が、急激に熱を帯びていくのが分かる。それを気にせず、息をレインの肺に吹き込んだ。唇を離し、息を大きく吸い、もう一度。すると……

「……っ、はっ！」

げほっ、げほ！」

レインは水を吐き出し、むせかえった。

息を、吹き替えした。

「気がついたか、レイン……！」

ドゲン！」

逸る動悸を、胸を押さえつけて抑え、なんとか言葉を発する。

「こ、これは……そうか、静奈、お前の……」

どうやら人工呼吸には気づいていないらしくかったレインに、苦笑する。

「……レイン、しばらくここでじっとしていてくれ」

「？ それはどういう……ッ！」

言いかけて レインは、目を見開いた。

静奈の身体に、変化が訪れていた。

まず、髪。

純日本人的な黒の髪は、まるで海の色を映したかのように深い青をしていた。

瞳も同じように青く染まっており、水を避けてできた空気ドームからは、言うまでもなく超能力の増加を示していた。

そして……彼女の身体を、青い羽衣のようなベールが包んでいた。

「……さっき言ったな。」

私の力は封じられている、と。

それを解放する鍵となるのが……愛しき者との、接吻だ」

それを告げると、レインはしばらく呆けて……ボツ。赤面。慌てて自分の唇を押さえた。

「（さりげなく告白してしまった……まあ、気持ちを伝えられて良かったか）」

と考えていると、レインが未だ呆けているのに気づき、静奈は苦笑してしまう。

「つまり、私の力は今、完全な状態になった。

そして、兄上は今、海神を無理矢理起動させようとしている。そんな事をすれば、暴走は免れないだろう。

だから、私が止める。

お前はここでじっとしていてくれ……すぐに終わらせる」

「！ し、静奈！ 待て！」

レインの制止を聞かず、静奈は空気のドームから飛び出した。自らの兄を止めるべく。

レインの声は、もう聞こえなかった。

「はあっ、はあっ……！」

こ、これが海神か……！」

レインたちのいる通路より、遙か地下 アトランティス最下層。

その、神殿のように幾つもの並んだ柱の奥に、それはあった。

今まで、文献で文字でしか見た事がなくとも分かる。

これが、海神である、と。

巖つい、黒ずんだ金属で出来た体。

仰々しい、推定全長100メートルはあるつかという巨大さ。

伸びる角ばった腕の先には、三股の槍が握られていた。

痺れる身体で、その顔までのぼる。

信季は、頭部に被られていた王冠に、その手を伸ばした。

手の甲が光り、同時に海神の頭の後ろが開いた。

何も疑いもせず、その中に入った。

中は薄暗かったが、信季が入ると徐々に明るみを帯びてきた。続いて、信季は二人乗りのその前の席に座り、目の前に置かれた箱を空けた。

手のひらを水槍で少々裂き、血を滴らせる。

それを箱の中に入れ、蓋を閉じた。

すると……中からは分からないだろうが、海神の眼の部分が、赤く光った。

海神が、起動した。

「く、くく……くははは……ッ！」

これで！ これで俺が、この海の、この世界の覇者だ！

『朝露の姫』など必要ない！

くはは……ッはははははっ！」

信季は、気でも違ったかのように一人でに笑い出すと……海神を、動かした。

何かの鬱憤を晴らすように、横薙ぎに槍を振り。

すると……まるで、お菓子のお棒でもへし折るかのように、全ての柱が粉碎された。

「くくく……はははははっ！」

その規格外の力に、信季は声をあげて笑う。

自分が、今地球に存在するものの中で最も上の位にいる、そんな錯覚からの狂気だった。

「そこまでです、兄上」

が その狂気は、遮られた。

「……はっ、今更何をしにきた。」

もう海神は起動した……今のお前には何も出来まいよ」

崩壊する柱の向こうに立つ、静奈の言葉で。

「確かに、今までの私ならここには来れなかった……いや、来れたとしても来なかったでしょう。」

ですが……私には今、守りたい仲間がいます。

私には今、大切な居場所があります。

私には　大好きな、男がいます。

彼の、彼らのためなら……例え　この命潰えようと、狂気に堕ちた、貴方を止めます」

「貴様、まさか……！」

「ええ。朝露禁式　『背水灯火』。

通常精神力を使用するところを、術者の命を削ることによって術を発動させる、捨て身の術式です」

強力な術は、大きなリスクを伴う。

それはつまり、リスクの度合いで術の規模を測ることの是を意味する。

ましてや、命という生物においてそれ以上のものはないものを賭すのだから、その力が計り知れるようなものではないことは、信季も重々承知だった。

だが、彼にも力　海神がある。

これで静奈の攻撃を防げれば、信季は晴れてこの大海を自由自在に操れる。

が……もしも負ければ、朝露への復讐という野望は潰え、もう二度と日の目を見ることは叶わないだろう。

人生の、分かれ目。

それは、朝露を裏切る時点で覚悟していたはずだ。

だが、やはりそれでも、彼の手には脂汗が滲んでいた。

「俺は、止まるつもりなどない。

朝露への、お前への復讐を果たすまではな……！」

「……そう、ですか。

分かりました。

では……朝露家次女、朝露　静奈……参ります」

静奈が、呟いた直後。

海神の封じられていた部屋は、光で溢れた。

「やめろおおおおお！」

紫の、光で。

ドゴオオオオオオン！

壮絶なドロップキックが海神の横っ腹に決まり、信季の乗った海神は横に吹っ飛んだ。

「ぐあっ!？」

信季が吹っ飛んだが、そんなことはお構い無しに、レインは静奈の前に向き直した。

「レイン！」

お前どうしてここに……!」

と、質問するが、それにレインが答える必要は無かった。

どばどばどば……と、入口から、僅かながら侵入してくる海水を見て、あの通路の床を破壊し、破壊し、破壊し続けて、この最下層までたどり着いたのだ、と気づいたからだ。

「静奈。」

お前、何を勝手に死のうとしてるんだ!？」

「……っ、私の勝手だろう」

わざと、皮肉気に返す。

心残りの無いように。

覚悟が、揺らがないように。

「勝手じゃない！」

……お前は、俺の大切な人なんだ……!」

勝手に死ぬのなんか、俺が許さない」

「だが、私は、海神を、兄を倒さなければならぬ……命を賭して

—

自らの命すら省みない、そう言うような静奈の言葉を、遮る。

「死なせない。」

そんなことで、けじめはとらせない。

生きる、静奈。

お前の命を賭けるくらいなら

俺の命を代わりに賭けてやる」

……静奈の、目元から……光る何かが、溢れ落ちた。
だが、静奈はすぐにそれを振り払う。

「……となると、私が命を賭けるのはレインの命を賭けるのと同義な訳だ。

ははっ、それだけはおめんこうむる。

なら……レイン、力を貸してくれるか？」

「当たり前、でしょ？」

ニツ、と笑ったレインにつられ、思わず静奈も微笑んでしまう。

そして……レインの前で、初めて静奈が構えを見せた。

武器は、扇子。

それも、特別製らしく金属光沢が見える。

それが、彼女を覆う水の羽衣と妙にマッチしており、レインは一瞬、思わず見惚れた。

が、すぐに頭を振り、鏡花水月の切っ先を信季の海神に向けた。

「朝露 信季！」

「殺人罪及び器物損害その他の罪で」

「「アンタを逮捕する！」」

第104弾 海の覇者・海神（前書き）

原作話を書きたい今日この頃。

第104弾 海の覇者・海神

第104弾 海の覇者・海神

部屋の壁に輝を入れながら、レインが蹴っ飛ばした海神は立ち上がった。

改めて見ると、無茶苦茶でかい。

自分たちが小人になった気分がするくらいで、生身で攻撃を食らったらひとたまりもないかも知れない。

実際、さっきのレインのドロップキックでさえ、こちらからの攻撃であるにも関わらず、固すぎて痛い思いをしたのだ。

しかも、もし殴りかかってきたりするなら、鏡花水月とは最悪の相性だ。

対処は超能力で行うしかない と。

そう思い至ったところで、静奈が口を開いた。

「さて……レイン、気をつける。

海神のボディには呪避けがなされていて、超能力による攻撃は無効化される」

「……マジで？」

口調こそ軽いが、これは驚愕愕然ものだ。

超能力が効かないとなれば、刀と銃だけでこの巨大兵器に立ち向かわなければならぬ、そういう事だ。

「ったく……冗談キツイよ」

「まあそう言うな。

雷神化はできるし、雷歩だって使える。

それにお前には鏡花水月が」

「ああ……駄目なんだ、鏡花水月は」

「は……？」

キョトン、と静奈が呆けてこちらを見てくる。

レインは顔をひきつらせながら、鏡花水月、その弱点について話し始めた。

「実は……鏡花水月には致命的な弱点があるんだ。

それは……人体や、0距離攻撃は跳ね返せない」

「……はああああ!？」

お前、そういう大事な事はもう少し……!」

静奈が絶叫しながら説教してくる。

が、そんな場合ではない。

海神が、拳をつきだしてきた。

「ッ! 避けるぞ!」

「言われなくても!」

レインは雷歩で上昇、静奈はバックステップをとり、ギリギリのところで回避した。

拳圧の余波で体勢を崩しながらも、どうにか拳を避けきった二人は、各々が海神の迎撃に出る。

静奈は海神の腕に飛び乗り、そのまま頭に向かって駆ける。

レインはダガーを取り出すと、投擲。

しかし、こちらは弾かれてしまう。

試しに雷弾も放ってみるが、やはり呪避けがなされているだけあり、雷弾はかき消える。

そんな攻撃にも見向きもせず、信季は海神で、駆けてくる静奈を振り払う。

まず、海神の左手のひらで埃ゆ払うように静奈を迎撃する。

が、静奈は大きく跳んでそれをかわした。

空中で身動きが取れない彼女に向けて、海神の腕から銃口のようなものが飛び出した。

そこから勢い良く噴出されたのは、高圧水流。

ダイヤモンドをも切断する威力を持ったその斬撃はしかし、防がれる。

「『天衣無縫』」

静奈が纏う、二枚の羽衣。

それが重なり、高圧水流の一撃を防いだのだった。

「ほう……やはり解放したか。」

その忌まわしき魔女の力を……！」

羽衣を器用に操り、柔らかく着地した静奈は、扇子を両手に持ちながら海神の足下へ向けて突貫する。

「お言葉ですが兄上、私は魔女などではありません」

「……！」

ほう……言っじゃないか、有り余る力で朝露の10分の1を破壊した魔女よ」

信季は声を怒りで震わせながらも、ようやく言葉を発する。

海神に命令を出し、手に持った三股の槍を走ってくる静奈につきだした。

それを半身になり避けると、静奈は槍に扇子で切りつけた。
ガキイイイン！

激しい金属音に伴って、特別製の扇子と海神の槍が火花を散らす。
やがて静奈が扇子を振り切るが、互いの武器に傷はついていなかった。

「確かに、私は自らの力を律せず、破壊衝動に駆られた……
ですが、私は今、最愛の人の隣にいる。」

誰にだって……私自身にだって、負けはしない！」

啖呵を切った静奈は、流水に乗ると一気にそれを海神の顔の前まで動かして、顔面に扇子を交錯させた一撃を叩き込んだ。

が、やはり金属音を上げて火花を出すだけで、決定打にはならない。
大きく背中を逸らして、頭突きを行ってくる海神。

静奈はそれを、更に自身の乗る流水を上昇させ、避けた。

「らあああああ！」

頭突きの勢いそのまま下を向いている海神に、上からレインのドロップキックが再来した。

踵落としては、流石に踵が砕けるので自重したのだが、それでも充分足裏のダメージが大きい。

涙目になりながらも、レインは地面に顔をつっ込んだ海神の様子に気を配る。

海神は、ガバツ！

と起き上がると、首を回してみせる。

如何にも人間らしい動きに、二人は警戒を強めた。

ドゴオオオオオン……

「!?!」

「始まりやがったか……！ くそ、間に合うか!?!」

突如、対峙する少年 京助の話の見えない言葉に、10束の髪を器用に操作しながら、理子は顔をしかめた。

「おい雛菊 京助、私みたいな美人と遊んでるときに考え事か？ この女つたらしめ」

内三本の髪がうねりながら京助に向かうが、跳躍から高周波ナイフによる見事な回避術で、片手を三角に振るうようにしただけで全てのナイフを防がれてしまった。

「心配すんなよ。」

俺は目の前の女の相手を真面目に出来ない程、腐っちゃいねえつもりだぜ」

京助はナイフを天井に突き刺すと、続いて向かわせた四本のナイフを足で、これもまあ器用に全ての側面に当てて弾いた。

そして、そのままくるっ、と天井を足蹴にすると、理子よりやや斜め上に向けて、弾丸の如く飛び出した。

狙いは 槍。

「甘いな、私がむざむざ得物を取らせるとでも……!」
と、言いつつも理子は両手を前にかざした。

京助のガバメントから放たれた、武偵弾。

その銃弾が理子のナイフに接触したかと思えば、理子の視界は眩い光で覆われた。

幸い、髪を何本か防御用に回していたので、視力の低下は、暗闇から突然日の射す場所に移動した程度で済んだ。

が、その程度の隙を見逃す京助ではない。両手に槍を握り直すと、バトンのようにクルクルと手首で回し始めた。

「やれやれ……さて、んじゃあ反撃開始と行きますか」

京助は突貫すると、理子はそれを跳んで足蹴にし、京助の後ろに跳び、ワルサー二丁で背を撃ち抜く。

が、京助も一旦『神殺しの槍』の連結を解き、バラバラになった金属片で銃弾を全て弾くと再び連結、という離れ業をやってみせた。

ナイフで迎撃しつつも水晶を髪で掴んで滑らかに移動し続ける理子に対し、水晶を蹴って直角的に移動する京助。

が、その均衡もすぐに破られた。

ドゴオオオオオン……！！

先ほどの音が再び聞こえ、京助の顔にどこか焦りの表情が生まれた。

「悪いな……理子。」

俺はあんまりもたつてはいられないらしい」

「？ どういう」

理子が京助の言葉に、一瞬動きを止めた瞬間。

京助の槍が、理子の防弾制服を壁にくくりつけた。

「ッ！ こんなもので！」

理子は髪の本で器用にも槍を外す。

が、その間に高周波ブレードと日本刀『村正』の双剣で理子に肉薄していた。

十字に振られたそれを、理子は残った髪ของナイフで防いだ。

互いに弾かれた二人。

京助は天井に靴の補助刀剣を突き刺し、さかさ吊りになり、理子への警戒を怠らない。

理子はナイフを失った髪で予備の二刀を操り、ワルサーと二本のナイフもあわせて、計六つの武器を京助に構えた。

二人が再び地を蹴ろうと、足に力を入れた、瞬間。

バギイ！

「！！！」

先刻から聞こえていた地響きの影響か、二人がいた部屋は、丁度二人が別の部屋になるよう二分された。

「……まあ、ラッキーちゃラッキーか。

済まんな、俺は下にいくぞ」

「！ 待て！」

理子が京助を追おうとしたが、部屋の倒壊が早まったことで、それは憚られた。

「くそっ……！」

済まないレイン、失敗った……！」

第105弾 標的(前書き)

原作最新刊読みたいけどTSUTAYAに売ってませんした〜(^^)
^)/ついでにAAも売ってませんでした。そもそも品揃えが以下略
(ISが二巻と六巻しか売ってないという)

TSUTAYA以外に本売ってるのが近場にないという田舎具合
ですよ!

コンビニが潰れるたびに本屋できねえかな……なんだ、すき屋かよ
って感じです。

第105弾 標的

第105弾 標的

「そこだ！」
チユチユン！」

すぐ隣の柱に穴が空き、レキは一旦柱の影に隠れた。

既に拳銃の射程（といっても確実性は皆無なレベル）まで詰め寄られていたレキは、ドラグノフを抱えたまま更に柱から移動を図った。狙撃手の絶対的なアドバンテージは、居場所を悟られず、一撃で的を倒せる事だ。

が、武偵法9条により殺人は違法とされており、加えて神経を圧迫して身体を麻痺させようにも、柱の影で身を縮こまれてはどうしようも無かった。

とはいえ、そのせいで30秒も敵に与えたのは明らかに失敗だった。レキが再び銃弾を放つ。

優希はそれを、ギリギリでかわす。

動きが、戦闘が始まった時とまるで違う。

変わったのは、あの空白の30秒からだ。

何か特別な薬でも使ったのかも知れない。

どちらにせよ、あの30秒を空けたのが致命的なミスであったと、レキは自覚していた。

が だからといって、いつまでもたられば話をして良しとしない。

レキは、その銃弾で確実に優希を沈めるための算段をつけだす。

その間にも、優希はワイヤーで刻々と迫っていた。

「食らえ！」

優希がワイヤーにぶら下がりながら、片手でデザートイーグルの引き金を引いた。

ドウンッ！

轟音と共に、一発の銃弾がレキの左肩を掠め、彼女のバランスを崩した。

レキが痛みに顔を歪めながら膝をつく中、優希はデザートイーグルの反動で後ろに飛び、天井に刺していたワイヤーを巻き戻すと、後ろの柱を見もせず足場にし、柱を蹴って直線的にレキへ肉薄する。

レキは右に転んで体勢を立て直すと、一瞬でドラグノフに銃剣を着けて迎撃する。

「うおっ！？」

レキの槍が、目にも留まらぬ速さで迫ってくる。

勢いのついた今の状態では相当まずい、そう判断した優希は無理を承知で右腰のワイヤーを別方向へ射出、急激に減速し、レキから距離を取った。

それは、レキにも好都合。

一瞬で射撃体勢に入ったレキは、優希のワイヤーに銃弾を当てた。

「！ ぐあっ！」

勢いを失ったワイヤーは、重力に従って垂れる。

その先端にいた優希は、身体があげる悲鳴に僅かに顔をしかめた。そして、細めた目を開くと、レキのドラグノフ狙撃銃の銃口が、自身に向いていた。

「 私は一発の銃弾」

優希は、ワイヤーの機器をパージし、腕のワイヤーを柱に射出する。

「 銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない」

それを巻き戻し、ガバメントをホルスターから抜き、レキに向けて三点バーストで発砲した。

ダダダン！

三発分のその銃声をかき消すように、レキの詩が紡がれる。

「ただ、標的に向かって飛ぶだけ」

タアン。

先のガバメントの強烈な発砲音とは異なり、静かな銃声。

空を穿ち、飛んでいく銃弾は　ガキイン！
優希の三点バーストの初弾を弾いた。

レキの銃弾も斜めに逸れ、Y字に逸れた二発の銃弾。
その一発、弾かれた優希の銃弾は、更に放たれた優希の次弾を、
まとも斜めに弾く。

弾かれた次弾はそのまま飛び、ついに3弾目を弾いた。

「な
」

一発の銃弾で、三発の銃弾全てを捌く。

そんな超人技に、驚愕する暇も無かった。

まだ、終わっていないのだ。

呆然とする優希の手元、炎を装飾された真紅のガバメントが、鈍い
衝撃と共に弾かれた。

レキの銃弾が、ガバメントを捉えた。

初めから、ここに銃弾が弾かれるように、計算して撃っていた　！

『ロボット・レキ』。

その別称の意味を思いしつた優希は、弾かれたガバメントをワイヤ
ーで回収すると、口角を僅かに上げた。

「流石だな……レキ。

お前の銃技は最早神業ってレベルだよ。

だが……それでも俺は、負けられない。

負ける訳にはいかない　」

優希は背中から抜いた日本刀、そしてデザートイーグルを構えた。
対するレキも、ドラグノフを優希に向ける。

一瞬の、静寂。

優希が柱を蹴り、レキに肉薄した。

レキは高速で迫る優希の片手、デザートイーグルを銃弾で弾いた。

そして、チャキッ！

一瞬で銃剣をドラグノフに装着、優希に向ける。

ここまでで0.5秒

そして、優希の日本刀と、レキのドラグノフが交錯した。

「……引き分け、つてどこか？」

そう言う優希の喉笛にはドラグノフの先の銃剣が突きつけられており、彼もレキの首筋に日本刀を添えていた。

両者が一步でも動けば、互いに死ぬ。

まさに引き分け、そんな状態だった。

しかし、レキの表情は曇っている……気がする。

「……いえ、私の負けです。」

私は主に『先に行け』と言いました。

そして、私があなただを倒すと。

しかし、私はあなただを倒せなかった……」

「……レキ。」

その点なら大丈夫だと思うぜ？

『紫電の雷神』、成瀬 レインハート……多分あいつは、お前が生きてさえいれば他の事はどうでもいい、そう言う輩だぜ？」

俺と同じく、そう聞こえない程度で呟いた優希に、レキは小首を傾げながら視線を送る。

「さて……海神も動き出したみたいだし、悪いが先に行かせて貰うぜ。」

ああ、心配しなくても雷神の邪魔はしないからな」

優希はくるり、と踵を返し、先に進もうとする。が……

チュイン

その隣の柱に、穴が空いた。

「（当てる気は無し、か……）何だ？」

振り返った優希の先には、ドラグノフの銃口を向けたレキがいた。

まだやるうと言っているのであれば、優希も新たな切り札を出さざるを得なかったが……幸い、彼女の目的は戦闘ではなかった。

「……あなたがもし嘘をつき、レインさんを襲ったなら……私を含め、ウルスの47女があなただを殺しに行きます。」

それだけは忘れないで下さい」

そう釘を差すレキに苦笑しながら、優希はワイヤーで一気に加速した。

「！……………『紫電の雷神』、凄えなあいつ……………あんな遠くからでも超能力を感じる」

言いながらもデュランダルの一撃をかわしたイアは、デュランダルの刀身を踏みつけ跳躍、袈裟斬りをジャンヌに浴びせる。

「ふっ……………私が婿にする男だからな。

当然だ」

ジャンヌは剣を引き、ベーゼの一撃を受け流したジャンヌは氷で足に刃を生成し、蹴りと同時に切りつけた。

「ノロケは聞きたくねえな！」

「う、うるさい！」

冗談をかましつつも、イアはジャンヌの蹴りと斬撃を紙一重で避け、その足を掴むとその細腕からは想像出来ない力でジャンヌを投げ飛ばした。

ジャンヌは空中で体勢を整えると、空気中の水分を凍らせ、その氷を蹴って再びイアに向かう。

ガキイイイーン！

デュランダルとフィアンマ・ベーゼが切り結ぶ。

本来なら女とはいえ重力を得たジャンヌの剣が思いはずだが、しかし両者の力は拮抗していた。

地獄の業火を逆噴射し、推進力をましたその剣は、ジャンヌの一撃と同等の破壊力を有していたのだ。

「さあてと……………もいつちよ行くぜえ！」

フィアンマ・ベーゼに炎を灯したイアは、首に腕を巻くようにしてベーゼを振りかざす。

「おらあっ！」

それを一気に振り抜くと、炎の奔流がジャンヌに襲いかかってきた。

「ちっ！」

ジャンヌは、空間を薙ぐようにデュランダルを振るう。すると、銀氷の壁ができ、地獄の業火を防いだ。

「それが……どうした！」

イアは氷の壁をベーゼの刺突で破壊し、ジャンヌに逆袈裟斬りを放つが、ジャンヌはそれをバック転でかわした。

そんな彼女の額には、冷や汗が浮かんでいた。

「（……まずいな、そろそろ限界だ）」

ジャンヌはデュランダルを引き、力を込める。

青白い光が辺りを照らし、ジャンヌの技の準備が終わった事を知らしめる。

「……来るか……！」

イアが警戒を強めた、刹那

ジャンヌが、目の前でデュランダルを振りかぶっていた。

「……！」

あり得ない。

彼女の超能力で、この速度で、自身が警戒している中で。

一瞬、瞬きの1/10程度の短い間。

その間に、自身の目の前に移動したというのか！

頭が理性で疑問の答を導きだすより先に、身体が本能で目の前の敵に、剣の一閃を放った。

敵に何もさせない、最速の一閃。

それは確かに、ジャンヌの姿を二つに裂いたが。

本能で動いていた身体が、理性を保とうとする頭に伝える。

違う！

イアが理解した直後、それを合図としたかの如く、ジャンヌが、崩れた。

「氷かつ……！」

そして、崩れたジャンヌの姿の先には、本物のジャンヌがデュランダルを抜こうとしているのが見えた。

「はあああッ！」

叫びと同時に振り抜かれたデュランダルから、青白い光の束が幾重にもなり、イアに襲いかかった。

「まずい……ッ！」

イアが咄嗟に赤いイヤリングに手を掛けた、瞬間。

ジャンヌの目の前は、銀氷で覆われた。

「……勝った、のか？」

その問いに答える者はいなかった。
代わりに。

バギイ！

「！」

銀氷が、弾けた。

「馬鹿な……！」

中から姿を現したのは、苦痛の表情を浮かべる、満身創痍のイアだった。

違和感を感じたのも束の間、彼が手を振るった。

すると……轟！

例の紅い炎が燃え盛り、氷を全て焼いた。

「……戦闘は中断だ。」

悪いが、用事があるんでな」

「何を」

ジャンヌが疑問を口にするより早く、イアは床に穴を空け、そこから下へ飛び降りた。

「待……ッ！」

そこから追う事は、イアの炎が穴を塞いでいたという理由により、叶わなかった。

「くそ……濟まない、レイン……！」

第105弾 標的（後書き）

綾「最近ネタが尽きてきたわね……」

ミ「見事なマンネリ化だね！」

悠「何か新コーナーでもやりますか!？」

綾「考えさせましょう、作者に」

第106弾 相棒の資格（前書き）

多少誤字・ルビを改正しました。

いやあ、パソコンだとやり易いですね（父に借りました）。

第106弾 相棒の資格

第106弾 相棒の資格

「逝つちまいなあ！」

アレックスが、指先で空気を×字に撫でる。

そこから見えざる刃が発生し、キンジとアリアを狙った。

「ッ！」

「受けるな、アリア！」

それを日本刀で防ごうとしたアリアを、キンジが抱き抱えながら転がり、真空の刃を回避する。

二人がいた場所、その後ろの壁は、ズパッ！ という音がした後、×の穴が空いた。

「（あんなの食らつたら一撃だ……！！）」

焦るキンジは、ベレッタの銃弾を三点バーストで吐き出した。

が、その銃弾はアレックスに命中する前に塵になる。

舌打ちしながら、キンジはアリアを降ろしてスクラマ・サクスを抜き、一剣一銃ガン・エッジの構えをとった。

アリアも、双剣双銃カトラの二つ名通り、ガバメント二丁による双銃カトラでアレックスに銃口を向けた。

「はっ！ てめえらみたいいな雑魚じゃあレイの相棒は務まらねえ！ てめえらみたいのがパートナーじゃあ、レイがマジでバトれねえんだよ！」

足手纏いなんだよ、てめえらはあ！」

アレックスは一瞬でキンジの前に移動する。

キンジが反射的にスクラマ・サクスを振るが、アレックスは軽々と斧で受け止めると、キンジの顎に掌底を叩き込んだ。

パアアアアッッッ！

「が……!?!」

脳味噌が揺らされ、ダメージを受けたキンジはその場に膝をつく。しかも深刻なのが

「(……ヒステリアモードが……!)」

そう、ヒステリアモードが、解除されてしまったのだ。

ワラキアの魔笛を食らった時のような感覚。

恐らく、ヒステリアモードには様々な解除条件があるのだろう。

最悪な事に、先の一撃はその条件に偶々一致していたらしい。

もちろん、アレックスが意図的にやったとは考えづらいが。

「パチモン 終えだ偽物！」

斧を振り上げるアレックスに、アリアがガバメントをフルオートで放った。

が、その全てはアレックスに当たる前に塵に帰り、アレックスを妨げるには至らない。

その斧が降り下ろされる、瞬間。

アレックスの身体が、真横に吹き飛んだ。

「!?!」

アレックスは何が起こったか分からない、という表情をしている。

反対に、キンジの顔は蒼白になっていた。

「アリア！」

その名を叫ぶ。

アレックスを吹き飛ばしたのは、キンジを庇ったアリアの体当たりだった。

「……っ、馬鹿か、コイツ……!?!」

アリアの身体には、細かな傷が幾つもついていた。

銃弾を刻んだ風の刃を、ごく一部とはいえ食らったのだ。

「アリア、アリアっ……!」

キンジは傷ついたアリアを抱きながら、アレックスの攻撃を受けないうつ、曲がり角の先に隠れて彼女の名を呼ぶ。

「だ、大丈夫よキンジ……それより、キンジは……?」

「それよりって……！」

……ああ、お前のお陰でピンピンしてる！」

「そう……良かった……」

そう言い残し、アリアは意識を手放した。

キンジは一瞬、自身の心臓が止まる思いをしたが、アリアは気を失っただけだった。

「……任せろ、アリア。」

俺がお前を、守る。

命だけじゃない……誇りもだ。

あいつを倒して、俺たちがレインの相棒に相応しいって事を、教えてやる……！」

レインは、潜水艦の中で理子に貰ったカードを開いた。

危なくなったら開けると言われたそのカード……！

その中を、キンジは目にした。

「うおおっ!？」

中身は、なんと……アリアの、着替え中の写真だった。

子供っぽいトランプ柄の下着が目に入った瞬間　ドグン。

来て、しまった。

「（やれやれ、まさか写真なんかでヒステリアモードになるなんて

……アリア、君は魅力的過ぎるよ）」

ヒステリアモードになったキンジは、アリアを丁寧に寝かせ、ナイフを手で回すように開いた。

「さて……これは、負ける訳にはいかなかったかな」

アリアのガバメントを一丁拝借し、キンジはアレックスの前に飛び出した。

「……よお。」

ホームズはどうした？

死んだかあ!？」

チャキツ……

キンジは無言でスクラマ・サクスとバタフライ・ナイフを構えた。

切れ味抜群の二本の刃は、その反射光をアレックスに向けている。その光が、アレックスの目に入り、彼は眩しさに目を細める。瞬間、キンジは駆け出した。

「つな小細工が通用すると思うかあ!？」
アレックスは片手を振ると、それに続いて地を蹴る。

キンジが真空の刃をかわすと、その先に回り込んだアレックスが斧を横薙に振るった。

「おらあ！」

それをスクラム・サクスを寝かせて流し、バタフライ・ナイフを逆手に持ってアレックスに突き立てる。

が、アレックスはそれを避けない。

ブアッ!

「！」

強烈な突風がキンジを襲い、押し返された。

「くそっ……！」

キンジは体勢を立て直そうと手を地につき、ナイフを持ち直す。

アレックスは無行の構えから幾連もの真空の刃を放ち、キンジに向けた。

「(あの技……!」

構え無しでもできるのか!)」

だが、驚愕に目を見開くのも一瞬、刃を屈んで避けながら、キンジは疑問を抱いた。

今は、僅かに慣れてきたためか真空の刃が、どこに来るか分かる。

が 戦闘が始まった瞬間にこれを使っていれば、確実に死んでいたはず。

アリアを殺す、と宣言したにも関わらず、それを実行しない。

何故なら 恐らく、迷っているから。

当然だ。

人を殺す、などそう簡単に決められるものではない。

なら 付け入る隙はある!

キンジはナイフを仕舞い、ベレッタを抜くと三点バーストで銃弾を吐き出した。

「だからこんなもんが……ぐっ!？」

先のように銃弾を破碎しようと手を動かしたアレックスの表情は、苦痛に歪んだ。

「……銀弾、つかよ。」

しかも、ご丁寧に銃弾の色に塗装してくれやがって……か、はっ」
血を吐き出しながら言うアレックスは、どこか弱々しい声で言った。
一撃は鳩尾に入れたので、相当なダメージを負ったはずだ。

「……どうして避けなかったんだ？」

「何の話だあ？」

「とぼけるなよ。」

お前なら、銃弾が切れないって分かった時点で避けれるはずだろ。

だけど、お前は避けなかった……どうしてだ」

キンジの問いに、アレックスはその紅い髪で顔を隠しながら、答える。

「わっかんねえよ……!」

身体が、動かなかったんだ……!

戦闘中もそうだ。

何度もホームズを殺せるタイミングがあった。

なのに、身体は動いちゃくれねえ……なんだってんだ」

アレックスの言葉を聞きながら……やはり、とキンジは思う。

この少年は、命の重さを分かっている。

この少年は、殺しなんてしたくないのだ。

その本心が、理性を上回って身体を支配していた。

もしかしたら、彼は止めて欲しかったのかも知れない。

人を殺そうとする、自分自身を、誰かに。

「……なんで、アリアを殺そうとしたんだ？」

自然に、キンジは問うていた。

言葉遣いは粗暴だが、根は善良であるこの少年が、何故自身の思い

を押し殺してまでアリアを殺そうとしたのか。

「……はっ、仕方ねえ。」

「ためえになら話してやってもいいか……」

アレックスは、天井を仰ぎ見る。

「なんてこたあねえさ。」

ホームズ……あいつがいると、苦しむヤツがいるんだ。

いや、ホームズがいたから、あいつはあんなに辛い思いをし続けている。

俺はそれを見ていらなかった……それだけだ」

「……大切な、ヤツなのか？」

「つい口をついて出た言葉に、キンジは口を押さえた。

慌てて取り消し、謝罪しようとするが、それより先にアレックスが微笑を浮かべ、声を洩らした。

「くくっ……！」

面白えな、お前。

そんなストレートに聞いてきたヤツあ、お前が初めてだなあ。

レイが相棒にすんのも領けんぜ……」

アレックスはキンジに視線を送ると、アリアが寝かせてあるだろう角の先に目を向けた。

「……ああ。」

お前にとつてのあいつくらい、俺にとつては大切なヤツだ」

「な、何を言い出すんだ！」

俺は別にアリアとそんな関係じゃ……！」

「照れるなよお、遠山。」

……俺はお前の事、認めただんだけぜ？

俺はもう、お前とそのパートナーには手を出さねえよ」

アレックスが拳を上げる。

キンジもそれに応え、拳を突きだした。

「レイを頼むぜえ、キンジ」

「何を言っただ、お前も手伝えよ」

キンジの言葉に、アレックスは一瞬、間の抜けた表情を浮かべた。
「いいのか？」

「ああ、そもそもレインが断る訳ないだろ？」

「そうか……なら、お言葉に甘えさせて貰いやしようかねえ」

アレックスは……前髪で隠れた目を、晒そうとはしなかった。

ドゴオオオオオオン！

「っ、な、何よ！」

目を覚ましたらしいアリアが、突如なり響いた轟音に騒ぎだす。

キンジとアレックスはそれを苦笑しながら見ていたが、アレックスはキンジに真面目な声で話しかけた。

「キンジ。」

お前らは仲間を拾って潜水艦に戻ってやがれ。

アトランティスはやがて崩壊しちまう。

脱出手段は確保しとけ。

レイの相棒なら、な」

「……了解、じゃアレックスも」

「俺にやあ野暮用があるってんだよ。」

……先行つとけ」

アレックスは身体を押さえながら、レインが戦闘している方向へ向かう。

「……分かった、頼むぜ、アレックス」

「……茶あでも飲んで、まったりさっぱりきっぱりゆっくり待ってやがれ。」

絶っ対え戻ってくんからよ」

アレックスはそう言い残し、彼の超能力……風に、身を預けた。

ヒュン！

風を切るその音と共に、アレックスの姿は消えた。

第107弾 集う来訪者

第107弾 集う来訪者

海神の一撃を避けるレインと静奈は、反撃の手立てが無い事に苛立っていた。

「（呪避けか……静奈に手伝って貰えばなんとかなるか？）」

レインは正直な話、超能力は力技を主にするタイプであり、術式の解除と言った細かい作業が苦手であった。

力技でぶち破るという方法も無くはないが、静奈に引き付けて貰って、急いで準備をしたとしても、30分はかかる。

絶対無理だ。

なので、まともに通用する攻撃法を持たない二人は、海神の攻撃を避けながらチャンスを窺っているのだった。

「（ん……待てよ？）

超能力が効かない、とはいえ、超能力で起きる作用にまでは及ばないんじゃないか？」

そう考えたレインは、ダガーを仕舞い、ブローを抜いた。

銃口に紫電を収束させ、磁力を発生、引き金を引く。

雷砲、彼がそう呼ぶその一撃は、確かに海神の足部分に穴を穿った。

「効いた！」

レインはついに有効打となり得る攻撃を見つけ、ブローを三点バーストにし、雷砲を連続三発でばら蒔いた。

ズドドツッ！

もう片方の足、腹にも二発、穴が空く。

パトラ戦の時もこうしていれば楽だったのに、とは言つまい。

勝算を見つけたレインは、静奈にこっそり耳打ちする。

「静奈、海神の頭まで連れていってくれ……俺がああ馬鹿兄貴を引

っ張りだす」

レインは、全霊でブロウに紫電を蓄え始めた。

その銃口、いや、銃全体が紫の輝きを放つ。

全力の雷砲、その準備をしたレインは、頷く静奈に身体を任せた。

「分かった……行くぞ、レイン！」

静奈は水流でレインの身体の半分を包み、それをコントロールして上昇させる。

海神が槍で突いてくるのを上下左右にかわしながらの移動は、さながら縦横無尽に動くジェットコースターのように、レインはブロウの標準をいつでも合わせられるように気を引き締める。

やがて、槍が横薙に振るわれた。

それを好機と捉えたのか、静奈は今までにないスピードで水流を上昇させ、槍がレインがいた空間を通過する頃には、ついに海神の頭部まで到達した。

「食らえええええ！」

レインは、雄叫びと共にブロウの引き金を引いた。

狙いは、海神の首。

操縦席である頭部を切り離すための措置だった。

ズガアアアアアン！

強力な爆撃のような発砲音、それに続いて、音速を超えた銃弾が、海神の首に向けて飛ぶ。

バチツツツ！

が、それは海神の首には届かなかった。

激しい何かの音のした直後、銃弾が粉碎された。

あれは……アリアの言っていた、高圧水流による、銃弾の破碎。

まさか！

レインは背後を仰ぎ見る。

そこには、鋭い槍と化した海水が、幾本にもなりレインに矛先を向けていた。

「っ！ 静奈、頼む！」

「もうやってる！」

静奈が相手の形成した水槍のコントロールを乗っ取り、自身が操る術『ステルスハック制御返し』を行うが、それでも防げたのは半数、つまり、1/4を操り、更にそれで1/4を防いだ。

残りの半数、ざっと30はあろうか槍が、レインを八方、否、文字通り30方から襲う。

「くそ……！」

『鏡花水月』！

その名を叫び、一回転して一部の槍を薙ぐ。

更にもう半回し、全ての槍を反射し、レインは息を吐いた。

反射した水槍は、全て呪避けによってただの海水となり、流れていく。

「くそっ……今まで隠していたのか……！」

完全に油断……いや、失念していた。

海神、つまり海の神。

それが、自身の名に連なる『海』を、操れない訳が無いのだ。

事実、『神』を冠する超能力者　レインとアレックスは、それぞれ

雷と風を自由自在に使役する。

そうこうしている間にも、またレインに槍が襲いかかってきた。

「くっ……！　静、ッ！」

再び静奈に応援を頼んだが……そこで彼女の方を向いた事で、レインは顔を蒼白にした。

静奈の周りには、先の自分と同等の数の槍が浮かんでいる　！

「止めるおおおお！」

レインは自身の身体が槍に傷つけられるのもいとわず、槍の包囲から突破、静奈の下へ跳んだ。

鏡花水月を振りかざし、一振りではぼ全ての槍を反射した。

残りの槍を制御返しした静奈は、レインに背中を預けるように、彼の背後を守りつつ、扇子を両手で開いた。

「レイン。」

お前は自身の身の安全を考える。

前にも言っただろう、私だって自分の身くらい自分で守る」

「……分かつてはいるけど、やっぱり女の子が無理してるのを見るのは、俺はあんまり好きじゃあないんだよね」

苦笑いしながらそう言うレインに、静奈はほとほと呆れたようにため息をついた。

そんな間にも襲ってくる槍を、静奈は羽衣と扇子で受け、断ち、流し、捌きながら、レインは鏡花水月で反射しながら、信季を引っ張りだす算段をつけようとする。

だが、そこで気づいた。

「そう言えば……あれだけ高笑いしていたのに、信季は一向に喋らないね。」

どうしたんだろう？」

レインが口にした疑問を聞いた瞬間……静奈の表情が、青ざめた。

そして、海神の顔を凝視し始めた。

「まずい……！」

暴走している……！」

苦虫を噛み潰すような、悔いるようなその言葉に、レインは息を飲んだ。

暴走。

それも、海の支配者たる古代兵器・『海神』^{ホセイドン}が。

「恐らく、兄は今海神に取り込まれようとしている状態だ……！」

もちろん、コントローलなどとうに聞いていない。

本来朝露の女の血が無ければ出来ないはずの海水の操作までするのは……！」

だとしたら、相当厄介な事になった。

レインは鏡花水月を握り締め、海神を見据える。

防御もままならない、攻撃も防がれるこの状況。

これを切り開く術は、果たして自分に有るのだろうか　そんな弱音を、吐き出す寸前だった。

「おいおい、諦めてんじゃねえよ、レイ」
その、声に。

レインは、思わず振り返った。

そこに居たのは、紅い髪を靡かせ、漆黒のコートに身を包んだ、アレックスだった。

「アレックス……！」

お前、どうして……！」

「ああ？」

そりやどっちの意味だよ？

……まあ、面倒だから両方一遍に答えてやるかあ。

俺は！ お前の！

味方に戻った！ 以上！」

アレックスはそう言い、ニヤリ、と悪戯っぽい笑みを浮かべ、右手の親指を立てて、突きだしてきた。

レインも、微笑しながら親指を立てて返す。

そんな二人の邪魔をするように、海神が三又の槍での刺突を放つ。

更に、同時に海水で形成した槍を何本もレインに向ける。

しかし、それはレインには届かなかった。

バシュッ！

音と共に白い水蒸気が立ち込め、水槍が全て蒸発した。

「ふん、人が話しているのに、無粋なヤツだ」

指先に炎を発生させながら呟いたのは、イア。

彼の『地獄の業火』の熱が、海水を蒸発させたのだった。

迫り来る三又の槍に、レインより先に飛び出す二つの影。

「ったく、危なっかしいもん振り回すな！」

「そのでかい槍、邪魔だ！」

最初に槍に向かったのは、獰猛な笑みを溢す優希。

彼は日本刀で槍を、直接は受け止めずに、上から切りつけた。

「飛龍一式『雷落とし』」

椎名の剣技が一、その威力は雷の如し。

その一撃を食らった三又の槍は、僅かに輝を入れた。

「壊れるおおおお！」

その輝に、叫んだ京助が二本の槍、『神の槍』と『神殺しの槍』を叩き込んだ。

ビキイ！

と音を立てて、槍が崩れ落ちる。

「お、お前たち……！」

「助太刀に来たぜ、『紫電の雷神』」

「まあ、俺たちのためでもあるからな」

「まずは、あの糞依頼主を引っ張りだすぞ」

優希、京助、イアの言葉に頷き、レインと静奈は、各々の武器を構えた。

第107弾 集う来訪者（後書き）

ミ「いやあ、面白かったあ〜」

綾「何その自画自賛」

ミ「いや、原作10巻」

綾「ああそつち？」

悠「AAも面白かったですよ。あかりちゃん、相変わらず可愛いなあ」

ミ「そう言えば、ユーちゃんはあかりと同じクラスだったね」

悠「そうですよ。」

実は、影であかりちゃんたちと事件を解決してたり……」

綾「ちよっ！ 聞いてないわよ、そんな話！」

悠「次回！ 悠のAA世界での奮闘記！」

綾「皆さ〜ん、この娘の嘘ですからね〜！」

次回、普通に本編ですからねー！」

第108弾 兄と妹

第108弾 兄と妹

「レイ、あいつの頭部狙いつて事でいいんだよなあ？」

「ああ、頼める？ アレックス」

「はっ！ あつたり前じゃねえのお！」

手伝つてやつから、とつと片して来やがれてんだ、よー！」

そう叫ぶと、アレックスは海神に向かつて真正面から飛び出した。

続いて、優希、京助、イアも三方からアレックスに続く形で海神に向かう。

「俺たちも行くよ、静奈……！」

「……ああ！」

海神が水で形成した巨大な剣を振りかぶった。

その範囲は、京助、レイン、静奈を巻き込む範囲だ。

「こりゃまじい……！」

京助が冷や汗をかきながらそう洩らす、依然として剣は彼らに迫る。

そんな剣と彼らの間に、紅い炎が割って入る。

「イア！」

「任せろ……！」

お前らのはあの馬鹿依頼主のところに行ってこい！」

「……頼んだ！」

京助は叫ぶと、レインと静奈を誘導しつつも、身軽に海神の身体を上っていく。

そんな中で、海神の水槍が彼らの元に迫った。

「ちっ……埒があかねえ……優希！」

「了解！」

碌に言葉も交わさないまま、優希はワイヤーを四ヶ所から射出した。それが、海神の足の一本を絡める。

「……ッ、あら、よっ！」

と叫び、海神を、なんと前屈みに転ばせた。

なんて馬鹿力だ、と思ったが、成る程アレックスも協力して引つ張っているしているのが視界の端に映った（それでも馬鹿力と呼べるが）。

レインと静奈は、頭部付近まで降りる。

先に落下していた京助が、両手を交錯させた。

その両手には、高周波ブレード、高周波ナイフがそれぞれ握られている。

それらをX字に振り抜き、京助は海神の頭部に裂け目を作った。

が、最後の抵抗か、海神は自身の頭部を守るように、海水で防御を始める。

「っざけん、なあッ！」

アレックスは、両手を構え、片方の握った拳を、上に向けた手のひらに押し付けた。

すると……竜巻、が。

横向きに、レインと静奈、そして海神の頭部を結ぶように、道になる。

「お膳立ては済んだぜ、レイ。

決めて来やがれ」

「サンキュー、アレックス！

行くぞ、静奈！」

「ああ……兄を、取り戻す……！」

レインと静奈は、竜巻の中に飛び込む。

突風に後押しされながら、京助が入れた輝の前に肉薄した二人は、各々の武器を振りかぶった。

「これで……」

「終わりだああああ！」

ガキーン！

レインの水月と静奈の扇子が、海神の輝に衝撃を加える。それは、地割れのように広がっていき……パキィ……ン、と。海神の頭部が、崩れ落ちた。

その中から、黒と白の混じった髪をした男……信季が、気絶し足場を失い、落下していた。

「お兄様！」

流水が彼を受け止め、静奈の元へ引き寄せた。

信季の寝顔は、どこか安堵したような　まるで、ずっとそうしかかったように、穏やかな寝顔だった。

と。これにて一件落着、そう思われた瞬間。

バギャツ！

という嫌な音が鳴り響く。

見れば、それはついにアトランティスが限界を迎えようとしているようだ。

「まずい……！」

潜水艦まで戻れないぞ！」

「それについては心配無い。

私の能力で、水圧や酸素なんかの問題も無く、快適に地上まで送ってやる。」

ほら、『風神』たちも早くこっちに来い」

焦るレインの言葉を制した静奈は、アレックスたちも呼び寄せた。

が、来たのはアレックス一人で、優希、京助、イアは壊れた海神から何かを探しているようだった。

「……あつた！」

イアが叫ぶのに反応し、皆一ヶ所に集まっていく。

「済まない、『紫電の雷神』に朝露　静奈。

俺たちとはここでお別れだ」

京助の言葉に、レインと静奈は眉を寄せた。

が、二人の想像している事は全くもつて的外れと言える。

「もちろん、死ぬ気なんて毛頭ないぜ？」

イアの補足説明に加え、彼らの手から輝く宝石が姿を露にした。

「こいつは海神の動力の一部だ。」

こんなでかいモノを動かすんだから、馬鹿みたいなエネルギーを発生できる……とまあ、時間が無いから後は『風神』に聞いてくれ。

じゃあ、行くぞ……！」

優希が叫ぶのと同時、三人の姿が薄れていった。

「！？」

「じゃあな。」

アリアやキンジたちによろしく言っといてくれ」

その言葉を最後に、三人の姿は見えなくなった。

「……おい、さっさと行くぜ」

アレックスに促され、四人（一人は寝てるが）は先に急いだ。

「……ってまたこんなにかぎやああああ！」

レインだけでなく、アレックスまでもそんな事を叫びながら、ほぼ全て海水で浸かった通路を滑るように進んでいく。

状況としては、空気のドームに入った四人それぞれが水流に下半身を包まれて爆走していた。

何故、神なんて大層な二つ名を持つ二人がこんな事（目が渦巻きみたいな形になつてる）になっているのか。

それは、そのスピード。

最大瞬間時速300キロ。

ぶつちやけ新幹線より速い。

そんなスピードで右へ左へ揺れる揺れる。

心無しか、信季の顔色が悪い気がする。

そんな馬鹿げたスピードで、四人は潜水艦まで数分で辿り着いた。

「皆！ 出してくれ！」

飛び込むように潜水艦に四人が乗り込むと、信季を連れているのにギョツとしたようだったがすぐに潜水艦は発進した。

「任せろ、一気に海上まで運んでやる！」

静奈は手から青白い光を放つと、空気の道を作り、水流をエスカレーターのようにして一気に上まで運んでいった。

そして、崩れていくアトランティスを目で追いながら……やがて、潜水艦は海上に戻ってきた。

「ふう……徐々に新鮮な空気が吸えた気がするよー」

理子の言葉に皆賛同の意を示しつつ、静奈に抱きつく（もちろん、キンジは後ろから見守ってるだけだ）。

特に驚いたのがジャンヌで、安心したのか涙まで流しながら、「良かった、良かった……！」と頻りに呟いていた。

そんな彼女らの中心で微笑む静奈は、付き物が落ちたように清々しい顔をしていた。

さて、一応これで静奈誘拐事件は一件落ち着いた訳だが、その後にも様々な事があった。

まず、一番可哀想だったのがキンジだろう。

実は病院を許可無く抜け出してきた彼は、病院の人たちにこっぴどく叱られ、個人部屋にされて監視体制で治療されているようだ。

後、信季。

彼は目を覚ますと、静奈に謝罪と感謝の言葉を告げた。

散々苦しめておいて、海神の暴走に巻き込まれた自分を、それでも静奈は助けてくれた。

そんな思いからだろう。

そして大人しく捕まり、今は司法取引で忙しいそうだ。

そして、アレックス。

彼に聞いた話では、優希、京助、イアは『この世界とは別の平行世界』とやらの住人だったらしく、その平行世界から迷い込んで、帰るためには海神の動力源の膨大なエネルギーが必要だったらしい。アレック自身も信季に従っていたのは、東京武偵高で騒ぎを起こせば、Sランク武偵であるエリアが来るかも知れない、という理由で、来なかつたら早々に離脱するつもりだったようだ。

まあ、彼の予想は半分正解半分外れのようなものだったが。

後、彼はなんと、夏休みにも関わらず東京武偵高に転入してきた。ニユーヨーク武偵高にいる友人の事を少し心配したが、彼女ももう転校の準備を整えているらしく、少し先に来ただけだ、とアレックスは語っていた。

さて、最後に当の静奈だが……彼女には、なんら心配は要らないだろう。

兄と向き合う事が出来て、自身の力とも折り合いがついて、無事に帰ってきた彼女。

しかも、その事件がバレてSランクに格付けされてしまった。

白雪も魔剣戦であれがバレればSランクに格付けされそうなものだが。

ああ、封印の件は完全に箍が外れてしまい、今静奈はSSRで目下常時コントロールの訓練中らしい。

で、そんなこんなで無事に武偵高に帰ってきたレインたちは……気づいていなかった。

自分たちが、静奈が受けた任務をほつ放り出してアトランティスに潜入していた事を。

1ヶ月後、キンジの退院の日。

キンジの見舞い、というか退院祝いに行こうという話になった静奈とレインは、SSRから出ようとして……はた、と立ち止まった。

掲示板に五寸釘でくくりつけられていた、一枚の紙。

その内容は……

第108弾 兄と妹（後書き）

静「朝露の光と闇編！」

皆『完・結！』

綾「はい皆、お疲れ様〜」

ミ「静ちゃんお帰り〜」

悠「次回からは閑章ですね〜」

静「そこで皆様にアンケートだ。

まあ、そこまで大したものじゃないが……

1か2、どちらかを選んでくれ。深い意味はない。強いて言えば、どちらを選ぶかで閑章の1話が大きく変化する。

番号だけでもいいので、頼んだ」

第109弾 星伽巫女その2（前書き）

閑章突入であります！

第109弾 星伽巫女その2

第109弾 星伽巫女その2

静奈とキンジの単位不足、という重大な問題を抱えながらも、レインは今現在一人で任務についていた。

「……お前には案内の必要は無いかな、アレックス？」

「連れねえこと言うなよ、相棒。」

お前とキンジしか頼れるやつが居ねえんだつつつの」

赤い髪をかきむしりながら、漆黒の和服（！？）に身を包んだアレックスがそんな事を言うものだから、レインはため息をついた。

アレックスはニューヨーク出身の武偵であるため、案外と、日本文化が大好きなのだ。

実は、3/4日本人であるはずのレインも外国暮らしが長かったからか、転入当初は靴で部屋が上がってしまいキンジに怒られたのは懐かしい話だ。

「日本に来たからにはサムライとニンジャとミコサンを見ずには帰れねえ。あとスシとイタマエ」

「ああ、そう言う事なら、俺の知り合いの白雪って奴が巫女さんだよ」

「本当か！

よし、シラユキに会いに行くぜ！」

設備紹介をほったらかして、アレックスは顔も分からない白雪を探し始めた。

それに苦笑しながらついていくレインも、そう言えば巫女さんらしい姿を見ていないな、と（格好だけならジャンヌの時見ているが、作法やら何やらをあまり見たことが無かったのだ）僅かに期待に胸を膨らませるのだった。

「！いたぞレイ、ミコサン……シラクキだ！」

全力でダツシユするアレックスは、前方に明らかに巫女の服装をした少女を見つけた。

そこはレインとキンジの部屋の前であり、表札をじっと見つめ、何やら確認している様子だ。

時代劇でしか見ないような唐傘に、巫女装束を着た少女。確かに、黒い長髪なのも白雪と似ていた。

が、この少女は白雪ではない、とレインは確信していた。

まず、背が幾らか小さい。

元々身長はそれほど高くは無かったが、目の前にいる少女はそれより一回り程低かった。

次に、目だ。

白雪はなんと言うか、おっとりした目をしているが、この少女の目は少し鋭い感じがする。

例えるなら、何かを警戒する仔犬のような……そんな感じだ。

と、その少女はこちらに気がついたようで、その鋭い視線をこちらに向けてきた。

「貴方は？」

「いや、この部屋に住んでいる者なんだけど……」

とレインがたじろぎ気味に答えると、少女はまあっ！ というように、目を丸くした。

「しっ、しばらく会わない内に、髪の毛を染めて不良になってしまわれるなんて……そんな身なりで普段からお姉様と一緒にいるなんて、見損ないました！ 遠山様！」

「へ？」

しばしの沈黙の後、ようやくレインが発したのはそんな間の抜けた声だった。

「へっ、じゃありません！」

大体、そちらの方も髪の毛が真っ赤です！
不良です！」

「ああ？ おいレイ、ニコサンってのはもつと淑やかなもんじゃねえのか？」

少女の言葉に苛立つたらしいアレックスが凶暴な面をちらつかせ始めた。

レインが深々とため息を吐く中、少女は懐に手を入れていた。

短刀だな。

少女の腕の入れ方・筋肉の動き等から見てそう判断すると、レインは頭をかきながら幾つか少女に忠告してやる事にした。

「お嬢ちゃん、俺たちみたいなの相手に刃物を出すのは寧ろ危険だから、止めた方がいい。」

後、俺は遠山 キンジじゃない。その表札の成瀬 レインハートだ」

レインの言葉を聞いた少女は、あわ、あわと、短刀を見破られた驚き、それを制された焦り、人違いだった羞恥から頭がパニックになっているようで、口から言葉が出てこないようだった。

隣でアレックスが「成る程、それで『懐刀』か」などと日本語の勉強に勤しんでいるのを放っておきながら、レインは目の前の少女に深呼吸を促し、落ち着かせる。

「大丈夫かい？」

「すー、はい、すー、はい……も、もう大丈夫です。」

そちらの方も、先ほどは失礼しました。

私の名前は、ほと

「粉雪！？」

少女が落ち着いたところで、自身の名前を言おうとした時、背後から声が掛かった。

聞き覚えのある声。

振り返れば、そこには本来アレックスに紹介するはずだった『武装』

巫女さん、星伽 白雪とレインが間違えられたもう一人のこの部屋の主、遠山 キンジの姿があった。

「へえ……妹さんだったのか」

白雪に聞いた話では、あの少女の名前は粉雪。

青森にあるという星伽神社からやって来た巫女さんで、武偵高を見学に来たらしい。

その元々の理由が、『武偵なんて職業をお姉様にさせ続ける訳にはいかない』とかなんとからしく、白雪は武偵高から離されるのを恐れ、キンジの単位が足りてないこともあって彼に案内の任務を頼んだとのことだ。

単位は0.3、つまりこれが終われば晴れてキンジの単位は残り0.7となる訳だ。

「へっ、大変だねえ、東京武偵高は」

「お前もこれからここに通うんだぞ？」

「そりゃそうだったの。」

まあ、今の内にコネ作つとくか」

コネ、という言葉で、レインはふと今朝あったメールを思い出す。

そう言えば用事があったんだなあ、と臆気に考えながら、目の前でSSRの鳥居を興味深気に見詰めるアレックスの肩を、チヨイチヨイ、と叩いた。

「んだよ？」

「着いてこい。いいコネ、紹介してやるよ」

「どんな？」

「金次第で違法改造発明修理、ほぼ何でもしてくれる」

「乗った！」

簡単に落ちたアレックスだった。

装備科棟、地下。

その一室、B201作業室前に、二人は立っていた。

「んだあ？ このジメジメしたところは？」

「お前も聞いた事ない？」

アメリカから青田買いでスカウトが来た天才少女だよ」

「……この『ひらがあや』って奴か……名前だけなら、な」

アレックスが見詰める先には、平仮名で『ひらがあや』と書かれた看板があった。

小学生、否、幼稚園児か、とため息をつきながら、レインはそのドアを軽くノックした。

「開いてますのー！」という声を確認し、レインはドアを開ける。色々なものがごちゃごちゃしている中を進んでいくと、色素の薄い茶色、というかオレンジに近いボブカットの髪をした少女が、熱心に銃を弄っていた。

「おー！ レイレイ君来ましたのだ！ 後ろの方も外国人ですのだー！」

「アレックスだ。」

「二学期から転入予定だ」

「よろしくですのー！」

あ、レイレイ君、頼まれていたもの出来ますのだ」

言いながら彼女、平賀 文が取り出したのは……黒い靴だ。

端から見たらただの靴だが、かの平賀 源内の末裔である天才少女に、ただの靴を頼んだりはしない。

余談だが、彼女の仕事の報酬はぼったくりな値段なのだ。

だからSランククラスの实力があるのに、Aランクに格付けされてしまっている。

話が逸れたが、この靴、実は戦闘用で、様々な装備が取り付けられている。

例えば、足裏に鉄板が仕込んであったりとかだ。

もちろん、中には衝撃吸収素材なんかを使用しているから怪我の心

配はない。

「レイレイ君、今でもビックリするくらい強いのに、どこまで強くなるつもりですかー?」

とは平賀の言。

だが、レインは先日の海神との戦闘の件を思い出していた。

あの戦闘で、実は足にかなりのダメージを負っていたレインは、一週間松葉杖で歩いていた。

加えて、海神との戦闘では必殺の一撃となる攻撃が無く(といっても超能力が使えれば瞬殺だったが)、やはり超能力以外の必殺兵器も必要だ、と判断したのだ。

「名称は『影』^{シャドウ}ですのだ。

カッコいいですかー!」

言われるがまま、レインはシャドウを履いた。

ズン……と、普段履いている靴よりかなり重い感触がする。

当然、そういう設計でありそう頼んだのは彼自身であるから、ある程度予想はついていたが。

「サンキュー、平賀さん。

アレックスも、金はちゃんと積むやつだから頼むよ」

「あいあいさーなのだ!

アレ君、武装関連で困った事があつたら文ちゃんに任せるのだー」

「あ、アレ君?

ま、まあいい……こっちこそ、頼むぜ」

平賀との挨拶も終わったらしいアレックスを連れて、レインは装備科棟を後にした。

第109弾 星伽巫女その2（後書き）

静「109話にしてようやく平賀さん登場か」

ミ「新装備もかっくいね」

綾「それにしても……二人ってやっぱり外人ぽいところあるのね」

悠「アレックス先輩は純粋にアメリカ人ですよ、綾瀬先輩……」

第110弾 世間知らず×2

第110弾 世間知らず×2

とりあえず一通りの紹介を終えたレインは（よく考えると、1学期からの転入生であるレインに任せるのもおかしな話だ）、既に夕方になっていた街に繰り出していた。

「レイ！ こりゃあクレイジーなカフェじゃねえか！

メイドがわんさかいて男共をもてなしてやがるぜ！」

「レイ！ 何故日本の車は皆ハンドルが右についているんだよ！？」

「レイ！ あの男たちはシヨップの前でたむろしていぞ、ありゃあオーケーなのか！？」

などと色々言い出すものだから、色んな人が色んな目でこちらを見てきた。

奇声を上げながら襲いかかってくる不良たちを軽く蹴散らしながら進み、レインとアレックスは手近なファミレスに入った。

そこで夕食を摂って、夜の街をぶらついていた。

それにしても、やはりレインとアレックスは目立つ。

レインは銀髪で、10人が10人振り向く程、整った顔をしており、アレックスは明るい髪の色に漆黒の和服を着ており、加えて美麗な顔つきをしているものだから、二人が通ると道ができ、換わりに左右に人の海ができる。

それが鬱陶しくて、二人は逃げるようにその場を後にした。

「……………あんまし変わらないんだなあ、ニューヨークも、東京も」
ポツリ、とアレックスは感慨深気に呟いた。

漆黒の和服に身を包むその姿は、月が隠れている今は視認しづらい

が、松明の如く赤い髪が、彼の存在感を示していた。

「そうかな？」

俺は全然違うと思うけど」

「まあ、確かに違うだろうなあ。

「ただだよ、なんつーか、こっ……雰囲気？ 違えな……？」

アレックスが言いたいことにピッタリ合う単語を試行錯誤している間に、レインはちら、とアンティークの腕時計を見た。

レインの髪と色を同じくするシルバーのそれは、もうすぐ終電である事を示していた。

「……まあいいよ、それより今日は早く帰ろう。

キンジに許可は取ってあるから、俺の部屋に来なよ」

というレインの言葉に続いて、アレックスは納得出来ないまま歩き出す。

先の人だかりにはもう懲りた二人は、人の少ない公園を通る事になっていた。

すると……

「ああ!？」

「日本語喋れや!」

「剥くぞこらあ!」

などと、野蛮極まりない声が聞こえてきた。

アレックスの瞳が鋭くなり、手近な植え込みや木に隠れた二人は、そちらを窺った。

そこには、白雪 ではなく、妹の粉雪が、柄の悪い男たち（しかもよく見れば、先ほどレインたちに絡んできた不良たちだった）に囲まれていた。

よく見れば、粉雪は巫女装束ではなく、ファッション誌に載っているようなオシヤレな格好をしている。

男たちが拳銃（粗悪品だが）やらスタンガン、ナイフなんかを取り出すと、粉雪も懐に手をやるが……どうやら、あの短刀は持っていないようだった。

どうしていいか分からない、といった様子で、粉雪は泣き崩れてしまった。

「糞野郎共があ……………！」

アレックスが拳を握り、怒りを露にする。

今にも飛び出しそうな勢いだったが、幸いにか、粉雪には別の手が差し伸べられた。

「おい、金が無いならバイトしやがれ」

と、もつともな意見を述べて颯爽と登場したのは……

「キンジ……………」

何故かは知らないがヒステリアモードになっていたキンジが、粉雪を取り囲むチンピラたちに啖呵を切った。

あの程度の連中なら、素手でもなんとかできるだろうな、と他人事のようにそれを眺めながら、レインは粉雪の方をちら、と見た。

どこか啞然とした表情で見ている彼女の顔には、少しの喜色が見て取れる。

苦笑しながらそれを見ていると……………キンジが、ポケットに手を突っ込んだまま、粗悪な拳銃を持った男の、目の前まで行ってしまった。

「おいおい……………撃たないのか？」

防弾制服だつて知らない訳じゃなかるうに」

なんて疑問を口にしながらも、レインは事の顛末を面白そうに見詰めている。

キンジは、拳銃を片手で、ゆっくりと奪い取った。

「そ、それはやる。」

後ろから撃つたりするんじゃないぞ！」

と、捨て台詞を吐きながら、不良たちはあつという間逃げてしまった。

キンジたちが何やら話しているが、レインは大したオチではなかった事に落胆し、ため息をついた。

「はー、帰ろうかアレックス……………」

「……………レイ、腹一杯だよなあ？」

「……………？ うん」

意図の分からない質問にそう答えると、アレックスは更に続ける。

「身体、動かしたいよなあ？」

…………… ああ、そう言う事か。

と、レインは一人納得する。

成る程成る程、そう言う事なら……………

「ああ。俺も丁度、食後の運動がしたいと思ってた頃だよ」

アレックスに賛同したレインは……………くるり、と。

駅とは逆の方向に、踵を返した。

「はあっ、はあっ……………どうやら、追っかけてはこないみてえだな」

「ついてねえよ、よっちゃん」

「まさか武偵が居やがるなんて……………」

よっちゃん、と呼ばれた、拳銃を持っていた男が苦い顔をする。

折角手に入れた拳銃を取られた上、逃げてきて疲れた彼らは、スト

レスを貯めながら近くの路地裏にへたり込んだ。

「糞があ……………！」

おいお前ら、別の奴探すぞ！」

男はそう叫ぶと、皆渋々、というように立ち上がった。

次はどんな奴をカツアゲしようか、ガキか、はたまた老人か……………

そんな下種な考えをしていると……………ゾワツ、と。

素人でも分かる程、凶悪な気配。

振り返れない。

振り返れば、殺られる。

そんな確信がありながらも、しかし男は振り返る事になった。

気配の主である男が、首を回させてきたのだ。

その男を言い表すなら 死神、だろっか。

紅蓮の髪をしたその少年は、獲物を目の前にした蛇のように舌なめずりをしている。

「……よお、兄ちゃんたち。」

てめえら、人様にたかるような真似して恥ずかしかねえのか？」
と、男。

こいつ、やばい　男の直感は、しかし周りの男たちには伝わらなかった。

「糞が！」

男の一人が持ったナイフで赤髪の少年に斬りかかる。

が、それはもう一人の男、銀の髪の少年に指二本で掴まれ、いとも簡単にへし折られた。

「素人が刃物を振り回すのは危ないよ？」

と、明らかに作り笑いだと分かる笑みを溢す銀髪の少年に、更に二人が迫った。

スタンガンを持った二人は、少年を囲むように対象に動き、スタンガンを叩き込んだ。

あれは強力なもので、ライオン一頭でも一発で昏倒させられるものだ。

男は、正直勝ったと思った。

当然だ。

いくら武偵でも、普通の人間が対猛獣用のスタンガンを食らって、無事でいられるはずが無かった。

が　残念な事に、この少年たちは『普通』からは大きく逸脱した存在だった。

「ごちそうさま」

銀髪の少年が呟くのと、同時。

彼の髪が紫に染まり、二人の男はスタンガンを食らったように倒れた。

勝ち目など、無かった。

残った男たちは、次々と「もうしません」「許して下さい」と懇願しながら、武器を置き、腰を抜かしながら必死で逃げた。

よっちゃんと呼ばれた男が一人になる。

赤髪の少年は彼を乱雑に壁に向けて放ると、その襟を掴んだ。

「おつ、お前からこんな事をして許されると思ってたのか!？」

俺の親父は 社の社長なんだぞ!？」

話を聞きながら、銀髪の少年は冷笑を、赤髪の少年はため息をした。

「あのなあ、そんな子会社の社長ごときが俺たちをどうにかできると思ってたのか、ド三流が」

「俺たちは特別でね……基本的には、何をしても捕まらないようになってるんだ」

と、二人の言葉を聞いた男は、自分が何をすれば逃れられるか、必死に考え始めた。

どうすれば出られる。

この怪物の檻から 。

「いいかあ、素人。」

お前程度の奴、俺あいつでも殺せるんだ。

そいつを肝に命じとけ」

アレックスの言葉に……男は、何度もこくこく、と頷いた。

その後日、粉雪は青森の星伽神社に帰る事になっていたので、異様に長いポルシェが東京武偵高の前に止まっていた。

「遠山様、皆様、ありがとうございます。」

また今度、本当の学園見学に来ます」

またキンジがなんかやらかしたな、なんて考えながら粉雪を見送る中、白雪がこちらに腰を折るのと、キンジが親指を立てるのが見えた。

「（バレてたのか）」

と、二人はちよびつと舌を出して、やり過ぎました、と反省しているのをアピールするのだった。

第110弾 世間知らず×2（後書き）

静「白雪の妹か……」

綾「えらく彼女の描写が少なかつたわね」

ミ「詳しくは原作五巻をご覧ください」

悠「作者は早く宣戦会議まで持っていきたいらしいですよ。

レキ先輩のところは、やっぱり原作を大きくブレイクするらしいです」

第111弾 メンバー集め(前書き)

はい、今回もやらかしました〜！

第111弾 メンバー集め

第111弾 メンバー集め

「皆！ サッカー、やろうぜ！」

『……は？』

突然なんだ、とレインは思った。

真つ昼間から日光を浴びすぎてイカれたか、もしくは某幼児&腐女子向けサッカーゲームの元主人公が憑依したか、と目の前でサッカーボール片手に白い歯を光らせてサムズアップなどという明らかにキャラじゃない行為をする相棒・遠山 キンジに哀れみの視線を送る。

「だから、サッカーしようぜ、レイン、アレックス
ちなみに、皆とはレインとアレックスのことである。

そこは二人でいいだろう、とも思ったが、キンジはどうしてもあのバンダナ少年の真似をしたいようだった。

「別にいいけど……なんでまたサッカー？」

もつともな疑問を口にしたレインに、キンジのシュートが飛んできた。

「お、おいキンジ！？」

「なんの真似！？」

「シャラップ！」

俺の事はMr・Kと呼べ！」

「キャラが合っていない上それは一体何人の人に伝わるのか！」

某稲妻の如き11人のアニメを初期からgoになるまで見ていたレインは分かったが、アレックスは隣で頭に疑問符を浮かべている。時に、Mr・Kはキンジと掛けているのだろうか。

「じゃあ安 先生」

「それはサッカーじゃなくてバスケ！」

「先生……俺、サッカーがしたいです」

「まさかの告白！？ 目を覚ましてアレックス！」

まさかSL MDUNKは分かるとは……アレックスの知識にえらい偏りを見るレインは、呆然とした表情をしている。

「よし、じゃあアレックスは決まりだな！」

「ええええええ！？」

誘導尋問だった。

まさかそんな汚い手を使ってくるとはおもわなかった、というか乗ってあげたつもりなのに罠だったという事実にあのアレックスも驚愕を隠せない。

「なあレイン、頼むっ」

と、キンジが合掌し頼み込む。

その弱々しい姿に、自然溜め息が洩れる、のも一瞬だった。

「オーケー、手伝うよ」

と手放してそう言ったレインに、キンジはガッツポーズし、顔を明るくした。

説明を聞くと、彼の言うサッカーとは理子経由で受注した任務らしく、それに勝てば一気に1・2単位、負けても0・6単位貰えるらしい。

内容は、武偵高のサッカー部が銃弾の不法製造で停学を食らったため（この辺、恐ろしく武偵高らしい理由だ）、大会に出れなくなったとの話で、つい先刻校内ネットではら蒔かれた緊急依頼だそうだと、言う訳で、自他共に認めるネクラなキンジは、レインと、あるうことが夏休み中に転入してきて碌に友人のいないアレックスに、残りのメンバーを集めてこいというのだ。

ちなみに、キンジ、レイン、アレックスの他には依頼を持ってきた理子、アリアに白雪、平賀、加えて不知火と武藤を誘ったらしい。

既に八人いる訳だが、幾らでも（最大20人までなら）誘っていいとの事。

と、言う訳で。

誘ったのは、まずは静奈。

単位が0.5足りていない彼女は、勝っても負けても単位の不足分が補える。

当然、二重の意味で静奈が断るはずもない。

後は夏休みだと言うのにレインたちの自室でクーラーガンガンにしてゴロゴロしていた綾瀬とミチル、悠を捕まえて引っ張り出して来た。

ちなみに、この部屋の電力はレインの自己負担なので、多少地球に優しい設計となっている。

とまあ綾瀬たちは、とりあえずマネージャーだ。

マネージャーがいるのといないのでは、随分違うだろう　主にモチベーションとかが。

ちなみに、悠は女だとバレたりするのはまずい、という理由からだった。

そして、屋上でぼさつとしていたレキ、テニス部の後輩に囲まれていたジャンヌを連れてきたこの第二グラウンド。

そこには……ガチでイナ　マイレブン出来そうな面子が揃っている。しかも、ジャンヌが暑いな、という理由から、セミが鳴く第二グラウンドは少し肌寒くなっていた。

この時点で超次元。

ちなみにポジションは、レインがやってみたい事がある、という訳でフォワード、キンジとアリアのラブラブカップルもエントリー。

この時点で三人がフォワードな訳だが、防御のディフェンダーにはアレックスが回ったから問題はないだろう。

他のディフェンダーは武藤に静奈がいる。

ゴールキーパーはゴツ　ハンドを極める、との理由で理子が。

髪を操作して手を作って見せたり、そんな感じだろうか。

さて、残りはミッドフィルダーだ。

精密なパスを出すレキに、中学ではサッカー部だったという不知火、何故かブルマ着用のジャンヌ。

「ジャンヌ、その格好は……」

「文献を参考にした」

「さよですか……」

キンジがジャンヌと話している間に、平賀が追いかけて始めた蝶を更に理子、ミチルが追いかけて回し、それをアリアと綾瀬が追いかける、という状態になっていた。

それを宥めようと、キンジが歩み寄ろうとすると……バシユツ！

突然、地面に砂ぼこりが舞った。

「只今参上つかまつったでござる！」

………晴れてきた砂ぼこりから出てきた少女は、開口一番そう言いはなった。

風魔 陽菜。

悠と同じく諜報科の一年生で、キンジの戦妹である。ついでに言えば、後一人のミッドフィルダーだ。

そして、その風貌もまた、特殊だった。

ちよん髷のようにしたポニーテールの髪に、長い襟巻き、両手には籠手を詰め、印を結んでいる。

『風魔』の名からも分かるように、この少女は 忍者、なのだ。

加えて、場の悪い事に、ここには一人、日本文化（？）が大好きな外国人少年たちがいた。

「ニンジャ！」

本物のニンジャだぜ、レイ！」

「俺も見るのは初めてだよ、アレックス！」

興奮を隠せない二人は、風魔に詰め寄るとニンポーを見せてくれ、と懇願した。

ジャンヌやアリアはそんな様子は無いのに、やはり男限定なのだろ

うか、こう言った日本文化への憧れは。

集られている風魔はと言えば、忍者であることを褒められて(?)調子に乗っているようであり、ちょっとした術を披露していた。

隠密に動かなければならない忍者が目立ち、尚且つ他人にその術を見せるのは忍者としてどうなのだろうか。

それを本人に言えば、『修業』と称したアルバイトに逃げる事には目に見えていた。

忍者である彼女は、金欠だった。

結局、その日はほとんど練習せずに終わってしまった。

というのも、蝶を追いかけていった平賀と理子とアリアのちびっこ三人が、行方不明になってしまったからだ。

まあ、体育館の屋根の上にいたのだが…… 搜索に時間が掛かり過ぎて、ほとんど練習が出来なかったのだ。

という訳で、今現在自室にいるキンジは、頭を抱えている。

「どうすりゃいいんだよ……」

「大丈夫だって。」

勝てる勝てる」

などとお気楽な事を言うのは、リビングのテレビでイナズ イレブンを見ているレインであった。

隣には、黒い着物をだらしなく着崩したアレックスもいる。

「お前らは何アニメを見てるんだ」

「参考資料だよ」

「こんなのが参考になったらそれはサッカーじゃねえ!」

「違えよキンジ。」

これはサッカーじゃねえ。

超次元サッカーだ」

「いや、分かるけども!」

キンジのツツコミ虚しく、テレビの中では円 と豪 寺が合体技を

決めていた。

「なるほど……」

「はっ、中々やるじゃねえの」

「お前ら……」

キンジは最早ツッコミではなく、哀れみの視線を彼らに送っていた。

一方、その頃。

情報科の一室でも、アニメ鑑賞に勤しむ少女たちの姿が。

『ウルフ・レ エンドおおおお！』

「ふむ、サッカーとは超能力を役するのも可能なスポーツだったのか……それにしても、こいつらの超能力は素晴らしいな。

一体、Gは幾つなんだ？」

ジャンヌが、かなり真剣にイナズ イレブンを見ていた。

曰く、レインから借りたらしい。

また、彼はチームメイトたち全員に配っていたとの事。

武藤や不知火が苦い顔をしたのは、想像にかたくなかった。

第111弾 メンバー集め（後書き）

静「なるほどなるほど……」

悠「ああ……静奈先輩がどんどん遠い人に……」

綾「超次元サッカーが参考になるなんて……」

ミ「あちらさんの仲間入りだよ！

きつと静ちゃんもは戦闘にもばんばん呼ばれるんだよう！」

第112弾 レッツ・サッカーアアアアア!

第112弾 レッツ・サッカーアアアアア!

蝉の声が鳴り響く真夏日な今日。

サッカーグラウンドには、11×2のメンバーが集まり、これから開始される試合の準備運動をしていた。

「おい見るよ、あいつら」

「女ばつかじゃねえか……何を考えているんだ？」

「まあ、男ばかりでも俺たちに勝てる訳ないがな」

「寧ろ当たりがいがあるってもんだ」

相手チームからそんな声が聞こえるが、レインは怒りを露にせず、アレックスに向けてパスを回した。

アレックスもこめかみに血管を浮かべているが、彼はスポーツ等の分別は弁える性格なため、少し強めのパスをキンジに回した。

「アレックス……」

「駄目だレイ。」

我慢出来ねえ……試合になったら、

と、そこまでいい掛けたアレックスの口に、レインは人差し指を立てて止めた。

言いたいことは分かっている、というように。

そして、そのつり上がった口角が、それへの了承の意味だったことも、約一年の付き合いだが、幾度も共に死線を潜り抜けてきた戦友であるアレックスには理解出来た。

「ああ、そもそもお前はデیفエンダーなんて柄じゃないもんね」

「さっすが相棒、分かってんじゃねえの」

そこで不知火にレインが呼ばれ、アレックスとの話は打ちきりになった。

「どうしたの？」

「いや……相手チームのキーパー、どうやら外国人みたいなんだ。手足が長いから、充分頭に入れておいた方がいいよ」

見れば、確かに長身の男がゴールを守っている。

ちよつと飛べばゴールの端まで届きそうだ。

「心配は無用だよ、不知火。」

どれだけ相手の手が長かるうが、防御力が疎かになつちや意味がない」

そんなセリフに……不知火は、苦笑してしまう。

何故、サッカーの話で、恐らく腕力的な意味であろう防御力の話が出てきたのか。

サッカー経験者の不知火には、疑問ばかりが募っていた。

「えー、ではこれより、港南体育高校対東京武偵高の試合を開始する。」

互いに、礼」

「『おねしやーす』」

「『オネシヤス？』」

「『……』」

武偵高女子&外国人軍団は、スポーツ界のお願いしますの略称を知らないようだった。

と、そんな一幕がありながら……現在円陣を組む武偵高チームからは、常人には分からない程度に抑えられた殺気が満ちていた。

「いいか、俺たちは」

「皆、よく聞いて」

「レイン、一応俺リーダーだから」

リーダー（仮）であるキンジの言葉を遮り皆の耳を傾けさせる。

白雪以外は、皆こちらの話を聞いていた。

キンジが若干肩を落とす中、レインはいつもより半音程低い声で、

皆に論ずる。

「いいか、あいつらはウチの女子に色目遣いやがった……つまり、だ。

弁解の余地も、張る虚勢も、チャージのチャンスも、色目を遣う隙も、涙を流す暇も、何もかも一切与えるな。

徹底的に 殺るぞ」

「……よっしゃあ！」「」

サッカーの試合前とは思えない殺気を孕んだ号令は、幸いにか相手チームまでは届かなかった。

ピピッ。

やる気の無いホイッスルが響く。まあ、高校生の都大会、それも予選ではこんなものだろう。

初めのボールは、武偵高チーム。

相手チームのキャプテンらしき人物が、ハンドと称してくれたものだ。

貰った以上は、お返しをしなくてはならない 相手ゴールに。

サークルに入っていたのは、キンジとレインだった。

まず、一人が軽く触れて隣の一人がボールを保持し、相手陣地に切り込んでいく。それが、サッカー界の常識。

が、この男に常識など関係が無かった。

銀髪が、紫銀に変わる。

美しく紫銀に輝く髪、それを相手チーム選手が視界に捉えた刹那

バシユッ！

ゴールネットが、揺れた。

否、焼き切れた。

全員 仲間チームのほとんどもを含め が啞然とする中、そのシユートを放った男、レインは独りでに呟く。

「確か貴方たちは、都大会優勝者なんでしたよね……」

いつのまにか、投げ込まれた新たなボールを片手にもち、指でくる

くると回し始める。

未だ啞然とする相手ゴールキーパー、ユニカースはボール位置を確
認すべく、振り返った。

そこには

「そりゃあ、殺り甲斐がありそうだ」

黒焦げになったサッカーボールが、無惨に転がっていた。

そこからは、まさに一方的な蹂躪。
ワンサイドゲーム

「疾 ダツシュ」!

正しく風の如し速度でフィールドを縦横無尽に駆け、ボールを奪い、
運び、

「『竜巻落 しいいいい!』」

本当に竜巻を発生させ……ではなく、発生した竜巻を利用してオー
バーヘッド。

ボールをゴールに叩き込む、アレックス。

「『アイス ランド』……からーのー……」

敵の足を氷で止め、ボールを（鋭利な）氷漬けにしたジャンヌも、

「『エター ルブリザアアアアド』!」

一回転して蹴った、ボールというよりかは氷の塊に近いそれでゴー
ルネットを揺らし。

「『ウォー ーベール』」

地面から間欠泉の如く水が吹き出して、相手を吹き飛ばす。

「『ツナ ・ ブースト』!」

何故かフィールドに召還された荒波に、なんとサッカーボールで乗
った静奈が、あるうことかサーフボード扱いしていたボールを蹴り
上げ、オーバーヘッド。

当然、入る。

相手のボールを、稲妻のような速度で奪い取ったレインは、どこか
の少年の友達であるサッカーボールを、哀れ上空に蹴り上げた。

「食らえ……一人『稲妻落 しいいいい!』」

試合、再会。

最早ひき吊った顔でホイッスルをする審判は、ホイッスルを鳴らしたと同時に、フィールドの端に身を寄せた。無理もない。そんな審判に見向きもせず、一瞬で距離を詰めたレインわボールを刈り、静奈にパスを繋ぐ。

静奈は飛んで受けると、そのまま空中でボールを蹴り、アレックスに回した。

ジャンヌとアイコンタクトを交わし、前方の彼女にボールを回した。ジャンヌはボールを勢い良く回すと、ダイヤモンドダストの竜巻が発生し、速度を落とさないアレックスが、その中に突っ込む。そして、勢いのままライダーキック。

『ゴッザ・ハリケーン』！！』

後半開始三分。

またしても、ゴールを告げるホイッスルがフィールドに響いた。

試合が終わる頃には、相手チームの面々からは、生気が全く感じられなくなっていた。

無理もない。

味方チームからも、若干の非難の目が。

全くもって、無理もない。

反省の欠片も感じられないレインの表情はさておき、結果……

『41対0』。

どこのエイ ア学園か、などというツッコミは一切受け付けられないこと。

というか、ゼ ス攻略時点でのイレブンに対し、エリアは34対0でポロポロにしたはずだから、それを上回る事となっているではないか。

ポロポロにした相手チームキャプテンに、レインが一言。

「俺の仲間に、二度と色目使わないで下さいね？」

綺麗な薔薇には棘がある。

それを身をもって痛感した相手チームイレブンは、試合前に舐めた態度を取ったことを、今更悔やみ始めたのだった。

第113弾 悠・SAA！（前書き）

今回は時間軸がずれません。

なんと、AA二巻の時間軸……つまり、まだ武偵殺し事件も解決していない段階です。

悠もまだレインと徒友契約を結んでいません。

そんな彼女が、女である事を隠しながらAAのキャラと絡む、サイドストーリーです。

第113弾 悠・SAA!

第113弾 悠・SAA!

朝。

柔らかい日差しがカーテンから射し込み、朝から五月蠅い蝉の声で、少年、いや、少女は目を覚ました。

「うーん……まだ早いなあ……」

と、言いつつ二度寝をすると起きれなくなりそうなので、仕方無くコーヒーでも飲んでキッチン目を覚まそう、とキッチンに向かう少女、有明 悠。

彼女、悠は『転装生^{チェンジ}』と呼ばれる、訳あって性別を偽っている生徒であった。

それは教務科以外誰も知らない秘密であり、彼女はこれからも皆に秘密にしなければならなかった。

キッチンにいた彼女は、部屋の一室が空いていることに気づく。ルームメートの部屋であり、恐らくまたいつもの癖が出てしまったのだろうな、と中に入る。

和風にアレンジされた部屋の奥、縦に開くタイプの窓が開け放してあった。

ため息をつきながらそれを閉め、鍵をかける。

ふと、窓際に引っ掻いたような傷があることに気づき、またもため息をついた。

この部屋の主である、風魔 陽菜。

女であるが、表向き男である悠と一緒に部屋だ。

理由としては部屋が足り無いのと、本当は女であるので間違いも起らないだろう、という教務科の見解による。

いや、性別バレたらどうするんですか、と一度諜報科教師の一人、

茅野町^{かやまち} 流石に抗議したが、「誤魔化せ」の一言で片付けられたため、風魔の目を掻い潜る毎日だ。悠と同じ謀報科である彼女は、なんと忍者の家系に生まれた、生粋の忍者だそうだ。

だからといって、一々外出するとき窓から降りるこの癖はなんとかならないものだろうか。

とまあ、その友人は素直だが、そういう事を言う結構深く反省してしまつたため、この事は心の内に仕舞っておこう、と悠は忘れかけていたインスタントコーヒーを作り、キッチンへと早足で向かうとする。

その際、気づいた。

書き置きがある。

それを手にとつて読むと、『いつも窓を閉めてくれてありがとうでござる』と書いてある。

そんな友人に苦笑しながら、更に続きの文章を読んだ。

『拙者は修業がてら、師匠に会いに行くでござるよ』

彼女が言う修業とは、大抵バイトのことなのだが……悠はそちらより、もう1つの単語に目を遣る。

師匠。

彼女、風魔がそう呼ぶ男は、2年の遠山 キンジという強襲科の先輩、そしてなにより、風魔の徒友であった。

徒友^{アミカ}。

武偵高で、先輩が後輩を育てる、二人一組特訓制度^{ツーマンセル}である。大抵の一年は、憧れの先輩に徒友契約を申し込み、一喜一憂している。

が、悠は今まで、契約を組みたいと思える先輩がいなかったため、実感が湧かずにいた。

1 A、悠が通う武偵高のクラス。

特記としては、Aランク数人にSランク2人、と結構優秀な生徒が

いる、ということだろうか。

「あ！ 悠君！ おはよー！」

「ちいーす悠！」

「おはようございます、有明君」

「お、おはよう、あかりさん、ライカさん、志乃さん」

転装生であることがバレないよう、慎重に話をするため、やはり言葉に一瞬迷いが出る。

だから内気などと言われるんだよなあ、と内心ガツカリしていた。

悠が輪に入ったグループは、皆女子ばかりである。

別に男子と疎遠な訳でもないし、寧ろ男子からは好かれている方が、やはり本当は女である彼女にとっては、同性である女子グループの方が絡み易い、というのもまた事実だった。

「聞いて聞いて！」

アリア先輩に、身体測定で褒められたんだ〜！」

「す、凄いねあかりさん！」

この茶髪の超ミニマム少女の名は、間宮 あかり。

Eランク武偵でありながら、強襲科Sランク武偵である2年、神崎・

H・アリアの戦妹である。

悠の個人的な考えとしては、クラスのAランクやSランクよりよっぽど興味深い少女だ。

「一応、チームだったんだけどな」

そう言及する少女は火野 ライカ。強襲科一年のホープだ。

男勝りな性格であるため、強襲科の一年男子からは男女などという蔑称がつけられているが、実際は少女漫画など、女の子らしい趣味の豊富な女の子である。

……まあ、それを本人の前で言えば半殺しにされかねないが。

「私も、ある先輩との徒友契約が終わりました」

と言ったのは佐々木 志乃。

佐々木家という大家の娘で、剣術・巖流の使い手である。

ちなみに、この少女だけがこの三人の中で探偵科であり、残る二人

は悪名高き強襲科だ。

「みんな、頑張ってるんだね……僕も早く徒友見つけたいとなあ」
徒友を作るのは必須事項な訳ではない。

が、やはり先輩に一对一で教えて貰えるのは大きく、武偵高一年の
実に9割が徒友を組み、また、組もうとしていた。

「誰先輩？」

強襲科の不知火先輩？

狙撃科のレキ先輩かな？」

「れ、レキ先輩は難しいと思う……よ？」

「それもそーだよな。」

じゃあ、成瀬先輩は？」

「？ 聞いたことない先輩だよ」

「あら？ 有明君、知らないんですか？」

志乃が驚いたように言って、ケータイを弄り始めた。

「……これです。」

銀の髪を靡かせ、紫の雷で犯罪者共を一掃する世界最強の超能力者、

『紫電の雷神』こと成瀬 レインハート」

世界最強、なんて大袈裟な……と、疑いの視線を向けながらも、悠
はそのケータイに映る動画を覗き込んだ。

衝撃、だった。

彼一人を取り囲む犯罪者は、最早動画の画面からは数え切れぬ数多。
その全員が、一斉に紫電の雷神に飛び掛かる。

が、彼は動かない。

片腕をポケットに手を突っ込んだまま、空いている手を空に突き上
げる。

パチン、と。

恐らくそんな音が響いたのだろう。動画からは犯罪者の喧騒しか聞
こえないが、指を確かに鳴らす動作をした。

刹那。

画面が、紫に染まった。

その光が薄れる頃には、優に200は越すであろう犯罪者たちが、全員倒れ伏していた。

「……ふう」

艶やかにも取れる、彼が洩らした声。

そして視線が、カメラこっちに向いた。

「あんだ、情報科でしょ？」

こいつら縛るの、手伝ってくれない？」

これが、直接会った訳でもない、『紫電の雷神』、成瀬 レインハートと、有明 悠の、画面越しの出会いだった。

「成瀬先輩かあ……」

「すっかりお気に召したみたいだな」

ライカに言われ、ほんのり頬を桜色にしながら、僅かに頷く。

それを見た志乃が、何かに感づいたような表情になって、悠の両手を握ってきた。

「有明君、応援してます。

頑張ってください！」

「??? う、うん……」

恐らく、同性愛者である彼女は悠がレインの事が気になる、ということをそういう意味で取ったのだろう。

それが悠に判断出来たのかと言えば、答えはノーだったが。

「そう言えば、あかり。」

あれ、一枚余ってただろ？ 悠も連れていこうぜ」

「あっ！ それ良いね！」

「????」

ライカの言葉に賛同するあかり、その二人を首を傾げながら見詰める悠。

それを見かねてか、志乃がため息混じりにライカに注意を促し、悠に補足する。

「駄目ですよ、ライカさん。キッチンと第三者に分かるよう話さない
と。」

「すみません有明君、遊園地のチケットのことなんですけど……」
志乃の話によれば、あかりが、『ラクーン台場』という遊園地の無
料券を四枚持つていて、あと一人誰かを誘おうと思っっていたらしい
のだが……そこで白羽の矢が立ったのが、諜報科Sランク、『天才』
有明 悠という訳だ。

「うん……じゃあ、行かせて貰うよ」

「じゃあ、日曜日ね！」

チケットをヒラヒラ振りながら、あかりたちは去って行った。

一方その頃。

ラクーン台場のホテルの一室。

そこでは、鋭い歯を剥き出しにした男が、顔に似合わない素早い手
つきで、何かの布に針を通していた。

男はやがてその手を止めると顔を上げ、目の前に座る、サングラス
をした男に声を掛けた。

「へへっ……兄貴！」

出来ましたよ、防弾」

「皆まで言うな。」

結局、拳銃は手に入らなかったのか？」

男は部下、もしくは弟分らしい男に、サングラス越しに視線を送っ
た。

「す、すみません……」

「……気にするな。」

そのために考えた作戦だ」

兄貴、と呼ばれた男が掛けた優しい言葉に、弟分であろう男は顔を
明るくした。

「やっぱり凄えっすよ、兄貴は！」

正に一石二鳥！」

「確かに作戦は一石二鳥だが、俺への誉め言葉として使ったならそれは間違いだぞ」

……弟分は少々間抜けで、兄貴は少々天然なようだ。

第113弾 悠・SAA！（後書き）

綾「悠君が最初かあ……まあ、いいか」

ミ「そう言えば、私たちはいつもセットで出されてるよね……」

二人「たまには一人ずつ出して欲しいなあ」「チャキッ

第114弾 武偵誘拐事件（前書き）

思ったより話長いです（汗

AAのネタを使ったからか……あと2、3話は要るかもかもしれませんね。

ミチルと綾瀬の話……どうしよう。

第114弾 武偵誘拐事件

第114弾 武偵誘拐事件

「ふぁー、ただいま帰ってきたでござる〜」

「お帰り、風魔さん」

バイト帰りの忍者こと風魔を出迎えた悠は、現在武装の整備中である。

拳銃が一丁に、長めの、麗美な天使の意匠が施されたナイフが3本、短いナイフが10本。

長めのナイフは折り畳み式で、キンジのバタフライ・ナイフの西洋式のようなものだ。

「いやはや、いつ見ても綺麗なナイフでござるなあ」

「大切なものだから」

丁寧にナイフを磨きながら、悠はナイフ越しに風魔を見る。

そのこめかみからは、バイトの疲れか汗がほんのり滲んでいた。

「……疲れているみたい。

緑茶淹れるよ」

「おお！ 忝い！」

ナイフ等を一瞬で装備すると悠は立ち上がり、ソファの上に正座した風魔のために緑茶を淹れるのだった。

「いいお茶葉が手に入ったんだ。

きつと気に入ると思う」

話す間も淀み無い動作で茶を淹れる悠を見ながら、風魔は一人、

「（慣れさせてしまったでござるなあ……）」

と反省するのだった。

てな訳で、日曜日。

「わ〜、大つきいね〜！」

悠たちの前には、真新しいファンシーな看板が、その遊園地の入り口を指し示していた。

「ふーん、いいところじゃなか」

「（はしゃぐあたりちゃん、可愛い……！）」

ライカと志乃もどこか浮かれており、悠も多少興奮していた。

「わあ……大きな観覧車。

ジェットコースターも」

と、少年口調ではあるものの、女の子らしく目を輝かせるのだった。

「……ッキヤアアアア！」

そのジェットコースターに乗る四人娘（内一人は表向き男）。

女の子っぽい叫びを上げて、ジェットコースターだからという理由で誤魔化せるはずだ。

徐々に女の子らしさを出したことから、やけにスッキリした顔で

悠はジェットコースターを降りる。

「楽しかったね〜！」

「うんうん、最高だよ！」

女子三人がテンションを上げて上げてラクーン台場を回る中、悠は怪しげな視線に気づいた。

「（…………着ぐるみ？）」

二人の着ぐるみが、こちらを見詰めていた。

まあ、中身が男ならばこのグループは美少女揃いだから、目につくのも仕方ないかもしれないが……それでも、彼らの視線は、そういつた下心とは別物である気がした。

「（……考え過ぎかな）」

悠はそう考えを改め、気を取り直した。

ラクーン台場、その中でも少し小さめな広場。

子供たちがはしゃぐ様を見ることのできるベンチに座っている、フリフリの制服を着て、クレープを片手に持った少女。

彼女は、人知れず呟く。

「……キリンは淋しいと死んじやいますのー」

ツッコむ人がいたなら、ハムスターなんかじゃないんだから、というキレイなツッコミが決まることだろう。

が、彼女が呟いているのは動物の話ではない。

鳥 麒麟。

それが彼女の名前だ。

つまり、キリンとは自分の名前だった訳だ。

それでも、淋しいと死ぬのはどうかと思うが。

彼女は武偵手帳に張ったプリクラを見る。

そこには、キリンの隣にクリーム色のツインテールをした少女がいて、二人の上には『なかよしアミカ』と描かれていた。

「戦姉妹契約が終わったらお別れなんて……校則は残酷ですの……せつかく理子様好みの女の子になったのですのにー！」

ハンカチを噛み締め、思わず叫んでしまう。

辺りの人が何事か、と多少驚いた目でこちらを見てきて、全く動じていない。

ある意味素晴らしい神経の太さだ。

そんな中、ふと音楽のようなものが聞こえてきた。

どうやらアイドルグループ（人ごみから、あまり知名度は高くないと窺える）がライブを開いているらしい。

「恋心は振り子みたいに揺れて揺れて……」

その歌、というか歌詞に……パアア、とキリンはそれまでの暗い顔はどこへやら、恋心は揺れるもの！ と一瞬でポジティブシンキング。

「（次の戦姉は王子様タイプがいいですわ〜！）」

気持ち新たに、早速新たな戦姉候補を武偵高データベースから見繕

おうとケータイに手を伸ばす。

しかし、その直前に背後から声を掛けられた。

「ねえ君い……デートしない？」

「は？」

振り返れば、ウサギの着ぐるみを着た者が、魔法のステッキ的なものを携えて立っていた。

見た目はファンシーでキリンの好みであった。

「あっちいけシツシツですよ。」

男性には興味ございませんのよ」

が……声から男だと判断した彼女は、即座に拒否。

女だったらついていったのかは分からない。

ともかく、ナンパ野郎を払ってさっさと帰ろう、と思った、直後。

「こいつ！」

男にクレープを持った手を引っ張られる。

クレープが落ちることより、この男がナンパ野郎などではなく、誘拐が目論見だと即座に看破したキリンは掴まれた腕を払い、空いた手で掌底を男の脇腹に入れた。

着ぐるみなので決定打にはならなかったが、距離をとることに成功。

「相手を間違えましたわね。」

私、武偵ですよ」

「だからだよ」

だが、背後から迫るもう一人の存在に気がつかなかった。

ナイフをあてがわれ、キリンは両手上げる。

「乗れ」

男はクルマを用意しており、このままでは連れ去られてしまう。

本当に危ない、そう感じたキリンは仕方無く銃を抜き、男に向けた。彼女は銃を撃つたことがほとんどない。

が、銃を向けられた通常の間人は、怯むものだ。

が 男は指を左右に振るのみ。

「（！）？ 銃に怯まない ツ！？）」

キリンが油断した一瞬で、ウサギの男はステッキが彼女の頭を殴打。一発で彼女は倒れ伏し、男たちはクルマのトランクに入れた。

「馬鹿が。防弾装備でもないのに武偵を拐つかよ」
がしゃっ、とトランクの閉まる音。

男たちが運転席につくと……キリンが、目を開いた。

仮にも武偵が、手加減した一撃でのされる訳がないのだ。

が、彼女は戦闘能力が皆無なため、一旦は大人しく捕まることにした。

ケータイを開き、武偵高に救助要請をする。

これでよし、とキリンはケータイを閉じ、他にできることを探し始めた。

「はあ……なんなの、あれえ！」

観覧車内、四人で座る（あかりと志乃、悠とライカがそれぞれの席だ）そこでは、疲労困憊としたあかりが叫びながら、恍惚の表情を浮かべる志乃に慰められているところだった。

あかりは、ポールに掴まって左右に揺れるアトラクションで酔いに酔ったのだ。

そんな様子を、ライカも志乃もにやけて見ていて、あまつさえ（志乃だけだが）カメラのシャッターを押しまくる始末。
悠の頬がひき吊るのも頷けた。

が 直後、彼女の顔は別の意味でひき吊ることになる。

ブー、ブー！

「あ、ケータイ……」

と、ケータイに手を伸ばそうとすると、三人のケータイも鳴っていることに気づく。

タイミングが同一のメール。

一斉送信……しかもこの面子から考えて、

「武偵高の周知メール？」

ライカがそう口走る。

武偵高の周知メールは、事件が発生した際生徒に解決させるための言わば連絡網のようなもので、その際、教務科の指示には武偵高独自の符丁が使われる。例えば、今のあかりたちに送られてきたメールには、ケースF3B O2 EAW、と書かれている。

F3Bが誘拐・監禁を表すもので、O2が『原則2年以上が動け』、そしてEAWが『犯人は防弾装備』。

尚、符丁には書かれていない普通の文で、拐われたのはインターンの中3、島 麒麟という少女らしい。

防弾装備をする犯罪者は近年珍しくもないが、代わりにその場合は大抵殺傷沙汰になる。

しかし、武偵（といつても特殊捜査研究科、通称CVRの生徒で戦闘力は無い）を拐うレベルになると、プロである可能性も否定出来ない。

とりあえず降りた四人は向かい合った。

「どうする？ 2年以上の先輩が来るには15分かかるらしいぞ」

「でも……私たちがまだ高1になったばかりですし」

と、ライカと志乃が話し合うが……その中で静かに懐に手をやり……

…悠は、口を開いた。

「……僕が行く」

「……悠（有明）（君）！？」「」

三人の視線が一気に彼女に突き刺さるが、そんなことはお構い無しだ。

悠は言葉を続ける。

「僕はSランク武偵なんだ……Sランクは、1年であっても優先的に事態の処理に取り組まなければいけない。

だから、今動けるのは僕しかない」

淡々と述べる彼女の目は、既にあかりたちではなく、姿も分からないキリンに向いていた。

「君たちはここにいて。」

大丈夫……僕は強襲科みたいに真正面から戦うのは苦手だけど、キリンちゃんは救出してみせる」

悠はにこ、とほんのり笑みを見せると、絶句する三人を置いて、キリンの搜索へ駆け出した。

その背中が、見えなくなる直前。

「……あたしたちも、行こう。」

今、あの娘を助けられるのは、悠君の手伝い出来るのは、私たちがしかないんだ！」

あかりは、その小さな手で

マイクロUZIはなをとった。

第114弾 武偵誘拐事件（後書き）

ミ「綾先輩、あのごみ作者が前書きでなんか呟いてるよ」

綾「あらあら、困ったわね」。

仕方ないは、目を覚まして貰うためにジューズでも差し入れましよう「硫酸ダラダラ

静「作者！ 逃げる作者あああああああ！」

第115弾 天賦の才（前書き）

今回の話を書くにあたって、少し以前の話を改訂したいと思います。

第115弾 天賦の才

第115弾 天賦の才

「島 麒麟……どこだろ」

悠は辺りを見渡しながら、拐われた悠を探し続ける。
が、影も形も見当たらない。

まあ、誘拐などそんなものだが……悠は走りながら、ある程度居場所の検討をつける。

まだこのラクーン台場にいるとすれば、騒がれては困るはずだ。

その場合、拘束されたり、眠らせたりするものだが……周知メールの情報からは、犯人は防弾着ぐるみで、キリンを殴って気絶させたつもりになり、トランクに押し込んだという。

そんな乱雑極まる非効率な犯行に及んだ彼らは、拘束など、そんな猿でも思いつく行為もしないだろう。

否、防弾着ぐるみは有効な手段だった。

ならば……自信家故の行動か。

どちらにせよ、騒がれて周りに気づかれる訳にはいかないのだ。

それ故、悠が考えたのはラクーン台場の備えるホテル、その六階以上のフロア。

そこからは多少優良な部屋となっており、なんと一室一室に防音設備が設けられているということだ。

まさに、格好の隠れ家。

悠はナイフを開き、閉じる。

相手は最低でも二人。

拳銃も、恐らく二人共持っているだろう。

しかし、悠は仮にもSランク武偵である。

条件が良ければ、素手で拳銃相手に五人まで相手取れる。

行ける　と、自分に言い聞かせ、悠はその足を早めた。

やがてホテルの中に飛び込むと、武偵手帳を開いてホテルマンに見せた。

「武偵です。」

「搜索協力を要請します」

半ば安心したような、しかし半分心配するような表情だ。

話を聞けば、先刻誘拐犯から連絡が来て、身代金を要求してきたらしい。

条件は警察や武偵に応援要請をしないこと。

成る程、先の表情の半分は安心したようなそれは要請をせずに武偵が登場したことであり、残り半分の心配したような表情は悠が線の細い少年（実際は少女だが）だったからであるようだ。

だが、武偵手帳に記載しておいたランクはS。

恐らく、ホテルマンたちも納得したことだろう。

もしかしたら、こんなガキがSランクなんて、武偵は大丈夫なのか、とも考えているかも知れない。

さて、どう犯人の部屋を割り出そうか、と考え始めた直後。

「あ！　悠君！」

「あかりさん……！？」

あかり、ライカ、志乃がホテルのロビーに入ってきた。

「どうしてここに？」

「え？　有明君も紙飛行機を見て来たんじゃない？」

「紙飛行機？」

首を傾げる悠を見て、ライカがこれだよ、と紙飛行機を差し出した。紙には『703　NF　ターザン　戻りでダイブ』と書かれている。

「（成る程……戻りでダイブ、か……インターンにしては上々の発想。」

加えて相手の目を盗んで紙飛行機を飛ばすリスクの高い方法を選ぶなんて、肝も据わってる。

でも……やっぱり甘いね）」

などと感心している間も惜しい。今は703号室だという情報もある。

「じゃあ、二手に別れるよ。
僕とライカさんは上からポールで『ターザン』。」

あかりさんと志乃さんは突入して、犯人の動きを封じて。
無理はしなくていい」

一頻りの説明を終えると、悠はライカと共に屋上に、あかりと志乃は703号室へ直接向かった。

「(……まだ救援は来ませんの……!?)」

そう苛立ちを心の内に溜めるのは、拐われた島 麒麟。

彼女は今か今かと、紙飛行機を発見して、通報されてきた武偵やら警察やらを待つ。

トイレで自分の居場所を確認し、脱出方法を考え、紙飛行機に書いて飛ばした。

犯人の一人は、誘拐犯の癖に割と紳士であり、中で監視まではしなかった。まあ、そのせいで自分が捕まるかも知れないなんて考えないかも知れないけれど。

やれることは全部やった。

後は『気づいた』人を待つだけだ。

キリンは静かに、自分の王子様になれる者を待った。

703号室前、あかりと志乃は銃と剣、それぞれの武器を構えていた。

「(行くよ、志乃ちゃん)」

「(はい、あかりさん。私がついてます)」

スウ、と短く息を吸い……志乃は、ドアの鍵部分に剣を差し込み、切り上げた。

破壊された鍵などないも同然、女子の筋力でも容易に突破できる。

あかりは体当たりで扉を開くと、突然の事態に反応出来ない犯人グループに、銃を向けた。

「武器を捨てて！」

ここまでは、完璧な流れだった。がつるつ。

どこかスツキリするそんな音と共に、あかりが転んだ。

どうやらスリッパを踏んでしまったようだ……

「うっ……武器を捨て……」

「捨てるのはそっちだ」

あかりが言おうとしたセリフは、犯人の一人に取られてしまった。

もう一人は、キリンの頭に銃を突きつけていた。

そんなぎりぎりな状況にいるキリンの、本気で思った一言。

「なんでそこで転ぶのですー!?!」

風が吹き荒れる屋上から、悠とライカは703号室の位置を確認していた。

703号室の上は、フックを掛けられる場所がない。

が 付近にあるポールを見て、ライカも感づいたようだった。

「突飛なこと考えやがるぜ……」

「ライカさんは救助を。」

僕は奇襲で犯人を押さえるよ。プールの位置確認は忘れないで簡単な役割分担を済ませ、悠はライカにゴーサインを出した。

「ははっ、人質と武器が増えたぜ」

男はそう言いながら、キリンとあかりから奪った銃を二丁、両手に持っていた。

優越感に浸る二人の犯人 その後方。

バババババババツ!

隣の窓が、アサルトライフルのフルオート射撃で吹き飛んだ。

「馬鹿が……そつちにや誰もいねえよ」

全員が理解していないこの事象を、キリンだけは笑って見ていた。そして、犯人の腕に噛みつく。

「うわっ!？」

キリンは手錠で繋がれたまま、

「恋心は振り子みたいに揺れて揺れてー」

先ほど聞いた歌詞を口ずさみながら、割られた窓に近づいて行く。

「と、止まれ!」

銃を持った犯人の指示にも従わない。

「3、2、1」

カウントダウンを開始したキリンは

「きゃはーんっ」

窓から、後ろ向きに飛び降りた。

「……!」

犯人の男の一人が駆ける。

この行為を自殺と勘違いし、助けようとしたのならとんだお人好しだ。

しかし、キリンに紐無しバンジーの趣味はない。

男の目の前を、黄色い閃光が走り抜けた。

その正体こそ、

「ライカ!」

振り子の原理でロープに掴まり戻ってきた、ライカだった。

彼女はキリンを抱き寄せると、そのままロープを離し、プールヘダイブ。

「この……!」

男はライカの後頭部に向けて銃を構えた。

「(まずっ……!)」

二人は身を縮めて、銃弾をなんとか避けようとするが……男の標準は、正確にライカの頭を捉えていた。

「（だ、か、ら……）」

男が引き金を引く、直前。

彼の視界が、暗転した。

「甘いよ」

倒れる男の影から、男の姿で見えなかった、悠が姿を現した。

「っ、てめえ、いつの間に」

「発想は良かったけど、銃を持った犯人がいる時にはその辺を考えないよね。」

背後から撃たれる」

悠はキリンの作戦の反省点を簡潔に述べている。

「無視するんじゃない！」

男が二丁の銃を向ける。

が、その瞬間には男の視界から悠が消えていた 否、現れた。

「!？」

男の、目の前に。

「素人が双銃なんて止めた方がいいですよ。」

標準がつけにくいことの上無い」

有明式歩法ノ式『朧映し』。

ヒトの意識の間に滑り込み、まるで突然目の前に現れたかのような錯覚を起こさせる歩法だ。

両手のナイフで、銃身を一闪。

銃が断ち切られ、男は武器を無くした。

「未成年略取と脅迫の罪で貴方方を逮捕します」

ガチャツ。

片手で回すよう手錠を掛けた。

「これにて一件落着です」

もうひとつ手錠を取り出し、ヒュツ、と投げると、吸い込まれるように倒れた男の、拳銃を握った手に掛かった。

あかりと志乃がキチンと彼らの武器を回収する中、悠は遙か下方で、プールから上がった二人を見ていた。

「（徒友……か）」
やがてやって来た警察に二人を引き渡し、ラクーン台場脅迫事件は
幕を閉じた。

第115弾 天賦の才（後書き）

綾「あれ……悠君が、強い……!？」

三「まあ、流石有明家ってところだよな」

静「有明家……確か朝露家とも親交があったな」

第116弾 舞い込む依頼（前書き）

悠のAA話も一先ず終了。テンポが良いのは早くレキ話を書きたいからです。

次は綾瀬とミチルの話です。
皆さんはどっちが好きですか？

第116弾 舞い込む依頼

第116弾 舞い込む依頼

うだるような快晴だった。

暑いことこの上無い。

太陽が顔を晒す、晴れ渡った空と同色の髪をした少女、情報科Aランク武偵、霧矢 綾瀬は、忌々しい空を見上げ、アイスを口の中に突っ込んでいた。

おもむろに、腕に着けた時計を確認する。

昼休みも残り少ない。

彼女は隣で幸せそうに居眠りしている少女の頬つぺたを、食べていた弁当の箸でつついた。

つつかれた少女は、僅かに身体を震わせるのみで、これといった反応を示さない。

「おい、ミチル。

起きなさい」

「うーん、あと三時間っ」

休み時間終わるわ、というツッコミも億劫だ。

そこで、綾瀬は彼女を乗せてやることにする 彼女のやる気を震わせる、とっておきのキーワード（今日限定だけど）で。

「あらミチル、忘れたの？」

今日は噂のイケメン転校生の来る日よ」

「そうだったあああああああ！」

一瞬で飛び起きた少女の名は、立花 ミチル。

綾瀬と同じく情報科のBランク武偵だ。

彼女はピンクのラメが張られた手鏡で、その艶のある紫の髪を調べ、お気に入りの蝶の髪飾りを着け直した。

「よし、2 Aだよね！
今すぐ」

「はい、その前に仕事よし・ごと」と

「ええー」

頬を膨らませて抗議するミチルだが、綾瀬はそもそも仕事のためにミチルを起こしたのだ。

「大丈夫、私たちなら10分あれば終わるわ。

彼とは放課後話せばいいでしょ？」

「ぶー……いいよ、仕事するもん！」

ミチルはもうやけくそ、という感じでカバンからノートパソコンを取り出した。

小型のそれを立ち上げ、ミチルは目にも留まらぬスピードでタイピングを進める。

が、これはただパスワードを打っているだけだ。

彼女らにとっては最早恒例となっているこれだが、意図は二つある。一つ、指を解す。

要するに準備運動のようなものだ。

そしてもう一つが、もちろんのこと情報漏れの防止だ。

その可能性は、例えば万が一、億が一の確率でも削るべきだ、と彼女らは理解していた。

情報漏洩は最大にして最悪のタブー。

それが、情報科生徒が初めに習う鉄則だった。

「ところで、何のネタ？」

今更ながら聞いてくるミチルに、綾瀬もパソコンを立ち上げながら、簡単に返す。

「今朝爆弾事件があったらしいのよ。
ホムケ

確か……チャリジャック、だったかしら」

「うわ、そりやまた手の込んだことを……ジャックされた人も可哀想に。

手口的に武偵殺し……の、模倣犯さんかな？」

「いえ、手口が巧妙よ。」

逮捕されたのが濡れ衣着せた^{デコイ}罠で、オリジナルの可能性もある」

「ま、とにかく……」

カタカタ、と鳴らしていたキーボードから一旦両手を離し、ミチルは大きく息を吸い込んだ。

「とことん洗いますか!」

カタツ。

enterを押した。

途端、数字と漢字とアルファベットの羅列が、パソコンのディスプレイ、その頭から流れる。

ただただ膨大な量の情報。

それを全て、頭の中で意味ある情報に組み立てる。

そんな常人には出来ない行為を、彼女はやってみせていた。

「(やれやれ……私が習得するのに一年掛かったのに、半年で覚えちゃうんだもんなあ……)」

半ば飽きながらも、綾瀬は同じことを始めた。

数分後。

「ふう……これやると頭痛くなるんだよね」

目頭を押さえながら天を仰ぐミチルに、綾瀬はお疲れ、と労いの言葉を掛けた。

「何か分かった?」

私の方は特に……爆弾が仕掛けられたのが、昨晚21時ってことくらいね」

「被害者の過去の依頼とか当たってみただけど、犯人らしき人物との接点とかは無かったなあ……」

二人は肩を落としたが、またすぐに気を取り直して作業に戻った。

五時限目からは、特別履修科目、即ち各科で訓練、及び任務の受注をする時間帯だ。

今任務中である彼女らにはなんら関係ないため、二人は作業に没頭し続けていた。

「セグウェイ……合成音声……ボカロ……」

「UZIは盗品……神崎・H・アリア……お、遠山君実力発揮か。珍しいもの発見」

単語を羅列しながら『武偵殺し』について調べるが、尻尾すら掴めない。

被害者の自転車に爆弾をつけた際に映るはずの、寮の監視カメラにも映らないとは、予想外に狡猾な犯人だ。

「こりゃ、鑑識科が手こずるのも分かるわね」

綾瀬がお手上げ、という風に両手をあげる中、ミチルは普段のふざけモードではなく、シリアスモードで顎に手をあてていた。

たまにどうでもいい時に使うのが珠に傷だが……この状態のミチルの集中力には、目を見張るものがある。

「……武偵殺し、って案外武偵高の生徒かもね」

「……あり得ない話ではないけど、根拠は？」

「まず、いくら武偵殺しが無差別殺人鬼と言っても、武偵がわんさかいる武偵高に、態々入ってチャリジャックなんてシヨボい真似しないでしょ？」

成る程、元々この生徒ならば、さして怪しまれること無く潜入できる、と……だが、

「無差別じゃなくて被害者に向けてだったら？」

そう、画面に映るチャリを漕ぐ少年、遠山 キンジへの私怨の可能性だっである。

「どつちにしろだよ。」

チャリジャックなんて小規模な事件ケースに、教務科は動かない。

ある程度それを把握しているはずだから、十中八九内部犯だよ。

それに、私怨があるなら尚更いきなりセグウェイで困んで蜂の巣にすればいい。

まあ、愉快犯で彼を苛めて楽しんでた、って線もあるけど」

綾瀬はそんな彼女の推理を聞きながら、あんな探偵科でもやっていけるんじゃないの、と反射的にいいたくなかったが、流石に憚られた。

「まあ可能性は0じゃないけど、捜査を攪乱するような事を不用意に言っちゃだめよ。」

それは探偵科の仕事」

と言及すると、綾瀬はある程度の報告をメールで済ませ、報酬が振り込まれるのを確認。

そしてパソコンを仕舞うと立ち上がった。

「またお仕事？」

「ええ。今日は探偵科の1年生から仕事が来ててね」

依頼内容は『同級生間宮 あかりの情報の提供』。

男だったら断ろう、と考えていたが、依頼主は長い黒髪が特徴の女子生徒だったため、快く引き受けた（報酬額が……）。

プライバシーの侵害ではないか、とはよく言われるが、近年、武偵には許容されていることだ。

余談だが、プライバシーの規制は、犯罪の凶悪化により厳しくなるのではなく、寧ろ緩くなった。

犯罪に対抗した各家庭・個人・企業等、それぞれの各自個人情報保護が強力になってきたからだ。

現に、今日の義務教育機関では、小学校ですら犯罪への一応の対処法を教えられる。

そんな対犯罪の意識が高まってきた現代社会、自身のプライバシーを自身で守るなど当たり前。

故に、ハッカーはある程度腕の立つ者を残し、絶滅した。

だが、武偵にはその仕事の性質上、個人情報が生死を左右する場合だつてある。

そこで、武偵に適応される法律、『武偵法』では個人情報調べ事は、一般の法律より更に深いレベルまで許されていた。

「ふあ……じゃあ私は部屋で作業してるわ。」

ミチルは確か、転校生に会いに行くのよね」

「うん！ 楽しみだなあ」

目をキラキラさせるミチルを微笑みながら見ていた綾瀬は、ふとあ

ることを思い出した。

「行くなら早く行った方がいいわよ。」

彼、SSRになったから明日から合宿だし」

「ええ、早く言つてよぉ〜！」

ミチルはそれを聞くと慌ててパソコンを閉じ、カバンに閉まって駆け出した。

今頃、転校生は学科紹介でSSRにいるはずだ、ということとは情報科生徒である彼女には分かっていること。

故に綾瀬は、ミチルに手を振るだけの見送りを済ませると、欠伸をしながら自らの部屋に戻るのだった。

第117弾 ミチルとレインの馴れ初め(前書き)

いざ！ ミチルのターン！

第117弾 ミチルとレインの馴れ初め

第117弾 ミチルとレインの馴れ初め

「おつす〜！ 私い、立花 ミチル！

17歳乙女座のAB型、情報科Bランク！
よろしくね！」

「……は、はあ……こちらこそよろしく」

ピースにした手を横にして、目の隣に持ってきた彼女、ミチルはキラッ みたいな感じで自己紹介。

対する銀髪の少年、成瀬 レインハートは答えに窮し、ぎこちない笑みを浮かべて無難な返答をした。

今日はこの東京武偵高の始業式であり、レインが転校してきた初日だ。

そんな日に、いや、そんな日だからこそなのだろうが、なんの脈絡も無く自己紹介されて、レインは戸惑っていた。

故に、彼が自身の自己紹介を忘れたのも、割かし仕方無い事ではあった。

「じゃあ、早速だけど、任務受けてくれない？」

「……はい？」

「一時間で終わるから〜」

「ちよ、ちよつと！」

聞き返せないままミチルに腕を引っ張られ、レインは碌にSSRを見学する暇も無く、ミチルのなすがままに表に待っていた車に乗せられた。

「おつ、転校生先輩、いきなり立花先輩とデートですかー？」

乗せられたサファリの運転手が、自分と彼女、ミチルの姿を見るな

り半分顔を向けて聞いてくる。

随分な長身で、レインより少し高いかも知れない。

「君も共謀なんですよ。」

誤解を招くことを言わないでくれる？

えと……」

「武藤 貴希。」

2 Aに兄貴がいるんだけど、知らない？」

「キッキー、私達同クラだよ！ レイレイ、この子、ごーき君の妹さん」

レインはへえ、と彼女の顔を凝視した。

……似てない。

武藤（兄）には失礼だが、妹さんの方が随分整った顔だ、とレインは思った。

武藤とは転入初日から仲良くなった仲で、根っからの乗り物好きであることは初会話の起点から考えてもよく分かっていた。

他にも不知火という男もいたが、彼はもの凄いイケメンだったな、と他人事のようにレインは考えながら、ふと隣のミチルを見る。

容姿の話をしていた（一方的にレインが考えていただけだが）ためか、自然ミチルの顔に目が行った。

暗い、葡萄のような濃い紫の髪に反して、顔は明るい白で、少々鋭さを帯びた瞳は刺々しさでなく、むしろ妖艶さを醸していた。

要するに、可愛い。

「（転入初日から……美人揃いだ、東京武偵高）」

と適当な結論を着け、レインは窓から差し込む日の光に目を細めた。

五分もしない内に、東京の……廃屋（？）前にたどり着いた。

「さーて、到着しましたよー！」

貴希の言葉とほぼ同時に、サファリがキッキー、と彼女の名を呼ぶように止まった。

車の扉を開けば、武偵がシャッターの前で構えているのが見えた。C装備を着用しているところを見れば、強襲科だろうか。

「今日の任務は、あの廃屋の中にいる犯罪グループの無力化だよ。向こうは総勢40名。」

こっちは待機中の武偵は強襲科二名に。」

「すみません、2年情報科立花から協力要請を受けて来ました同じく2年、SSRの成瀬です。」

現在の状況は？」

「聞けやー！」

ドスッ！

とミチルのチョップがレインの頭にクリティカルヒットした。

頭を押さえながらレインが振り向くと、彼女は頬を膨らませながら彼を睨みつけていた。

「い・い！？」

私が！ 説明するから！

貴方は！ 大人しく！聞いてて！ 以上！」

「は、はい……」

言われるがまま、レインはその場に正座。

ミチルのブリーフィングを、足を痺れさせながら聞く事となった。

……とは言っても、状況の確認にそこまでの時間は掛からない。

先ほどある程度の説明を受けたので、後は話を適当に聞き流した。

罪状は、武器の密売と麻薬取引。テンプレ過ぎて欠伸が出る。

それでも犯罪は犯罪なため、痺れでふらつく覚束ない足で立ち上がり、レインはフラフラとシャッターに向かった。

ミチルはカメラを回し始めた。

成瀬 レインハート、彼の異名は彼の世界最強の超偵と謳われる、

『紫電の雷神』。

彼の実力をカメラに収めようと、キチンと防電用特殊カバーを用意

した。

彼、レインがこちらを一瞥する。

手に持ったカメラを見ると、彼は苦笑しながらピースしてきた。予想外の振る舞いに戸惑いながらも、ミチルは彼、レインをしっかりとカメラの中心に捉える。

フラフラと歩いていくと、彼はシャッターの前に仁王立ちした。さて、ここからどう動くか。

隣で待機する二人の強襲科生徒も、興味深そうに彼を見ていた。レインの髪が、紫銀に染まる。

『雷神化』 彼の最も多用する技であり、同時に最強クラスの肉体強化。

身体能力等が大幅に増加、反射神経に至っては50倍 銃弾ですら止まって見える程だ。

そんな最強状態になった彼は、右足を、ゆっくり持ち上げた。

その足から、バチバチツ、と弾けるような音。

次の瞬間、シャッターが、吹き飛んだ。

彼の足と同じ形の凹みを作りながら。

つまり、蹴破ったのだ。

あの分厚いシャッターを。

ガシャアン！

と、シャッターが飛んでいき、何人かの男が下敷きになった。

他の男たちは呆然として動いていない。

そんな彼らが見詰める先にいるレインは、不敵に微笑むと武偵手帳を開いた。

「武偵です。

えと……武器密売と麻薬取引法違反で、貴方たちを逮捕しに来ました」

緩やかな声。

緊張感を削ぐ話し方は、犯罪グループの男たちに正気を取り戻させた。

「ふざけてんじゃねえ！」

男の一人が、ガラクタの銃を構えて引き金を引いた。が、銃弾が発射されない。

男たちは困惑しながら、しかし銃を取ってひたすらに撃ちまくる。しかし、どれも発射され無かった。

弾詰まりではない。

レインの、能力だった。

強力な電磁力が、銃が弾を吐き出す力よりも強く、銃弾を止めていた。

それが理解出来ない男たちを尻目に、レインは目を閉じ、片手を天にあげた（といつても室内だから天井に向けて、だ）。

「さあ……これにてお終いにするよ」

「『舐めんな！』」

全員がレインに飛びかかるのと、同時。

レインは指を鳴らす。

パチン……

儂い、終わりを告げる音が、男たちの間に響く。

雷鳴と共に、紫の雷が、その空間の全てを蹂躪した。

「……！」

ミチルは、今自身はどんな顔をしているのか、疑問に思った。

恐らく隣で驚愕にその顔を染める、強襲科生徒たちと似たような顔をしているのだろう。

彼が指を鳴らした瞬間、突如として視界を覆った紫の光。

それが彼の超能力^{チカラ}であることを理解するのに、少し時間が掛かった

彼の雷が途切れるまで。

圧倒的過ぎた。

ミチルはSSRの情報も持っているため、通常の超能力がどの程度のレベルかはよく知っていた。

優秀とされる星伽 白雪や朝露 静奈でも比較にならない。

そんな彼は、周りを見渡し、誰も立っていないことを確認する。ふう……と艶かしい吐息を洩らし、こちらを見る。

ドギン、と心臓が一瞬で跳ね上がったのは余談だ。

そして彼は、にこつ、と微笑むと……

「あんだ、情報科でしょ？」

こいつら縛るの、手伝ってくれない？」

そう、言ってくるのだった。

この場に情報科は自分一人しかいないため、間違うはずもない。

だが、それを頭の中で認知していなくとも、ミチルの口は勝手に動いていた。

「はい……」

恍惚とした表情で、うつとり、なめ回すような視線をレインに向ける。

「あ、あの……立花さっ！」

言葉を発する前に、レインの口を塞ぐようにミチルがレインに抱きついてきた。

「いいから……早く掴まえちゃおうよ……」

そしたら、私とちよつとお茶しない？」

「え、ちよつ……」

「ね……いいでしょ？」

耳元で囁かれ、レインの顔は見る見る真っ赤に染まった。

端から見ていた強襲科生徒二名は後に語る。

成瀬 レインハートの弱点は女の押しである、と。

とまあ、そんな不名誉な弱点を持つとされることになるレインだが、真っ赤にした顔を背けながらなんとかミチルを振りほどき、

「ま、また今度ねっ！」

と冷や汗をかきながらハイペースで犯罪者たちを縛ると、早足で逃げてしまった。

「もー、レイレイはいけずだなあ」

ニコニコしながら嬉しそうに語るミチルは、頬を紅潮させ、嬉しそ

うに目を細めた。

……その間に、ミチルがしなかった分も強襲科生徒たちが必死に縛っていたのは、完全に余談だろう。

ミチルは少し歩き、未だ快晴である空を見上げた。

悪くない天気だ。

少なくとも、自分と、恐らく運命の男性^{ヒト}である彼との馴れ初めの日には。

ミチルは目を閉じて伸びをし、心地よい日光を存分に浴びると、教務科への報告書提出のために、パソコンを開いた。

もちろん、彼の雷でもイカれないよう、防電カバーを着けていた。

第117弾 ミチルとレインの馴れ初め（後書き）

ミ「キャツホイ！」

レイレイにフラグ立ったー！」

綾「じ、次回は私の出番だもん！」

レイン君と会ったのは魔剣編だから、その辺の話なのか、それとも

……」

悠「（あの動画録ってたのミチル先輩だったのか……）」

第118弾 霧の空

第118弾 霧の空

「デートしよう」

「いきなりですね」

前話から時は流れ、元の時間軸近く、キンジが入院している1ヶ月間の出来事。

目の前に座る銀髪の少年、成瀬 レインハートに突然のデートのお誘いを敢行したところ、返ってきたのは肯定とも否定とも取れない中途半端な返事が返ってきた。

このへタレ自称紳士め、と彼を睨み付けると、レインは冷や汗をかきながら「いえ、別に構いませんが……」と一応了承の返事をくれた。

綾瀬としてはyesかnoでキツパリと決めて欲しかったが、今はyesの返事だ。ギリギリ。

なので近場のデートスポットを検索検索。

……しようと思っただが、ふとあることを思い出して彼女はパソコンを閉じた。

「そう言えば、前にレキちゃんや静奈に服を買ってあげたそうじゃない？」

「……！」

何故それを、とは言わなかった。

彼女、綾瀬は情報科Aランク武偵だが、実際の実力はSランク相当装備科の平賀と同じく、仕事の際に癖があるが故下のランクに格付けされた、『格下げ(ダウト)』という俗称のつく生徒だ。

彼女の情報網を持ってすれば、この辺で起きたことなど、余程の隠蔽工作がなされない限り路地裏のジャンケンの結果まで把握できる。

その彼女には『何故それを知っているか』と聞くより、『なんでそんなことまで調べた』と聞いた方が適切だろう。

「服、私にも買ってくれるわよね？」

「につこり微笑んだ、どす黒い何かを放つ彼女への返答は、最早一つしかない。」

「はい、もちろんでございます……」

「いらつしゃ……成瀬様ー？ また別の女の子ですかー？」

「……もう言わんといて下さい」

「何故に関西弁なんですか……」

腕を抱きつき、まさにカップルですと触れ回るような形で隣を歩く綾瀬に辟易しながらも、レインは来店計八度目くらいのこの洋服店『ロックス』なる店で、綾瀬に頼まれて服を買うこととなった。

あれからも幾度か来てクレジットカードが使えることが発覚したため、今は財布に諭吉さんは三人の状態だ。

「ど〜れにしよっかな〜」

鼻唄混じりに服を物色しては自分の前にかざし、鏡で確認するとそれを戻す。

女子とは不思議な生き物だ、とレインはつくづく思う。

自分が服を買うとき、例えばここでは店員さんに『似合いそうな服見繕ってくださいませんか』と頼んだり、マネキンが来ているのを一式買ったたり、ファッション誌なんかで見た服をそのまま買ったりと……それで『ファッションセンス抜群』と言われても、見本以上のことはしていないのだから困る、とレインは他人事のように考えていた。

やがて、綾瀬は手に持った服を試着する、と言って試着室のカーテンの向こうに行ってしまった。

数秒後、いきなりバサッ！

とカーテンが開くと、清楚な白いワンピースを着た、綾瀬が出てき

た。

いつものスタイリッシュな彼女と違い、お嬢様のような気品が漂うその姿に、思わずおお、と感嘆の声を洩らす。

「綺麗ですよ、綾瀬先輩」

「え……ほ、ほんと？」

その白磁のような肌を桜色に染めて、綾瀬は両手を頬に当てた。

しかし、同時に……どこか残念そうな顔も見せる。

「……？」

「じゃあ、別のも見てくるね」

そして再び数秒で着替え、レインに服を渡すと……上機嫌なようで、軽い足取りを見せた彼女は、また新しい服を持ってきた。

彼女の髪とマッチする薄い青系の服。

ジーンズや薄いジャケット（夏のはずだけでも、秋の先取りらしい）なんかも織り混ぜる彼女は褒めるとやたら上機嫌になったが、流石上級生だけあり引き際を弁えているようで、レインが両手に紙袋を持つ程度で許された。

防電財布の中からカードを取り出し会計を済ませると、馴染みの店員さんに手を振られながら『ロックス』を後にした。

店を出る頃に、雨が降り始めた。

手軽な店で傘を一本買い、二人でその中に入る　俗に言う『相合傘』なるものを実践した。

「今日はありがとう、レイン君」

「いえいえ、こちらこそ誘ってくれてありがとうございます、綾瀬先輩」

身長が自分より一回り小さいため上目遣いで言ってきた綾瀬に、レインは微笑みながら答える。

が……綾瀬の顔はどこか優れない。

「……確かに、私は先輩だけださ。」

私、レイン君とは対等に接したいんだ」

「……………」

言っても首を傾げるだけでまるで意味が伝わっていない彼に、若干の苛立ちと大幅のやれやれ、というどこか諦めたような、しかしそれでいてどこか楽しんでいるような表情をした綾瀬は……………くいつ、とレインの腕を抱き寄せた。

「……………綾瀬先輩？」

普段とはどこか違う様子の彼女を不審に思ったレインは、彼女の顔を除き込んだ。

「……………レキちゃんや静奈ちゃん、ジャン又さんや理子ちゃん、それにミチル……………あの娘たち、皆貴方と同じ年じゃない？」

確かに、と日頃手を焼いている彼女ら（今は言われなかったが、悠もだ）を思い浮かべる。

悠は年下だが。

「皆、貴方と対等に接してると思うの。」

でも私は、私だけは……………」

……………成る程、彼女は皆の中で一人だけ年上なのを気に病んでいたようだ。

それでどんなアドバンテージを得ようが、レインは先輩に対して敬語……………つまり、他人行儀な言葉遣いで自分に接することとなる。

彼女はそれが嫌なのだ。

好きな人が、自分に対してよそよそしいのが。

好きな人が、自分を対等に見てくれないのが。

その気持ちをどこまで把握出来ていたのかは分からないが……………レインは、自分の腕をギュッ、と抱き寄せる綾瀬、彼女の頭にそっと手を置いた。

「レインく……………」

「レイン。」

そう呼んでくれないかな、綾瀬」

「……………！」

レインも、気づいていた。

綾瀬が、どこか自分に気を遣っていることに。

彼らは互いに、どこかで相手に対して気負いがあった。

それを互いに気にしていた。

それを互いに気づかなかった。

だが……綾瀬が正直に自分の気持ちを話したことで……互いの思いが同じだと気づけた。

「（本当はそれは俺の役目なんだろうけどね……）」

などと若干肩を落としながらも、目の前で頬を紅潮させる綾瀬の、雨で少し濡れた頭を撫でる。

彼女は抵抗せず、気持ち良さそうに目を細めるのだった。

いつの間にか雨は止み……霧が立ち込める中、見上げた空には、薄い虹が架かっていた。

「……傘、閉じる？」

「もう少しっ」

「ふふっ、だよね」

ビニール傘じゃあ日傘にもならないだろうけど……虹を見るには丁度いい透明さだ。

とまあ、そんないい雰囲気の中でも空気の読めない奴というのは存在する訳で。

「現在私たちは強盗の立て籠る銀行の前に居ます！」

犯人グループは四人、中にいた一般人約20人を人質に取った模様です！

歩いていった先には、なんとまあ大袈裟な事件現場が。

警察や武偵もいるが、人質がいるせいで突入出来ないようだ。

「やれやれ……これだから武偵って職業（？）は」

自身らの運の無さに、ため息が洩れる。

本来なら直ぐ様加勢するべきなのだが……今は二人共私服。

武装は長い袋に入れてある水月と、ブロウがあるが、デートの最中にわざわざ事件に巻き込まれる必要もないだろう。

「レイン、行ってきていいわよ」

「……行きたくないって言ったら？」

「行ってきて？」

「……了解」

出撃命令を受諾し、レインは渋々銀行強盗の逮捕に臨む。

「……三分で返ってくるよ」

三分後。

「お待たせっ」

「本当に三分で逮捕してきた……」

あつという間に強盗を逮捕したレインは、事情聴取やら報道陣の取材やらを潜り抜け、綾瀬の待っていたところまで戻ってきていた。

「じゃあ、次はどこ行こうか」

「……報告書出したりしなくていいの？」

「あの武偵たちが得するだけだからね」

悪戯っぽくウインクしてくるレインに、綾瀬は小さく吹き出して同意した。

レインは事件なんかには掛ける時間より、こうして大切な人の隣にいる方がずっと有意義な時間であると考えている。

そんな時間を割いて事件を解決してきて、少し寂しい気分になったレインは綾瀬の手を握った。

「……たまには、甘えられるのも悪くないわね」

「……言わないで。」

「恥ずかしいから」

ちよつとだけ顔を赤くしたレインを見て、綾瀬はくすっ、と僅かに笑みを溢す。

「わ、笑わないでよ！」

「ごめんごめん。」

可愛かったから」

「~~~~~！」

カア、とさつきよりも赤くなったレインは、顔を隠しながらさっさと進んでしまう。

「あ！ 待ってよレイン！」

引っ張られる形になった綾瀬は、苦笑しながらレインに続いた。

第118弾 霧の空（後書き）

ミ「あー！ 綾先輩フラグ立てたー！」

悠「悩んでたんですね……僕も年下ですから分かります。

まあ、僕は戦弟ですから大丈夫ですけどね」

静「作者は次もオリ話を少しやろうかと考えてるらしいぞ」

第119弾 風神の日常(前書き)

アレックスのターン!

ちなみに日常回故、戦闘はナツシング!

第119弾 風神の日常

第119弾 風神の日常

前話と同じく、キンジの入院中の出来事である。

赤い髪で漆黒の着物を着るアレックスは、未だ慣れない街に繰り出していた。

「……暑い」

自らの相棒は綾瀬と呼ばれた少女とデートを決め込むらしく、不在だ。

仲良くなれたキンジは入院中であり、現在こちらにいる親しい人間が全員一緒に居れない、という悲しい状態だった。

故に、日本文化の勉強をするべく街に出てきたアレックス。

彼はうみねことセミの大合唱が耳に響く波打ち際を、宝石のように光海を眺めながら歩いていた。

「東京は都会と聞いてたんだが……成る程、中々いいところじゃねえか」

個人的には田舎に行きたかった、というのが本音だったが、これはこれでありだろう。

さて、まずは何を見学しようか……と考えたところで、レインの瞳に派手な看板が飛び込んできた。

「『ゲームラッキー』……へえ、結構悪かなさそうだなあ」

所謂ゲーセンなる店なのだが、アレックスは戸惑わず入っていった。

「な……なんだこりゃ……！」

入店したアレックスの眼前には……見たこともないゲーム機が、ところ狭しと並んでいた。

クレインゲームなんかは見覚えがあったが、カードを入れるとキヤ

ラクターが呼び出され、お金を入れる毎にカードが吐き出される筐体、それに興味を持ったようだ。

「く、クールだぜ……」

暫く子供がやっているのを見ていたが、不審に思ったらしい少年がこちらをチラチラと見ていた。

「（おっといけねえ……びびらせちまったか）」

アレックスはくる、と踵を返すが……着物の裾を掴まれている感触がし、振り向く。

「お兄ちゃん、やらないの？」

見ればその少年、小さい少年の集団の中でも頭一つ小さな少年で、子供らしい黄色と白のストライプという派手な服に、茶色い髪からはアホ毛が一本、ちょこん、と飛び出していた。

「ああ？ なんてめえ」

「お兄ちゃんも、ゲームやるんでしょ？」

少年は無邪気にこちらを見上げてくる。

が、すぐに顔を青くした少年らに引っ張られていた。

が、彼は譲らない。

「ねえお兄ちゃん！

一緒にゲームやるうよ！」

その根気強さに呆れたアレックスは、適当に断ろうとする。

「やり方知らねえんだよ」

しかし、少年はそれでも引かなかった。

その瞳の輝きを一層強くする。

「なら僕が教えてあげるよ！ 一緒にやるうよ、お兄ちゃん！」

……その言葉を聞いて、アレックスは確信する。

こいつはバカだ。

実際問題その通りだ。

周りの心優しい、恐らく友人たちの言葉など聞いちゃいないで、端から見れば不良のような髪をした自分を、ひたすらにガキの遊びに

誘う。

「こつというガキが一番痛い目みんだよなあ……」

露骨にため息をつくアレックスだったが、少年は自分の裾を離そうとしない。

仕方無く、アレックスは再び踵を返す。

「わーったよ。」

付き合っつてやつから、とりあえず離せ」

少年はパアア、と顔を明るくし……裾を離さず、ゲームの筐体に向けて引つ張り始めた。

「おいっ、てめえ！

離せっつってんだろっがあ！」

「えー、だつて離れたらお兄ちゃん逃げそうなんだもん」

ぐ、と言葉に詰まりアレックスは返せない。

実際、彼は少年が裾を離れた瞬間おさらばしようと考えていたから、自身の考えが子供に読まれたことに多少のショックを受けていた。

「さあ、どれやるっか？」

しかし……満面の笑みを向けてくる少年の顔を見ると、なんだか考えるのが面倒に思えてきたため、もう勢いに任せることにする。

「……どうでもいいが、てめえ、名前はなんてんだ」

「僕？

僕は」

少年は答えを焦らすように、ある筐体に真新しい銀色の100円硬貨を入れた。

そして、音声と画面に表示された文字に促され、バーコード付きのカードをスキヤンする。

すると、画面には、恐らく少年のAvatarである二、三頭身の勇者、そしてその隣には『リュウキ』という、名が記されていた。

「『リュウキ』、つて言うんだ。」

よろしくね、お兄ちゃん」

リュウキという少年と共に、アレックスはゲームに興じていた。
格ゲー。

「そこそこ！ 早く ボタン押して！」

「こいつか！」

バゴオオオオン！

you lose!

「それは決定ボタンだよ！」

「知るかなこたあ！」

レースゲー。

「食らえ俺のミラクルドリフト！」

「一周遅れだけどっ！」

音ゲー。

良、良、良良可っ！

不可、不可、不可不可可っ！

「んだこのまるっこいのは！ 刻むぞこらあ！」

「お兄ちゃん！」

ゲーム！ ゲームだから！」

クレーンゲー（一文字しか略せてない）。

「おお……もうちよい！」

もうちよいだよお兄ちゃん！」

「……………（超能力で下から支えてる）」

ボタン！

「凄いやお兄ちゃん！」

クレーンゲームは上手いんだね、クレーンゲームは！」

「は、を強調するんじゃない」

コインゲー。

「ヒヤッハー！」

連射連射連射連射連射あ！

「お兄ちゃん、それじゃあすぐメダルなくなっちゃうよー！」

シューティングゲー。

「ああ？ この銃性能良すぎねえか？

弾も無限にあるしよ……」

「す、凄いやお兄ちゃん！

100円で全クリだよ！

天才だよ！」

「はっ、あつたり前だつてえの」

「……ふう、疲れたが、悪かねえじゃねえの」

「そうでしょ！」

すっかりゲーセンを満喫した二人は、近くのベンチに座っていた。

「お兄ちゃんはシューティングとクレーンが得意なんだね。

あのクレーン、アームが弱すぎて誰も取れないって言ったのに」

「まあな」

インチキだけだよ、とは言わない。

どうせ二度と会うこともないだろうし、わざわざ子供の夢をぶち壊さないように、彼なりの配慮をしていた。

「その景品だって、皆欲しがってたヤツなんだよ？」

「こんなもんがか？」

リュウキに薦められてやって見たクレーンゲーム、その景品である特撮ヒーローもののフィギュアだった。

「そうだよ。」

僕、『ブテイジャー』みたいに強くてカッコいい武偵になるのが夢

なんだ」

「……欲しがってる、つつーとお前もか？」

それは武偵だったのか、というツッコミたい精神を頭の隅に追いやり、ふと気になったアレックスは意地の悪い笑みを浮かべながら、こちらを物欲しそうに見つめていたリュウキに質問する。

リュウキはそっぽを向き、

「べ、別に欲しくないよ！」

と否定する。

が、その視線はアレックスの手に握られるフィギュアをキツチリ見据えていた。

アレックスが少し上に動かすと……すすす。

それに合わせて首が動き。

今度は左右に動かすと……すすす。

今度は横に、首が動く。

まるで糸で操られる人形だ、としばらくリュウキマリオネットで遊んでみる。

動かした方に首を動かすので、フィギュアを隠すようにすると、ああ……という心底残念そうな顔をして顔を俯かせた。

それに苦笑してしまったアレックスは……ポン、とリュウキの頭を手を置くと、フィギュアを片手に握らせてやった。

「ほら、くれてやるから元氣出しやがれ」

「え、いいのお兄ちゃん!？」

「良いに決まってるだろうがぁ。」

何だ？ 要らねえなら返して貰うぞ？」

「い、要ります要りますっ！」

下さい！」

慌てて、何故かいきなり敬語になってしまったリュウキを、頭に乗せていた手でクシャクシャ、と撫でると、アレックスは屈み込み、リュウキの目線に自分の目線を合わせた。

「いいか、こいつは武偵なんだろ？」

こいつをくれてやる代わりに、てめえはこいつみてえに強い武偵になれ。

力だけじゃねえぞ、武偵が強くなるべきなのは寧ろ心だ。

絶対強くてカッコいい武偵になる……約束出来るか、リュウキ？」

リュウキは少し考えると……こくん、と。

静かに、僅かに、しかし確かに頷いた。

「そうか……なら、頑張れよリュウキ」

立ち上がり、リュウキの姿も見ぬまま……バサッ！

と、懐に仕舞い混んでいた、臙脂色の、東京武偵高の防弾制服を羽織るのだった。

「俺に追いつけるくらいに、なあ」

ゲーセンに入っている間は気づかなかつたが……いつの間にか、降っていた雨が止んでいたらしい。

空には、これからの少年の武偵の道を讃えるように……虹色の橋が、架かっていた。

「（……柄でもねえことしまつたな……）」

ガチャ、とレインとキンジの部屋に上がる。

もうすっかり馴染みであるここでは、当然住人とも馴染み深くなる訳で。

「……おいホームズ、シラユキ。

てめえらまた飽きずにケンカか？

今時、裏路地のノータリン共でもここまでやらねえぜ」

相棒と友人のものであると考えられる幾つかの私物や、家具が斬られたり撃たれたりでズタボロになっていた。

「アレックス！

あんたも手伝いなさい！」

「アレックス君！」

「アリアをやっちゃって……！」

二人が猛獣のようににらみ合い、アレックスに加勢を求める中……
巻き込まれ気味だったアレックスは、

「ふああ……ちよっち眠くなっちまったなあ。

悪いが、今日は寝させて貰うぜ」

そのまま二人を無視し、自室に戻るのだった。

第119弾 風神の日常（後書き）

静「さて、アレックスの出番も一話で終了したところで、そろそろ待ちきれずにはち切れそうな作者が……」

ミ「原作六巻への介入を開始したんだよっ！」

悠「正確には五巻のラストからですけどね」

綾「次回からは無口な狙撃手と紫電の雷神の……!?!?」

お見逃し無く！」

第120弾 略奪婚……！？

第120弾 略奪婚……！？

無事単位集めも終わった（ちなみに、あの後超能力を今更教務科に禁止された武偵高チームは、強豪相手に3対1で負けた）キンジと静奈、そして馴染みの面々はほつと胸をなで下ろし、しばらく残り少ない夏休みを謳歌していた。

そして 事件は、最終日に起こった。

その日も、うだるような快晴。

よくもまあ、ここまで暑い日が続くもんだと感心とも呆れとも取れる考えをしていたレインだったが、その日は一度くらい気温が上がるくらいには太陽に近いであろう、探偵科男子寮の屋上にいた。

今はアイスを頬張って涼を得ているが、何故この夏真っ盛りな日に忌々しい太陽の下に出ているのか。

それというのも、昨晚ケータイにきた一通の電話が、そもその発端であった。

「ふー、夏休みも明日で終わりか……早いもんだね」

恒例の大怪獣戦争三つ巴バージョン（アリア、白雪がケンカ中理子が余計なことを口走る、という図だ）の片付けを終えたレインとキンジ、哀れ苦勞人二人はいつものことだ、と笑い飛ばしながら談笑していた。

そんな中だ。

ブー、ブー……

マナーモードのバイブ音が響き、レインのポケットが振動する。

「悪いね、電話だ」

キンジに断りを入れて通話ボタンを押し、耳に押しつけた。

『……レインさんですか』

「……そりゃ、俺のケータイだからね……」

この無機質な声に天然っぷり、思い当たる節が一つしかない。

「どうかしたかい、レキ？」

そう、電話の相手とはレキのことだ。

言い当てられたレキは、はい、と短く返して、更に続けて用件を手短かに伝える。

『明日の正午に、貴方の寮の屋上に来てください』

「？ どういう」

プツッ。ツッ、ツッ。

……本当に手短だ、とレインは肩を竦めた。

一方的に用件を告げられたレインは……否応なしに、次の日の正午の予定が決まってしまったのだった。

という訳で、現在レインは丁度日陰になっている、屋上の扉の隣に座っている。

アイスの棒にあたり文字が無いのを確認、超能力で灰にしながらい、レインはふと時計を見やる。

正午まで後二分。

ロボット・レキと渾名される彼女のことだから、きっかり二分後にくるのだろうか、とその二分をどう使うか考えていると　ガチャ、と。

屋上の扉が開いた。

そこから顔を出したのは、碧のショートに、琥珀のように美しい瞳をした、ドラグノフを担いだ少女　言わずもがな、レキだった。

「……以外」

目を合わせるでもなく、レインが発した第一声がこれ。

その言葉に反応したレキは、くる、とこちらに向くと、レインの隣に座ってきた。

元々スペースを空けておいたのだが、彼女がここに座るのもまた、レインにとつては以外だった。

例によって武士のようにドラグノフを抱えたまま、寝る体勢で座るレキはようやく口を開く。

「何が以外なのですか」

「いや、お前のことだから時間ピッタリに来るかと思ってね。

そうか……ちょっと早くきてくれて、嬉しいよ」

にこ、と笑ってレキに言うと、彼女は表情を変えず、

「そうですか。」

私も、レインさんが十五分前からいてくれたのは嬉しかったです」

その言葉を聞いて嬉しさが半減したとは言つまい。

言っても何も悪くない気がするが、彼女に悪戯心が生まれたとするなら大収穫なので、気にしないことにする。

レインは悪戯(?) によって晒され続けた忌々しい晴天を仰ぎながら、レキの言葉を待つ。

沈黙に堪えきれなかった、という理由なら本来は男である自分から話し掛けるべきだと彼自身も分かっていたが、今日ここに、話があると云う理由で呼び出したのは他ならない彼女、レキだ。

よって、レインは大人しくレキの次の言葉を待っていたのだ。

と、そうこうしている内に、レキの綺麗な唇から言葉が紡がれた。

「……レインさん、お願いがあります」

「……何？」

俺に出来ることなら、なんでも言ってくれていいよ」

本心からの言葉だ。

ある程度の要求ならば電話一本でこと足りるだろう。

が、レキは現にこうしてレインを呼び出し、あまつさえお願いがある、という前フリをしている。

かなり重大な話であることは、レインにも想像がついた。

やがて、彼女はすっ、と立ち上がる。

こちらを見下ろしてくる彼女の瞳を見て、レインも無言で立ち上がった。

そうして二人で向かい合う。

……沈黙。

レインのこめかみから、一筋の汗が伝った、瞬間。

レキの唇が、僅かに動く。

だが、彼女の声は　ビュンッ！

突如として吹き荒れた風の轟音ぬよって、レインの耳には届かなかった。

そう、声は。

「……れ、レキ。今なんて……？」

レインの瞳には届いていた。

「　聞こえなかったのですか」

武偵なら、ほぼどの科でも習う基礎中の基礎、読唇術。

「なら、もう一度います。」

それでレインが読み取った、彼女の言葉は

「　私と、結婚して下さい」

プロポーズ、だった。

「え、えと……レキ、一つだけ確認していい？

……本気？」

「本気も本気です」

ピシャリ、と即答で事実を叩きつけられたレインは、硬直してしま

う。
ニューヨークやローマの武偵高でも何度か女子から告白されたことはあった（全部断っているが）。

だが……レキは、告白なんてすっ飛ばして、結婚、と来たものだ。

さすがのレインも、現実に頭がついていない。

「えと……な、なんて言ったら良いんだろう……嬉しい。嬉しいんだけど……」

「……私では不満ですか」

レキはレインに、上目遣いでそう聞くと……レインは顔を若干赤くし、尚且つ慌て始めた。

「い、いやそうじゃない！

でも……俺たちは学生だし、まだ結婚とかは早いっていつか……」

「……なら、私としばらく付き合ってくださいませんか」

……今度こそ、驚愕だ。

あのレキが、無愛想・無感情・無表情の三拍子の揃ったレキが、こんなにガンガン来るとは、レインも考えていなかった。

そんな驚きが頭の大半を占め、答えに窮していると……レキが、いつの間にか目の前にいた。

「レキ ツ!?!」

彼女の、先の要求に答えようとした、瞬間。

彼女の唇が、レインの口を塞いだ。

まるでその言葉、レインが言おうとした『少し考える時間が欲しい』、というのを防ぐように。

レインは突然のことに目を見開いたが、レキは無表情にこちらを見上げていた。

その表情が、今のレインにはどこか気恥ずかしく、思わず目を閉じてしまう。

それが、彼女に唇を委ねていることと同義だということは、彼には分かっていない。

やがて、レキが口を離すと、レインは羞恥に赤く染まった顔のまま、目を開いた。

「れ、レキ……」

「貴方が断ると言うならば」

レインが言葉を発する暇も無く、レキは背中に背負っていたドラグ

ノフの銃口を、レインに向けてくる。

「力づくでも」

レキの、先ほどより鋭くなった瞳を見て、レインも動悸を押さえて向き合った。

「レキ、もう一つ聞きたい。

どうして俺なんだ？」

「……………風が言っていたのです。

貴方を、ウルス 家族にしろ、と」

淡々と言った、レキのセリフに含まれた1単語…………『風』に、レインな顔をしかめた。

風。レキが崇拜しているらしい、完全に謎なものだ。

キンジ曰くは、強い妄想の一種だと考えているらしい。

神はいる、と信じることで心に安らぎを覚える偶像崇拜者のように。

「落ち着いてよ、レキ。

俺と付き合うんなら、銃は仕舞って、話し合おう」

「お断りします。

異性は話し合いで得るのではなく、奪うものですから」

そんな男らしいセリフを言うレキに、レインは現代の草食系男子より遙かに男らしさを見たという…………

と、そんな(多少)失礼なことを考えていたからか……………くらっ、と。

レインはおかしな感覚に見舞われ、足を覚束せはしないものの、一瞬視界がブラックアウトした。

幸いすぐに視覚は戻ってきたが……………不可解な感覚はまだ続いていた。

「これは……………!?!」

「超能力者専用の薬です。

さっき貴方が食べたアイスに仕込んでおきました」

いつの間に、と言う間もなく、レインの身体は通常の機能を取り戻した。

一点を除いて。

超能力が、上手く発動しない。

銀の手錠を掛けられた時のように、微弱な雷が出るだけだ。

「超能力を止める薬です。」

効き目は十分。

内七分、猶予を与えます」

レキが言うのと同時、レインの上から、白銀の体毛をした大型の狼

……ハイマキが、レインの防弾制服を持ってきた。

それが投げ渡され、袖を通す。

「今から一発ずつ、貴方に銃を撃ちます。」

貴方はその中で一発でも当たれば、そこで負けです。

逆に逃げ切れば、貴方は自由の身です」

「いや、ちよ、待つ……！」

「待ちません。」

ハイマキ」

レキは冷たく言い放すと、ハイマキに指示を出す。

するとハイマキが機敏なステップを踏み、レインに飛びかかってきた。

「うわっ！」

それを避けたレインは、とりあえず威力の弱まった雷歩で、屋上から飛び降りた。

「……ゲーム、スタートです」

晴れ渡った、蒼い空の下、汗一つかかない少女の口が微かに動いたのは、逆光の見える位置にいたレインには気がつかなかった。

第120弾 略奪婚……！？（後書き）

皆の魂が現在抜けているため作者参上。

いやあ、大変ですねえレインも。

さて……ハーレムルートになる予定なのに、崩壊の危機が到来。

さてさて、どうなることやら……

キンジたちもちゃんと絡ませる予定なので、そこらへんの心配は大丈夫ですよ。

第121弾 七発の銃弾（前書き）

状況説明。

レキ、絶対半径2051メートル。

ハイマキ、防弾鎧着用。

レイン、感知領域、能力干渉可能区域共に半径58メートル。

現在G7相当。

使用可能能力、（弱）雷神化、電磁波ソナー、電磁反発、雷掌。

第121弾 七発の銃弾

第121弾 七発の銃弾

「くそっ……！」

ハイマキ、しつこいな……！」

必死で追ってくるハイマキを撒こうと駆けるレインだが、一向に突き放せる気配がない。

振り返るのをやめて足を上げ続ける中、不意にノイズがかったレキの声が聞こえてきた。

またも振り返ると、ハイマキの装備する武偵犬用防弾鎧に、簡易無線が挟まっていたのだ。

そこから、タアン！

という発砲音。

「！」

超音速の銃弾が、レインに迫る。

レインはそれを、半身になって避けた。

遙か彼方の探偵科男子寮の屋上から、遅れて銃声が聞こえてくる。

「……さすがです。」

今のように、一分毎に銃弾を撃ちます。

七発全て、つまりあと六発を避けるか、防ぎきれれば、貴方の勝ちです。」

「冗談キツイよ……今の、貫通弾ピアスじゃないか」

装甲貫通弾、即ちA-TNK銃弾。

近年の防弾装備を貫く、必殺の銃弾だ。

かつてシャーロックが金を狙撃した際に使ったのと同じそれは、レインの防弾制服も例外でなく無力化する。

「逃げたければどうぞ。」

ただし 私の絶対半径は2051メートルです』

絶対半径 武偵用語で、狙撃手の必中の間合いという意味だ。それが、二キロ弱。

武偵高のある学園島は、対角線の長さが約二キロ。

つまりレキはこのほかでかい学園島の端から端までの距離を撃ち抜けるということになる。

「くそっ！」

レインは柵を飛び越えハイマキを引き離そうとするが、ハイマキは柵をぶち壊して進んでくる。

「（油断しすぎた……！）

くそ、超能力が使えるば！」

レインは雷歩を使おうとするが、形成される磁場は不安定であり、とても踏みつけられるものではなかった。

「（なら……まずは！）」

レインは向き直り、ハイマキに水月の切っ先を向けた。

そして、弱まった雷で雷神化。

「こい！」

ハイマキは吠えながらレインに飛び掛かる。

その巨体を受けるのは今のレインの力では不可能、なので新装備『影』の試験作動をすることにした。

「（まずは……これだ！）」

レインは雷を『影』に流し、電源を入れる。

『影』は本来多様なギミックを秘めた戦闘用シューズが元となっている。

しかし、開発したは良いものの、ギミックを作動させるだけの電力が供給できないのが致命的な問題となり、実用化は不可能と判断、お蔵入りとなっていた。

が、そこに現れたのがレインである。

彼にとつて、そんな程度の量の電力を供給するなど、呼吸に等しく容易なことだった。

故に、平賀がシューズの試作機をチェーンアップ、レインに渡したのだった。

電源の入った『影』の、小指部分のスイッチを入れる。
すると……バシユッ！

と、踵部分が超小規模な爆発を起こし、急激に加速した。

『アクセラレーター加速』

そう名付けられた（命名平賀）そのギミック。

しかし……ガスッ！

「ッのわあああああ！」

しかし、急な加速に反応が遅れ、肩をハイマキの足にぶつけ、盛大に転んだ。

「痛ったあ……」

火力有りすぎだろ、ってヤバい！

格好の的だ！」

何にしるハイマキを一時的に撒けたので、一旦建物の中に隠れた。
この建物は廃屋のようで、何も無い床の散らかった工場のようなところだ。

「ふう……」

レインは呼吸を整えると、微弱な電磁波、そして磁力を辺りに放射し始めた。

電磁波によるソナーで、万一に備えて銃弾を察知し、更に磁力で銃弾を寄せ付けないという考えだ。

自分の周りに、球状に張られたその感知領域に、すぐに異変は現れた。

「……？」

物体が感知領域に侵入した感覚は無い。

が ある一カ所だけ、何の存在も感じない空間があった。

それは、凄く速度で、こっちに、向かって

「（ッ、銀弾か！）」

レインは咄嗟に水月を抜刀、銃弾を弾いた。

「銀製装甲貫通弾……超能力者殺し（ステルスキラ）の一種じゃないか……！」

これは本当にまずい、とレインは慌ててその場を離れる。が……レキの言葉を思い出す。

絶対半径2051。

例えこの学園のどこにいようと、逃げられない！

「（なら……仕方ないよね）」

レインは僅かに微笑むと、水月に手を伸ばした。

逃げられないなら、逃げなければいい。

レインは水月を抜くと、腰に据えて居合い抜きのような構えをとった。

探偵科一年の少女、佐々木 志乃。

彼女の技を見せて貰った際、気になった技、それを模倣しようとした。

雷神化がままならない今、居合いの速度を高めるため、試すには丁度いい。

レキの銀弾が、レインの感知領域を消しゴムで消すように突き進んでくる。

一回、二回と跳弾すると、真っ直ぐレインの正面から向かってきた。この一撃は、居合い抜きの鞘を捨て、摩擦を無くした最速の斬撃だ。その速度、極めれば燕さえ捉えることから、この奥義はこう呼ばれる。

「燕返し！」

ギイン！

銃弾を弾いたレインは、ほつと安堵の溜め息をつき、再び水月を構えた。

何度でも打ち返す、という気合いを入れ、レインは徐々に戻ってきた超能力の感覚を強めながら、警戒の色を強める。

後、四発。

レインは気を張り詰めたまま、次弾を待った。
数十秒後……

「来た！」

次なる銃弾の存在を感じ、レインは水月を握る力を強める。
が、すぐさま異変に気づいた。

感知できる。

銀弾ではない？

レインはそのことに疑問を感じながらも、向かってきた銃弾を弾いた。

しかし、水月が銃弾に接触した、その刹那。

カツ！

突如として、視界を白い光が覆った。

「ぐっ！？」（武偵弾……閃光弾か！）

一時的に視力を失い、レインは軽く舌打ちすると、感知用の電磁波の放射を強めた。

再び、次弾。

またも武偵弾かも知れない、とレインは警戒を強め、出来るだけ距離を取ってかわすことにした。

影の小指スイッチを作動させ、『アクセラレート加速』を発動、横っ飛びにその銃弾を避けた。

が、その銃弾が壁に着弾した瞬間、

キイイイイイイイイ！

耳をつんざく、猛烈な衝撃音がレインの耳を襲った。

「（次は……音響弾カノンかよ……っ！）」

武偵弾は、その威力などから一発百万円するという必殺武器だ。
それを僅か二分間に、二発。

二分で二百万円を使うという荒業だ。

『紫電の雷神』、レインを相手取るには有効な手とも取れるが……
いけません、自分に求婚してきた相手がこつも金使いが荒いと心配

になつてくるレインだった。

しかし、今はそんなことを考えている場合ではない。

強烈な立ち眩みに襲われ　　どうやら三半規管が一時的にダメージを負ったらしい　　水月を杖のようにしてなんとか耐えたが、最早ソナーも解けてしまった中、雷神化したレインの片方の瞳は、飛来する銃弾を捉えた。

「…………ツ、ああっ！」

叫び、なんとか『加速』を発動したレインは、倒れるように地面に這いつくばり、なんとか銃弾を避けた　　はずだった。

その銃弾がレインの背後の壁に着弾すると…………銃弾は弾け、音を立って飛散した。

銃弾の破片が、レインの背中を打ち付ける。

「ぐっ…………！」

レインはその衝撃で立てず、壁に背中を預けた。

最後の一撃、あれも武偵弾だ。

クラスター飛散弾と呼ばれる、弾けた銃弾で広範囲を攻撃する。

「一体、何発武偵弾を持っているんだ…………！」

「今三発使ったので、残り6発です」

レインの疑問に答えたのは…………ハイマキに股がり、ドラグノフを担いだ、レキだった。

「レインさん…………私の勝ちです」

レキが抑揚も無く告げた事実には、レインは素直に頷いた。

度重なる戦いでそれを真正面から受け止められるだけの器量を得た今でも、それを認めるのは辛い。

が…………レインは頷いた。

どんな理由があれ、自分は　　負けた。

第122弾 レキとの契り

第122弾 レキとの契り

「ああ、俺の負けだ。

俺は……どうすればいいかな？」

両手をあげ降服の意を示したレインは、ドラグノフを構えたままのレキにそう問い掛ける。

「では、私と婚約して下さい……と言いたいところですが、確かに私たちの年齢では婚約はまだ早いです。

とりあえず、私と付き合ってください」

やっぱりか、と多少予想のついていた要求をされ、レインは押し黙る。

しかし、唐突でハンデつきとはいえ、勝負に負けた身であるレインに拒否権などあるはずもない。

なのでレインは……レキの要求を、飲むことにした。

「オーケー、聞くまでもないけど、男女交際だよな？」

まさか『買い物に付き合っ』などというありきたりな落ちではあるまい。

一応確認するレインだった。

レキの返答は、

「はい、それであっています」

と現実を突きつけられる形に終わる。

レインが首肯すると、レキは……僅かに窓から漏れる日光、その中にひざまづいた。

「でしたら、今から私は貴方のものです。

少々気が早いですが、契りの詔を……」

現代の日本語に訳してあるらしいその言葉は……レキの一族に伝わ

る、婚約の言葉、なのだろう。

彼女の口から、何やら荘厳な言葉が紡がれる。

「私はこれから、レインさんに仕えます。

貴方は私の銃を貴方の武力として、自由にお使い下さい。

私の身体を貴方の所有物として、自由にお使い下さい。

花嫁は主人の言うことにならなんでも従います。

主人に仇為す者には一発の銃弾となり、必ずや滅びを与えん事を誓います。

ウルスは一にして全、全にして一。

これからは私たちウルスの47女、いつでも、いつまでも、貴方の力になりましょう」

長々と綴られたレキのセリフ 『契りの詔』に、レインは僅かに顔をしかめた。

あまり、彼女が自身を『銃弾』などと呼ぶのはどうも彼にしてみたらあまり好ましいとは言えない。

しかし、レインはレキに負けたのだ。

敗者は大人しく勝者に従う、というのは彼の中の不文律。

なので……レインは、レキの言葉を飲み下した。

そのレキはと言えば、レインを主人とすると言っているため矛盾していると言えば矛盾しているのだが。

「……………」

レキは沈黙したまま動かない。

先の、膝をついた状態のままだ。

「あの……レキ。

これから俺はどうしたらいいの？」

帰っていいのか、まだ話があるのか。

そう言ったニュアンスで聞いたその言葉には、予想外の言葉が帰ってきた。

「貴方は、好きに私に命令して下さい。

貴方は私の主人ですから」

「命令つて……」

困惑するレインに、レキは更に追撃(?)を仕掛ける。

「あと、私から離れないで下さい」

今度こそ……今度こそ、絶対するまい、と思っていたのに、ずっこけてしまう。

レキは「?」「?」というように首を傾げる。

いや、「?」「?」じゃないだろう、なんて思いながら、とりあえず立つように言ってみた。

さすがに、いつまでも女子に……ひざまづかしているのは、気が引けたからだ。

すると……すっ、とレキはゆっくり立ち上がった。

「よし、じゃあ俺は帰るねー!」

レインはにこ、と微笑むと、二本指でピッ、と別れの合図をする。

そしてそのまま、いつもより若干早足でその場から離れようとするが……

「……………」

「……………」レキ。

どうして着いてくるんだ?」

レインの歩く速度と寸分違わぬスピードで、レキが、そしてその後ろにはハイマキが、完全に等間隔で、ぴったりと張り付かれていた。ジト目で首を半分だけ回して聞か、レキは全く表情を変えずに答える。

「言っただけです。」

私から離れないで下さい、と」

もしかして、このまま部屋までついてくるつもりなのだろうか?

だとしたら、ものすごく拙いことになる気がする……という訳で、

レインは先のレキのセリフ、『好きに私に命令して下さい』。

それを思い出し、実際さつきも立ち上がれ、という簡単な命令に従ったことから考えても有効な手段だろう、と早速二回目の命令権を発動してみることに。

「レキ、もう帰っていいよ」

「その命令は受け付けません」

「そんなのあり!?!」

「好きに命令しろ、とは言いましたが遂行するとは言っていません」
う、と痛いところを突かれて、レインは押し黙った。

というか、今日はレキにしては随分喋る。

この娘、こんな性格だったっけ？

というレインの（心の内の）問いに答えるように……レキは、ついに……くい。

とレインの裾を掴んできた。

もうどうにでもなれ、と半ば匙を投げたレインであった。

「という訳。

分かった？」

所変わって、レインとキンジの部屋。

そこでは、ソファに横たわるレインが、レキに膝枕してもらい尚且つ耳搔きをして貰っていた。

「……の割には順応してるじゃないか」

「あつ、そこいいわ」

「聞けよ!」

流石レキ、狙撃科Sランクは伊達ではない。

レインの耳のスイートスポット（？）を的確に搔いてくる。

適度にリフレッシュしたところで、レインは起き上がって小さく伸びをした。

「ふう、ありがとうレキ。

それよりキンジ、まだベット空いてるだろ？

別にいいじゃないか」

この部屋には現在、レイン、キンジ、アレックスしかいない。

たまにアリアや白雪、静奈にミチルに綾瀬や悠、更には理子やジャ

ン又がけしかけてくる時があるが、大抵泊まっっていくことはない。

加えて、日本文化大好き少年ことアレックスは「俺は布団で寝る！

異論は認めない！」とのことでベットは二カ所空いている状態だ。ちなみに余談だが、レインたちの部屋には布団が増量してある。

実に十枚はある（通販の圧縮袋でコンパクトサイズで仕舞ってある）その布団は、押し掛けてくる人数が増えて、この部屋が修学旅行よろしくごろ寝状態にならないための解決策だった。

とまあ、そんな訳で、レキが寝るスペースには困らないのだ。

「いや……それはそうだが……」

「いえ、布団は要りません」

レキのセリフに、また彼女の性質を思い出す。

彼女は、座って寝るのだ。

ドラグノフを持ったまま。

それは、いつ敵に攻められてきても刀を抜ける、武士のように。

「駄目だよ、レキ。」

寝るときはちゃんと布団で寝なきや」

「……分かりました」

レインが人差し指を立てて注意すると、レキは軽く首肯した。

それを端から見ていたキンジはと言えば……

「やっぱり順応してるじゃないか……」

苦々しく呟くだけだった。

「ふああ……ん？」

おいレイ、んだそいつはあ？」

そんなキンジの苦悩はまだまだ続いていた。

欠伸をしながら黒の着物をだらしなく着て、真っ直ぐ立ち尽くすレキを指差したアレックスに、レインは説明を始めている。

やがてすぐに懐柔されたいアレックスは、レキと握手を交わしていた……この反応と自分に対しての話した時間より遙かに短かったことから、ああ、なんかテキストなこと言ったんだろうな、とキンジは呆れ果て、フラフラと自室に戻って行った。

アレックスを言いくるめたレインは、キンジが部屋に戻り、アレックスも出掛けたのでレキの引越しを済ませることにした。武藤の妹、貴希に依頼して運んで貰ったダンスを空き部屋に運び込むべく、両手で持ち上げた。

そしてダンスをどう入れるか思案していると……レキが、くいとまたも裾を引張ってきた。

「ごめんレキ、少し後にしてくれないかな？」

「こちらの方が優先です」

と、レキは更に裾を掴む手の力を強めた。

命令、というよりはレインの言葉には従うはずのレキが、それを覆した。

これは確かに重大なことなんだろうな、とレインはダンスをテキストなどところに置き、レキを自室に入れた。

レインの部屋は、白を基調とした清潔感のある部屋で、本棚には漫画本ばかりが並んでいる。

尚、机の上には教科書などが置いてあり、同時にダンベルなども置いてあった。

端の武装がはみ出しているクローゼットが投げれば、充分普通の男子高校生の部屋、そんな感じだ。

「で、なんの話？」

と切り出したレインは、ポフ、とクッションに座り込んだ。

レキに座るよう言うと、彼女も正座してクッションの上に座った。

「……私は、前々からレインさんを主人にするつもりでした」

「風の命令だから？」

「はい。」

しかし……今回急に貴方に婚約を迫ったのには、目的があります」レインの冗談めかしたセリフにも、レキは淡々と答えた。

「だから、レインさんに手伝って貰うつもりで、貴方を主人にしたのです」

レインの、想像だにしなかった事実を。

「　　アリアさんとキンジさんを、別れさせます」

第122弾 レキとの契り（後書き）

不知火「あの娘たちが放心状態だから、しばらくは僕、不知火 亮と……」武藤「武藤 剛気だ。」

俺たちが後書きコーナーを担当することになったぜ。

むさ苦しくて悪いな」

不「僕たちが呼ばれたのは……出番が少ないから、らしいね。ふふっ」

武「何い！？ 作者てめえ！ 俺たちに出番与えないくせに！」

第123弾 『風』の意志

第123弾 『風』の意志

「……………今、何て言った？」

信じられない、と言った風に、レインは恐る恐るレキに聞き返した。対してレキは、何でもないことのように淡々と、恐ろしくなるくらい冷静に、先の言葉を反芻した。

「アリアさんとキンジさんを別れさせます」

アリア、と、キンジ、を。
別れさせる。

それがどんな意味を持つのか……………この少女は、果たして分かっているのか。

レインは拳を握り締める。

「……………レキ。」

いくらお前の頼みでも、そいつは人道に反する」

例え大切な人の頼みでも、聞けない。

人間には人道的なことと非人道的ことを判断することができる。

レインの主観では間違いなく後者であるそれを、レインがする気は起きないだろう。

「人道には反しません。」

寧ろ、彼らが結ばれることこそ人道に反す」

対するレキの反論は 今のレインには、理解出来ないような内容。もし、彼女がキチンとその背景をレインに伝えていたなら、レキの提案を吟味するくらいのことにはレインもしただろう。

しかし、説明不足で理解不充分的レインには火に油を注ぐ結果となった。

「……………結ばれちゃいけない二人なんて、この世に存在しない！」

断言するレイン。

しかし、レキはそれでも、引こうとしない。

そして　レインを黙らせる、その一言を発した。

「……『緋弾のアリア』」

「……ッ!？」

聞いた瞬間、レインは自身の身体が硬直するのを自覚した。

緋弾の、アリア。

言わずとも分かる。

それが、1ヶ月と少し前　砂礫の魔女、パトラのアンベリール号

で、緋色の光を放ち……ピラミッドを消滅させた、あの力。

あれが、キンジとアリアの関係にどういふ影響があるのか……そんな疑問が頭を掠め、レインは回答に窮してしまう。

「キンジさんとアリアさんを結ばせる訳にはいかない……納得してくれましたか？」

敢えて詳しいことまでは説明しない。

そんなレキの言葉を耳に入れると、どんどん『緋弾』の危うさが自身の中で誇大妄想されていくのが分かり、レインは軽く首を振った。結局、レインが至った結論は……

「……分かった。」

ただし、あまりに目に余る時は止めるからね」

「……了解しました」

とりあえずは、ポーズでもなんでもいい。

様子見、というもどかしい選択をしたレインであった。

その日の夕食。

アレックスは明日の始業式に、転入の挨拶をする準備の用がある、という事で今日は帰ってこないらしい。

キンジはアリアとの話があるらしく、必然的に部屋に二人きりになる訳だ。

「晩御飯は何がいい？」

俺が作るうか？」

一応、レキに聞いてみるが、彼女の返答は、

「レインさんのお好きなように」

という予想通りの返答だった。

レインは未だ人間味の薄い彼女をどうしたもんか、と考えながら、
外食にしよう、と財布をポケットに入れた。

「じゃあ行こう。」

ロキシーでいいよね？」

「ええ」

相も変わらず無表情なレキに、レインは苦笑した。

「レインさん、私のパートナーになって下さい」

武偵高のある学園島唯一のファミレスことロキシー内、食事の最中
だった。

唐突に、いきなり、なんの脈絡もなくそう言われたレインは、頷く
暇もなく書類に名義を書かれ、武偵高の防弾制服のポケットに仕舞
われてしまう。

「いや、いいけど」

「チーム名は……その内考えておきます」

突然彼女が言い出した『チーム』とは、文字通りの意味でチームだ。
武偵同士の。

凶悪な犯罪者を逮捕するためには、様々な人間の助けが不可欠。

戦闘メインで派手な行動の目立つ強襲科、狙撃科などはもちろん、
戦闘メインではないが裏方で仕事をする、鑑識科に情報科、探偵科
や装備科なんかも不可欠だ。

ちなみに、キンジヤ理子、ジャン又なんかの戦闘力は寧ろ異常で、
それぞれの科の生徒に戦闘要員は少ない。

そこで、お互いをカバーし合うための団体が、チーム。

互いの欠点を補い、長所を伸ばす、それが目的であるチーム。

これが意外に重要で、登録したチームは国際武偵連盟に登録されるらしい。
ちなみにレインとしては、連盟の頭の堅いお偉いさんが、自分が一
高校生のチームに入ると知り、どんな顔をするか見物である。
閑話休題。

しかし、レキが持っていたその重要な書類には……レキと、レイン
の名前しか載っていないかった。

「心配せずとも、貴方と私ならば負けはありません」

「……自信があるのはいいけど、過剰なのはどうかと思うけどね」
「私は単に事実を述べただけです。」

誇張や自尊はしていません」

両手をあげてやれやれ、という感じに肩を竦めたレインは、ドリン
クで口直して立ち上がった。

チームの申請は、近い内……具体的には、9月末に行われる。

その前にある二つのイベントがあるのだが……内一つは、とんでも
ない内容であり……開催日が、明日。

つまりは二学期の始業式に、いきなり危険な行事を行うという。ま
あ、言うならば『力試し』、そんなところだろう。

それはともかく……チーム、と聞いたレインは、まずいことになっ
た、と眉間を押さえた。

レキとチームを組むならば……自らをドレイと称す、『あの』少女
がどんなリアクションをするのか……

「考えたくもないね」

「？」

「何でもないよ」

思わず口をついて出てしまったその言葉にレキが首を傾げたので、
苦笑いしながらそう言ったのだった。

「ふああ……今日は疲れたなあ」

と言いつつ、ちらとレキの方を盗み見る　意味深な視線で。大体予想していたが、眉一つ動かしていなかった。

今のは単なる悪戯だったが、彼女はやはり鈍感過ぎる。程度はどうあれ、悪意にくらいは気づいて欲しいものだ……と、レインが考えながら軽く伸びをした。

しばらく歩いたからもう日は落ちて、薄暗い道に街灯が点々と立ち並んでいる。

その街灯の照らす、円状の範囲に入る度、レインはレキの方を振り返った。

「……何でしょう」

「いやね、やつぱりレキって可愛いよね、と思ってさ」

レインは後ろを向きながら後ろ足で歩き、にこやかな笑みでそう答えた。

電柱に頭をぶつける、なんてベタなことをする心配はない。

レインは、先刻レキの銃弾を感知した電磁ソナーで辺りの情報を把握している。

今、ネコが電磁波に反応したらしく、逃げ出した。

「ありがとうございます」

照れた様子も慌てる様子も見せず、レキは淡々とそう答えた。

彼女が一步を踏み出す毎に、背負ったドラグノフがガチャ、と無機質な音を立てた。

レインが、街灯の照らす円から、外に踏み出す。

「……レキ。」

お前は……風に命令されたから、俺に……その、告白してきただけなの……?」

ふと、立ち止まって聞いたその質問に……レキは、答えない。

「……ごめん、変なこと聞いて。」

今のは忘れて

言いかけた言葉が、またも遮られた。

レキの、口づけによって。

「~~~~!?!」

見る見る内に、レインの顔が朱色に染まる。

レキは口を離し、未だ困惑気味のレインに向き直った。

「……私は」

ガツシヤアアアアアン!

「!?!」

レキが言葉を紡ぐ前に、轟音が辺り一帯に鳴り響いた。

植え込みを隔てたベンチからだ、と直ぐ様理解したレインはプロウを抜いて、飛び越え様にベンチの方の人影に向けた。

だが……その二人は、顔を真っ赤に染めてこちらを見てくるだけだった。

「き、キンジ!?!」

アリア!?!」

そう、先ほどレキが『別れさせる』と言っていた、アリアとキンジであった。

「二人共……今の……」

レインがフラリ、と自分たちに近づいて来ていることに気づいた二人は、未だ顔を赤くしたままだった。

「いや、その……俺たちは何も見ていない!」

「そそそ、そうよ!」

私たち、ああ、アンタたちがききき、キスしてるとこなんか、見て見てないっ!」

レインはプロウを下ろしながらも、「ほお〜う?」と猜疑の目をアリアとキンジに向けていた。

というか、彼らの様子とアリアの失言から考えて、黒であることは間違いないが。

「とにかく、今のは他言無用で頼むよ」

と、レインは片手の人差し指を唇にあてがう。

二人がうんうん、と頷くのを確認して、レインはレキが待っているのに気づき、再び帰路についた。

明日は武偵高二学期の始業式である。

レキも明日は始業式の後、セレモニーをするらしく……早く帰るべきだから、キンジたちは放っておこう。
そう結論づけるのだった。

第123弾 『風』の意志（後書き）

不「へえ、成瀬君はレキさんとか……」

武「分つかんねえぜ、あのギャルゲの主人公共なら……」

不「おつと武藤君、それ以上は今……ね。」

何はともあれ、明日は『あれ』だよ、『あれ』」

武「車輛科にはあんまし関係ねえがな」

第124弾 意外な転入者

第124弾 意外な転入者

翌日……レインは欠伸をしながら、すりよってくるハイマキの頭を撫でていた。

緞帳なんかの張られた講堂での校長の話を適当に聞き流している。ふと辺りを見渡して見ると……黒一色。

それというのも、始業式にはスーツに近い漆黒の防弾制服、^{ディヴ}防弾制服・黒』と呼ばれる防弾制服を着ており、まるでマフィアの集会のようだ。

と、レインが暇そうなのを見てか……悪友である二人組が、後ろの椅子から話かけてきた。

「成瀬君。

君、女性関連でスキャンダル起こした？」

二期目に聞く級友の第一声がこれか、と苦笑いしながらレインは軽く首肯する。

それを見た武藤は、小さく「何い!？」と声をあげ、すぐに「誰だ?」と聞いてきた。

切り換えの早い奴だ、と呆れ半分にジト目で睨みながらも、レインは多少はしよった説明を、不知火と武藤に聞かせた。

その話が終わる頃には校長の話も終わりかけていたが……不知火はニコニコ、武藤はニヤニヤしながらも集中してレインの方の話を聞いていた。

「へえ……レキさんが、ね」

「そりやまたレイン、お前も難儀な奴に絡まれたもんだなあ……」

武藤も若干同情するように言ってきた。

「まあ、上手くやるぞ。」

『水投げ』が終われば、『修学旅行工』だしね」
『修学旅行工』とは、チームを組む際の親交を深めるための行事であり、ここで上手くいった生徒たちは大概チームを組む。その行事前に、各生徒の身体能力を計るための行事がある。それが、『水投げ』 俗に言う、ケンカ祭である。

長つたらしい校長の話も終わり……いよいよ、アレックスの転入挨拶だ。

通常は転入生が始業式でこのような挨拶などしないだろうが、彼はニューヨーク武偵高の、こちらで言うSSR首席であり、『風神』の名を冠する者なので、校長がこのような場を設けたらしい。それはそうと、あのアレックスがどんな挨拶をするのか……とても楽しみだ。

もし失敗したなら笑って励ましてやるか、と小さく微笑みながら、壇上に目を向けた。

大きな台の前まで舞台袖から歩いてきたアレックスは、いつもの黒衣着物でなく、防弾制服・黒を着用していた。

アレックスは台の前に立つと、マイクを持ち、あーあーとマイクテストをすると、軽く咳払いした。

『よお、東京武偵高の奴等。』

知ってるだろおが、俺の名はアレックス。

苗字は聞くな。

残り一年と半分、よろしく頼むぜ』

彼の挨拶は相変わらず粗雑であったが、寧ろそれが彼の味を引き立たせることとなったようだ。

講堂からは拍手喝采と黄色い声援が木霊し、アレックスはそれに片腕を上げて応えるのであった。

安定だな、とレインは安堵のため息をつきパイプ椅子に凭れた。

『えー、続きまして、新任の教務科の先生二名の挨拶です。皆さん、拍手』

……？

皆も一応は拍手しているが、どこか困惑している様子だった。
今日の始業式の予定に、そんなものは入っていない。

訝しげな生徒たちの視線が集まる中、アレックスと入れ違いに壇上に上がってきたのは……

「なあっ!？」

見間違っはすもない。

白と黒の入り雑じった派手な髪に、教務科用の防弾制服・黒を着た

……

朝露 信季。

静奈を連れ去り、海神を操ったかつての敵。

そして、もう一人。

深い黒の髪に、金と銀のオッドアイ。

二メートルはある巨大な刀を背負ったその男は

「晴、夜……!」

かつてレインが最も憎んだ男。

夜雲 晴夜、だった。

驚くのも束の間。

信季が、マイクを取った。

『あー、どうも、東京武偵高の諸君。

俺の名は朝露 信季。

2年の朝露 静奈の兄で、教務科・SSR所属になった者だ。

よろしく頼む』

ガチャ、とマイクを置く信季。

レインは、彼に目を向けず静奈を探していた。

目視は出来なかったので、電磁ソナーで居場所を探ったが……どうやら問題は無いようだ。

平然としている。

というか、寧ろ若干呆れ気味なのは知っていたのではないだろうか？
アリアもジャンヌも白雪も、各々の武器に手を伸ばしているし。

彼女らの様子を観察している間に、晴夜がマイクを取った。

『あー、聞こえるか？』

俺は夜雲 晴夜。

2年の成瀬 レインハートの義兄だ。

所属は教務科・強襲科だ』

マイクを置いた晴夜は一礼し、信季と共に舞台袖に戻って行った。

「……………どうしてあいつらが……………」

「おいレイン！」

あれはどういう事だ！？」

後ろの席からキンジが小声で聞いてくるが、レインはさあ？ としか返せない。まあ、司法取引を済ませたのは分かっているが……………それより、一晩経ってキンジとの関係が修復されたのがありがたかった。

さっきの質問は、後で晴夜と信季を問い詰めればいい話だ。

『水投げ』のルールに則って。

レキも出ていたセレモニーを見終わったレインは、学園島内を歩いていた。

もちろん、信季と晴夜を探して。

『水投げ』とは、元々校長の母校で行われていた行事を武偵高チツクにアレンジしたものらしい。

本来、誰に水を掛けてもいいという風邪にさえ気をつければ、夏らしいと言えばらしい行事なのだが……………

武偵高チツクとは恐ろしいものだ。

何がどう変わったのかは知らないが……………『徒手なら誰が誰にケンカを吹っ掛けてもいい』と、なんとも物騒な行事になっていた。

要するに、1年生が下克上で2、3年に挑もうが、逆に上級生が生意気な下級生をいびろうが 生徒が教師に楯突こうが、オーケーなのだ。

事実、血気盛んな強襲科では、バカな生徒が『日頃の恨み』と称して蘭豹に挑んでいたが、皆ボコボコにされていた。

ケンカ祭の名に相応しく、道行く先でケンカが起こっているのを何事でもないように流しながら、レインは新任教務科の二人の元へ急ぐ。

、電磁ソナーでもう大体の場所は掴めたので、雷歩でダッシュして一気にそこまで辿り着いた。

そこは、学園島でも指折りの目立たないスポット、通称『看板裏』。学園島の端にあるそこは、文字通り外に向けた看板の裏にある。

そこで信季と晴夜は、一人の少女と向き合っていた。

信季の妹、静奈だ。

「どうかしたの、静奈？」

地面に降り立ち、静奈に声をかけると、静奈は「ひゃあっ!？」と肩を跳ね上げた。

「れ、レイン!？」

「なっ、『紫電の雷神』!？」

信季も同様に驚愕する中、レインの視線は建物の壁に凭れかかっていた晴夜に向いていた。

「……………なんのつもりです？」

晴夜兄上

「何がだ」

はぐらかされたことに、今更怒りも苛立ちもない。

「武偵高に入ってきたのは何故か、と聞いているんです。

信季先生も含めてね」

早くも先生であることに順応を始めるレインだったが、信季は「やめる気色悪い」とのことで、大変不本意ながら信季さん、と呼ぶことになった。

「で? どうしてなんです?」

改めて晴夜に聞き直すが、その質問には、またも割り込んできた信季が答えた。

「夜雲 アリス、それに他の組織対策だ。
お前たちと、その友人を鍛えるために来た」
確かに、とレインは半分納得する。

アリスや、膠着状態にあつた様々な組織に対抗するには、レインやアレックスはともかくキンジたちでは覚束ないのは事実だった。

「ふうん……成る程。」

「……ところで兄上、信季さん。知っていますか？」

今日が何の日か」

「……こういうことか？」

レインの質問に応えた晴夜は……いつの間にか、レインの背後に回っていた。

手刀が首に向けて横薙に振るわれるのに対し、レインは屈んでそれをかわす。

手を地について晴夜の腹に後ろ蹴りするが、晴夜はそれを掴み、看板に向けて投げた。

レインは空中で体勢を立て直すと看板に足を着けると同時、『影』の加速を作動、小爆発で勢いを増すとそのまま晴夜に肉薄した。

晴夜はレインにカウンターを狙い拳を構え、レインも必殺の威力を得た拳を振るう。

が

「「そこまで(だ)」「」

「ガボツ!？」

レインは突如眼前に現れた水面に着水し。

「む?」

晴夜は頭から水を被った。

「二人共、本気になってるって。頭冷やせ」

「そうだ。」

レイン、そもそもお前と兄上は和解したのでは無かったのか?」

朝露兄妹に諭され、レインと晴夜は、「?」と首を傾げた。

「いや……和解したけど?」

「今日は水投げだぞ？」

互いを高めるため、戦うのは当たり前だろう」

「いや、だからってあんなガチでバトらなくても……」

信季が呆れたように声をあげるので興が冷めたらしい晴夜は、ふあ、と欠伸をしていた。

「では、また今度稽古をお願いします、兄上」

「ああ……そのために来たからな」

その会話で、ああ、稽古のつもりだったのか、とようやく気づいた静奈であった。

おまけ。

そんなことがあった後、レインは用事があるとその場を離れ、晴夜も強襲科に顔を出してくる、と帰ってしまった。

なので、必然的に朝露兄妹が二人きりになる訳で。

「……静奈。」

学校では上手くやれてるか？

誰かに苛められてないか？

変な男に言い寄られていないか？」

「……大丈夫です」

そもそもあの二人の居る場所に静奈が連れてこられたのは、信季が強引に連れてきたから。

そして信季の目的が……

「超能力はちゃんと扱えてるか？

分からないところはないか？

分からないことがあったらなんでもお兄ちゃんに聞けよ、何でも教えてやるからっ！」

「……ありがとうございます」

静奈に近況報告をさせることだった。

……信季は、意外とシスコンの気があるのかも知れない。

まあ、本人曰くレインとのことは認めているらしいので、静奈が居なければ死んでしまう、というレベルではないだろう。
しかし……

「（面倒臭い……）」
正直、話が長い。

第124弾 意外な転入者（後書き）

不「成瀬君と朝露さんの兄弟らしいね、あの二人」

武「なんかすげえよな。」

やっぱ血筋つてあんのかねえ」

不「武偵高にもよく居るよね、サラブレッド」

第125弾 弟子入り

第125弾 弟子入り

今日、9月1日の始業式は、同時にケンカ祭こと水投げの日である。全く、こんな行事があることがバレたら、教育委員会に何と言われるか分かったものじゃない、そんな愚痴を頭の片隅に追いやりながら彼、遠山 キンジはアリアに会いに強襲科に向かっていた。

曰く、

「キンジっ！」

レインとレキの関係を調査するわよ！」

ということらしい。

まあ、彼女からしてみたら、もう一人のパートナーであるレインを取られるのは面白くないだろうが……

「恋仲なら、尚更放っておくべきだと思っただが……」

頭を掻きながら、キンジは裏道に入った。

というのも、表通りは武偵高の生徒たちのケンカフィーバー状態であるため、巻き込まれる可能性が高いので、わざわざ人通りの少ない道を選んだのだ。

そのまま、若干回り道でも強襲科に向かっていたキンジだったが……

…目の前に、急に何かが浮かんできた。

球状のそれは……シャボン玉、だ。

それが3つ、キンジの前で弾けた。

ベトベトした粘液が顔につき、眉根を寄せた。

「なんだこりゃ？」

辺りを見渡すと、右手に、シャボン玉を吹く少女を発見して、思わず声をあげそうになった。

「お前、今ので3回死んだネ」

その少女は……黒い髪を左右に結わいた、所謂ツインテールであり、小さな背に残念なボディライン、そして、幼い顔立ち。

自分のよく知る、あの少女とそっくりなのだ。

「日本の武偵高、大したことないネ。

お前も無防備過ぎヨ」

少女はシャボンの容器を後ろに放りなげ、瓢箪の中身をぐびぐびと飲み始めた。

酒じゃないだろうな、などと要らん心配をしながら、キンジは訝しげな視線を向けた。

「お前、誰だよ」

「私の名前、ココ言っネ」

その独特の訛りと、民俗衣装のような服から考えて、香港からの留学生の一人なのだろう。

なんでも、日本は結構治安がいいもんだから、もっと緊張感のある国で育った留学生とつるんで緊張感を得ろ、とそういうことらしい。はた迷惑この上ない制度だが、レインやアレックス、果てはアリアもこの留学生制度の賜者らしいので、あまり文句は言えまい。

「そうか。

俺は遠山 キンジだ」

相手に名乗らせておいて自分が名乗らないのも不躰だろう、とキンジも自らの名を名乗った。

が、彼女はそれを聞くと……

「アイヤ！ アイヤヤヤー！」

と、頭を押さえてお天道様を仰ぎ始めた。

キンジは自分の名前がどうかしたか、と言いたくなかったがやめておくことにする。

それよりも……漂ってきたアルコール臭が、彼女が飲酒していると教えてきた。

ので、キンジは未成年者の飲酒を注意しようと試みた。

まあ、香港出身なら結果は目に見えているが。

「おい、ガキが酒を飲むな」

「うい、ココ、昨日で14ネ！ ガキ違う！」

やっぱりな、とキンジは独りでにため息をついた。

こういう頑固なところも、似ている。

「しょうがないネ。

ちよつとお試りするヨ。

姫から離れたらイタイ目見るネ」

ココは酒の影響か、千鳥足になりながら前のめりになった。

「危」

キンジが慌ててココを支えようとするが、ココは……その勢いのまま側転を切り、飛びかかってきた！

「いつ!?!」

全くもつて、今日は厄日だと思う。

こんなリアクションまで

「（アリアと一緒によ!?!）」

襲いかかってくるココに対し、キンジは反射的に右手を突き出した。

ココは、キンジの出した右手に身体を、絡める

「なっ!?!」

更に、這うようにキンジの背中に回ると、その長いツインテールを首に巻きつけてきた。

加えて、両腕も首に絡ませてくる。

「キヒツ、何も出来ないか？」

何も出来ない奴は要らないネ」

要らない、とはどういうことか分からないが、まずい。

それだけは分かった。

本気で、殺りに来ている　！

キンジは慌ててベレッタに手を伸ばすが……ようやく、両腕がココの足に押さえつけられていることに気がついた。

近接拳銃戦（アルカカタ）が封じられたこの状況。

そんな中で　ドグッ！

普段とは別の血流を感じる。

いつもとは違うが……ヒステリアモードだ。

この発動条件から考えて、ヒステリア・アゴニザンテだろう。別名を死に際のヒステリアモードであるそれは、自分が如何に危険な状況にあるかを教えてくれる。

だが！

「（今回はかりは助かった……！）」

強襲科で習ったチヨーク対策……噛みつきか、壁にぶつけるのか。そのどちらが、彼女をより傷つけないか思案するが……気づいた。これは、裸締めなんて生やさしい技じゃない。

「ひひっ！ 双蛇頸頸崩！」

頸椎 首の骨を、外そうとしてきている……！

女子を気遣うあまり、対応が遅れた。

落ちる、そう覚悟したその時……銀色の一閃が、ココを掠めた。

「アイヤッ！」

途端、ココはキンジを解放し後ずさった。

ゴホ、ゴホとキンジが咳き込み、自身の目の前に立つ者、その顔を見ようと上を向いた。

「あ、アンタは……！」

「おいココ、あまり俺の教え子……に、なる男を苛めるなよ」

そういい、ニメートルはある日本刀を携えた男は、

「キヒツ、ハレヤ……！」

レインの兄、夜雲 晴夜だった。

「引け、ココ。」

怪我はしたくないだろう。

まだ続けるというなら……身の保障はしないぞ」

晴夜の威圧感に萎縮したのか、ココは冷や汗を浮かべ、後退を始めた。

「キンチ、お前0点ネ。」

追試ヨ。後でまた採点するネ。再見」

「さて！ お前は何者だ！」

キンジが、ようやく体勢を立て直して叫ぶと……ココは半分だけ振り返った。

「私は、『万武』^{マンブ}ココ。

『万能の武人』ネ」

そう言い残し、ココは角の先に消えてしまった。

「遠山。お前、女に甘すぎるぞ。

まあ、そいつの特性なのは仕方ないが……カナは女でも相手取れていた」

ココが消えた直後に、痛いところを突いてきた晴夜に、キンジはムツとした顔をつくる。

晴夜は元々、イ・ウーにいたのだ。それも、主戦派に。

警戒するのも領けるが……晴夜としては、これから弟子にする少年にこのような反応をされるのはあまり好ましくは無かった。

「まあいい……遠山、いや、キンジ。

お前にはこれから『遠山』の業を背負って貰う」

晴夜のそのセリフに、キンジは、はあ！？ と声を荒げた。

「なんで俺がそんなことしなくちゃいけないんだよ！

俺は来年の3月から、武偵高を離れるんだ！」

「お前が武偵かどうかなどどうでもいい。

お前は『遠山』キンジなのだ。

遠山侍としての役目を果たす義務がある」

身勝手な 少なくとも、キンジの中では ことを言う晴夜に苛立ちを覚えたキンジは、壁を叩いて怒りを露にした。

「いい加減にしるよ、夜雲 晴夜……！」

キンジから感じる……アゴニザンテとは違う血流に、晴夜は僅かに口角を上げた。

「それでいい。

キンジ。お前はまだHSSのことを表面的にしらん。
ノルマーレ、ベルセ、アゴニザンテだけではこの先の戦いは生き残
れんぞ」

「何を……」

キンジが晴夜に聞くよりも早く、晴夜はキンジに歩み寄る。

そして 手を、差しのべた。

「これからお前と緋弾には、大きな試練が訪れるだろう。

その時、道を選べるくらいの力はくれてやる。

そして、今 選べ。

安寧の先にある絶対の絶望か、困難の先にある微かな希望か」

キンジは、暫し目を閉じ……やがて、何かを決意したような瞳で、

晴夜を見上げた。

「別に、希望でも絶望でもどっちでもいいけどな」

キンジは、晴夜の手を取った。

「俺の道は、俺が決める」

晴夜は僅かに微笑んだ。

この瞬間、キンジが晴夜の弟子になることが決定した。

第125弾 弟子入り（後書き）

不「ありゃあ、遠山君も超次元行き確定かな？」

武「嘘だろキンジ！」

お前、それ以上強くなってどうするつもりだ！」

作者「いやあ、キンジにも強くなって貰ってオリジナル編で活躍して貰うつもりなんだよ」

二人「（駄）作者さん!？」

作「武藤、お前の出番はもう無い」

武「嘘つす！ さーせん！」

作「まあ、原作でも出番少ないけど（ププツ）」

武「……（ビキツ）」

作「ちよ、ま、お前、一応自分年下」

バキバキ ギャアアアア

不「感想お待ちしてます。

次回もお楽しみに、ね」

第126弾 一触即発

第126弾 一触即発

キンジは晴夜の弟子になった訳だが、今日は用事……アリアと一緒にレインとレキの尾行、をする予定があったため、訓練は断念。晴夜も強襲科に行くということで、一緒に歩いていった。

途中、何人かの女子が

「たらしが、今度は新任のイケメン教務科まで……！」
なんて呟いていたのになんざりしながら、晴夜をチラ見する。

成る程、レインと血が半分繋がっているだけあり、随分整った顔立ちをしている。

オッドアイである金と銀の瞳からは全く考えられないが、純日本人らしい。

「おいキンジ。

ジロジロ見るな」

「……見てねえよ」

内心焦りながらもそう返し、キンジは意識を別の方に向けすることにしました。

アリアは強襲科に 強襲科？

強襲科に顔を出したら、またいつかのような反応をされるかもしれないじゃないか。

……結局、キンジのモチベーションは沈んでいくばかりだった。

「遅い！」

アリア様から浴びせられた第一声。

「仕方ないだろ、水投げしてたから回り道してきたんだ。

一回襲われたしな」

負けただけだな、とは言つまい。

あの娘　ココは自身を14、つまり中学生だと言っていた。年下に負けることは『下負け』と呼ばれ、武偵高内では極めて不名誉とされることだ。

加えて、徒手戦であり、最悪なのが相手は女子であった点だ。

徒手戦は筋力なんかがものを言う戦闘。

それに、男よりも筋力の低い女に負けた。しかも年下。

不名誉に不名誉が重なって、更にその上に不名誉……と、累乗的に不名誉だらけ。

それをアリアに聞かれるのは、中々どうして好ましくないのだ。

「ふーん、まあいいわ。

私もちよつと絡まれて遅れたし……」

聞いたところによれば、アリアもほんの少し時間よりも遅めに来ていたらしい。

やはり水投げは物騒な行事だ。

キンジはほう、とため息をつくと、愚痴り始めたアリアに適当に相槌を打って、自身に被害が来ないよう祈り始めた。

「あの、レキ……どこに行くの？」

晴夜と信季との話の後、レキと合流したレインは無言で歩き出したレキに、訝しげな視線を送っていた。

道行く先でケンカケンカケンカ、流れ弾が飛んでくるのでレキを磁力で守りながら進む。

「……強襲科棟です」

レキの返答からは……嫌な予感しかしない。

しかし、何をする気が聞くのも何だか面倒なことになりそうな気がする。

なので、聞くかどうかちよつとだけ悩んで……大人しくついていくか、という結論に至った。

銃弾が飛んでくるが、磁力の反発によって明後日の方向に飛んでいくため、対した障害にはならない。

つまりはキンジのように回り道をする必要もない訳だ。

よって……要する時間が短かったことが災いしてか、キンジが強襲科棟に入ったすぐ後に、彼らも強襲科棟に入れた。

強化防弾ガラスで出来たドアを開けると、やはり床には空薬莖が落ちており、足の踏み場もない状態だった。

レインは呆れ顔で磁力を操作、空薬莖を一カ所に固めた。

「わお、流石だね成瀬君」

その様子を見ていたらしい男……不知火が、感嘆の声をあげて拍手してきた。

「ははっ、お褒めに預かり光栄だよ、不知火」

「今日はどうしたんだい？」

軽く挨拶を交わしたところでそう切り出した不知火は、レインの隣に立っているレキを見て……大抵の人間が見ても分からない程度に、口角を吊り上げた。

「成る程成る程。デートかい？」

武偵高デート……珍しいね、成瀬君、レキさん」

そんなデートはお断りだ、と言いたかったがレキの手前そんなことは言えまい。代わりにため息を返しておく。

「俺も詳しくは分からないんだけど……レキがここに来たいってね」

「レキさんが？ ここに見るものなんて、遠山君と神崎さんくらいしかないと思うけど……」

確かに強襲科に何も無いのは認めるけれども、それはそれでどうなんだ、と思う。が、不知火がこう言うんだからあながち間違いないだろう。

事実、現在強襲科ではたまに来るようになったキンジと、彼についても話しているエリアは強襲科名物となっているらしい（理子談）。

それはともかく。

不知火の言葉に、レキはこくり、と首肯した。

話が見えない、と言うような二人にレキは、今度は動作でなく言葉で自らの意思を示す。

「ええ。私たちは、キンジさんとアリアさんに会いに来たのです」

「……そうなの？」

レインが間の抜けた表情でそう聞き返すのに対し……不知火は、「これは面白くなってきたね」という感じに、微笑むのだった。

不知火に案内され、キンジとアリアが話込んでいる強襲科体育館に辿り着いた。

扉を開けて、キンジとアリアを視界の端に見つけると、レキが彼らに歩み寄った。

その後ろに、面目ない、という感じにレインが続く。

「あ！ レキ！」

あんだ、聞いたわよ！ 校内ネットでレインをパートナーにしたって！」

アリアはいきなり凄い剣幕で、レキにそう言ってきた。

後ろのキンジは……わたわたしている。通常モードのようだ。

「レインさんは私との勝負に負けました。ハンデは貰いましたが」

「嘘よ！ レインが簡単に負ける訳ないわ！」

と、自分の名前が出たレインは、アリアがこちらを向くのを感じて肩を跳ね上げた。

「レインアンタ！」

黙ってないで何とか言いなさいよ！」

アリアの気迫に押し負け、レインは両手をあげながら、

「い、いや、勝負に負けて言うこと聞かざるを得なくて、パートナーにさせられちゃいました……？」

とアリアの反応を窺いながら、最後の方疑問系になりながらも何とか答えた。

「あ、アンタねえ！」

「アンタのパートナーは私でしょ！」

「今は私です」

「アリアとレインの会話に、口を挟むような形でレキが補足した。それは寧ろ、火に油を注ぐ行為だと思う。」

「~~~~~！」

「アンタは黙って、レインを返しなさい！」

「アリアが怒りを無茶苦茶にぶつけようとするが、捌け口が見つからないらしく頭の上でブンブン拳を振っている。」

「アリア、落ち着け……」

「落ち着いていられる訳ないでしょっ!？」

「見かねたキンジの制止も意に介さず、アリアはついに両手をポケットに突っ込んだ。」

「言わずとも知れた Sランク鬼武偵、双剣双銃のアリアの十八番、コルト・ガバメントでの二丁拳銃だ。」

「だが、辺りから悲鳴が上がったりはしない。」

「こんな光景は、強襲科 卒業率97.3%、つまり在校中約3%は死亡する、通称『明日無き学科』では日常茶飯事。」

「今だって、近接拳銃戦の練習をしている者もいる。」

「だが、C装備の着用も無しに実弾を使った訓練はナンセンス。法の外だ。」

「それに加えて、ただ立ち尽くしているだけのレキに銃口が向けられたのを見かねてか」

「レインは、アリアにブロウの銃口を向けた。」

「な」

「アリアが絶句する間に、キンジはレインに銃を向ける。」

「が、その彼には、レキがドラグノフを向けていた。」

「つまりは、アリアがレキに、レキはキンジに、キンジはレインに、そしてレインはアリアに 8の字のように、銃口を向けあっているのだ。」

「~~~~~レイン~~~~~アンタ~~~~~」

アリアが、ワナワナと震えているのが分かる。

だけど、レインとしても銃剣も構えていないレキにアリアがガバメントを向けたのを、黙って見ている気にもなれなかった。

……が、この判断が結構面倒な結果を生むことになるのと知るのは、この直後。

「……よ」

「……はい？」

アリアがぼつり、と呟いたその一言が聞き取れず……否、聞き取りたく無かったので、もう一度聞き返してみる。

「だから……決闘よ！」

アンタとレキ、キンジと私で！」

ビシィッ！ と人差し指を突きつけられたレインが、呆れ半分に断ろうとする。しかし。

「いいでしょう」

レキに先手を打たれた。

相も変わらず無表情……今は無愛想と言いたい、なレキ。

彼女に制止をかけても、もう無駄なんだろうなと僅かにアリアの方を見た。

「じゃあ今から、闘技場で戦るわよ！」

もうすっかりヤル気なアリアさんが視界に映り……もうレインは、流れに身を任せることにした。

かくして。

レイン&レキ対キンジ&アリアの、東京武偵高トップクラスの異色対決が行われることとなった。

「……どうしてこうなった」

とはキンジの言だ。

第126弾 一触即発（後書き）

不「大変な事態になったね」

武「あのモチ男共があ……リア充轢くぞこらあ」

不「武藤君もいい感じに壊れて来たね。

次回は成瀬君とレキさん対遠山君と神崎さんだね。

皆さんはどちらが勝つと思いますか？

僕は……ふふ、どっちでしょう？」

武「俺が全員轢いてやる」

第127弾 レイン&レキVSキンジ&アリア

第127弾 レイン&レキVSキンジ&アリア

強襲科、闘技場。

そこでは、アリアの宣戦布告の現場に居合わせた強襲科の面々と、それを聞きつけた情報科や探偵科、諜報科の面子も顔を出している。当然、情報科の姉妹、ミチルと綾瀬、加えて諜報科のエース、悠も来ているようだ。

今日は水投げの日だが、そこは流石東京武偵高トップクラス四人。模擬戦の届け出はあっさり受理された。

今レインは、東と西の控え室の内、西側にいる。

「……レインさん、作戦はどうしますか？」

「俺が前で二人を封じるから、レキは背後から狙っててくれ」

「分かりました」

反論も何も無しに、レキはドラグノフの整備をしている。反論が無いのは当たり前だが。

何故ならレインが提示した作戦は、一番有効な手段だからだ。

レインの実力があればSランク二人でも相手取れる。それに、レキは近接格闘に向いていない。

故の、前衛にレイン、後衛にレキの布陣だ。

ふとレキを見ると、銃剣の整備をしていない。自分への信頼の証だろうな、と多少気恥ずかしさを覚える。

レインは水月、『影』、ブロウ、ダガーの整備を終え、C装備に身を包んだ。

アリアとカナの模擬戦と違い、今回は教務科の観戦もある。

その上、様々な科の生徒が戦うため、前回のようには蘭豹の一存で制服で戦闘、なんてことはなくなったようだ。

「ところでレキ、どうしてアリアとの勝負を受けたんだ？」
「……時期に分かります」

耳をつんざく声援……もとい大歓声。

Sランク同士の戦闘なんて珍しいから、という理由だけでもないだろう。

Sランク以上の実力を持つレインの戦闘だ。

世界的にも注目であるこの試合、少なくとも超能力者に見ておいて損は無い。

事実、レインの知らないところではあるが、白雪とジャンヌはしっかり防電カメラを回している。

先に出ていた、同じくC装備に身を固めたキンジとアリアに、待たせて済まないと軽く会釈する。

「はあ……気が進まないね、レインと戦うなんて」

そう言ったキンジからは、ヒステリアモードの気配を感じる。

あっちの更衣室で何かがあったらしい。流石はSランクフラグ建築士である。

とまあ、そんな冗談は抜きにして……レインは気を引き締めた。

アリアとキンジのコンビネーションは、流石の一言に尽きる。

事実、偶然に偶然が重なったとはいえ、アレックスを下したのだ。

まあ、今やれば100%アレックスが勝つが。

レインはレキより前に出て、二人から守るように立ち塞がった。

「……そういえば、お前とやり合うのは初めてだね、キンジ」

「ああ……全力で行かせて貰う」

場の緊張感が高まる。

先に動いたのは、レイン。

だが、その動きはキンジとアリアの予想から大きく逸脱したものだ。つた。

レインはレキの方に、振り返った。

慌ててキンジはベレッタ、アリアはガバメントを構えるが、突然の

事態にどう対処していいか分からない。

レインは愛銃ブロウをフルオートにし、レキの目の前の地面へ、横
一列に銃弾をばら蒔いた。

辺りが騒然とする中……レインはくるり、とキンジとアリアに向き
直る。

「あの線より先には行かない方がいいよ。

結界を張ってあるから」

そう、今のは簡易式の結界の一種。

レキ以外の者が通ろうとすれば、地面から迸る雷によって感電する。

「残念だったわね、私たちは防電装備よ」

「そうか……ちゃんと俺の対策を立てたんだね、感心感心」

レインは掛け合いを終えると、身体から紫の雷を放ち始めた。雷神
化だ。

「さあ……始めよう」

レインの言葉と同時に、アリアがレインに飛びかかった。

ガバメント二丁を携え、三点バースト×2で計6発の銃弾をレイン
に放つ。

レインはそれを全弾、磁力でアリアに撃ち返した。

「俺との戦闘で銀弾を使わないなんて、あり得ないよ」

アリアは飛び退き、6発の銃弾をかわした。

銃が効かない、それはやはり超能力者でないアリアには驚異と呼べ
る力。

続いてキンジがスクラマ・サクスとバタフライ・ナイフを構えなが
ら肉薄してきた。

レインは雷歩で上昇し、ブロウの三点バーストでキンジに頭上から
銃弾を放った。

頭上からの攻撃は避けづらいことこの上無い。

キンジはヒステリアモードの反射神経でなんとか二発を『銃弾斬り』
で防ぐが、一発を左肩に食らった。

そのまま、追撃を掛けるべくキンジに上から接近する。

アリアはガバメントでレインを狙うが、磁力で防がれることは分かっていたので、ガバメントを仕舞い寸詰まりの日本刀を双剣で持ち、レインに迫る。

キンジはバック転を切りレインの追撃を避け、代わるようにアリアがレインに日本刀を振りかぶった。

しかし、レインはアリアに見向きもせずキンジの方に向かい、ダガー二本を構えた。

アリアは慌ててレインを追おうとするが、突如右膝の辺りに鈍痛が走り、膝をついた。

「レキ……！」

C装備であることが災いした。

普段の防弾制服であったなら、防弾装備以外の場所への銃撃は禁止であるが、C装備は全身を防弾装備で覆っている。

続けて、レキの放った新たな銃弾が、アリアの腹に突き刺さった。

アリアが機動力を失っている間に、レインはキンジの方へ向かう。

アリアが立ち上がってレキに迫っても、あの限界がある限りは安全であるため、レインは振り返らずキンジに肉薄した。

ダガーに雷刃を掛け、キンジに右手のダガーを振るう。

それをバタフライ・ナイフで受けると、赤い火花を散らしながらキンジはスクラマ・サクスで打突する。

レインはそれを下から左のダガーを振り上げて弾き、影の中指のギミックを発動した。

影から一発銃弾が吐き出される。と言っても、拳銃のように亜音速で、という訳ではなく、本当に吐き出されただけ。

名付けるなら、『^{エクスハウスト}排出』(命名平賀)。

本来なら武偵弾を込めるそのギミックは、とにかく銃弾を吐き出すのみ。

しかし、レインが磁力を放つと、まるで空中の見えない銃から発射されたように、キンジの脇腹に向かった。

「ぐっ!?!」

死角からの一撃に、キンジは顔をしかめた。

その隙を逃さず、レインは掌底をキンジの腹に叩き込み、ダガーを放るとブロウを抜いて、彼の腹に銃弾を叩き込んだ。

「キンジ！」

どうやら多少回復したらしいアリアは立ち上がるうとする。が、レキの銃弾はその重心の乗っている側の足を容赦なく捉え、立ち上がることを許さない。

「アリア！ くそっ！」

キンジは今、ヒステリアモードだ。女に攻撃するより、男であるレインを攻撃するのを優先する。

必然的にレキ対アリア、レイン対キンジの形になる。

キンジはレインにスクラマ・サクスを袈裟懸けに振るい、バタフライ・ナイフで腹を狙う。

レインはスクラマ・サクスを水月で受け止め、ナイフを持ったキンジの腕を掴んだ。

「！（またあの銃弾が　！）」

キンジは先の『排出』と電磁力によるコンボによって受けたダメージを思い出し、スクラマ・サクスを押しきると、身体を右向きに回して、遠心力を利用してレインを投げ飛ばした。

「やるね！」

レインは雷歩で空中に静止、ブロウの銃弾を三点バーストで放った。マズルフラッシュが三回瞬き、三発の銃弾がキンジに向かっていく。キンジはそれを全て、『銃弾斬り』で防いだ。

「お前はどこの石川だよ……」

「その石川を圧倒するお前こそどうなんだ？」

呆れ気味のレインに対し、キンジが皮肉気に返してくる。

「そうさね……俺は俺自身だよ。」

偉人だかなんだかに例えられるつもりはない」

レインは僅かに笑みを見せる。

そして目を閉じて、集中し始めた。

「じゃあ……そろそろ見せるよ、キンジ。

お前がこれから到達し、乗り越えなくちゃならない境地。

遠山の剣術、名を」

レインは水月の刃を上に向け、肩上に構えた。

水月の刀身が、紫の輝きを見せた。

「『天桜流』」

キンジがレインと戦闘する最中、アリアはレキの方を向いていた。今度は完全に回復するまで待ち、今ようやく立ち上がった。

「動ければこっちのものだわ！ 覚悟しなさい、レキ！」

アリアは言うと同時に、ツインテールを揺らしながら駆けた。

レキが銃口を自身に向けるよりも早く、軽快なステップで移動する。標準を着けさせないまま、レキに肉薄した。

「終わりよ！」

レインは今、キンジと戦っている。磁力の心配は無用、そう考えたアリアは得意のガバメント二丁を抜き、フルオートでレキに乱射した。

計9発の銃弾が、レキに迫る。

しかし、その銃弾がレキに届くことは無かった。

レインが張った結界、その線を銃弾が越えようとした直後。

銃弾が、直角に曲がった。

「!？」

地に吸い寄せられたように下へ曲がった銃弾は、地面に穴を穿つと……紫の光を放ち始めた。

そして バリィ！

雷の弾ける音と共に、アリアの防電装備に紫の雷が放たれた。

反射的に、両手で顔を隠す。が、それは明らかな失敗だった。

アリアが腕の隙間から見たレキは、既にドラグノフの標準を自身に向けている。

「私は、一発の銃弾

銃弾は人の心を持たない、故に何も考えない」

レキの、射撃の際に唱える言葉が紡がれ

「ただ目標に向かって飛ぶだけ」

タアン

銃声と同時、アリアの膝が撃ち抜かれた。

「っ、ああっ！」

アリアは今度こそ、立ち上がれなくなった。

そして、レキは　アリアの側頭部に、狙いを定めた。

「天……桜……流……？」

ゆっくりと　キンジがその名を紡ぐ。

「そう、天を舞う桜の剣技、『天桜流』……俺は師匠に教わった」

レインの構えは、腰を落として重心を低く保ち、肩上に刀身を上に向けた水月を持つ、という形。

「キンジ。お前はこの剣の局地に到達しなくてはならない。

これからの敵に勝つのなら、ね」

「……何なんだよ！」

これからの敵とか、遠山の剣術とか……！」

キンジが、自身の理解する領分を越えた目の前の事態に喚く。が、レインは依然、その構えを解かない。寧ろその眼光を強めた。

「今は分からなくて当然だよ。俺だって詳しいことは知らない」

「だったら」

「だけど」

キンジの言葉を遮ったレインの、水月を持つ手に力が加わった。

「お前にはこの剣が必要だ。

『天桜流』を真に使いこなせるのは、遠山の血を引く者のみ」

レインはちら、とレキとアリアの方を盗み見……深く息を吸った。

「時間が無い。

行くよ、天桜流壱式　『舞桜』」

レインの言葉がキンジに届いた直後、レインがキンジに肉薄してき
た。

キンジはそれに対しスクラマ・サクスを一閃する。

しかし……スクラマ・サクスと斬り結んだはずの水月は、

「!?」

その実体が無かったかのように、スクラマ・サクスをすり抜けた。

キンジの手には、水月と斬り結んだ感触も無い。

完全に当たるタイミングであったにも関わらず、だ。

インパクトの瞬間、力を入れたため、キンジには腕を振り戻す余裕
は無い。

レインは先ほどスクラマ・サクスをすり抜けた水月で、キンジの腹
を一閃。

「が……!?」

キンジは肺から空気を吐き出し、その場に倒れ伏した。

そこで、ブーーーーー!

試合終了の合図が響いた。

自らの勝利を告げるブザーを聞き、レインは水月を鞘に納めた。

第127弾 レイン&レキVSキンジ&アリア（後書き）

武「レインとレキ強すぎだろ……Sランク二人でも歯が立たないってことは、二人で二個中隊以上の実力ってこつたる？」

不「加えて成瀬君は手加減してたし、レキさんは支援だけだったからね」

武「それにしても、『天桜流』って何なんだ？」

不「さあ？」

第128弾 舞桜（前書き）

レインは一応遠山流剣技の免許皆伝ですが、天桜流は秘剣、裏の剣技でありまだ完全に修得するには至ってません。

基礎と、少しの奥義を押さえた程度です。

多分遠山流が出てくることはないと思います（汗

第128弾 舞桜

第128弾 舞桜

キンジとアリアとの模擬戦も終了し、闘技場は勝者 レインとレキへの称賛と声援が木霊していた。歓声の中、レキはレインを連れてその場を去ろうとする。

「あつ!? ちょ、ちよつと待ちなさい、レキ!」

それを見たアリアが制止をかけるが、レキは振り向かない。

そのまま去ろうとするレキの後ろを歩いていたレインは……裾を捕まれた。

「……キンジ」

「……後で話がある。」

部屋でいい」

キンジの顔は複雑で、それがどのような感情を孕んでいるのかはレインには分からなかった。

なので、

「分かったよ」

と、二つ返事で了解する。

キンジは手を離すと、アリアに肩を貸して、反対の控え室に歩き出した。

互いに振り返らないアリアとレキは、まるで道を違えたかのように互いに逆の道を進んでいた。

それに心を痛めながら、レインはその場を後にした。

天桜流壱式、『舞桜』。

その名は、自らの刀が相手の剣をかわす様が、まるで宙を舞う桜の花弁のようであることから由来する。

まるで、刀が刀をすり抜けたかのように錯覚する剣捌き。

この業の正体は、相手のインパクトの瞬間、刀を引き、更にギリギリで刀を寝かせることで相手の刀を振り抜かせる、というものだ。そのまま、刀を振り抜いた相手の隙を突いて攻撃するもよし、武器を叩き落とすもよし。

攻撃の際にしか使えない（攻撃されている時にやったら斬られる）のが珠に傷だが、上手くいけば一撃で相手を仕留められる、必殺の剣だ。

「……とまあ、こんなところかな」

とところ変わって、レインとキンジの部屋。

先ほどの剣技の説明を所望したキンジの問いに、レインが返答しているところだった。

「……んなの、俺聞いたことも無いんだが」

「そりゃあ、こいつを使いこなすのは遠山の人間でも難しいらしいからね。」

今の世代だとキンジの親父さん、『静かなる鬼』^{オルコ}と呼ばれた遠山金叉さん、その息子でありキンジの兄、そして遠山家史上最強と謳われる師匠くらいのものだよ」

まるで自分の話を聞かせるかのように、レインは胸を張っていた。彼は師匠である金一を敬愛しているらしいので、当然と言えば当然か。

だが……今の話にある語弊を見つけ、キンジは頭に疑問符を浮かべた。

「お前はどんなんだよ、レイン？」

そう、先の説明に、模擬戦でその天桜流を使い、キンジを打倒したレインが入っていないのだ。

「言っただろう？」

天桜流を本当に使いこなせるのは、遠山家の人間だけだ、って」

レインの言葉の真意は分からなかったようだが……キンジは、とりあえず納得しておくことにした。度重なる訳の分からない事態に、

もう慣れ始めてきたらしい。来年から一般高に通うつもりでキンジにとっては、嬉しくもなんともないことだが。

「キンジには師が着くことになってるんだけど」

「その話ならもうした」

「うわっ!？」

キンジが驚き、ひっくり返ってしまった。突然、自分の背後から声がしたのだ。

その声の主は、右腕に月影を携えた晴夜だった。

「兄上。流石、仕事が早いですね」

「偶々だ。そいつがガキに絡まれていたのを助けて、ついでに弟子入りさせた」

簡潔にあったことを述べる晴夜に苦い顔をするキンジは、悪態をつきながらソファに座り直した。

「で、お前の兄貴も天桜流を使えるってのか？」

「ああ、兄上は主戦派だったから師匠直伝な訳じゃないが、俺の型を見て覚えて貰った」

それで大丈夫なのか、と不安がるキンジだったが、その心配は杞憂と言えよう。

晴夜は、剣に関して日本で右に出る家無し、と言わしめる夜雲家、その中でも群を抜く天才。

夜雲家に勘当されていたものの、先日の逮捕から一転、夜雲家に復帰し、底辺から次期当主 候補、ではなく既に確定している

にまで上り詰めた男だ。

遠山の剣は、もちろん修得するのは困難である。

だが、晴夜の才能に加え、他の追随を許さない努力から成り立っている彼の感性は、ものの一週間で天桜流の基礎を全て押さえた程度である。

追記すると、レインが天桜流の基礎を修得するには、三月と十日、時間が掛かった。

恐るべき剣への執着だ。

「俺は明日からじつくり訓練しようと思ったが……キンジ、お前今日二敗目だろう」

ビクツ、とキンジの肩が上がった。

そう、彼は今日レインとレキのペアに加え、ココという香港の女子中学生にも負けている。

下負けと呼ばれる不名誉なそれをレインに聞かれるのは、あまり心地好いものでもない。

キンジは慌てて晴夜の口を塞ごうと手を伸ばす。

が、その腕は晴夜に掴まれ、巴投げの要領でソファに叩きつけられた。

ソファに叩きつけたのは、下の階に音が響かないよう、という心遣いからなるもの。

ちなみに、下の階の住人、探偵科三年Cランクの住吉と同上Dランクの影山は不在であったことは、彼らの知る由もない。

「キンジ……お前、ヒステリアモード無しじゃ弱すぎるよ？」

「レイン……お前から見たらそうかも知れないが、キンジの実力は本来そこまで悪くない」

言つと晴夜は、どこからかホワイトボードを取りだし、何かを書き込み始めた。概要はこうだ。

強襲科ではヒステリアモードの影響でSランクを貰っていたキンジだが、現在探偵科ではEランク。

しかし、探偵科の成績が最低のEなのは、期末試験をすっぽかしたことに起因する。

通常状態のキンジでも、まともに試験を受ければ探偵科でも、Cランクは固いのだ。

という訳で、晴夜がホワイトボードに書き込んでいたのはキンジのステータス……探偵科と強襲科に限りだが、だった。

『ヒステリアモード時……探偵科S、強襲科S+。』

通常時……探偵科C-、強襲科C+』

と書いてある。

＋、－はそのランクの中でもより高ければ＋、より低ければ－、という符号である、というのはボードの端に書かれていたことだ。

「こつという訳だが、キンジ。まずは基礎力の底上げだ。」

ヒステリアモード無しで、ここをAランクに持っていく。

ちなみに、レインは既にクリアしてるからな」

キュ、と通常キンジの強襲科Cランクに×をし、Aランクと書き込む。

レインは度重なる戦闘で、既に雷と水月無しの通常戦闘でもAランク並の戦闘は可能となっていた（水月を持つと通常でS）。

余談だが、基礎力の向上は必須項目である。

いかにヒステリアモードが優れていようと、元が弱ければその力は半減する。

つまり、通常のキンジが強くなればなる程、ヒスったキンジも強くなるのだ。

「まあ、剣術に加えてまだまだやることが山積みだ。」

……よし、今から特訓だ」

晴夜はよし、やるか！ という感じにガッツポーズを取るが、当のキンジは呆然としている。

「さて……まずはランニング30キ」

「誰か助けて！」

俺、死ぬ！ 殺される！」

何か聞き取ったらしいキンジがバタバタと暴れていたが、晴夜の手刀でノックアウト。

そのまま引きずられて部屋を後にした。

「兄上……30キ口はフルマラソンの約1/4ですよ……」

レインの、キンジの擁護とも取れるその発言は、既に部屋を出た晴夜には届かなかった。

「ふう……仕方ない、俺はそろそろ寝るか」

と、自室に戻ろうと立ち上がったが……その瞬間。

「私から離れないで下さい、と言ったはずですよ」

「……ごめんなさい」

いつの間にか入って来ていたレキが、アリアのガバメントよろしくドラグノフを構えていたのだった。

「……お仕置き、です」

「タアン！」

「ちょ、危なっ!?!」

……最近、レキに感情が芽生えてきた気がするレインであった。

第128弾 舞桜（後書き）

不「へえ、優雅な剣術なんだね、天桜流っていうのは」

武「桜だもんな」

不「遠山君に似合うね、桜」

第129弾 それぞれの特訓

第129弾 それぞれの特訓

超能力捜査研究科……俗称をSSR、S研と呼ばれるその一室。内壁に強力な呪避けが施された特別訓練教室は、床一面が霜に覆われていた。

「はあああああ！」

西洋剣・デュランダルを両手で振るったジャン又は、相手にかわされること一旦距離を置き、正面にデュランダルを構えた。

「甘いな……お前と俺ではお前の方が相性がいいのだから、もっと攻めるべきだ」

片手を振りながら言うのは、教務科に入ってきた信季だった。新しい二人の教務科は、担当を二つに分けたらしい。

といっても、それほど小難しい分け方をしている訳ではない。

要は、超能力を使えるか使えないか。

そのため、ジャン又と、今は室外にいる白雪、そして彼の妹である静奈は信季の修業を受けることとなった。

いつかの戦闘で信季の実力を把握している静奈彼女らは、彼の實力に不満を言ったりはしなかった。

が、白雪とジャン又からしてみれば、やはり静奈を拐った張本人である信季に、好感が持てないのもまた事実。覆し難い第一印象だった。

しかし、当の本人である信季はと言えば、今更過去のことを気にしても仕方ない、これからの自分を見てもらえばいいんだ、とやたら前向きである。

そして、なんとか本来の目的 彼の愛しの妹に危害が加わらぬよう、周りの人間に強くなって貰う ための一歩、彼女らの訓練

にかこつけたのだった。

「『ラ・ピュセルの枷』……！」

ジャンヌは小剣を信季の足下に投擲、凍らせて動きを封じようとする。

が、信季は一步後退しただけで、ラ・ピュセルの枷の有効範囲から逃れた。

「小剣を差した位置から広がるから、範囲が特定されやすいのが欠点だよな」

「……！」

信季は片手を振ると、空気中の水分を凝結させ水流を形成し、ジャンヌに向けて発射。

レーザーのように向かってきたそれを凍らせ、デュランダルで叩き割ると、ジャンヌは信季に肉薄する。

水では氷を防げない、属性の圧倒的有利からの正面突破だ。

対す信季は、超能力を使う訳でもなく、背中に右手を回した。背から取り出したのは、鞭。

「そんなもので！」

ジャンヌは容赦無くデュランダルを振り下ろした。

断ち切れぬものなどない、そう自負するデュランダルの一閃。それは容易に鞭を両断し、信季に一撃を与える、はずだった。

信季はピン、と張った鞭で、デュランダルを受け止めた。

「な……！？」

「生憎、特別製でな」

信季はデュランダルを左手で掴み、ジャンヌごと投げ飛ばした。

なんとか受け身を取り片手を床につけるジャンヌは、氷で小剣を形成、20はあるうそれらを、全て信季に投げつけた。

信季は、鞭を握った手を顔の前で、肩を掴むように回すと、まず一閃。

約半数の小剣が吹き飛ぶ。

そのまま勢いを殺さず、二閃、三閃。

全ての小剣を吹き飛ばすと、今度は自身がジャンヌに接近した。

鞭を振るい、デュランダルに巻きつけ引っ張る。しかし、ジャンヌはそれを放そうとせず、逆に引っ張ってきた。

信季は力を抜き、寧ろジャンヌの方に力を向ける。自然、ジャンヌに引っ張られる形で信季は懐に入った。

ジャンヌの細い首に向けて、左手をつき出す。

半身になりなんとか避けるジャンヌだったが、信季の腕から刃が生えてきた。

「っ!？」

それを首筋にあてがい、信季はふう、とため息をついた。

「俺の勝ちだな。」

驚いたぞ、1ヶ月前とはまるで別人だ」

言いながら信季は剣を引き、腕の、中途半端に破れた皮膚を破りさつた。

露になったのは、金属光沢の見える、機械の腕。

「義手が……」

「ああ。武装が内蔵してある」

カチ、という音の後、刃が義手の中に引っ込んだ。

「今のお前のGは推定15、ってところか。よくまあ、自力でそこまで鍛練したもんだ」

義手を馴らすように振る信季は、指を一本づつ折り曲げていた。

そして剣を出し、剣を仕舞う。

「だが、それじゃあ足りん。」

少なくとも、G20は欲しいところだ」

ちなみに、追記するなら信季のGは27、アレックスのGはレインと同じく30オーバーである。

G30オーバーは、世界的に基準が定められているG、その最大基準を大きく上回ってしまった、所謂測定不能者に与えられる称号だ。

「G20なんて世界に何人だと思っっている……」

「それくらいでなければ、成瀬にはついていけないぞ?」

「ぐ……！」

痛いところを突かれ、ジャン又は押し黙ってしまう。

そんな彼女に退室を促し、入れ替わり様に、白雪が入ってくる。

「よし、次は星伽だな。」

封じ布を解け」

「はい！」

予め星伽側に許可は貰っておいたため、白雪は躊躇うこと無く封じ布を解いた。

瞬間、緋色の焰が床の焰を溶かし、構えたイロカネアヤメに焰が灯る。

「お前は俺と相性が悪いが……臆するなよ」

「……勿論、です」

信季なにやり、と笑うと、鞭を右手に構え、左手の義手から刃を出した。

「じゃあ、始めるぞ……！ 朝露 信季の推定G測定試験、開始だ！」

「行きます！」

白雪の刀から放たれた焰を見て、信季は僅かに口角を上げるのだった。

「ふんふんふん」

第2女子寮。そこには人が居れば恐らく耳を塞ぐか、早々にその場を立ち去るであろう、酷く外れた鼻歌が響いていた。

そこにいたのは、そしてその鼻歌を歌っていたのはレインの徒友である有明 悠であった。

彼は今、レインの部屋へ向かう途中なのだ。片手には焼いたクツキーが入っている。

最近、お菓子作りというなんと女の子らしい趣味に凝っている彼女を見ると、自身が転装生であることを認識しているか心配になっ

てくる。

「ふふ〜んふんふ〜ん」

……いや、それ以前に彼女の音痴っぷりはどうにかならないものだろうか。

「……あれ？」

その彼女、悠は何か気づいたように、手摺から身体を乗り出し、それを見下ろす。そこは……

「つぎやああああ誰か！ 誰かああああっ！」

「ガウガウガウガウ！」

「ほらほら、走れ」

「もう走ってるわ！」

……自らの戦兄であるレイン、その友人である遠山 キンジが、今朝の朝礼で挨拶をしていた新任の教務科、レインの兄である晴夜と、明らかに凶暴そうな闘犬に追いかけられているところだった。

「な、何をしてるんでしょ……？」

何故だかそれが物凄く気になった悠は、諜報科Sランクの技量で足音を消し、こっそりと後をつけることにした。

手摺から飛び降り、猫のように着地、そのままキンジたちを追い始めた。

「ぜえ、ぜえ……も、もう走れないって」

「ふん、情けない……」

へたりこむキンジに、汗一つかいていない晴夜。明らかに体力差だが、あれだけ走れたキンジもキンジだ。

影から見ていた悠は、できるだけ息を殺していたが、肺が酸素を欲していたため、完全に気配を絶つのは不可能であった。

なので、なるべく距離を取っていた悠だったが……

「ふむ、お前は中々だな、有明」

「っ！？」

晴夜は悠の方を見向きもせず、彼女を称賛する。が、突然のことに

驚いた彼女は心音を跳ね上げた。

「流石はSランクだ。尾行も体力も素晴らしい。俺相手では少し力不足だったかな」

悠は、目の前の男に驚愕していた。

諜報科Sランクは伊達でなく、彼女の気配を絶つ術は武偵高でもトップクラス、ヒステリアモードのキンジ以上だ。

実際、彼女は入学試験でも、抜き打ちで潜んでいた教務科の教師にさえ悟られることなく試験を突破し、見事Sランクとなった。

未だ、教務科で彼女の気配に気づくことが出来た教師は、強襲科の蘭豹、諜報科の茅野町、南郷に尋問科の綴、SSRの鳳くらのものだ。

「お前は戦闘に向いてはいないが……まあ、ナイフ術くらいは鍛えてやる。」

「ついてこい」

「な、何故ですか？」

「有明の歩法、その奥義の修得を手伝ってやる、と言っているんだ」「!?!」

今度こそ、悠はこの男を警戒し始めた。有明の者以外には知るはずもない、奥義の存在を知る者。

いや……

「夜雲 晴夜……成る程、貴方は夜雲家の……」

「ああ、次期当主だ」

晴夜の肯定の言葉に、悠はしばし顎に手をやり、考えに耽った。

「……分かりました、よろしく願います」

そして……素直に、晴夜に弟子入りするのだった。

「ああ。数時間しか変わらないが、もう弟弟子が出来たな。喜ベキンジ」

「……レインに殺されても知らないからな」

彼の戦弟（実際には戦妹）に対し厳しくやり過ぎると、過保護な兄が飛んできて感電させられかねない。

キンジは、荒い呼吸を整えながら、一応は自分の師である晴夜の身を心配してやるのだった。

第129弾 それぞれの特訓（後書き）

不「ついに有明君も人外入りかな？」

武「てか夜雲、何でもかんでも知りすぎだろ」

不「本当だよね」

武「白雪さんは静奈の兄貴に鍛えられてるしよ……」

不「彼女の人外入りも近いかもね」

武「だが！ 俺はそれでも愛そう！」

不「くす、男らしいね、武藤君」

第130弾 決別

第130弾 決別

キンジや白雪たちが特訓している間、レインたちは部屋でまったりとしていた。

現在、風呂上がりのレインは火照る身体をアツプルジュースでクールダウンさせ、ソファに座りテレビを見ていた。

レキは浴室にいる。

「ふう……これからどうしよう」

どうしよう、とは言うまでもなく、現在浴室で汗を流しているであろうレキのことだ。

成り行きとはいえ、同棲しているこの状況、なんとか打開しなくてはならないだろう、そう考えていたのだ。

男女七歳がどうたらこうたら。などと星伽さん家の巫女さんみたいなことは言わないが、流石に拙いだろう。

なのでレインは、現在テレビのチャンネルを、『テレビ武偵』に合わせていた。

センスの欠片も感じられないネーミングだが、分かりやすさだけは天下一品。聞いただけでも、武偵のことを取り上げるチャンネルなんだろうなあ、ということが容易に想像できる。

「『もしもし、ジェニファーかい？ うんうん……狙撃手に狙撃拘禁された？ ははっ、そいつは大変だ！』」

このテレビに映る金髪男、マック（31）は完全に軽いノリで言ってるが、狙撃拘禁とは狙撃手に『反抗したら撃つ』と言われるような状況を指す。

つまり、今のレインと非常に似た状態なのだ……笑い事ではない。

まあ、レインはやるうと思えば簡単に振り払えるが、負けた以上は

従っているという感じだ。

しかし、どちらにせよ対処法は似たようなものである。

「『そんな時は、『リマ症候群』^{シンドローム}を利用するといい!』」

「『流石だわマツク! 分かったわ、今すぐチャレンジしてみるわ!』」

そう、リマ症候群。

人質された場合に、監禁者と長い時間共にいる内に良好な関係が出来、相手が攻撃を止めてくれる現象である。

……しかし、元々結構良好な関係を築いてきた仲だ。果たして、この手段の有効なのだろうか。

「……いや、弱気になるな」

そう、レキにはどうしたって狙撃拘禁まがいのこんなことはやめて欲しいのだ。

正直、彼女は美人であり、レインとしても嫌いな訳でもなく、寧ろ好きな方である。

が、『風』とやらの言いなりになるまま、自分と『そういう関係』になるのはご免だ。

「(リマ症候群、ねえ……)」

レインはふと、先ほどリマ症候群について取り上げていたテレビを見やった。

「『あ、ジエームス、ちょ、ま』Bang!」

……充分、背後には気をつけよう。そう思わせる辺り、この酷い演技は無駄でもないのかも知れない。

レインは軽く嘆息すると、反射的に電磁ソナーを発動した。

恐怖映像なんかを見た時、背後を振り向きたくなるのと同じ原理だ。リビンググー帯を感知領域にしたレインは、その一端に一人の少女を感知した。

「早かったね、レ……っ!？」

いいかけたレインは……言葉を詰まらせた。

風呂から出てきたレキの身体は火照り、若干の赤みを帯びていた。

……と、そんなことを頭の端で考えながら、レインは頬を好調させて、両手で顔を　正確には、両目を　隠した。何故？

レインの目の前では、レキが、一糸纏わぬ姿で立ち尽くしていた。肩からはドラグノフをかけていて、幸いにも大切な部分は見えていないが、まだ17の少年であるレインが赤面するにはそれで充分であった。

「れ、レキ！　何してるの！？」
早く隠して！」

と、いいつつ閉じた指の間からレキの方をチラチラ窺う辺り、やはりレインも男の子である。

「何故ですか」

「当たり前でしょ！？」

「……分かりました。」

では、着替えを取って

と、レキが踵を返した瞬間。

バン、と。

リビングの扉が開け放たれた。

「レイン、お弁当作ってきた……」

その先に居たのは……弁当箱？　を持った綾瀬と、ミチルだった。

扉に近かったのはレキであるから、必然的に彼女の裸体が目に入る訳で。

ガコン、と弁当箱が床に落ち、盛大に中身をぶちまけた。

中から卵焼きやウィンナーがこぼれ、一種の惨状、そう呼べる状態になっていた。

レキを、レインを、またレキを、最後にレインを。

交互に見続けた二人は……

「レキ！　レイン！？」

何故か、レインに怒りの矛先をぶつけてきた。

「なんでレッキーに室内とはいえ露出狂じみた真似してるの、この

変態！」

「み、ミチル！ 誤解だよ！ 俺は何も」

「なんでレキちゃんが立ち尽くしてたのよ！」

風邪引くと思わないの!？」

「思っよ！ だから注意して」

「はい、今からタオルを巻いてくるところでした」

「お前は服を着ろおおおおおおおおお！」

魂の叫びが、探偵科男子寮に響いた。

一方……

「……何か用か、アリア」

アリアに呼び出されたキンジは、とりあえず晴夜から許可を貰い、女子寮近くの植物園にいた。

「……特訓よ！」

レキと、レインにポッコボコに風穴を空けるの!」

アリアの、半ば予想通りの言葉に……キンジは眉を寄せた。

半ば、というのは、なんとなくレキに対してはこのようなりアクションを取るだろう、と考えてはいたが、レインにまでその対象が及ぶとは考えていなかったのだ。

「生憎だが、訓練なら間に合ってる。

俺は今新任の教務科の夜雲に鍛えられてるからな」

「な!？ あんた、レインの兄に訓練して貰ってる訳!？ ……恥を知りなさい！」

アリアの、完全に感情論に捕らわれたそんな言葉を聞き、キンジは嘆息した。その表情からは怒りすら取れるが、興奮しているアリアには分からない。

そしてアリアは……キンジに、言うてはならない一言を、口にしてしまった。

「あんな奴、もうドレイでもパートナーでも、ましてや 仲間で

も、無いっ!」

「!」

その、レインとの決別の言葉に……キンジは。パシッ!

「……っ、え……!??」

頬に、ピリッ、とした痛みが走る。

熱い頬を押さえ……目の前で、手を振り終えたままの体勢で立つキンジを見て、ようやく認識した。

自分は、キンジに叩かれたのだ、と。

「き、キンジ……」

「……いい加減にしろ、アリア!」

「っ!??」

今までにない、キンジの強い叱責に、アリアは言葉を失った。

「お前、俺たちが今までにどれだけレインに助けられてきたと思ってる!??」

ハイジャックの時、レインが居なければ俺たちは死んでいた!

それだけじゃない、ジャンヌの時も、ブラドの時も、パトラの時も、シャーロックの時だって、レインが居たから俺たちは、今!

ここにいます!

そうだろ!??」

叱責を受けたアリアは、よろ、よろと後退った。

「き、キンジ……どうして……?」

どうしてアంతまで、私の……私の……!」

悲しみから、怒りに徐々に切り替わったアリアは、目尻に光るものを浮かべながら、スカートの下、ホルスターに手を突っ込んだ。

そこから引き抜かれたのは黒銀のコルト・ガバメント二丁。

直ぐ様射撃体勢に移行したアリアは、しかしその引き金を引くことは無かった。

キンジの、憤怒の雰囲気……アリアは、銃を放つことが出来ない。野生の世界の、兎と虎の関係に似ていた。

捕食者に対し、獲物が向かっていくのは自殺行為である。

それが分かっていたアリアは、ついにガバメントを仕舞った。

「もう、お終いだわ……私、アンタにまで離れられたら……もう…

…！」

言って、アリアは……駆け出してしまった。

キンジはその背を追うことが出来なかった。

少なくとも、ヒステリアモードでない今のキンジが、完全に非がある彼女に、頭を冷やして欲しいという思いが大きかった。

彼女をいかに思っていたようと、人の道を違えることは出来ない。

キンジは、何も出来ない自分への怒りの捌け口も見つからず、近くのベンチに拳をぶつけた。

日も落ちた植物園、その街灯の光は、キンジの拳から滴る血に反射し、爛々と輝いていた。

第130弾 決別（後書き）

不「あーあ、遠山君……」

武「いや、あれはアリアが悪いぜ、俺から見てもな」

不「まあね。けど、やっぱり惜しいなあ、遠山君と神崎さん、ナイ
スカップルだったのに……」

武「（自分の楽しみのためかよ……）」

第131弾 調査依頼

第131弾 調査依頼

綾瀬とミチルの誤解をなんとか解いたレインだったが、レキのうっかり発言（本人に自覚は皆無）により、二人にレキとの婚約の件を悟られてしまった。

直後の二人の反応が……

「うふふ、そっかそっかあ、レッキーがねえ」

「油断してたわあ、レキさん、あまりそういうことしなさそうだったから」

と、二人して瞳孔をかつ開いた眼で虚空を見据えていたのだ。恐いやがてフラフラと帰っていった二人だったが、去り際の彼女らの眼が怪しい光を帯びていたことは、まだ鮮明に思い出せる。

彼女らのことだから、すぐに悠やジャンヌに静奈、理子、はもう知っているかも知れない。

とにかく、彼女らに知れ渡るのも時間の問題だろう。そう考えると、自然とため息が洩れた。

「お疲れですか」

無表情に聞いてくるレキだが、一応は自分の心配をしてくれるのだ、と多少の嬉しさを感じたレインは、首肯で答えた。

「肩を揉みましようか」

「ありがとう……」

あまり女性にこんなことをさせるのも良くないとは思うが、レインも、たまには甘えたいことだってある。それが、これからどうするか考え、辟易していた今だった。

「……凝っていますね。」

何かあったんですか？」

思わず突っ込みそうになったが、自重した。今は天然か、それとも確信犯かは、少なくとも今振り返れないレインには分からない。が、恐らく天然なのだろう、と純粹に第六感で勝手に決めつけたレインであった。それが当たっていたのは、彼の知るところではないが。

「……………まあ、色々、ね」

結局うやむやな返答を返し、肩も解れて気持ち良くなってきたレインには……………

「ふわぁ……………」

睡魔が襲ってきていた。

中々今回の睡魔は強いらしく、起きていようと思ってもうつら船を漕ぎ始めてしまう。

「……………眠いのであれば、どうぞ。

寝てくれて構いません」

「いや……………大丈夫、らから……………ぐう」

セリフの途中で、睡魔にノックダウンされてしまった。

そんなレインに、レキは毛布をかけてやる。

外はもう暗いし、時間も時間だ。眠ってしまうのも仕方ないことだ。

レキはふと、レインの顔に自らの顔を近づけた。

無邪気な寝顔。すう、すうと寝息を立てているレインの頬を、つんとつついてみた。起きる気配はない。

彼女は、これを自身に対する警戒が皆無だからこその行為であることを理解しているのだろうか。それは、常に感情の色が見て取れない彼女の表情から察することは、誰にも叶わないだろう。

しかし、彼女の醸す雰囲気は、どことなく柔らかなものであった。彼女はドラグノフを自身の肩に立て掛け、いつものように座って寝ようとして、彼が『普通に』寝るよう言っていたのを思い出した。ここでの『普通に』とは、もちろん一般的な睡眠方法を指す。

「……………」

翌日。

ソファに寝ていたせい、窓から射す光がレインの顔を照らし、いつもより少し早めの起床を強いた。

「ん、んう……」

レインは目を擦りながら、自分の頭の方に腕を伸ばす。朝起きたら、まず時間を確認する彼の習慣からの行動である。

しかし、自分の周りを見て昨日はソファで寝てしまったようだ、と理解したレインは、テーブルの上のケータイを手に取るうとした。

そこで、ようやく気づいた。

……自身の、足や、胸板に。

柔らかい何か当たっている。

……嫌な、いや、男子高校生からしたらラッキーなんだろうが、それでも嫌な、予感がした。

恐る恐る、毛布を捲りあげると……翡翠色の髪。に、狙撃銃の先端。

「……レキ？ 起きなさい」

ペチペチ、と端正な顔、その頬に触れて彼女に覚醒を促す。

そんな彼女は、全くもって唐突に、ぱち、と目を全開にした。眠いとか、そういうことは全然考えていないようだ。

そのまま、渾名通りロボットのようになり、カクツ、と上体を起こし、辺りを見渡した。

「レキ。朝から悪いけど、一つ質問がある」

「何でしょう」

「何で俺の毛布の中で寝てたの!？」

「貴方ではありません」

私を掛けてあげたので、私のです」

うぐ、と反論出来ないレインは口を閉ざした。そういえば、あの後誰かが毛布を掛けてくれたような感覚が……あった気がする。

「そして、貴方は私に『普通に』寝ると言いました」

なので、私は横になり毛布にくるまったのです」

「俺が入ってるじゃん！」

「……失念してました」

「嘘じゃん！？ だって自分で毛布かけたって言ったじゃん！？」

「……ぐう」

「寝たフリ！？ 目えかつ開いた状態でされても！？」

最近のレキは分からない、本気で分からない。

レインは辟易し、寝たフリをしたレキを放置。

こっそりとその場を後にし、情報科に向かった。

「遅いぞレイン。女を待たせるとは、どう言った了見だ」
情報科棟入り口付近。

まだ微妙に残る夏の陽射しが降り注ぐそこには、若干際どめのスポーツウェアを着たジャンヌがいた。

「ごめんごめん。暑かった？」

「私は銀氷の魔女と呼ばれた女だぞ？」

確かに、近づくとつれて辺りの気温が低下していく気がする。が、涼しいというよりは寒い。

「それは僥倖だね。でも待たせて悪いから、何か飲み物でも奢るよ。

「……ホットがいいかな？」

「……普通のでいい」

「了解しましたよ、っと」

近くの自販機で、コーヒーを二本買う。ガコン、と吐き出された内一本をジャンヌに渡し、自分も開けて飲んだ。ちよつと苦い。

「ところで、なんでスポーツウェア？」

「今日は朝から部活動に参加してきたんだ。が、思ったよりも長引いてしまつてな」

「成る程。疲れてない？」

「心配は無用だ」

世間話をしながら、話を聞かれないよう辺りに気を配り、人気の無いベンチに座った。

「じゃあ、報告頼むよ」

「ああ」

レインがジャンヌを呼び出したのは、レキの情報を調査して貰っていたので、その報告のためだ。

情報科というならミチルや綾瀬がいたが、昨日のような反応をするのは目に見えていたので、ジャンヌを選んだのである。それを言ったら殺されそうになったのはつい先日の話だが。

「一流の狙撃手は自分の情報を隠すものだからな。私では得た情報は微々たるものだった」

やはり、ミチルや綾瀬に聞くのが手っ取り早いのだろうが、あの反応を思いだし首を振った。

「まず、過去の任務だ。」

武偵高に入ってからからの任務成功率は100%。仕事の選り好みは激しいようだがな

「難易度の低い任務はお断りだー、って？」

「それは分らんが、彼女の受けてきた任務のパターンは大きくわけて三つだ。」

一つは教務科からの依頼だ」

教務科から依頼された任務は、余程のことがない限り断れないが、試験が免除になったり、単位が大幅に貰えたりする。

ジャンヌの襲撃の際、レインが受けていた電力供給の仕事も教務科からの依頼だったが、すっぱかしてしまって怒られたのはいい思い出(?)だ。余談だが、平賀の頑張り等である後はなんとかならしい。

「二つ目は、LDスコア900以上の任務だけだ」

「へえ……900ねえ」

レインは感心するようにそう答えた。

LDスコア、正式名称をlevel of difficulty

scoreとされるそれは、名の通り武偵の任務の難易度の目安である。

スコア300〜400で学生武偵、つまり武偵高の一般生徒　武偵に一般もなにもあったものではないが、この場合A〜Eランクの生徒　向けの仕事である。また、500〜700はプロ武偵レベル。

900なんてのは、一流の武偵企業のトップエリートにしか出来ないような仕事だ。

「で、3つ目は？」

「あまり驚かないんだな……まあいい、3つ目は『鷹の目』だ」
そのセリフに、さっきのLDスコア900よりも驚いてしまった。

「『鷹の目』……監視任務の隠語だよな。でも、あれはインターンや1年向けの任務じゃなかった？」

過去、中3の時、ローマ武偵高で狙撃科を自由履修した際、鷹の目をやらされた覚えのあるレインの言葉だ。

ちなみにレインは、裸眼では700メートル先の的にも命中させられなかったので、ちょっとインチキしてしまい、カナに怒られた記憶があった。

「ああ、本来はな。」

だが、レキが受けた鷹の目は更に条件が絞られてくる。

お前か、遠山か、アリアか白雪が対象に選ばれていた時のみだ」

言われてみれば、心当たりがあった。あれは確か、カジノ、ピラミデイオン台場の警備前である。

白雪のM60マシンガン連射の口止めをしに行った。

「今報告できる情報はこのくらいだな。」

お前の方は何か持ってきたか」

ジャンヌにそう問われ、レインは自らの制服の胸ポケットから、マイクロスードを取り出した。

第131弾 調査依頼（後書き）

不「武藤君武藤君、やはり男二人のトークはむさ苦しくて見苦しいと思うんだ」

武「突然な上今更だな」

不「という訳で、ニューレギュラーのご登場です」

理「はぁーい！ みんなのアイドル、理子りんだよー！」

白「ほ、星伽 白雪です。

よろしくお願いします」

不「よろしくね、二人共」

武「し、ししし、しら、白雪さん？」

突然の想い人の登場に、困惑する武藤！ おろおろするだけの白雪！
その後ろでは、黒い笑みを浮かべる不知火と理子の姿が！
つづけ！

第132弾 調査依頼その2

第132弾 調査依頼その2

「それは？」

取り出したマイクロSDに訝しげな視線を送るジャンヌ。苦笑しながら、指に挟んだそれをジャンヌに渡した。

「こいつは、レキがヘッドホンで聞いている音だよ。ケータイで二枚コピーしておいたんだ」

内一枚は、もちろん所持するケータイの中だ。

「ふむ……今すぐ聴けないか？」

首肯し、レインは自身のケータイを取り出した。

スペックは最新型より劣るが、防電になっており、防電カバーと合わせてレインの雷を防いでくれるスグレモノだ。

何気に音質が良かったりするそれにイヤホンを挿し、片方をジャンヌに渡した。

彼女が装着するのを見計らい、レインはレキの風の音を再生する。

「……………」
一度確認しても何も分からなかったが、一応もう一度耳を研ぎ澄ませる。

……つもりだったが、こちらへ向いた視線を感じ、目を開いた。

「ジャンヌ、どうかした？」

「い、いやなんでもない！」

ジャンヌは大慌てで片手をブンブンと顔の前で振った。

レインが首を傾げながら、また音に集中しだすと、ジャンヌはほっと息を吐いた。

「（我ながら情けない……男に見惚れるとは）」

そう、レインが感じた視線は、ジャンヌがぼー、と彼を見詰めてい

たものだ。

その際見ていた彼の横顔を思い出し、ジャンヌはその雪のように白い頬をピンクに染めた。

「（な、何を考えているんだ、私は！？」

落ち着け、集中……！？」

頭をクールダウンさせ、ジャンヌはイヤホンから流れてくる音に耳を傾けようとする。しかし、先程とは逆に自分へ送られてくる視線を感じ、目の前の男に目をやった。

「ど、どうした？」

レインが、真剣な眼差しでジャンヌの顔を見ていた。その顔からは、何かが心に引つ掛かったような、不安感が見てとれる。

「大丈夫かい？ 顔が赤いよ。熱でもあるんじゃないか？」

そのセリフで、自分を心配しているのだと認識する。

実際にはレインの所為であるが、そんなことを言えば目の前の男が無用に苦しむことは想像に難くない。

しかし、どう言って誤解を解こうか、言葉を選んで瞬巡した、その一瞬がまずかった。否、捉えようによっては幸福か。

レインが、自らの額に額を合わせて来たのだ。

「~~~~~！！！！？」

声にならない悲鳴。ジャンヌは、自身の頬が先にも増して熱を帯びていることを自覚する。

その原因たるレインは、その眉間に更に皺を寄せた。ジャンヌの体温が上がったのを、芳しくないと考えたのだろう。

元凶は自身であるというのを理解しないままに。

「大丈夫？ なんだか熱くない？」

「あ、あ、熱くない！

寧ろ寒いくらいだ！」

「そ、それはそれでまずい気がするけど……」

寒気と言うなら、風邪の症状である。尚更心配だ。

一方でジャンヌは、浮かれて体温を上げる自分自身との葛藤に勤し

んでいた。

「（おおお、落ち、落ち着けジャンヌ・ダルク！

お前は騎士だ、これはレインが気遣って体温を測っているだけだ！
そ、そう、こいつは体温計だ！ 体温計に熱を測られて恥ずかしがる者がどこにいる！？）」

よく分からない自己暗示を掛けながら、それでもジャンヌは顔を赤くしたまま目を開けられない。

しかし……限界まで顔を近づけたレインの吐息が、ジャンヌの首筋をなぞった。

「っ、あつ！？」

「じゃ、ジャンヌ！？」

突如声を上げ脱力したジャンヌを抱きかかえながら、レインは彼女の顔を覗き込むように見た。

「大丈夫！？ やっぱり、救護科に連れていった方が……」

「だ、大丈夫だ本当に！」

心配するレインを押し退け、ジャンヌはとりあえずイヤホンを外した。これ以上彼を懐に入れさせるのは拙い、そう考えての行動。

「私は何も分からなかったが……こいつから情報が得られそうな者に、心当たりがある。」

そいつに聞きに行こう」

気を取り直したジャンヌは軽く咳払いし、立ち上がるのだった。

通信科棟。

「ここにいるの？ えと……」

「中空知 美咲だ。私の親友でもある」

「ふーん」

レインは転入してきてから、入ったことのない通信科をキョロキョロ見渡しながら相槌を打つ。

レインは通信科と鑑識科、CVRには入ったことが無かった。ちなみに、よく出入りするのが探偵科、情報科にSSRだ。

探偵科は寮と一緒に知り合いが多いから、情報科はジャンヌ、ミチル、綾瀬に連れられて。SSRは言わずもがな、自身の専攻学科だ。「そうか。お前なら知り合いかと思ったが、考えてみればお前ほど通信科に合わない男はいないな」

それはやはり、雷神化すると通信機器が吹っ飛ぶからだろう。東京武偵高に行く前は、よくカナヤアレックスに注意されたものである。「それにしても、随分散らかつてるねー」

「あ、こら！ 勝手に動くな！」

レインは微妙に動いているコードを面白そうに眺めながら、それに続いて先に進んでいってしまう。

やがて、曲がり角に差し掛かり顔を上げる。すると。

「……じゃ、ジャンヌ！」

やけに焦った声を張り上げ、レインはその少女に駆け寄った。

曲がり角の先。そこには、通信機器のコードに身体を絡ませられた少女がいたのだ。

「君、大丈夫か!？」

猿轡なんかはされていないようだったが、急いでコードをほどいてその少女を抜き出した。

「は、はい。ただ、大丈夫で、す」

おろおろしながら、その少女はレインに怯えるように壁に凭れた。

その間に、レインは少女の全体像を捉える。

白雪くらいの伸長であり、その髪は腰まである長さ。前髪も、目を隠す程にまで伸びていてどこか暗い印象を受けるが、その前髪の間から覗く顔は美形だった。

「誰に縛られてたの!？」

まさか、犯罪者が武偵高に……!？」

少女が答えないため、レインの想像が加速していく。が、それは後ろから駆けつけたジャンヌの一言で、とりあえずは霧散した。

「中空知! どうした!？」

「……え? この娘が、中空知さん?」

「!?!?!?!?!」

レインが驚き、中空知も何故自分がレインに呼ばれた分ならず、おろろし始める。

ジャンヌは額に手をやり、ため息をついた。

中空知 美咲。通信科Bランク武偵。

四月に起きたバスジャック事件の際オペレーターを勤めたり、一年の時もよくキンジや不知火が参加した任務のオペレーターをしていたらしい。

曰く、アナウンサーのように滑舌がいいとか、曰く、声優みたいに声が透き通っているとか。

更に通信中、飛び交う情報を一分の隙無く聞き取り、それを整理する。

とてつもなく優秀であるが、何故かBランクなのだ、とジャンヌが言っていたが……

「（これを見れば、納得だと思っなあ……）」

「めめ、眼鏡！ 眼鏡はどこですかあ!?!」

先程からセリフを噛みまくっているし、不安に駆られるのも仕方ないかもしれない。

しかし、正真正銘、彼女が中空知なのだ。それは、見せられた武偵手帳を見て確認済みである。

「彼女は少し癖があつてな。お前は向こうに行っている」

ジャンヌに襟首を掴まれ、部屋の外に放り出された。受け身を取ると、向こうの壁に凭れる。

中空知はその間、凄い勢いでケータイのボタンを押していた。そして、電話なのだろうか、ケータイを自身の耳に押し当てる。

そんな様子をぼけー、と見ていたレインのポケットが、振動し始めた。

見れば、電話が来ていた。

……まさか、とは思うが。

「もしもし」

『初めまして。中空知 美咲です。先程は失礼しました』

「は、はあ……」

どうやら電話先は自分だったらしい。部屋の入り口を通せんぼするジャンヌの横から見ると、中空知の横顔は先の態度からは考えられないような真剣さが滲んでいる。

『私は少々上がり症でして、失礼ながらこのように通信機を介して会話させて戴きたいのですが……よろしいでしょうか』

「はい。構いませんよ。」

「よろしく願います」

『ありがとうございます。こちらこそ、よろしく願います』
『全くもって、ソツの無い回答。噂通り（情報元は全部ジャンヌだが）、アナウンサーのような滑舌に声優のような美声だ。』

成る程、もしかしたらよくいる漫画のキャラ……所謂、『ハンドルを握ると性格が変わる』ような人らしい。

改めて、東京武偵高の生徒はキャラが濃いな……と内心呆れるレインであった。

第132弾 調査依頼その2（後書き）

武「ししし、白雪さん！

お茶いかがですか！ 煎餅お持ちしました！」

白「あ、ありがとう武藤君」

理「あーあ。だめじゃんむっちー。雪ちゃん困ってるよう」

武「うるせいやい！」

不「（むっちーって武藤君のことかな……）」

白「そ、そんなことないよ武藤君！ 私、本当に感謝してるよ！」

武「白雪さん……ほれ見る理子！」

理「むーむー！ 調子乗りすぎ！ がおーだぞ！」

不「（まあいいかな。面白そうだし、放っておこう）」

つづく!?

第133弾 暗躍

第133弾 暗躍

中空知に音の解析を任せ、後にジャンヌにメールで結果を送って貰うことにし、レインは情報科棟を後にした。

ケータイを開くと、着信履歴、メールの受信ボックスに一件づつ、レキからの連絡が入っていた。

ため息を吐きながら、自身の部屋に戻ってくる。

そこには、碧の髪にドラグノフを埋める、レキの姿があった。

心無しか、普段より若干不機嫌そうな気がする。

「ごめんごめん。勝手にいなくなつてさ。怒つた？」

「いえ。いつものことです」

その認識はあんまりだと思いが、事実勝手な行動ばかり取っているレインには反論出来なかった。

レインが肩を落とすのを見ていたレキは、特にフォローすることも無く自身の銃の整備を始めた。

マニュアルも何も無しに分解し、部品の一つ一つを丁寧にクリーニングすると、また組み立てる。彼女の頭の中には、自分の銃のことは全て入っている、ということだろうか。

また、銃弾にも気を使っていた。

天秤なんかを自室に運び込んでるところを見ると、火薬の量まで測つて、銃弾を自分で作つたらしい。

彼女は手作りの狙撃銃の実包を取り出すと、20発を等間隔に机に並べ、それらを吟味するように見て……一発だけ、つまみとつた。

それをしばらく見据えると、ドラグノフの弾倉に収めて、残りの銃弾は全て捨ててしまった。

「……不発を避けたいのは分かるけど、それはやりすぎじゃないか

な？

物騒な今の時代、銃弾一発が戦況を分ける時だってある訳だし」

そう、彼女は不発防止策として、20発の中から最も出来の良い一発を厳選しているようなのだ。

「私は今まで、不発を起こしたことがありません。そして、それはこれからも変わらない」

普段は無表情なレキが、どことなくこちらを睨んできた気がする。

口調も、断定するような強いものだ。

どうやら、彼女は銃に関しては譲れないものを持っているらしい。

それは良いことなのだが……いかんせん、レキのためにならないこともある。

「確かに、レキの整備は完璧だよ。でも、奇跡の反対……奇跡的なアンラッキーだって、起こる時は起こるよ？」

銃が言うことを聞かない時なんて、幾らでもある。それが起きた時に対応出来るようにしないと」

「銃は私を裏切りません」

レキはドラグノフを抱えるように持つと、そう独りでに呟いた。

自身の腕、何より銃に絶対の信頼を置く、ある意味プロ意識からなる言葉だろう。

しかしレインは、同時にそんなレキに、言い知れぬ危うさを感じる。それを指摘する術を、彼は持っていなかった。

秋葉原の路地裏。

「~~~~~」

やけに機嫌の良い、クリーム色の長髪を左右に結わえた小柄な少女……理子は、いつものフリフリの改造制服を着て、そこを歩いていた。

今日は彼女が楽しみにしていたゲームの発売日である。それ故、朝早くから並んだ末、ようやく目当てのものを入れたのだった。

「（早くプレイしたいなー）」

スキップでそこを駆けるも、不穏な空気を感じてその足を止めた。

「……くふっ、出てきなよ！ 理子、かくれんぼ得意なんだよねえ」
理子のセリフを聞いて、そこかしこから如何にもな格好の、がたいの良い男たちが飛び出してきた。

スタンガンなんかを持つてる辺り、誘拐なんか大それたものじゃなく、強盗などといった類いの者たちだろう。ざっと見て十人、加えて隠れているのが一人……その男は拳銃を所持しているようだ。

蛇の道は蛇。改造されてはいるが理子の武偵高の制服を見て、武偵だと分かった上で襲っているのだろう。

面倒な事態に、理子は頭を掻いた。

男たちは口を開かない。

先の一人を潜伏させておく手法を見ても、強盗にしては随分狡猾であることが分かった。

「秋葉にこんな不粋な輩がいるなんて、世も末だね」

犯罪が凶悪化していく世を憂いてか だとしたら、それを誘拐する立場にあった『武偵殺し』たる理子が言うなら皮肉に他ならない

どこか悟ったような理子の口調。髪を使うまでもない。

一瞬で、理子の雰囲気が変わる。それに気づいたのは、目の前で鋭くなる理子の眼光を見た一人だけだ。

まず、その男に接近し、腹に掌底を食らわせると男は悶絶し地に伏した。

「てめえ！」

「くふふ！ 君たち死亡フラグだよ？ 殺さないけどね！ くふっ！」

戦闘狂の笑みを浮かべ、鋭いハイキックが男の一人の顎を捉えた。

「動くな！」

隠れていた男が、銃を構えてこちらに向けている。

それを知りながら余裕充分に振り返った理子だったが……その顔が、驚愕に歪んだ。

全員の視線が、理子に降り注ぐ。よく分からないが、好機だ。全員
の意見が一致した。

この場にいる二人を除いて。

「お前、どうして」

裏理子のセリフの意味を理解しないまま、銃を持った男は引き金を
絞ろうとする。

だが……突如、彼の視界は闇に消えた。

首が、鮮血を撒き散らしながら落ちていたのだ。

「ぎゅああああああ！」

叫んだのは、別の男。当然、逃げようとする。他の男たちも逃亡を
計った。

が、そいつの銃が横雑に振るわれ……寸分の互いも無く、男たちの
脳髓を吹き飛ばした。

血が、地面に赤い水溜まりを作る。その水溜まりから反射したそい
つの口角は、邪悪に歪んでいた。

「どうして……どうしてお前が、ここにいるんだ!？」

理子は脂汗を掻きながら後退る。その男は理子の問いには答えず、
代わりに銃を理子に投げつけた。

咄嗟の反応。

イ・ウーで鍛え上げた彼女の反応は、理性よりも早く彼女のホルス
ターから愛銃、ワルサーP99を抜き、拳銃を撃ち抜いた。

もう片方の手で、そいつに標準を合わせる。が。

「!？」

理子の眼前には、既にそいつの姿は無かった。

そして……腹に、激痛。

「……が、はっ……」

理子の腹から、刃が突き出されていた。

刺された　後ろから。

理子はゆっくり後ろを振り向く。

その口からは血が流れ出し、今にも暗転しそうな視界をなんとか保

つ。

「こ、たえろ……！」

そいつの名を。叫ぶ。

「

掠れた声で、それは殆ど聞き取れない。そいつは剣を抜くと、不敵な笑みを浮かべ、血にまみれた理子を放置してその場を去った。

薄れ行く景色の中。

理子の耳には、一般人の声であろう、救急車を呼ぶ声などが聞こえてきた。

それでは駄目だ、武偵高の救護科に

言おうとするが、声が出ない。

伝えなければ。レインに。

今度は足が動かない。

理子は、自分の身体が思うように動かないことを認識し……目を閉じた。

「理子！」

病室の扉が、乱暴に開けられた。医師らの制止を押し切り、ようやく手術を終えた理子に駆け寄る。

幸いにも、近くをアレックスが歩いていたらしい。理子が倒れていると知った彼は、取り乱すことなく救護科に連絡、武偵病院に搬送したらしい。

「理子……」

彼女の寝息を聞いたレインは安堵の息を吐いた。医師も一命は取り止めた、と言っていた。だから退室しろ、とも言っていたが。

「よう、レイ。顔色が悪かったが、どうやら平気らしいな」

「ありがとうアレックス。感謝し切れないよ」

肩の力が抜けたらしいレインは、アレックスの隣に座った。

「気にすんな。あいつはお前の仲間だからな。」

相棒の仲間は仲間だろうよ」

そういいニカツと笑うアレックス。それに影響されてか、レインの表情も自然、柔らかくなっていた。

「峰が目を覚ますのは、早くても修学旅行が終わってからだそうだし……それにしても、こいつはヤバい奴だぞ、レイ」

良い塩梅に雰囲気が変わったからか、突然表情を険しくしたアレックスはそう耳打ちしてきた。

レインが訝しげな視線を送ると、彼は首肯し言葉を続ける。

「俺がいたのが幸いだっただが……下手を打てば、峰は殺られてた。臓器を潰そうとしてきやがったらしいんだ」

それを聞いて、背筋が凍るのを感じた。もしも、理子が死んでいたら　そう思うと、本当に心臓が引き絞られる。

「……ともかく、俺はこいつの調査をする。」

舐められたままじゃ気分悪いからな」

実はあの後、犯人を追い掛けたアレックスは彼と交戦したらしい。だが犯人は、風神の称号を持つ、アレックスの攻撃を交わしきり、尚且つ

「……その怪我、か」

指摘されたアレックスは、無然とした表情で片腕を挙げた。その腕には包帯が巻かれている。

そう、アレックスに、掠り傷とは言え手傷を負わせたのだ。

犯人の実力から考えて……『R』の可能性も考えられる。

だとしたら、いかに『風神』アレックスと言えど、生半可では勝てない。

今回の件はアレックスに一任し、レインはレキの待つ病院の入り口まで戻っていった。

第133弾 暗躍（後書き）

三人「ええ！？（峰）理子さんが入院！？」

理「そうだよー」

三人「！！！？？」

理「理子りんは殺られかけたのだよ！ふっふっふ」
三人「いやいやいや入院してんじゃん！？」

何故か入院したはずの理子が登場！？

つづけ！

第134弾 修学旅行I

第134弾 修学旅行I

「ウーアーイン！」

「……京都……！」

レインの号令に続いて、2 Aの連中のノリのよい叫びが響いた。近所迷惑、という心配は無用だ。まだ電車の中だから。

それにしても……京都というのは、予想に反し随分と都会である。京都の住人さんには失礼かも知れないが、もっと古都らしいところを想像していた。

レインは旅のしおり（集合場所と規則が何行か書いているだけだ）を雷で消し飛ばすと、早速自由行動を開始しようと駆ける！

が、ハイマキが回り込み、レキに道を阻まれた。

「れ、レキさん？」

「……私から離れないで下さい。修学旅行中も」

「……せめてハイマキはどっかに預けてきて」

要請はあっさり受諾され、結局レキと二人きりで京都を回ることになるのだった。

そんな様子を、影から見ている者たち。

「うー、レッキー狡いよう」

「私たちだってレインと回りたいたいというのに……先を越された！」

「れ、レキは以外に大胆な奴なのだな」

セリフ順に言えば、ミチル、静奈、ジャンヌ。レインに想いを寄せる三人娘だ。ちなみに理子は入院中、アレックスは調査中、悠と綾瀬は別学年である。二人曰く、こう言うイベントに限ってチャンスが少なく、あと一年産まれる年が違えば、と日々苦難しているそう

だ。

それはさておき、レインと回り始めたレキを監視する三人は、今回尾行に徹するという話に落ち着いた。

もしも二人がとんでもないこと（ご想像にお任せします）をやらかそうとしている場合は、即座に通行人Xとして素晴らしいタイミンで妨害を入れる、という手筈だ。

三人は、固い握手を交わすのだった。

「見るレキ！ 凄い凄い！ 全部金色だ！」

金閣寺を見上げながら興奮気味にケータイのシャッターを切るレインに、黙ってついてくるだけのレキ。辺りからはひそひそと『できる疑惑』が持ち上がるが、夢中なレインは気づかなかつた。

今日の修学旅行は、最低3つは寺・神社を見学し、レポートを書いて提出しなくてはならない。

とりあえず金閣寺に関する簡単なメモ（金色だった、としか書いていないが）を書くと、レインは次の場所に向かった。

三十三間堂。

そこはある意味、レインに縁のある場所である。

つまり……風神・雷神像のある場所なのだ。

入り口で武装を外すよう言われたので、とりあえず水月は模造刀ということで押し切り（切れ味がないから楽だ）、残りの武装を預けた。レキも同様に、ドラグノフと銃剣を預ける。

参拝券を買つと、境内の道順をゆっくり歩く。

と、角を曲がったところで目当てのものが見つかった。

「へえ、これが本物の雷神かあ」

興味深そうに、自身の二つ名の由来となった像を見上げる。

中々、雰囲気がある。

ある程度写真を撮ったところで、残りの像を見て回る。

アレックス用に風神を撮って、三十三間堂で幾つかの土産を買つと、レインとレキは談笑　笑っているのはレインだけだが　しなが

ら、その場を後にする。

「……やっぱり、健全だな」

「まだまだ、油断は禁物で大敵だよ静ちゃん！」

「手も繋いでいないとは……」

後回ろうと考えているのは清水寺のみ。

なので、そこはとりあえず放置して、レインとレキは京都の街に繰り出した。

やはりというか、目立つ。

そりゃあ、銀髪に碧髪で、しかも美形の少年少女が歩いていたら人の目を引くのは仕方ないことだ。時々、コスプレか？ などと言ってる通行人もいるが、少なくともレインは地毛である。

「……レキ。どっかに入ろうか」

視線に不満を感じたらしいレインがそう提案すると、彼女は僅かに頷いた。

「いらつしゃい！ まー、可愛えなあ、お嬢ちゃん！」

とりあえず、近くの洋服店のような店に入ると、テンションの高い女性店員が快く迎えてくれた。

レキは褒めて貰っているというのに無表情を貫いている。やれやれ、店員さんの相手を勤めることに。

「この娘に合う服とか選んで戴けませんか？ 俺たち、そういうのには疎いんですよ」

冗談めかして、武偵手帳をちら、と見せる。間違っても拳銃なんて物騒なものは見せない。

「へえー、武偵さんか！ 東京からわざわざよお来たなあ」

この店、入った時に武偵が多いからまさかとは思ったが、武偵企業でもあるらしい。店頭に防弾服が売ってたし。

犯罪が凶悪化してきた今日、私服を防弾製にする一般人も多く、武

偵関連の企業が防弾服を売ることも度々あった。それがこの店のようだ（勿論、普通の服だつて売っている）。

武偵御用達でもあるこのような店は、大抵武偵の入店におおらかなのだ。

たまに、銃を持った武偵は店のイメージを下げる、と嫌がる店もあるため、その判断が出来るのは楽でいい。

「じゃあ、俺は奥にいますから、よろしくお願いします。その娘は感情が希薄ですが……」

「気にせんといて！」

私、トーク上手いねん！」

……どうでもいいが、京都ここはまだなのに大阪弁じゃないだろうか？

一抹の不安（？）を覚えながらも、レインはしばらく時間を潰すことにする。

アクセサリーなんかを見てみると、不意に……見知った、花の髪飾りが見えた。

「（あいつ、尾行スキル0なんだ……それは武偵としてどうなんだろう）」

なんて思ってる間にも、彼女は笑いを堪えているのか震え出した。

こちらは気づいていないと思ってるらしい。

探偵科だったら、Fランクに格付けされてもおかしくないレベルだ。ちなみにFランクとは、本来AとE、加えてSランクで表される武偵ランクだが、Aにしては高過ぎる能力を表すため作られたのがSなのに対し、E表記では低すぎる者のために作られたランクが、Fランクなのだ。

つまり、大変不名誉な格付けである。それくらい酷い。

「（……まあ、声を掛けてもいいけど……）」

あの様子では、絶対に気づかれないと思っっているだろう。

何となく放っておいた方が良さだろう、とレインは改めてアクセサリーを物色し始めた。

レインを影から覗く少女……立花 ミチル。

彼女曰く、作戦は順調とのことだ。深い紫の髪に映える花の髪飾りが煌めく。

これでレインに正体がバレている、などとは夢にも思っていない彼女は、必死に笑いを堪えていた。

「（ふふふ……我ながら完璧過ぎる尾行！ 私、もしかして探偵科ならSランク!?）」

そんな訳は無い。

彼女も流石に冗談だった（その割には酷い出来であるが）だったため、レインがアクセサリーの物色を再開すると共に、意識を切り換えた。

『【ガチャ】……静奈だ。ミチル、状況は?』

小型無線から連絡が入り、ミチルは商品棚に身を隠しながら、レインの一挙一同を見逃さないよう返答する。

「現在彼はアクセサリーを漁っている、どーぞ」

『そうか……何を手に持っているか実況してくれるか? ……どーぞ』

「分かったよ、どーぞ」

『いや、もうどーぞ要らない』

（音声のみで状況をご想像下さい）

「お、おお!? あれは……どーぞ!」

『ちょ、何だ!? 何を持ってるとどーぞ!?』

「ぎ、銀色のパンクな手錠だぜ……どーぞ」

『武偵が手錠アクセサリーで……洒落にならないぞ。どーぞ』

「な……! どーぞどーぞ!」

『もう使い方間違ってるぞどーぞ!』

「あれ……今のはどっちのどーぞ……?」

『ああもうやこしい! どーぞ禁止!』

「ええ〜どーぞ」

『……………』

「現在目標1は手錠の宣伝の張り紙を読んでる模様です」

『続ける』

「張り紙には、曰く…………『気になるあの娘と常に一緒!』と!」

『手錠アクセサリーで!?それは恋人同士じゃないだろ!』

「私に言われても…………あ、戻した」

『当然だ…………』

〜フェードアウト〜

レインは手錠のアクセサリーを置くと（彼女と片方ずつつけるらしい。それなら手を繋げ）、軽く嘆息した。

あまり良いものは見当たらない。買っておきたいものがあつた彼は少々気を落とした。同時に、視線も。

そのお陰か…………自分の目の前に、金と銀のそれが眼に入った。

それは、ハート型だつた。女の子みたいなところは否めないが、レインは自身の名前、レインハートからこの形状に親近感を持っている。

左が金、右が銀のそれは、二つに割れ、金のアクセサリーと銀のアクセサリーになる仕様だつた。

それがやけに気に入つたレインは、それを購入すると自身の首に巻きつけた。

そろそろレキも着替え終わる頃。レインは、入り口付近の更衣室前に向かつた。

第134弾 修学旅行Ⅰ（後書き）

武「何だレイン、ハート型なんて男の風上にも……」

白「わあ成瀬君、ハートのアクセサリって可愛いね！」

武「俺もハートのアクセサリ買ってきます！」

不「くくっ、武藤君流石だね。」

ところで峰さん、どうしてここにいるんだい？

昏倒してたはずだけど」

理「理子りんはあ、不死身なんだよりよー君！

つてのは嘘でえ、こっちはパラレルワールドだからね。メタもなんでも有りなんだよ。ほら、向こうのりよー君は今のりよー君じゃないでしょ？」

不「それをいつちゃあなんでも有りにならないかな……」

理「気にしなーい気にしない！ くふふっ！」

第135弾 歪な三角関係（前書き）

なんか、昼ドラマみたいなサブタイですね。

第135弾 歪な三角関係

第135弾 歪な三角関係

出てきたレキに 思わず、言葉を失う。

着ていたのは、ノースリーブの白いワンピース。

薄化粧を施され、髪を少し結わいた彼女は、驚くほど美しかったのだ。

言葉では形容し難いその美しさに呆然とするのも一瞬だった。

レキが、袖口を掴んできたのだ。

「いかがですか」

「え、と……可愛い。凄く」

平々凡々な回答。しかし、それは単純にして明快なレキへの称賛に他ならない。

レインは自身の頬が熱を帯びているのを自覚しながら、レキを横目で見る。

薄地などところがあるのか、光が射すと身体のラインがほんの少し見えたと。

気恥ずかしくなったレインはすぐに目を逸らすと、その先には口角を意地悪そうに歪めた店員さんの姿があった。

「武偵の兄ちゃん、この娘滅茶苦茶可愛いやる？」

「やっぱ私に任せて正解やあ、って思うやる？」

どや、という感じに聞いてくる彼女に苦笑いを浮かべる。しかし、

彼女の言葉が正しいのは事実だ。

「はい、凄く可愛くてビックリしましたよ」

「やっぱな！ せやるせやる！」

ほんなら、会計はと……」

何やら凄いスピードで電卓を叩き始める彼女。

一応、財布の中身を確認するレインだが、現金はちゃんと入っている。以前、カードしか持ち歩いておらず、酷い目にあっただことあったので、今回はその教訓を活かすことにしていたのだ。

「ほな……こんなもんや」

レインは少しその高額さに驚きながら、その分の代金を払った。

「おおきに〜兄ちゃん、頑張りや」

店員さんに何故か応援されながら、レインは首を傾げるのだった。店を出ると、適当なタクシーを拾い清水寺の坂の下まで、と頼む。しばらく会話のないままにタクシーに揺られていたレインは、ケータイが微かに震えたのを知覚した。

どうやら電話でなくメールらしい。差出人は、ジャンヌだった。

件名は『調査結果』。

そのメールを開くと、やはりというかなんと言うか、絵文字などは一切使われていなかった。真面目なジャンヌらしい文面だ。

『音の場所が割れた。モンゴル北部から東シベリアにかけてのどこからしい。』

それと レキには気をつける。彼女は、14歳頃からロシアや中国に居たらしい。そこでしていた任務の記録が無い。

恐らく、記録に残らない任務をしていたはずだ。』

記録に残らない任務。

それは多分……殺しの任務だ。
物騒な武偵業界、記録に残らない任務とさえ政府が余程の失敗をやらかしたか、それくらいしかないだろう。

正当防衛でも武偵の殺人が禁止されているのは日本と西欧諸国くらいであり、『殺し屋』と称される武偵もない訳ではないのだ。

が……レキが人を殺めたことがあるなどとは考えたくない。

おもむろに、彼女が携えるドラグノフの銃口に視線を遣り、首を振る。

レインは拳に力を込め、ジャンヌに返信するとケータイを閉じた。

少年……遠山 キンジは、やけに長いリムジンに身体を揺らしながら、今一修学旅行を満喫出来ずにいた。

原因は分かっている。

アリアとの、仲違いだ。

何も悪くないレインを突き放すような事を言ったアリアを、思わず叩いてしまった。

右手を眺めて、そして涙を流すアリアの顔を思い浮かべて、自然に歯を噛み締めていた。

「……何やってんだ、俺」

修学旅行まで、不安定な心情ながらも晴夜の訓練をこなし、自分の実力がかなり高まって来ているのが分かる。また、父の遺品から引っ張り出した新装備もある。だが、やはりアリアが居ないのは、心の一部が削り取られたかのような痛みを伴っていた。

「キンちゃん……大丈夫？」

「……白雪。悪いな、心配させて」

隣に座る少女、星伽 白雪。

キンジは特にすることも無かったため、白雪の要望に応じて星伽の分社に向かう予定だった。

今、京都の分社には彼女の妹である風雪がいるらしく、久々の再会が楽しみの一つとなっている。

そんな中なのに浮かない表情をしていたからか、白雪は心配そうにしている。

「……遠山様も、ずっと乗り物に揺られてお疲れなのでしょう。」

「どうです？ 息抜きに少々京都を見てきては」

予め神社や寺は二つ回っており、最後にレポートに書くつもりなのが星伽の分社である。

なので、今は完全に自由行動の時間。それ故の、気配りも上手い運転手、蒔江田さんのフォローなのだろう。

それは同時に、白雪への恋の援護でもあった。

「そ、それがいいです！」

ね、キンちゃん！」

「あ、ああ。そうだな」

若干押され気味に了承したキンジと白雪は、京都の中でもやたら大きい服飾店に連れて来られた。

中は綺麗な女性ばかりで、ヒステリアモード持ちのキンジとしては厳しいものがある。

「キンちゃんは待ってて。試着してくるから！」

一言キンジに告げると、白雪は滅茶苦茶張り切って奥の方に消えてしまった。

待っている間暇だったキンジは、少し店を散策すると、目当てのものが見つかったのでそれを購入した。予想より出費が痛かったが、まあ大丈夫だろう。

と、ケータイが振動していることに気づき開く。白雪からのメールだ。

「（件名に一行で済む話だろ……何故本文に何百文字も入れる）」
呆れながら、とりあえず感じ取った『着替え終わったから来て』というニュアンス通り、キンジは先ほど白雪が向かっていった更衣室辺りに出向いた。

……が。

「っ!？」

「あ、キンちゃん！ キンちゃ……っつて、ええ!？」

すぐさまこちらに気づいて手を振ってきた白雪だったが、キンジが周りが目を向けるより先に更衣室に押し込んだので、大事には至らなかった。

「ぶはあ、キンちゃん、何を……はっ！」

そ、そういうことなら、私はいつでもどこでも準備、その、準備万端です！ 不束者ですが……よろしくお願いしま」

「待て待て待て待て待て」

一体何を勘違いしたのか、探ろうとしたキンジはやはり止めた。何となく、白雪の恍惚とした表情からヒステリア性の危険を感じた故だ。

何故、キンジは白雪を更衣室に押し戻したのか？

それは……

「な、なんつー格好してんだよ白雪……！」

そう、白雪の格好。

それは、スカートがやけに短く、フリルがヒラヒラとついている……
… 理子が着るような、所謂メイド服だった。

そんなものがよくあったな、という追撃の突っ込みを入れる前に、白雪がもじもじと指を弄り始めた。

「あ、あのね……峰さんが、こういう服を着れば、男の子は喜んでくれるってえ……」

「あいつの言うことを鵜呑みにするな、白雪。」

あいつは悪戯好きだから、嘘を言うことだってあるぞ？」

キンジの宥めるような口調に、白雪はシュン、と落ち込んでしまった。

「じゃ、じゃあ……キンちゃんはこういうの、嫌い？」

が、白雪は涙目の上目遣いで訊いてきた。

そして、その豊満な胸が……至極、危ない状態に陥っていた。

……

「……ふっ、白雪。君に似合わない服なんか、俺には思い浮かばないな」

ヒスった。

白雪の、色々な意味でのとんでもない破壊力をモロに食らったキンジは、ヒステリア・ノルマーレを発動してしまった。

「そ、そんなあ……勿体無いお言葉あ……」

甘い表情を魅せる白雪の一言が、更にヒステリア性の血流を加速させる。

その鋭敏になった感覚故か、キンジは、自身に向けられた敵意に気

がついた。

殺気などを孕んだような禍々しいものではない。

それよりは、怒気に近い。

カーテンの隙間から覗く、その敵意の主は

「（アリア……！？）」

幸いこちらが彼女に気がついたことを察した様子はない。が、それよりもキンジの頭の中では別の事が大半を占めていた。

アリアは母、かなえさんの裁判に関することで忙しく、修学旅行にも参加していないはずだ。

が、どういふ訳かここにいる。

キンジが、足りない情報量で彼女がここにいる理由を推理しようとするが、間に合わなかった。

「あ、アリア！？」

！

白雪が、動揺したアリアの気配に気づいてしまった。

アリアは逃走、店外に出てしまった。

「っ、アリア！」

キンジの身体は思考よりも早く、アリアを追いかけていた。

ここで彼女を追わなければ、一生後悔する。

そんな、何の確信もない直感が、彼の胸中に渦巻いていた。

第135弾 歪な三角関係（後書き）

武「メイド服ゲボバア！」

不「武藤君が壊れた！？」

白「み、峰さん！」

私、何か間違えた？」

理「寧ろ正解だよユキちゃん！」

第136弾 交戦

第136弾 交戦

「待て、アリア！」

キンジは人混みの中を駆ける。

アリアも、この人の海では思うように動けないようで、幸いにもすぐに追い付けた……が、ヒステリアモードが切れる程度の時間は経っていた。

「何よ、あんたはあそこでずっと白雪と遊んでればいいじゃない！ 私は呉に行く前に機材を取りに大阪武偵高に寄っただけだから！ 私は忙しいの！」

アリアの頬は赤みを帯びているが、これは羞恥からくるものではなく、単純に怒りと嫉妬と運動して血行が良くなったことが合わさり、興奮状態になっているためである。

そんな彼女を落ち着けるために、キンジは一つ息を吸って話を始める。

「落ち着けよ、アリア。」

俺は白雪が服を見て欲しいって言うから見ていただけだ」

が、それは完全な自爆であった。

しかも、失態に気づいていないという、最低最悪のパターンである。アリアは、とうとう肩を小刻みに震わせ（一応言っておくが、泣きそうな訳ではない）……

「私が忙しい間！」

平拳がキンジの眉間に入り、反射的に目を閉じる。

「白雪にメイド服着せて！」

その足を払い、地面に転ばせると。

「お幸せにねっ！」

流れるような動作を前になす術も無く転倒したキンジの頭を容赦無く踏みつけて、さっさと行ってしまった。

「つてえ……待てよ、アリア！」

晴夜との特訓で得た耐久力故、すぐに起き上がったキンジはアリアを追おうとする。しかし、白雪がメイド服姿のまま追いかけてきたため、一旦諦めることとなった。

周りから浴びせられる視線が、やけに痛かった。

坂を上りきり、清水寺に到着したレインとレキ。

二人は参拝券を購入すると、清水寺の境内に入った。

「いい眺めだね」

「はい。ここからなら上手く狙撃出来そうです」

そういう意図で言った訳では無かったが、狙撃手にとって、視界というのは死活問題なのだろう。

レインは苦笑しながら先に進んでいく。

やがてしばらく歩くと、彼の有名な『清水の舞台』と御神籤おみくじが見えた。

「御神籤か……レキ、やらない？」

「分かりました」

首肯したレキと共に列に並び、一枚ずつ購入した。

それを開ける。勿論、大吉狙いだ。

……が。

「うわあ……末吉って微妙だなあ……」

大凶でも無ければ大吉でもない。

どこるか、一番地味そうなものを引いてしまった。

そう言えば、レキは何を引いたんだろう、とこっそり見てみると……

「（……うっ）」

大吉だった。

「どうかしましたか？」

「何でもないよ……」

レインはやりきれない表情ながら、清水寺のメイン、目と鼻の先にある清水の舞台に足を踏み入れた。

清水の舞台は少々傾斜になっており、ビー玉を置けば先の方に転がって行きそうだ。

その先端に立つ。

「おー……」

思った程高くは無かったが、その景色は壮観の一言に尽きる。多少の感動を覚えたレインだった。しかし

「……レキ」

「……はい」

レインは水月に手を掛ける。レキの前に立ち、感知領域を最大約三キロまで広げた。

見つけた。

今、引き金を引こうとしている。

狙いは……

「レキ！」

鏡花水月を発動。

レインはレキに放たれた銃弾を水月で弾くと、巻き戻しのように敵の方へ返って行く。

悲鳴が上がる。それは、いきなり銃弾が飛来し、尚且つ目の前にいた男がいきなり銃弾を弾いたのだから、耐性の無い一般人にとって当然ではある。

故に、無駄な被害を蒙らないため、レキを抱えたレインは清水の舞台から飛び降りた。

またも悲鳴。舞台から身を乗り出す者もいる。

が、レインはギリギリで形成した磁場を踏みつけ、山中へ姿を消した。

レキを連れていくかどうかは迷ったが、彼女が裾を掴んでくるため同行させることにする。

電磁波によるソナーで、既に敵の居場所は感知済み。

レインは雷歩で進みながら、その眉を寄せた。

敵の、狙撃した距離。

実に2180メートルにもなるそれは、レキの絶対半径より、長大な距離である。

電磁波から、集音機などを使用していることが分かった。しかし、それを踏まえてもその超長距離狙撃は、驚嘆に値するものだった。以前のレキの時のように、薬を盛られ、武偵弾と銀弾で攻められたら危なかったかも知れない。

そんなもしもの話を考えていたレインは、足を止めた。

雷歩で全力で駆けたため、既に敵との距離は100メートル程度だ。

「レキ。敵は二人いる。」

この距離じゃやりづらいかも知れないが……狙撃手を頼む。俺はもう片方をやる」

「了解しました」

レキは僅かに頷くと、ドラグノフを構えた。

それを見たレインは、自身らの左手にいるであろう敵に、銃口を向けた。

「雷雨」

銃弾が炸裂し、破砕された銃弾の破片が木々を薙ぎ倒しながら敵に向かう。

相手は岩陰に隠れたようだったが、破片の一つが敵の肩を掠めたのを認知する。

「何のつもりで俺たちを襲った？」

一瞬で敵の隠れた岩の上に移動し、そう問う。

敵は、黒髪を左右に結わいた、所謂ツインテールで、アリアによく似た少女だった。

「教える義理、無いネツ！」

少女は口にパイプのようなものを入れた。

その先端から、シャボン玉のようなものが発せられた。

「！」

レインは飛び上がると、ブローをフルオートにし、全てのシャボン玉を撃ち抜いた。

撃ち抜かれたシャボン玉は、連鎖的に爆発する。

「爆弾かよ……便利なもんだな」

レインは少女に肉薄すると、シャボン液の入っているらしい容器を蹴飛ばそうとするが、腕で防がれた。

しかし、防電装備でも無し、レインと接触するのは自殺行為。

「はっ！」

「！！！」

レインは彼女に強力なスタンガン並みの電圧の雷を流した。

身体を痙攣させ横たわる少女。瞳の動きを確認すると、どうやら気絶したようだ。

彼女に手錠を掛けると、レインは必要ないだろうと思いつつ、レキの加勢に向かった。

敵との距離は約100メートル。近すぎる感は否めないが、銃剣も携えているため然したる問題も無い。

そう判断したレキは、自身の指を引き金に絡めた。

少女は、自分に敵意を持つアリアに似ていた。そうでなくとも容赦する気など毛頭無いが、今は何故か自然に引き金を引けそうだ。

レキは少女の狙撃銃を無力化すべく、彼女の銃口に標準を定めた。

引き金を引く。少女も同時に引き金を引いた。

互いの銃弾は弾き合い、互いの銃口に向かう。

予想していたレキは身体を翻し、追撃の準備を整える。対し、少女の銃は弾かれた。

明らかな自身の勝利。

酔いしれる感情の無い彼女にも、油断はあった。

背中に、衝撃が走る。

バットで殴られたようなこの痛み、十中八九銃で撃たれた痛みだ。

「だから中国人って嫌いなんだよね……勝手に先走りやがって。なあ、ココよお」

ため息混じりの男の声。

その、聞き覚えのある男の声に、レキは僅かに振り返った。

そして、殆ど感情の無い彼女の瞳が、確かに見開かれた。

男は防弾製であろう軍服を着用、加えて眼帯をしており、隠しきれない傷の中央を覆っていたことから軍人のような雰囲気醸していた。

金髪碧眼、ロシア風の顔立ちをした、鋭い目付きでこちらを見据えるその男。

「どうして、貴方が」

レキの口から溢れたその言葉に、男はただ口元を歪めるだけ。

レキにとって、最も思い出したくない男。

彼は、『風』の命令で、最初で最後に

「よお、久し振りだな、ウルスの蕾姫^{レキ}。

いつかの借りを返しに……いや。

殺しに来てやったぜ」

殺したはずの、男だった。

第136弾 交戦（後書き）

理「今回はお便りが来てるよ〜」

武「いつからラジオになった、このコーナー」

不「ユーザネーム、ラルドさんからだね」

白「えつと……現在『紫電の雷神』とのコラボ小説を書いて下さってるラルド様ですが、アリア二次が行き詰まってるらしいので、どなたかご意見を！」

ということらしいです」

武「緋弾のアリア く暗黒の刃〜 って題名らしい。

ってか、宣伝になっちまったな」

不「構わないんじゃないかな？ 読者が増えるのは良いことだし」

理「あ、悪どい……！？」

第137弾 完璧今更なオリキャラ設定

第137弾 完璧今更なオリキャラ設定

朝露 静奈

年齢 17

誕生日 4月9日

身長 166

体重 (削除されました)

血液型 A

所属 東京武偵高2年 SSRランクS

武装

戦扇×2

天衣無縫×2

日本の大家の一つ、朝露家の天才。幼少期、強すぎる力を封じられたが、兄の計画の際封印が解除される。

同じく2年SSRである主人公、成瀬 レインハートに想いを寄せる少女。

男口調でありポニテ。

黒髪だったが、封印が解除されると、海のように深い蒼になった。

立花 ミチル

年齢 16

誕生日 11月16日

身長 149

体重 (削除されました)

血液型 AB

所属 東京武偵高2年 情報科ランクB

武装

・ S & amp ; W シグマ

・ コンバットナイフ

濃紫の髪に、花の髪飾りを着けた少女。目付きは少し鋭さがあるが可愛い系。

父親は武装検事と呼ばれる、法務省お抱えの日本最強組織、その片割れに所属している。

後述する3年、霧矢 綾瀬と戦姉妹の契約を結んだ戦妹である。

本来Sランクの実力があるが、綾瀬と共に度々問題を起こすためBランクに甘んじている。尚、彼女らや原作の平賀 文は『格下げ』と呼ばれる、本来高ランクであるはずが、問題等で文字通り格下げされた生徒である。

尚、『格下げ』は紫電の雷神内での設定であり原作にはない。入学当初の邂逅から、レインにゾッコンである。

武装は綾瀬の真似をしたため、彼女の紹介の際は省く。

喋り方から共感するところがあるのか、峰 理子と仲が良い。

霧矢 綾瀬

年齢 18

誕生日 5月3日

身長 160

体重 (削除されました)

血液型 AB

所属 東京武偵高3年 情報科ランクA

武装

ミチルと同じ

朝露、夜雲、後述する有明と同じ大家、霧矢家の人間。

空色の髪に、割と童顔なお姉さん。

3年の中でも人気があるが、レインに夢中なご様子。

大抵のことならある程度はこなせ、勉強は大学院の講義に着いて行ける程の学力がある。

視力が悪く、最近では眼鏡を掛けてみようか、と後輩たち(ミチルとジャンヌ)に相談中。

武装はミチルが真似をした方。綾瀬は強襲科のランクはC。

また、紫電の雷神内では学年のランクはSランクとFランクを除き、学年毎にランクのレベルが違々と設定している。

例えば、3年のEランクは1年のCランク程度はある、という感じ。

有明 悠

年齢 15

誕生日 12月18日

身長 153

体重 (削除されました)

血液型 A

所属 東京武偵高1年 諜報科ランクS

武装

- ・グロツク18
- ・ナイフ×2
- ・投擲用ナイフ×10

大家、有明家の跡取り（仮）。

女であるが世間的には男とされる、『チェンジ転装生』と呼ばれる生徒。何故かはまだ不明。

レインの戦妹である。

また、有明の歩法の大半（奥義以外）を会得している。

二本のナイフは折り畳み式。本来三本あったが、後一本は（禁則事項です）。

拳銃は自身の誕生日に肖りチョイスした。

戦闘力はそこそこあるが、向くのはやはり諜報活動である。

一年の中では、表向きは男子であるはずがA Aの面子、間宮 あかり、火野 ライカ、佐々木 志野と仲が良い。

気配を消すのは達人並み。

アレックス

年齢 17

誕生日 4月20日

身長 178

体重 58

血液型 O

所属 東京武偵高2年 SSR

ニューヨーク武偵高 強襲科

ランクは、レインと同じく秘匿されている。

武装

- ・ 戦斧（現在平賀に改造を依頼中、また、現在名前が無い）
- ・ 小剣×2（袖口に装備）

赤い髪で切れ長の目をした青年。

戦闘狂な訳ではないが、ハイになると口調が戦闘狂じみってくる癖あり。

戦闘力はとんでもない。

レインと同じくG30オーバーの実力者であり、風使い。レインが『雷神』であることもあり、『風神』という二つ名がついた。

その能力は圧倒的で、竜巻の発生や鎌鼬は勿論、風で飛ぶことや銃弾を粉微塵にすることも可能。

また、レインやキンジのような肉体強化は無いが、それ抜きでもSランク以上の実力を持つ本物の天才。しかも努力を惜しまないというオマケ付き。

日本文化が大好きで、普段は漆黒の着物に身を包んでいる。

また、侍や忍者、巫女にも興味があるようで、白雪やキンジの家の話を真剣に聞く、などということも度々ある。

アレックス

「やっとこさプロフィール開示か……仕事が遅えんだよ、作者」

綾瀬

「貴方はまだいいじゃない、アレックス君……」

ミチル

「そうだよ……」

悠

「僕なんか、オリヒロインの中で一番遅いのに42話初登場です」

プーモ

「ああもう分かったお前ら！ そんなに出番欲しいならあげちゃうから許して下さいそして銃下ろして本当に申し訳ありませんでした」
皆

「……………良し……………」

プーモ

「でも自分の力量では無理だ」

皆

「……………使えねえな……………」

プーモ

「おい！ ……まあいい。

という訳で、50話でもやったけどプロフ紹介に便乗してのオリキヤラ貸し出し（なんと全員！ ヤフーヤフー！）です！

勿論、レインを出してくれても全然オーケー。

分からない詳細があったらメッセージにて、『プーモのオリキャラを使ってやってもいいぜ！』という方は感想にてご通知下さい！
メッセージでもいいですけどね！」

綾瀬

「うわ、他の作者様に丸投げした」

悠

「駄目作者です……………」

プーモ

「ゆ、悠までそんなことを……………！ いつからこんな娘にっ！」

悠

「え？ 僕、元からこうでしたけど？」

プーモ

「……………」

第138弾 神を謳いし王の雷

第138弾 神を謳いし王の雷

目の前に立つ男に、驚愕の表情を浮かべるレキ。

彼女を見下すような視線を送る男は、その手に持った銃の銃口をレキの額に向けた。

その指が引き金を、引く 直前。

男が飛び退いた。

男の顔があつた空間を、『影』が亜音速で過ぎ去った。

「レインさん……」

「平気かい、レキ」

紫電を纏った、レインであった。

彼はレキを守るように、男の前に立ち塞がる。

男の方に視線をやったまま、彼はレキとの話を続ける。

「済まない。敵と戦闘していた所為で接近に気づかなかつた」

「いえ……」

そう言い立ち上がるうとするレキだが、その顔色は優れない。普段の無表情が、それを加速させているようにも思える。

レインは改めて男に向き直った。

『加速』で人間の限界を突破した速度の蹴りを、不意打ちで向けたにも関わらず、それを全く見もしないで交わした。

余程の感知能力があるのか、体術が人間の域を凌駕しているのか。どちらにせよ、その実力は半端ではない。

レインは警戒を強めると同時、感知領域の中で双子らしい、レキの相手をしていた少女がレインが縛った少女を担いで、逃げようとしていた。

しかし、今追うのは得策ではない。寧ろ、この男を放置するのは危

険過ぎる上、レキは動けそうもない。

「いくぞ……！」

レインは雷神化の出力を高め、瞬く間に男に肉薄。

雷神化したレインの攻撃は、防電装備でもない限り、接触すらままならない。

武器を介そうが、高圧電流が流されるのだ。

それを理解しているのか、男は鮮やかにレインの攻撃を交わしている。

身体を中心に突き出された右の拳を、半身になって避ける。

軸足を刈るように横雑に振るった足は跳んで避け、森であることを利用し枝に掴まって追撃から逃れた。

「へえ……あんたやるなあ。何で『琉璃』の影響受けてねえんだ？」

「……何の話？」

「こつちの話だ！」

今度は男が発砲してきた。

ソナーから反応が感じられないことから、銀弾であることを看破する。

「『鏡花水月』！」

レインは鏡花水月を発動、銀弾を全て弾くと、巻き戻しのように全ての銀弾が跳ね返っていった。

余談だが、レインはこのことから、鏡花水月は超能力に含まれないことを確認した。

男は……今度は左手に別の銃を持ち、銀弾を放った。

その銃弾は全て、跳ね返された銃弾に当たり、その軌道を逸らした。レインの方向に。

「ちいっ！」

レインは跳んで避けようとする。しかし……ソナーを張っていた所為で、気づいてしまった。

射線上に、レキがいる。

このままでは、彼女に4発の銃弾が当たる　　！

レインは何とか鏡花水月で再び銃弾を全て弾いたが……その間に、男は銃弾を再装填し、二丁拳銃のフルオートで銃弾をばら蒔いた。レインはレキを連れて離脱しようとするが、そんな暇は無い。何とか鏡花水月で全てを打ち返した。

しかし……男の狙いは、レキ。彼女に向けて、銃弾の雨を降らせる。レインは鏡花水月だけでなくブロウによる『銃弾撃ち』も合わせて全ての銃弾を弾く。

しかし、その均衡も敗れ去った。隙を見つけたレインは、雷弾を男に放った。

しかし……男はそれを跳んで避けると、懐から銃を取り出し、引き金を引いた。

弾頭の色から考えて……武偵弾だ。

認識した時には遅く、その銃弾は弾ける。

飛散弾　レキがかつて使用したその銃弾は、銃弾の破片で攻撃する。しかし、それならば電磁力で跳ね返せる、と油断していた。

電磁力に反応しない。

武偵銀弾……！

一発百万円する武偵弾、その対超能力者バージョン。

しかし、最早それを生成できる銃弾職人はこの世にはいないはず。ともかく、対応が遅れた。

レインは降り注ぐ銃弾の破片を鏡花水月で弾く。が、内数発がレキに向かった。

レインはレキと破片の間に割ってはいる。計3発の破片が、レインに突き刺さった。

「ぐっ……！」

内一発は当たり所が悪かった。下手を打てば骨折しているだろう。

レインは膝を着きながらも男を睨み付けた。

「流石、『紫電の雷神』なんて立派な武偵さんは違っねえ。

女の子を守るためなら身を呈して、ってか」

男は嘲笑を浮かべ、止めを刺そうとしてか、レインに歩み寄り、銃

口を頭に向けた。

……しかし、余裕ぶった男の一手は、とんだ悪手だったと言わざるを得ない。

「終わり　!?」

男が、引き金を引こうとした直後。

目の前で宙を舞う、一発の銃弾が視界に入った。

弾頭を黒く塗り潰されたそれは　武偵弾。

理解すると同時、爆音が一帯を支配した。

「……………く、レキ……………！」

目の前に横たわる少女を抱え、レインは立ち上る紅蓮の炎を避ける。炸裂弾。砲弾並みの破壊力を有したその銃弾が、敵を爆破しようとした直前、射程範囲にいたレインの前に、レキが立ち塞がった。

武偵弾を放ち、尚且つレインを庇いその被害を受けたレキは……………重傷だ。

「ちい……………蕾姫、お前……………覚えてやがれ」

男は言いながらも、身体を動かせていない。レインは男を放置しながら、レキに呼び掛ける。

「レキ、レキ!……………レキ!」

「……………レイン、さん」

呼び掛けが届いたのか……………レキは、目を覚ました。

が、その顔からは血の気が引いており、危険な状態であることは明らかだった。

「なんて無茶をしたんだ……………一歩間違えれば、死んでたかもしれないんだぞ!」

「……………構いません。私は、風の命令のまま生き、死ぬつもりでしたから……………ここで私が死んでも、私の家族が、ウルスを継続させる使命を負います」

レキは淡々と語るが、レインの表情は沈む一方だ。

それに気づかないレキは、更に続ける。

「私は敗北しました。」

貴方を守ると決めたのに、守るところか、逆に守られてしまいました。

私に、貴方の花嫁の資格はありません」

レキの額から赤い血が滴る。

黙っているレインの拳は、固く握られていた。

そして、レキの怪我が酷くて気がつかなかったが、彼らの周囲から、殺気が幾つも放たれているのが分かった。

闘犬、シャー・ペイ。

中国なんかじゃ、猟犬や軍用犬にも起用される獰猛な犬だ。

ただ、そのサイズはレインが教本で見たものより大きい。品種改良でもされているのだろう。

「……逃げて下さい。」

私は足手纏いになります」

「……馬鹿言うなよ、レキ！」

お前、こんなところで死んでもいいのか!？」

「先ほども言いました。」

私が死んでも、代わりはいます」

「馬鹿、野郎……!」

レインが、レキの肩を握る手に力が籠る。

そのレインの感情を察してか、レキは彼の手に、自らの手を重ねた。「レインさん。私は、今まで自分の感情が無いと思っていました。」

しかし……貴方という存在が現れて、私は……私には、感情というもの芽生え始めたようです。

貴方の作ったご飯を食べて。

貴方に買って貰った服を着て。

貴方の婚約者になれて。

私は、幸せだと思ったのです」

そう言った、レキは 笑った。

いつも見せる、少しだけ嬉しそうだとか、その程度の感情表現では

ない。

確かに、笑ったのだ。

「貴方に出会えて 良かった」

レキが、弱々しく言った、その言葉で。

スイッチが切り替わるように レインの身体に、異変が起きた。

その異変に、レキは気づかない。

「行って下さい。」

私に、『想い』を抱かせてくれた貴方に、感情をくれた貴方に。

私は……死んで欲しく無い」

レキの言葉の通り、レインは立ち上がる

「……馬鹿。」

お前は、本当に馬鹿だよ」

レキを、抱えたまま。

「俺だって、お前に死んで欲しく無い。

お前は、俺の大切な人なんだから」

「……！」

今度は、驚いたような表情を作るレキに、レインは微笑みかけた。

それでいい。

少しずつでいいから、感情を表に出して行けばいい。

金髪の男の方を一瞥するが、闘犬に助けられたのか、この場には居

なかった。

代わりに、レインとレキに闘犬が飛び掛かって来た。

レキが自分を置いていくよう言ったのは、この状況を恐れて、だっ

た。

レインの能力は雷。

圧倒的に、多人数での戦闘には向かない能力だ。

レインは力を使えない。

自分という、重荷を抱えているから。それが、レキには耐えられな

かった。

レキは、自分がレインに迷惑を掛けるのが、嫌だったのだ。

最愛の人を、抱き締める。

そこでようやく 気づいた。

レインからは、雷が迸っていた。

それも、普段の紫でない、黒き雷。

しかも、レキに触れても、彼女は感電しなかった。

何が起こっているのか、理解が追いつかない。

闘犬が飛び掛かる。

レインは 微動だにしない。

ただ、僅かに唇を動かした。

レキが読唇術で読んだその言葉とは 『大丈夫。』

俺が、絶対守るから』

そして、大きく息を吸い込む。

漆黒の煌めきが辺りを支配し、レインは紡ぐ。

その詩を。

「我、雷の名の下に誓う。

左手には救済を。

右手には守護を。

魂には、誓いを守る、絶対の力を。

闇を切り裂く誓いの刃」

黒き煌めきは弾け、彼の髪が、瞳が、漆黒に染まる。

「『神を謳いし王の雷』！」

その名を叫んだ、刹那の出来事だった。

黒き雷の瞬きが、その場に走る。

闘犬たちはその全てが感電し、その場に倒れ伏す。

レインが、今の一瞬で全ての闘犬を押し伏せたのだ。

レキを、感電させないまま。

「…………ぐっ！」

突如顔を歪めたレインは、その場に膝を着いた。が、それは今の衝撃で骨が何本か逝ってしまったからだ。やがて黒い雷は終息していくと、完全に消えた。

「レインさん……………」

「大丈夫、だよ…………レキ」

口ではそう言うが、酷使した身体は歩けるか分からない。

そんな二人の前に、白銀の体毛の狼　ハイマキが、現れた。

「お前、どうして……………」

「抜け出して来たようです」

どうやら賢い狼であるハイマキは、主人のピンチに駆けつけてくれたようだった。

「（偉いな、ハイマキ…………後で魚肉ソーセージ、奢って、やら、なきや…………）」

そこまで考えたところで、レインの意識は暗転した。

「すみません、ハイマキ。二人も運んで貰ってしまい
グルルルル、と喉を鳴らしたハイマキは、恐らく『気にするな、お前の体重なんてあって無いようなものだ』などと言っているのだらう。」

今、二人はハイマキに運んで貰い、ようやく一般車道に出たところだった。

レキの目の前には、レインがハイマキに担がれる形で横たわっている。

その寝顔は、普段のようによくすりとお眠っていることを示していたと、そんなことを考えていたレキの視界が、歪み始めた。

「（…………止血はしたはずなのですが）」
レキの脇腹から、滲む赤い染み。

男の銃弾は、装甲貫通弾だった。

何とか身を翻し、直撃は避けたものの、やはり血が足りない。

早く、自分が気を失う前に病院を見つけねば 焦るレキの前に、黒塗りのセダンが一台、止まった。

警戒を強める彼女だったが、数秒後、それは霧散した。

中から出てきたのは、白いリボンが頭に乗った白雪と、心配そうに駆け寄ってくる見慣れた少年、遠山 キンジだった。

第139弾 蕾姫

第139弾 蕾姫

『黒』が、彼方を見据えていた。かつてレインが『王』と呼んだそいつは、彼の視線に気づいたようで、首を回して振り返った。

そして、そいつの身体から迸るのは……黒い、雷。

「……ここは……？」

ゆっくりと瞼を上げたレインは、見知らぬ天井にそう言葉を洩らす。

「起きられましたか」

掛けられた台詞に、条件反射で聞こえた方に振り返る。

そこには、白雪……に、よく似た少女がいた。

サイズから考えた結果、粉雪かとも考えた。しかし、彼女がこんなに礼儀正しい反応をとるとは、正味な話、考えづらい。

「えと……」

「申し遅れました、私は星伽 風雪。白雪姉様の妹です」

ということは、ここは星伽神社なのだろう。

白雪は京都に分社があると云っていた。

「あ、ああ。俺は成瀬 レインハート。白雪……さん、とキンジの仲間だ。」

ところで、俺は何故ここに？」

「お身体を酷使されたようで、成瀬様は気を失っていました。」

貴方が気絶した後、蕾姫様がハイマキ様に背負われているのを発見、重傷だった貴方を含め、すぐにここに搬送したのです」

風雪の簡単質素で分りやすい説明を受け、レインは折れた骨の辺り

に手を遣る。

しかし、怪我の感触は感じられなかった。

「あれ……?」

「勿論、治療は施してあります」

その疑問の声を耳敏く拾った風雪は、一言付け加えた。

「が、彼女が付け加えたのは『一言』であり、起こった事象は秘匿されている。」

分社とはいえ、星伽神社の巫女は治療技術も発達しており、そこいらの国立病院程度の治療は出来る。また、鬼道術による超能力者の観点からの治療も本来なら可能だった。

今回はレインやレキにその術は使用不可能だったのだが、その理由は割愛しよう。

しかし、如何に星伽の治療が優れていようと、何本も折れた骨をこの短時間で修復するなど不可能。例え、鬼道術が使用可能だったとしても結果は変わらない。

ならば、何故レインの身体から傷は消えて失せたのか。

単純な話が、レインの傷はもう治り掛けていたのだ。

あり得ない話だ。

人体の、文字通り骨組み足る骨が、高々一、二時間で治るなど、人間に許された領域を逸脱している。

そう、それは例えるなら

「（成る程、この規格外さ……雷『神』の名を冠するのは伊達ではない、と）」

レインの二つ名に、僅かばかりの納得を見出だした風雪は、もう立ち上がれるらしいレインを連れて、キンジと白雪の待つ間に向かった。

星伽神社の社内には、見知った白銀の髪の少女……ジャンヌがいた。駆けつけてくれたらしく、レインの傷も看てくれたそうだ。

彼女の話によれば、レキの治療はまだ終わってないらしい。あの爆発を、直接でないとはいえ食らったのだ。当然と言える。

そんなことや、風雪からトイレの位置などを聞きながら歩き、やがて重厚な間に辿り着いた。

す、と風雪が極めて静かに襖を開け、それに倣いレインも足音を消して中に入る。

しかし、気配を悟らせなかったのは失敗と言えた。

「キンちゃん、ど、どうかな……」

「ん？ あ、ああ旨いよ」

「本当！？ えへへ……もつと食べて、いっぱいあるから……な、

何かこの会話、夫婦の会話みたい……夫婦！？ キンちゃんと、私が、夫」

「お〜い戻ってこい白雪」

キンジに額を小突かれ、白雪はようやく目を覚ました。

「……風雪ちゃん。もしかして、俺にノロケを見させるために連れてきた訳じゃないよね？」

「いえ、そのようなことは……しかし、確かにこれは見ていて辛いですね」

丁度良いタイミングで夫婦漫才を見せられたレインは、露骨な呆れ顔を浮かべた。

隣に立ち尽くす風雪もまた、同じような表情をしていた。

「あ！ 成瀬君、起きたの！？」

「ああ。お陰様だね」

レインは風雪に案内され、自分の飯の置いてある席　キンジの右隣に座った。

「何があった？」

「というのはキンジの質問。」

それは、友人が怪我をしていて倒れていたのなら、例え武偵でもその質問が出るのも当然かも知れない。

レインは一瞬、話すべきか思案したが……やはり、話すべきなのだ

ろう。

二人に、自身らに起こった事を説明した。
少女らとの戦闘、金髪の男、レキの負傷、そして漆黒の雷 『神
を誣いし王の雷』。

「……まさかとは思いましたが……」
白雪が驚愕している。

今は自身の意思では出せないあの黒い雷の存在は、白雪 星伽に
は認知されていた、ということだろうか。

今考えてみれば、自身の師も、晴夜との戦闘の後『王雷』が何だ、
とかを話していた気がする。

「……分かりました。
成瀬君、貴方に説明します。レキさんの正体と、その黒き雷につい
て」

白雪の真剣な表情に、思わず姿勢を正したレインは短く首肯した。

「成瀬君の身体に宿る黒い雷……日本的な通称は『王雷』ヴァジュラ だけど、
正式な名前は『神を誣いし王の雷』。

ヒンドウー教では雷霆神、バラモン教では天空の雷神とされる最高
神インドラ、彼が持った雷を象徴する武具、と言われているの。

成瀬君は、その力を持っているんだよ」

「え、と……神様の、武具？」

「はい。その力です」

「な、なんで俺がそんな物騒なものを……」

「それが、分からないの」

「……さ、さようですか」

あまりに壮大な話に……正直、着いていけてなかった。冷静に考え
たら疑問だらけな事態だが、今は頭がパンクしていて上手く制御出
来ない。

白雪の長々と続く説明も、右耳から左耳（逆もまたしかり）に流
れていった。

「……と、成瀬君の状態についてはこんなもの。次に、レキさんについて」

一頻り話終えた、と言った様子の白雪に、レインは現実に戻された。

「成瀬君。色金、というものはご存知ですか？」

色金。

その単語を頭の中で検索すると、かつて師匠^{カナ}の言っていた事を思い出した。

「ええと……人の心に通ずる超金属で、所謂『超常世界の核物質』……だったかな？」

実物を見たことがないので分からないが、彼の記憶ではそのような形容をされていたはずだ。

「うん。だけど、心が通じる人間には限りがあるの」

頷きながら。白雪の説明に耳を傾けている。すると、そこにキンジが乱入してきた。

「それなら知ってるぞ。」

確か、緋緋色金　緋弾を覚醒させられるのは、子供っぽくてプライドの高い人格……」

「……まんまアリアじゃないか」

「だからアリアが緋弾を　むぐっ!？」

キンジがいい掛けて、白雪が慌てて口を押さえた。しかし、レインはもうその内容を理解してしまった。まあ、キンジがほとんど口走った感があるが。

「……続けて？」

「……済まん」

キンジが一言謝罪し、白雪がそれを必死にフォローする。

そんな光景を見せられたのは少しの間で、改めて白雪は向き直り咳払いした。

「キンちゃんと言ったのは緋緋色金の場合。色金には幾つか種類があるんだけど……その内の一つが、璃璃色金」

緋緋だとか琉璃だとか、名前が厳ついな、なんて考えながら白雪の次の言葉を待とうとする。しかし、ここでもせつかちなキンジが割り込んできた。

「そいつをレキが持ってたのか？」

「違ってみたい……レキさんは多分、郷里で琉璃色金のそばにいたんだよ。」

琉璃色金と心を通じる、かの地の巫女のような存在として「レインが首を傾げる。」

レキが色金の近くにいた、とはどういうことなのだろう。

その疑問に答えるように、風雪が小さな巻物を取りだして広げた。

第139弾 書姫（後書き）

理「星伽神社かー、巫女さんいっぱいいるかなあ？」

白「勿論！ 私の妹たちもいっぱいいるよ！」

武「白雪さんの……実家ああ！」

不「このコーナー、最早キャラ崩壊なんて気にしちゃいないね」

第140弾 ウルス

第140弾 ウルス

「それは？」

レインは興味深そうに、広げられた巻物に視線をやった。

「星伽史西聞、星伽神社に伝わる史書ですが　ここに、璃璃色金にていての記述があります。現代語訳すると……」

『璃璃色金は穏やかにして、その力、無なり。人の心を厭い、人心が災厄をもたらすとし、ウルスを威迫す。璃璃色金に敬服せしウルスは、代々の姫に己の心を封じさせ、璃璃色金への心贄とした』とあります」

何度か聞き覚えのあるその単語に、レインは眉を寄せた。

ウルス。確か、レキが何度か口走っていたが……レインの記憶によれば、家族という意味だったはずだ。

「やはり、ウルスだったか」

そう言ったのは、銀の髪を僅かに揺らすジャンヌだった。何かを思案しているのか、その瞳は閉じられていた。

「知ってるの？」

「お前に調査を依頼されたからな。それに元々、色金を保有する組織としてイ・ウーとウルスには親交があったからな」

ジャンヌは腕を組み、碧眼を開くとレインに向き直った。

「中空知に依頼した音響解析の結果で出てきた場所に住む民族の一つが、ウルス族なのだ」

聞いたことがないようなキンジは、頭に疑問符を浮かべていた。それはレインも同様で、ウルス族とはどの部族なのか、皆目見当も着かなかった。

「ウルス族は隠れた少数民族だからな。知らないのも無理はない。」

だが……彼女らの祖先のことは知っているはずだ。

その弓と矢でアジアを席卷した、蒙古の帝王　　チンギスハーン。
ウルス族は、彼の末裔なのだ」

キンジは驚いているようだったが、レインに驚愕は少ない。というか、キンジだって遠山の金さんの子孫なのだから、一般人からしてみれば随分珍しいはずだ。

「ウルス族は弓や長銃のずば抜けた腕を持つ傭兵の民だった。だが、次第に数が減っていき……シャーロックが色金絡みの交渉をしに行った時には、もう47人の女しかいなかったらしい」

レインは僅かに納得する。

ああまでして男である自分を（何故自分なのかは分からないが）引き入れようとしたのも、その辺に理由があるのかもしれない。

「成る程……レキだからレキは日本人の顔立ちをしてたのか」と、レインは頷いた。

それに対しキンジは未だ疑問の表情を浮かべたままだ。

「どういうことだよ？」

「彼女が日本人っぽいのはチンギスハーン……つまり、源義経の子孫だからだ、って話だよ」

と、先日テレビで得た知識を披露して見せる。が、それを見ていたのはキンジも同じなので、無論反論してきた。

「あれは作り話なんだろう？」

「作り話、ってことにしたの。星伽がね。」

星伽神社は当時、源義経が大陸に渡るのを手伝ったの

後は、蕾姫レキという名前がウルスの純血姫が代々名乗る名だとか、そんなことだった。

それにしても……楽しいはずの修学旅行がこの様とは、あまり嬉しくない。

レインは食事を終え、箸を置いた。

レキが眠っているため、雨上がりの縁側でレキの銃の整備をしてやることにした。

レインは整備道具を取り出すと、レキのドラグノフを丁寧に整備し始めた。

「……と、しばらくドラグノフを弄っていると背中に気配を感じ、一瞬だけ指を止めた。

「……ジャンヌかい？」

「ああ。大丈夫か？」

隣に座ったジャンヌに倣い、整備を終えたレインは長座した。

「お前も治療してくれたから、分かるでしょ？ もう大丈夫だよ」

「……身体では無く、心の方だ。いきなり神の武具の力がお前に宿っているだとか、レキが源義経の末裔だとか……」

「……心配してくれるんだ？」

レインは、最近長くなってきた髪の間から、横目にジャンヌを見た。レインと同じく銀の髪を持つ彼女の頬は、どこか赤らみを帯びている気がする。

「う、うるさい。私の勝手だろう。」

とにかく 私は間もなく京都を発つ。

ホームズ4世の母の弁護士に会わなくてはならないのでな」

弁護士……つまりは、かなえさんの裁判なのだろう。

イ・ウーに冤罪を着せられたアリアの母、かなえさんの裁判は、準備日間整理手順という再審前の準備中らしい。

まずは嚴重に拘留されている小夜鳴……ブラドに接見、加えて裁判の証言者となるジャンヌと打ち合わせをする予定となっていたらしい。

……レインとしては、かなり不安ではあった。

前に調べたところ、かなえさんの逮捕はあまりに証拠不十分だったに関わらず、特例で逮捕されたらしい。

イ・ウーという強大な犯罪組織の名に怯えてのこと、とも取れなくはないが、それにしても随分手際が良い。否、良すぎる。

レインからして見れば、背後に糸を引いている者がある、と考えるのが自然だが……何の確証もない。杞憂ということもあり得る、というよりはその確率の方が高い。

仮にそれが当たっていたとしても、あまりに分が悪い。

と　いつしか考えに耽っていたレインに、ジャンヌの視線が突き刺さった。

「……先の話によれば、ウルス族のルーツはサムライだったらしいな」

「らしいね」

「……もしか、昨日お前たちが追い詰められた時、レキは何か非常識な行動を取らなかったか」

ジャンヌの言葉に、レインは昨日のことを思い出す。

爆発から自分を守ってくれたくらいだ。

後は……闘犬に囲まれた時に、自分を置いていけ、と言っていた。

後に調べたところ、ポケットにはまだ武偵弾　炸裂弾があり、風

雪は闘犬を巻き込んで自爆しようとしたらしい、と言っていた。

「ウルスには、サムライの切腹ハラキリと同じ文化がある。

『最後の銃弾』　残弾が一発になり、それを使っても活路を見いだせない程追い詰められた時、もしくは自分が主人の足手まといになった時……その銃弾で、自害するのだ」

「……………」

レインは胸を撫で下ろす。

もし、あのまま少しでもレキから離れていたなら……レキは、残りの命を棄てて自爆していたかもしれない。そんな恐怖を捨てきれないままに、ジャンヌは言葉を続ける。

「彼女らは一発の銃弾のように、目的に向かって一途に生きる。そして戦い続けるのだ。

最後の銃弾で、己の人生を閉じるまで。刀に殉じた、古のサムライのようにな。

レイン、気をつける。レキは、そういう女だ」

ジャンヌがそう言い立ち去るのを後ろから見ながら……レインは、レキが狙撃する際に口走る詩を思い出していた。

私は、一発の銃弾。違う。

銃弾は人の心を持たない。

レキは人間だ。

ただ、目的に向かって飛ぶだけ。

銃弾なんかじゃ、ない……！

続けて思い浮かべたのは……レキの言葉を聞いた瞬間、頭に浮かび、自然に詠じていた詩。

左手には救済を。

自分の左手を開く。この手で、彼女を救ってみせる。

右手には守護を。

自分の右手を握る。この手で、彼女を守ってみせる。

魂には、誓いを守る絶対の力を。

自分の胸に、手を当てる。

誓おう。

あの時と、同じ言葉で。

「俺が絶対 守るから」

レキが寝ている、後ろの部屋に……レインは、静かに右手を突き出した。

「……それでこそお前だよ」

隠れてレインの様子を窺っていたジャンヌは、人知れず呟いた。その銀髪は風に揺れている。

白雪が呼びに来たようで、足音が聞こえる。

ジャンヌは僅かに袖で目元を拭い、迎えに来てくれた白雪について行った。

少なくとも今、あの男の心はあの少女でいっぱいなのだろう。

だがそれでも、ジャンヌは諦めようとはしない。
いつも彼を見てきた。常に可愛い、自分が憧れるような美少女に囲まれる彼を見て、競争率が高いのも分かっていた。
それでも……自分は、あの男が好きだから。
ジャンヌは微笑を浮かべると、男の方を一瞥する。
空を映す水溜まりは、何時の間にか凍っていた。

第140弾 ウルス（後書き）

理「ぶーぶー。いいなー、レキユばかり。こっちは寝てるからフ
ラグも立てられないって言うのに」

不「峰さん、大変だね……」

武「不憫な……」

白「でも、作者さんの話だとオリジナルではジャンヌと一緒に活躍
するって」

理「マジで!？」

白「ちなみに、武藤君と不知火君はオリジナルにはほぼ出てきませ
ん」

二人

「「なん……だと……!？」」

第141弾 再戦

第141弾 再戦

……その昼。

未だレキが眠っている中、レインはキンジヤ風雪、果ては星伽のお抱え運転手、蒔江田さんにまで言われ、リラックスという名目で京都の街へ繰り出していた。

しかし乗り気でない彼は、適当に街を闊歩しているだけと言える。しかし……自然に、足は昨日の戦闘場所へと向かっていた。

辺りに散らかった集音機などの機材。闘犬は皆救出されたようで、その場からレインが感知できる範囲にはいなかった。

「……」

レインは、金髪の男のことを思い出していた。

レキには、嘘をついていた。

少女と戦っている間も、他の狙撃手の存在を考慮し、常に感知領域を最大まで広げていたのだ。

しかし……どういう訳か、男は、突然、感知領域のほぼど真ん中に居た。

そしてそんな真似が出来そうな人間を、レインは一人しか知らない……いや、知っていた、というべきか。

「……お久しぶりです、姉さん」

振り向かずそう言ったレインの背後には……白銀の髪を伸ばした、妖艶な女性……夜雲 アリスが、悠然と佇んでいた。

「ふふつ 良く分かったわね、レイン？ ソナー使っていないのに」

「そっちは風上ですからね。香水で分かります」

「へえ……たった二回しかあったこと無いのに、随分私のこと分かってくれるんだね！ 嬉しいなあ、嬉しいなあ！」

アリスは万歳しながらその場をくるくると回り、レインに抱きつこうとしてくる。

それをひらり、と交わし、レインは改めて実姉、アリスに向き合った。

「姉さん……あの男は、貴女の差し金ですか」

「私は雇われただけ。瞬間移動なんて便利な超能力は需要あるのよね」

と、両手をあげてため息をつく。需要がありすぎるのも考え物、ということだろう。

しかし、これで疑惑が確信に変わった。

あの男が突然現れたのは……アリスの超能力、だったのだ。

「……それにしても、姉さん。貴女にはその超能力があるとはいえ、迂闊ではありませんか？」

「そうかしら？ 私は大切な大切な弟の顔を見に來ただけなんだけどなあ」

「そうですね。態々……武偵の前に姿を現すなんて、ね」

言葉と同時に、アリスは瞬間移動でレインの背後に移動する。刹那、

先程アリスがいた場所を、水月が通り過ぎた。

手応えが無いのを気にする暇も無く、レインは後ろにいるアリスに向けて磁力で固めた砂鉄を刃に形成し、突き出す。

アリスはまたも瞬間移動し、今度はレインの右後方にいた。

「！」

反射的に雷を放ち感電させようとするが、彼女は直ぐ様瞬間移動。近くの木の上に姿を確認する。

「頗る厄介な能力ですね……」

「ふふ、そうかもね。」

まあ、弱点と呼べるものはあるから、頑張っ探してね」

「そりゃどうも……」

レインは内心で毒づく。

先程から彼女、アリスは武器を一切使っていない。

つまりは、その必要はないと思われているのだ。

レインはプロウを抜き、アリスに向けた。

磁力を利用し、音速の3倍で銃弾を打ち出す。

『雷砲』と呼ばれるその銃弾は、アリスが反応するよりも早く、彼女を感電させるはずだった。尚、直接当てたら吹き飛ぶので、電撃の余波のみが彼女を捉えるように外して撃つてある。

が……レインが引き金を引いた瞬間には、アリスはその場にいなかった。

「！」

レインは振り向き様に雷雨を三発放つ。

その銃弾は木々を薙ぎ倒し、その場にいる人間はただでは済まないだろう。

しかし、再び林の中から気配が消え失せた。

「（くそ、捉えられない……！）」

ならば、とレインは、地面に紫電を走らせる。

そして空に銃弾を放った。

「雷雨！」

当たらないなら、一帯を攻撃する。

文字通り雷の雨は、しかしアリスを捉えることは叶わなかった。

「うふふ　鬼さんこちら」

アリスは木に足を掛けて逆さ吊りになりながら笑っていた。

レインは指を鳴らし、地面の砂鉄で形成した砲台から雷を放つ。しかし、それはまたしても空を切った。

切りがない、と心の内で悪態を吐くと……戦闘中故1500メートル、つまり半分にまで減った感知領域に狙撃銃を構える者を察知した。

レインは地面から砂鉄を磁力で操作し、盾にする。その直後に、銃弾が盾に弾かれた。

感知した結果、銃を構える男は先の戦闘で武偵銀弾を使った男で間違い無いらしい。

「（あの男……狙撃も出きるのか。

1487メートル……ランク的にはA、否一般的なSってところか）

「アーマーピラス銃弾は装甲貫通弾だったが、硬化した砂鉄の前には貫通は不可能だった。

レインは弾かれた銃弾を拾うとそれを放り投げ、雷砲の要領で男に撃ち返した。

……男は避けたようだが、どうやら気にしている暇は無いらしい。今度はアリスが、背後に現れた。

レインが悪態を吐きながら、振り向き様にダガーを投擲した。

雷刃でコーティングしてあるダガーは、アリスに交わされて林の木を貫通していった。

「（姉さんの能力相手じゃこの手の攻撃は効かない……なら）レインはダガーを両手に四本ずつ……計八本持つ。

が、それらは投擲されない。

レインが自身の前の空間にそれらを添え、手を離すと、ダガーが宙に浮いた。

が、テレキネシス念動力な訳では無く、単純に磁力で浮かせているだけ。

「手品も出きるなんて、流石私の弟ね。そこに痺れる憧れる、ってね」

「手品なんて生易しいものかどうか……試して見て下さいよ」

レインが指を鳴らすと、ダガーは多角的な動きを見せ、アリスに向かった。

「へえ楽しそう！

じゃあ私も……少しだけ、本気出しちゃおうかな」

アリスがそう言うのと……両手に、刀が現れた。

瞬間移動の応用なのであろう、物体移動。しかし、目を見張ったのはそれとは別の事象……つまりは、現れた刀。

その刀に、レインは見覚えがあった。

「まさか……『神無月』!？」

五月が一、二対一刀の刀……神無月。
それを、アリスが持っていたのだ。

「ふふ、流石レイン。」

一度しか聞いてないはずなのに、良く分かったね？

ちなみに、左手のが『神月』、右手のが『無月』よ」

不味い　レインの頭は、埋もれかけた記憶の中から神無月についての記憶を引つ張り出す。

水月が『最強の防御』、月影が『最強の攻撃』とするならば、神無月は『最強の速度』　即ち、『最速』。

日光に反射した光が瞬いた次の瞬間には、ダガーは全て、その切っ先を断ち斬られていた。

夜雲流とも違う太刀筋。

警戒するレインは水月を構え直すと、『加速』で一瞬で距離を詰め、アリスに斬りかかる。

しかし、やはり切り結ばせては貰えない。瞬間移動、実に厄介な能力だ。

レインが瞬間移動の対策を練っていると、突然アリスが別の方向を向いた。

そういえば……先刻から、男の銃弾が止んでいる。

レインは改めて、警戒を怠らずに感知領域を最大まで広げると……

男は、何者かと撃ち合っているようだった。

何者？　決まっている……！

「レキ！」

レインはアリスのことを放置し、全霊の力で駆けた。

もし、アリスが一瞬でレキの後ろに現れて、もし、レキが気づく間もなくその首を

最悪の想像を、頭を振ってかき消す。

「（レキ、レキ、レキ！

無事でいてくれ……！）」

レインはまだその感知領域にレキを捉えた訳ではなかった。男より

更に二キロ離れていたから、仕方無いことではある。

やがて、とんでもないスピードで駆けている内に、レキがソナーに掛かった。

「！」

まずは安堵する。レキは健在だった。

しかし、残り三キロ程の距離、詰めるには時間が掛かり過ぎる。

どうするか思案していると……

「！」

レインの頭に、名案が思い浮かんだ。

第141弾 再戦（後書き）

白「瞬間移動……厄介ですね」キリッ

武「（真剣な白雪さん可愛え）」

不「台無しだね」

理「台無しだよ」

第142弾 イヴァン（前書き）

ご都合主義です。はい。

言われなくても分かってますとも！

第142弾 イヴァン

第142弾 イヴァン

男は、髪が紫に染まった少年、通称『紫電の雷神』を狙撃するも失敗したため、銃弾を再装填していた。

「（……サシでやったら勝てそうにないな）」

その圧倒的な能力を前に戦慄を覚えながらも、男は冷静に刀を構える『紫電の雷神』に標準を合わせようとする。しかし

「ッ！」

銃弾が飛来する。

それを地面を蹴って何とか避け、飛んできた方向を見据える。

あの一撃、受けていたら脊椎と胸椎の間の上部分を圧迫され、身体が麻痺していた。

こんな芸当の出来る狙撃手に、心当たりがあった。

「蕾姫……！」

男は苛立ちとも歓喜とも取れる表情を見せ、狙撃銃の銃口を、銃弾が飛来した方向に向ける。

「……見いつけた」

男はそのスコープの中に、碧髪の少女を見た。

かつて、自分を殺そうとした少女を

男の名はイヴァン。ロシアの人間だった。

元々優秀な軍人の家系だったが、稼ぐには武偵の方が効率的だったため、武偵となった。

優秀な軍人の血筋というだけあり、彼の实力は辺りよりずば抜けていた。

強襲科、狙撃科共にSランクをマーク。

自分よりも強い者などいない。そんな驕りを抱くのも、彼の年頃では仕方のないことではあった。

しかし、間もなく彼のその驕りは、粉々に打ち砕かれることになる。彼が14歳の時だ。

自分よりも一つ下の少女に、完膚無きまでに叩き潰された。少女の名はレキ。

二キロ先の缶をも射抜く彼女の腕は、イヴァンのプライドを砕いた。だが、イヴァンの胸中に訪れたのは、嫉妬でも、ましてや怒りでもない。

憧れ、だった。

直ぐにチームの申請をすると、彼女は無表情ながら、受け入れてくれた。

彼女はストイックだった。

自身の腕にプライドを持ち、絶対の信頼を置き、自身の失敗を許さない。

整備も徹底していて、銃弾すら彼女が自分で作り、更に厳正な選抜もする。

彼女が、戦場で失敗を犯すことなど皆無だった。

百発百中、とは彼女のためにある言葉だ。そう、誰しもが疑わなかった。

しかし、事件は起きた。

初めて、彼女が殺しの任務を承諾した時の話だ。

よく分からないが、彼女がいつも譫言のように話す、『風』の命令らしい。

その殺しの任務は極秘任務という話で、イヴァンはあまり気乗りしなかった。極秘任務なんて碌なものじゃない。

しかし、それでもイヴァンはレキに着いていった。

作戦はこうだ。

イヴァンが敵と交戦している間に、レキが敵を撃ち抜く。

単純ながら、レキの実力があれば確実な作戦。の、はずだった。しかし、当てが外れた。

『フレンドリー・ファイア』……つまりは、『仲間撃ち』だ。

イヴァンは、レキに撃たれたのだ。故意なのかどうかは分からないが、確かに彼女の銃弾だった。

今回の任務は殺害目的……つまり、その時レキは装甲貫通弾を使用していた。

左胸を、銃弾が貫く感覚。

あれほどまでに憧れた少女の、裏切りの一発。

イヴァンは薄れ行く意識の中、誓った。

もう、憧れなどという身勝手な幻想など抱かない。

己が強きを、証明してみせる……！

目を覚ますと、白い天井だった。どうやら病院らしい。

医師から話を聞いたところ、イヴァンはロシアの一角、このシベリア武偵病院に運び困れたらしい。

レキはロシア武偵高から去ったらしいが、恐らくは極秘任務を失敗したからだろう。

イヴァンは自身の左胸を見た。幸いにも、心臓からは外れていたらしい。

生きていた。

包帯を取り、自身の右手をきつく握る。

ならば、やることは一つ。

傍らに置いてあった武装を装着する。

レキを、倒す。

「俺は……負けられない！」

男は長い袋から狙撃銃を取り出す。

その銃身は長く、3つの銃口が逆三角形に着いている。

『トライエンド』。

イヴァンが設計・開発した狙撃銃である。

「食らえ……!?!」

標準をレキのドラグノフに合わせ、その引き金を引こうとした瞬間……横から、銃弾が飛んできた。

身体を逸らしそれを避ける。

銃弾を放ったのは、先程まで1キロ先にいたはずの、『紫電の雷神』だった。

「悪いけど、彼女に手出しはさせないよ」

言いつつ、レインは背中にレキの存在を感知、手信号で『瞬間移動能力者 要警戒』と伝える。

感知する中の彼女の動きが、警戒していることを示す。

レインは成功を確認すると、改めて男を一瞥した。

レインは水月を抜き、肩上に刃を上向きにして構えた。

「『紫電の雷神』、成瀬 レインハートだ。

さあ……始めよう!」

レインは水月に雷の高速振動、『雷刃』を掛け、イヴァンに肉薄した。

「元シベリア武偵高武偵、イヴァンだ!」

イヴァンも名乗りをあげ、『トライエンド』をレインに構えた。

「(一対一じゃ勝ち目は無い……故に)」

「(あの銃、初めて見る。

しかも武偵銀弾が使われたら厄介だ。だから)」

「(一撃で倒す!)」

敵である二人の意思は、皮肉にも同調していた。

しかして、レインとイヴァンの戦闘は、一秒より遥かに短い、まさに『瞬く』間に終了することになる。

ギィィィィン！

一瞬の交錯。

「……ふ、流石だ、な」

『トライエンド』の銃身が、切り落とされる。勝利したのは、レインだった。

一瞬の交錯の間に、何が起こっていたのか。

まず、先に動いたのはイヴァンだった。彼が引き金を引くと、3つの銃口から、それぞれ全て武偵銀弾が放たれた。

飛散弾であるその銃弾は、レインの身体全体に突き刺さるはずだった。逃げ場など皆無。

しかし、レインは勝った。

「……危なかった」

レインは大きく息を吐くと、水月を鞘に納めた。

しかし、今回、破片の雨の回避に貢献したのはこの刀ではない。

空気中に、黒い砂が舞う。

砂鉄だ。

レインは微細な砂鉄の壁を作り、全ての破片を防いだ。

銀弾は電磁力で防ぐことが出来ない。

しかし、砂鉄を制御して硬化した盾の前には銀弾と言えども無力。

「（パトラに感謝しなきゃな……）」

レインの砂鉄により防御は、元はパトラの砂金の盾をイメージしたもの。

レインは残心を解き、イヴァンに向き直った。

「……くそ、また俺は……！」

イヴァンは木に腕を叩きつけた。その瞳から流れ落ちる滴を前に、レインには言葉を掛ける術が見当たらなかった。

……しかし。

「……イヴァンさん」

「……………！」

息を切らし、制服のところどころを泥に汚したレキが、彼に駆け寄った。

「何をしにきた……………？」

「……………謝罪をしに、です」

レキはそういい……………頭を、下げた。

「……………！」

「あの任務の本来の目標は……………貴方だったのです」

「な……………！？」

レインが首を傾げる中、驚愕するイヴァンに対し、更に言葉を続けた。

「貴方の父上は、軍人にならなかった貴方を憎まれていたそうです。あの任務は、私にだけ秘密裏に言い渡されました」

「そんなの……………」

あり得るはずがない。

そう言いたげなイヴァンの眼には、明らかな戸惑いが混じっていた。しかし……………レキが見せたのは、一枚の契約書、の、「コピー」。

確かに、イヴァンの父の名が書かれていた。

「私はその時、貴方を撃つことに何の躊躇いも無かった。

しかし 今の私には、貴方にしたことがどれだけ非情なのか、少しだけ分かりました。

すみませんでした」

尚も、頭を下げる少女、レキ。

そんな彼女を見て、イヴァンは思う。

……………嗚呼、何てことは無かった。

彼女の腕は、本物だった。

胸を貫かれながらも生きていたのは、恐らく

「は、ははっ……………殺しかけてよく言っぜ」

憎まれ口を叩きながらも、仰向けに倒れたイヴァンの目には、もう涙は無かった。

第142弾 イヴァン（後書き）

理「……」

武「……」

不「……」

白「イヴァン君、可哀想……」

三人「」「激しく同意」「」

第143弾 一発の銃弾

第143弾 一発の銃弾

イヴァンが戦意を失い、レキも駆けつけた。

今、レインの意識は自身の姉……夜雲 アリスに行っていた。どういふ訳か、先程まで全く音沙汰の無かった彼女の動きだが、彼らの戦闘の間、ずっとレインたちの方を見ていた。

二人に警戒を怠らないよう注意を促しながらも、レインは水月の柄に触れた。

が、意外にも、アリスは堂々と目の前に現れた。瞬間移動などという、不意打ちのし易い能力を持っているにも関わらず、不意打ちどころか真正面から。

「……イヴァンさん。姉……アリスさんとは何時知り合ったんですか？」

「何カ月か前だ。」

偶然知り合って、作戦の協力を依頼したんだが……」

イヴァンが上体を起こしながら答える。アリスの様子は、酷く不機嫌そうだった。

「まったく……依頼人がこうじゃ、雇われた私が馬鹿みたいじゃない？」

アリスは言うど、手に『神無月』を召喚する。

そして、イヴァンに接近。

「！」

「情けない貴方にプレゼントよ」

両手を交錯させてイヴァンを狙うアリス。彼女らの間に、レインは滑り込むように割って入った。

咄嗟に抜いたダガー二本で『神無月』を防ごうとするが、切り結ん

だ瞬間。

アリスの足が身体に触れ、一瞬視界が歪む。

それが晴れると、レインの視界には、刀を振り上げるアリスと交わそうとするイヴァンの姿が見えた。

「!？」

一瞬、何がどうなっているのか分からなかったが　直ぐ様理解する。

瞬間移動で、レインを飛ばしたのだ。

どうにか雷歩で接近しようとするが、間に合わない。

イヴァンの胸は、x字に切り裂かれた。

「くそっ……」

「イヴァン！」

血を吐きながら倒れるイヴァンを見て、レインはアリスに肉薄し、水月を振りかぶった。

それを神無月を交錯させて受けたアリスは、レインに微笑みかけた。

「ごめんね、レイン。」

お姉ちゃんその人斬りたいの」

「させませんよ。イヴァンさんを斬りたいなら、俺を斬ってからにしてください」

レインが皮肉気にそういうと、アリスが眉を潜めた。

「んー、レインは斬りたくないなあ……まあ、遊んで欲しいみたいだから、ちよっとだけ遊んであげるわ」

アリスは微笑むと、神無月で水月を押し返し、瞬間移動。

レインの背後に回り込み、神無月の峰を振るう。

レインは屈み、後ろ蹴りをする。しかし、アリスはそれを宙返りで避けた。

「能力だけと思った？」

僅かに口角を上げたアリスは、神無月を順手と逆手で持ち、横に身体を回転させながら斬りかかった。

「『獄門』」

レインはそれを水月を立てて受ける。しかし、遠心力の加えられた一撃を前に、横向きに吹き飛ばされる。

「ぐはっ！」

木に背中を打ち付けながらも、レインは体勢を立て直した。

ダガーを五本放り、磁力で操りながらアリスに向かわせる。彼女は弧を描くように刀を構えると、刹那の間にダガーを全て叩き落とした。

「『零瞬』」

次々と繰り出される剣戟。

レインは砂鉄を剣に生成し、自身のダガーに纏わせる。

「『雷刃・剛』……！」

砂鉄を操作出来る変幻自在の刃。

レインは両手の刃を10メートルまでに伸ばし、一閃。

だが、その刃を振るっても、瞬間移動を繰り返すアリスには掠りもしなかった。

「ふふ、レイン。諦めなさい？ 貴方に私を捕まえられる道理が無いの。」

人間は、常に一瞬を無駄にして生きているのよ。

一瞬を生きている私に、勝てるはずがないわ」

「やって見なければ分からない！」

レインはそう啖呵を切りながら、瞬間移動を看破する方法を考える。

アリスの機嫌が下降しているとも知らずに。

「あーあ、つまんなーい。」

レイン、諦め悪いよ？」

頬を膨らませながら言うアリスを苦い顔で見詰めながら、レインは尚も考える。瞬間移動を破る方法を。

「……あ、そつかあ」

不意に アリスが、無意識下で言葉を洩らす。それは、聞く者の背筋を凍らせるに足るおぞましい声色。

それは、後ろで事の顛末を見守っていた二人に向いた。

「君たちがいるから、レインは頑張るんだね」

！

失敗した。

さっさとレキたちを逃がすべきだった。

後悔が胸中に渦巻く中、レインは叫ぶ。

レキに逃亡を促す訳でも、イヴァンに退避を促す訳でもない。アリスの前では意味をなさないのだから。

故に、レインが叫んだのは

「止めるアリス！」

姉の、名前だった。

しかし、彼女にレインの言葉は届かない。彼女は消えると、レキの目の前に現れた。

「！」

反射的にドラグノフの引き金を引くが、彼女は刀で銃弾を挟み込み、それを止める。

そして、刀を振り上げた。

「やめろおおおおおおおおおおお！」

アリスが刃を降り下ろす。

一帯に、血飛沫が散った。

あまりの速度の斬撃は、防刃性能を有する制服を容易く引き裂き、肉を斬る。

膝をついたのは……

「……レイン、さん」

口から血を吐く、レインだった。

「……え？」

黒い雷が迸っているレインを見て、アリスは信じられない、という表情を浮かべ、頭を押さえる。

自分が、レインを、斬った。

「違う……違う。」

私は悪くない。私は、レインを、斬ってない！」

急に喚き出したアリスは何を思ったのか、散々喚いた挙げ句レキを睨み付けた。

「お前が、全部お前が悪いんだ！」

お前が弱いから、レインが迷惑するんだ！」

そして、アリスはレインの首筋に神無月をあてがう。

「銃弾は残ってるわよね。」

……それで自分を撃ちなさい。そうしたら、レインに危害は加えない」

「！」

あり得ない話だ。

散々、あれだけ、レインを狂愛する様を見せつけておいて。彼を傷つけると嘘を吐く。

否……『危害は加えない』と言っているだけで、レキが自分を撃とうが撃たなかるうがレインに危害を加える気などあるはずもない。巧妙な叙述トリックだ。

元からそのつもりなど更々無いのに、無価値なソレを交換条件に持ち掛けてくるなど、あり得ない。

「レキ！ 撃つな！」

こいつの言葉は嘘だ！ 信じるな！」

「レイン！ 貴方は黙っていなさい！」

「……食らえっ！」

レインは身体から雷を発する。しかし、アリスはそれを避け、『神無月』とは別に銀製の剣を幾つも召喚、レインの防刃制服のみ、その繊維の薄い箇所を狙い地面に突きつけ、動きを封じた。

「動かないでね、レイン」

レインは身動きが取れない。

「……私が撃てば、レインさんを傷つけないのですね」

「ええ、勿論。大事な弟だもの。当然よ」

その大事な弟を使って事を運んでいるじゃないか、と内心毒づくが、それよりもどう状況を切り抜けるか、それが先決。

レインは必死で頭を働かせるが、いい案が思い浮かばない。

「夜雲 アリス。」

ウルスの蕾姫レキが問います。

今の誓い……レインさんに危害を加えないこと、守れますか」

「ええ。何にだって誓える」

「誓いを破れば、ウルスの46女が全員であなたを滅ぼす。かつて世界を席卷したその総身を以て、貴女の命を確実に奪う。分かりましたね」

靴を脱ぎ、レキはドラグノフの銃口を自らの顎下につける。

「止める、レキ！」

「レインさん。ウルスの女は銃弾に等しい。私は、いつも主人に守られてばかりの、不発弾だったようです」

レキは靴を脱ぎ、その指を引き金に添えた。

「レキ！」

「私は、一発の銃弾」

「お前は銃弾なんかじゃない！」

レインの叫びと、同時。

レキは、ドラグノフの引き金を 引いた。

第143弾 一発の銃弾（後書き）

理「レキユ」！

白「レキさん！

武「レキー！」

不「（……）」 結果を知ってる人

第144弾 その銃弾は誰がため

第144弾 その銃弾は誰がため

レキが、引き金を引いた。

ガチャッ

「……………」

その事態に、目を見開く。

レキが。

銃弾は 発射、されなかったのだ。

「不発弾……………」

意識が戻ってきたらしいイヴァンは、独りでに呟いた。

不発弾が起こる確率など、現代にはほとんど無い。

特にレキは、あれだけ銃の整備をしていた。そんな中で不発弾が起きる確率なんて、最早天文学的数字と言っても何ら過言ではなかったはず。

そんな『奇跡』に…………レキは、確かに驚いていた。

『銃は私を裏切りません』。

それほどまでに信頼を置いていた狙撃銃ドラグノフが、裏切った。

その場にいる誰もが呆然とする中…………

「!?!」

アリスの腹に、痺れるような痛みが走った。

「レ、イン……………」

レインが、黒い雷を纏い、腕に迸らせた雷をアリスに叩き込んだのだ。

気絶させるつもりで放った一発は、しかし彼女の意識を刈り取るに

は至らなかつた。

「く……！」

だが、それでもレインの雷を食らって無事なはずがない。しばらくは上手く身体を動かせないはずだ。

アリスは体勢を立て直すためか、瞬間移動でその姿を消した。

その間に、レインはレキに歩みより、ドラグノフの弾倉を持った。

「レキ。もう、二度と自分を撃とうとしないでくれ」

レキの、涙が溜まった瞳を見たレキは僅かに首肯する。

そして、レインは不発弾を取り出し、キツく握った。

「そして　もう二度と、自分を銃弾だなんて言わないでくれ」

膝をついたレキは、レインを見上げ……頷いた。

「さあ、レキ。」

お前は銃弾から人間に生まれ変わった。

見せてやるう。人間の、『無限の可能性』って奴を」

「しかし……」

レキが戸惑いの表情を浮かべる。

アリスは、瞬間移動で逃亡した。

今、どこにいるかさえ分からない。もしかしたら、レキの絶対半径の遥か彼方、更には地球の裏側にだっているのかも知れない。

しかし、レインは首を横に振った。

「大丈夫。俺が、見つけてる。ここより、南南西に2509メートルの地点だ」

そう。レインの感知領域内に、未だアリスは居た。

が、レキの絶対半径よりは先にいるアリスには、自身の銃弾は届かない。そう、レキが言おうとした時だった。

レキの手に、レインの手が触れる。

「大丈夫……信じる。」

俺が、お前の道標になってやる……！」

真剣な顔でそう言ったレインを一瞥し、レキはドラグノフのスコップを覗き込んだ。

辛うじて、アリスの光る銀髪が視界に入る。隠密性が致命的な髪だ。それを隠そうともしない過剰な自信が、今回の彼女の敗因と言えるだろう。

「私を導く光」

レキは眼を閉じ、精神を集中させる。レインもまた、彼女の支援に全力を注いでいた。

「私には何もない。どうすれば良いか分からない」

レキの、狙撃の際の詩が変わっている。
「ならば、私は導かれるまま、この引き金を引こう」

そして、彼女の瞳は開かれた。
「この銃弾は、貴方がため」

タアン
恐ろしくなる程、美しい銃声。

銃口から吐き出された銃弾は、空に螺旋を描きながら進む。

が この勢いでは、アリスに届く前に失速し、墜ちるだろう。しかし、レキは心配など、ましてや後悔もしていなかった。

『俺がお前の道標になってやる』

まさに、その言葉の通り。

レキの銃弾は、失速せずに、寧ろ勢いを増して行く。

レインの磁力が、レキの銃弾チカラを導く。

そして、真っ直ぐ飛んでいった銃弾は アリスの腹に、突き刺さった。

「……やったな」

アリスは、レインたちが辿り着く前に瞬間移動で消えるだろう。しかし、確かに自分たちは勝った。そう言える。

レインはその場にへたりこんだ。

「はあー、ようやく一撃……いや、二撃か。
精進しなきゃね」

疲れ切っているはずなのにそんなことを口走るレインに、満身創痍のイヴァンは苦笑いを浮かべた。

だが……少女、レキは浮かない顔をしている。

「どうしたんだ、レキ」

「……風の声が、聞こえないのです。」

風はもう、何も言わない」

レキは 涙を流しながら、弱々しい声でそう言った。

レインはそんな彼女を、静かに抱き締める。

「レキ。大丈夫。」

風が何も言わなくても……俺が、傍にいるから」

瞬間、ゴウツ！

風が吹き、咲いていた花が舞った。

そして

「anu urus wenuia……永遠」

レキが、歌を歌い始めていた。幻想的な、曲。

「Celare claiia あめそらol……, tu plute i

re, urus claiia あめそら天空」

多少、世界を回ったレインだったが、どこの言葉かは分からない。

しかし、そんな些細なことよりも、美しい歌に心を奪われていた。

「Raios Zallo Ado……, Rchn, rchnh

ahoe3be3 bI」

それに、レキの声が綺麗だった。

声は小さいものの、音程が正しく、美しい声だ。

「Celare claiia ol……, tu plute

ire, urus claiia あめそら天空」

歌がリフレインするパートで、一際強い風が吹いた。そのことから

も、恐らくこの歌は……レキと風の、別れの歌なのだろう。

「anu urus wenuia…… 永遠」

花が散り、レインの開いた手に落ちる。

レキは僅かに振り返ると レインに、微笑んだ。

激しい戦いが終わった。

レインは疲労困憊、と言った様子だが傷は浅く、『神を謳いし王の雷』の影響も合間つてすぐに癒えた。

無理をして出てきたレキも、多少包帯をキツく巻かれるに留まる。

イヴァンは……星伽神社で治療を受けていた。

しばらく……具体的には一週間は、安静にしていなくてはならぬらしい。

彼はレインたちが去る直前、レキに謝罪していた。

レキも謝罪で返し、二人の仲は以前のものに戻れたようだった。

そして彼は……レインのズルを、見抜いていた。

別れ際に、レインは声を掛けられた。

「おい、紫電の雷神」

「……何？」

「お前、イカサマしただろ」

核心を突く彼の言葉に、驚くというよりは悪戯がバレた子供のような表情をする。レインは肩を竦めて見せた。

「やっぱりバレてたか」

「レキがあんなミスをするはずがない。空薬莢を拾ってみれば、この通りだ」

言いながら見せて来た薬莢には……僅かに、キズがあった。

一般的な銃弾には、雷管という点火装置が着いている。雷管が無ければ銃弾は発射されず、不発になるのだ。

レインは、ジャンヌから『最後の一発』の話聞いた後……弾倉から、最後の一発だけ雷管を外しておいた。

結果、レキは自分を撃とうとして、その弾は不発に終わった。

「恐ろしい奴だな。もし、レキが最後の銃弾を敵に使おうとしてたら……分かっているのか？」

「いや……何となく、あいつはああしちまうんじゃないかと思った。風とやらの命令で」

だが、とレインは前置きし、一寸間を空ける。

「もう大丈夫だと思う。」

レキは、もう銃弾なんかじゃないから」

くす、とレインが僅かに笑うと、イヴァンが嘖き出した。

「お前、レキにリマ症候群狙ってたんだろ？」

これじゃあストックホルム症候群だ」

イヴァンの言葉に、レインもまた声を上げて笑い始めた。

ストックホルム症候群　拘禁された人間が、拘禁した人間に共感

し、そいつの味方になってしまう現象。

成る程、嵌めるつもりが、嵌められていたという訳だ。それも、絶対無意識で。

レインは隣に立つレキを横目に見て、僅かに微笑んだ。

という訳で……今、レイン、レキ、キンジ、白雪は東京駅行きの電車、山陽・東海道新幹線のぞみ246号に乗り込んだ。

修学旅行Iも終わりを告げ、武偵高に帰るところなのだ。

キンジとしては、レインとアリアとの問題が気になっているらしいが……そこは割愛しよう。

「16号車16列……被ってるな。D・E……レキ、どっちがいい？」

「では、奥を」

一つ前ではキンジが白雪に席を決められていた。

そんな彼らを見ながら、レインは隣の少女に目を向ける。

レキは流れる景色を見ながら微動だにしない。

それに苦笑しながらも、レインは、眉を潜める。

景色が流れるのが、やけに遅い。

が、それについて考察するよりも先に……肩に手が置かれた。

振り向くと、そこにはなんとまあ、

「愉快的顔をした男が……」

「全ツ部聞こえてるからな」

と怒る男を宥める。

彼の名は霧藤 遼。諜報科に所属する悠の先輩だ。

「何か用かい？」

「不知火と武藤と俺でトランプするから、入らないか？」

「オーケー。キンジは？」

「寝てる。じゃ早く来いよ」

遼に急かされ、レインはレキに行ってくる、と伝え、トランプに参加した。

「ダウト！ それダウト！」

「残念」

「だー！ また失敗かよ！」

カードが遼に行く。

少し意地の悪いようだが、手加減はしなかった。

天才賭博師でもあるレインに、そんじょそこらの高校生が、遊びとはいえカードで勝てるはずもない。

「ダウト！ それダウト！」

「残念」

「またかよ！ てか、3は俺が独占……ってジョーカーかよ！」

「はい上がり」

「……」

レインがポイ、と投げたカードに武藤と遼の二人は揃って、

「ダウトおおおおおおおおおおお！」

叫んだ。しかし。

「残念、エースだ」

「この下種野郎！」

レインは軽く伸びをした。

今回の報酬は、一位が缶ジュース二本、二位が一本。そして、三位が一本奢り、四位は二本を奢りだった。

順当に不知火が二位、武藤三位、遼四位という結果に。

「何故だああああああああああ！」

缶ジュース二本では300円にも届かない。

しかし、どうにも納得出来ない遼であった。

第144弾 その銃弾は誰がため（後書き）

すみません、今回、レキの歌詞の件ですが、自分がよく知らない文字が出てきたため、途中変な文字になってます。どうかご容赦下さい。

第145弾 恋愛相談

第145弾 恋愛相談

「……すみません、お客様」

「？」

突然掛けられた声に振り返る。そこに居たのは、車掌と思しい男。その額には脂汗が滲み、どこか焦っているようでもある。

「お荷物を検分させて戴いてもよろしいでしょうか」

「はあ……？」

異変を感じてるのか、不知火の返答も要領を得ないもの。

車掌らしき男に、乗車券と同時に一応武偵手帳を見せる。無いとは思うが、武偵だと気づかずには危険物……銃を見て混乱しないようにだ。

しかし、彼はそれを目にするよりも早く荷物ラックと座席下をチェックして、また別の席をチェックしに行った。

「何だったんだろうね。」

あ、スリーカード」

「さあ？ フルハウスだ」

「げっ！ 2ペア」

「……ブタだよ畜生！」

やがて少し立つと、キンジがこちらの車両にやって来た。因みに、隣では武藤と不知火がチェスを（不知火の圧勝だが）していて、前にいた遼は現在自分の席で寝ていた。曰く、帰ったら謀報の任務がわんさかあるから体力を温存しておきたいとか。

することもないので呆然と外を眺めていると……前の座席から、ち

ら、と見覚えのあるピンクの髪が見えた。

「（……アリアか）」

あの模擬戦以来めつきり話してなかった彼女は、裁判で忙しかったようだが、一段落ついたみたいだ。その隣には花の髪飾り……ミチルが乗っている。

あの二人は、仲が悪い訳じゃないが、これと言って親しい間柄でもない。どうしたのだろうか。

と やって来たキンジもアリアに気づいたのだろう、彼女に近づいていた。

「アリア……」

彼女に話しかけようとしたキンジの腕を不知火が掴み、強引に空席に座らせる。そしてマバタキ信号^{ウインキング}で『フォーローよろしく』と送ってきた。

何やら面白そうなので、二つ返事で了解すると、彼はキンジに『静かに』とジェスチャーする。

『面白い話してる 聞こう』

……予想通り、何やら悪巧みのようなだ。

『放せ 俺はアリアに話がある』

と、キンジも不知火に倣いマバタキ信号で返すが、

『話は後でも出来るよ』

不知火は何故か譲らない。

面白くなってきた、と他人事のように考えていたレインも、追撃を掛けるようにマバタキ信号を送る。

『それに、面白い話するのはアリアの話だよ』

『いいから放せ』

しかし、キンジはそれでも靡かない。

『いいからいいから』

『だーもう、放せって』

『いいじゃんいいじゃん』

しばらく埒の開かないいたちこっこになっていたが……キンジが何

かに気づいたような表情をし、溜め息を吐きつつ、『5分間』という制約付きながらもどうにか座らせることに成功した。

不知火のセリフ通り、レインとキンジは一つ前……アリアの席の会話を（盗み）聞く。

「……で、私は恋愛とか分からないんだけど……アンタなら分かるかなって」

「まっかせなさい！ 私は恋愛賢者と呼ばれた女だよ！」

ミチルがアホなことを抜かしているのはいつものことである。なので、ここは誰も突っ込まない。

キンジに至っては興味無さげな顔をしている。

「あのね……これは、私の友達に相談された話なんだけど。

私の友達……その娘は、仮にAさんと呼ぶわ
ぶふっ！

と吹き出しかけて、レインは慌てて口を押さえる。

不知火もいつもの笑みがどこか黒く見えるし、気づいていないのはキンジくらいだ。

「そのAさんは、ある男子……まあ、これはK君。それとR……じやダメだから、N君。

別にNや、け、Kのことはハッキリ好きとか言ったり言われたりしてないんだけど、その……何カ月も、一緒に行動してたのよ。

それで分かったんだけど、Kは……やる気は無いけど、やれば出来る奴だったのよ。

それにNは凄い奴だったし。

三人は協力関係になったんだけど……そうしている内に、AはKを『自分のモノ』みたいに感じるようになったっていうか……後、ついでにNも」

レインはついでにかい。と突っ込みたくなかったが、どうもAさんはKさんにゾッコンらしいので、そこは放置しよう。

「成る程ー、独占欲だね。アリ……Aさん強そうだもんねー」

ミチルはミチルで、バレそうになりつつ話に乗ってる。絶対AとK

の関係も分かつてる表情で。

「でもね、Aは、もうすぐ転校することになっちゃったの。Kを武偵高に置いて」

……！

転校、するのか。それも、もうすぐ。

レインは苦い表情をする。

それは確かに、かなえさんの裁判が終われば武偵高に残る理由なんてどこにも無い。しかし、どこか寂しい思いをしてしまうのは性、という奴だろうか。

「うんうん。転校とかの前に男女関係がこんがらがるパターンだね」ミチルは実に楽しそうだ。流石に転校の話をしていた時は辛そうな顔をしていたが、この手の話が大好きなんだろう。

レイン自身、聞き役なら大歓迎な面白さだ。

「でも……ある時、N君は別の女子に近づかれた。それは、Rさんって女の娘。性格も能力もAとは全く違う……優秀な娘よ」

不知火と武藤の視線が突き刺さる。レインは冷や汗をかきながら目を窓の外に逸らす。

……どうにも、やけに遅く流れる外の景色には、先程から違和感を感じる。

と、ミチルとアリアの話が続いていた。

「その後、NとRは一緒に行動するようになって……Nはわた、いやAさんのドレ……仲間なのに」

「へ……」

「そして、NとRに怒ったAさんは、NとR対AとKで戦ったの。結果はAの負けよ。」

「ただ、悔しくて……ボロボロに負けたのに、平気にいるKさんに、『Nなんてもう仲間じゃない！』って言っちゃったの。その場の勢いで、Aさんは」

アリアの言葉に、レインの眉が下がる。

まさか、そんなことを言われてたなんて……

勢いらしいからそこまで気にする必要もない、と不知火も言って（マバタキだが）くれているが、やはり落ち込む。

「そしたら、Kが怒って……喧嘩しちゃったのよ。Kと。もうどうしたらいいか分からなくて……少なくとも、転校前にKとNと仲直りしたいと思ってるの。Aさんはね。だからその……」
そこでアリアは、答えを急かすようにかミチルに詰め寄った。

「どうすれば、二人とAさんは仲直り出来るかな!?」
何をすればいいの、転校前に」

……これは、本格的に謝った方がいいのではないだろうか？

そんな思いが芽生えてきたレインは立ち上がるようにするが、武藤に押さえられ不知火に制止される。

「ううむ……レイ……Nに関しては自分から謝る他にないよね。Nを好きでもないから完全にAが悪いよ」

もつともらしいミチルのセリフに、アリアは呻いて後退った。

「でも！ K君に関しては違う！ 待ちの一手で良いの！」
突然フォローし始めたミチルに、アリアは目を見張ったようだ。

「どういうこと!?!」

「Aさんはもうすぐ誕生日だね？ それも転校する前」

「よ、よく分かったわね！」

情報科ですから、と鼻を鳴らして上機嫌そつなミチルは、ガムを噛んでいた。

「KがAを嫌いじゃなければ……絶対、プレゼントを持ってくる！
いや、もしかしたらそれに乗じて告白！ なんてのもあるかも！」

「……は、くっ!?!」

不知火が口を押さえる。当然過ぎる。レインも、隣の武藤も笑いを必死に堪えているのに対し、キンジは無表情だった。

鈍感にも程がある、と鈍感男に思われる可哀想なキンジであった。
アリアが良い塩梅に混乱し出したので、キンジは不知火にマバタキ信号で席を立つ許可を取った。

……彼がちゃんとAの誕生日を祝えるのか、心配になってきたレイ

ンであった。

第145弾 恋愛相談（後書き）

理「うっう！ 理子りんです！ 作者のテストが終わったよ」

不「まあまあ良かったみたい。まあ、更新休んで勉強したんだから、あれくらいとれなくちゃ……ねえ？」

武「（作者逃げろおおおお！）」

白「という訳で、150弾も鋭意執筆中らしいです。この度はご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした」

第146弾 hurry up

第146弾 hurry up

キンジが席を立とうとした、その時だった。
ガタン！

という激しい音が響き、車体が大きく揺れた。
キンジがよろけて、シートの背もたれに手をつく。

車内の人間も同じような反応を取る中で、レインはよろけて窓の外を見る。

そして……窓の外で、名古屋駅のホームが流れていった。

辺りの人間が驚愕、困惑に苛まれている中、突如アナウンスが入る。

「お客様に、お知らせ致します。

当列車は名古屋に停車する予定でしたが、不慮の事故により停車出来ません」

未だアナウンスが続き、どうやら芸能人が乗っていたらしい。そいつが喚き、その困惑が伝播した車内が困惑に満ちてきた中で、レインは冷静に状況を分析していた。

先の振動は、恐らく急激な加速によるもの。外で流れている景色が先程よりも速い。目測だが、10キロは速くなっているだろう。

しかし、一般人を乗せた公共車両であるのぞみがここまで唐突な加速をするなど、況してや駅を飛ばすなど本来ならあり得ない。

つまり、本来ではない……通常でない事態が、現在発生している、ということだ。

思い返してみれば、この列車に乗ってから感じた違和感は一つや二つではない。

やけに遅く流れる景色、先のアナウンス、車掌であろう男の声が震えていたこと。そして、検閲に来た男の様子。

恐らく 爆弾を、探していたのだろう。

それらから考えるに、この事件は恐らく……エクスプレスジャック。そう判断した。

ふと思ひ浮かべたのは、『武偵殺し』峰 理子の顔だった。しかし、即座に頭を振る。そもそも彼女は重体で入院している。その上、理由が無い。

キンジとアリアとの決着をつけたいというなら、彼女は万全の二人を望むはず。離別している二人にわざわざこんな大それた真似はしないだろう。

犯人に繋がる有力な情報は現在手元に残っておらず、武偵らしく乗客の混乱を治めようとしているキンジ、不知火に加勢しようとするが……そこで、ようやく気づいた。

失敗しくった……！

何故気づけなかったのだろう。否、気づけなくて当然。これは、完全に一か八かの罠。

相手は確実にレインがここに座るなんて確証は無かっただろう。しかし、それ故の、相手側の殺意の欠落。

『出来たら掛ければ良い』

程度の思惑しかない相手側のこの作戦は、見事レインの意識を掻い潜り彼を捕まえた。

「くそ……！ キンジ！ まず」

レインがその旨をキンジに伝えようとするが……またも、電車は急加速。何人かは後ろにつんのめった。

そして、キンジがレインに聞き返す間も無く、新たなアナウンスが入る。それは、先刻の車掌のものではなかった。

『乗客の皆さまに お伝えしやがります』

この人工音声。

間違い無い、『武偵殺し』の手口。理子が犯人候補から外れた今、恐らく模倣犯なのだろうが……この手際の良さ。

ほぼ間違い無く、あの組織関連だろう。

『この列車は どの駅にも停まりません 東京まで ノン・ストップで 参りやがります アハハ アハハハハハハハ！』

否。自分の推理に穴があったことに、今更気づく。可能性は極めて高い。

爆弾使い ならば、あのシャボン爆弾の性能も頷ける。

十中八九、イヴァンのもう二人の協力者たち あの少女たちの仕業だろう。

『列車は 三分おきに10キロずつ 加速しないとイケません さもないと、ボン！ 大爆発 しゃがりますアハハ アハハハハハハハ！』

不知火やキンジは車両の後方に移動しており、レインの状態には気づいてくれそうもない。

レインはケータイを取り出し、レキに掛けた。

2コールで、レキはケータイに出た。

「レキ。放送は聞いてた？」

『はい。どうしますか』

「お前は傷口が開くから、今回戦闘は無しだ。それと、残念だが俺も今は動けない。白雪と一緒に、乗客のパニックを抑えること。いいね？」

レキはそれを了承すると、電話を切った。

しかし、先の放送の条件 三分おきの10キロ加速 で行けば…… 東京に着くまで、60分持つかどうか。

それよりも先に車体が持たないか、脱線する可能性だってある。

そして、もし仮にそれらを潜り抜けたとしても、終着である東京に着いたが最後……ドカン、だ。

武藤がいれば運転は安心出来る。が、自分が動けない状況で彼らが一時間以内に解決出来るか、それが不安だった。

レインが考えを巡らせていると、キンジたちがこちらに戻って来た。アリアもいるが……やはり機嫌は悪いらしい。キンジに対するものか、レインに対するものかは分からなかったが。

「こっちは爆弾が見つからなかった。

レイン。座ってないで手伝ってくれよ」

キンジはそう言うが……レインは溜め息をついた。

「済まない。無理だ。」

俺は動けない」

皆が自分に訝しげな視線を送る中、レインは自身の座席を指差した。

「爆弾が仕掛けてある。」

このアナウンスのとは別物の、ね。

感圧スイッチになってる。やられた」

やれやれ、と両手を挙げてみせる。

レインは、爆弾処理が得意分野ではない。一人ならある程度どうにか出来るが、乗客なんかがいる中での処理には危険過ぎる。解除は、少なくとも今すぐには出来そうもない。

「不知火、何とかならないかな？」

「……僕じゃ無理かな。」

どうやら、鑑識科三年Aランクくらいの実力は必要みたいだよ」

三年なら居るのかも知れないが、二年にはそのレベルの生徒は、レインの記憶上この列車に乗り合わせてはいない。

四月にあったバスジャックでは爆弾を解体しようとしたアリアも、

この複雑な爆弾の解除は無理なようだった。

「40分……いや、50分あれば、安全に解除出来るかも知れないから。」

やってみるよ」

それでは遅すぎるけどね、と心の内に思いながら、レインは自身の能力で爆弾の構造を調べ始める。

もしかしたら、電流を流せば解除出来る類いのものかもしれない。

「……アリア、落ち着いて聞け。」

このエクスプレスジャックの犯人は、恐らくお前を拳銃戦で襲ったヤツだ。名前はココ」

どうやら、キンジにも心当たりがあったらしい。そういえば彼は電

車に乗る前、白雪と一緒にアリアに似た少女と小競り合いをしたと言っていた。

それに、晴夜の話では『水投げ』の日も年下に絡まれていたらしい。イヴァンの近くにいた二人の少女も、アリアと似ていたことから……同一人物だと判断する。

そして 二人に、言及する。

「キンジ、アリア。」

恐らくこいつは、武偵殺し 理子の手口、そいつの凶悪バージョンド。

けど、爆弾の性質は大して変わらない。

無線でスタートする型だ。少なくとも、この感圧式の爆弾は。

だが、無線ってやつは確実性に乏しい。混線に輻輳、セル圏外、弱電界、H/O失敗……特に新幹線みたいな、高速で無線機が大量に積んである移動体はね。

そういう時は、退路を確保した上で、自分も乗り込むのが定石だ」キンジとアリアが納得しながら、詳し過ぎる説明に目を丸くしていた。

何故こんなに爆弾に詳しいのか……と聞かれれば、以前一緒に任務に行った時に、キュートな爆弾使いの『武偵殺し』さんにご教授して戴いたからだ、と言わざるを得ない。

「そして、ターゲットたちが乗車したのを確認して、車内で仕掛けを確実に発動させるんだ。つまり……」

そして、確信を込めた瞳を二人に向けて、口を開いた。

「 乗ってるぞ、敵は」

第146弾 hurry up(後書き)

理「あの守銭奴……！」

レインを動けなく……動けなく……？

……ナイスじゃーん！」

不「峰さんは今動けないけどね」

理「……あの守銭奴ー！」

武「あのやりとりを無理矢理無かったようにしようとした!？」

白「キンちゃんが動けなく……はああ」

武「(白雪さん可愛え)」

不「(見事な力オス……)」

第147弾 中国の姫

第147弾 中国の姫

レインが言った直後、それに反応したように、前方車両から悲鳴が響いた。

そして、人の群が狭い車内の廊下を駆けてきた。

それに飲まれる形で、レキと白雪がこちらに雪崩れ込む。

そして、15号車へ逃げていく乗客たちの遙か後方には……

「ココ！」

威嚇なのか、扉を叩き割って出てきたココだった。

「ニーハオ、キンチ。

ここで立直ネ」

民族衣装らしきものを纏うココは、鉈のような大振りね刀を持っていた。

柳叶刀……日本的に言えば、青竜刀だろう。

日本刀のように鋭さによる臓器や血管への刺突・斬撃による攻撃ではなく、刀身の重さで肉と骨を断ち切る、戦斧に近い武器だ。

「私がやる！」

あんたたちはさがってなさい！

レインは 死なないこと！」

叫び、逸早く駆け出したのは……ピンクのツインテールを揺らす、アリアだ。

無茶だ、と言うより先に（無茶だ、とはアリアの指示に対する話ではない）彼女は両手に日本刀を抜きながら、ココに突撃する。

彼女の実力を疑っている訳ではないが、跳弾のおそれがあるため、銃は使えない。

それを差し引いてもアリアの実力はそれなりだが……レインからし

てみれば、ココの方が優勢である。

「キヒッ！ ホームズ四世、単身で曹操ココに勝てる思ったか？」

そんなココのセリフを聞きながら……成る程、とレインは一寸納得する。

曹操 魏の戦国武将。

古代中国の兵法書『孫子』を研究、編纂した学者でもあつたらしいが、彼自身の戦闘能力もまた、強大であつたとか。

考えを巡らせている内に、アリアとココは切り結び、やがて離れる。すると、ココは袖から、香水の容器のようなものを取り出した。

「バオバオチュウ泡爆珠！」

突起を押すと、霧吹きのように口から、極小サイズのシャボン玉が、アリアに飛んでいく。

「避けるアリア！ そいつは、爆弾だ！」

咄嗟に叫んだレインの言葉に反応して……アリアは回避行動を取る。

しかし、気体爆弾が爆発。

しかし、少し遅かった。

アリアの眼前で弾けたシャボン玉が炸裂。

衝撃と閃光を産み出したそれは、前方のシートを何席か薙ぎ倒し、アリアを吹っ飛ばした。

「アリア！ ……くそっ！」

今の立てないアリアは、格好の的だ。守らねば もしくは、時間を稼がねばならない。

雷弾や雷砲を使えば、電車が壊れる。危険だ。

レインはダガーを四本投擲、銃弾を三点バーストで放つが、爆弾で全て吹き飛ばされた。

「う……うっっ！」

しかし、今ので時間は稼げた。アリアは頭を振り、立ち上がる。

「キヒッ、これで和了ホーラねっ！」

袖を振り下ろし 小型ロケットを二本、取り出した。その二本をカチン、と結合させると、先端の間にワイヤーが伸びた。

「双火筒縛禁！」

噴射音を上げてロケットが発射された。

二発のロケットはアリアの左右を通過し、周囲を旋回。

アリアをグルグル巻きに縛ったロケットは、勢いを失い床に落ちる。それを踏んでしまったアリアは、転んでしまった。

ついでに、刀を放してしまっている。抵抗は出来ないだろうから、レインはダガーを磁力でアリアに元に飛ばそうとする。ココにバれないよう、ゆっくりとだ。

が、それはすぐに看破され、ココの青竜刀で打ち落とされる。

「ココ……！」

その髪型、やめなさいって言ったでしょ！ 私と被るのよ！」

「聞いた覚え無いアル、ぷっぷー！」

藍幫ランバンも、イ・ウーの主戦派も、仮想アリアの女の子欲しがるね。この髪型するの、稼ぎになるヨ」

「へえ……お前、イ・ウーの残党の一人なのかい？」

興味深そうに口を挟むレインに、さして嫌な表情もせずにレインに振り返る。

「不是ナン！ ココは初めから藍幫の一員だたネ！ イ・ウーにいたのはビジネスのためヨ！」

それに、口の聞き方に気をつけるね！ ココは、世が世ならお姫様ネ！」

彼女はアリアに、カエルしゃがみをしながら言い出す。全くもってお姫様らしからぬ格好だ、とレインは思った。口にはしなかったが、やがて、ココは立ち上がり……

「緋弾のアリア（A r i a the s c a r l e t a m m o）」

緋弾のアリア

恐らくは『緋弾』……つまり、緋緋色金を継承したアリアにつけられた名だろう、とレインは勝手に判断する。

「何もかも、お前の所為ネ。イ・ウー崩壊した、世界中の結社、組

織、機関、パワーバランス崩れたネ。

乱世、これから始まるヨ」

冷たい目でアリアを見下ろすココ。彼女の表情には、どこか怒りも混じっている気もする。

「お前、緋緋色金喜ばせた。これも乱の始まりアル。

緋緋色金と琉璃色金、仲悪いネ。緋緋が調子づいたこと感づいて、琉璃、百年ぶりに怒たヨ。怒って見えない粒子撒いて、世界中の超^ス能力者、力、不安定なた」

「超能力者が……？」

「へええ……」

知らなかった、という表情のレインを見て、ココがニンマリと笑った。

……何か、薄ら寒いものが背中に走る。

「これから超能力者、役立たずなるヨ。けど、レインハート。お前、何故か超能力安定してるね。

世界中の組織、レインハート欲しがってるネ」

どうやら、レインは裏の組織に随分気に入られているらしい……疎まれる理由はあっても、そんな理由は無かったと思っただが。

「一番レインハートに手出す早かたの、ウルスある。琉璃色金、姫に直接指令送って、レインハートを取りに掛かったね。

でも、高い戦闘力持つキンチ共々貰ってくネ」

ココは至極嬉しそうに語る。成る程、自分が先日、こっぴどい目にあつたのを忘れてるらしい。

「乱世、ビジネスの好機ネ。

このエクスプレスジャックもサイドビジネスある。

さつきココ、日本政府に300億人民元要求したヨ。払えば良し、払わないなら 電車粉々にして、爆泡のデモンストレーションするネっ。

さっきのが1cc。この列車には1m2積んだある」

「……多すぎでしょ」

レインは引き吊り気味にそう言った。

単純計算で、先のアリアを襲った爆発……あれの1万倍の威力を有する量である。

電車が吹っ飛ぶだけでは済まない。それが東京駅で爆発したのなら……大惨事になるだろう。それは、考え得る限り最悪の結末。が……そんな状況下でも、レインはあまり焦ってはいなかった。

まあ、爆発させられたら大変だが……止めるはずだ。

アリアのピンチには黙ってない　騎士^{ナイト}さんが。
ヒュン！

風が凪いだ一瞬。

その刹那に、アリアのワイヤーが何かに断ち切られたかのように切られ、解けた。

「（へえ……この短期間ここまで使いこなせてるなんて……流石だね）」

レインは感心しながら、身体の力を抜いた。
感圧スイッチになっているシートが揺れる。

その後ろで、紅く光るバタフライ・ナイフと、蛍光灯の光を反射し輝くスクラマ・サクスを携えた、

「随分遅い登場じゃないか……キンジ」

遠山　キンジ、だった。

「ヒーローは遅れて登場するもの……そうだろうか？」

キンジは不敵に微笑み、彼の守るべき姫^{アリア}の敵である少女……ココを見据えた。

この強者の雰囲気。ヒステリアモードだ。

が、レインが今まで感じてきたヒステリアモード……ノルマーレ、ベルセ、アゴニザンテ。それらの、どれとも違う。

「さあ、アリアとレインはゆっくり電車旅行を楽しんでいてくれ」
キンジはバタフライ・ナイフを仕舞い、スクラマ・サクスを腰に据える。

「俺一人で充分だ」

第148弾 新たな力

第148弾 新たな力

「き、キンジ！ あんた何言ってるの!？」

束縛から解放されたアリアが叫ぶが、キンジは微笑みで返す。

「アリア、退ってくれ。ここは俺がやる」

キンジは先の剣術 天桜流参式『散桜』の構えを取る。

剣圧で離れた相手を斬る、天桜流の中距離攻撃だ。

それも、アリアにダメージを与えずワイヤーだけを斬ったとなれば

……相当な錬度である。

そして……新たなヒステリアモード。

キンジの実力が、四月の時点より遙か高みにあることを実感する。

「むう、ココ、デートの約束あるネ。逃げるヨ」

ココはキンジの様子から不利と判断したのか……煙筒を投げ、姿を消した。

「……キンジ、ココは多分」

「ああ……そこだな」

キンジは『散桜』を一薙ぎする。天井に切れ目が入り、そこから整備用らしい四角い穴が顔を覗かせた。

「キンジ。早く行きな。アリアと一緒に」

「……爆弾は任せたよ」

「ああ……思ったより早く済んだからね」

レインはそう言い、立ち上がった。

しかし……感圧スイッチは作動しない。

解除に成功していたのだ。40分掛かると言っていたが、その半分も経っていない。

「じゃあ、今回はキンジに任せるよ。俺は不知火たちと爆弾をどう

にかするからさ」

恐らく、キンジは天桜流での初めての戦闘。

初戦で団体戦は厳しいところもある。しかし……複数人相手なら、アリアの存在も必要だろう。

四月から組んでいる、二人のコンビネーションならば問題は無い。レインは感圧式爆弾をシートごと雷で消し飛ばすと、爆弾の位置を確認する。

洗面室の扉が固く閉ざされており、加えて中の穴という穴がシリコンで塞がれている。そして、端には極小のプラスチック爆弾も見える。

成る程、無線でこのプラスチック爆弾を爆発させ……気密が破れた気体爆弾が、ボン。

めでたく大惨事、つてことだ。

「（解除は……無理そうだ）」
レインは仕方無く首を振る。キンジは、既にアリアと共に車外に出ていた。

「成瀬君！」

「不知火。どう？」

「今、武藤君が運転してるよ」

「そうか……爆弾の解除は無理だよ。けど、心配要らないよ。キンジが犯人を止めに行った」

「ふう……風が強いな」

呟いたキンジは、その黒髪を流れる風にはためかせ、踵鉤爪を電車の屋根に刺して立っていた。

「大丈夫かい、アリア」

「ええ。……まさか、ココが双子だなんてね」

アリアは言いながら……ガバメント二丁をココの一人、炮娘に向ける。

キンジは、スクラマ・サクスをもう一人のココ　　猛妹に向けていた。
成る程……キンジを襲った格闘の達人、アリアを襲った拳銃戦の達人は別人だったのだ。

『万能の武人』を名乗ったのは、カモフラージュだったという訳だ。
「ココ、ココ。悪い娘には、お仕置きの時間だ。」

五分で、決めさせて貰う」

キンジはスクラマ・サクスを構えたまま、青竜刀を構える猛妹に駆け出す。アリアも同様に、短機関銃・UZIを抜いた炮娘に向かった。

「天桜流式式　『狂桜』」

キンジがその技の名を呟き、スクラマ・サクスを振りかぶる。

猛妹はそれを防ぐべく青竜刀を寝かし、片手で青竜刀の峰を支えた。
が　キンジの狙いはココへの直接の攻撃では無かった。

キンジは力を込めたまま、スクラマ・サクスを僅かにずらしていく。
ギギイイイイイッ！
「っ！？」

ココの表情が強ばる。

天桜流式式『狂桜』。

刀の接触の際に鳴る激しい金属音。

それで相手の三半規管にダメージを与える技だ。

食らった相手は、平衡感覚が狂う。

足下が覚束ないココをワイヤーで縛る。

瞬く間にココを捕獲したキンジは、続いてアリアの方を見る。

アリアはUZIから発射される銃弾を、右へ左へ避けながらココに近づく。

ガバメントを三点バーストにし、薙ぐようにして連射した。

その銃弾の何発かはココに命中。しかし、彼女はUZIを更に連射して反撃する。

いつまでも近づけないことに、アリアが苛立ちを覚える中、キンジ

もまた駆け出していた。

アリアにウインキングで『挟撃』とだけ送ると、キンジは今は亡き父親から拝借した大型拳銃『デザートイーグル』、そして愛用のベレッタ・キンジモデルを抜く。

そして、まずはデザートイーグルの引き金を引く。

ドゥーン！ という重厚な発砲音と共に、ココの腕からUZIが弾かれた。

「（流石の威力だな……）」

感心しながら、キンジはベレッタの『不可視の銃弾』擬きで撃つ。

16分の1秒の速度で放たれた銃弾は、彼女が取り出そうとした気体爆弾の容器を弾く。

「……っ！」

焦るココの目の前に、日本刀を両手に振りかぶるアリアが現れた。

ココは袖から二本の棒状の金属を取り出すと、それで刀を防いだ。

あの形状、十中八九戦扇だ。

武偵高での使い手としては、静奈や白雪が挙げられる。

静奈と同じで、その端には刃がついていた。

加勢しようとするが、背中に悪寒が走り、振り返った。

先程縛った猛妹が、気体爆弾を放っていたのだ。

「（避けられない……なら）」

爆弾の攻撃範囲は広い。人間の反応では、咄嗟に交わすことは難しい程に。

なので、キンジは交わさない。

ベレッタの引き金を引き絞る。銃弾が気体爆弾を撃ち抜き、爆発する。それが連鎖し、全ての気体爆弾はキンジに届くことなく撃墜された。

キンジは、そのままベレッタを猛妹に向け、放つ。しかし、その銃弾は火花を散らし、逸れた。

「……もう一人、いたのか」

キンジが向けた視線の先には、百メートル程離れた場所に、黒塗り

のへりが飛んでいた。

そこには、狙撃銃の標準をこちらに合わせる、もう一人のココが乗っていた。

どうやら 双子ではなく、三つ子だったらしい。

へりに乗った彼女は、アリアの防弾制服狙っている。

「（……後、10秒つてところか）」

キンジは自身のタイムリミットを迎えようとしているのを理解する。武器を収め、バタフライ・ナイフを抜いた。

「さて 悪いが、決めさせて貰う」

キンジの手元が光り バタフライ・ナイフの紅い煌めきが、閃光のように軌跡を残し、輝く。

「天桜流奥義 『桜吹雪』」

キンジはバタフライ・ナイフを閉じ、踵を返した。

その瞬間。

猛妹の気体爆弾が。

炮娘の戦扇が。

三人目のココの狙撃銃が。

それぞれ切り刻まれ、崩れる。

「……な 「……」

その刹那、猛妹と炮娘の腹に痛みが走る。アリアのガバメントの銃弾だ。

崩れ去る二人を呆然と見ていた残るココだったが 彼女にも、そんな余裕は無い。

へりが、崩れ落ちる。

先の斬撃で、切り刻まれていたのだ。

「ッ！」

ココは何とか飛び、電車に乗り移ろうとする。姉妹を救おうとするその姿勢は立派だが、如何せん間が悪い。

「済まない」

着地の寸前、キンジの拳がココの腹を捉えた。

「これで五分だ」

キンジが頻りに呟いていた『五分』という言葉。

それは、彼の新たなヒステリアモード　ヒステリア・セルフに由来していた。

修行を始める前に、晴夜から聞いた。これからの戦いは、今までのヒステリアでは生き残れない。

そこで辿り着いた結論の一つが　この、ヒステリア・セルフなのだ。

今までのキンジに欠落していたのは、突発的な戦闘への対応力。

それを補うため、自分でヒステリアモードを発動できるようにという試行錯誤の末に生まれた、偶然の産物。

ヒステリアモードは、簡単に言えば性的興奮によって脳内物質が30倍に増大する体質。ならば、その脳内物質を意図的にコントロールできるようにないばいい。

修行の結果、それに成功。

五分だけ、擬似的にヒステリアモードを発動することが可能になったのだ。

「……つまり、お前らのお陰でもあるんだよ。ココ」

そう、対応力の不安を感じたのは、ココとの戦闘。

彼女らのお陰で、キンジはこの新たなヒステリアモードを手にする事が出来たのだ。

「俺たちの、勝ちだ」

第148弾 新たな力（後書き）

白「はうう……キンちゃんカッコいいよう」

武「キンジエ……ぶっ殺」

理「わー、キー君無双だあ！ 無双無双無双ー！」

不「（武藤君……）」

第149弾 チーム・ラゲナロク

第149弾 チーム・ラゲナロク

あの後、平賀さんが爆弾を突拍子もない方法で取り除き（ここ重要解除、ではない）、電車は無事東京に到着した。

武偵高に帰ると、教務科はレインたちに学科ごとに調書を取らせたのだが、その際キンジは新しい力を多用したので疲れていたらしくぼやいていた。

それに、あの事件はあまり大事になってないようだ。

事件を解決した彼らは、公的には事件を解決した功労者たち、という事になってる。

……まあ、レインには原因の予想は大体ついてた。

自分と、アリアだ。

言わずと知れた世界最強の武偵、『紫電の雷神』にイギリスのデイムの嫡女。

それらが日本国内の大規模な事件に巻き込まれた、などとはあまり大きな声では言えないらしい。

恐らく外務省の高官の男が、口止め料のつもりかは知らないが、見舞金とやらを持ってきたが、突っ返しておいた。

やがて……色々、事件の後処理やら何やらに追われている内に、9月下旬……『チーム編成』の時期となった。

通常、チーム編成は代表が『申請』を行って、修学旅行の直後に教務科から来る確認の電話に回答する形で『承認』を受け、最後に『登録』の写真撮影を行うのが習わしだ。

しかし、忙しかった上にそうとは知らず……レインは回答を忘れて

いた。

なので、アホの子が多い武偵高によくある救済措置……『直前申請』
に肖ることになった。

直前申請とは、修学旅行やらなにやらで、結局チームが決まらなかつた時のためにあり、用紙にチームメンバーを記述し、提出すれば『申請』扱いとなり、先生に集合写真を撮ってもらえば『承認・登録』となる。

が、その直前申請の〆切も明日なので、レキから電話が来たのだが

……

「なあレキ。ものは相談なんだが………

アリアたちと、チームを組まないか？」

『了解しました』

あっさり了承されて、拍子抜けしてしまう。

実はあの後、レインはアリアからちょっと話し掛けられていた。

「あの……レイン。

ごめんなさい！ 私、あなたに酷いこと言って……」

「気にしてないよ。それに……俺もお前に銃を向けちゃったし、お互い様でしょ？」

「まあ、それはおいといて……話があるわ」

「……何？」

「あんとレキ、私のチームに入りなさい！」

謝った瞬間、あれ。

ホトホト呆れるが、あれもアリアクオリティーなのだろう。取り敢えず、レキが了承したら良いと言ったのだが、あっさりオーケーされてしまった。

そついう訳で、メンバー表が送られて来た。

チーム名 『ラグナロク』
強襲タイプ

メンバー

神崎・H・アリア (強襲科)

遠山 キンジ (探偵科)

・星伽 白雪 (超能力捜査研究科)

・朝露 静奈 (超能力捜査研究科)

・峰 理子 (探偵科)

・成瀬 レインハート (超能力捜査研究科)

・レキ (狙撃科)

・アレックス (超能力捜査研究科)

そして……

付属ギルド名 『バスカービル』

最高責任者 遠山 キンジ

付属チーム

『ラグナロク』

『クラウン』

チーム名 『クラウン』

通信タイプ

メンバー

霧矢 綾瀬

ジャンヌ・ダルク

・立花 ミチル

・有明 悠

……という訳だ。

ギルドとは、このように強襲チームや通信チームなんか、普通より強い協力関係になる、更に大規模なチームのようなものだ。

他にも衛生学科や探偵学科のチームなどがあるのだが……現在は、このチームで行くらしい。

因みに、ギルド名である『バスカービル』はアリアが所有する土地の名前で、『ラグナロク』はレインの提案。

それにしても……

「（キンジ……大変だね）」

恐らく本人にその気は全く無いのだろうが……『ラグナロク』のリーダーに加え、ギルドの最高責任者に設定されている。

御愁傷様。レインは今頃これを見て嘆いてるだろうキンジに合掌した。

「『神々の黄昏』^{ラグナロク}って……名前強すぎだろ」

合流したキンジのぼやきを耳に入れたレインは、ちつつち、と指を横に振った。

「俺がこの名を提案したのは、これからお前たちにも『神』の称号を背負って貰うからなんだよ」

「……は？」

その場にいるほぼ全員が、訳が分からない、というような表情をする。

まあ、当然か。とレインは紙に何かを書き込みながら、全員に説明する。

「チームにとって大切なのはチームワーク。そして、対等な関係だ。二つ名の無い奴も居るし、丁度いいから『神』で統一しようと思っ

てね」

そして、レインが書いた紙を皆に見せる。そこには、レインがつけた彼らの、新たな二つ名が書かれていた。

- ・『紫電の雷神』 成瀬 レインハート
- ・『蒼天の風神』 アレックス
- ・『桜花の剣神』 遠山 キンジ
- ・『孤高の武神』 神崎・H・アリア
- ・『鷹眼の銃神』 レキ
- ・『雪白の炎神』 星伽 白雪
- ・『妖艶の鬼神』 峰 理子
- ・『深海の水神』 朝露 静奈

『……いやいやいやいや！』
皆から突っ込まれた。

レインは何がいけないんだ、というように首を傾げていたが、彼女らは止まらない。

「名前詐欺だつて！ お前、どれだけハードル上げるつもりだよ！？」

「鬼神つて……理子怒るわよ！？」

「アレックス君は……大丈夫だけど！」

そんな彼女らを収めたレインの言葉は、至極単純な一言だった。

「ごめん、もうそれ、ミチルと綾瀬に渡してあるから」

「……ぎゃあああああああああ！？」

あの娘らに情報を垂れ流しにされたら最後……一生を費やしても、この情報化社会では消し切れないだろう。

ラグナロクの全員は、諦めて自分たちが背負うことになった、堅苦しい二つ名を反芻し始めた。

ちなみに、レインがジャン又たちにつけた二つ名は、

- ・『謀略の氷神』ジャンヌ・ダルク
 - ・『霧雨の女神』霧矢 綾瀬
 - ・『電子の知神』立花 ミチル
 - ・『絶影の勇神』有明 悠
- というものだ。

なんとまあ、一日で良く考えたものである。

「さて……後は天命を待つだけだね」

と言いながらレインが立っているのは、理子の寝ているベッドの隣である。

直前申請では……否、直前申請に限らず、チームを結成する全員が揃って初めて、チームとして認められるのだ。

現在時刻は10時47分。

リミットは、後1時間13分　それまでに、理子が目覚めるのか。いや、目覚める。少なくとも、レインはそう信じていた。

「……なあ、理子。」

お前は　誰にやられたんだ？」

独りでに出た、忘れかけていた疑問。

しかし……それに、理子は答えない。

「なあ……理子。」

俺はお前と一緒にやって行きたい。

チームになりたい。

我が儘なのは承知だけど……ちょっとだけ、早起きしてくれたら嬉しいな」

レインが人知れず呟いた直後。

「…………お前は昔から我が儘だったろう」

裏の口調で…………理子、が。
言葉を紡いだ。

「理子！」

「ふん…………不覚を取って、ちよつと寝てただけだ」

理子は上半身を起き上がらせる。

「…………くふふつ！ 今日直前申請の日だね。早く行かなきゃ」
「なら…………理子。」

行くよ。前と後ろ、どっちがいいかな」

「くつふー！ もつち前だよ！」

一言に即答した理子を、レインは抱えあげた。

病み上がり故、レインが全力で掛けることにした。

レインは病院の窓から飛び降りると、雷歩で空を駆けた。

「遅いわねー、レインたち」

「アレックスは来たけどな」

「峰が目覚めてねえんだろ」

申請期限は後1時間を切った。

未だレインと理子は到着しておらず、皆が騒ぎ始める。

周りの生徒たちが次々と直前申請の写真撮影を済ませていく中、一同は沈黙を守っていた。

後1時間以内にレインたちが来なければ、チームは結成出来ないのだから、当然と言える。

が…………その静寂は、やがて破られることとなった。

赤髪の男 アレックスの、目蓋を閉じながらの一言によって。

「…………来たか」

『風神』改め『蒼天の風神』の別称を持つ彼 アレックスは、名の通り風を操る超能力者。

その動きで辺りの様子を捉えることなど、視覚に入れるのと同様に

容易いことだ。

彼に視線が集まり、アレックスは顎で自身の感じた気配の発生源、その方向を指す。

皆の視線が集まったそこには……

「……レイン！」「」

レインと、抱えられる理子の姿があった。

「遅れてごめん。さあ、撮影しよう」

レインの言葉に皆頷き、SSRの鳳が近づいて来た。

「あー、お前ら準備はいいな。じゃ、取るから」

理子に防弾制服・黒を羽織らせ、自身も規定の位置に着く。

キンジは刀を隠すためか、少々身体ごと斜めを向いており、アリアはガバメントを見えないようにしている。

レインも、ダガーを少し見せて水月に目がいかないようにしていたが……アレックスは、何の工夫も無しにカメラにガン垂れていた。

不良チツクだが、自信の現れとも取れる。

レキや白雪、静奈も自身の武器を隠し、尚且つ顔が全て入らないように斜めに向けたところで……

「チーム『ラグナロク』」。

成瀬 レインハートが『直前申請』します」

「あーい。んじゃ、9月23日11時06分、チーム『ラグナロク』承認・登録、と……

はい、チーズ……おろ？」

やる気無さげな鳳の台詞。

最後のは、ちよつと立ち眩みしてしまい、倒れかけた声だった。彼女は若干貧弱である。

その所為で、写真は斜めになってしまった。幸い全員写っていたが。まあ、何はともあれ この瞬間、少しして全世界最強チームと呼ばれることとなる、『ラグナロク』が誕生したのだった。

第149弾 チーム・ラゲナロク（後書き）

悠「という訳で、後書きコーナー復活です！」

四人『いえーい！』

綾「皆、いままでご苦労様！」

ミ「短い間だったけど、ありがとう！」

静「これからは私たちに任せてくれ」

白「うん！ 皆、頑張ってね！」

理「くふふ〜！ 私もたまに遊びに行くよ〜！」

武「まあ、割と楽しかったからいいけどよ」

不「ふふ、武藤君素直じゃないんだから」

プーモ

「という訳で、後書きコーナーに彼女らが戻ってきます！
いえーい！」

第150弾 150話記念ラジオ(前書き)

ついに！ 150話達成です！

レイン

「長かった……」

プーモ

「本当だよ……」

これもそれもあれもどれも、偏に普段から応援して下さる皆様のお陰です。

感謝感激雨霞。ありがとうございます。感謝し切れません。

これからも、どうか『紫電の雷神』を、引いてはレインたちをよろしく願います。

第150弾 150話記念ラジオ

第150弾 150話記念ラジオ

レイン「という訳で始めました！」

静奈「『緋弾のアリア 紫電の雷神』150話記念、」

皆「皆様の小説を紹介しちゃうぜラジオ！」

レ「題の通り、皆様の小説を紹介しちゃうこのラジオ！ 司会の成瀬 レインハートと！」

静「朝露 静奈だ。宜しく頼む」

レ「さて、今回は結構ゲストが集まってるらしいんだけど……まだ『紫電の雷神』メンバーしか見えないよ？」

静「まだ到着してないんだろ」

レ「ええ〜……っていうか、俺が『レ』だとレキと被る気がしない？」

静「大丈夫だ。無口なあいつはラジオ向けじゃないから、今回出る予定は無い」

レ「（不憫な……）」

静「それにしても、皆遅」

ドガアッ!

皆『!?!』

レ「ターザンジャンプしてる人に扉が蹴破られた!？」

?「悪い、ちよつと先輩に捕まつて遅れちまつた」

静「(キレイな人だなあ……こんな美人ゲストにいたか?)」

レ「えと……お嬢さん、会場間違えていませんか？」

静「おお、流石自称紳士」

?「……ピキッ」

二人「?」

?「だあれが……お嬢さんだお前らあああああああああ!」

レ「ワイヤー!？ てことは、お前、優希なのか!？」

? 椎名 優希

「そうだよ! てか、一目で分かれよ!」

静「優希……ああ! 私が誘拐された時の!」

レ「いやあ、久し振りだね!」

優「幾ら久し振りでも、お嬢さんは無いだろお嬢さんは！」

レ「いやあ、あまりにも……ねえ？」

静「ああ……女らしい」

優「お前ら……人が気にしていることを……」

レ「それはそうと、宣伝しないと」

静「まあ、それが目的だからな」

優「頼むぜ、お前ら……」

レ「彼、椎名 優希は、ユーザーネーム草薙様が執筆されている『緋弾のアリア 緋弾を守るもの』の主人公だ。

主にワイヤーと日本刀に、二丁拳銃を使った戦法を得意とする、強襲科の生徒だよ」

優「それじゃ俺の紹介だろ？ まあいいけど……」

レ「勿論、作品の紹介もするぞ。

東京武偵高、強襲科2年の椎名 優希はある日、キングのチャリジャックに巻き込まれてしまう。そして、運命の現場 キングとアリアの出逢いに居合わせる。

アリアのドレイ宣告。

困惑する中での、謎の男からの依頼。その内容とは 『アリアを守れ』。

斯くして、『緋弾を守るもの』が誕生したのだった……」

優「おお、それっぽいな」

静「『緋弾を守るもの』の見所は、やはりアクションシーンだな。ワイヤーを使つて華麗に戦う優希は見物だぞ。

それに、上手く構成されたストーリー性だ。

人間関係なんかもそうだが、注目すべきはズバリ隠された謎。

謎の依頼人の正体とは？

優希の家との事件とは？

『あの』少女との因縁とは？

そして、優希が おつと、これ以上はネタバレだな。

詳しくは草薙様の『緋弾を守るもの』を読んでくれ」

レ「そこで切られると気になるよ……」

優「そのために切ってるんだろ？」

静「さて、更に必見なのは優希の女装な訳だが……」

優「！？」ゾクッ

レ「ここに女モノのコスプレ衣装 (from理子) が沢山ある訳
だけど」

優「や、止めるお前ら！

俺は女装なんてもうしな」

しばらくお待ち下さい

優「うつ……なんでこんな格好……」(高音)

レ「（これは……）」

静「（ドツボ……！）」

レ「これは何の衣装？」

静「ええと……『初音 ミク』のコスプレらしい」

レ「カツラまで……」

静「（作者は）本当は歌って欲しかったそうだが、最近では歌詞使うと危ないらしいからな。割愛だ」

ミ「そうか、良かった……って、何で俺の名前が『優』から『ミ』になってるんだよ！？ これ絶対コスプレの奴の頭文字だよなあ！？」

レ「陰謀だよ。作者の」

ミ「堂々とし過ぎだろ！ 最早陰謀じゃねえよ！」

パシャパシャ！

優「眩しっ！ 誰だ撮ってる奴！」

静「あ、声と名前が戻った」

レ「あれ……スタッフに撮影は頼んでないはずだけど」

？「今日は撮影オーケーだと聞いたんだがな……」

優「あつ！？ お前は！？」

レ「京助！」

？ 雛菊 京助

「おつす！ 久し振りだな、元気してたか？」

優「京助……」

京「お？ ミクのコスの娘、知り合いだったか？」

優「……『娘』？」ブチッ

京「え、ちょ、武偵？ 銃向けないで……って炎のガバ……優希！？
嘘だああああああ！」

優「俺だつて信じたかねえよ！」バババン！

京「ギャアアアア！」

レ「えーと、紹介が遅れたけど、彼の名は雛菊 京助。優希と同じく静奈誘拐事件の時に登場した男だよ」

静「多彩な武器が特徴的だな。

コーザーネーム888様の小説、『緋弾のエリア〜緋弾に集いし仲間たち』の主人公。尚、同作者様の『緋弾のエリア〜five years later』ではレインとコラボして賣っている。
さて、『緋弾に集いし仲間たち』の粗筋、見所とは？」

レ「粗筋としては……」

アリアにドレイとして目を付けられた少年、雛菊 京助。しかし、彼の正体はアリアが敵視する『あの組織』の一人で……！？
次々と現れる『旧友』に、京助はその銃口を向ける。武偵と『奴等』の狭間で動く、彼の目的とは？

こんな感じかな？

見所は京助の戦いだね。色んな奴と、色んな武器で戦う京助は、バリエーション豊富な戦い方をするんだ。きっと特殊部隊なんかでは重宝されるよ。

後、キャラたちの揺れ動く感情だ。京助が『あの組織』の一員だったと知ったアリアたち。彼女らの行動にも注目だね。

現在は新章に入っててキンジたちの出番は薄いけど……『あの犯罪者』の子孫が登場して、物語が急速に動き出したようだよ」

静「成る程な……これは今すぐ読まなければ」

レ「その前にあの二人、止めるよ」

優「食らえ、飛龍一式……！」

京「ちよ、タイムタイム！」

静「ええ〜……まあいいか。二人共止める！」

京「俺は何もしてねえ！」

優「放せレイン！」

静「あのなあ……向こうのヒロインたちに告げ口するぞ」

?2 うちは イタチ

「うちは イタチだ。」

済まない、銀八先生を止めるのを手伝ってくれないだろうか？」

レ「あ、ああ」

静「あの、銀八先生。」

チヨコ「パフェお持ちしました」

銀「おお、サンキュー」

レ「軽っ！ 止まる理由軽っ！」

静「改めて……この三人はユーザーネーム新月様の小説から登場、別世界からの次元漂流者、坂田 銀八先生と」

銀「（ああ……そっぴや学校側には銀八で登録してたな）」

レ「別世界からの転生者、うちは イタチと呪印を操るオリ主、黒崎 清夜だよ」

イ「よろしく頼む」

清「よろしくな」

銀「おーいウェイターさん、パフェお代わり」

清「挨拶しろよ！」

銀「おお、悪い悪い。
皆大好き銀さんだよー、はい終わり」

優「軽い！ 軽いよ銀さん！」

レ「さて、じゃあ作品紹介だが…… 3つあるから、順番に行くよ。
新月様の小説シリーズ」

静「まずは代表作『緋弾と侍』だ。

ある日、主人公の銀さんが目を覚ますと、彼のいた時空から未来に飛んでいた。しかも、銀さんがいた世界とはどうも違うらしい。

そこは、『侍』ではなく『武偵』が、凶悪犯罪者たちを逮捕している世界だった。

武偵高の雇われ教師となった、2年A組銀八先生。彼の織り成す、笑い有り、シリアス有り、泣きありのハチャメチャ武偵活劇だ」

レ「ノリとテンポの良いギャグが特徴的だ。銀さんの鋭いボケと突っ込みは流石の一言。それに、シリアスでも銀さんの華麗な剣技は必見だよ」

銀「それほどもあるな」

イ「先生…… 過度な自信は身を滅ぼしますよ」

銀「おいイタチ。そんな緊張すんな。いつもより頭ガツチガチじゃねーか」

清「いや、緊張とは関係無くね？ 元から頭ガチガチじゃね？」

イ「五月蠅い。俺の頭はガチガチなどではない。ちゃんと柔軟な思

考も出来るぞ」

京「じゃあ、駄洒落言ってみるよ?」

皆『(何て無茶振り!!!)』

伊「.....」

伊「『意外に、胃が痛い』」

.....

皆『(盛大に滑ったああああああああ!!!)』

銀「(何いいいい意外に胃が痛いって!? ダジャレなの? ダジヤレなんだよね? 誰かそつだと言ってやってくれ!)」

静「(しかもなんであんな嬉しそうにしてるんだ!? 自信作!? 自信作だったのか!?)」

優「(誰か黙ってないでこの空気何とかしてくれ!)」

清「(無茶言うな!)」

京「.....なあ、イタチよ」

皆『(すげえ! あの空気の中行っただあああああああ! 勇者

だあああ！』

静「……………というか……………」

優「（言い出しっぺがあいつなだけだと思う……………」

レ「（どうフオローするんだ？）」

イ「何だ？」

銀「（だから笑うの止めるおおお！ オメーのダジャレ全然面白くねえんだよおお！）」

京「……………わ、悪いな、頭堅いとか言つて。全然柔けーよ」

清「（諦めた！ すっごい中途半端なところで諦めた！）」

イ「そうだろうか？」

静「……………うん。もう忘れよう。さて、次に二人の作品介绍、行つてみようか」

レ「清夜は同じく新月様執筆、『緋弾のアリア 努力の結晶』の主人公だ。」

レ「ある日、アリアに追いかけられるキンジを助けた清夜。

しかし、『悪魔』と呼ばれた彼は、そんなアリアにドレイ宣告されてしまい……………！？

まだ話数が少なくて未知数なところもあるが、呪印の力は目を見張るぞ。それに、彼はどうやら『あいつ』とも繋がってるらしい」

静「要チエツクだ」

レ「続いて、イタチが主人公の『緋弾のアリア 朱い瞳を持つ者』の紹介だよ」

静「サスケとナルトに全てを託し、死んで行った『うちは イタチ』。しかし、神の手によって、彼は二度目の生を受ける。そこは、忍ではなく、武偵がいる世界だった」

レ「イタチの圧倒的な体術・忍術には圧巻だね。俺もニンジャになりたいよ」

イ「忍は一朝一夕でなれるものじゃない。永い時間を耐え、忍んだ者にこそ相応しいものだ」

レ「へええ……勉強になるなあ」

静「この外人被れが……」

京「実際クォーターだしな」

銀「へええ、あいつクォーターなのか。まあ銀髪だしな」

優「あんたも銀髪だろ……」

静「さて、そろそろ別のゲストも来るだろ……と、噂をすれば」

？「おーす、待たせたな」

レ「遅いぞ、願」

? 荻原 願

「まあそう言うなって。実家に呼び出されて大変だったんだよ」

静「こいつは願。ラルド様執筆、『緋弾のエリア　　』暗黒の刃』の主人公だ」

レ「『緋弾のエリア　　』黒と紫の邂逅』ではコラボしているんだが……ちよつとした事件が起きた」

皆「???」

静「……原作の『暗黒の刃』を、コラボ小説の『黒と紫の邂逅』が凌駕した」

皆「……………」

願「そんな冷たい目で俺を見るな！　仕方無いだろ、俺のところの作者が暗黒の方は乗らないとか言ってるんだから！」

静「これは最早どちらを原作として紹介したらいいか分からないが……一応、コラボで無い方を紹介しておこう。
願の家系、荻原家は日本の安寧を守る秘密組織『大和』の総帥だった。

そんな彼の叔父が亡くなり……願は、とあるナイフを継承することとなったのだった……」

レ「見所は、色々な銃を使った、軍人寄りな武偵らしい戦い方だよ。ほとんど原作の描写が無いのも特徴かな」

願「えっへん」

静「（……………こんな奴だったか？）」

願「それにしても、随分人数多いよなあ」

レ「確かに、ひいふうみい……………既に八人だよ」

静「作者が嘆いてるぞ。」

優「この人数だしな……………」

銀「まあ、平気なんじゃね？ やれば出来る子だよ？ プーモは」

清「いや、あんたプーモの何を知ってるんですか」

イ「今度キチンとお会いしたいものだ」

レ「へえ、じゃあ今度話しておくよ。」

まあ、それによりあの駄作者の駄目っぷりが露見するのは恐ろしいけどね」

静「さて、そろそろまた別のゲストがくるんじゃないか……………ってう
おー!？」

？」「……………おはよう」

願「めっさ夜だけでも!？」

レ「きつと夜型なのさ。なあ、黒霧？」

？ 紅坂 黒霧

「そーなんだよ。俺ちよつと夜更かししちゃうタイプでさ」

京「全然反応違う！ 何この差！」

黒「……俺、人見知り」

京「見りゃ分かるわ！」

レ「はい、という訳でユーザーネーム 阿良々木 雅様の小説、『緋弾のアリア 黒の疾風・紅い閃光』の主人公、紅坂 黒霧です。はい、拍手喝采！」

皆『パチパチパチパチ！』

優「（おいレイン。どうして拍手する必要がある？）」

レ「（いや、心開くには第一印象が大事なんだよ。）

好感度が1ピコグラムでもあれば、あいつは心を開くはずだ」

銀「（随分安い鎖国精神じゃねーか……）」

京「（まあまあ、ここは）」

願「（乗つとくが吉、だろ）」

皆『ふわっふう〜！』

黒「……………」

レ「（まだまだ！ 皆盛り上げる！）」

皆『ふわっふわっふわっふうふう！』

黒「……………何やってんの？」

皆『……………ブチッ！』

銀「悪い。ちよつとあの野郎の脳天がち割ってくる」

優・京・願・清

『行ってよし』

イ「まあ待て。お前たち」

レ「さて、作品紹介なんだが……………」

『黒の疾風・紅い閃光』はまだ話数が少なくて、作者も話を掴みきれないようなんだ」

静「肝心な時に使えないな、プーモは」

願「そう言ってやるな。泣いてるぞ」

京「メンタル弱いなあおい」

静「代わりとこっちゃあ難だが、番外編として紫電の雷神に登場する。

その時は宜しく頼むぞ」

黒「……………ああ」

レ「さて、これでゲストは全員揃ったかな？
じゃあ、そろそろフリートークでも」

綾瀬

「大変よ、レイン！」

レ「どうしたの、綾瀬？

そんなに慌てて」

ミチル

「そこでテロが起きたんだよー！」

悠

「警察も手を出せないし、ざっと千人はいます！」

レ「……………らしいけど？」

皆『余裕だろ。この面子なら』

レ「ですよー」。

はい、そういう訳でテロを潰しに行ってきます！」

優「しっかし、テロなんてどこで起きたんだ？」

願「ん？ ……やべ、総理大臣からSOS来てたわ」

京「てことは、総理大臣官邸か？」

イ「そのようだな。写輪眼で確認した」

黒「……さて、行くか」

銀「はあ、ついてねーな。折角パフェ食べ放題だつーのに」

清「大丈夫大丈夫。また食べに来ればいいですって」

レ「それじゃ……殺りますか」

静「その後、テロリストたちは語る。

『アイツラ、マジアクマダタヨ』
と。

幸い死者は出なかったものの、全員戦意を喪失しており、武偵を見ただけで腰を抜かすようになったという……」

第151弾 〈番外編〉 教務科からの依頼

第151弾 〈番外編〉 教務科からの依頼

時は夏休み、キンジの入院中の出来事である。

レインとSランク武偵であるアリア、加えて静奈と悠は教務科に収集を受けていた。

他でもない、教務科直々の依頼である。

ちなみに、レキやその他のSランクは別任務中、アレックスはまだ正式に東京武偵高に入学していない。

応接室の高級感溢れるソファに座らされる。目の前にはおよそ部屋の割に合わない虎縞のタンクトップを着た、赤髪の女性がいた。言わずもがな、強襲科教師、蘭豹である。

「今日の任務は本当に重要やからな。」

報酬は書いてある額と試験免除に単位一年分や」

「了解しました。して、内容は？」

報酬に眼もくれず、レインは蘭豹の言葉を待つ。

そのストイックさにか、蘭豹は軽く溜め息をついた。

「可愛気の無い奴っちな。」

必要なら誰の協力を仰いでもかめへん。

最近神奈川に出没し始めた……凶悪犯罪者『鴉』^{レイヴン}の逮捕や」

蘭豹が口にした任務内容に顔をしかめたのは、静奈。

アリアも似たような表情をしていた。この場にその犯罪者の名を知る者はいないだろうが、一応悠が『鴉』について話し出す……沈黙に耐えられ無かった、というのが本音であるが、それについて口出しする者はいなかった。

「『鴉』……最近、巷で噂になり始めてる犯罪者ですね。」

殺人罪で国際指名手配中。殺人履歴は、某国政府の官僚を皆殺し、

また某国王族の子息・家内を殺害。その他一般人76人、武偵14人を殺害しています。尚、武偵の内訳3人は強襲・狙撃・諜報Sランク武偵です」

挙げられた3つの学科は、比較的戦闘向けの科である。そのSランクを3人倒すとは、『鴉』の実力が窺える。

「『鴉』は、常に黒い服を着用しているのが特徴らしく、今まで見て生きていた人間は一人……路地裏のホームレスです。

……『悪魔』。

彼は、頻りにこう呟いていたらしいです」

再び沈黙が流れる。

それを破ったのは、今度はレインだった。

「心配しなくていい。

前線には俺が立つから、サポートを頼むよ」

レインはにこやかにそう言う。が、3人には分かっていて。

レインの表情の裏には、彼女らを危険に晒したくないという思いがある。

つまり、『鴉』は相当危険な相手である。そう判断するのに、これ以上の理由は無かった。

レインは蘭豹を一瞥し首肯すると、武装の整備を始めた。

数時間後　緊急の依頼、という名目の依頼故、レインたち4人に加えた一人……ミチルは、武藤の運転するサファリに揺らされ、神奈川の箱根に来ていた。

ミチルの情報によれば、のここでは最近頻繁に黒い衣服に身を纏った男が出没するらしい。

「それが『鴉』……なのかなあ」

レインが不安気に言う……カポーン。

間抜けな音が、辺りに響いた。

レインは裸にタオルを巻いた格好であり　ここは、温泉だった。

箱根は、温泉の名所である。兼ねてから聞いていたレインは、温泉に浸かっているのだった。

壁一枚隔てたところでは、女子4人が掛け合い（水を、ではなく話す意味で）していることだろう。

レインは上気した頬に水をぶっかけ、気を取り直したレインは誰もいない露天風呂を見ていた。

綺麗な水だ。

もうもうと立ち込める湯気を呆然と眺めながら、自身の手元を確認する。

一応、水月を抜き身で、消耗品であるダガーを三本持ってきてある。勿論、風呂場に銃は駄目だ。風呂場に対して、銃に対しての両方の意味で。

しかし、どうにも壁越しの彼女らの気配からは悪寒しか感じる事が出来なかったため、即座に風呂場から退散することにした。

……ふと、レインは振り返る。

ソナーを常時発動してるレインには、感じ得ないはずの視線。

「……？」

レインは首を傾げて、気のせいだろう、と踵を返し、浴場を後にした。

「ふう……浴衣ってのは良いもんだね」

マッサージチェアに揺られながら、感慨深そうに呟く。ちなみに、コンセントを手に持ち、自家発電中だ。

そんなレインに「そうですね」と至極気持ち良さそうな返事を返したのは、同じく隣でマッサージチェアに揺らされている悠だった。目の前では、ミチルとアリアが卓球をしている。やはりというか、アリアの圧勝だが。

ちなみに、窓際に座っているのは静奈。その足下には、彼女の超能力を悪……利用して出来た、簡易な足湯があった。

温泉の湯を（勝手に）持ち出したらしい。

本人曰く戻すから大丈夫、とのことだ。

「ふう……しかし、見つからないねえ、『鴉』」

「当然と言えば当然ですけどね」

それもそうだろう。しかし、レインは顔を曇らせる。

「私も色々聞いて回ってみたけど……情報は出てこなかったよ」

ミチルの方も駄目。残る静奈もアリアも首を横に振った。

そんな中だ。

レインたちの休んでいた空間の天井がぶち破られ、そいつは現れた。

漆黒のコートを美に纏い、目から下を隠すような布のマスクをした、全身を黒一色に染めた男が。

全員の思考が停止する。

唐突に、目の前に人間が降りてきた。吃驚するのは当然でもある。

が、唯一人、レインだけは即座に水月を抜刀。男に斬りかかった。

男はそれを、腰に差した三本の刀の内一本を抜き受け止めた。

紅い刀が散り行くガラスに反射して、紅い薔薇の花弁が舞うかのようには煌めいていた。

それを切り裂き、一閃。

その一撃は、佐々木 小次郎の末裔から教わった、燕さえ切り裂く剣。

名を『燕返し』、その刀はいとも簡単に人間が反応出来る速度を置き去りにし、彼の剣を断ち切るべく、空に紫の線を描いた。

が。

男は、上体を僅かに逸らし、身をかわした。

防いだ、ではなく、かわした。

「!？」

人間の反射では感知出来ないはずの速度。

しかし、それを予め分かっていたかのように避けた男は、反撃に転じるように紅い刀を振りかざす。

振り切った水月を戻すことは不可能。レインは『影』の中指のスイ

ツチを押した。

銃弾が排出される。

それは 武偵弾だ。

レインは即座に磁力の結界を張る。その刹那に、銃弾が弾けた。

幾つもの鋭い銃弾の破片となったそれは、雷を纏い男に向かった。

普通、捌ける量ではない。それどころか、かわす、防ぐのも容易ではないだろう。

が、男はもう一本、今度は黒塗りの刀を抜いた。

二刀流、そうレインが警戒を強めると、彼は二本の剣で、銃弾の破片を弾き始めた。

ギギギギギギン！

何度も鳴り響く細かい金属音。銃弾の破片が、全て弾かれる。

が、その隙にレインは接近、懐に入ると『雷掌』を男の腹に叩き込んだ。

「……………」

気を失ってはいない。彼の黒衣には、防電性能が付加されているようである。

「……………何故俺たちを狙う！」

そう叫んで、レインはダガーを幾つも磁力で操り、男に向かわせる。

男はそれを攻撃しようと、刀を振り上げた。

「（掛かった!）」

レインはダガーを制止させる。そして……………男の後ろから、砂鉄の塊を操作。男を捕縛すべく、彼の腕を掴もうとする。

しかし、彼は刀を地面に刺し、地を蹴った。

背後からの攻撃も効かない。

決定打が与えられない。防電装備なのだから、いつそ強力なのをお見舞いするか……………そんなことを考え始めた、直後だった。

「ギャアアアアアア！」

「!?!」

この、叫び声は所謂 断末魔、なのだろうか。

だが、おかしい。『鴉』と思しき男は今、レインの目の前にいる。
そんな逡巡の間に、男は駆け出した。悲鳴の聞こえた方に。

「！……待て！」

レインは頭を振り、男を追い始めた。

第151弾 番外編 教科科からの依頼（後書き）

綾「今回も出番無し……」シヨボン

ミ「げ、元気出して綾先輩！」

悠「そうですね！ それにほら、危ないですし！」

静「綾瀬先輩、プーモがオリジナルストーリーでは出番ある、という話ですよ」

綾「頑張ります！」

第152弾 番外編 黒の疾風・紅い閃光

第152弾 番外編 黒の疾風・紅い閃光

悲鳴があつた方……即ち、男が駆けつけた方に向かったレイン。

視線の先には、彼が曲がり角の先に立ち尽くしているのが見てとれた。

集中は彼の目の前に向いているようで、攻撃するなら絶好の機械である。が、レインはそれをしなかった。

嫌な予感が、した。

レインは彼の隣から、路地裏を見た。

案の定、そこには 幾つもの死体が、転がっていた。

裂傷、打撲、銃痕、骨折……そんな怪我を繰り返した末、殺されたようで、中には身体が半分以上無い死体もあった。

当然、下は血溜まりとなっていた。

そんな死体の群れの中に立つのは、レインの隣の男ではない、別の漆黒の男だった。

間違いない。

レインは確信する。この男、血溜まりに君臨するこの男こそが、『鴉』である、と。

幾多、数多の血の臭い。

こんな血生臭い空間からも明確に漂う、人殺しの臭いだ。

「お前……『鴉』か？」

分かっていながら、レインは問う。目の前の鴉に。

「そつだ……何か、用か？」

彼は言いながら、こちらに首だけ曲げて顔を向けた。

20を過ぎてあまり時間は経っていないだろう若々しさ。黒の髪を短く切つた彼の顔は凡庸で、鴉のような金色の瞳さえなければ殆ど

特徴が無いと言って良い。

が、彼は明らかに常人を逸脱していた。

鈍く金色に輝く瞳。しかし、それは僅かな太陽光を反射しただけ。彼の濁った瞳からは、生気が全く感じられない。

レインが不気味がっている間に、

「鴉……！」

男は、駆けていた。

両手持ちで紅い刀を、袈裟懸けに振りかぶる。

が……鴉は、男の一閃を受け止めた。

「（特殊素材のグローブ……刃、か）」

見れば、鴉の手には黒のグローブが嵌められており、その指の内側が輝いていた。恐らく、極小の刃が仕掛けられているのだろう。

「……甘い」

対する黒の男は、紅い刀で片手を塞いだまま、もう二本刺した内の一本の刀を抜いた。

そのまま、それを逆手で振るう。

「ほう、そう来るか……面白い」

が、男は今度は羽織っていたマントを翻した。

刀とぶつかり、激しい火花を散らす。

どうやらこれも、仕込み刀のある装備らしい。

男は軽く舌打ちし、鴉のグローブの甲を足蹴にしてバック宙。

「殺人罪で、貴様を逮捕する」

男はホルスターから銃を抜くと、引き金を引いた。

飛んでいく銃弾は、鴉のグローブの手のひらで受け止められる。

鴉は、銃弾を握り締めると、それを振りかぶった。

「返すぞ」

パンッ！

空気の弾ける音。音速を超えたことを示すそれは、男の額に向けて銃弾を放つ。

が その銃弾は、紫の刀身によって弾かれた。

「残念だけど、返品不可能だよ」

レインの、鏡花水月だ。

その力により、投げられた銃弾はビデオの巻き戻しのように、全く同じ速度、軌道で鴉に向かう。

鴉はそれを蹴りで弾き 靴にも刃を仕掛けてあるようだ 銃弾を切り裂いた。

「ふん……『黒の疾風・紅い閃光』に『紫電の雷神』か。厄介な組み合わせだ。

ではここは……戦略的撤退、という形を取らせて貰う」

鴉は、手に持った銃弾を親指で弾いた。弾頭の色 武偵弾、だ。

ギイイイイイン！

音響弾……！

レインは舌打ち、よろけたる。至近距離からの激しい金属音に、三半規管が狂っていた。

咄嗟に雷神化するが、鴉は遙か上空にいた。どうやっているかは分からないが、飛んでいるようだ。

レインはブローを抜き追撃しようとするものの、標準が上手く定まらない。

その頃には、鴉はその場を去っていた。

「逃したか……」

男は刀を鞘に収めると、跳ぼうとしているのか膝を曲げた。慌ててそれを、レインが制止する。

「待って！

……少し、話したいんだけど。時間、いいかな」

「……分かった」

男は、先程戦闘を行ったレインに対してもさして警戒せず、後ろをついて来た。

男の名は紅坂 黒霧。

二つ名 『黒き疾風・紅い閃光』。

通り名の所以は、その左右の漆黒と真紅の瞳を指しているということとは容易に想像がつく。

彼の履歴をミチルのネットワークで洗ったところ、かつて通信科の中空知 美咲のパートナーであったことが分かった。

話によれば、凶悪犯罪集団を幾つも潰しているらしい。

今回も、教務科から話の来た中空知の依頼で、鴉の逮捕が目的だとか。

「ごめん。間違えて攻撃しちゃって」

「気にしてないさ。」

似たような格好してて、天井をぶち破った俺も悪いし」ちなみにこの喋っている相手、黒霧である。

普段は寡黙な彼だが、受け答えはキチンとこなしてくれる。そのため、どこかの碧髪娘より遥かにコミュニケーションが取りやすかった、というのはレインの言である。

天井をぶち破ったのは、レインに鴉が近くにいることを一秒でも早く知らせるためであった。まあ、結果的には、彼の寡黙さも相まってレインを警戒させることになったが。

「じゃあ、黒霧も前衛に加わる、って形でどうかな？」

「ああ。構わないぞ」

レインの提案を鵜呑みにする。黒霧との共同戦線が、ここに成立したのだった。

後から聞いた話では、浴場でレインを見ていたのは鴉らしい。

鴉にソツチのケがある訳ではなく、単純に戦力を測っていたとか。女子の方を見ていなかった辺り、純情、もしくは生真面目な性格なのだろう。

もし女子の方を覗いていたら、レインには加減が不可能になっていただろう。その辺、鴉はラッキーだった。

「中空知。目標の現在置は？」

黒霧はインカムで通信科の中空知と通話する。

彼の右耳から目を覆うように、某大人気少年漫画の戦闘力計測装置のようなバイザーが装着されていた。

どうやら位置座標などを表示するためらしいそれには、レインたちの現在置を中心とする円に広がり、鴉の居場所を点で示した。

『ここから東南東に約4.7キロの地点です』

分かった、と短く返事をする、黒霧はバイザーを外し、懐のケースに収めた。

「じゃあ、敵の位置も分かったところで作戦会議だね。前衛は俺、黒霧。

アリアはミチルの護衛、悠と静奈は後方支援。で、大丈夫かな」
即席で作ったチーム編成に、四人は頷く。

「じゃあ……作戦開始だ」

山岳部の、一般人の近寄らない谷。

その一角で、鴉は身体を休めていた。

厄介な敵に見つかったものだ。

世界最強の超能力者『紫電の雷神』にかつてロシア系凶悪犯罪集団・

『スヴェントヴィト』の構成員を幾人も逮捕したと言われる『黒の疾風・紅い閃光』。

どちらか一人でも勝ち目が薄い中で、この二人を相手取るのはあまりに無謀。

故に、鴉は夜を待った。

夜目の効くこともあったが……彼の戦場は、本来夜なのだ。

日も落ち、現在時刻は23時47分。

鴉は、突如跳び上がった。

鴉の座っていた岩を、水の槍が幾重にも貫く。

そして、夜の闇を赤く照らす銃閃。

次いで銃声が響き、鴉の頬を銃弾が掠めた。

悠の、グロック18での射撃である。

諜報科Sランクであり、日本の誇る大家、有明家の跡取り候補である彼の歩法は、鴉に居場所を悟られる前に、彼女の気配を隠した。

鴉が舌打ちした直後、一筋の紅い閃光が、彼に向かう。

黒霧の超能力、『マインド・ホーク心内透見』。

それが発動している証だった。

そして背後から、紫の光。

雷神化した、レイン。

完成した包囲網の中、鴉は

僅かに、微笑を洩らした。

「さあ……開戦だ。」

最高の夜にしてやるよ」

「上等！」

レインと黒霧、計三本の刃が鴉に迫った。

第152弾 番外編 黒の疾風・紅い閃光（後書き）

悠「という訳で、今回はユーザネーム阿良々木 雅さんの小説から
！」

綾「紅坂 黒霧君ね登場よ」

ミ「雅さんには感謝を、そして相変わらずの駄文な作者には罰を！」

静「食らえ！」 水槍ドーン

第153弾 番外編 秘剣（前書き）

皆様、更新が滞ってしまいすみませんでした。

大丈夫、二日だけだ、という方には感謝と謝罪を。

二日も休むなこの駄作者が、という方にはひたすら土下座を。

ともかく、なんとか更新できたので投稿しました。よろしくお願ひします。

第153弾 〈番外編〉 秘剣

第153弾 〈番外編〉 秘剣

黒霧は紅い刀身の刀、『桜紅梅』と刃が黒い刀、『牙鳳』を抜く。二本の刀を振るうも、鴉の刃付き外套に弾かれる。

「っ、レイン！」

「応！」

レインは黒霧の叫びに一言で返答し、彼の足下に砂鉄の足場を展開する。

レインはダガーを操作、鴉に向かわせながら自身も肉薄する。

紫電を纏ったレインに照らされ、鴉の姿が露になる。

その背には……漆黒の翼が生えていた。

「（『鴉』……成る程、フリークスか……！）」

フリークス。

半獣の人間……つまりは、動物の力を持った者である。かつてレインが戦った『フェンリル』もここに属する。

その能力は先天的なものと後天的なものがある。

が、どちらも碌なものではない 本人たちにとっては。

先天的なものであれば、化け物として扱われ、周りから石を投げられる。が、最悪なのが後天的な場合だ。

後天的にフリークスになる……それはつまり、人体実験をされた、ということなのだ。

身体が引き裂かれるような痛みを伴う半獣化。

それが原因で心を壊し、殺戮を繰り返す者もいるという。

目の前の男は、人間を憎み続けているのだ。自身が人間だ、という認識が薄れていく中で。

許せない……！

鴉は何も悪くない。

確かに人を殺すのは許されることではない。しかし、レインが許せないのは、鴉をこのような非道な実験に巻き込んだ者である。

レインは、水月を持つ拳を強く握る。

「お前を……止める！」

レインは指先から高圧電流を放ち、水月を腰に据えた。

当然の如く避けられた雷弾だが、レインは既に鴉の目の前にいた。

「らあああああつ！」

片手のグローブで水月を掴まれる。が、レインは磁場を蹴り、『影』の踵を頭に落とした。

しかし、腕部を盾とした鴉の防御の前に、鋼鉄が仕込んであるはずの『影』は容易に弾かれる。

対超能力装備を全身装甲にしているようだ。

銀を下地に使った合金で構成されているらしいそれは、並大抵の武偵では傷一つつけられないような強度を誇っているようだ。

ならば 狙いは唯一つ。

「（（翼だ！））」

二人の意思が同調する。

唯一、鴉の急所以以外の肉体で露出している部分である。

レインは跳び上がり、ダガーを多角的に操作し鴉を攪乱。同時に鴉に斬りかかる。

黒霧は形成された砂鉄の足場を利用し、それを蹴りながら鴉に接近。黒い刀身の刀、『牙鳳』と愛銃、SIGをを持った。

SIGを横薙に掃射。砂鉄の塊に反射させ、鴉を狙いつつ、鴉に肉薄する。

が。

「遅い」

鴉は右手で黒霧の銃弾を全て弾き、足刀で全てのダガーを切り落とした。

「俺を止める？ そんなことは俺にさえ不可能だ」

鴉に向かう二つの刃は、両の手に掴まれ、阻まれる。

そして、二人を力任せに投げると鴉は黒霧に、圧倒的な速度で接近。そのまま首の根を刈ろうとするも

「『心内透見』!」

黒霧の瞳が紅く発光し、その刹那に彼はギリギリで鴉の一撃を避ける。

「!?!」

驚愕している鴉を蹴り飛ばし、黒霧は刀を両手に構える。

「お前が止めるのが不可能だと言うなら、俺たちが止める!」

黒霧は桜紅梅を、投擲した。

「何!?!」

流石に予想していなかったらしい鴉は、条件反射で刀を交わす。横に回転しながら飛翔するその剣の先には

「借りるよ」

桜紅梅を回転させながら右手に構える、レインだった。

「こいつで……どうだ!」

雷による超高速振動。

切れ味の倍増したそれは、僅かに回避行動を取った鴉の肩を浅く斬る。

「ちっ……!」

鴉は翼をはためかせ、更に上空に移動する。

その間に、レインは黒霧に刀を返していた。

「返すよ。良い刀だね」

「本当はちよつと重かった、って思ってるだろ」

「……………」

レインはバツが悪そうに顔を逸らし、待機していり静奈たちに手信号を送る。

『戦闘 苛烈 即刻 待避』

という意味のそれを目にした静奈たちは、打ち合わせ通り一旦戦線を離脱した。

「さて……なら行くか。」

あいつらも去ったことだし」

黒霧は牙鳳を薙ぐと、砂鉄の足場を伝いながら鴉に接近する。

その刃をかわす鴉は 違和感を、感じていた。

「（おかしい……何故、わざわざ『紫電の雷神』が隠蔽しようとした事実を、こいつが話す？）」

その間にも、黒霧は鴉に幾重にも上る斬撃を放つ。

その全てが、鴉の避ける方向に向かってくるのだ。

「（そしてこの戦い方……『マインド・ホーク心内透見』、成る程な）」

鴉は理解する。黒霧の能力を。

『心内透見』。

黒霧の超能力である。

名の通り、相手の心を読むことが出来る力。

だが、重大な欠点もある。

それは、自身の考えていることを洩らしてしまうことだ。

時に重大な秘密さえ喋ってしまうこともあるという。

そして、そんな能力を持つ黒霧に対して鴉が取った行動とは

「（出来れば……使いたくはなかったが）」

鴉は冷や汗をかき、左腕を首の辺りに持っていく。そして、かけていた金色のペンダントを、引き千切った。

「うおおおおおおあぁ！」

瞬間、鴉の身体に変化が訪れる。

身体中が黒く、染まっっていく。

フリークスの力の開放。

人間を超越した種・吸血鬼が最も近い例となるその姿は、名の通り

鴉のようではあるが、まるで

「悪魔、か……」

苦々しく呟き、二人は刀を構える。

戦闘法がどのように変わるのかは見当がつかないが、確実に身体能力は上がっているはず。

そう警戒を強めた。しかし。

「!?!」

黒霧の眼前から、鴉が消える。瞬きすらしなかった、一瞬に。

それで驚愕した所為か

「後ろだ黒霧!」

レインの言葉に反応するのが、遅れた。

振り返り様に牙鳳を振るうが、それは空を斬る。

低く屈んだ、鴉。

それを見ても、何も視えない。

「(こいつ 理性を!)」

鴉は渾身の力で、黒霧の腹に拳を叩き込んだ。

「がっ!」

フリークスの開放された力の前に、黒霧の身体は容易に吹き飛んだ。

「黒霧!」

大きく背中を打ち付けた黒霧だったが、彼はなんとか立ち上がる。

が、出血が酷いらしく、立ち眩みを起こしていた。

そんな中、彼は黒いマスクを着用した。

「面白い……」

大丈夫そうだな、とレインは黒霧に耳打ちする。

「黒霧。奴は理性が飛んでる。やるなら今だ」

「ああ……レイン、俺の刀にも、超高速振動、いけるか?」

「勿論」

レインの言葉に小さく笑った黒霧は、牙鳳を腰に据える。

「紅流 秘剣、『紅華』」

鴉に向かい肉薄。

対し鴉は、再び超高速移動で黒霧の後ろに回りこむ。しかし……

「視えてるぞ!」

鴉の、ではなく、レインの、『鴉が後ろに回り込んでいる』という思考が。

振り向き、牙鳳を高速で振り抜く。

その一撃は鴉の鎧を切り裂いた。

そして、二人の刀に雷が宿る。

「これで」

「終わりだ！」

二人の刃は、鴉を切り裂いた。

後に、黒霧は倒れた。どうやら血が足りなくなった上、骨が何本か逝っていたらしい。

戻ってきた静奈たちに鴉逮捕の手続きは終わらせて貰ってある。

仕方なく、レインは神奈川の武偵病院で療養している黒霧の見舞いに来ていた。

しかし どうやら、お取り込み中のようだった。

中には、通信科の中空知がいた。

「あ、あの……紅坂君、大丈夫、でですか？」

「ああ。大丈夫だ」

「わ、私余計な……いや、違って、心配して、ただちょっと」

「……落ち着け」

……この様子では、彼女は

「（成る程成る程。これは面白そうな話だね）」

レインは黒い笑みを浮かべる。

そんな中、一本の電話がかかってきた。

「はい……綾瀬？」

ああ……ありがとう。

いつも迷惑掛けるね」

レインはケータイをしまい、頭を掻きながらその場を後にする。

その後、某国の動物愛護団体を謳ったフリークス研究所が秘密裏に

潰されたのは、誰も知らない話だった。

第153弾 番外編 秘剣（後書き）

綾「出番ちっさ！」

ミ「まあ、出ないよりはマシだよ」

悠「次回からは、ついに……！？」

静「お見逃し無く！」

第154弾 最悪の犯罪者(前書き)

今回からはついに……！

第154弾 最悪の犯罪者

第154弾 最悪の犯罪者

チーム『ラグナロク』、並びにギルド『バスカービル』が結成されて、少したったある日……とんでもない話が、レインたちの元に舞い込んできた。

「……タイムマシンだあ？」

アレックスが、物凄く訝しげに訊いてくる。

いつものことなので、笑顔を崩さずにレインは頷いた。

「装備科の平賀さんが……ね」

「……アイツならやり兼ねねえかもな」

言いながらアレックスが苦々しい表情で見つめるのは、魔改造された彼の斧……『ガンズ・トマホーク』。

銃刀法がセーフとアウトの境界線にあるそれもまた、今回の噂の主、平賀さんの作成である。

「ともかく、見に行ってみようよ。今日はギルドの皆が来る予定なんだ」

レインの提案にアレックスは頷き、二人は装備科の実験場に向かった。

思っていたよりは人がいない　　というか、レインたちだけである。何でも、綾瀬とミチルが情報を操作したのだとか。恐ろしい話である。

「皆お揃いなのだー！」

では発表するのだ！

これこそが、私が開発した『タイムトラベラー・コレキテル』なのだ！」

レインは皆に指示。

綾瀬は悠に、ミチルは静奈に伏せさせられ、レキ、キンジ、アリア、理子、ジャンヌ、白雪はその場に伏せる。

「アレックス！」

「分かってる！」

レインは雷雨で落下してくる屋根を全て破壊、アレックスはその破片を全て風で安全な場所まで運ぶ。

「……な、何だったの？」

ミチルが口を開き、綾瀬がそれに同意する中……皆の視線は、一堂に集まっていた。

綾瀬たちも慌ててそこを見据える。

そこには

『赤』が、いた。

血のような紅い髪。

血のような朱い瞳。

血のような赤い服。

その全てが、心さえも血で染まったかのような男の風貌に、二人は萎縮していた。

前述したような特徴に、ではなく。

ただただ純粹に、見たことのある者だった。そいつは。

「ジャック・ザ・リッパー……『切り裂きジャック』か……！」

武偵なら誰もが知るであろう男、アリアの曾爺にして武偵の始祖『シャーロック・ホームズ』と死闘を演じた男。

史上最悪の犯罪者の一人。

それが、何故ここに　！？

「……よお。てめえ、今までどこに隠れていやがった」

口を開いたのは、アレックス。

その口振りから、即座に理解する。

アレックスが追っていた者　つまり、理子を刺したのは……！

レインは確認の意味で、理子の方を向く。

彼女は、小さく首肯した。

そしてレインが向き直ると ジャックは、話は済んだか、と言わんばかりに……ナイフを二本、取り出した。

一本を、投擲　！

「レイ！」

言われずとも、とレインは鏡花水月で弾く。

しかし、鏡花水月が発動しない。

「……!？」

驚愕する暇も無く、ジャックはもう一本のナイフを投擲。

居合いでそれを弾き、アレックスがジャックに肉薄する。

『ガンス・トマホーク』を振りかぶり、鎌鼬を発生させ、更にアレックス自身もトマホークを構える。

対しジャックは、ナイフの一閃で鎌鼬は弾け飛ばした。

「ちい！」

アレックスはトマホークで切りつける。流石にナイフで戦斧は防げる訳も無く、ジャックは回避。

そして、アレックスを無視してレインたちの方に飛び出した。

「来い、ジャック！」

レインは飛び出し、ダガーを駆りながら水月を薙ぐ。

が、ダガーを全て両の手に持ったナイフで弾き、水月を×字にナイフを重ねて受ける。

「逃げる皆！」

「もうやってるよ！」

レインの叫びと同時に、理子の叫びが響く。彼とアレックス以外の全員が後退を始めた。

悠と理子が背後に気を使いながら、アリアとキンジは迎撃体制で、非戦闘員である綾瀬、ミチル、平賀を静奈とジャンヌ、白雪がそれぞれ護衛に付く。しかし。

「!？」

レインと切り結んでいたジャックは、片手のナイフで水月を押し切

り、もう片方のナイフでレインの頬に傷をつけた。

「ちっ！」

レインはジャックを蹴り飛ばし距離を取ると、ブローを抜きフルオートで掃射。

ジャックは側転を切り避けていくと、アレックスをナイフで牽制しながら、レインに肉薄。

レインもそれに応じ、ダガー二本を構え斬りかかる。

が。

ジャックが向いているのは、レインではない。

その、後ろ

悠、だ。

「悠!!!」

彼の戦闘技術は大きく向上しているものの、ジャックの速度の前には意味を成さない。このままでは、悠は深刻な攻撃を食らう。

レインの叫びも意に介さず、ジャックはナイフを八本構え、投げる。

「させるかああああああああああ!!!」

レインは『加速』で磁場を蹴り、最高速で悠の前に出る。

レインはダガーを操り四本を墜とし、更に水月で不完全な『桜吹雪』の一雑で三本弾く。が、後の一本が防ぎ切れず、レインの左肩に突き刺さった。

「レイン先輩！」

悠の悲痛な叫びが背後に響く。が、レインはそれに応じてやることが出来ない。

防刃も兼ねた武偵高の制服が、容易に貫かれたのだ。

レインが顔をしかめるのと同時、ジャックはレインの横を抜けた。

理子は怪我をしないで動けない。

向かってきたアリアとキンジには、鮮やかな体捌きで拳を一撃、ナイフの一閃を加え、更に地面を踏み締める。

残る全員を置き去りにして ジャックは、平賀の手からタイムトラベラーを奪った。

白雪がジャックに斬りかかるも、超強度のイロカネアヤメでも切り裂けない。

「ミスリル……！」

白雪がそう呟いた刹那、ジャックはタイムトラベラーのパネルを何やら操作し、スイッチを、押した。

ジャックが光に包まれる。

このままならば放置しても、体勢を立て直す意味では良手である。

しかし、レインには、出来ない。

「皆！」

綾瀬、ミチル、平賀、静奈、ジャンヌ、白雪が光に巻き込まれていた。

「く、そおおおお！」

レインは光の中に飛び込む。アレックス、アリア、キンジも同様に光に包まれ、辺りは見えない。

その刹那、急激に、身体にGが掛かった。

「ぐっ!?!」

頭が揺さぶられ、脳髓が弛緩する。

黒ずんで行く視界は、やがてレインの意識も侵食した。

眩い光が煌めいた後には、円状の小規模なクレーターのみが、そこに残っていた。

第155弾 超越する時空

第155弾 超越する時空

「う、うん……」

重い身体を起こす。

頭を豪快に揺さぶられた所為で未だ半分夢の中にいる少女、霧矢綾瀬は、頭を振って空色の髪を揺らし、自身の目覚めを促した。

「うん……ここは、どこかしら？」

まだはつきりと覚醒していない中、綾瀬は辺りを見渡し、状況を確認しようとする。

どうやら煉瓦造りの建物の、屋根の上のようである。

幸いにも下からは見えづらい位置に居たようで、近隣住民に不審がられることは無かった。

果たして、何故こんなところ 見知らぬ建物の屋根の上にいたのか。

それを思いだそうと、取り敢えず眼下に広がる景色を見据える。

石の道路に、人が入り乱れて歩いている。

燦然と輝く太陽を鬱陶しそうに日傘を差す女性、杖をついて歩く陽気なシルクハットの男性、パイプを吹かす腰の曲がったご老体。

しかし、どこか違和感を感じる。

そんな彼女の視界に、信じられないものが映った。

屋根から見える下……多少大きい通り。

そこには……馬、が、引く、車。つまりは……馬、車？

が、あった。

「え？ え？ 馬車……？」

綾瀬が呆然と呟いたのが耳に入ったのか……彼女の側に倒れていたレインが、起き上がる。

「ん……ここは……？」

先の綾瀬と同じ状態なのか、まだ覚醒しきっていない。が、
「うっ！」

肩の傷を押さえる。

タイムトラベラーが発動する直前の戦闘で、赤い男 ジャック・
ザ・リッパーにつけられた傷だ。

痛みのお陰で、はっきりと目が覚める。

レインは同じく状況を確認しようとする、呆然としている綾瀬が
目に入った。

「どうしたの、綾瀬？」

レインの問いに、どう答えを返していいか分からない綾瀬は、涙目
で自身が目にした事象を指す。

そこには……馬車、があつた。

「……へ？」

まさか。

貴族の道楽やら古きを重んじる風習やらならわからなくも無いが、
自動車ではなく馬車が車道をはしっている。

これは、一体どういうことなのか……レインは即座に判断する。
やっちまった、と。

「嘘だああああああああああ！」

ヒーン。

馬の鳴き声が、レインに現実を突きつけたような気がした。

そう、彼らはタイムトラベラーの光に巻き込まれ……過去に、それ
も随分な昔に飛ばされてしまったようだった。

落ち着いたレインは、綾瀬を抱えて取り敢えず建物を降りた。

どうも日本ではないらしいこの場所でも、流石に屋根の上に乗ると
いう奇行は良くない注目を集めるものだ。

どうやら、他の皆とは散り散りになってしまったようだが、心配な

のはミチル、平賀のみ。他は他でなんとか出来るだろう。幸いにも、もう一人候補に上がるはずだった綾瀬は手の中にいる（恍惚とした表情を浮かべているのが気になるが）。

レインは彼女らの無事を祈りながら、近くを通りかかった若々しい男に話掛けた。

他にも沢山人はいたが、超能力を介した彼の心は善人のそのようであり、加えてどこか懐かしさを覚えたからだ。何故かはレイン自身にも分からなかったが。

目深に被った帽子から見える顔は西洋系だったため、レインは日本語でなく英語で話しかけた。

『すみません、私たちは偶然この街に流れついた者なのですが、ここはなんとという街ですか？』

流れついた、という言い方があまり適切ではないかな、などと反省しながら相手の出方を窺う。

戸惑いの色が見えるが、どうも言語の違いである、とは見受けられない。

どうやら、この場所を知らないのか、というニュアンスの驚きらしかった。

『分からないのかい？ 旅人なんて前時代的な者じゃあるまいし……』

『すみません。多少訳ありです』
『まあいいさ。ここはロンドンの一角……ベーカーストリートだよ』

……一拍、おいて。
レインは、男性の台詞を反芻する。信じられないものを、確かめるように。

『ベーカー、ストリート？』

『？ 知ってるのかい？』

知っているも何も……ベーカーストリートと言えば、『あの男』の根城として（言い方が悪いのはご愛嬌といえる）、あまりに有名過ぎる。

知らないはずが無かった。

『ええと……ちなみに今年って何年でしたっけ？』

『随分唐突だね……確か、1×××年だったはずだよ』

レインたちがいた時代から、およそ150年前。つまり

「……やっちまった」

目の前で首を傾げる男性に理解出来ないよう、日本語で、最大限に今の心情を呟いた。

後ろにいる綾瀬も、似たような表情をしているだろう。

「やれやれ……」 『あ、すみません。実は私たちは宿が無いのですが、どこか民宿などご存じで……』 「

言い掛けて……気づいた。

そういえば、更に重大な問題があった。

金だ。

カードなどこの時代で通用するはずもなく、また、日本円　それも現代の紙幣など、この時代この国の人間から見たらただの紙切れ。当然、そんなものが宿代になるはずもない。

「……困ったなあ……」

『どうかしたのかい？』

そんなレインの様子を見て何か気づいたのか、男性はそう訊いてくる。

『いえ……何でもありません。お手間を取らせて申し訳ありませんでした』

男性の心配するような声を振り切り、レインは一礼すると踵を返す。まずは皆ど合流すべきだろう。そのためには、拠点を決めるのが最優先。

どうしようか、と試算し始めたその直後に、突然背後から肩を掴まれた。

『……どうしました？』

努めて好意的な、笑み。

本音を言ってしまうえば手早く目の前の問題を済ませたい。

加えて、本来なら常時微弱な電磁波をソナーのように周囲に放っているレインに、その手がかかわせないはずがなかった。

しかし 手を伸ばしてきたのは、先ほど助けて貰った者。そのよ
うな礼節を弁えない行動をするのは、自称とはいえ、紳士としては
戴けなかった。

『こちらの話がまだ終わってはいないからね。

give and take 物事を訊いたなら、人の話くらい
は聞くべきだよ』

理屈っぽい、だがそれ故に正論である男性の言葉に、レインは綾瀬
を隠す形で再び踵を返した。

『君たち、今夜の宿が無いのだろうか？

ならば、僕の家に来ないかい？』

『……よろしいのですか？』

控え目な、確認を取る言葉。対する男性の声は、それを是の返事と
受け取ったようで 事実そうなのだが 上機嫌なのか、多少先
より朗らかな声だった。

『勿論さ。して、君たちの名前は？』

皆まで言われて、漸く自身の名を名乗っていなかったことに気づく。

『申し遅れました。

私の名前は成瀬 レインハート。

こちらは霧矢 綾瀬』

軽い紹介を済ませ頭を下げる。

綾瀬も同様の所作を終えると、男性は微笑ましそくに口角を上げた。

『へえ、珍しい。

ジャパニーズに、ジャパニーズとのハーフ、いやクォーターかな？
では、こちらも自己紹介をしなくてはならないね』

男性は目深に被っていた帽子を取り その顔を、見せた。

レインと綾瀬が呆気にとられているのに気づかず、男性は、自らの
名を名乗った。

『私の名は『ジョン・H・ワトソン』。』

気軽にワトソン、もしくはジョンと呼んでくれて構わないよ』
はは、と軽く笑った彼、ジョン・H・ワトソンを、二人はただ驚愕
の目で見ていた。各々で驚愕の方向が、若干違ったが。
そして、レインは一人、納得する。
成る程、だから、自分はこの人に話掛けたのか。と。
そんなレインの微笑に、初対面であるジョンは気づかなかった。

第155弾 超越する時空（後書き）

綾瀬「皆とはぐれちゃった……どうしよう？
でも、レイン君がついてくれてるし、大丈夫よね！」

第156弾 世紀の大怪盗

第156弾 世紀の大怪盗

目蓋の裏側の網膜を、僅かに明るい光が刺激する。その感覚によつて、彼女は目覚めた。

「痛たた……ここは？」

頭を掻きながら起き上がった、クリーム色の髪を両サイドで結わいた小柄な少女……理子は、辺りへの警戒を始める。

視界に様々なものが目に入る。薄暗い部屋の隅に寝ていたようだ。彼女の『目』で見て、歴史上とんでもない価値のある壺や、今はもう失われたはずの絵画。

「どうやら、美術館の一角のようだが……」

「そうだよ……飛ばされたんだった」

一つ、深々とした溜め息をつく。どうやら、過去にタイムスリップしてしまつたようだ。

ふと、隣に寝ている二人の少女が目に入った。

「おい、あやや？」

「ううん……あややのコレキテル、返すのですのー」

「こつちは駄目か……じゃあ、静ちゃん？」

起き上がらないタイムトラベラー開発者、平賀の目覚めを諦め、理子は蒼い髪をした、ポニーテールの少女、静奈を揺さぶる。

「……うっ、何だつたんだ……理子？」

「どうやら、飛ばされちゃったみたいなんだよ」

起き上がったばかりで掴み切れていない簡易な情報を伝え、理子は改めて辺りを見渡した。

この時代に感圧床、赤外線感知スイッチなどは無いだろうが、これほど大規模な美術館は、往々にして警備が堅い。

窓の外を見れば随分高い建物のようであり、ワイヤーを使っても降りられるかは微妙なところ。

仮にパラシュートなどで降りられたとしても、下に溜まった警備員たちに攻撃されるのは目に見えていた。

仕方無く、理子は髪で平賀を背負い、静奈と共に美術館を歩き始めた。

「うわあ……凄い骨董品ばかりだよ」

「怪盗の血が騒ぐ、という訳か？」

悪戯っぽく訊く静奈に、理子は舌をちら、と見せて応える。

ショーケースに入れられた壺や皿などを横目に見ながら、二人は当ても無くさ迷っていた。

が、美術品以外のものは見当たらず、また他の見学者も見当たらない。

先の部屋には窓が一つしかなく薄暗かったが、窓から見た時刻は昼。この規模の美術館が、ここまで人が寄り付かないなど、あり得ない時間帯だ。

ならば、今日は休館日か、あるいは

「ッ、しっ！」

曲がり角の直前で……理子は突然歩みを止め、手を広げた。制止の合図に、静奈はすぐさま迎撃体制に入る。

「（駄目だよ静ちゃん。隠れよう）」

そう、ここで仮に曲がってきた相手に攻撃を浴びせようものなら、警備はいっそう堅くなるに違いない。

脱出を最優先に考えている以上、それは避けたい事態だった。

正直に事情を話す、という案はすぐさま却下された。

この（勿論、今理子たちがいる）ご時世、美術館に忍び込んだ輩の話聞いて貰えるとは到底思えない。

それは、静奈も全くの同意見だった。

故に二人は、すぐに近くの展示品の、台の下に隠れた。
幸いにも赤い布が掛けられたタイプのようで、姿が見えることは無いだろう。

物音を、立てなければ。

「んん……？」

二人は肩を跳ね上げ、萎縮する。

なんと、今の今まで寝ていた平賀が、よりもよってこのタイミングで、起きようとしているのだ。

下手に扱えばパニックは確実。それ即ち、外を歩く人物　恐らくは警備員　に見つかることを示す。

過去に流れついて、結果逮捕されるなんて惨め過ぎる。何より、大切なあの人と居られなくなる。

二人の行動は早かった　もしくは、速かった。

理子はソフトに、痛みを全く感じさせずに手刀を平賀の首裏に叩き込み、意識を刈り取る。

声が漏れるのを万が一にも防ぐため、静奈は静奈で平賀の口を水で塞いだ。勿論窒息させるような真似はしないように。

ガクリ、と頂垂れた平賀を見て、二人は物音を立てないよう、無言で溜め息をついた。

が　安心するのはまだ早かった。

『……何か、匂うな』

男の声で上げられたフランスの言語に、理子は言葉を無くす。

失念していた。

まさか、ここに来てこれほど微弱な香水の香りを感じ取られるとは！

理子は十字架に意識を集中させ、ナイフを二本取る。

ワルサー二丁も手に構える、アリアと同じ二つ名

『双剣双銃』^{カトラ}

その由来であり真骨頂の、四つの武器。

理子はそれを、外で赤い布に手を掛けているであろう男に、それらを全て向けた。

決めるなら、一瞬。

静奈もそれは分かっているようで、水の槍を形成、加えて『天衣無縫』を纏い戦扇『蓮華』を手に持った。

男が、布を捲る　瞬間。

理子は、ナイフで男を切りつける。

ワルサーは使わない。銃声を聞き付けられたら面倒だからだ。

ナイフに手応えはさして無く、理子は軽く舌打ちする。

宙を一回転し、軽やかにショーケースの上に着地した男は、仮面をつけた薄い金髪　クリーム色とも言える髪を、腰まで伸ばしていた。

加えて黒い外套。

少なくとも、警備員のする姿ではない。

十中八九は、強盗である。

いきなりの攻撃に戸惑っているのか、彼はそれ以上動こうとしない好機だ、と静奈は直感する。

幾ら警備員で無いとはいえ、今の攻撃でこちらを『敵』と認識したはず。

攻撃を受ける前に、無力化する　その算段を一瞬で立て、静奈は人差し指を男に向ける。

その先端から放たれるは、研磨剤を含めばダイヤさえ切断する圧力の、高圧水流。

現時点で鋼鉄さえ貫通するその一撃は、しかし男には届かなかった。『やれやれ……危なっかしいお嬢さんだ』

男は、腰まで伸びた髪を靡かせただけで、その高圧水流を弾いた。

いつかのアリアと、正体不明の女生徒　曰く、レインの師匠との戦闘で、レインの師匠の見せた技に酷似していた。

「……ッ、理子！　サポートしてくれ！」

静奈は叫びながら、天衣無縫を活かした近接戦闘に切り換える。

蓮華を開き、刃で切りつける。男は指二本でそれを白刃取りし、静奈ごと持ち上げた。

「な」

男の馬鹿げた力に驚く間も無く、静奈は投げ飛ばされた。その先には、展示された鎧の持つ、鋭い剣の切っ先が煌めいていた。危険を感じた静奈は水の盾を形成、自身の身体を受け止める。

『……水使いの魔術師、それもレベル7は堅いか……素晴らしい』
男が送った贅辞も、フランス語を理解出来ない静奈には意味が無い。男の浮かべた笑みが嘲笑に思えて、静奈はその眼光を強めた。

「理子、何をしている。
さっさと決着をつけるぞ」

静奈は、相手の実力を理解していた。

自分や、理子よりも数段上の実力を持っている。

一人では、どう上手く転がっても引き分けが精々だろう。

だからこそ、理子にそう呼び掛けたのだが 返事が、無い。

そこでようやく、理子の様子がおかしいことに気づいた。

「おい、理子？」

「一体どうしたんだ？」

訝しげに訊く静奈を視界にすら入れず。理子は、呆然と男に歩み寄った。

危険だ、そう言い、彼女の肩を掴む前に。

思いもよらぬ言葉が、彼女の薔薇の花弁を思わせる唇から紡がれた。

「曾お爺様……？」

「……！？」

余程同様していたのか、日本語でそう言った理子。彼女は確かに、言った。

『曾お爺様』と。

その話によれば曾孫である、理子が間違えるはずもない。つまり、目の前に立つ男の正体とは。

「……誰だ、お前は？」

第156弾 世紀の大怪盗（後書き）

理「曾お爺様と会えるなんて……！」
でも嬉しさに構ってられない。早くレインたちと合流しなきゃ」

第157弾 オルレ안의魔女

第157弾 オルレ안의魔女

『どこへ行った!?!』

『草の根を分けてでも探しだせ!!!』

物騒な黒服の男たちの言葉を影から聞く少女……ジャンヌは、その銀の髪を揺らしながら、聖剣・デュランダルを眺めた。

どうしてこうなったのだろうか……現状を理解するために、隣に座るレキ、息を切らすミチルを差し置いて、ジャンヌは目覚めて少したった頃を頭の中で思い浮かべた。

「……成る程、タイムトラベラーとは本物だったのか」

ジャンヌの何事でもないかのような言葉に、ミチルは愕然とするのみ。レキは、その程度で騒ぐような性格をしていない。

目の前に広がる、現代より遙か過去の景色。

完全なイレギュラーな事態に、ジャンヌたちが第一に考えた案が、

『レインと合流する』というものだった。

が、日本の中心で起こったはずのタイムトラベルが、何がどうなったのか時間だけでなく位置座標までも変えてしまったらしく、フランスのど真ん中……ここ、オルレ안의地にいるのだ。レインたちが今どこに居るのか、見当もつかない。

「（こいつに縁のあるところに飛ばされたのか……?）」

疑問を持ちながら、自身の手に握られる聖剣・デュランダルを持つ。オルレ안의地に飛ばされたのは 何か、重大な意味を持つのではないか。

考えに耽っていたジャンヌは、それ故に道端で彼女を 正確には、

彼女の持つデュランダルを見ているのに、気がつかなかった。

「おい」

前から掛けられたのは、フランス語。

レキとミチルは理解出来ているのかは分からない。フランス語が話せるジャンヌは前を向いた。

「何か用か」

そつけない態度が気に障ったのか……男は、叫びながら飛び掛かって来た。

「そいつを寄越せ！」

狙いはジャンヌの持つデュランダル。

彼女は身体を翻し、氷で彼の足下を凍らせた。

軽く足を払うと、盛大に転けて頭を打つ。

男が叫ぶ間も無く気を失ったのを確認すると、ジャンヌはデュランダルを鞘に納めた。

「二人共、隠れるぞ……私たちが狙っているのは、奴だけではないらしい」

「……狙撃しますか」

「いや、駄目だ。銃弾はギリギリまで使わない方がいい。銃弾の製造ルートが無い」

まだ武偵が生まれてていないであろうこの時代、軽々しく銃弾が手に入るとも思えない。

「今は逃げよう」

ジャンヌに促され、ミチルとレキは首肯する。

氷で視界を奪ったジャンヌたちは路地裏に逃げ込んだ。

こうして、冒頭に戻るのである。

「く……デュランダルがまさかここまで狙われているとは……」

「まあ、デュランダルは歴史上価値の高い剣だしね」

確かに、聖遺物であり最鋭の剣、デュランダルはここ、オルレアン

の地では知る者ぞ知る秘宝である。

狙う者が多いのは、当然と言えば当然なのだ。

「……引きましよう。」

早急にこの場を離れるのが得策です」

レキに促され、ジャンヌは頷く。ミチルを片手で担ぎ上げると、彼女はレキを連れて路地裏から大通りに移動しようとする。が。

「！」

米神に向けて撃たれた銃弾を、咄嗟に張った五重の氷壁で弾く。次いで放たれたレイピアによる突きを、上体を逸らしてかわす。

「……聖遺物狩りとはな。罰当たりなことをするな」

ジャンヌの呟きを聞いて、隠れていた先の男たちが姿を現した。数はざつと60はいるだろう。旧式の拳銃を持つ者もいる。

如何にジャンヌとて、接近戦は不得手であるレキ、戦闘能力皆無のミチルを連れてここを突破するのは相当骨が折れる。

男たちがその包囲の輪を徐々に縮めていった。

『ふん……そんな良いもの持っていながら警戒が薄い薄い』
嘲りを含めた笑みを見せた男は、デュランダルを指差す。

『それにしても……もう一人はどこへ行った？』

唐突に……男が言ったその言葉に。

ジャンヌは、疑問を感じずには居られなかった。

『もう一人？』

端から聞いていたミチルの口から、自然、言葉が洩れる。

『しらはつくれても無駄だぞ。そいつと同じ銀髪が、もう一人いるはずだ……まあ、何だか格好が違う気もするが』

男の独白を聞く間に　ジャンヌは、超能力を、地中に張り巡らしていた。

『ふん……知らんな、そんな者は。それより貴様』

ジャンヌは、先頭に立って酔いしれたように話していた男を指す。

『時間を稼いでくれて助かったぞ、間抜け』

『ああ!?!』

男たちが怒りで声を荒げると同時に、地中から氷柱が突き出す。

『ぐああああつ！？』

『心配するな。急所は外してある』

言いながら、次々と男たちを文字通り串刺しにしていく。

『てめえ……魔術師か！』

魔術師……超能力者の過去の呼び名だ。

当時はGではなくレベル、という単位で超能力の規模を計っていたらしい。

ともかく、ただの犯罪者ごときが超能力に対応する術を持つ訳も無く、そのまま全員氷柱の餌食になる……はずだったのだが。

『舐めるなあああ！』

男の一人が氷柱を避け、ミチルに掴み掛かった。

「あう！」

『動くな！ こいつを殺すぞ！』

そのまま、ミチルの首筋にナイフをあてがう。

油断した、とジャンヌは苦々しい表情をつくり、男を睨みつけた。

『さあ、とつとそいつを渡しな。聖剣デュランダル、ってヤツをよ』

男がミチルに当てるナイフを、わざとらしくひけらかす。

レキも、ドラグノフを手に掛けようとするが制止を受けた。

ジャンヌは諦めて、デュランダルを男に渡そうとする。

「駄目だよ、ジャンヌ！」

私なんか放つて、早くこいつを倒して！」

「……出来ない」

ミチルの悲痛な叫びに、しかしジャンヌは首を縦には振らなかった。

「どうして」

「私は、一族の宝より、お前の方が大切だ」

「……………！」

ミチルが驚愕に目を染めたところで、ジャンヌがデュランダルを渡そうと鞘を外した。その、瞬間。

『そんなに欲しいなら
』くれてやる』

妙な間を開けた、声。否、全く同じ声の者が、二人いるのか。その、鈴の音のような声がその場に響いた刹那。

男の、ナイフを持った腕に、大振りの西洋剣が突き刺さった。

『……あ、あああつ!?!』

男の叫びをBGMに、赤い雨がその場に降り注ぐ。

ミチルの眼前で吹き出す男の血は、しかし彼女に届かない。

目の前にある、透明なガラスの壁のようなものに阻まれている。

『貴様が探していたのは』

『私たちだ』

路地の建物の上が降りてきたのは、一人はかつてのジャンヌのように鎧を見にまとった、長い銀髪を頂で結わいた少女。

もう一人は、彼女と完全に同じ容姿。しかし、その服装は男物である。

そして、何よりミチルを驚かせたのが、

『その氷……』

『私たちの血縁の者が』

彼女らの顔。

全くと言って良い程、ジャンヌと同じだった。

『申し遅れた』

『我々の名は』

示し合わせたかのように綿密な話し方。

最早一人の、一連の言葉にさえ感じるその声で、自身らの名を紡ぐ。

『『ジャンヌ・ダルク27世』』

双子の、ジャンヌ・ダルク。

かつてあの吸血鬼と引き分けた者たちだ。

彼女らが、目の前にいる。

それを漸く現実として認知し、紹介を始める。

『助かりました。ありがとうございます。』

こちらが立花 ミチル、こちらがレキ……そして私が』

一拍、間をあけて。ジャンヌは、思いきってこう言い放った。
『貴女たちの、子孫だ』

第157弾 オルレアンの魔女（後書き）

ジャンヌ

「あの吸血鬼と戦ったご先祖様と邂逅だ。やれやれ、表記が同じになるな……まあ、プーモが色々考えているらしいから、そこについては心配しないでくれ」

第158弾 『教授』再び

第158弾 『教授』再び

遠山 キンジは廃屋の片隅に寝そべっていた。

その瞳は閉じており、彼が気を失っているようである。

が、彼の安眠は、緋色の髪を持つ小さな少女の手によって終わりを告げた。

「起きなさい、バカキンジ!!」

台詞と同時に、キンジの脳天に手刀が叩き込まれた。

「~~~~~ッあっ!?!」

声にならない叫びをあげながら、キンジは脳天を二つに割られたかのような痛み地に地べたを転がる。

そんな様子にはほとほと呆れた、という表情をした、キンジがこうなつた原因であるはずの手刀の主……緋色の髪の少女、神崎・H・アリアは彼の耳を引っ張り上げる。

「いてててて! 止めるアリア! 耳が千切れる!」

「働かない耳なんか千切れればいいのよ!」

「何だそりゃ!?!」

どうやら、キンジが自分の話を聞かないことに酷く不快感を覚えたようだ。

……気絶していたキンジに、全く非はないのだが。

「とにかく、状況を教えるわ!」

アリアはバカキンジでも分かるように、と付け加え、彼に把握出来ている範囲で現状を教えた。

平賀のタイムトラベラーが発動してしまったらしいこと。

固まっていた面子が散り散りになったこと。

今いるのが、キンジ、アリア、白雪、悠の四人であること……

「白雪には外を警戒して貰ってるわ。悠には状況の調査を引き続き行って貰ってる。私たちも行くわよ」
怒濤の勢い、という形容がなんら過言でない程アリアに捲し立てられ、キンジは答えに窮する。
そんな彼の心情など関係無しに、アリアはキンジの手首を掴み、引っ張る形で外へ連れ出した。

蜘蛛の巣が張った廃屋は、散乱するデスクにペン、埃を被った英語の新聞などがあることから、英国の新聞社なのだろう、と探偵科Eランクであるキンジは当たりをつける。
実際、ここは昔は小さな新聞社であった。
しばらく歩いた先に、光源が見えた。半分開いたままのドアである。成る程、これは確かに見張りが要るだろう。

「……あ、キンちゃん！」
逸早くこちらに気がつき、手を振るのは星伽 白雪。彼女が手を振る度、その長い黒髪が揺れていた。

そんな白雪を苦笑しながら見ているのは、レインの戦妹であり、自らの弟子でもある有明 悠。

ちなみに、キンジは彼女が転装生であり女であることを知っていた。晴夜の弟子同士として幾度か手合わせする内に、感づいたのだ。それは申告したので、悠もレインも既知の事象である。

「悠、調査お疲れ。どうだったかしら？」
アリアの言葉に、居住まいを正した悠は静かに首肯し、調査結果を告げる。

「まず、やはりここはイギリスで間違いないようです。付近に『ベイカーストリート』があることから、ロンドンであると考えられます。」

そして時代ですが……約150年前のようです」
他にも細かな情報を報告するも、仲間たちに関する情報は無かった。

「そうね……なら、まずはベイカーストリートに行きましようか。こんなところで寝るなんて、皆嫌でしょうし」

アリアが見渡したのは、ネズミが歩いてさえいる小汚ない廊下だ。先程キンジが寝ていた部屋は、白雪が頑張って掃除してくれたのだが……いつまでもこんな不衛生なところにおいては、身も心も不健康である。

「そりゃそうだ。だが……宿はどうする」

「え？ それはお金を払えば」

「ここは150年前のロンドンだぞ？」

「あつ……」

白雪もよつやくその意味に気づく。

そう、ここは『遙か昔のロンドン』である。

日本円に価値があるはずもない。

つまり彼らは無一文ということになる。宿どころか、パンの一つですら買うことが出来ない。

「どうします？」

「取り敢えずは、働き口かなあ……」

しかし、高校生であるキンジたちを、そう簡単に雇ってくれる者たちがいるのだろうか？

そんな疑問を抱きながらも、一同はベイカーストリートを目指すことにした。

考える前に行動 即ち、アリアの理念に従った結果だった。

「……やっぱこうなるよなあ」

キンジは今、煉瓦造りの曲がり角の先にいた。向こうからは、様々な喧騒が聞こえる。

そういえば、自分たちはトラブルメーカーの気質も兼ね備えていた。それをすっかり失念していたらしいキンジは、軽く一息、溜め息をついた。

「どうしてこう……事件に巻き込まれるのかねっ！」

台詞の最後に、キンジは地を蹴る。曲がり角を曲がってきた男の顎に向けてハイキック。

男の歯が幾本が折れるが、死んじやいないだろう。

男の持っていた革の鞆が宙を舞う。それを片手でキャッチしたキンジは、ほう、と再び溜め息をついた。

「いやあ、お見事。」

流星は東国の大家、遠山家の侍だ」

「……やっぱ凄いな、アンタ」

かつて 否、この時代より遙か未来に、自分と戦うこととなる目の前の男に、改めて称賛の言葉を送った。

事の発端は数分前。

ベイカーストリートに到着した四人は、早々にその体質 事件を呼び込むことに長ける を（不本意ながら）発動。

近くを歩いていた男の鞆が、引つたくられた。

「あっ！？」

イギリス語で上がる、驚きの声。引つたくり犯は人混みをすり抜け、路地裏に入ってしまった。

「キンジ！ 回り込みなさい！ 悠は直進してあっちから回り込み、白雪は悠に同行！ 私は直接追う！」

手早く指示をだしたアリアは、小さな身体を最大限利用し人混みを縫い、犯人の入ってしまった路地に駆けていった。

「やれやれ……大丈夫ですか……っ！？」

キンジは言葉を途中で切った。何故なら、目の前にいる男は 前に、戦った相手なのだから。

黒い髪をオールバックにし、その角ばった鼻筋。

温厚に見えるその目が見据えるキンジは、口を開き、その名を紡ぐ。それが、どれほどのタブーかも分からず。

「シャー、ロック……!?!」
そう。

アリアの曾祖父であり。
武偵の始祖であり。

イ・ウーの長であった、あの『シャーロック・ホームズ』だった。

「……済まない、あの鞆を取り返してくれないかな?」

試すような、視線。

即座に理解する　嗚呼、こいつ、わざと取られやがった。

試しているのだ。キンジを、アリアを。

何故、この時代の彼が自分たちを知っているか。そんなものは、考えても無駄なことだ。

この男を、その辺に転がる常識という定規で測ろうというのがそもそもの間違いなのだ。

「……いいぜ。やってやるよ、『どこかの被害者』」

皮肉を込めた言葉を返し、キンジは駆け出した。

米神を親指と中指で押さえる。

ヒステリア・セルフ　発動。

キンジは建物の並びを瞬時に把握、犯人が追い込まれるであろう通路を演算し、そこへ向かった。

そして　男を逮捕するに至った、という訳だ。

「やれやれ、アンタの規格外オーバースペックは分かったつもりだったんだが……参考までに、どうして分かった?」

先の会話、シャーロックがキンジが遠山の人間であることに気づいた点だ。

「参考になるかは微妙だけど……理由は二つ。

ヒステリア・サヴァン・シンドロームの発動に、身のこなしの軽さ、かな。

君の動きは東洋の侍に酷似していた。そこに、そのような特殊な体質は、世界広しと言えども、遠山家だけだよ」

シャーロック……『教授』の講義を聞きながら、キンジは逡順する。

スクラマ・サクスは隠すべきだ。

本来シャーロックの持ち物であるそれがあると、歴史に齟齬が生まれるだろう。

避けるべき事態を把握したキンジは、すぐさまスクラマ・サクスを背に隠す。

その動作を誤魔化すのにちょうどよく、路地にアリアが侵入してきた。

派手な髪の色をした彼女の登場に、シャーロックの目がそちらに向かう。このスケベジジイ。

キンジは内心で悪態をつきながら、サクスを隠すことに成功。しかし。

「曾お爺様……!?!」

忘れていた。

この少女、アリアも大概なうっかり者であると。

キンジが結構頑張って防ごうとした歴史上の齟齬が、アリアの不用意な一言で、一瞬で出来上がるのだった。

第158弾 『教授』再び（後書き）

アリア

「曾お爺様と再会！！」

でもちよつと複雑な気分よ……」

第159弾 招待

第159弾 招待

「……………？ 誰のことだい？」
しめた、とキンジは心の内でガッツポーズを取る。
まだシャーロックはアリアが自分の曾孫だ、ということに気づいていない。

それはそうだろう。如何に世界最高の頭脳を持つと言っても、時空を超越する、などという『あり得ない』事態を想定するなど不可能。故に、事を置くなら今しかない。

「いえ。この娘の言い間違いです」
間違っても、今のシャーロックは『曾お爺様』なんて歳じゃない。
「何言ってるのよキンジ、どこから見ても曾お爺様じゃない！！」
この阿呆。

キンジの心の叫びに、駆けつけた悠と白雪も同調していた。
そんな中……………シャーロックが、ツカツカとキンジに近づいてきた。
「君、済まないが少し後ろを向いてみてくれないか」

……………？
キンジは疑問に思うが、下手に反抗すれば怪しまれる。
素直に後ろを向く。

すると……………背中スクラム・サクスを、引き抜かれた。
「あっ！？」

「ふむ……………型は違うが、これは確かに、私の剣と同じものだね……………
君たちは何者だい？」

……………判断ミス。そんな言葉が脳裏を過る。
弟弟子の刺々しい視線を受けながら、キンジは不承不承、というよ
うな感じに、訳を話し始めた。

「……ふむ。とすると、君たちは未来から来た私の曾孫と、そのパートナーたちだと」

洗いざらい話させられたキンジは、苦々しい表情を浮かべ頷くのみ。「成る程、中々面白い話だ。キンジ君が僕の剣を持っているのも頷ける」

ちなみに、アリアの『緋色の研究』については何も言及していない。キンジも詳しくは知らない、ということもあつたが、やはり元の世界でシャーロックがしたことは、彼にとつては許し難い事である。

「……それにしても、そんな面白そうな話を私に隠しておこうだねんて……些か、寂しいよ」

「すみませんでした……」

どうやら、昔のシャーロックは好奇心が旺盛なようである。

まあ、150年も前だ。性格が多少、もしくは大幅に変わっていてもおかしい話ではない。

「さて……君たちはしばらくの下宿先を探している、という話だったね」

突然の、話の切り替え。加えてその内容、彼の浮かべる人の悪い笑み。

嫌な予感が純100%で頭を占める中、キンジはただ次の言葉を待つしかない。

「私の家に下宿しないかい？」

それ見ろ。

キンジはシャーロックにバレないよう、こっそり溜め息をついた。

「良いんですか？」

「ああ。勿論、部屋は幾つかあるから、キンジ君と……まあ、悠君は私と一緒に寝ることになるがね」

悠のことを気づいているのか、やや照れ気味に言ったシャーロックだが（悠の男装がバレてはならないものだと理解しているようだ）

……まあ、そりゃそうだ。

白雪が残念そうな顔をしているのを見てみぬフリし、キンジはアリアの方を向く。

何を想像していたのか、顔を朱に染めたアリアのおみ足が、キンジの顔にめり込んだ。

「こんの……バカキンジ！ アンタは外で宿借りて来なさい！ アンタみたいのを曾お爺様と一緒に寝かせられる訳ないでしょ！？」

「俺は男だぞ！？」

「だからよ！」

「意味分かんねえよ！」

ギヤアギヤアと二人が上手い具合に漫才を始めたところで、軽い咳払いが響いた。

「済まないが……そろそろ僕は戻らなくてはならない。

ついて来ながらも、寢床は決められるだろう？」

この人数で馬車に乗れるはずもなく、キンジが荷物を持ち、全員に着いていくこととなった。

荷物、と言っても鞆一つ。大したことはないと高を括っていたキンジだったが……途中、買いたい物がしたい、というシャーロックの言葉により、荷物の量が三倍近いものとなっていた。

いつかぶっ飛ばす。そう心に近いながら、キンジは男に二言は無しを地で実行していた。

そんなキンジの苦労など知らず……シャーロックは、前を歩く少女たちの内一人に視線をやっていた。

「……ふむ、有明君だったかな？ 素晴らしい歩法だ。私も、注意を払って無ければ聞き逃してしまいそうだ」

「あ、ありがとうございます」

戦々恐々、といった様子で悠はお辞儀する。

かつて自身の兄弟子と刃を交えた人物の、圧倒的な気配に少々萎縮

しているようである。

そんな様子を見ながら、荷物を運ぶキンジに、白雪が話しかけてきた。

「キンちゃん、大丈夫？」

本音を言えばあまり大丈夫ではないが、この娘に言えば彼女は間違いない手伝う、と言い出すだろう。キンジは笑みを見せ、大丈夫だと丁重にありがたい手伝いの申し出を断った。

「……キンちゃん、あの赤い男の話なんだけど」

「……ジャックか？」

僅かに頷く白雪は、そのまま言葉を続けた。

「あの人、色金を持った様子も無かったの。どうして私たちの時代に……それに、私たちを襲って、タイムトラベラーを奪ったんだらう」

白雪は、今の状況の不可解が不安なようだった。それはキンジも同じこと。

もう少したってからでも良かったと思ったが、キンジは自身の考えを明かすことにした。

「あいつがあ時代の時代に現れた理由は分からないが……ひょんなことなんじゃないか？ この世には次元漂流者なんてもんがいるんだし。そして、遠い未来には、偶然にも自身のいた時代かに帰れそうなモノ……タイムトラベラーがあった。

だからそれを奪おうとした……そんなところだろ」

探偵科らしく、やや綻びが見当たりながらも見事な推理を見せるキンジ。

それが正解か否かは分からないが、少なくとも白雪は目を輝かせ、キンジへの崇拜を更に高めたという。

そんなことをしている間に、シャーロックは足を止めた。

「さて、私の家だ」

「……って、アンタの家も下宿先じゃないすか」

「固いことは気にしなくていい。老けが早まるよ？」

そう言われると反論出来ない。

150年未来のシャーロックの若々しさは、色金の影響ありきとは分かっているが、やはり年長者の意見を蔑ろには出来ない。

ギイ、と年季を感じさせるドアの音が聞こえ、キンジの視界に、シャーロックの自宅が映り込む。

彼がいつも座っているであろう安楽椅子に、高価なのかよく分からない小物の数々。

写真に写っているのは、彼の愛する女性か

と、シャーロックはキンジの視線に気づいたのか、写真立てを伏せた。

「さて、君たちは丁度の良いタイミングに来てくれた」

久々に聞く、シャーロックの勿体振った口調。

もう慣れたかと思っていたが、やはりそれでもなかったらしい。

「私の友人には元警察の医者がいてね。

長年、相棒をして貰って数々の事件を解決してきたのだが　彼が丁度、来る頃だね。

買い物に付き合っただ貰ったのは、彼に何かご馳走しようと思ったからなんだよ」

シャーロックの話から、もう大体の人物像は捉えた。

何故かアリアが顔をしかめているのが気になったが　キンジは、

答えの分かっているシャーロックの言葉を待った。

「では、君たちに僕の相棒を紹介しよう。

ワトソン君、来たまえ」

「君はどうしていつも偉そうなんだ？　それに……今日は日本語かい？　付き合わされるこっちの身にもなってくれ」

愚痴りながら入ってきたのは、教本で見た通り、確かにシャーロック・ホームズの無二の相棒、ジョン・H・ワトソンだ。

しかし、今更そんなことで動揺するような細かい神経をしてはいない。問題は、その後ろ。そこには

「ジョン、貴方は日本語が話せたんですか……って、キンジ!？」

「ええ！？ アリアちゃんに悠君、白雪ちゃんも！」

この時代でも一際目立つ、銀と空色の髪を持つ二人、レインと綾瀬の姿があった。

「ワトソン君、その子たちは？」

「旅人らしいけど……そっちの子らは？ 知り合いらしいけど」

「時空を超越した子供たちさ」

「……その遠回しな話し方、どうにかならないか？」

ジヨンは呆れたように溜め息をついた。

第159弾 招待（後書き）

綾瀬、悠

「合流〜！！」

悠

「やりましたね綾瀬先輩！」

綾瀬

「そうね、この調子で皆と早く集まりましょ」

第160弾 ロンドンの夜

第160弾 ロンドンの夜

「いや良かった。こんなに早く合流出来るなんてね……この分だと、残りの皆とも手早く合流出来るかもね」

「そうかもな……」

シャーロックの家の屋根の上。レインの言葉に生返事を返し、キングは夕暮れの空を見上げる。

緋色に支配された辺り一帯には、150年前の人間たちが闊歩している。

これはこれでシュールな光景だが……キングは、目の前の景色に、ただ心を奪われていた。

太陽は、今も昔も変わらず輝いている、ということか。

……柄にもなく、ロマンチックなことを考えてしまったキングは頭を振った。

「……俺たちは、元の時代に戻れるのか？」

ふと洩らした、一番不安に思っていたこと。

レインの前だからか、守るべき存在であったアリアの前では言えなかった言葉が口について出る。

その問いに、レインは真摯に、キングの眼を真っ直ぐ見て言った。

「戻る。絶対」

戻れる、ではなく、戻る。

そうきたか　と、キングは思わず苦笑を洩らしてしまう。

「ええー、今の笑うところ？」

「いや、悪い悪い。そういう訳じゃないんだが」

「全く……ならいいけどね」

レインはそう言いながら、キングの向く方に目をやる。その光が髪

に反射し、レインの銀髪が橙に染まった。

「先輩方、ご飯ですよー」

悠からのご飯の連絡を聞き、レインとキンジは腰を上げた。

「ご飯か……150年前の食事、つてのはどんなものなのかね」

シャーロック宅の夕飯は、キンジの予想……パンにスープなんかじゃないか？ という完全に偏見の入ったそれを大きく上回っていた。イギリス料理が不味い、とはよく聞いていた話だし、レインは実際に体感してノックアウトされたこともあったのだが、それは割愛しよう。

「上手い……」

ローストビーフにスコーンなど、様々な豪華絢爛な料理が並べられたテーブル。

「さて……腕を振るってみたのだが、上手く出来てるかな？」

「滅茶苦茶美味しいですよ」

一応、敵でない年上には警護を使うレインがそういうと、皆がそれに賛同する。

「はは、そう言ったら嬉しいね」

少し照れたようにシャーロックが頭を掻く。

意外な一面に一同は多少面食らうが、キンジは元の時代で見っていたため、表情を変えずに料理にがつついていた。

「それにしても、君たちの残りの仲間は何処へ行ってしまったのかね？」

改めて、ジョンが現在の問題点を上げる。

その通り、今最も優先すべきはレキ、理子、ジャンヌ、ミチル、静奈、平賀、アレックスとの合流だ。

「……皆、大丈夫かなあ」

綾瀬の言葉は、9時を知らせる時報の前にかき消える。

外はもう暗く、街灯の僅かな明かりが、逆に恐怖心を煽っていた。

9時の鐘が、時計台より鳴り響く。

その音を聞きながら、赤い髪を揺らす少年……アレックスは、その派手な髪の色と裏腹の黒い和服で、宵の闇に溶け込んでいた。

「（けっ、マジでタイムスリップする羽目になるとはなあ……）」
唯一、一人で過去に送り込まれたアレックスは、それ故自由に行動していた。

飯はどうしているかと言えば、流石に窃盗はしていない。

ただ、目立つ自分に襲いかかってきた心優しい不良共に、ほんの少しパンなどを恵んで貰っただけの話。

一日で兄貴ブラザーから親分ドンと呼ばれるまでに成長を果たしたアレックスは、既にロンドン中に張り巡らした不良ネットワークでレインたちの行方を追っていた。

同時に、ジャックの居場所も。

『親分。兄貴たちの場所が割れました』

不意に背後から声を掛けられる。振り返ると、完全に支配下に置いた不良たちの大名行列が出来ていた。

兄貴たち、とは特徴を話しておいたレインたちのことである。

曰く、『親分の友人タチなら俺たちの兄貴っす！』ということらしい。

『ある有名な探偵の下宿先らしいんすが……こいつが資料です』

『ご苦労。じゃあてめえらは持ち場に戻れ』

『……うっす！ 親分、お勤めお疲れ様っす！』

今や『風神組』というヤザにまで昇華した不良集団は、今や活動内容が不良活動から地域団体のようになっていた。

まずは町内の清掃。

『自分たちがシメる街くれえ、てめえらで掃除しやがれ！』というアレックスの一喝の結果である。

そして挨拶。

夜中は流石に控えるが、道行く人には必ず挨拶をさせる。これは鉄

則だった。

地域住民とのコミュニケーションは重要だからだ。

そして、カツアゲしていいのは犯罪者相手のみ。

よって、カツアゲすべく犯罪者を追う術は圧倒的となった。

もう地域団体を越して二個中隊並みの軍隊となった不良軍団が、清掃で把握仕切った地域の内情を隈無く報告するなど簡単なことだった。

「まあ、レイがいる以上あいつらに心配は要らねえな。後の奴等が見つかるのを待ちながらあ」

アレックスは、自身の身体の周りに風を起こす。

「俺は俺で、動きますかねえ……なあ、切り裂きジャック……！」

一際強い風が吹き荒れ、次の瞬間にはアレックスの姿は消えた。

夜の暗闇が、彼のいた一切の痕跡を闇に溶かした。

夕食から、一時間程経った。

綾瀬、アリア、白雪がガールズトークをする中、耐えられないらしいキンジはベイカーストリートの闇に姿を眩ました。

レインは、と言えば……現在、街灯の下のベンチで悠の隣に座っていた。

ガールズトークに参加出来ない悠を慰めているところだ。

彼女は『転装生』である。男のように振る舞わなくてはならないそれは、彼女から女子らしさを僅かに欠落させることとなっている。

年頃の女子なら、オシャレの一つでもしたいのだろうが……それすら、彼女には許されない。

「……悠」

「先輩？……どうしたんですか？」

レインはその問いに答えず、思わず悠の頭を抱き寄せる。

「せ、先輩！？ どうしたんですか？」

「……いや、何でもない。何でもないんだ」

レインは強く悠の頭を自身の胸板に押さえつける。悠は顔を朱に染め、どうしたら良いか分からない、というように慌てふためいていた。

……少しして。落ち着いたレインは、謝りながら悠を解放した。未だ赤い顔のまま、軽く咳払いした彼女はレインを睨み付けた。まあ、彼女の穏やかな瞳で睨まれて、恐怖することなど無い。

「先輩、一体どうしたんですか？ いきなりあんなこと……ビックリしましたよ」

「いや、ね……」

話すかどうか迷う。

これは、下手をすれば同情と取られる。それに、悠が意識していないか、もしくは我慢していることをわざわざ自分が口にする必要は無いはずだ。

しかし、黙秘では彼女を納得させることは叶わならしい仕方無く、レインは自身が彼女に抱き着いた理由を話す。

「成る程、同情と思われたくないから黙っていたと？」

……先輩は、私がそんなこと言う娘だと思っていたんですか？」

「ご、誤解だよ悠。」

ただ俺は……あまり、悠が好まない話題を避けようと思って」

「隠し事をされる方がよっぽど好ましくありません」

痛いところを突かれ、レインは押し黙る。

悠は冗談ですよ、と微笑し、光を照らす街灯に目をやった。

その瞳は、光を反射して爛々と輝いている。

「……一つ、聞いていいかい？」

ふとした、疑問。

簡単に踏み込んではない領域だと、理解はしている。

が……今のレインには、どうしても訊かなければならない気がした。

「可能な範囲であれば、ですが」

悠の、そつの無い返事。

レインは一呼吸置き 口を、開いた。

「彼は、どうして

『転生』をしているんだ？」

第160弾 ロンドンの夜(後書き)

綾瀬

「ついに悠君の秘密が!？」

悠

「よつやく僕のターンです!?!」

第161弾 有明の呪縛

第161弾 有明の呪縛

「……その話、ですか」

悠は静かに目を閉じる。

話したくないなら話さなくても良い。そう言おうと身を乗り出したレインを、しかし悠は制止する。

「良いんです。何時かは……先輩に、聞いて貰いたかったことですから」

生温い風が、レインの頬を撫でた。

何も言わず黙っているレインに対し、悠は、言葉を紡いだ。

悠の実家『有明』は日本有数、『夜雲』『朝露』『霧矢』『真昼』まひるに並ぶ大家である。

その家に産まれた悠は、双子の妹である……はず、だった。未熟児であった兄は他界。産まれたのは、悠だけとなった。

そして、問題が起きた。

母が重い病にかかったのだ。

幸いにも命に別状は無かったものの、女性器を失い、子供を産むのが不可能になった。

家を継ぐはずの男の子が、有明にいらなくなった。

分家から後継者を出すか、という案は大人の下らない事情で却下された。だが、養子を貰うにしても問題が多すぎる。

そこで、悠の父は……悠を、男として育てることにした。

彼女の名は本来もう少し長かったのだが、男らしい名前、ということの一部を除き、『悠』という名を貰った。6歳の時だ。

悠は、初めは嫌がった。

小さな女の子に、そんなことを強要するのは酷の極み。しかし、有明の名を前に逆らえる者などそうはいない。悠も例外ではなかった。

やがて……悠は、男として育てられた。

仕草や口調、加えて武偵としての技術、歩法。

男装を教えた者は、せめてもの配慮として、悠を『中性的な男』として技術を教えた。

そして……悠の苦悩の日々が始まった。

中学時代は東京武偵中学に在籍。

そこでは教師にすら女性であることを隠していた。どこから分家はこの話が洩れ、批判を受けるか分からない、という本家の保身のための処置。

しかし、教務科のバックアップ無しに性別を偽るなど、不可能に等しいことだ。

一度、悠の男装がバレかけたことがあった。

それを父に報告すると……その人は社会的に抹消され、悠は何度も折檻を受けた。

その時は痣も出来て、廊下を歩くとあまりの酷さに顔を背ける者もあつた。

その内……悠は、男装がバレるのを恐れ、学校に行かなくなった。

部屋に閉じ籠り、ただただ、嗚咽を洩らして無く日々。

しかし、そんなストライキが長く続くはずもない。

すぐに引つ張りだされ、再び叱りを受けた。

が……父も、ただバレないよう男装をするのがどれほどの困難かは理解してくれたようだった。

今更東京武偵中学で『転装生』となることは出来ない。

仕方無く、近場の横浜武偵中学に『転装生』として編入した。

その間はずっとバレずに済み、『転装生』制度の利便性を認識した父は、高校でもその制度を利用していくことにした。

そしてより近場の東京武偵高に通うことになった……というのが、彼女が『転装生』となった理由だった。

「……ごめん。思い出さたくないようなこと訊いて」

「大丈夫ですよ」

にこやかに微笑み、月の輝く夜空を仰ぐ悠。

しかし、その目尻は少しだけ光を帯びている気がする。

「……でも」

そんな彼女は、夜空からレインの方に視線を移した。

「少し……辛いです」

悠は、レインに抱き着いた。小さな身体で、レインの背中に手を回す。

彼も、悠を受け入れるように左手を彼女の背に回し、右手で頭を撫でた。

「大丈夫。俺がついてる」

レインが髪を優しく撫でると、悠も気持ち良さそうに目を細める。

「……先輩」

と、レインの腕の中の悠が、上目遣いに彼を見上げた。

普段は男性を装っている彼女のその女性らしい仕草は、レインの頬を紅潮させるに十分な威力を有していた。

「……僕の本当の名前、女の娘である僕の名前は、『悠香』なんです。

……一度でいい。そう、呼んでくれませんか？」

彼女は不安気に頭を垂れる。間髪入れずに、レインは彼女を抱く力を強めた。

「勿論だよ、悠香。」

俺は、お前がそう呼んで欲しいなら……いつでもそう呼ぶから。

いつでも抱き締めてやるから」

レインの言葉に安堵したのか、悠香は彼の手の中で寝てしまった。

彼女が、意識を手放す前。

『ありがとう』　そう、彼女は言っていた、気がした。

ジョン以外が寝静まり、本に目を落としていたシャーロックは、ふと扉の前に人の気配を感じた。

「やあ、お帰り」

シャーロックの言葉の後、ジョンが扉を開く。外には、静かに寝息を立てる悠香を背負った少年、レインが汗を垂らしていた。

「重かったのかい？」

「いえ、全然。ただ、少し急いで帰ってきたもので」

含んだ笑いを意に介さず、レインは淡々と笑みを浮かべたまま返す。

「……失礼、君も大概紳士なのだね」

「光荣です」

一礼しつつ、廊下を曲がった奥の寝室に悠香を寝かせに行く。

その結果を知っていながら、しかしシャーロックは何も言わない。

写真立てやアンティークの乗った机や、肖像画などが置いてある廊下を曲がる。外は先程確認した通り黒に染まっており、ちらほらと街灯の光が見える。

やがて白に金色のノブのついたドアの前に辿り着き、コンコン、と二度扉を叩く。

……しかし、皆寝ているのか返答は帰ってこなかった。

「入るよ……？」

忠告通り中に入ると、意外なことに布団が幾つも敷かれていた。

「失礼、つと……」

ベッドで寝ているのがアリアで、布団で寝ているのが綾瀬、白雪。日本人には布団で寝るといふ習慣がある、という知識故か。ちなみにキンジは別室だ。

ここは年長者に倣い、空いてる布団に悠香を寝かせる。

そしてこっそり部屋を後にしようとした瞬間……足首を、何者かに掴まれた。

……冷や汗が、つう、と米神から垂れる。

「ええと、綾瀬さん？」

「逃がさないわよ、レイン」

そのまま　レインは、綾瀬の布団に引き摺りこまれた。

「うおっ!？」

「うふふ……」

綾瀬は妖しい笑みを見せながら、布団を被せて視界を奪う。

「安心して。別に（ピー）なことをしようって訳じゃないわ」

言いながら……彼女は縄でレインを縛る。

顔が、何かを企んでる気がしてならない。

「ふふふ……ただ一緒に寝てもらっただけよ」

「それが既に問題なんです!」

「どうして? 私たち、男と女じゃない」

「男と女だから問題なんですよ!」

レインの突っ込みを華麗に流し、綾瀬はレインに抱き着いた。

本日二度目の女の娘の感触。やはり慣れるものではなく、心拍が跳ね上がり体温が上昇する。

「あああ、綾瀬」

「しっ……大丈夫、このまま、少しだけ居てくれるだけでいいから」

綾瀬はレインの身体を強く引き寄せる……離れないように。どこにも行かないように。

「……分かったよ、綾瀬」

成る程　レインは理解し、縛られた縄を解き綾瀬の頬を撫でる。

綾瀬も、不安だったのだ。

突然、過去に飛ばされ、見たことの無い景色の中……それは当然の反応であるとレインは考えるが、彼女は年上としての責任感からか、それを良しとは考えなかったようである。

だから不安を押し隠すように、悪戯を名目としてレインを自身の寝床に引き摺り入れたのだ。

「誰にだって、寂しい時、怖い時……不安な時だってある」

「……私は怖がってなんかないもん」

「そういうことにしておいてあげるよ」

何それ、と綾瀬が頬を膨らます。レインはそれに苦笑で返し、窓から見える夜空を見上げた。

過去に来て一日目。

その最後に見た景色は、燦然と輝く月と、その周囲に疎らに光る星々だった。

第161弾 有明の呪縛（後書き）

悠改め悠香

「え？ もう少し女の娘らしく？ そんなこといきなり言われても僕……え、私？ は、はい。」

私、有明 悠香は、これから実家に負けないよう頑張ります！」

第162弾 協力

第162弾 協力

一方、フランス勢の理子たち。

「どうしてこんなことを……」

気を滅入らせているのは、その蒼髪を揺らす静奈だ。

「まあまあ。気にすることないですのだ」

「気にするに決まっています！ だって……」

平賀の慰めを否定し、静奈は溜まっていた鬱憤を晴らすように、叫ぶ。

「これ、犯罪じゃないか！」

現在、フランスの中央付近の都市……『オルレアン』の幾人かいる地主の内一人『トーマス』、その屋敷に侵入していた。

といってもまだ扉を越え、庭に入って植え込みに身を隠している状態だが。

「しっ！ 大声出すなんて怪盗にあるまじき行為だよ、静ちゃん！」

「怪盗じゃないしそれ以前に私は武偵だぞ！ その私の前で堂々と盗みを働くな！」

「だって、私たち怪盗だし」

理子が開き直りとしか思えない反論をしてくる。それで納得する武偵って、何なのだろうか。

「それが俺たちの仕事だ」

しかしまだ静奈の悩みの種は尽きない。理子の言葉に日本語で便乗した彼……アルサーヌ・リュパンを見て、深々と溜め息をつくのだった。

何故リュパンと理子たちが行動を共にしているのか……それは、理子たちが飛ばされた美術館で、彼と戦闘した理子、静奈、平賀だったが、その戦闘音を嗅ぎ付けた警備員に見つかりそうになったリュパンを理子が匿い、事情　タイムスリップの件を話した。そして理子が自分の曾孫だと分かると……リュパンは、理子に協力を仰いだのだ。

曰く、これから侵入する場所は警備が固くて自分一人では崩せそうも無く困っていたとか。

しかし、だからといってホイホイとついていくのは正直どうかと思う。

武偵三倍刑、という言葉をご存知だろうか。

銃刀法を代表とした、様々な法律をある程度自由にして行動出来る武偵は、それ故犯罪を犯した際の刑罰は重くなる。

三倍とは比喻表現であるが、強ち間違いでもない。酷い場合は、もっと重くなる時だってあるが。

しかし、だからといって武偵が犯罪をしない訳でもない。

寧ろ、大抵の武偵は前科がある、と言っても過言ではないだろう。例として挙げるなら、キンジや武藤だ。

キンジの愛銃、三点バースト機構とフルオート機構を取り付けたベレッタM92F、通称ベレッタ・キンジモデルは違法改造された銃である。所持・改造依頼が問題となる。

武藤も自身の自動車やバイクを違法改造しているし、何よりその違法改造を請け負っているのが平賀だった。

金を積みめば違法改造もする。それが、本来はSランクである彼女がAランクに甘んじている所以だった。

話しが逸れたが、結局静奈が何を言いたかったと言えば、流石に窃盗は捕まる、という話だ。

前述した犯罪は比較的軽いもの……加えて言うならば、武偵活動に役立つものである。

故に教務科側、引いては武偵庁までもが黙認しているのが現状。

しかし、窃盗は歴とした犯罪。殺人、傷害などと同じく許容された範囲を大きく越えていた。

「大丈夫大丈夫！ バレなきゃいいんだよー！」

「そういう問題じゃないだろう！」

「まあまあ、落ち着け」

リュパンに宥められ、静奈は仕方無く彼に協力することとなった。

「さて、まずは庭を攻略しなければならぬ」

リュパンは庭を首で指し、静奈たちの確認を促す。

成る程、豪邸だけあり広い庭だ。現在地から屋敷まで100メートルはあるだろうか。

芝が敷き詰められた中に石畳の道が一本うねっており、庭の中心辺りには、今にも吠えだしそうなドーベルマンが、軽く七匹はいるだろう。

「まずはあいつらの無力化だ。静奈、出来るな」

「はあ……分かりました、やりますよ……」

静奈は意識を集中させると、地下に溜まった水を押上げ、一瞬で全ての番犬の口を塞いだ。

「素晴らしい」

「世辞は要りません。さつさと先に進みましょう」

静奈の言葉に全員が首肯し、皆歩き出す。

ちなみに先頭はリュパン、続いて静奈、平賀、最後尾に理子。

だからという訳でもないが、異変に一番初めに気づいたのはリュパンだった。

「石畳の13枚目……あれはトラップだ。気を付ける」

皆は首肯し、石畳を避けて歩く。

屋敷の扉の前に辿り着くと、リュパンはさて、と顎に手を当てる。

「警備が厳しいな……裏口からは無理だ。」

仕方無い、パターンBに切り替える」

「あいあいさー！」

理子は両手で敬礼する。そして彼女とリュパンはワイヤーを伸ばし、

一気に屋根まで上った。

静奈も、平賀を抱えて水を操り彼らに続く。

全員が屋根に上ったことを確認すると、平賀は小型カメラを使用し、誰もいない部屋を探す。

やがて、書斎らしいそこを見つけると理子にサインを送った。

理子は髪を僅かな窓の隙間から差し込み、それらを中で束ね鍵を開ける。

窓をスライドさせ中に侵入。続いて三人も入ってくる。

「よし、丁度倉庫の隣の部屋だ。……廊下に出るのは不味いから、壁をこっそり壊そう」

「中に人がいたらどうするんです？」

「そんな奴は気絶させる」

リュパンの言葉に頷き、静奈は高圧水流で壁を切り取った。

すぐさまリュパン、理子の怪盗コンビが室内に突入し、手刀、足刀で手練れであるはずの警備を次々と昏倒させていく。

「よし、こいつが今回探してたお宝だ」

リュパンが手に取ったのは、一つのイヤリングだった。

透き通るような蒼いそれは逆三角錘しており、先端には紫の宝石がついている。

「それは？」

「時期分かる。取り敢えず、今は脱出を優先」

ジリリリリリリリリリ！

リュパンの言葉を遮るように。

屋敷内に、警報が鳴り響いた。

「何！？」

「どうして！？ 作戦は完璧だったはずなのに！？」

理子の叫びに答えたのは、現状を把握したリュパンだった。

「どうやら……ここからイヤリングが無くなると警報が鳴る仕組み

だつたらしい」

驚愕に目を見張る。

そんな馬鹿なことがあるはずが無い 150年前に、それほどの技術があるはずもない。

「とにかく逃げるのだ!」

平賀の一言で我に返った理子は、窓を蹴飛ばして空へ跳び、ワイヤ―で減速。

芝に転がり、飛び込んでくる警備員に掌底を叩き込む。

「中国の憲法か……」

降りてきたリュパンの称賛を含むその言葉に、理子は照れたように頭を掻いた。

「遊んでいる場合じゃないぞ、理子、リュパン。」

早く脱出しよう」

「そうだな。……まずはお前たちが脱出しろ。」

先導は理子。出来るな」

リュパンは言いながら、辺りを見渡す。

明らかに先刻までと違うその雰囲気。

「先に行け」

リュパンはナイフを両手に広げる。

その背中を一瞥し……理子は、振り返った。

「……死なないで、曾お爺様」

「はっ、私が死んでいたなら理子、お前は産まれていないだろう」
最もな台詞を、吐き捨てるように言い放つ。

その表情は、早く行け、と雄弁に物語っていた。

「分かりました……では、任せます。御武運を」

「頑張るのだ、リュパンさん!」

理子に続いて、二人は駆け出す。

それを見たリュパンは、安心したように目を閉じた。

「さて……一つ訊かせて貰おう。」

お前たちは、何者だ」

明らかに、『トーマス』の護衛とは違う。つまり……

「トーマスを殺したのも、貴様らか」

作戦中、僅かに聞こえた断末魔。あれは確かに、下調べしておいたトーマスの声だった。

「……………」

対し、男たちは答えない。

「成る程、返答は無しか……残念だ。」

俺は礼儀のなっていない人間に、手加減出来る程人間出来てなくなてなリュパンの、理子と同じクリーム色の髪が、メデューサのように蠢く。

「怪盗、アルセーヌ・リュパンだ……存分に暴れさせて貰う」

直後、硬質化したリュパンの髪が、男たちの肩を、腿を、腕を貫いた。

第162弾 協力（後書き）

静奈

「何とか目的のモノは奪えたが……問題発生だ。

あいつらは何者なんだ？

まあ、リュパンさんなら大丈夫だろうが……気になるな」

第163弾 潜入・加勢

第163弾 潜入・加勢

敷地と街道を分ける黒塗りの柵を飛び越えるは、理子と、平賀を抱えた静奈。

そのまま、作戦前に中継地点としていた、フランス中に散らばるリュパンのアジトの一つへ向かう。

裏道を駆けているためか辺りは暗く、大通りの艶やかな光が時々射すのみ。

それが、彼女らの不安を掻き立てる。

「理子、リュパンさんは……」

「大丈夫だよ。だって、私の曾お爺様だもん」

静奈が発そうとした言葉を、皆まで言わせず遮る。

不安をかき消すように。

やがて、彼女らは大通りを中継し、向かいの裏道に入る。そして、アジトである小さな家屋に辿り着いた。

「……貴様ら、人間じゃないな」

固めて刺した髪を戻し、リュパンは問いとも取れる独り言を洩らした。

対し、男たちは答えない。

代わりに 刺された傷が、みるみる内に治って行く。異常な回復速度だ。

やがて、話さない男たちは、リュパンに飛びかかってきた。空中で、腕の一部が猛禽類のように変化する。

「（フリークス、否、人間とは別の生物か）」

フリークスは、人間に獣、またはそれに酷似したモノの力が宿るものだ。

自我が危ぶまれるとはいえ、確実に『人間』である。

しかし目の前の男たちは、明らかに自我を失っている。いや、元々自我というものが存在したかすら分からない。

それでも、彼らは人間の姿をしている。

そう、それはまるで人間が獣の力を扱うのではなく、何か人間の真似事をするような

「ッ、考えている時間は無しか！」

リュパンはナイフをズラリ、と手に持ち、全方位、それも男たち全ての心臓を狙い乱れ撃ちする。

その全てが、正確に、確実に男たちの心臓を貫いた。

にも関わらず。

「何!？」

男たちは失速せず、寧ろ怒りに身を任せるように加速してきた。

リュパンは屈み、地面を足と髪で蹴る。

反作用で宙に舞ったりリュパンは、男たちの遥か上方に跳んでいた。

彼らに、直接の攻撃は無意味。

ならば、とリュパンは曲芸、もしくは手品のように、懐から数えきるのが困難な数のナイフを取り出した。

それを、全て投擲。

互いが互いを弾き、全てのナイフが男たちの両手首、両足首を地面に縫い付けるように突き刺した。

余った幾本かは男の一人に突き刺さった。

「もう一度訊こう。」

お前たちは、何だ？」

男は答えない　いや、違う。答える、という知能が無い、のか。

リュパンが怪訝そうな表情で彼らを見据える中　男の内一人が、力尽きたように目を閉じた。

見ればその男は、余った幾本かのナイフが身体に突き刺さった者だ。

「……成る程。お前たちには弱点のようなモノがある、という訳か」
リュパンは男の身体からナイフを抜き取る。
そして、男たちの全身にナイフを投擲。

しかし、それらは全てけたたましい金属音と共に弾かれた。

「困りますねえ、たかが人間ごときが我々の下僕に手を出しては」
気がつけば、狙った男とリュパンの間に、眼鏡を掛けた細身の男が立っていた。

黒髪を短く切り、燕尾服を着たその男の印象は、言うならばエリート企業家、というところか。

「どうやらお前は言語を理解出来るようだな。

なら、訊こう。貴様は何だ」

「何だ、とはご挨拶ですね。

とはいえ、答えないのも無礼でしょう。

我々は『吸血鬼』オーガ・バンヒエス。

貴方たち人間の上位種ですよ」

「吸血鬼……成る程、ルーマニアのイカレ伯爵の手下共か」

挑発するように、リュパンは言った。

それが目の前の男の神経を、どれほど逆撫でするか知らず。

男の額に、太い血管が浮かんだ。

「イカレ伯爵……？」

ほう、下等種の分際で我等が主を侮辱するとは……身の程を弁えろ、
雑魚があああああ！」

男は本性を表し、両腕を猛禽類のように変化させる。そして、その
変化が足にも現れた、その瞬間。

地を蹴る音が響き、男の腕がリュパンの喉笛に迫る。

「ッ！？」

速すぎる。

リュパンは髪を硬化化させそれを防ぐ。しかし、人間にはまずあり
得ない圧力をもったそれは、容易くリュパンの身体を後方に吹き飛
ばした。

「この程度で……償えるところなよお!!」
叫び、男は再びリュパンに肉薄。

長期戦は拙い、そう直感したリュパンは髪を操り、ナイフを掴む。何十ものナイフを複雑に動かす彼は、滑るように接近してくる男の懐に入り、カウンターを掛けるように男に全てのナイフを突き立てた。

弱点が何処にあるかが、全てのナイフの内どれかはそこを突き刺す。勝利を確信したリュパンの眼前には

先ほどの、男たちが束になってナイフを防いでいた。

「な……!?!」

見れば、手首足首のナイフを無理矢理抜いて来たようだ。

彼らの回復速度なら可能ではあるものの、その激痛は凄まじいはず。そして、ナイフが弱点を穿っていたのか、男たちは倒れた。

「おやおや……何てことをするんです？」

私の可愛い部下たちにナイフを突き立てるとは……これは、肅正が必要ですねえ」

こいつ　　!

確信する。

この男が、彼らに盾になるよう指示したのだ。

「貴様あ!!」

「隙だらけですよ」

男はリュパンの腹に拳を叩き込み、首を掴んだ。

「がはっ!!」

「所詮、人間なんてこんなモノですよ。

脆い脆い……簡単に壊れてしまう」

ゴキ、ゴキッ……と、リュパンの首が耳を塞ぎたくなるような音を立てる。

「終わりです、怪盗さん」

ボキッ……

骨の折れる音が、静寂に支配されていた庭に響いた。

そして、鮮血が吹き出す。骨が肌を貫いたのだろうか。
そして　男が、リュパンを放した。
何故か。

折れたのは、彼の腕の骨だったからだ。

「……何ですか、この銃弾は？」

赤く染まった傷の中に指を突っ込み、自身の骨をへし折り、砕いた
忌々しい銃弾を見遣る。

拳銃の銃弾よりも長いそれは、狙撃銃の銃弾だった。

「その男を返して貰おう……私の友の血縁者でな」

現れたのは、白銀の髪を持ち、サファイアのような瞳を持った美しい少女。

「ふむ……お嬢さん、危ないですよ、このような時間に出歩かれて
は」

「心遣い感謝しよう。」

しかし、どうも今日は寝付けない……少し運動でもしようと思っ
てな。

悪いが、付き合って貰う」

言うが早いか、少女　30代目ジャンヌ・ダルクは、闇夜に光る
聖剣・デュランダルを構えた。

「さあ……始めようか」

ジャンヌは地を蹴り、デュランダルを振りかぶる。

それを跳んで避けると、男は背から翼を生やし羽ばたいた。

「どうやら時間のようですね。貴方のような美しい女性と踊れない
とは、残念極まる」

空を見れば、太陽が上り始めている。朝　吸血鬼は得意でない時
間帯だ。

「逃げるのか」

「聞こえが悪いですね。」

戦略的撤退、というやつです」

こちらに向き直った男は、その紅い目をジャンヌに向けた。

「私の名はメフィスト……ブラッドナイト 鬼士団第4師団長。

次に逢う時は、貴方の血を戴きましよう」

メフィストは翼を一度はためかせると、その場から姿を消した。

「……行っただか」

ジャンヌは気配が消えたのを確認し、臨戦体勢を解いた。

「大丈夫か、初代リュパン」

「ああ……その呼び方、理子たちの仲間か」

「ああ。アジトに案内して貰えないだろうか」

「了承した」

リュパンは二つ返事で頷いた。

レキとミチルを護衛していた二人のジャンヌ 仮の呼称として、

27代目ジャンヌ・ダルクは男をジャン、女をジョーンと呼ぶこと

にする と合流し、リュパンのアジトへ向かった。

第164弾 吸血鬼の集い（前書き）

今気づきましたが、なんと、50万文字突破しました！
イエーイ！

よくここまで書いてたもんや……

目指せ100万文字！！

……あれ、何かやる気が失せてきた……

第164弾 吸血鬼の集い

第164弾 吸血鬼の集い

朝というタイムリミットを迎えたメフィストは姿を消し、現在フランスに滞在している主の下へ戻った。

もう昼だと言うのに、黒で塗り潰したような闇一色の部屋。そんな中でも確かに中心の玉座に座する者……銀髪の長い髪に紅い瞳を持つ、ルーマニアの吸血鬼、『無限罪』ブラド・ツェペシュである。

「……どうした、メフィスト。」

お前ともあるう者が、失敗したというのか」

「申し訳ございません。」

邪魔を受けました」

「……アルセーヌの餓鬼か」

「どうします、お父様？」

ブラドの背中から首に腕を回し、金髪の少女が耳元で囁く。

その鼓動に合わせて、金色のウェーブ掛かったツインテールが揺れる。

「……ヒルダか。」

どうもこうも無い。すぐに始末するぞ。鬼士団十団長を総動員させる」

「では……」

ブラドの言葉に、押し黙っていたメフィストが口を開いた。

「ああ。呼び戻せ……第2師団長『デモン』、そして俺を越える天才……第1師団長『アスラ』をな」

「……かしこまりました」

深々と頭を垂れたメフィストは、ブラドの号令と共に姿を消した。

「アスラが来るの、お父様？ なら、おめかししなきゃ」
「ひ、ヒルダ？ アスラはお前の部下だぞ、服装に気を遣う必要がどこにある？」
「私は下僕は手酷く扱っても部下に辛く当たりはしないわ」
「お父さん認めんからな！ 大体あいつのどこがいいんだ！ 確かに実力はあるが、吸血鬼としての自覚が足りん！」
「えゝ、でもアスラ、カッコいいんだものゝお父様よりも」
「……アスラあああああああああ！ 殺して殺るううううううー！」

「……何だか寒気が」
「激しく同意だ。何か、見てはならないものを見てしまったような……否、気のせいだろう」
背中に激しく冷たいものを感じた理子とジャンヌが、気を取り直して目の前のイヤリングを見詰めた。
妖しく輝く蒼のイヤリングは、見る者を蠱惑するような何かを秘めているようだった。

「ふむ……」
「これが？」
双子、ジャンとジョーンは息を合わせてリュパンに質問する。対し、リュパンも首肯した。

「ああ。こいつがフランスの秘宝『コキユートス』だ」
「これは何ですか？」
平賀の興味津々、といった質問にはジャンとジョーンが答える。

「これは、鍵だ」
「冥府の扉を開く、な」
「どういうことですか」

意外にも口を挟んできたのは、先のメフィストに撃ち込まれた銃弾

を発射した銃、ドラグノフを整備するレキだ。

しかし、リュパンと双子のジャンヌ・ダルクは元々のレキを知らなかったため、あまり驚きは無い。何でもないことなので、淡々と答える。「そのままの意味だな。」

こいつは殺戮兵器と成りうるヤバい物だ。

俺はこいつを封印するために持ち出した訳だが……問題は封印だ」リュパンは溜め息をつき、机の上に転がる、殺戮兵器足るコキユートスを指先で弄る。

そんな荒い扱いで大丈夫なのだろうか、と心配そうに見ていた理子たちに、リュパンは何か気づいたように乾いた笑みを向けてきた。

「悪い悪い。教えて無かったか……言ったら、こいつは鍵だ。鍵は扉が無くちゃ意味が無い。それはこいつも同じ」

「つまり、他の何かと一対になってて、それが揃わなければ殺戮兵器にはならないってことですか？」

「御名答だ」

ミチルの推論は的を得ていた。それなら、二つが交わらないよう埋めるなり海に捨てるなりすればいいと思うが。

それを静奈が口にする、ジャンは無理だ、と呟くように言った。

「二つは常に共鳴している。私たちのように」

「一つを持てばもう一つの場所も割れる」

「え、それってすっごく不味いんじゃない？」

ミチルが焦りのあまり声を裏返す。しかし、リュパンたちの表情は対照的に酷く冷静だった。

「問題無い。ジョーンが言ったのは持ち主がいらない場合だ。持ち主がいる時は、恐らく半径500メートルくらい近づかないと分からない」

……と、ごほん、とジャンが一つ咳払いした。

話が逸れているから、早く戻せということだろう。

どこまで話したか、とリュパンは思案する。そういえば、封印の件で止まっていた。

「そうそう、封印だが……この呪術は相当強力だな。限られた者しか封印出来ない」

その『限られた者』がどのような者が当てはまるのか。もしかして自分たちにも出来るのかと皆はリュパンに詰め寄った。

それを宥め、問いに答えるはジャン、ジョーン。

「落ち着けお前たち。成れるのはシスターか」

「日本の巫女だけだ」

「「「あ」」」

三人　理子、ジャンヌ、ミチルの声が同調する。

そういえば、一人タイムスリップに巻き込まれていたのを思い浮かべる。

星伽　白雪。

生徒会長で、園芸部長で、手芸部長で、女子バレー部長で偏差値75で、超人的しつかり者で　日本の大家、星伽の（武装）巫女。リュパンたちと理子たちの利害が、本当に一致した。

「くしゅん！」

「大丈夫か、白雪」

「う、うん。風邪ではないよ。誰か噂してるのかなあ」

「そんな馬鹿な……」

実は事実である白雪の冗談を流し、キンジは再び前を向き直す。

前には悠香と綾瀬に挟まれるレインと、それを微笑ましそうに見ているジョーン。

そして自分の左隣が白雪で、右隣がアリアだった。後ろではシャーロックが何やら笑みを溢しているようだが、見ないようにしていたふと、今日は晴れている空を見上げた。雲は疎らに点在し、青いキヤンパスを白で彩っている。

何故自分たちがこのベイカーストリートを闊歩しているのかと言えば、先日の飲み食いで食材を全て使いきってしまった、というシャ

ーロックの悪びれもしない言葉故だった。

まあ、ジョンが張り倒していたのでキンジ的には不満は無いが、何も全員で行く必要は無かったのでは無いだろうか。

そんな疑念を抱くキンジをよそに、レインは清掃活動に精を出す敵っにお兄さんに挨拶していた。否、様子からしてあちらから挨拶してきたのだろうか。

最近の……ではなく、昔のボランティア団体は礼儀まで完備しているようだ。

キンジがそんなどうでも良いことを考えている中……少し前方を歩く銀髪の少年、レインは今晚の献立を考えていた。

タダで下宿させて貰う以上、家事くらいはこなそう。それが、レインが皆に伝えたことだ。

料理が出来るのはレイン、白雪、綾瀬、悠香。しかし白雪は少々私事を入れてキンジへの分量を多くしてまうため除外、三人でローテーションにすることに。

掃除はキンジとレイン、悠香、ここで白雪が。

洗濯にも白雪、綾瀬。

キンジとレインは男性故、女性の下着を見ないようという配慮だ。

ちなみに悠香は転学生なので男子と認識されている。

……ちなみに名前が出されていないアリアは、家事をしたら大変なことになるから当番から外されていた。家事スキルが0を通り越して・にまで到達していた。

閑話休題。

今日の調理当番は、言い出しっぺということでレインがやることに。前日に食材を使いきってることもあって、今日は自由に料理が選べそうだ。

取り敢えずは主菜を決めようと思い、ふと頭を回らせる。

何もイギリス料理に拘る必要は無い。

何なら、日本料理を食わせた方があの英国紳士は喜ぶのではないだろうか。流石に箸くらいは使えるだろう。

レインは取り敢えず魚だ、と辺りを見渡す。

が、この時代にスーパーなどあるはずも無く、どこで何を買えるのか分からない。

「（困ったな……）」

レインは頭を掻き、軽く首を振った。

冷静に考えれば、食料品の売っているところなんて見つかるだろう。

武偵憲章7条、悲観論で備え、楽観論で行動せよ。

なんて考えながら、陽射しの眩しい 向こうでは秋だったが、こちらは夏なのだろうか　　ベーカーストリートを歩いた。

第164弾 吸血鬼の集い（後書き）

補足。

過去ではまだ小夜鳴人格は存在していないものとしています。

容姿は彼のそれですが、吸血鬼は人間に擬態するものもいるそうで人間としての性格が確立していない状態です。

オリジナル設定『鬼士団』のメンバーもそうなります。ちなみに階級としては、

ブラド、ヒルダ

鬼士団師団長10名

その他吸血鬼たち

くらいに考えてます。

第165弾 鬼師団長

第165弾 鬼士団長

「ふう……思ったよりたくさんあったね」
買い物袋を下ろして言うレインに、皆賛同する。

全員が紙袋を一つは持つこととなった今回は、食材の買いだめをしているのだ。今や大所帯なためされに比例して食材の量も増えていた。

まあ、シャーロックが装飾品やら何やらを買い込んでいたこともあるが。

「……おや、レイン君。問題発生だ」

さらっとそう告げるシャーロックに、レインは顔を覗かせた。

「材料を一つ買い忘れてるよ。伊勢海老だ」

「……そんな高級食材をメニューに入れた覚えはありませんがね」
茶碗蒸し用に小型の海老なら買ったが、そんな日本料理店を出てきそうな食材は買っていない。というか市場には売っていなかった。

「僕はイギリス王妃から『死ぬまでに一度は伊勢海老を食べておきなさい』と言われていてね」

「シャーロック、分かりやすい嘘はやめたらどうだい」

ジョンに突っ込まれて、やれやれというように彼は両手をあげた。

いや、こっちの台詞だからと言いたくなるが、曲がりなりにも下宿先の主だ。

仕方無く、あるか分からない伊勢海老を探しに行くレインであった。

昔、レインはイギリスにカナと共に来たことがあったが、やはりと
いうか風景が全然違う。

元の時代は近代的で、趣のある感じ、というイメージとはかけ離れていたが、この時代のロンドンには寧ろイメージ通りだった。

「さて、伊勢海老か……市場くらいにしか売ってるところが無さそうだけど、行ってみよう」

確か、先の買い物でシャーロックとジョンに説明を受けた際、魚市場のようなものは通りの端の広場、そこを曲がってしばらく歩いた先のはずだ。

全て英語である喧騒を聞きながら、レインはその足を僅かに速める。手入れの施された木々が左右に立つ広場の入り口を抜け、噴水の有る円形の広場に出た。

そこには、興味深い者がいた。露商店のように机に布を引き、上に並べるは怪しげで古めかしい品の数々。

その前に座る男は非常に整った顔立ちをしているようだが、シルクハットを目深に被っているため目元が見えない。

燕尾服を身に纏った男は、茶髪を膝まで伸ばしていた。

しかし、暇そうな彼の様子から察するにあまり売れ行きは芳しくないのだろう。

面白そうだったが、今一番優先すべきは伊勢海老だったため、無視してその場を去ろうとする。しかし。

「あ、その銀髪のお兄さん！ ちょっと寄ってかないかな？」

……何だか、凄く軽いノリで引き留められた。

レインは金が掛かるなら行きます、と言うと、男は話し相手になっ
てくれれば良いから、ということを押しきってきた。

渋々向かいの椅子に座らされる。

「……さて、何をしよう」

「決めてないんですか!？」

「いや、あまりに暇だったから、つい連れてきただけ 　　って何で席を立つんだい!？」

「失礼します」

「失礼しちゃダメだよ!？」

コホン、と軽く咳払いし、男はトランクを開けると机の上のガラクタを全てその中にぶちこんだ。商品とは思えない手荒な扱いだ。と、そんなレインの視線に気づいたのか、男は軽くガラクタ入りトランクを持ち上げた。

「ああ、これ？」

大丈夫大丈夫、品物じゃないから」

……訂正、本当に品物では無かったらしい。曰く、暇潰しグッズだとか。ルービツクキューブ、知恵の輪のような類いのものか。

「つとお、そんなことはどうでも良いよね。」

僕の名はアスラ。

しがない旅の占い師さ」

言いながら、アスラはテンプレートにも机の上にクッションが敷いてある水晶球を置いた。

「それで未来が見えるの？」

からかうようにレインが言うと、アスラは大真面目に頷いた。

「その通り。この水晶はちょっとばかり上司から拝借したものでね。これを使えば、僕には未来が見えるのさ」

彼自身の能力ではない、ということか。

男は両手を水晶の脇に添えると、真剣な眼差しで水晶に映る未来を見通していた。

と言ってもレインには見えないので、座ったことで見えるようになった彼の眼を見詰める。

紅い、血のような色の瞳だ。

男の瞳は水晶を反射し、淡く輝いていた。

そして、その端正な顔が一瞬歪む。

「…………ごめんね。」

突然で残念だけど

君には死んで貰わなくてはならなくなつたよ」

刹那。

レインが先刻までいた位置に、漆黒の剣が降り下ろされた。金属製の椅子をいとも簡単に両断したそれは、切れ味を留めることも知らず、地面の石に突き刺さっていた。

「……………どういつつもり？」

「どうもこうも無いさ。ただ、君を殺さなくちゃならない理由が来た」

そんなことを言う彼だが、その表情は優れない。

まるで、殺したくないのに殺さなければならぬ、という葛藤の最中のような。

しかし、迷っている暇などない。レインは白銀の髪を揺らしてダガーを二本構え、雷刃を掛けた。

アスラの降り下ろした刃を、×字にダガーを交錯し受け止める。

彼に蹴りを加え、『影』の『加速』で更に衝撃を加える。その衝撃を利用し、レインはアスラから距離を取った。

「……………成る程、強いね」

当然だ。

彼が自身に課した目標は、雷神化と水月無しでもSランク以上の戦いが出来る、というのが当初の目的だったが、日々の鍛練と数々の試練が、彼を更なる高みへ押し上げた。

雷神化は元の戦力が高ければ高いほど、成った時の戦力が増す。

今現在、レインは世界最強とまでいわれた1年の時より、遙か高みにいた。

しかし、あくまで今はアスラを宥めるのが優先。故に全力を出す必要は無い。

「落ち着いてくれ！」

理由は何なの！？」

「話せない！」

アスラは漆黒の剣でレインの胸に打突する。

それをダガーで逸らし、レインはアスラの懐に入り込み、ダガーを刺した。

「すみません！」

アスラが苦悶の表情を浮かべる暇も無く、彼はダガーから雷を流し込んだ。

アスラの身体が痙攣し、その場に倒れ伏す。

「ふう……大丈夫、気絶する程度に抑えた」

レインは急いでその場を後にしようとする……しかし。

「僕はこの程度で気絶すると思われてるのか……悲しいな」

「……！」

馬鹿な。

ヘビー級のプロボクサー並みのガタイの男でも、一撃で気を失うはずの威力。

実力は「耐久力ではない。

そんな攻撃を受けて、この細身の男が耐えたというのか。

「全力で来なよ。でないと、一瞬で死ぬよ」

「……分かったよ。

見せてやるさ、雷神化……！」

レインは、自身の雷で細胞を活性、雷神化しようとする。

「はい、そこまで」

が。

突如現れた男の声に、レインは雷神化を中止した。

アスラと同じ燕尾服に身を包んだ、黒髪の男だ。

「やれやれ、アスラ。

君はこんな派手に暴れる者じゃないと思ったんですがねえ」

「どいてくれないか、メフィスト。

僕は、彼を殺さなくちゃならない」

「はあ……例の予言ですか？ 今の最優先事項は主人の下に戻ることでです」

「……分かったよ、メフィスト。済まないね、迷惑かけて」

「いつものことですよ」

メフィストと呼ばれた男に宥められ、アスラは戦闘を中止。レインの方へ向き直った。

「じゃあ、任務が出来たから失礼するよ。」

また日を改めよう」

「待て！ お前は一体」

レインの言葉を遮るように、アスラの背からコウモリのような翼が生えた。

「僕の名はアスラ。」

鬼士団第1師団長にして、我が主、ブラド伯爵の懐刀だ。以後お見知りおきを」

レインに驚く暇も無く 風が舞い起こり、二人の姿は消えた。

「ブラド あゝの吸血鬼か」

かつて立ちはだかった敵の名を呟く。

成る程 アスラが自身を敵視したのは、これから未来に起こる、ブラドを倒すという出来事を予知したからだだったのだ。

「だとすれば……」

心配なのは、理子、ジャンヌだ。

レインは急いでシャーロック宅に駆けた。

第165弾 鬼師団長（後書き）

プーモ

「最近、後書きに書くことが思い浮かばない……」

綾瀬

「頑張りなさい、プーモ！」

静奈

「努力は実を結ぶぞ！」

プーモ

「は、はあ」

二人

「「返事が小さい!!」「」

プーモ

「はいいい!!」

第166弾 十師団長

第166弾 十師団長

「……成る程、それで伊勢海老を買い忘れたと」

「申し訳ありませんでした」

平謝りとはこういうものだろう。完全に失念していたレインには、シャーロックの笑顔が痛い。

「まあ、伊勢海老が売ってるかも分からないし良しとしよう」

おい、と突っ込みたくなるが、そんな場合で無いことは分かる。

「今はその吸血鬼とやらをどうにかしよう。」

レインの命を狙ってるというなら、黙っちゃいらねえからな」というのはキンジの言。

それに同意するように皆頷く。

「いや、キンジとアリアは狙われる可能性だってあるんだよ？ それに、理子」

言いかけて。気づいた。

理子。理子は、無事なのだろうか。

「まずい……理子が！」

「レイン、一旦落ち着きなさい。彼女の逃げ足は既知の通りでしょう？」

焦りを見せたレインを、綾瀬が落ち着ける。

そして、タイミングを見計らったように思考の海に身を投じていたシャーロックが口を開いた。

「ふむ。僕の子孫の仲間の危機とあらば、協力せざるを得ない。微々たるものだが、僕の推理を軽くお見せしよう」

条理予知 元の時代のシャーロックが使用し、キンジたちを苦しめた一種の未来予知だ。

「確か、吸血鬼とはルーマニアの伯爵、ブラド・ツェペシユの一団だったね。」

確か、最近フランスに密入国してきたルーマニア船があったらしい。恐らく、彼らはフランスにいるのだろう。」

彼は入り雑じった情報を頭から引っ張りだし整理、レインたちに伝える。

これが『探偵』か、と関心するレインをよそに、悠香がシャーロックに疑問の言葉を投げた。

「しかし、フランスというだけでは範囲が広すぎるのでは？」

もつともな意見だ。

フランスの端から端まで何キロあるか、分かったものではない。

「それについては心配要らないよ。」

曰く、その密入国した者たちは、フランスのパリにいるそうだ。」

……何故そんなことを知っているのか、疑問に思うのも野暮なことだろう。

理由を敢えて説明するなら、たったの一文で片がつく。

彼が、シャーロック・ホームズだから。

改めて彼の規格外さを見せつけられたレインたちは、ただ感嘆の溜め息をつくことしか出来なかった。

「では、行こうか」

「……へ？」

皆が啞然、という表情をすれば、彼も啞然、という表情をとる。

「ジョンを含めた一同が『何処に?』という意味で、シャーロックは『決まっているだろう?』という意味合いで。」

やがて、シャーロックは肩を竦めて首を振った。

「分からないかい？」

「パリにだよ」

一方、そのパリでは。

「……ほう、師団長が勢揃いとは、珍しい」

厳格そうな白髪の老人が、その荘厳な髭を撫でる。

見渡すように、円卓に並べられた11の椅子に座る面子へ目を向けた。

彼の台詞に賛同するように、犬歯を剥き出しにした、若干身長の低い少年がケタケタと笑い声を上げる。

「ははっ！ まさかアスラとジジイまで来るなんて、こりゃ傑作だよ！

メフィストも手こずる相手、つかか！」

「黙れジーク。娘と朝が来なければ奴を殺せていた」

メフィストが少年……ジークに反論するが、彼はニヤニヤとした笑みを返すだけで答えない。

「それは、結局殺せてなかったってことなんじゃ……？」

オドオドした態度ながら、紫の髪的眼鏡を掛けた少女が痛いところをつく。

メフィストが鋭い視線で睨み付けると、彼女は肩まで伸ばした髪を揺らして視線を逸らした。

「こら、メフィスト。」

ウチのルシアを苛めるな。殺すぞ」

今度は、三編みを二つ結わいた黒髪の少女が足を円卓に乗せ、メフィストを睨む。

「よしなさいよ二人共お！ それに、あまりメフィストを責めちゃだめよ、メビウス？」

「うっせー、オカマ」

「オカマじゃないわ！ 私はホモなのよ！ それに私にはオカマじゃなくてカイゼルって名前があるの！」

もう！ とドスの効いた声で、カイゼルと名乗る男ホモは両手を組んで座り直した。ちなみに、両手の小指は立っている。

「まーまーまーまー。皆落ち着きい。」

喧嘩しないで、仲良くしてえなあ。なあ、イーズ？」

「……………同意」

イーズ、と呼ばれた無表情な男は、ほとんど口を動かさず二字熟語で返答した。

話かけた緑髪で関西弁の少女は、あちゃーと頬を掻いていた。

「そんな無表情に話し掛けてもどーせ素っ気ない返事しか返ってこねえよ、マール。」

それよりこの第7師団長、テンマ様と

「はいはいそこまで。席に戻ろうね、テンマ」

マールという少女に話し掛けた軟派な金髪男は、今まで笑って様子を見ていただけのアスラに制止を受けた。

渋々席に戻ると、唐突に彼から見て右の扉が開かれた。

「全員、揃っているな」

銀の長髪を靡かせる、彼らの主　ブラド・ツエペシュ。

彼の登場に、皆居住まいを正した。

空いていた一席に、ブラドが座る。

重々しい雰囲気の中、彼の声が急激に下がり、広い空間に良く響いた。

「時は来た。」

遂に地獄の門を開く時が来たのだ。

第1師団長アスラ。

第2師団長デモン。

第3師団長メビウス。

第4師団長メフィスト。

第5師団長イーズ。

第6師団長マーラ。

第7師団長テンマ。

第8師団長ジーク。

第9師団長ルシア。

第10師団長カイゼル。

……何としても、コキュートスを奪う。

決戦は後日だ。

必ず来るよう用意をしておけ……そうだな、イーズが適任か」

「……………御意」

ブラドの言葉に是の意を示したイーズは、初めからいなかったようにその場から姿を消した。

「おーおー嫌だねえ。」

これだかあの無表情は苦手なんだよ、俺」

「そうかなあ……………」

「絶対そうだって、ルシアちゃん！」

「ルシアに手を出したら殺すわよ！」

「へいへい」

何気無い会話をする彼らに、メフィストが強い視線を送る。

おー怖い怖い、とばやきながらテンマが自席に戻る。

まあ、メフィストの視線だけでなくブラドの前だから、という側面もあつたのだろう。

「私ならいつでも相手になつてあげるわよ、テンマ？」

「え、えーと…………遠慮、させて、戴きます…………カイゼルさん」

顔を引き吊らせながら丁寧に要らぬ提案をお断りする。

彼は軟派だと前述したが、案外紳士であるようだ。

「アスラク！」

「やあ、ヒルダ様。

「元氣だったかい？」

「もお、イギリスだっけ？ 随分離れてたから寂しかったわよ」

「それはそれは。申し訳ございません」

「仕方無いわね、許してあげるわ」

「嬉しいよ、ヒルダ」

「ふふ、早く任務が終わるといいわね」

「そうしたいのは山々なんだけど……」

「私も手伝わわ」

「それには及ばないよ。すぐに仕事くらい終わらせるぞ」

「そう？ の割に私は随分待っているんだけど？」

「あははは……」

「誤魔化しても無駄よ？」

「だよ……」

「……………お前から」

「？ どうなさったんですか、ブラド伯爵？」

「お父様、何かご用ですか？ 顔色が優れないようですが」

「いいかげんにしろよお前から！！」

「きゃあー、お父様が変身したあー！！」

「ブラド伯爵、落ちて着いて下さい！ どうしたんですか！」

「お前なんぞに……、は」

「へ？」

「お前なんぞに……娘は、娘はやらんぞおおおおおおおおお

「！」

「何の話いいいいいい！？」

吸血鬼の夜は更けていく。

第167弾 鬼士の襲来

第167弾 鬼士の来襲

「……地獄の門、ねえ」

理子は半信半疑、といった表情にジャンヌが苦笑する。

「まあ、初代が言うのなら本当なのだろう？」

「それはそうだけど……」

地獄の門。

リュパン曰く、コキユートスで『扉』を開けばそれが開かれ、地獄の殺戮兵器を召喚出来るらしい。

加えて最悪なのが、地獄の門が殺戮兵器が出ていく隙間から、僅かだが地獄の住人……魔物が出てくる、という話だ。

フリークスや超能力者はあっても、そのような化物が存在するのかそれは誰しもが疑問に思うことだろう。

まあ、リュパンの話によればそんな小さな隙間から出てこれるのは地獄でも雑兵とされる者たちばかりらしい。

とは言え、引つ張り出される兵器は別物だ。

本来、上級の魔物が数匹通れる程の規模の地獄の門を開く。

つまり、その門の規模は兵器の凶悪性と同意義である、と言えるだろう。

この際、魔物だか何だかの信憑性は置いておく。

問題なのは『地獄の門』により召喚される兵器だ。

恐らく、それは呪具を用いた大規模な超能力の術式と酷似しているのだろう。

ならば、阻止せざるを得ない。

人間ですら、呪具を用いた大規模術式で得られる力は莫大だ。例を挙げるとしたら、パトラがそれにあたる。

ピラミッド 四角錐状の建造物付近では、それから魔力が無限に生成されるのだ。

その術式で殺戮兵器を召喚するとなれば、その被害は計り知れない。阻止しない訳にはいかないだろう。

「何だか大変そうだよねえ……こんな時、レインがいればなあ」

「ミチルちゃん、それは言いつこ無しですよ」

ぼやくようなミチルの台詞に、平賀が慌てて静止を掛ける。しかし、理子とジャンヌとて同感だった。

もしレインがいたなら、いとも簡単に『コキユートス』覚醒の阻止をしてくれるだろう、と。

まあ、封印は白雪の役目だが。

「でも、レインに頼ってばかりもいられないよね。これくらい、私たちで何とかしてみよ？」

「それはそうだ。曾祖父母殿や初代リユパンもいることだしな」
理子の言葉に、ジャンヌも同意する。

正味な話、近頃レインを頼り、彼に負担を掛けてきたように思える。自分たちに出来ることはして、彼の負担を軽減してやるべきではないか。そう考えての言葉。

しかし、彼女らは自身の考えの甘さを思い知ることとなる。

「……………油断大敵」

「……!?」

突如、四人の歩く中心に、白い短髪の少年が現れた。

こいつは敵だ、と即座に判断したジャンヌはデュランダルを振りかぶるが、彼の手はミチルを掴んで、盾にするようにジャンヌに向けた。

「くっ！」

「ミチルを放せ！」

理子は、髪を操り、ミチルを避けた多角的な攻撃を繰り返した。し

かし、理子の攻撃は、空を裂いた。

少年の姿が、消えていた。

「……………背後」

「ッ！」

二字熟語で告げられる敵の位置情報に、反射も混じった攻撃を加える。

しかし、理子とジャンヌの攻撃はまたも空を切った。

「……………招待」

少年はジャンヌに、手紙らしきものを投げ渡す。その封筒は黒く、邪悪な印象を受ける。

「……………撤退」

彼の台詞と同時、彼の気配がいつの間にか消えていた。

「くそ、ミチル！ ミチル……………！」

「落ち着け理子！ 奴を追うのは危険だ！」

「ミチルを見捨てるって言うのか、ジャンヌ！」

早口でまくし立て、理子は憤怒の表情を見せる。

「はあ……………これを見る」

ジャンヌがペラ、と理子の眼前に晒したのは、黒い封筒の中身……………赤い、果たし状だった。

「『娘が惜しければ、『コキュートス』を持ってパリ、建設中のエツフェル塔に来られたし』……………だと？」

くそ、くそ……………ッ！

あの野郎、嘗めやがって……………！」

未だ裏理子の口調で話す彼女を宥めながら、一同は取り敢えずアジトに戻ることにした。

アジトに戻ると、ジャンヌはリュパン、ジャン、ジヨン、静奈とレキにミチルが誘拐された旨を伝える。

皆が皆、吸血鬼の卑劣な手段に怒りを覚える。

リュパンも、例に漏れず拳を握る。

「ふむ……あの吸血鬼め、『コキュートス』を何に使うつもりかは知らんが、いたいけな少女を人質に取るとは……許せん」

リュパンは一つ頷き、理子に手を差し出した。

「勿論、手を貸そう。」

借りだ、などとは思わぬよ、理子。親が子を助けるのは当然の事……

……それと同じだ」

リュパンの言葉に、少し目を赤くしながら理子は握手に応じる。

「では、どう切り込みますか。敵の待ち伏せは必然と考えるのが妥当でしょう」

レキの言葉に、皆賛同する。

わざわざ場所を指定してくるのだ、それは間違い無い。

「レキ、君のは確か狙撃の達人だったな。ならば、待機して突入する者を支援してくれ。」

エッフェル塔に入るのは、三方に分けよう。

静奈、私が北、理子、ジャンヌで南、そしてジャン、ジョーンが東だ。平賀は、レキの観測手を頼む。出来るな？」

「はいですのだ！」

元気の良い返事をする平賀に、リュパンは満足気に頷いた。

簡易なブリーフィングを済ませ、各々装備を整える。

「吸血鬼は頭を撃ち抜いただけでは死なない。」

魔臓とやら4つを全て同時に破壊しなければならぬのか……面倒だな」

リュパンは髪を四分割し、それぞれにナイフを持たせる。

「レキ。銃弾の補充は出来そうに無いが、大丈夫か？」

「問題ありません。静奈さんも、スタミナには気を付けて下さい」

「了解だ。何かあれば、サポート頼むぞ」

「はい」

レキは銃剣を磨き、静奈は超能力使用のためにミネラルウォーターで喉を潤す。

超能力者が精神力の回復のために接種するのは、水のようにだ。

「心配しなくても、あややは材料さえあれば銃弾くらい作れるのだ！ というか、レキさんにはコツを教えたことあったはずなのだ」

平賀が口にした然り気無い台詞に、静奈は目を閉じ、核心を突く。

「まあ、その材料が見当たらないんだがな」

「あう……それ言っちゃ駄目ですのさー」

小さな笑いの波が起き、周りにいたリユパンやジョーンも微笑んだ。

「……理子、大丈夫か」

そんな中、真剣な面持ちで理子に問うはジャンヌ。

彼女の顔を見上げ、理子はしかめていた顔を笑顔に戻す。

「どうしたのさー、ジャンヌ？ 理子りんの心配してくれてる？

あはは、大丈夫だよ！ 楽勝楽勝！」

口調こそ軽いが、ジャンヌは彼女が僅かに震えていることに気がついていてた。

吸血鬼、ブラド。

彼がかつて理子を監禁し、どれだけ非道な目に合わせたか……イ・ウーの中でも、取り分け理子と仲の良かったジャンヌは、彼女に聞いていた。

彼女のトラウマとも言える相手、その種族と相對するのだ。不安がるな、というのが無理な話なのだろう。

彼女の震えを、ジャンヌは確かに察していた。隠そうとしても隠しきれない、純粹な恐怖。

だが ジャンヌは。

「そうか。なら、いい」

それを、指摘しなかった。

彼女は、恐怖に抗い、自らを奮い立たせて戦場に赴こうとする戦士だ。

それを、恐怖を理由に誰が止められよう。

膝が震えているなど、誰が茶化すことが出来よう。

彼女は恐れている。しかし、それ即ち弱者、というのは間違いだ。

彼女は恐れを振り払い、戦場に立とうとしている。人は、抗えぬ恐怖に、それでも抗い、そして勝利した者をこう呼ぶ。勇ましい者 即ち、勇者と。

彼女は、自らを縛る恐怖という鎖を、今砕こうとしていた。それを邪魔することなど、親友である彼女に、否、親友だからこそ、出来るはずが無かった。

第168弾 戦闘開始

第168弾 戦闘開始

次の日、馬車などを乗り継いだ未指定された時間……夜には、パリのエッフェル塔に到着した。

理子たちは今、無線で連絡を取っている。ちなみにこの無線はガラクタから平賀が作ったもの。

そんなこと出来るのかも思ったが、現代では玩具で無線があるくらいだ。彼女からしてみれば馬鹿にするな、くらいのことなのだろう。

と、リュパンサイドから理子に連絡が入る。

幾ら平賀さんの技術でも、遠距離から狙撃するレキたちの居場所まで届く無線は出来なかったそうだ。

『こちら北側。準備万端だ。そちらは？』

『東も、警護は何人かいるが気づかれることは無さそうだ』

『南は……強そうなのが一人いる。二人で突破は難しい』

理子たち南の報告に、リュパンは僅かに眉を寄せる。

しかし、迷っている暇などない。

『では、南は理子が足止めをかける。ジャンヌは侵入し、迅速に東と合流しろ。いいな』

『了解』

『では……ミッションスタート任務開始だ』

リュパンの言葉と同時に、全員が地を蹴った。

「……………」

廊下を徘徊するは、言葉を発することも無い人の皮を被った吸血鬼。

彼らに気づかれることなく、ジャンとジョーンは移動していた。

彼らの真上を。

天井の表面と指を氷で接着しては、離す。

それを延々と、地道に、しかし大胆に繰り返す。

そうして吸血鬼たちの警戒を潜り抜け、内部への潜入に成功した。

「……部屋を調べてみるか」

ジョーンは指先を鍵穴に宛てる。すると、指先からの氷が、鍵穴の型を取った。

極力音を立てないようにするにはするが、鍵穴を開ける音を聞き逃すような馬鹿は流石にいない。二人の行動は迅速だった。

ジョーンが鍵を開けると同時、ジャンは銀刀二本を構えて中に飛び込む。

「……ハズレか」

しかし中には誰もおらず、安堵した彼の吐息が静寂の空室に響いた。

「……静奈、準備は良いな」

「無論です。何時でも」

「よし……行くぞ！」

静奈は頷き、駆け出したリュパンに続く。

壁を背に当てながら敵の気配を窺い、少しずつ先へと進んで行く。

建設中のエッフェル塔は現代と比べ真新しく、それほど汚れたところは見当たらない。

と 不意に、静奈は足を止めた。

ごく僅かだが、この感覚は……超能力者の気配

！

思考を反射が凌駕し、リュパンを突き飛ばす。

彼が狼狽の声を挙げるより早く、静奈の『天衣無縫』と敵の攻撃がぶつかり、激しい音を響かせた。

「や、やっぱりリーズさん程上手くはいきませんね……ってすみません、私調子に乗っちゃって」

「……お前、超能力者か」

何やら独り言をしていた少女　恐らくは、吸血鬼　に、静奈は戦扇『蓮華』を構えながら問う。

「は、はい。鬼士団第9師団長に任命されています、ルシアです。どうぞよろしくお願いします」

ぺこり、と腰を折るルシアを前に、蓮華を構えながらも内心規制を削がれる思いだった。

目配せしてリュパンに先へと進むよう促す。

彼も首肯し、彼女が制止を駆けるより早く駆け出した。

リュパンを逃がしたのは、二人の見たルシアの拳動故。彼女は、冷徹な吸血鬼にあるまじき情緒を持っていた。

もしかしたら、戦わずに済むのでは無いだろうか、そんな甘い考えを持ってしまう程に。

しかし、彼女の予想　或いは願望か　は、その悉くを微塵に消し飛ばされることとなる。

静奈の眼前に　突如として、槍の切っ先が現れた。

「!?!」

咄嗟に横に跳んだ静奈は、恐らく今の攻撃の主であろう目の前のルシアに、視線を送る。静奈の頬からは、一筋の赤い血がこぼれていた。

「す、すみません……私が見つつけちゃって……」

「……どういう意味だ」

静奈の怒気を孕んだ眼光に、ルシアは気まずそうに視線を逸らした。

「その……敵を見つけ次第殺せ、との命令ですので……貴女を、殺します」

「そうか……なら、一応名乗っておくか。

『深海の水神』朝露　静奈だ。

嫌々殺せる相手か否か　試して見る」

「では、理子……頼むぞ」

「了解了解。始めよう、ジャンヌ」

二人の飛び出した先には、三つ編みを束ねた少女がいた。

彼女の瞳は、暗く、黒い闇色をしていた。

「おう？　可愛いなあ姉ちゃんたち！

どうだ？　ウチとちょーっと遊んでいかねえか？」

背筋が凍るような眼とは裏腹に、彼女の表情、言葉は明るい。まあ、若干不良チックではあるが。

彼女の性格は表面上のもの、という訳でも無さそう。何と云えば良いか、一眼とそれ以外が全部別物のよう。

「……いいけど、それは私だけだよ。この娘は先に行かせる」

そんな感覚を振り払うように、理子はジャンヌを先に進ませようとする。断られようが、無理矢理。

しかし、返答は予想と正反対のものだった。

「構わねえよ。」

奥にはウチの知り合いがわんさか居るし、ここ居た方が安全だと思っけどな？」

彼女が襲ってくる様子も無さそうである。ジャンヌが彼女の横を、警戒しつつも通り過ぎた。

「じゃ、行くぜ。ウチは鬼士団第3師団長メビウス……名乗りな」

「『妖艶の鬼神』峰　理子。よろしく、ねっ！」

理子は名乗り終えるや否や、ナイフを両手に構えながら地を蹴る。銃はギリギリまで使わない。この時代では補充が難しいからだ。

「へえ……二刀流ってヤツ？　面白い……！」

彼女が構えた武器は……

「！？」

彼女自身の、拳だった。

グローブも何も無い、人間と同じような肌である。

彼女はそれで、理子のナイフを正面から殴り付けた。

しかし。

彼女の拳には、ナイフが突き刺さるところか傷の一つさえつかなかった。

加えて。

理子のナイフが、砕け散った。

「な」

彼女のナイフも、なまくらではない。しかし、それを真っ向から受けて砕くとは、彼女の硬度はどれ程のモノなのか。

「始めようぜ……最ッ高の戦いをさあ！」

エッフェル塔から数百メートル離れた地点、建物の屋上。

そこでは、碧の髪を靡かせる少女が、その鳶色の瞳を現れた少年に向ける。

少女は言わずもがな、レキである。対し、少年の背には……「ウモリのような、翼を生やしていた。

「……塔外に敵がいる場合は、そちらに専念して良い、という話でしたね」

言いながら、レキは自身のドラグノフを持ち直した。

目の前では　小さな少年が、犬歯を剥き出しにして嬉しそうにレキと対峙していた。

「いやあ嬉しいねえ！　俺って身体ちつさくてさあ！　だあれも敵として扱ってくれなかったけど、アンタは始めて俺を敵と認識してくれる！」

「……私は、人を見掛けで判断すべきではないと考えています」

「……良いねアンタ！　気に入ったから……」

彼は口角を吊り上げると、両の手に、鋼鉄製の鉤爪を装着した。

「殺すだけで勘弁してやるよ！」

「……お断りします」

レキもまた、ドラグノフに銃剣を装着する。

「アンタ、名前は？」

「『鷹眼の銃神』レキです」

「……はっ、大層な二つ名だね。なら、この俺　鬼士団第8師団長・ジークが、その名前ごと八つ裂きにしてやるッ！」

彼が啖呵を切り、レキに肉薄。鉤爪を突き出す、レキは身体を僅かに翻してそれを避ける。

「ならば、私も宣言しましょう。」

私は、唯一発の銃弾で、貴方を倒す」

それを聞いたジークは……顔を赤に染め上げ、明らかかな怒りの眼を彼女に向ける。

「嘗めるな、人間風情があ！」

レキ。彼女は、何一つ敵を侮った言葉など発していない。

彼女は、唯これから起こる事実を述べただけなのだから。

第168弾 戦闘開始（後書き）

あれだけの人数を戦闘させるって……どれだけ時間掛かるんだろう。

第169弾 雷の乱舞

第169弾 雷の乱舞

「くそ、分断されたか……」

リュパンは軽く舌打ちしつつ、身を隠して先に進む。吸血鬼という種族の少なさ故か、警備は多少手薄だ。

怪盗であるリュパンにはこれを潜り抜けるのは容易であったが、拐われたミチルを救うとなれば話は別だ。

恐らくは、敵の主戦力がそこを守っていることだろう。とはいえ、まずは彼女の場所を知るのが先決。

リュパンは一度見晴らしの良い場所に出ようとするが。

明らかに、警備の吸血鬼たちとは段違いの実力を持つであろう者の姿が見えた。

「……出てきたらどうだい、怪盗さん」

男はその茶髪を揺らし、シルクハットを僅かに上げてその紅色の瞳を向けてきた。

「……バレていたか」

「貴方ほど強ければ、逆に隠し切るのは難しいのさ」

褒めているのか若干微妙なラインではあるが、彼の口調は好意的だ。まあ、だからと言って彼がこのまま通してくれる筈が無いが。

「……アルサーヌ・リュパンだ」

「ご丁寧にどうも。鬼士団第1師団長アスラだよ」

アスラは笑みを溢し、その黒刀を抜いた。

「（……まずいな、ブラドと当たる前にここまでのヤツと戦闘するのは）」

内心で焦りながら、あくまで視線は彼から外さない。リュパンはナイフを構えた。

が アスラは、何かに気づいたように、窓を見据える。
リュパンも釣られて 勿論、警戒は緩めずに 窓越しに、外を
見た。

曇っていた空が、紫に染まっている。

それを見た直後。

バリイン！

窓ガラスを割り、破片を撒き散らして、銀髪の少年が侵入してきた。
敵か、とリュパンが警戒を強めるも、少年は彼を一瞥しただけで、
アスラに向き直った。

そして、リュパンが何かを口にする前に、それを制止するように言
葉を投げる。

「俺はレインだ、と言えば理解してくれますか？

初代リュパン」

レイン。

理子たちが、いつも口にしていた名だ。

本名を成瀬 レインハート、二つ名を

「『紫電の雷神』か……！」

「理解して戴けたようですね。……ここは、俺が受け持ちます。貴
方は先へ」

二つ名を呼ばれ微笑んだレイン。その言葉を受けたリュパンは、短
く頷くとその場から姿を消した。

「さて……二度目だね、お前と戦うのは。

今回は、手加減無しだよ」

「望むところ、ってヤツかな。

改めて……第1師団長アスラだ」

「『紫電の雷神』、成瀬 レインハート。

貴方の刃、折らせて貰う！」

レインは、『影』の『加速』と雷歩の併用で、一瞬でアスラの懐に
入る。

「おっと！」

更に高速で振られた水月を、アスラは黒刀の切っ先を下に向けて立てて防ぐ。

火花が散る中、レインは片手の指先をアスラに向ける。

彼は直感で危機を察知し、水月を逸らして横に転がるように飛び退いた。

直後、彼のいた空間を紫の雷が通り過ぎた。

「へえ、雷の魔術師か！ 随分便利な能力だ！」

「そりやどうも……こんなことも、出来るよ！」

レインはダガーを三本投擲し、磁力で操作。多角的に目まぐるしい速度で飛び回るそれは、上、左斜後、右斜前からアスラに同時に遅い掛かる。

「雷線！」

加えて、ダガーとダガーを結ぶように、紫の雷が進る。

「うわっ！」

しかし、彼は直前でそれを避ける。それに油断して反応が遅れたのか、飛ぶダガーの一本が彼の首を深く傷つけた。

鮮血が飛び散るが、彼の表情にさしたる変化は見られない。

頭の中では、「あーあ、服が汚れちゃったよ」「くらいの出来事なのだろうか。

傷は、赤い煙を立ててみるみる塞がった。

「痛……一応、僕らにも痛覚はあるんだからね？」

「そりや済まないね。」

なら、魔臓をさっさと破壊して逮捕してあげるよ。」

「……君たちは警察なのかい？」

……そういえば、この時代に武偵は存在しない。

なら、逮捕は出来ない……いや、ワトソンに任せれば大丈夫だろうか。

逡巡の後、レインは曖昧な返事を返した。

「まあいいか。なら、そろそろ僕も本気を出そう」

「……今までは本気じゃ無かった、って？ なら俺も見せてあげる

よ、雷神化……！」

レインの身体から雷が走り、眼、髪が紫に染まる。
肉体活性　雷神化。

それを見たアスラが、驚愕に目を見開いた。

しかし、彼はすぐに気を取り直し、寧ろ愉快そうに口角を上げる。

「まさか君もそれが出来るなんてね……なら、僕も見せよう。

雷帝化を」

刹那、アスラの身体を金色の雷が覆った。

彼の眼と髪が金色に染まる。

「まさか……雷神化!?!」

レインも、先のアスラと同じような表情をした。

そう、アスラもまさか自身と同じ力を持った者が相対するとは思わなかったのだらう。

「君は自らを『紫電の雷神』と名乗ったね……僕の二つ名も似てるんだ。

『紫電の雷帝』、それが僕の二つ名さ。紫電じゃないけど」

レインは黙って水月を構える。アスラもそれに倣い、黒刀を握った。

「面白い。雷神と雷帝、どちらが上か……決めようか！」

レインは叫ぶと同時に、指先から雷弾を放つ。

それと鏡写しのように、雷弾のような雷の奔流を撃った。

二つの雷がぶつかり合い、互いを打ち消す。しかし。

「！」

レインの雷が、アスラの雷を僅かに突破。彼はそれを手で受け止めた。

「……そうか、雷は効かないのか」

「それはお互い様みたいだがね」

そりゃそうだ、とレインは首肯する。つまり、互いに雷が効かない以上

「直接攻撃しか無い、か……」

しかし、近接戦闘だけなら吸血鬼であるアスラに分があるだろう。

「……仕方無い、久々に使うかな」

レインは空高く手を伸ばす。

その拳動に、アスラは一瞬惚け　その意味に、気がついた。

「まさか……！」

レインは微笑み、指を鳴らす。

その音に引き寄せられるように、レインの身体に雷が落ちた。

凄まじい衝撃。アスラは反射的に腕で眼を守りながら、その隙間から覗くレインの姿を見据えた。

彼の身体から迸るは、災害の一種である天然の雷。漏れ出す輝きが、その純度の高さを物語っていた。

「『皇雷神』」

レインが呟いたのと同じ、アスラの身体に穴が空く。

「ぐあつ!?!」

まさに迅雷の速度。

腹の傷が回復しきる前に、今度は右足が切り飛ばされた。

「今の俺は音より早く動ける。ソニックブームも超活性化された肉体の前には無意味だ」

そんな呟きが、四方八方から重なるように響く。

話すより、動く方が速いのだ。

「く……！」

アスラは一旦、飛び退いた。彼の様子を見たレインも、刀を下ろして様子を見る。

「まさか、人間で我らが第3形態デルツァに成れるなんて……素晴らしいよ、レイン」

第3形態、という聞き慣れない単語に、レインは口を閉ざした。

瞬間　アスラが、天高く右手を上げる。

あの構えは……！

「吸血鬼の第3形態だ……滅多に拝めるものじゃないよ」

アスラが言うのと、ほぼ同時に。

雷が、彼の身体を撃ち抜いた。

「お前も皇雷神を!？」

レインの叫びは、地を穿つ衝撃波の前にかき消える。

彼の前に姿を現したのは、

「……さあ、雷帝の本気を見せよう」

金色の雷をその身に纏う、アスラの姿だった。

第170弾 ラグナロク襲来

第170弾 ラグナロク襲来

強烈な爆音が遠くから響き、ジャンとジョーンは戦闘が始まったのを察知した。

「随分派手にやってるな……誰だ？」

「さあ？ こんな戦い方をするやつは居なかったが」

二人は疑問を口にする。まあ、実際戦っているのは彼女らの知らない男だ。仕方の無いことである。

「……それはそうと、お出ましみたいだぞ」

「そつらしいな」

二人は各々の武器を構える。しかし……

「……二人、いや三人か」

数の利はあちらが上。

「あら？ 貴方たち綺麗な髪の色してるわね。
羨ましいわ〜」

「……………集中」

「堅いこと言うなよイーズ！ 俺、姉ちゃんの方貰うぜ」

明らかにチャラチャラした男は、獣のような目でジョーンを見回してくる。気分を害したジョーンは、デュランダルの切っ先を男に向けた。

「良いね良いね！

気が強い女も、俺は大好きだぜえ！？」

「……………下種が」

ジョーンが吐き捨てるように言うと同時、男は跳んだ。

更に、ジャンに向けて二人の吸血鬼が肉薄する。

二人はやむを得ず交戦しようとするが

「 済まないが、俺は女性に手を上げる男を見過ごせない性質でね」

二発の乾いた破裂音が、その静寂を破った。

それと同時。

ジョーンに向かった男の両足を、銃弾が貫いた。

「ぐお!？」

男は盛大に転け、声のした方を振り返った。

そこには デザートイーグルとベレッタを携えた、普段より鋭い眼光をした、遠山 キンジだった。

それに続くように、二カ所から金属音が響く。

「……………不覚」

「誰よアンタ！ 私の邪魔しないで！」

二人の吸血鬼の言葉を聞くと、二人の少女は不敵に微笑み、自身の名を告げる。

「『絶影の勇神』有明 悠です」

「『孤高の武神』神崎・H・アリアよ！」

悠香はナイフでイーズを切りつけ、その場から引き離れた。

「27代目ジャンヌさんたち。ここは僕らが引き受けます……………行って下さい」

悠香は言い終えると、ジャンたちの返答を待たず跳躍しイーズへ追撃を掛けに行く。

彼女から詳しい説明は聞けそうもない。ジョーンは、もう一人の少女……………神崎・H・アリアに質問した。

内容は単純明快。

「お前たちは何者だ？」

突如として現れたイレギュラーの正体。

対しアリアは、これまた簡易に彼女らに返答する。

「私たちは、アンタたちの味方で」

言葉を紡ぐアリアの後から、カイゼルが巨大な鎚を振りかぶる。しかし、それは空を切った。

アリアはカイゼルの遙か上空に跳び、着地。

「理子たちの味方よ」

彼女の黒銀のガバメントから、二回銃声が響く。

それは頭蓋の後ろから、性格にカイゼルの両の眼を穿った。

「がああああああ！」

倒れる彼の叫びを無視し、アリアは早く行くよう告げる。

二人は同時に頷き、その場を後にした。

「許さない……許さない許さない許さない！」

アンタよくも私の眼をおおおおおお！」

鎚を振り回してあからさまに怒りを見せるカイゼルに、アリアは面倒そうに嘆息した。

「いいわ、来なさい。

遊んであげるわ」

「この第10師団長カイゼル様を、嘗めるなよ小娘！」

ドスの効いた声で言うカイゼルに対し、アリアはふん、と鼻を鳴らした。

「東の国、日本にはこんな諺があるわ。

『弱い犬ほど良く吠える』、ってねっ！」

「ほざけ！」

鎚の一閃と、アリアの日本刀が交錯した。

「……………『絶影』」

ナイフを回しながら、悠香は自身の二つ名の一部を呟いたイーズに、訝しげな視線を送った。

が、そんな視線を気にする様子も無く、イーズは更に言葉を続ける。

「……………『勇神』」

「……………それがどうかしましたか？」

悠香はイーズに問う。

「ターツの単語を溜めて話す彼に、多少の苛立ちを覚えたのかもしれない。その口調は、急かすようだった。」

そして、イーズも口を開く。

「……………矛盾」

『絶影』 『勇神』 『矛盾』 ……つまり、『絶影』 影を名乗りな

がら、『勇神』 勇ましき者を名乗るのは矛盾している、ということだろうか。

「知りませんよ……………言うなら、付けたレイン先輩に言って下さい」
悠香の呆れたような言葉に、イーズは僅かに頷いた。

何だか面倒そうな人と当たってしまった。そう考えていた、刹那、イーズが、目の前から消えた。

「!?!」

一瞬なんてものじゃない。瞬きもしていない。

まるで初めからそこにいなかった、とも錯覚出来るような間に。意識の合間を縫ったかのように、イーズの存在そのものが消えた。

彼の居場所を突き止めようと、辺りを見回すが……………一向に、影も形も見当たらない。

悠香は訳が分からず、注意が散漫になった。

しかし、敵の術中での油断は死を意味する。
突然。

眼球の前 まさに『目の前』と言って良い位置に、全く脈絡も無く、唐突に白銀の刃が現れた。

ほぼ反射でそれを避けるも、頬に鋭い痛みが走った。

赤い液体が球状になり、地に落ちる。

「……………俺も、『絶影』」

イーズの声が背後から聞こえ、思わず振り向いた。しかしそこには何も無く、ただ夜闇が支配する空間だった。

「……………『絶影』失格」

またも背後。つまり、先程まで自分が向いていた方向から、イ

ズの小さな声が響いた。

成る程 悠香は振り向かず、イーズが先程から呟いていた台詞の意味を理解し、頷いた。

「僕が『絶影』を名乗るのが許せないんですね」

「……………」

今度は、黙って頷く。

これほどの実力が有れば、戦乱の世を駆け抜けた大忍者に与えられたという称号 『絶影』を名乗るのも頷ける。

更に、自分の目の前にいる年端も行かない子供が、その名を語るのが許せなかった……………そういう話だ。

「……………僕はこの名を捨てる訳には行きません。

大切な人から、貰った名ですから」

悠香は自身の胸に手を当てて、目の前のイーズでない誰かに、呟くように言った。

「それでもこの名を奪おうと言うなら、僕の実力を見せましょう。

『絶影』の名に相応しいかどうか、貴方のその眼で確かめて下さい」

悠香はナイフを逆手に持ち、交錯させる。

「有明家次期当主、有明 悠。

参ります！」

イーズは悠香の気をその身で感じ取り、彼の力で気配を消した。

そして瞬時に悠香の背に回り込み、首裏に短刀を突き刺す。

しかし。

悠香の首を通過したはずの短刀の先からは、何の感触もしない。

「……………油断！」

イーズは、普段より強めに呟くも、その反応は一步遅かった。

背中から、脇腹をナイフが貫通した。

「有明式歩法術肆式 『霞衣』」

イーズが突き刺したはずの悠香の姿が、霞の如く消え去る。

「見誤らないで下さい。僕の力を」

悠香の台詞を聞き、認識を改めたのか……………イーズは、初めて武術ら

しき構えを取った。

「……………全力」

「分かりました……………では、僕も見せましょう。」

有明式歩法、その奥義を」

対する悠香も、左手を逆手の下段に構え、右手を順手の上段に構えた。

一瞬の緊迫。

次の瞬間、二人の姿が消え、ナイフと短刀が切り結んだ。

第171弾 超能力者（前書き）

お久しぶりです。

4日振りくらいでしょうか。

色々忙しくて更新できませんでした……すみません。

これから、更新ペースが崩れるかもです。すみません。

第171弾 超能力者

第171弾 超能力者

メビウスを理子に任せ、ジャンヌは吸血鬼を避けてミチルの下へ向かっていった。

まだ半分しか出来ていないエッフェル塔、恐らくはその最上階に彼女は囚われているのだろう。

彼女はエッフェル塔内部の階段を探しながら進んでいく。

外から直接登れば速いが、目立ち過ぎる。確実に迎撃されるだろう。隠密行動を優先し、ジャンヌは出来る限りの最大速で最上階へ向かう。

と 不意に、超能力者の気配を感じ、背を壁に当てて、角の先を窺う。

そこには……

「白雪!？」

「へ、ジャンヌ!？」

艶のある黒髪を伸ばし、巫女装束でなく東京武偵高の臙脂色のセーラー服に身を包んだ、白雪の姿があった。

彼女もジャンヌの登場に驚いているようだ。

「どうしてここに?」

「成瀬君が吸血鬼に狙われてるらしいの。それで、峰さんたちも危ないと思ったからイギリスからフランスまで来たの。それで、キンちゃんたちが吸血鬼を引き付けるから、その間に私は立花さんを助けろって」

白雪の説明を聞き、ジャンヌは頷く。確かに、近・中距離で戦える白雪は状況に応じて戦闘体型を変えられる。

「よし、なら早く向かおう。恐らく、ミチルは最上階にいる」

「分かったよ」

白雪はジャンヌに続き、長い廊下を駆けた。

しばらく走ると、外を見渡せるホールのような場所に出た。

そしてその中心には……二人の吸血鬼が佇んでいる。その内片方は、見たことのある顔だった。

「メフィスト……!!」

「何日か振りですね、お嬢さん」

ジャンヌはデュランダルを構え、メフィストに向ける。

汚い手を使ったとはいえ、あの初代リユパンを圧倒した相手だ。油断は愚か、僅かな隙さえ見せる訳にはいかない。

「白雪……そちらは任せて良いか？」

「勿論」

白雪は封じ布を解きながら、ジャンヌに背中を合わせて答える。

「姉ちゃん可愛いなあ。けど、手加減はせえへんよ」

緑色の髪ダブラの少女は笑いつつ、少々古い型の拳銃を二丁握る。

二丁拳銃　アリアの得意とする戦法。

ならば、ほぼ顔を合わせる度戦闘を続けてきた白雪にも分はある。

散々キンジャレインから注意されたことが、ここに来て役に立つとは、誰も思っではいなかった。

「……行きます！」

轟!

白雪は自身の足からブースターのように焰を逆噴射し、さながら紅い流星の如く速度で少女に肉薄する。

対し彼女は、吸血鬼の身体能力故か、跳んで白雪から距離を取る。

その際に、二回の銃声。

アリアとの戦闘でも使用した通り、白雪はその愛刀・イロカネアヤメで銃弾を弾くなど兇戯のようにやってのける。それは超能力を封じられた状態でも同じこと。

故に、白雪には今の状態での銃弾斬りなど、容易いことであるはずだった。

が その事象に、白雪は眼を見開いた。銃弾が、見えない。

「ッ!？」

地を蹴ることでは何か、眉間へ向かうはずだったであろう一発を避ける。

が、もう一発が、彼女の防弾制服、その左脇腹に突き刺さった。呻く間も無く、少女が接近してくる。

白雪はイロカネアヤマに焰を灯し、それを振りかぶった。

「星伽候天流、緋火虞鎚　！」

が、少女は構わず突進してくる。

少女は　白雪の一閃を素手で受け止めた。

白雪が驚愕の表情をするのと対照的に、少女は苦悶の表情を浮かべた。

が、吸血鬼の超速再生は彼女に苦痛を残したまま、傷を即座に塞いだ。

「らあ！」

少女の拳を、後ろに跳んで勢いを軽減した。が、吸血鬼の腕力に押しされ、後方に大きく吹き飛ばされる。それを焰の逆噴射で体制を立て直し、白雪は改めて少女の方を見る。

見えない銃弾。

キンジの兄でありレインの師匠、遠山 金一の銃技、『不可視の銃弾』とは違う　速度で見えないのではなく、銃弾が透明なのだ。

「『クリアショット』……私の力は、銃弾を透明化させることが出来るんや」

確かに、彼女の超能力は驚異だ。が、彼女の真価は別にある。

拳銃格闘技　つまりは、アルカタ。

まだ武偵の存在しないはずのこの時代、古武術臭さは残るものの、アリアや理子ど同質の銃技。

しかしそんなものは、アルカカタ以外存在しないだろう。それを彼女は、既に使いこなしている！

「……なら、私も修行の成果を見せましょう。」

星伽候天流『新』あらた」

白雪はイロカネアヤマに焰を灯す。

しかし、それは今までのように煌々と燃え盛ってははいない。

刀の芯から、焰が滲み出ているような、薄い焰。

先刻の焰とはまるで違う存在感に、少女も警戒を強める。

「『雪白の炎神』星伽 白雪です」

「鬼士団第6師団長マーラや。まあ、気楽に頼むわあ」

「『ラ・ピュセルの枷』」

地に向けて放ったヤタガンから、白銀の氷が広がる。が、メフィストは翼を広げ、宙を舞った。

「すみませんね。私は吸血鬼なもので」

「ふん、ならその翼、へし折ってやろう」

「ほう……しかし、翼もない人間あなたがどうやって私に攻撃を届かせるのですか？」

人間という下等種に、明らかな嘲笑を浮かべるメフィスト。ジャン又は表情を変えず、不敵に微笑んだ。

「顔は良いのに、熟つまらん男だ。翼が無ければ飛べないと思っただか」

ジャン又は言うが早いか、空中を駆け出す。

「!?!」

驚愕の表情を見せるメフィストに、斜め掛けの一閃。

顔を歪めたメフィストは、しかしすぐに魔臓の超速再生を見せてデュランダルの攻撃範囲外に離脱した。

「成る程、空気中の水分を凝結・氷結させ、足場になっているのか」

ラ・ピユセルの枷で出来た氷の床を眺めながら、メフィストはジャンヌが空を駆けたカラクリを推測して見せる。

「ご明察だ。なら　こんなことが出来ることも、分かるだろう！」
ジャンヌは手で虚空を薙ぐ。

すると、メフィストを囲むように氷の槍が形成された。

「『ルーアンの槍』」

同時、全ての槍がメフィストに襲い掛かる。

「　　まずい！」

吸血鬼にとって、脳髓よりも大切な器官　それが魔臓。

あらゆる傷を瞬時に回復させるそれは、吸血鬼の最も基本的な体内構造であり、切り札でもある。

それが失われる方法は唯一つ。

四ヶ所の魔臓を、同時に破壊されることだ。

即ち、現在のメフィストの状況　四ヶ所どころか、全身を串刺しにされるような状態は明らかに危険。

故に、メフィストは魔臓を庇わざるを得ない。

身体を丸め、翼を盾にするように身体を守る。

ジャンヌは、その一挙一動さえ見逃すまいと、メフィストの動きを注視していた。

メフィストは翼を貫かれ苦悶の表情を浮かべる。　そして、彼は両手両足を第2形態に移行、槍を防ぐ。　そして、彼は両

しかし全てを捌ける訳も無く、何本かが背に刺さる。

「ぐっ……」

メフィストは呻きながらも、何とか槍を防ぎ切った。

現在、確認出来た魔臓は二つ。

右手首と左大腿。

そこだけ、傷の治りが僅かだが遅かった。

全ての魔臓を確認するため、もう一度『ルーアンの槍』を発動しようとする　しかし。

メフィストの、身体が。

突如として、膨張を始めた。

幾度か見たことがある　吸血鬼、ブラド・ツェペシユの変身だ。第2形態となるそれは、醜悪な化け物に変化し、凶暴性も増す。

ベギツ、ゴキツ、バギン……グチャツ。

耳を覆いたくなる、人体が無惨に破壊されるような音の後。

そこに、メフィストはいた。

ブラドの第2形態は、身長が何倍にもなり、狼と鬼をブレンドしたような形態だったが　今のメフィストは、ブラドのように人間離れした大きさではなく、二メートル半くらいの大柄な身長に、全身を覆う体毛　そして伸びる翼。

正しく、蝙蝠のようだ。

「　吸血鬼の第2形態には、己と最も相性の良い、血を飲んだ生物と吸血鬼が掛け合わされたような状態になる。

我が主なら狼　私は、蝙蝠という訳だ」

メフィストの、ブラドと同じく何重にも聞こえるその言葉に眉を寄せながら、ジャンヌは尚も剣を握る。

「面白い。蝙蝠退治は専門外だが、そんなちんまりした仔蝙蝠なら問題無い」

「　何だと？」

額の血管をひくつかせながら、メフィストは問う。が、ジャンヌは嘲笑を浮かべるのみ。

「蝙蝠の癖に耳が悪いのか？　この出来損ないが。」

ならば　来い。『謀略の氷神』ジャンヌ・ダルク、貴様を調教してやるっ」

「……図に乗るなよ、人間風情が！」

第172弾 キンジの覚悟

第172弾 キンジの覚悟

「おいおいどうした遠山侍。『桜花の剣神』の名が泣くぜ？」

「……っ、クソ！」

キンジの一閃に対し、ひらりと身をかわす。

吸血鬼の男は日本刀『村正』を片手で振るい、キンジを横薙ぎに斬りつけた。

キンジは上体を逸らしそれを紙一重で交わすと、バタフライ・ナイフとスクラマ・サクスの双剣にシフトし、男に斬りかかった。

「だぁーかぁーらぁー、無駄だっつーの」

が、男はスクラマ・サクスを村正で受け止め、バタフライ・ナイフの刀身を手のひらに突き刺し、痛みを無視してナイフを握るキンジの拳を掴んだ。

血が滴り、キンジが驚愕に目を染める。

「知らないのか？ 吸血鬼は無限に回復すんだよ」

例えそうだとしても、彼のしていることは異常としか形容し難い。

吸血鬼にだって痛覚は存在する。

自ら、手を裂かれる痛みを受け入れ、それでもキンジのナイフを掴んだ。

「本気出せよ、遠山侍。でないと、この第7師団長テンマ、てめえの血肉を貪り尽くすぜ」

テンマが、そのナイフのように鋭い犬歯を見せる。

根源的な恐怖に駆られ、キンジはテンマの腹を足裏で蹴飛ばした。

彼の手からナイフが外れ、治った傷が再び開き、鮮血が闇夜に舞う。

「……なら、見せてやるよ、天桜流を！」

キンジはバタフライ・ナイフを仕舞うと、スクラマ・サクスを肩上

に構えた。

舞桜

かつて自身が沈められた一撃。

隙をついて、既に把握しておいたテンマの魔臓を全て穿つ。

キンジは駆けた。

テンマは動かない。

挑発するように、手招きするのみ。

ふざけやがって !

キンジはスクラマ・サクスを握る。

「天桜流合式！ 舞桜・乱咲みだれざき！！」

舞桜からの、四回に及ぶ高速の刺突。

それらは、テンマの斬撃をすり抜け、彼の魔臓を全て破壊する、はずだった。

「甘え甘え」

ガキーン！

金属音が、響く。

舞桜、が。

止められた ?

初見で見抜ける者など、ノルマーレのキンジでも困難なことだ。それを、如何に吸血鬼と言えども、目の前に立つテンマの反射神経で捉えることの出来る技ではない。

「 何で止められてるか、理解出来ない、って顔だな？ 」

テンマの言葉に、キンジは言葉を返せない。

彼は構わず続ける。彼に、宣告するように。

「俺たちは人間の血を吸ってる。そうしてるとそいつらの遺伝子が手に入り、俺たちに加算される訳だ。

言ってる意味が分かるな？」

つまり、こいつは

「……終わらせるぜ、遠山侍。

天桜流奥義 「

テンマが、その技の名を紡ぐ。
キンジに、敗北を告げるように。

「 桜吹雪」

月光を反射した村正が、その白銀の刃を煌めかせる。
五条の光が、キンジの視界に入るのに、僅か遅れて。
キンジの五体から、鮮血が噴き出した。

「が
」

「 終わりだ、出来損ない。

お前の剣じゃ、俺には及ばない。

天桜流を全て修めた俺に、てめえが勝てる道理は無え」

テンマは告げる。

諦めろと。

人間は、如何に文明を発達させていようが、単体では弱々しい生き物だ。ジャングルに放り込まれば、大抵の人間は生き長らえない。そんな弱者である人間が、あらゆる生物の血を、利点を取り込んだ吸血鬼に勝てる道理など無い。

「……………よ」

しかし。

「 ああ？」

キンジが呟いた言葉を聞き取れず、テンマは眉を寄せて彼を睨む。

「……………知るかよ、つて言っただよ！

お前が天桜流を全て納めたとか、俺が出来損ないだとか、そんなこととはどうでもいい！」

キンジは血に濡れた手で、刀を握る。

執念で立ち上がり、断ち切るように、刀を一度大きく振るった。

「 要は、お前に勝てるかどうかだ」

キンジは口角を上げる。

テンマは、そんな彼を見て 同じく、笑った。

「……気に入ったぜ、遠山 キンジ。

だが、負けてやるつもりもちゃんやらねえからな。てめえの言うように、この世界は勝ったか負けたか、弱肉強食と理不尽で出来てる。

生き残るためには 勝つしかねえんだよ」

テンマも村正を構える。

二人の視線が 侍の剣気が、交錯した。

キンジは、不安をかき消すべく己に言い聞かせる。

勝てる

テンマは言った。

彼が納めたのは、『天桜流の全て』であり、キンジ自身の技 彼の二つ名の由来にもなった『桜花』は把握出来ていない。

狙いは敵の額にある魔臓。

魔臓が回復するタイムラグに、他の全ての魔臓を破壊すればキンジの勝ちだ。

「……行くぞ！」

二人は同時に、地を蹴った。

村正とスクラム・サクスが、一瞬交錯する。

「紅桜！！」

「桜花！！」

キンジの腕から紅色の血が弾け、さながら桜の花弁のように辺りを散る。

互いの技の名が、静まりかえったエッフェル塔のホールに響いた。

ぴちゃっ。

血が、地面に落ちる。

膝を着いたのは

「……何故、だ」

キンジ、だった。

あり得ない。

確かに桜花は発動した。

ならば、何故桜花はテンマに届かないのか。

「お前の技は確かに速い。亜音速の突きなんて、並大抵の人間が出来ることじゃねえ……だがな。所詮、その程度なんだよ」

そう。

テンマの頭に刀を突き刺しただけでは、キンジの勝利とはなり得なかった。

そこでキンジは、右腕を捨てる桜花の威力を弱めた。残る魔臓を即座に壊せるように。

だが、その所為で彼に技を見切られたのだ。

「諦めろ、遠山 キンジ。

お前に限った話じゃない。人間が俺たちに勝つなんて、無理な話なのさ」

テンマは日本刀を構える。

幾度となくキンジが取った構え 奥義・桜吹雪の構えだ。

終わり、か。

キンジはテンマに告げられた言葉を心の内で反芻する。

「（こんなところで終わるのか？ 俺は）」

キンジは呆然と面を上げ、刀を振りかぶるテンマを見た。

自分は、勝てなかった。

その事実を認識した途端。ふと、頭の中に一つの疑問が浮かんだ。

何故、こいつに勝とうとしたんだ？

理子の、ジャンヌの加勢？

それは確かにそうだ。

だが、違う。

何かが、根本的に違う。

テンマに限った話じゃない。

今までキンジが、理子と、ジャンヌと、ブラドと、金一と、パトラと、シャーロックと、アレックスと、ココと、戦ってきたのは。

アリアの、ためじゃないか。
何のために戦う？ そんなの

「アリアを、守る！」

そう、そのため。

それを確と認識した瞬間、キンジの身体に、今まで感じたことのない血流が流れる。

そして、目の前に降り下ろされる刀が、そして刀を振るうテンマの僅かな動きさえ、視える！

「ッ、何！？」

テンマの村正が……キンジの、二本の指に、挟まれて止まった。真剣白刃取り。

かつてジャンヌ戦にも披露したそれを、今使用した。

だが、テンマが驚いたのはそんな些細なことでは断じてない。今の今まで、自分についてこれなかった目の前の少年が、先程とは別人のような雰囲気醸していた。

「『ヒステリア・ガーディア』……つてところか」

異性を守る、その意思を引き金として発動する新たなヒステリア。その姿は、正しく守護者^{ガーディア}。

「お前は言ったな。人間は、吸血鬼には勝てないと。

証明してやる。俺は、お前に勝つ^{にんげん}。守るために」

キンジはスクラマ・サクスを構え直す。

その構えは、本来肩上に構える『桜吹雪』の型を、姿勢を低くして胸まで下ろしたものだ。

「……いいぜ、遠山 キンジ！ なら俺も、本気で行くぜ……部分移行、『熊手』」

テンマの腕と足から、動物のような毛が生える。

自身の一部を第2形態に移行させ、身体能力を向上させたのだ。

「いくぜ」

二人の姿が、同時に消え

「『桜吹雪・春暁』!!!」

「『桜花繚乱・紅時雨』!!!」

紅い桜の花弁が散るが如く 辺りが血に染まる。

「 見事だ」

口角を吊り上げたテンマの身体から、鮮血が噴き出した。

「まさか、一瞬で全部魔臓を潰されるとはな……」

倒れたテンマは、その頬を血で染めた。

勝ったキンジは 高々と、傷だらけの右腕を天に突き上げた。

「俺の……勝ちだ!」

第173弾 降臨する風神、悪鬼ブラド

第173弾 降臨する風神、悪鬼ブラド

「ちっ、どこまで行けば良いんだ！」

悪態を吐きながら駆けるはリュパン四世。彼は今、ミチルを救出しようとして最上部に向かっているのだが……

「……まさか、ここまで吸血鬼が張っているとは」

後ろからは、呻きか叫びか判断のつかないような声を上げながら、とんでもないスピードで駆けてくる下級吸血鬼たちの姿があった。

理子たちから聞いた話では、吸血鬼は『魔臓』なる器官を、四つ全て同時に破壊しなければならぬらしい。

下級吸血鬼には二つしか魔臓が存在しないらしいが、それでも場所を探す労力を考えると、相手にしている暇は無い。

「くそ……こうなったら」

前方に二つの曲がり角を発見したリュパンは、待ち伏せからの奇襲を企てる。迷ったら左の法則に従い、左に曲がって理子に持たされたスタングレネードを使用すべく、強く地を蹴り曲がり角に入った。
が。

予想外の事態に、一瞬固まる。

「ッ、ジャンヌ・ダルク27世！」

そう 角の先には、向かいから駆けてくる双子のジャンヌ・ダルク、ジャンとジョーンがいたのだ。

「リュパン！？ おい、一緒にいたらまず……」

ジャンが良い終える間も無く、ジョーンが二人の手首を掴み、反対の通路へ駆けた。

理由は言わずもがな、彼女らも追いかけていたのだ。

吸血鬼たちに。

「おい！ 吸血鬼の量が倍になつてる気がするんだが！」

「細かいことは気にするな！ 男だろう！」

「ここでまさかの男女差別！」

ええいままよ、お前ら目を閉じろ！ スタングレネード、使うぞ！
スタングレネードの意味は、共に行動をしていた二人には理解出来る。

リュパンは吸血鬼たちにスタングレネードを投げつけようと手を振りかぶった。

が。

「！？」

手に持ったスタングレネードは、鈍い衝撃と共に弾かれた。

「リュパン！ 背後だ！」

ジャンの声を聞くと、振り返るより先に髪で背後に攻撃を仕掛けるが、手応えは無い。

「吸血鬼たちが！」

その間にも、吸血鬼たちは超人的な速さで駆けてくる。

結局、リュパンのスタングレネードを弾いた敵の正体も分からぬまま走る羽目となった。

「まずい……！ 追いつかれるぞ！」

先のタイムロスが響き、吸血鬼たちはもう限界まで迫っていた。

「くそ、やるしかないか！」

銀刀二本を構えたジャンが、忌々しげに呟く。

本命前に体力を消耗するのは、正直好ましくはない状況だ。

が、そうも言つてられない　ジャンが吸血鬼に斬りかかろうと、足に力を入れた、その時。

一瞬、室内であるはずが、一陣の風が彼らの頬を撫でた。

そして　吸血鬼たちの、身体が。

見えない何かに断たれたように、両断されてしまう。

「な、何だ！？」

狼狽の声をあげたのは、突如目の前の敵が切断されたジャンだった。

彼の疑問に答えるように、再び風が薙ぎ　紅蓮の髪を靡かせる、

一人の男が目の前に降り立った。

「……随分と、面白そうなことしてんじゃねえか。ああ？」

男は獰猛な笑みを浮かべると、同時。

「俺様も……混ぜるやああああああッ！」

担いでいた斧を一振り。

轟音と共に、吸血鬼たちが廊下の端まで飛ばされた。

「てめえらは邪魔だ。さつさと上に行きやがれ」

シツシツ、と邪魔者払いするようにアレックスが言うと、三人は頷いてその場を去り、屋上へ向かった。

「さあて……ショータイムだ。派手に逝っちまいなあ！！」

アレックスが腕を振るう。

吸血鬼たちはその度に宙を舞う。

「ハッ！　吸血鬼つてのは格好ばつかなのかあ！？」

アレックスの指が空を踊る。そして、薄く研ぎ澄まされた真空の刃は、正確に全ての吸血鬼たちの魔臓を穿つ。

「ふああ。雑魚過ぎて欠伸が出るぜ……おい、そのてめえ。出てこいよ」

アレックスが腕を振るうと、その男はそれを避け、姿を現した。

「……何故分かった？」

男は随分年輩のようだが、刃のように鋭い殺気は全く老いを感じさせない。

「へえ、さつきの奴等よりはマシみてえだな……俺の名はアレックス。『蒼天の風神』だ。名乗りな」

背に掛けていた『ガンズ・トマホーク』を手首に掛けて回し、切っ先を老人に向けた。

「我が名はデモン。ブラド卿の右腕にして、鬼士団第2師団長だ」
「よろしく、なあッ！」

アレックスがトマホークを投擲し、同時に袖口から二条に光る刃を取り出した。

「パーティーの始まりだあ！」

「何だっただ、奴は？」

先の、紅蓮の髪をした男を思い浮かべて、ジャンは小首を傾げた。

「恐らく加勢の一人だろう。『レイン』とやらの仲間だ」

リュパンの推測は半分以上……まあ、八割方正解といったところだ。アレックスは、一応彼らの加勢な訳だし、レインの仲間だ。

が、彼がここに居るのはレインたちとは別経由。

そのことを、彼らは知るはずも無い。しかし、ほぼ正解であるその推論は、そのまま信じてても何ら問題は無い程度には正答に近かった。「よし、辿り着いたぞ」

月明かりに照らされた夜闇が覗く階段を登りきった。

そこには 逆十字に四肢を括られた、ミチルがいた。

薬か何かで眠らされているのか、彼女が起きる気配は一向に無い。

「よお……遅かったな、アルサーヌ・リュパン、ジャンヌ・ダルク」その後ろから姿を現したのは、白銀の長髪を伸ばす優男だ。

しかし、今まで散々彼らを見てきた三人が、今更分らないはずが無い。

「お前がブラド・ツエペシュだな。ルーマニアの串刺公……悪評は聞いているぞ」

「文字通り生き血を啜る外道が」

「我らが罰を下してやる」

三人は各々の武器を構える。

しかし、対するブラドは余裕の表情だった。

「ほう、貴様ごときが、無限に値する罰を俺に与えると？ 滑稽だな」

『無限罪』ブラド 彼は嘲笑を浮かべた。

次の瞬間、彼の身体が膨張した。

黒い体毛が彼を覆い、二足歩行の狼のような姿となった。

第2形態への移行。

ブラドは近くにあつた金棒を手を取った。

「遠い東の国にはこんな諺がある。

『鬼に金棒』　ただでさえ強い鬼が、金棒など持ち出しては手が

つけれない、という意味だ。

お前ら程度で止められるかな？」

下卑た笑みを浮かべたブラドに、三人は無言で駆け出した。

まずは魔臓の位置確認が最優先。目玉模様を確認しながら、振るわ

れる金棒を避ける。

「ゲババババツ！」

ブラドは狙いをジャンに絞り金棒を振るう。

風を切りながら降り下ろされたそれに対し、ジャンは地面を凍らせ、横に滑ってそれを避けた。

降り下ろされた金棒は氷の張った地面を砕く。破片が舞い、それを縫うようにジャンが肉薄。そして、ブラドの腰を銀刀で切り付けた。
「ぐっ！」

やはり、銀での攻撃は多少回復に手間取るようだ。それでも回復する辺り、フリークスとの差が改めて感じられた。

だが、これで倒せるなどとはジャンも思っていない。

「頭！」

「了解！」

極短いやり取り。

しかし、双子たる二人の意志疎通には今の一瞬で十分過ぎた。

「はあああああ！」

ブラドに対し肉薄したジョーンが、長大な西洋剣、デュランダルを横一文字に振るう。

ブラドの首が飛び、鮮血が噴き出した。

しかし。

紅い血が煙となり、ブラドの頭が粘液にまみれた状態で生えてきた。

「やはり魔臓を潰さないと駄目か……」

苦い表情をするジョーンに対し、ブラドは余裕を浮かべている。

「魔臓の位置3つは確認出来た。」

残り一つを探るぞ………時間を稼ごう」

「了解した」」

三人は武器を構え、再びブラドに飛び掛かった。

第173弾 降臨する風神、悪鬼ブラド（後書き）

最近戦闘しか書いてない……

やっぱり吸血鬼は面倒すなあ。

魔臓四つ同時破壊とか（作者の技量的に）鬼畜でしょう。

まあ、使った自分が悪い訳ですがねWW

第174弾 奥義発現

第174弾 奥義発現

「有明式歩方式、『朧映し』」

悠香の言葉と共に、イーズの意識から悠香が消え去る。

「……………背後」

イーズが呟いた通り、悠香の姿は彼の後ろにあった。

投擲用ナイフを乱れ撃ち。

しかし、それらは全てイーズの短刀に弾かれる。

「まだです！」

グロツグをフルオートにし、連射する。

イーズは跳躍しそれを避けると、空中で回転、その勢いを利用して斬りつける。

悠香はそれをナイフで受け流し、彼の腹に握った拳を入れる。

「やああああああっ！」

そのまま手刀、足刀でイーズの間接を追撃し、反撃の暇を与えない。

「……………『絶』」

イーズが攻撃を意に介さず呟いた直後、彼の姿が消える。

「有明式歩方参式、『雨隠し』」

悠香も同様に姿を消した。

ギギギギギギギギン！

虚空に火花が散り、ナイフと短刀の奏でる金属音が鳴り響く。

ガキイン！

一際大きい音が鳴り、二人の姿が現れる。

「……………高速」

「貴方もね……！」

悠香はナイフをもう片方の手で回し、イーズに突き立てる。

一瞬間をしかめるも、イーズは悠香の腹を蹴り、距離を取った。

「（……このままじゃジリ貧かも）」

吸血鬼を倒す方法は、無限回復力の源、『魔臓』なる四つの器官を全て同時に破壊しなければならない。

多対一ならそれも可能だろうが、一対一では流石に難しい。

それでも可否は関係無しにやらなければなるまい。

悠香は月光が照らす空に跳び、銃を乱射した。

ギギギギン！

四発の銃弾が床を穿つ。

本来、武偵高三年Aランクでもかわすのは容易ではない奇襲に対し、イーズは慌てること無くそれを避けた。

イーズの回避能力は極めて高く、戦闘経験の浅い悠香の体感した中では、1、2を争うだろう。

彼を倒す方法があるとすれば

「（……っ、アレを使えば……！）」

見出だした可能性を、自ら首を振って否定する。

まだ未完成の奥義を使うには、相手の力量が高すぎる。

辛うじて渡り合えてる状態の今も、一瞬でも気を抜けば即座に肉の塊に解体される、そんな危うい境界の上なのだ。

切り札を^{ジョーカー}切れない状況に歯噛みして、それでも悠香は一切の油断を見せない。

ナイフを二本持ちイーズに接近。

対しイーズは短刀を突き出してくるが、勢いを殺さず屈んで避けると、懐に入り込みナイフを二閃する。

が、傷は浅く　深かろうが関係は無いのだが　イーズはさして顔を歪めるでもなく、悠香の肩に足を掛けて跳躍、距離を取った。

吸血鬼の体力は無限。

人間が長期戦をするにはあまりに分が悪い。女子である悠香は尚更

だ。

「……………接近」

イーズは着地と同時に地を蹴り、悠香に肉薄する。

悠香はナイフで短刀と斬り結ぶが、軸足を刈られて転んでしまう。

「ッ！」

空かさず、イーズが短刀で悠香の頭に刺突。

間一髪で首を捻り短刀を避け、悠香はグロツグをフルオートで連射した。

イーズは舌打ちしながら飛び退き、悠香も体制を建て直す。

このままではいずれ体力の差が影響してくるだろう。

やはり、奥義を使うしか

そこまで考えたところで、ようやく自分の失態に気づく。

イーズが、消えた。

「！」

一瞬以下の、儚い間。

その隙を目敏く発見したあの寡黙な吸血鬼は、悠香に気づかれる間もなく姿を消したのだ。

気配を拾うことも容易ではない。

悠香は自身も姿を隠すべく、有明式歩法肆式『雨隠し』を使用。

しかし。

「ッ！」

悠香の背に、短刀が突き刺さる。

歩法の際に生まれる、僅かなタイムラグ　そこを突かれた。

「……………悪癖」

指摘され、ぐうの音も出ない。

確かに、悠香は歩法の際に身体が一瞬硬直する癖があった。しかし、こうまで短いやり取りで見破られるとは思っていなかったのだ。

短刀を流血を防ぐため、尚且つイーズから目を離さないため、短刀を抜くことは出来ない。

「……………終了」

イーズは今までより長い小太刀を抜くと、痛みで足元が覚束ない悠香に斬りかかった。

悠香は目を閉じる。

このままでは勝てない。

ならば 使うしか無い。あの奥義を。

晴夜との特訓で、キンジとの組手や晴夜との模擬戦を幾度か行った悠香は、晴夜の初めの言葉がずっと頭の隅に引っ掛かっていた。

『有明の歩法の奥義、その会得手伝う』という話だった。

有明と親交があるとはいえ、奥義は易々と知れるようなものではない。

悠香自身ですら、その全容を知りはしないのだ。

それを知る晴夜に当初は猜疑の念を抱いていたが、彼の指導は的確だった。

彼の力量は確か。そして、夜雲の次期当主の情報を持ってすれば、このくらいの指導は可能なかもしれない。

「晴夜師匠、有明の奥義は何時教えて下さるのですか？」

「ん？ ああ、もう教えている」

「……………へ？」

啞然とする悠香。

対し晴夜は、大真面目に頷いた。

「修行だけじゃない。これまでのお前の生活全てが、お前を奥義に至らしめる要因足りうる意義を持っている」

それはどうということなのか それを問う前に、晴夜はキンジの指導をしに行っていた。

「……………変化」

イーズは、悠香の変化を察知した。

今まで明確に感じていたはずの彼女の気配が、消えた。

『消え去った』のではなく、まるで世界に溶けたかのように、全く違和感無く。

そこにいたのは当然なのに。

まるで、そこには何も無かったかのように。

悠香がいたはずの空間は、ただ夜闇が支配している。

「……………消失」

否。

消えたというのは、とんだ間違いだ。

彼女は未だそこに居る。

気配を全く感じないのに。

彼女はそこに居る、と確信めいたものが、確かに彼の胸中を占める。

矛盾。

しかし、事実。

イーズの覚える違和感の無い違和感は、彼を後退させるに充分な意味を持っていた。

「……………『絶影』」

自身が否定したはずの言葉が洩れる。

そう、正にそれを体現しているのだ。

世界から絶たれたように儚げで、それでいて影のように、絶対的に

世界に付随しているような。

「……………終わらせませぬ」

最早イーズには、その言葉がどこから降りかかってくるかも分からない。

世界と完全に切り離されて置きながら。

世界と完全に呼吸を合わせている。

「有明式歩法奥義 神隠陽」

悠香が、世界が紡いだ言葉が、吸い込まれるように耳に入る。

世界から独立し、世界と同化した少女の。

身体の内側に、痛み。

魔臓が破壊されたのだ、と言うのは予想が着いた。

イーズは地に膝を着き、存在が明白に感じられてきた悠香を見上げる。

「……………絶影承認」

どうやら、悠香を『絶影』を名乗るに相応しいと認めてくれたらしい。イーズは僅かに微笑みを見せ、意識を手放した。

『神隠陽』。

その極意は、究極の、『無我の境地』とまで呼べるまでの自然体にある。

自らを世界の一部とする。

それは同時に、自身を世界そのものとすることに他ならない。

本来、『仙人』等と呼ばれる人種のみが行えるこの奥義、使用が困難なのは言葉に現すまでもない。

現に、長い歴史を持つ有明家でも、その奥義を発現出来た者など両手の指程居たか否か。

それを齡15の少女が扱った等、初めてのことだろう。

自分のしたことこの規格外を認識していない悠香は、イーズに一礼すると、ミチルを救出すべく、再び屋上に向かった。

第175弾 天を裂く氷剣

第175弾 天を裂く氷剣

半獣化したメフィストが、超人的なスピードで接近してくる。

ジャンヌは氷の盾を形成し、身を屈めた。

「無駄だ！」

メフィストの猛禽類のように鋭利な爪は、容易に氷の盾を貫いた。

「それはどうかな！」

身を屈めていたジャンヌは直ぐ様デュランダルを振るい、メフィストの腕を切断しようとした。

しかし、メフィストはそれを軽く避け、ジャンヌの腹に回し蹴りする。

苦悶の表情を浮かべたジャンヌだったが、すぐに体勢を建て直しメフィストと距離を取る。

「どうしたんですかあ？」

私を調教するんじゃないじゃ無かったですかあ！？」

狂気染みた笑みを見せるメフィストは、地面を砕き礫を亜音速で投げつける。

ジャンヌはデュランダルと氷の盾でそれを防ぎ、接近してきたメフィストにカウンターの要領でデュランダルを一閃する。

「『オルレアンの氷花』」

青白い光が瞬き、冷気が一帯を凍らせる。

メフィストは空に逃れ、蝙蝠の翼をはためかせる。

「危ない危ない。しかし、その程度の攻撃が当たると思えますか？」

「ふん、この程度の攻撃を食らうようでは『鬼土団長』などと名乗るに値しないだろう？」

「……その威勢が、いつまで続きますかねえ！」

メフィストの腕から、鋭い刃が煌めいた。

急降下してくるメフィストは、風を切つて刃を振りかざす。

ジャンヌはそれをギリギリまで惹き付けて避けると、メフィストの翼にデュランダルを突き立てた。

「無駄無駄！」

しかし、傷は赤い煙をあげてすぐに塞がれてしまう。

ジャンヌは眉を寄せてデュランダルを引き抜くと、威嚇しながら距離を取った。

「デュランスの人形」

眩きと同時に、氷が人の形を作る。

ジャンヌの輪郭をそのまま真似たそれは、氷で出来たデュランダルを有している。

「ほう……面白そうですね。全て八つ裂きにしてあげましょう」

メフィストは向かってくる氷の人形に拳を振るう。

人形は一撃の元に砕け散り、その破片が地に落ちる。

しかし、人形は止まらない。

四方八方からの攻撃。

四つの魔臓を、それぞれ二ヶ所ずつから狙った攻撃だ。

が、メフィストはデュランダル擬きを素手で掴むと、人形を人形にぶつけて砕く。両腕に持った人形も、すぐに頭を砕いた。

一方的に、人形たちは蹂躪されていく。

その間に、ジャンヌは警戒を強める傍らでメフィストを倒す方法を模索していた。

魔臓を、四つ同時に破壊しなければ吸血鬼は無限に回復する。

ルーアンの槍やデュランダルとヤタガンを使えば、あるいは可能だろう。

だが、目の前で見せつけられるあの速度の前では、それも難しいならどうするか。そこまで考えた瞬間、人形は全て破壊された。

「さて、遊びを再開しましょうか」

メフィストを黙殺し、ジャンヌはデュランダルの柄を強く握る。

冷気が辺りを支配し　ジャンヌはデュランダルを凍てつかせ、氷剣により間合いを伸ばした。

「成る程、射程を伸ばした訳ですか。しかしそれは失策だと思いませんがね」

そう、射程は長ければ長い程、連撃には向かない。

四回、ほぼ同時に攻撃しなくてはならないジャンヌがその機をみすみす逃すのは、誰の目からみても失敗だった。

「心配するな。貴様を倒す策ならある」

「……戯れ言を！」

地を蹴るメフィストに、ジャンヌはカウンターの要領で、魔臓を狙い打突した。

が、メフィストは翼をはためかせ、速度を失わないままジャンヌの懐に入り込んだ。

「！」

「遅い！」

ジャンヌが回避行動を取る前に、メフィストは彼女の左腕を斬りつけた。

「く……！」

ジャンヌは痛みを耐え、メフィストを蹴り飛ばして地面に転がり、なんとか間合いを取った。

「……？」

ジャンヌは衝撃を受けた左腕を押さえて苦悶の表情を。

対照的に、メフィストはジャンヌを見て驚愕していた。

確かに彼は、ジャンヌの腕に相当なダメージを与えた。しかし、ジャンヌの腕は切れるどころか、服さえ破れていない。

武偵高生徒が標準で装備している防弾・防刃制服、それを知らないメフィストが警戒を強めたのは至極当然の話ではある。

ジャンヌはデュランダルを下段に構える。

思考する暇なく接近してくるジャンヌに舌打ちしながら、メフィストは腕を交錯させた。

そのまま、突進してきたジャンヌに合わせて刃を振るう。
右手はデュランダルと斬り結び、左手はジャンヌの足を斬りつけた。
間一髪、後ろに跳んで避けたジャンヌだったが、その細い足からは
血が滲み出していた。

「……」

ジャンヌは氷で傷口を覆い、出血を止める。

それを注視していたメフィストは、何となくだが理解した。

「成る程、君のその服は刃を防ぐ鎧なのですね。」

それなら話は簡単だ……そこ以外を狙えば良い」

メフィストは刃を構える。

狙いは 首。

少女の命を刈るべく、極限まで研ぎ澄まされた殺気は、彼女に警戒
を持たせるに充分なモノだ。

「私は君を殺す。容赦はしない……!!」

「……面白い。私も、貴様に応えよう」

ジャンヌのデュランダルに、冷気が収束されてゆく。

「『コンピエーニュの花束』」

冷気を纏ったデュランダルが、夜闇に一条の青い光を描く。

「『クルス・エツジ』」

白銀の二閃が、ジャンヌのデュランダルを迎え撃った。

ガキイーン!

鳴り響くは、互いの刃が交錯した証。

「……惜しかった」

メフィストの身体から、真一文字に赤い線が走る。

そして

ジャンヌは、片膝をついた。

腕を押さえる。

首を狙った一撃を防いだは良いが 防刃制服を切り裂き、左手の

臆をやられた。

剣は握れない。

右腕だけでメフィストと斬り結ぶのは、些か無理があった。

メフィストの傷が、赤い煙を発し回復していく。

「終わりです、『謀略の氷神』。

貴方の敗因は唯一つ……我々（きゆうけつき）が相手だったことです」

確かに、ジャンヌの一撃は常人ならば倒れていた程の威力を有していた。

しかし、無限回復を持つ吸血鬼の前では、喻え致命傷を負わせたとしても無意味なのだ。

頭を垂れ、上を仰ぎ見ることすら出来ないジャンヌに　メフィス

トは、刃を降り下ろした。

ザクッ。

そんな小気味良い音が響き　メフィストは、目を見開いた。

ジャンヌの姿が、崩れる。

氷　！

そう判断した刹那、背後からの声。

「『ラ・ピュセルの檻』^{おり}」

メフィストの足を、翼を、氷が地面に縫い付ける。

「しまっ……！」

「終わりだな。」

貴様の敗因は唯一つ　」

ジャンヌは、皮肉気にメフィストと同じ言葉を紡ぐ。

「吸血鬼　人間の上位種であると、その傲りだ」

天高くデュランダルを掲げたジャンヌは、勝利を告げるその剣の名を呼ぶ。

「『エクスカリバー』」

天が、裂ける。

夜闇に暗雲を呼び、その中から現れるは白銀の剣。

身動きの取れないメフィストの元に　それは、降り下ろされた。

「案ずるな。命までは取らない。」

ただし、貴様は永久に氷の彫刻となる……それだけだ」
後に残ったのは、氷の花。

中には、強制的に時を止められた、憐れな吸血鬼の姿が。

「『エクスカリバー』……触れるモノ全てを凍てつかせる、最強の
剣だ。」

まあ、当てるのは至難の技だが……油断してくれて助かったぞ」

ジャンヌは弧を描くようにデュランダルを振ると、静かに、ゆっく
りと、彼を弔い、祈るように鞘に納めた。

「　賞賛しよう、第4師団長メフィスト。そして、謝罪しよう。」

貴方の力は、間違い無く私を越えていた。

私が勝つには、挑発し、弱者を装い、貴方の油断を誘うしか無かつ
たのだ。

「済まない」

騎士でありながら、策士であるジャンヌ・ダルク。

彼女は相反する二つの理念の合間で、それでも勝利を渴望する。

彼女は踵を返し、メフィストに背を向けた。

第175弾 天を裂く氷剣（後書き）

ついに原作キャラに魔改造の手がWW
さて……次は誰だ！？

綾瀬

「和気藹々と言ってる場合じゃないわよね」

プーモ

「おや綾瀬さん、今どこに？」

綾瀬

「それ言ったらネタバレよ。秘密」

第176弾 無限の銃弾

第176弾 無限の銃弾

ダダダダダン！

三点バーストを二丁拳銃で放ち、アリアはカイゼルの足の臍を撃ち抜いた。

膝を落とし、カイゼルはその場に倒れ伏す。

「おのれええええちよこまかとおおおお！」

怒りに任せて、長大な鎚を乱暴に振るう。

とんでもない質量を片手で振り回す辺り、彼（女？）はパワーファイターなのだろう。

自分より身体の大きい相手と幾度も戦ってきたアリアにとって、単純な相手だった。

小回りの効く自分が機動力で翻弄し、逆に鈍重な相手には足を攻撃し、機動力を削ぐ。

アリアの、大柄な相手に対する必勝パターンだった。

しかし、この大男相手にはそうはいかない。

膝の傷は、赤い煙を上げて回復した。

吸血鬼に、生半可な傷は無意味。

倒すためには、魔臓を全て攻撃しなくてはならないのだ。

「（弾は後……3発ずつね）」

両のガバメントに入る銃弾の数は計16発。内10発は使用したので、残りは6発。

魔臓を破壊するには事足りるが、それ以外で2発しか使えないのは心許ない。

が どうやらそんなことを言っている余裕も無いようである。

「らああああ！」

カイゼルは雄叫びをあげると、巨大な鎚を投擲した。
唸りを上げ迫る鎚。その速度は、到底避けることの出来るモノではない。

「ッー！」

アリアは仕方無く、再び両のガバメントを三点バーストで放つ。正確に軌道を逸らし、鎚はアリアの遥か後方の地面を破碎した。アリアは予備の弾倉を懐から取りだそうとする。

腰に手を伸ばしたところで、目の前に影。
反射的に飛び退き、拳の一撃を避けた。

拳はつい先刻までアリアがいた空間を切り裂き、地面を砕く。
瞬時に右手のガバメントを上空に放り、背中の日本刀で礫を弾いた。そして、カイゼルの足を左手のガバメントで撃ち抜き、マガジンを吐き出す。

残弾の無い左手のガバメントをホルスターに仕舞うと、即座に日本刀を左手に移し、先刻上空に放り投げたガバメントをキャッチする。そして動けないカイゼルに、追撃の三点バースト。

回復した両目を再び穿ち、視界を塞いだ。

痛みに叫びをあげるカイゼルを他所に、アリアは柱の陰に隠れてガバメントの弾倉を挿し替えた。

「(さて、どうしようかしら)」

アリアは溜め息混じりに、怒り狂う吸血鬼を見据える。

脳髓を撃ち抜こうが倒せない相手だ。どうにか四ヶ所に銃弾を当てなければなるまい。

「(仕方無い……まだ上手く出来るかは分からないけど)」

アリアは決心し、暴れまわるカイゼルの目の前に再び姿を現した。

「殺す……！」

最早、怒りが一周回って冷静さを取り戻しているようだ。

言葉遣いは荒々しいままだが、その闘気は鋭利な刃物を思わせる。

り足蹴にし、さらに舞い上がる。

そしてガバメントをホルスターに仕舞い、二刀流でカイゼルの頭を切り裂いた。

「が、あああああああ！」

血が滝のように溢れ出すのを無視し、アリアはカイゼルの後頭部を蹴り着地。

「許さん……許さん許さん許さん許さん許さん許さんぞおおおおおおお
お！」

カイゼルが鎚を掴む。

「ぜあああああ！」

再び、投擲　！

先より強いそれは、アリアに銃弾を惜しむことの非を告げる。

ギリギリ4発が残るよう、三点バースト×2でどうにか鎚を弾いた。
が。

「さっきと同じ技と思ったか？」

鎚の陰に隠れ、カイゼルは接近していたのだ。

「一丁あがりい！」

カイゼルは拳を振り上げる。

幾ら俊敏性に分があるとはいえ、この速度の攻撃を避けるのは無理だ。

銃弾で腱を撃てば、あるいは防げるだろう。

だが　今、アリアが持つ銃弾は4発。丁度魔臓の数ギリギリだ。

替えの弾倉はもう無い。

今撃てば魔臓の破壊は叶わないだろう。

二つに一つ。

カイゼルの攻撃を食らってチャンスを繋げるか。

カイゼルの攻撃を防いでチャンスを棒に振るか。

アリアの選択は早かった　初めから、決まっていたかのように。

アリアは、ガバメントの銃弾をフルオートで吐き出した。

4発の銃弾が、カイゼルの両手・両足の腱を穿つ。

「くく……くくく、あはははっ！

そっだよ！ 人間は所詮、我が身可愛さに他人を切り捨てるような存在なんだよ！」

痛みすら無視して、心底楽しそうに笑うカイゼルを見て……アリアは、キョトン、とした顔を見せる。

「アンタ、何言ってるの？」

「……………は？」

「アンタ、何か勘違いしてない？」

深く溜め息をついて、アリアはカイゼルをキツと睨み付けた。

「銃弾を全部使いきったから、私がアンタに勝てないとも？

……………教えてあげる。

この勝負、アンタは私に勝てない」

アリアの、あまりに物怖じしないその言動に……カイゼルの中で、何かが切れた。

「……………この、糞餓鬼がああああああ！」

調子に乗りやがって調子に乗りやがって調子に乗りやがってえええええ！」

怒り狂うカイゼル。

彼は、より力を込めるために両手で鎚を振るう。

「あがあああああ！」

狂気の叫びをあげながら、カイゼルはアリアに鎚を降り下ろす。

アリアは鮮やかな動きでそれをかわし、鎚に飛び乗った。

銃弾の入ってないはずの、両のガバメントの引き金を引く。

ドドドドッ！

聞こえるはずのない銃声が四度、響き渡り あるいはない4発の銃弾が、カイゼルの魔臓全てを撃ち抜いた。

「……………馬鹿、な」

カイゼルは力を無くし、崩れ落ちる。

銃弾を全て失ったはずの、アリアの4発の銃弾。

カラン、と地面に落ちる薬莖を見て、カイゼルが狼狽の声を漏らし

た。

「スカートレット緋色……！」

そう。緋緋色金を有するアリアの、新たな力。

『無限の銃弾（Infinite scarlet bullet）』。

色金の規格外の力で、文字通り無限に緋色の銃弾を生成出来る超能力。

イメージが重要なので・45ACP弾しか生成出来ず、緋天・緋陽門のような威力が無いのが欠点だが、それでも通常の銃弾と変わらぬ性能を持ち、加えて弾倉を替える必要が無いという利点を持つ。

まさに『無限の銃弾』。

緋色の髪の少女は、敵に止めを刺さない。

敵を一瞥すると、ガバメントをホルスターに納め、お腹を押さえた。

「ステルスやっば超能力って、お腹空くのね……」

しかし、彼女の好物たる桃まんはこの時代には無いだろう。

彼女は不満そうに、それでも急ぎ足で最上階へ歩を進めた。

第176弾 無限の銃弾（後書き）

今回の魔改造は、ピンクちびっこツインテールことアリアさんでした〜！

アリア

「誰がちびっこよ〜！」

まあまあ。強くなったんだから良いじゃないですか。

アリア

「まあ、確かにそれはそうね。これで弾に心配しないで、キンジたち風穴空けられるわ！」

第177弾 必殺の一撃

第177弾 必殺の一撃

「ひやははははあ！

どうした！？ 俺様を一撃で倒すんじゃないかなかったですかお姉さん！？」

ジークは翼を翻して、ドラグノフを構えたまま走るレキを一瞥した。「はい。ですから、タイミングを図っているのです。貴方を一発の銃弾で倒せるタイミングを」

それに反し、至極冷静に、淡々と答えるレキ。

彼女の集中が高まる一方で、ジークの怒りのボルテージは上がっていた。

「余裕ぶっこいてんじゃねえぞ、糞女あ！」

汚い言葉で罵りながら、ジークは鉤爪を構え、レキに向けて急降下。翼で空を切りながら、レキに降り下ろした。

対しレキはそれを前に転がって避け、ジークには目もくれず走る。

その行動に、更にジークの怒りが膨れ上がった。

「チヨロチヨロ逃げんじゃねえ！」

鉤爪を振り上げ、レキに迫る。しかし彼女は、彼の爪を避けて手首を掴み、足払いで体勢を崩れさせる。

「なっ！？」

予想外の攻撃に面食らい、あっさりと地面に仰向けになる。

撃たれる。

死にはしないものの、顔などを吹き飛ばされればかなりの痛みが来る。

反射的に目を閉じながら、それでもジークは来るであろう銃弾に耐えようと歯を食い縛った。しかし……

その速度は途轍もなく、目で追うことすら用意ではない。

「さて、この俺様をどうやって一発の銃弾で倒すってんだあ!？」
当然、レキの返事が返ってくるはずもない。

「来ないなら……こっちから行かせて貰うぜえ!？」

ジークは口角を吊り上げると、その鋭い瞳を見開いた。

鷹の眼は獲物を捉えるために機能が発達している。その『優良な遺伝子』を吸血によって得たジークもまた、その恩恵を授かっていた。

「……………そこかあ!」

ジークはレキを発見するや否や、その方向に翼を一振りする。

シユン!

風を切り、鋭い刃のような羽根が、高速でレキに向かう。

レキは大きく迂回、回避しながら手近な木箱に隠れる。

「無駄だあ!！」

しかし、ジークが更に翼を振ると、幾つもの羽根が木箱に向かう。

それは易々と木箱を貫通し、内一本がレキの肩に、内一本がレキの腹に当たった。

腹の方は防刃性の制服が防御してくれたが、肩の方は勢いが強かったのか、貫通して僅かに突き刺さっていた。

「……………」

レキは一瞬顔を歪めながらも、すぐさま何時もの無表情に戻り、肩に刺さった羽根を抜いた。

「どうしたよ!？ ビビって何も出来ないのかあ!？」

ジークは黙ったままのレキに、更に羽根を連射する。

羽根の数が減った様子は無い。吸血鬼の無限回復力で補っているのだろう。

だとすれば、弾数は無限と考えて差し支えないはずだ。

レキは壁の後ろに隠れ、ドラグノフを両手に持った。

「……………」

その眼が見る先は……先の、木箱の山。そこに突き刺さる、ジークの羽根だった。

「ちい……ウロチヨロ動き回りやがって……！」

舌打ちしたジークは、レキの様子を窺う。

どうやら、羽根に攻撃される危険を感じて防御に徹しているようだ。

だとしたら。

「甘え甘え。俺様の攻撃が羽根だけな訳ねえだろうが」

ジークは獰猛な笑みを浮かべると……レキの隠れている木箱に向かった。

風を切る音にレキも反応し、敵の接近を察知、すぐさまその場を離れる。

向かう先は、先の木箱の山。

「何だあ！？ また俺様の羽根で串刺しになりてえのか！？」

ジークは高笑いして、翼を振るう。羽根が幾本も弾丸のように飛び出す。

内一本が、レキの足を穿った。

「……………」

苦悶の表情を浮かべて、レキはその場に倒れた。

「はっ、良い様だなあ銃神！ てめえごときが俺様に敵うなんて夢見るから、そんな羽目になんだよ！」

ジークは一歩ずつレキに近づいていく。爪が月の光に反射し煌めいた。

「終わりだ！」

ジークの爪が、高々と振り上げられる。

瞬間

レキは振り向き……それを投擲した。

「（俺様の羽根！？）」

そう、剃刀の如き鋭さを持つ……ジーク自身の羽根。

レキは、食らった羽根や近くに落ちた羽根を拾って、持っていたのだ。

「ちっ！」

ほぼ条件反射でそれをかわす。痛みにも目を閉じ、その隙にレキが逃げのを防ごうという意図。

しかし、今回ばかりはその考えは失策だった。

「私を導く光」

レキの、狙撃の際の詩が紡がれる。彼女の鳶色の瞳が見開かれた。

「私には何も無い。どうすれば良いか分からない」

彼女の瞳には、これから銃弾が描くであろう軌跡が、白い光の道となって映っていた。

「ならば、私は導かれるまま、この引き金を引こう」

時が止まったかのような錯覚。レキは静かに、指を引いた。

「この銃弾は、貴方がため」

タン

恐ろしく、静かで美しい銃声。

放たれた銃弾は空に螺旋を描く。

その銃弾は先ず、ジークの振り上げた右腕の魔臓を破壊した。

続いて 先程投擲し、木箱に突き刺さったジークの羽根に衝突。

銃弾は火花を散らしながら跳ね返り、ジークの右大腿の魔臓を穿つ。

更に、先のジークの乱れ撃ちの際、地面に突き刺さった彼の羽根に

再び跳ね返り、彼の左肩の魔臓を撃ち抜く。

最後に、もう一本の投擲した羽根に反射し ジークの胸の中央、

その魔臓を穿った。

この間、一秒半。

四つ同時に破壊しなくてはならない魔臓だが、治療のタイムラグで、実際には二秒遅れまでに破壊すれば済む。

そこで、レキは『跳弾狙撃』^{エル・スナイプ}の応用編……名付けるなら、『三重跳弾狙撃』^{スナイプ}と言ったところか。

それにより、寸分の違いも無くジークの魔臓を全て撃ち抜いたのだ。

「ば……バカな……この俺様が、人間如きに」

「言ったはずです。私は貴方を倒すと」

レキはドラグノフを担ぎ直すと、ジークに背を向けた。

「……じゃあ、もし俺様が羽根を使わなかったら、どうしてたつもりだ!？」

そう……今回の戦闘、レキが一発の銃弾でジークを倒せたのは、彼自身の羽根を利用したから。ならば、彼の羽根が無ければ彼女はどうしていたのだろうか。

「喩えそうだとしても、私は唯一発の銃弾で貴方を撃ち抜いていました」

レキは再び、ドラグノフの引き金を引いた。

タアン

銃弾が放たれる。

そして、それはジークの羽根に反射し……また別の羽根から跳ね返る。

ギギギギギギン!

全ての羽根に銃弾を反射させて見せたレキは、最後に、一言だけジークに言葉を投げた。

「私には大切な人がいます。

彼は私よりずっと強い　あの人のそばにいるために、私は強く在り続けるのです。

悪戯に破壊するだけの力に、負ける道理はありません」

レキは言い残すと……隠れさせていた平賀の下へ向かった。

第177弾 必殺の一撃（後書き）

プーモ

「レキはそこまで魔改造されてなかったね〜」

レキ

「はい」

プーモ

「まあ、原作をなるべくブレイクしないようにという配慮だよ
レキ

「そうですね」

プーモ

「（無口……！）」

第178弾 五行星

第178弾 五行星

「『ガイアランス』」
ルシアという少女が両手を地面に着くと、その間から土の槍が形成され、静奈に襲い掛かる。

対し静奈は『天衣無縫』でそれを防ぐと、ルシアに水流の弾を放った。

「『ガイアウォール』」

しかし、今度は土が盛り上がり、彼女の前に屈強な岩盤が立ち塞がった。

「（土属性の超能力者が……！）」
彼女が一階に配置されていたのも得心が行く。

土属性の能力者は水上・空中などでは全く効果を発揮しない代わりに、地上では相当な強さを誇る。

静奈は舌打ちしつつも、打開策を練る。

土属性の能力者に対するなら、雷や風……レインやアレックスが望ましいところだが、それも言っていられない。

「食らえ……！」

水ど幾本もの槍を形成、八方からルシアを狙う。

「『ガイアボール』」

しかし、ルシアがまたも両手を地に着くと、彼女を守るように球状の壁が出来た。

「ならば……これでどうだ！」

静奈は水流を鞭のようにならせ、亜音速で振り抜いた。

時速80キロで水面に直撃すると、ビルの七階からコンクリートの地面に落下するに相当する衝撃が与えられるという。

その速度の三倍以上の速さで振られた水流の鞭は、いとも簡単に岩壁を打ち砕いた。

「！」

「終わりだ！」

岩壁を砕かれた驚愕と、破片の礫によるダメージからか、ルシアは動けない。

静奈は水の水槍を四本形成すると、彼女の魔臓に向けて突き出した。速度、正確性共に申し分無い四つの刺突は、ルシアの魔臓全てを貫く、はずだった。

が 水槍が彼女の身体を貫いた、瞬間。

「！？」

静奈はようやくと、気づいた。

手応えが無い。

彼女の身体が、ぼけて見えなくなっていく！

「ッ！」

それに目を囚われること数秒、静奈は背後からの気配に、反射的に天衣無縫を展開、土槍による一撃を防いだ。

「……素晴らしい反応ですね。私が未熟だったのもありますが、あれを避けられるとは思いませんでした」

「お誉めに預かり光栄だ。しかし、お前程の実力で未熟と言われたら私は軽くシヨックだぞ？」

軽口を叩きつつも、静奈は水流を一本に纏めて、水槍を形成、突き出した。

「（さあ、どうくる？）」

ルシアの土壁による防御は、静奈の攻撃を防ぎ切れない。ならば、先の水槍をかわした方法を取るのか。

ルシアは襲い掛かる水槍を。

水槍で、相殺した。

「な……！？」

驚愕に、静奈の身体が硬直する。その一瞬を見逃すルシアではない。

「『ファイアブレード』」

両手に炎の刃を顕現し、静奈に斬りかかった。

「余所見は禁物ですよ！」

「ッ！」

静奈は咄嗟に水の盾を作り、同時に戦扇『蓮華』を展開する。

「お前、何故複数の超能力を持つている!?」

元来、人間が有する超能力は一種類。吸血鬼と言えども、それは変わらないはずだ。

「私はかつて、超能力者の血を飲み漁りました……その際、その方たちの超能力が私の中に紛れ込んだのでしょう」

成る程、静奈はやつかみながらも得心がいった。

『教授』シャーロック・ホームズが纏めあげた組織……『イ・ウー』。

そこで行われていた超能力の写し合い、それに拍車を掛けたのがイ・ウーNo.2、『ドラキュラ』ブラド・ツエペシュだったはずだ。

ドラキュラの、血を飲むことによる優良な遺伝子の獲得。

それが応用されたからこそ、シャーロックのあらゆる超能力を使用する、という力が手に入ったといっても過言では無い。

「なら、お前の本来の力は何なんだ？」

「教えると思いますか？」

「……思わない」

「はい、教えません」

それはそうだろう。

弱点になり得る情報を、何故みすみす敵に教える必要があるのか。

「まあ、知ろうが知るまいが関係無いがな……お前を倒して、それで終わりだ」

啖呵を切った静奈は、戦扇を開いたままルシアに肉薄する。

彼女は慌てず土を隆起させ、防御の体勢を取った。

ウォータースライサー
『水流破斬』

横薙ぎに、水流が一閃する。

易々と岩壁を切り裂いたその一斬は、姿勢を低く保っていたルシアには当たらなかった。

しゃがんだままのルシアが両手を合わせると、接合部から光が漏れだし始める。

「『サンダーランス』」

輝く槍のような形状の超能力の塊。

彼女はそれを大きく構えると、投擲。

ビュンッ！

当たれば死、掠めれば感電の二重攻撃。槍は視認が困難な程細かく、そして速く振動しており、殺傷力が窺えた。

天衣無縫で防ぐのは無謀。

戦扇で防ぐのは最早論外。

ならば、と静奈は槍を水流で絡めとり、勢いを削いだ。

「失策だったな。水属性の能力者に対し、雷を使うとは」

静奈の操る水流は、電気を帯びて音を立てていた。

今や強力なスタンガン付きの鞭、という言葉が相応しい。否、形など幾らでも変えられる分、鞭より性質が悪い。

「……大丈夫です」

しかし、その凶悪兵器相手に、ルシアは一切の物怖じを見せない。

「……大丈夫です。自分のミスくらい、取り戻せます」

彼女の周りに、静奈と同じ水流が現れる。その鞭のようにしなる一本一本には、勿論電流が流れていた。

「（私も私と同じ術を使えるのか……なら、私は絶対的に不利だな）」

あくまで客観的に、自身の概況を確認する。

同じ術を、同じ出力で出せるのなら　成る程、地力、体力に勝る方が勝つだろう。

しかし、今回、敵には未知数の超能力が幾つもある。ならば

「（使うしかない……あの奥義を）」

彼女に対抗するためには、それしかない。

静奈は大きく息を吸い……両手の扇子を開いた。

「奥義 『五行星』」

静奈の下の地面に、光る五芒星が描かれる。

異様な気配に、ルシアが警戒し止まった、その瞬間。

彼女の四肢が、何かに絡め取られた。

「木 ……!?!」

そう……枝や、根といった部分が、突如ルシアの後ろに現れた大木から伸びていたのだ。

「『水生木』」

ルシアは、術者であろう静奈の方を見遣る。

まさか、吸血鬼でもない少女が多種の超能力を扱うなど、彼女には考えられなかったのだろう。

「『木生火』」

彼女が唱えると……彼女の両手から、先のルシアと同じ、火の刀が現れる。

「どうして……!?!」

「……簡単な話だ。」

日本には古来から、陰陽道などで五行の相生というモノを研究しているな」

五行、その中での相生とは……簡単に言ってしまうえば、火、木、水、金、土の五属性は、それぞれがそれぞれを生み出せるということだ。金の表面に、凝結した水ができ。

水は木を育て。

木は燃えて炎を生み。

炎は燃やした灰を土に還し。

土からは金が取れる。

即ち、五行の相生。

まだ静奈も完璧に会得した訳では無いが、かつてこれを修めた者は、あらゆる属性を使用出来たという話だ。

結果として、朝露には水の超能力者が多いが、朝露の分家には炎の

超能力者、土の超能力者も少なくないそうなのだ。

「ともかく……私のこれは、全て水から生まれたもの。単一の超能力と捉えた方が正確だ」

それに……彼女の現状を言えば、水を別の属性に変えると酷く操作性が落ちる。

そのため、実戦では滅多に使える代物ではなかったのだが……

「私には、共に競いたい仲間ライバルがいる。負ける訳にはいかないのだから……今回は勝ちを譲って貰うぞ」

土壇場で、それでも好く男のために、共に頑張る仲間として、囚われた少女を救わなければならない。

「済まない」

彼女は……炎の刃で、ルシアの魔臓を全て貫いた。

「……何を謝る、必要があるんですか……」

魔臓を刺され、満身創痍な少女は、目の前に立つ凜とした少女に疑問の言葉を送った。

「……何でだろうな」

答えはでそうも無い。

静奈は長い瞬きを一つ入れ　その場を、走り去った。

第178弾 五行星（後書き）

プーモ

「静奈がチートっぽくなってきた」

静奈

「多属性を操れるだけだ。まだ3属性だしな」
レイン

「水のイメージが強かったからねえ」

静奈

「威力・正確性共にメインはあくまで水属性だ。他の属性は支援用だぞ」

第179弾 鬼殺し

第179弾 鬼殺し

「アハハハハハ！ 良いよ君！ サイツコー！ 血が沸くような戦いだ！」

「そりやありがと、吸血鬼さんツ！」

理子はやむ無くワルサーを二丁構え発砲するが、メビウスの両腕に当たると、火花を散らして弾かれてしまう。

「鉛弾はウチには効かないよお！？」

彼女の硬度の前には亜音速で放たれる銃弾が通らない。

「どんな身体してるんだ……！」

知らず知らずの内に、理子は裏理子モードに入っていた。それでも、額の汗は消えてくれない。

「君は強いから、特別サービスで教えてあげる！ ウチの両目、これは『魔眼』なんだよね！ 『視た』ところを『硬化』出来る、魔術付きの眼なんだよ！」

「へえ……そりや厄介な能力だ！」

口調は軽いが、実際に相当な難敵だ。

硬化魔術 現代の超能力には、極めて珍しいスキルだ。

基本的に、五属性や七属性に属する攻撃重視の属性系能力に対し、自身の強化や速度操作、星伽の鬼道術などが当てはまる付属系能力は至極珍しい。

それも、銃弾を弾ける程の硬化魔術（超能力）を瞳に宿していると、本来あり得ないようなことだ。

「……もしかして、その眼」

「分かった？ そう、これ私の眼じゃないんだよね。ブラド様が私にくれたもんだ」

ブラド。

かつて、自分に非道な仕打ちをした者の名が出て、理子は僅かに身体を強張らせた。

「隙、見つけ」

「しまっ……！」

メビウスの硬化された腕が、理子の脇腹に打ち込まれた。

「ぐっ……！」

メキメキ、と骨が嫌な音を立てる。その間に、彼女の身体は遙か後方まで飛ばされていた。

理子は痛みになんとか耐えながら受け身を取って衝撃を逃がす。

「へえ、残ったか。見た目より丈夫そうで何よりだよ」

「ふん……このくらい、金槌で頭叩かれるのに比べれば、蚊が止まつたみたいなものだ」

確かに、理子はかつてブラドやヒルダから受けた、虐待という言葉すら生温い暴力を受けて、痛みには馴れていた。

しかし……今のばかりは、唯の強がりとしか良いようが無い。

「（右の肋骨……四本は逝ったかな……？）」

脳髓が痛みの警鐘を鳴らす。

身体の中に走る電撃のようなそれを無視し、理子はワルサー二丁を天上天下で構え、その引き金を引いた。

メビウスは、硬化魔術は魔眼によってもたらされるっ言っていた。ならば、一度に見れぬ部位を攻撃すれば良い。

それが、理子が至った結論。

しかし

「甘い甘い」

メビウスは、魔眼で自身の両手を視て、その両手で銃弾を弾いた。

「おー、いてて。速すぎて掴めないな」

しかもどうやら……彼女は、銃弾を掴もうとしたようである。

加えて、硬化しているとはいえやはり衝撃は殺し切れない。

様々な情報が手に入ったが　やはり、一番重要なのが魔眼の発動

範囲だろう。

「……そうかそうか。なら、私の勝ちだ」
不意に、理子は不敵な笑みを見せた。

対しメビウスは、訝しげな表情を見せる。

「無理をするな。骨が折れてるはずだ」

「それがどうした？」

敵の情けは受けない、とばかりに理子は頑なな態度を取る。

メビウスには、それが腹立たしいというよりは、理解が追いつかなかった。

「分からないな。君は足止めだろう？ 君が勝たなくとも、上にいった彼女やお仲間が少女を救出すれば、それでいいじゃないか」

そう……メビウスの主張は最もなもの。理子は、メビウスに負けなければいいのだ。

「（ま……あの少女のレベルでは、ブラド様に勝てるとは思わなかった）」

メビウスの心の内の言葉などいざ知らず、理子は先の問いに答える。

「私は、吸血鬼という種が嫌いだ」

紛れもない、理子の本音。
事情を知る者なら誰もが予想出来るであろうその言葉は、自分にあらゆる肉体的・精神的苦痛を与えた一族に対するものとしては、当然の感情だ。

しかしそれでも、メビウスは戦慄する。

彼女の言葉に、ではなく。

彼女の、眼。

魔眼を持つ彼女でさえゾツとするような、復讐の炎を思わせる瞳。

『事情』を知らないメビウスにとっては、理子の感情が理解出来ずにいた。

そんな彼女に、説明するように……理子は、口を開く。

「私は、幼い頃ブラドに監禁されていた……あらゆる苦痛を与えられた。」

私はブラドが許せない」

……ブラドが、人間を虫けらの如く扱うのも、優良な遺伝子の子供を監禁することがあるのも、メビウスは知っていた。

しかし……彼女の瞳から放たれる、哀しみと怒りがない交ぜになったような、言い知れぬ感情は、彼女が度し難い仕打ちを受けたことを如実に物語っている。

ならば　自分は、どうしたらいいのか。
メビウスは迷っていた。

彼女の今の感情を知っていたのなら、理子もここまで、全ての吸血鬼に対する嫌悪感は抱かなかっただろう。

彼女がしているのは、自分の子を人間に殺された猛獣が、人間全てを恨み、敵視するのと同じの意義を持つ。

しかし、理子はそれに気づかず　いや、気づいていたとしても。止まらないし、止められない。

「私はかつて、ブラドから逃げることを考えていた。私ごときが、敵うはずがない、と。」

しかし……私には、手を差し伸べてくれた男がいた。闇から救いだしてくれた男がいた。

だから、その男に報いるために……私は、戦うと決めたんだ」
そう語る理子の顔は、どこか清々しく　とても、幸せそうだった。

「成る程、な……どうやら止めても無駄らしい。なら……ウチも本気で行くぞ」

彼女は眼を閉じ、大きく息を吸った。
そして　魔眼を発動。自身の両手を硬化した。

「この魔眼は、眼を休ませれば休ませるだけ、威力が上昇する。
今のウチの腕は、ダイヤ以上の硬度を持っている」

「……幾ら硬くても、私には関係無い」
理子はツインテールに結んだ髪を解き、ロザリオの力を使用。

6つに別れた髪の手は、それぞれ大振りのナイフを持っていた。
「これで終わりだよ、メビウス。私は、吸血鬼を最も恐れた人間。」

故に 吸血鬼を殺すことに長ける」

「……出来るものなら！」

メビウスは足を視て硬化、地を蹴り、砕く。

さながら疾風の如き速度で肉薄するメビウスに対し、理子も二束の髪をバネのようにして地面を押し、自らをメビウスに接近させた。

メビウスの、ダイヤすら壊す拳が理子に迫る。

しかし 理子は、髪二束でその両腕を掴んだ。

「幾ら硬くても、当たらなければ意味は無い」

正にその通り。

喻え一撃で敵を倒す技でも、命中しなければ効果は発揮されない。

が、攻撃が当たらないことを予想しない程、メビウスは無用心ではない。

「はぁ！」

彼女は、先程硬化した足で、理子の折れた脇腹を抉る。

「ううあああッ！」

あまりの激痛に、理子は狂気の叫びをあげる。

勝った、メビウスは思った。

しかし。

理子の眼は、まだ死んでいなかった。

「……終わり、だ……！」

理子の髪のナイフが、メビウスの魔臓を貫いていく。

「（いや……ウチの勝ちだ）」

今度こそ、メビウスは勝利を確信する。

彼女は、自身の右胸の魔臓を、視認して硬化していたのだ。

理子のナイフでは、それを貫けないのは確認済み。

故に、彼女は魔臓を破壊されることなど無い、そう考えていたのだ。止めを刺そうと、腕に力を込めた、刹那の出来事。

身体のが、抜け落ちた。

「な……！」

まさか。

自分の右胸を視る。

そこには

理子の栗色の髪に貫かれた、自身の目玉模様。

「……そうか、その髪……」

「そう。この髪にも、硬化魔術が掛かってるんだ」

初代リュパンと、同じ。

「……まさか、ナイフがフェイクだったとはな……完敗だ」

メビウスは、満足そうな表情をしたまま眼を閉じ、倒れ伏した。

「……………」

理子は彼女を一瞥する。

果たして、吸血鬼でありながら、戦いに殉じた彼女を恨んでいいのか、葛藤しているのだろう。

彼女は首を振ると、前に向き直った。

「（……私の標的は、今はブラドだけだ）」

気持ちを新たに、少女は駆け出した。

第180弾 『新』

第180弾 『新』

刀身から滲み出るような薄い焰。

しかし、その儚さとは裏腹に煌々と燃え盛っていた焰より、遙かに存在感の高いそれは、マールラの警戒心を煽るに充分だった。

「何や、随分敵かな感じやね。私、こういう雰囲気苦手やわ」

「ごめんなさい。でも、これは戦いだから……」

白雪は確かに申し訳無さそうだが、しかし揺るぎ無い意思を持ってこの戦いに臨んでいるようだ。

故に、マールも口調は軽いが、様相は真剣そのもの。

「いくで……『クリアショット』」

マールは銃二丁を構え、連続で引き金を引いた。

銃弾は、勿論見えない。

透明化された銃弾 軌道が読みづらい分厄介だ。

「星伽候天流新、紅化粧」

白雪が唱えた言霊に反応し、彼女の周りに、雪のように舞う焰の球が現れた。

「紅化粧、火宮代」

その焰の球の一つが白雪の目の前で制止し、イロカネアヤマの柄尻で弾く。

ビリヤードのように球は球に弾かれ、空間を縦横無尽に動き回る。

見えない銃弾は、白雪の焰の球に弾かれた。

「ほお……こりや凄いなあ。顕現力が段違いやわ」

「そのための『新』ですから」

顕現 別の言い回しもあるが、簡単に言ってしまうえば、文字通り超能力を物質として世界に顕現させる力だ。

水の槍が、炎の刀が殺傷力を持つのは、この『顕現力』の賜物である。

要はイメージを世界に投影する力な訳だ。

「膨大な超能力は、委細な顕現維持が難しい……成る程、小さな焔に超能力を圧縮することで、顕現力を潤滑にし、尚且つ燃費を向上した訳やな。」

えげつないなあ、お嬢さん」

「……それをあれだけの攻防で見抜く貴女も貴女だよ」
もつともや、とマールは明るい笑顔を見せた。

これから更に激しい戦いを行う相手に向けるような表情ではない。

「お嬢さん、強いなあ。」

私もちよつと……マジで行かせて貰う」

先の表情とはうって変わって、歴戦の戦士のような鋭い闘気を放つ。白雪が一瞬気圧されたのを見たマールが、爆発的な加速を見せた。

「『クリアシヨット』」

ダダダダダン！

六つの見えざる銃弾が、白雪に向かって亜音速で放たれる。白雪は咄嗟に身を屈め、イロカネアヤメを寝かせることで銃弾を避けようとするが、彼女の肩に一発が突き刺さった。

「ッ！……『緋火膜』！」

白雪は焔を薄い膜のように拡げ、マールに向けて放った。高温のそれは攻撃範囲が広く、その熱故マールを防御に回らせることが出来た。

その間に対策を練ろうと、白雪は柱の陰に身を隠した。

鬼道術で肩を癒しながら、彼女を見遣る。

強い。

かつて戦ったジャンヌやレインなどとはまた違う、どちらかと言えば武偵的な　アリアや理子に近いそれだ。やはり、拳銃格闘技（アルカタク）を使っていることが大きいのだろう。

「（……もしかしたら）」

「(クリア・ショットが早くも見極められて来とる……本当、何者やあの娘?)」

白雪がマールを警戒する中で、マールもまた白雪に畏敬の念を抱いていた。

彼女の『クリア・ショット』を初見であれほど容易に避けることが出来た者など、鬼土団の中でも少数のはず。

「(……なら、私も本気ださなきゃいかんかもなあ)」

マールは、銃の弾倉を抜き、新たな弾倉を込める。

「……物陰に隠れて時間を稼ぐつもりなら、失敗やで？」

何処にいるとも分からない白雪に向けての言葉。

それが諫言では無いことは、柱の陰に隠れた白雪も直感で理解した。

「ッ！」

勢い良く地を蹴り、その場を離れる。

「場所が割れたのを悟ったんやな。流石やわ」

「そりゃあ、柱が透明になってればね……硝子越しに隠れてるみた

いなものだよ」

そう……恐らくはマールの力なのだろう。彼女が背を預けていたはずの柱は、硝子と比べても遥かに透明となっていたのだ。

「『クリア・ワールド』……全部が見えるのに、何も見えない世界や」

言うのが早いか、マールは銃で見えざる柱を砕き、それらを超高速の蹴りで弾き飛ばす　当然、白雪に向けて。

「(見えない!)」

白雪は間合いを測ることが出来ず、必要以上に大きく回避行動を取る。

その最中、突然肩に鈍い衝撃が。

「キヤッ!?!」

注意が散漫になり気づかなかったが　いや、注意していても気づ

いたかどうか、透明な柱にぶつかってしまったのだ。

「隙ありや」

起き上がる一瞬に、マールが見えない銃弾の弾幕を張ってきた。何処に何発銃弾があるか、分からない。

咄嗟にイロカネアヤメから炎を発し、押し寄せる津波のように見える銃弾に向けて放った。

何発かは失速し、それでも残る数発は炎を突破した際出来た穴で、進路を判断する。

「（見えた、光明！ 後は……）」

白雪は自身の愛刀、イロカネアヤメを強く握り締めた。

「マールさん……これからは、勝ちに行きます。覚悟、決めて下さいね」

「ええで、私好きやわ。こういう、闘気で自分が錬磨されてくような感覚。」

……じゃ、私もガチで行くで。今度こそ、ガチのガチや」

マールは天上天下で銃を構えると……己が必殺の名を、紡いだ。

「『クリア・オーガ』」

刹那　マールの身体が、景色と同化する。

白雪は理解した……マールの透明化の力を、自分自身に及ぼせたのだ。

姿無き殺戮者は、正に夜闇に溶け込む、空想上のモンスターと言える。

白雪も、そんな彼女に対抗すべくイロカネアヤメを寝かせ、刀身に薄い焔を灯した。

「星伽候天流新……『御陽炎』」

白雪の身体が揺らめき……やがて、彼女の姿が五つ、六つと現れ、消えていく。

「（陽炎……こんなに幻覚効果が高いものやったか？）」

場所が割れることを怖れ声は出さずとも、マールは内心では参っていた。

何処かを攻撃すれば、いや……僅かにでも移動すれば、居場所が割れるだろう。しかし、このまま止まったままの訳にもいくまい。

彼女は思案するが……決断より早く、結論はもたらされた。

「星伽候天流新」

五人……いや、六人の白雪が、こちらに剣を、各々の構えで向けていた。

そう、見えないはずの自分に向けて、正確に。

「『緋竜落子』」

彼女の麗美な刀より出づるは、煌々と輝く緋色の焰の竜。

翼を広げたそれは、美しさに見とれ、動くことすら出来ないマールを飲み込んだ。

「……綺麗や」

マールの視界は、今まで見たことの無い程美しい緋に染まりやがて、黒き闇に覆われた。

「……命は残します。この戦いが終わったら、きっと病院に連れていくから……少し、待ってて下さい」

白雪は、眼を閉じたままのマールに深く頭を垂れる。彼女の身体には、燃える刹那に刺された四ヶ所の刺突の痕があった。

「貴女が吸血鬼じゃ無かったら、あの技は使えなかった……きっと、相手が死んじゃうから」

そう……白雪のあの技は、本来人間が生身で受けられるような技ではない。

しかし、マールなら……吸血鬼ならば、魔臓の存在で回復が可能なのだ。

しかし、攻撃を受けている間、彼女は無防備になる　白雪は、そこを突いたのだ。

「……マールさん、貴女は」

言いかけて……白雪は頭を振った。

これ以上を言葉にするべきではない。戦場では、迷った者から消えていくのだから。白雪は立ち上がると、友人を救出すべく、最上階に向けて走り出した。

第180弾 『新』（後書き）

プーモ

「今回の魔改造は、ヤンデレ巫女こと星伽 白雪さんでえーす！」

白雪

「新技カッコいいです！ これでキンちゃんも……！」

プーモ

「こっちは競争率少ないからねえ。まあ、頑張れ」

白雪

「はい！」

第181弾 風神対混成獣

第181弾 風神対混成獣

鬼士団第2師団長である白髪の老兵、デモン。

彼は目の前で飄々と佇む赤髪の少年を睨み付けた。その瞳は明らかに不興を顕にしている。

「……小僧。貴様如きが、この私に楯突こうとほざくか。身の程を弁えよ」

老兵の侮蔑を、しかし赤髪の少年 アレックスはケタケタと笑って彼方へ流す。

「こりゃ傑作だ。オツサン、てめえは吸血鬼如きが俺より上の存在だと思つてやがるのか？」

「……何だと？」
額に青筋を浮かべて、デモンはその背に添えられた大剣に手を伸ばした。

シユラツ、と刃と鞘の擦れる音。

月明かりに照らしだされたその大剣は、両刃であり柄尻に禍々しい黒の宝石を宿す剣だった。

「……妖刀の類いか？」

「ほう、人間風情を感じ取るとはな。そう、この剣は妖剣『レグルス・シユバイツァー』。その威力は その身で理解するのだな！」

老兵は、その太い腕を大きく振りかぶり、袈裟懸けに大剣、レグルス・シユバイツァーを振るった。

「……………アア？」

アレックスは気流の流れを読み、身体を軽く捻った。

轟音が響き、彼がいた場所を、何か縦に決る。

「ほう……………我が斬撃を避けるとは、対したものだ」

「……おいおい、まさかてめえのご自慢の剣の能力は、鎌鼬を発生させる程度だ、つてのか？」

アレックスの瞳には、最早先のような獰猛な光は消えて失せた。彼の目に映るは、自身の実力を疑わず意気がる老兵のみ。

「何！？ 貴様……我がレグルスの力を見抜くとは」

「アホかオツサン。俺の話聞いて無かったのか？」

仕方ねえからもう一度だけ言ってやる。耳の穴かっぽじってよく聞きやがれ」

驚愕するデモンに、アレックスは深く嘆息する。

そして 自分の二つ名を、告げる。

「俺の名はアレックス……『蒼天の風神』、アレックスだ」

そう……風神、即ち風の神。

彼の前に、不可視の斬撃など無意味。

それに気付けない哀れな老兵は、しかし未だ不遜を続ける。

「はっ、何を言い出すかと思えば、その大層な二つ名か。風使いの魔術師風情が、神の名を語るとは片腹痛い」

「別に俺が付けたんじゃないやねえよ。周りが勝手に騒ぎ出しただけだ」

呆れたように言葉を吐くアレックス。しかし、デモンは彼の様子などお構い無しに、彼の妖剣を構える。

「オツサン。ボケてんのか？ その剣は俺には通じねえんだよ」

「ふん……そんな言葉を、次の一太刀を食らってまだ吐けるか、餓鬼！」

意気込んだデモンは、その場でレグルスを上空に掲げた。そして、手首を利用し超高速で回し続ける。

やがてそこには、一つの竜巻が出来た。

「食らえ！」

デモンがレグルスを振り下ろすと、無数に別れたその竜巻がアレックスに向かう。

「この竜巻群、貴様程度が避け切れるかッ！」

デモンは勝ち誇った笑みを浮かべ、竜巻をアレックスに向けた。

「おいおい。それが全力かよ？」

立ち上る砂塵の中から。

「……あ」

確かに、あの赤髪の少年の声が。

「……うあ」

ビュン！

風が吹き抜け、砂塵が拡散する。

中から現れたのは

「う、うあああああああああああ！」

「喚くな。黙れ。静かにしろ。」

俺は断末魔ってヤツが嫌いなんだよ……耳に残るからな」

傷一つどころか、服に塵さえついていない 『蒼天の風神』、ア

レックス。

「何故……何故だ！？ どうして、お前は、そこに在る！？」

的外れな質問。それを一笑に伏し、そして少年はせせら笑う。

「この世の全ての風は、俺の支配下だ」

彼の武器 否、従順な下部たる風で風の神を傷つけるなど、未来

永劫叶わない。

「さて……そろそろ終わらせるか」

アレックスは首を鳴らす。

路傍の石を片付けるかのように億劫そうな瞳は、老いた吸血鬼に生物の原初の本能、恐怖を覚えさせるに充分過ぎた。

「ふざ、けるなあああ！」

デモンの身体が膨張する。

話には聞いていた 吸血鬼の、第2形態というヤツだろう、と他人事のように頭の隅で考える。

「我ら吸血鬼は不死！

絶対の存在！

貴様ら、下等な人間風情が、俺たち高等種に敵うものか！」

完全に変容を遂げた彼の吸血鬼の身体は、異形としか言い表せぬ様相だった。

ナイフのように鋭い牙を持つ顔はネコ科動物　　虎だろう。いや、ライオンかも知れない。

屈強な翼は、鷹や鷲といった空の狩人を連想させる。

強靱でありながら柔軟な下半身は、猿や熊を思わせた。

終いには、尻尾に蛇が生えている。

「混成獣^{キメイラ}ってヤツか」

「そうだ！　私はあらゆる生物から優秀な遺伝子を根刮ぎもぎ取った、謂わば最優の生物！　貴様などに負けるはずが　」

自身の姿に酔いしれ、ご高説を垂れていたデモンの視界から　　アレックスが、消えた。

そして、背後から一声。

「だから何だ？」

それが、先程まで目の前にいた少年の声だと気づくのに、一秒。

そして、自身の魔臓が全て壊されていることに気づくのに一秒。

そしてデモンが地に伏すのに、アレックスが彼の魔臓4つを破壊してから三秒の時を要した。

「吸血鬼は人間の上位種、か……誰がそんなこと言い出したんだろうな」

アレックスはその漆黒の着物を夜の帳に溶け込ませ、デモンに背を向ける。

「人間だなんだ吸血鬼だなんだ言ってる時点でてめえの負けは決まってるんだよ。

強いヤツは強い。弱いヤツは弱い。

この世界は、そうやって出来てんだよ……まあ、例外もあるがな」
彼は僅かに微笑み、自分の認めた者たちを思い浮かべていく。

「まずはてめえを最弱と思え。周り全ては強者。学ぶことは幾らで

もある。

俺と戦うなら、まずはそこから出直してみやがれ、吸血鬼「アレックスはデモンを横目で一瞥すると、風を身体に纏い、夜闇に姿を消した。」

地に這いつくばるデモンを、撫でるように風が一凧ぎした。

第181弾 風神対混成獣（後書き）

プーモ

「アレックスばねえ！」

レイン

「あの頃のキンジたちが勝てたのは奇跡みたいなモノだよ。

本来、アレックスは国一つを墜とすことの出来る実力を持ってるんだ」

プーモ

「え、それってネタバ」レイン

「証拠隠滅！！」

プーモ

「ビリビリするう！」

第182弾 雷神VS雷帝

第182弾 雷神VS雷帝

硝子に反射し、紫と金の雷が夜闇を明るく照らし出す。

「天桜流奥義……桜吹雪！」

レインの水月から繰り出される斬撃、アスラはそれを黒の刀でいなす。

「見事な太刀筋だ、雷神！」

「貴方もね、雷帝！」

紫と金が鏝迫り合う。

レインの真一文字に振るった一閃を片足バツク宙で避けたアスラは磁場を踏みつけ、レインに斬りかかった。

「（雷歩……！ これは、俺に出来る技は基本出来ると思っていたいかもね）」

レインは水月を寝かせ、黒刀を防ぐ。

ギギギギギギン！

刀と刀の接触により、紫と金の狭間に赤の火花が散る。

しかし、筋力に勝るアスラの攻撃はレインの防御を容易く弾き飛ばした。

「（まともな斬り合いなら勝てないかも……）」

かといって、レインも負けるつもりは毛頭無い。

「（超能力の質は俺の方が上……なら）」

レインはダガーを指と指の間に展開し、投擲。

容易く避けようとしたアスラの肩に、しかしダガーの一本が突き刺さった。

「ぐっ!？」

「まだまだ！」

レインは追撃で砂鉄を幾つもの剣や槍、斧などの武具の形に形成し、

八方からアスラに向けた。

風切り音を鳴らしながら迫る砂鉄の武具を、アスラは半身になって身体を振り、何とか避ける。

が、彼の目の前に、紫銀が一閃する。

「逃がさないよ！」

レインの一撃は、アスラの身体を斜めがけに切り裂いた。

「確かに身体能力は貴方の方が上だよ。でも、超能力自体は俺と貴方じゃ比較にならない。

物体に対する影響力は、俺の方が遥かに上だ」

レインは身体能力の差を感じるや否や、直ぐ様砂鉄を利用し、不利を覆す策が閃いたのだ。

「パワーの差は手数で埋める。さあ、これでイーブンだ」

レインは水月を鞘に納め、両手を前につきだした。

「『雷具』」

砂鉄が集中する。

やがてそれは先のように武器の形を成した。

その二本の武器の形状は 槍。

「『双槍』」

両手に槍を構え、手首と肘の間接で回転させる。

「へえ……二槍使いか」

「違うね。二槍は本来の領分じゃない」

「なら、何故？」

「こういうことさ！」

レインはアスラに接近し、槍を突き出した。

当然、アスラは槍を避ける。しかし。

黒の槍から、棘のような刃が彼に向けて伸びてきた。

アスラは驚愕しながらも、何とか首を捻って回避する。

「かわされたか。流石、第1師団長は伊達じゃないみたいだね」

「そういう君もえげつないね。攻撃範囲が自在の槍、それが二本。相当な使い手でも一撃で殺れるだろう？」

「生憎、俺は人殺しはしない主義でね」

「へえ、そりや大変だ、ね！」

アスラは刀を構えたまま、レインに突進して来た。

槍のリーチに対し、刀を持つアスラが取った判断は模範解答のようなものだ。元来、槍と刀では射程こそ槍が勝るが、一度懐に入ってしまったら、刀は手数で押し切れる。

だが、レインの武器は形状自在。

アスラが逆袈裟に振るった一閃は、レインの槍からの砂鉄によって防御され、同時に伸びる槍により迎撃を受ける。

アスラはあっさりと黒刀を棄てると、身体を逸らしながら槍を回避した。

「良い判断だ。でも武器なくなっちゃったね」

「構わないさ……代わりはあるしね」

アスラは懐から新たな黒刀を取り出し、肩上に構えた。

「（……まずいね）」

しかし、アスラの内心の大部分は、焦りが占めていた。

第3形態が切れかけている。

本来、雷という災害から得たエネルギーは簡単に底をつくものではない。

しかし、互いに雷の力を使う者同士、その力の消費は尋常な速度では無かった。

だが、それはレインも同じ。

やがて眩い光は終息していき、二人の身体から迸る雷の量が格段に減った。

「おっと……皇雷神が解けたか……」

レインは自分の身体をまじまじと見詰め、やがてアスラの方を一瞥した。

「貴方も第3形態とやらは解けたみたいだし、そろそろ決着が着きそうだね」

「そりや勿論、君の負けだがねっ！」

アスラは黒刀を二刀流で構え、レインに接近した。

「『雷鎧』」

レインは水月を構えず、アスラの一撃を真正面から受け止めた。何を、とアスラが困惑の色を浮かべる。

彼の二刀は、レインの身体に、届いていなかった。

いつの間にか、彼の身体を覆っていた……黒き鎧に、防がれていたのだ。

身体の要所要所に鎧が展開されており、騎士のようでもある。

「砂鉄で造った鎧か？」

「ご明察。ちよつとやそつとじゃ砕けないよ」

レインが両手を前に突き出すと、二本の剣が形成される。

「参ったな……武器庫を相手取るみたいなものじゃないか」

「それでも無い、よっ！」

レインが剣二本を投擲する。

「（ブラフ　！）」

しかし、剣二本を意に介さず、アスラは後ろを向いた。

四本の剣が、アスラの魔臓を狙っていた。

四本の剣を叩き落とすが、投擲された二本の剣はアスラの背に深く突き刺さった。

「ぐう……！」

アスラは痛みを無視し、黒刀二本でレインに斬りかかった。

レインはそれを雷鎧の手甲で受け止め、砂鉄の槍を空中からアスラに注がせる。

「参るなあ……さつきから全然隙が見当たらないんだが？」

「そりゃ残念。でも、こっちはこっちでキツいんだよね」

雷鎧は身体に砂鉄の鎧を纏う分、敏捷性が削られる。その状態でアスラの剣技についていくのは至難の技だ。

「なら……そろそろ決着つけるかい、雷神？」

アスラは不敵な笑みを浮かべると、黒刀から金色の光を伸ばした。

「『エンペラー
雷帝剣』」

神々しい輝きを放つその刃には、必殺に足る力が込められている。それが分からないレインでは無い。

「良い刀だ。俺もそれに応えようとするよ」

レインは砂鉄に回していた力を戻し、水月を抜いた。

月光を浴びて紫に輝く水月に、紫電が纏う。

やがてそれは、刃の形を成した。

「『雷斬』」

本来は対人戦闘には使えないこの技も、無限回復力を持つ吸血鬼相手なら問題は無い。

二人の剣気で辺りの空気が鳴き、静寂の色が深まる。

刹那。

「はああっ！」

寸分の狂いも無く、二人は同時に地を蹴った。

音も無い斬撃。

宙に舞ったのは……二つに折れた、黒刀だった。

「……僕の負けだね」

アスラの呟きに、レインは意外そうな表情を隠せなかった。

「まだ魔臓は残ってるよ？」

「君の砂鉄の技を刀無しで避けきる自信は無いよ」

「そうか……」

レインは水月を鞘に納め、アスラに背を向けた。

「……殺らないのかい？」

「そりゃ、戦意の無い相手は斬れないよ。それに殺しはしない主義だつて言ったじゃないか」

「ふーん……甘いねえ」

しかし 完敗だ。

アスラは微笑み、自分を倒した男の後ろ姿を見詰めていた。

「本当、甘すぎるな」

背後からの、声。

アスラは咄嗟に振り返り、雷を無差別に放つ。

声の主は容易くそれを避け……白銀のナイフで、アスラの魔臓全てを貫いた。

「がはっ……!?」

のみならず　男は返す手に、血に濡れたナイフを構えたまま。

ドスッ……

アスラの腹に、ナイフを根元まで突き立てた。

臓腑に穴が空き、血が身体から抜けていく間隔。

それが『死』だということ、アスラは悟った。

そのまま、彼の視界は暗転した。

絶句する。

この場に居るなど、まさか予想もしなかった人物の登場に。

今の今まで戦っていた雷帝を容易く殺したその男は、深紅の髪を手ぐしで梳き、その緋色の眼をレインに向けた。

見間違うはずも無い。

死神を思わせる、その血を浴びたかのような風貌を持つ男に、レインは心当たりがあった。

「何故お前がここに……」

ジャック・ザ・リッパー！」

血を浴びる死神　ジャックは、レインの問いに、その口角を僅かに、しかし確かにあげたのだった。

第182弾 雷神VS雷帝(後書き)

最近スランプ気味です……てか、以前の自分は良く毎日更新とか出来てたなと思いますWW

第183弾 英雄共演

第183弾 英雄共演

「ゲバババツ！ どうしたジャンヌ共、リュパン！

お前たちの力はこんなモノか？」

ブラドは金棒を一薙ぎする。

あまりの風圧に床が捲れ、三人は後方に退がり距離を取った。

「くそ……魔臓が全然見当たらないぞ」

「残り一つ……まさか、身体の中に刻印があるのか？」

見当違いな方向に予測が進んでいく。が、それは一喝によって霧散した。

「落ち着け、ジャンヌ・ダルク27世！

魔臓の位置の把握は二の次で良い」

一帯に響いたリュパンの声に、二人は本来の役目を思い出した。

ミチルの救出。

そのためには、ブラドをなるべく引き離さなければならない。

三人はブラドから大きく距離を取り、彼を引き付けた。

仲間が、ミチルを救出すると信じての行動だ。ジャンヌは銀刀二本を

構え、ジョーンはデュランダルをブラドに向けた。

「そっとう訳だ」

「じつくり行くぞ？」

全く同じ二人の声が交互に聞こえてくる。それはまるで、一人の人物が続けて話しているようですらある。

「『氷柱雨』」

二人が両手を合わせ、天高く掲げた。

大気中の水分が氷結し、数多の氷柱が形成される。

「『食らえっ！』」

その数、実に807本。

四つの魔臓に対する数としては、些か過度であるとも思える。

「ゲバババツ！ その程度か！」

しかし、ブラドが金棒を一閃すると、氷柱はいとも簡単に砕かれた。

「隙だらけだ！」

不意に下から聞こえた声に、ブラドは視線を下ろした。

自身のすぐ下には　クリーム色の髪を唸らせる、アルセーヌ・リュパンの姿が。

敵の注意を上に向けながら、本命は下からの攻撃。

出会ったばかりのはずの三人は、しかし見事なコンビネーションを見せた。

「終わりだブラド！」

リュパンの硬化魔術の掛けられた髪が、ブラドの四肢の魔臓を穿つ。そして　彼の、胸の中央を穿った。

目玉模様が魔臓の位置であることは、リュパンも承知していた。しかし、残り一つだけが見当たらない……つまりは、隠せるような場所に魔臓がある、と判断したのだ。

結果、出した結論は、胸の中央の白い体毛の中だった。

「（どうだ……！？）」

しかし。

「ゲバ、ゲバババツ！」

劣悪な笑みを見せたブラドが、リュパンに金棒を振りかざした。

傷は全て、塞がっている　！

「リュパン！」

ジャンとジョーンが、互いに六枚づつ、計12枚の氷の盾をリュパンと金棒の間に展開した。

が、第2形態の腕力を前に、二人の防御は容易く破られた。

リュパンも自身の髪でガードしようとするが、金棒の勢いに負け、脇腹に一撃を食らった。

「がはっ……！」

そのまま何メートルか吹っ飛ばされたリュパンは、すぐさま起き上がり、口から垂れる血を拭った。

彼と未だ嘲笑を浮かべるブラドの間に、ジャンとジョーンが割って入る。

「平気か？」

「……骨が何本かイカれた。ひびも入ってる……無理は出来んぞ」
「どうやら、氷の盾がどうにかダメージを軽減してくれたらしい。」

「まずいな……」

が、やはり骨折は拙い。

リュパンとの連携が無い上、魔臓の位置が全て分かっていない。

「終わりだ、リュパン」

ブラドが金棒を振り上げる。

万事休すか、そう思われたその時 何かが、宙を舞った。

リュパンに掛かる、赤い血液。

宙を舞うは、大きく無骨な腕。

金棒が重厚な音と共に、地面に突き刺さった、その後ろに。

その男は、いた。

「まさか、僕が君に手を貸す時が来るとはね……リュパン」

黒髪をオールバックにし、口にはパイプを加えた 史上最高の名

探偵、シャーロック・ホームズ。

彼が、杖より抜かれた白銀の刃を、ブラドの鼻先に向けていたのだ。

「貴様あ！ 何者だ！？」

「通りすがりの探偵さ」

「ふざけるなよ、餓鬼！」

ブラドは怒りのままに金棒を振るうも、シャーロックはひらりと身をかわす。

華麗に着地したシャーロックに……彼に多大な因縁のある大怪盗、

アルサーヌ・リュパンは訝しげな視線を送った。

「……どういう風の吹き回しだ、ホームズ？ お前とは茶飲み友達程度の仲も無かったと記憶しているんだが」

「僕だつて好き好んで来た訳じゃない。ただ、僕の子孫の友人が、君の子孫を助けたいとの話でね……友人の曾祖父の誼というやつさ」
無然とした面持ちで、シャーロックは吐き捨てるように告げる。

子孫　その単語に少なからず反応したのは、リュパンだけでは無かった。

「シャーロック・ホームズ卿。貴方の下にも未来からの客人が来ていたと」

「そして彼女らは仲間だと、そういう事だな？」

「ああ、その通りだジャンヌ・ダルク27世。

僕らの子孫は、遅しく育っているようだね。

そこで、だ」

シャーロックの言葉を遮るように、金棒の一撃。

それを避けた四人は、目の前で吼える吸血鬼に目を向けた。

「共闘だ。出来ないとは言わせない。

我々の子孫は、ああも見事な連携を見せているのだから……僕らが出来ないとなると、可愛い曾孫に顔向けが出来ないのでね」

シャーロックの一言で、三人のプライドに火がついた。

「ほお……」

「言うではないか、シャーロック・ホームズ」

「ならば、見せてやろう……我々の」

「『チームワークというやつをな！』」

叫ぶと同時、ジャンとジョンは各々左右に飛び出した。

「『オルレ안의氷花』」

ジャンヌの十八番、オルレ안의氷花。

その幾重にも重なる青白い光を放つ冷気は、容易くブラドの四肢を凍らせた。

「何い！？」

驚愕する間もなく、彼の眼前に、金色の影。

言わずもがな、髪をメデューサのようにならせるリュパンだ。

硬化魔術の掛かった髪で出来た拳が、容赦無くブラドに襲い掛かる。

「シャーロック！ 言い忘れたが、こいつは吸血鬼で」

「全身に四つある魔臓という器官を破壊しなければならぬ。内3つは判明しているが、残り一つが分からない。違うかい？」

「……………ああ、そうだよ」

こうして推理を大っぴらに見せつけるのが、リュパンがシャーロックが苦手な一因なのだろう。

そんなことを知る由も無いシャーロックは、ブラドの魔臓の位置を推理する。

彼の一拳一動が、魔臓を庇うように動いていた。ならば 彼の拳動から、彼の魔臓の位置を導ける道理。

「（舌、か）」

瞬時にブラドの弱点を導きだしたシャーロックは、余裕の表情で一歩を踏み出した。

「リュパン、ジャンヌたち。奴の弱点、まてう読めたよ……………さあ、こちらのターンだ」

「……………了解！」「」

三人がブラドに突撃しようとした瞬間 地面が、揺らいだ。

「……………！？」」「」

突然の事態に、その場の全員が硬直した。それはシャーロックも、ブラドも例外では無い。

そして エッフェル塔の床を貫いて姿を現したのは、

「レイン君！？」

髪を紫銀に輝かせる、レイン。

その瞳は下から襲い来る『それ』を凝視しており、シャーロックたちを映してはいなかった。

空いた穴から、赤い影が弾丸のように飛び出す。

「奴は……………！」

「大量猟奇殺人鬼、ジャック・ザ・リッパーか！」

驚きも束の間、ジャックはナイフを二本構えたまま、レインに飛びかかった。

「くそっ！」

レインは雷歩で空を蹴り、ジャックの背後に出るとブロウの引き金を引いた。

放たれた銃弾は掠めはしたものの、ジャックにかわされる。

「どうした紫電の雷神！ 貴様の力はその程度か！」

ジャックのナイフがレインの身体を貫かんと、投擲される。

あのナイフに、鏡花水月は効かない。

レインはダガーでナイフを叩き落とし、改めて着地したジャックと向き直った。

彼の瞳は、血に飢えた獣のような炎を携えていた。

第183弾 英雄共演（後書き）

次回予告風に。

ついに現れた殺人鬼、ジャック・ザ・リッパー。
応戦するレインに、最大の危機が！？

次回、第184弾『墜ちる雷神』

レイン

「見ないと風穴空けちゃうよ？」
アリア

「パクるんじゃないわよ！」

第184弾 墜ちる雷神

第184弾 墜ちる雷神

「……………！？ 何の音！？」

塔を揺るがす爆音に、空色の髪を揺らす少女、霧矢 綾瀬は振り返った。

「戦闘が激化しているようだ、手早く済ませよう」

彼女の前には、シャーロックの無二の相棒、ジョン・H・ワトソンの姿が。

彼は眠るままのミチルを、逆十字の束縛から解いた。

「う、ん……………綾先輩？」

「ミチル！」

逆十字には超能力か何かか掛けてあったのか、外した途端、ミチルは目を覚ました。

彼女は現状が把握出来ていないようで、辺りを見回している。

「ごめんねミチル、説明してる暇は無いの。今すぐ、この場を離れるわ」

綾瀬はミチルを背負おうとするが、彼女の肩をジョンが掴んだ。

「私が彼女を運ぼう」

紳士として、淑女に人を背負わせるようなことはしない、ということか。

彼はミチルを軽々持ち上げると、そのまま綾瀬と共に階段に向かった。

「雷雨！」

レインがブロウの銃弾に雷を込め、射出した。

炸裂した銃弾は、広範囲を雷で覆いジャックを追い詰める。

彼は上空に跳び雷雨をかわし、同時にナイフを投擲。

レインはそれを水月で受け流すと、雷歩で肉薄した。

「お前の目的は何だ、ジャック！」

「何てことは無い……その吸血鬼から、コキュートスを横取りするだけだ」

ブラドたちの方を見遣る。

未だ困惑しているようだったが、再び交戦が再開されたようで、優勢なのはシャーロックたちだった。

「コキュートス……！？ それをどうするつもりだ！」

「決まっているだろ……殺すんだよ。人間を」

「なっ……！？」

「コキュートスとは魔界の殺戮兵器を呼び出す道具。

殺戮兵器なのだから、殺戮以外の何に使うと言うんだ」

平然と、殺戮を何とも思わないような表情で放たれた言葉に、レインは歯を噛み締めた。

雷が迸る。

「ふざけるな……止める！」

「出来るものなら、な」

レインは最大出力の雷歩で、瞬間にジャックの懐に入り込んだ。

「……！」

「遅い！」

レインの一閃が、ジャックを袈裟掛けに切り裂いた。

鮮血が舞い、ジャックは後退する。

「やれば出来るじゃないか……そら、もっと来い」

ジャックは挑発するように手招きする。

レインはダガーを八本抜き、全てを投擲。

「雷線式……『綾取・雷球』！」

雷が、ジャックを覆い尽くさんと球状に放たれた。

しかし、ジャックはダガーの一本をナイフの投擲で撃ち落とし、僅

かに出来た穴から脱出する。

そのままレインに急迫し、ナイフを突き出した。身体を翻してそれを避けるも、至る所から血が噴き出す。

「（速い……！）」

接近戦は拙い。

レインは空に飛び上がると、ブロウの銃口をジャックに向けた。

「雷雨……！」

至近距離からの、広範囲攻撃。

それはかわせる速度でも、距離でも、範囲でも無かった。

当たる　そう確信する。

しかし。

ジャックはナイフを逆手に握り、自分に迫る銃弾の破片を、全て弾いた。

感電は、していない。

「（ミスリル銀、か……！）」

ミスリル銀。

レインの持つ水月を構成する、空想上の物質とされたオリハルコン、それと同種の物質だ。

しかし、オリハルコンと違う点……厄介なのはその対魔性。

話によれば、それは法化措置を行った銀……即ち、ステルスキラー対超能力者装備ですら比較にならない超能力殺しの力を持つ。

「余所見をしている暇は……無いぞ！」

「……！」

レインに肉薄したジャックが、ミスリルのナイフ二本を振りかざす。対しレインは、高速振動させたダガーでそれを受ける。

火花を散らす双方の刃。

拮抗を打破すべく、レインは『影』の小指のスイッチを作動させた。

『加速』により威力が増幅された蹴りが、ジャックの腹に突き刺さる。

「ぐっ！」

ジャックは勢いそのまま後方に飛ばされ、受け身を取って体勢を立て直した。

口から流れる血を拭くと、ジャックは獰猛な獣のような笑みを見せる。

「良いぞ雷神……！」

お前のようなヤツを殺してこそ、殺人鬼冥利に尽きる！」

「何が殺人鬼冥利だ……！ 俺は殺されないし、殺させない！」

レインは水月を抜刀……そして、迅雷の速度でもってジャックに接近した。

「雷閃……！」

音をも越えた速度の一斬は、空気をも切り裂きジャックに向かう。

それを辛うじてナイフで受け止めたジャックは、あまりの衝撃で横に吹っ飛ばされた。

「ぐふっ……！」

「まだまだあ！」

レインは空を蹴り、ジャックを追撃する。

「はあああああ！」

思いきり水月を降り下ろす。

ジャックはナイフを交錯させ、それを受け止めた。

地面に輝が入り、瓦礫が捲れ上がる。

ジャックは水月を押し切ると、レインの腹を蹴りあげた。

「がはっ！」

上空に飛ばされつつも、レインはダガーを投擲、磁力で操作してジャックに向かわせる。内一本は、ジャックの肩に突き刺さった。

「く……くく、くははっ……！」

最高だ！ こんなに愉しい殺し合いなんて、滅多に出来るモノじゃない！

さあ、もっとだ！

もっともっともっともっと、俺を愉ませてくれ、雷神！」

傷は深いはずなのに、彼は笑っていた。狂気に支配された彼の表情

を前に、レインはたじろぐ。

レインも、色々な犯罪者を見てきた。

中には麻薬中毒者もいて、彼らの様子も酷かったが……目の前の殺人鬼は、彼らとは比べ物にならない程の狂気を感じる。

「さて、良い具合に血も流した……後はお前を血祭りにあげるだけだ」

ジャックはナイフを構えると 先程と段違いの速度で、レインに肉薄した。

「ッ！」

水月を振りかざす。

それを容易く避けると、ジャックはナイフをレインの眼に向ける。

「！」

寸でのところで顔を逸らす。頬の薄皮に赤い線が入った。

「今のを避けるか。流石だな」

「そりやどうも……！」

レインは水月を肩上に構えると、奥義・桜吹雪を放った。

「……！ 素晴らしい剣技だ」

言いつつも、ジャックは紫の刃を紙一重でかわし続ける。

時には掠めることもあったが、どれも大した傷にはならない。

「さて……そろそろ、決着を着けるとするか」

「……？ どういう」

「知る必要は無いさ……すぐに解る」

レインの言葉を遮る、ジャックの不敵な台詞。

しかし……彼の様子は、これから決着がつくような大技を放つ者とは思えない。

何故彼が笑っているのか、分からない。

不安は焦燥を呼び、レインは無意識の内、ジャックから退いていた。はったりでは無い。

確かにこの男は、決着を着けようとしている にも関わらず、彼から必殺の心意気を感じないという、矛盾。

揺らいだ意識が 反応を、遅れさせた。
ザクッ……

肉の貫かれる音が、辺りに響いた。
血、が。
身体を伝って、地面に落ち、跳ねる。

白銀の刃が、レインの胸を貫き赤い血を滴らせていた。

「……が、はっ……」
前のめりに倒れる。

ジャックは、未だ目の前で不敵な笑みを浮かべている。
ならば。

ならば、自分を刺したのは、一体 ？

殆ど残っていない身体の力を総動員し、後ろを見遣る。

そこに立つ男を見て、レインは絶句した。

何故なら その赤い男には、見覚えがあったから。

血のように紅い髪。

血のような朱い瞳。

血のような赤い服。

そう 自分の眼前にいたはずの、ジャック・ザ・リップパーが、血で赤く染まったナイフを楽しげに見つめていたのだった。

「だから言っただろう？ 『終わりだ』と」

背後 自分が先刻まで戦っていたジャックの言葉を最後に、レインの視界は暗転した。

切り裂きジャックは 二人いたのだ。

第185弾 二人の殺人鬼

第185弾 二人の殺人鬼

満身創意の中、キンジは身体を引きづりながら、最上階を目指す。スクラム・サクスを杖代わりにしなければならぬ程疲弊した彼は、それでも足を止めることは無い。

しかし……自身の背後に、殺気を感じ振り向く。

「吸血鬼……！」

そこには、自身の腕を振り上げる吸血鬼の姿が。

「くそ……！」

キンジは応戦しようと刀を振り上げるが……刀を振るう前に、吸血鬼は倒れた。

「……！？」

吸血鬼の背後から姿を現したのは、蒼い長髪を頂辺りで一つに纏めた静奈だった。

「朝露！？ お前、戦い終わったのか！」

「そういうお前はボロボロだな、キンジ」

静奈の水槍が、吸血鬼の魔臓を貫いたのだ。

「他の皆は？」

「アリアと理子、悠を見つけた。アリアや悠は目立った外傷は無さそうだが、理子は骨折している。今、彼女らは先に最上階に向かった」

「そうか……俺たちも向かおう」

キンジが再び歩き出そうとする。その表情は優れない。

静奈が彼に肩を貸そうとした、瞬間。

「キンちゃん！」

聞き覚えのある声が、響いた。

恐る恐る……キンジは背後に振り向く。そこには案の定、涙眼の武装巫女^{デシ}、星伽 白雪が下駄を鳴らしていたのだ。

「し、白雪!？」

キンジの驚愕^{きょうわく}の声を無視^{しかと}し、白雪は彼の襟首を掴み、前後に激しく揺らした。

「キンちゃん、怪我してるよ! 大丈夫!？」

「あ、ああ。大丈夫だ、白雪」

「待ってて、今……」

「ストップだ、白雪」

暴走を始めた白雪の脳天に、軽めの手刀が落ちる。

「あたっ! ジャンヌ!」

その手刀の主は、飽きれ顔で白雪を見るジャンヌだった。

「今は最上階へ向かう方が先だ。歩きながらも治療は出来るだろう」

「うう……分かったよ」

渋々頷き、白雪は静奈と共にキンジに肩を貸しながら治療に当たった。

そんな中……ジャンヌは、一人上を向いていた。

強い超能力の気配……レインか、アレックスの力だろう。

「(……何か、嫌な予感がするな)」

アリア、理子、そして悠香は……目の前の光景に絶句した。

二人の赤き殺人鬼、ジャック・ザ・リップー。

その足下には赤い血溜まりが出来ており、その中心には、見知った銀髪の少年が倒れていた。

「レ、イン……?」

理子が、途切れ途切れに彼の名を呼ぶ。

返答は、無い。

「う……嘘、嘘よ!」

声を出すことも出来ず、悠香は気を失った。

「丁度良い……こいつは寄代にしよう」

ジャックは彼女を担ぐと……グルン、と首を回した。

視線の先にいたのは……ブラド。

「さて吸血鬼。どう殺して欲しい？」

「う……うおおおお！」

回答は、拳。

それを半身になって避けると……刃渡り10センチ程度のナイフで

……ブラドの腕を、切り落とした。

「ぐお!？」

「バラバラがお好みか……なら、早く言ってくれ。

まずは目玉をくり貫いて。

四肢をもぎ取り鼻を潰し。

耳を千切って臓腑をバラす　最後は血のワインで乾杯だ。

どうだ？　吸血鬼にはさぞかし素敵な晩餐だろう？」

「く、くそっ……!」

ブラドは背から翼を生やし　夜空に飛び上がった。

「（撤退だ……!　あんな化物に敵うはずがねえ!）」

ブラドは背を向けて飛び立とうとするが……翼が、ミスリルのナイ

フにより切り裂かれた。

「逃がすと思っただか？」

ジャックの冷やかな視線がブラドに突き刺さる。

殺される

明確な殺気を受けたブラドは根源的な恐怖に駆られ　コキユート

スの半身たる『扉』のイヤリングを、彼方へと放り投げた。

ジャックは鍵の方へ身体を向けた。その隙に、ブラドは翼を羽ばた

かせパリの夜空を飛ぶ。

『ヒルダか？　これから撤退する……ルーマニアに戻るぞ。

ここにいたら……確実に死ぬ』

向こうが喚くのを無視し、半ば強引に通信を切った。

ブレードは最大速でアジトに戻る。もうこの場にいる意味は、無い。

「さて……向こうはもう『扉』を確保する頃か。私も『鍵』を戴こうか」

ナイフの刀身を舐める、まさに戦闘狂のような仕草を見せ　もう一人の切り裂きジャックは、四人を見渡した。

「（……可能性が高いのはアルセーヌ・リュパンか）」
標的を定めてからの行動は早かった。リュパンは眼にも止まらぬ速度で四人に肉薄、ナイフを乱れ打ちする。

「ちっ！」

どうやらこのナイフはミスリル銀では無いようだ。しかし銀製なのは代わり無く、リュパンは髪による防御は望めない。

髪をバネのように使い筋力を補助しながら、何とか避けた。

「リュパン！　狙われてるぞ！」
「分かっている！」

そう……ジャックの攻撃は、明らかにリュパンに集中していた。他の者には牽制程度の攻撃しかしていない。

完全に、目的は『コキュートス』なのだろう。

ジャックの予想通り、コキュートスを所持しているのはリュパンだった。

「悪いが、私は殺さずの主義を持たん」

リュパンは髪を槍のように押し固め、硬化してジャックに突き出す。ジャックの瞳を狙ったそれは、しかしミスリル銀のナイフの刀身に防がれた。

破魔のナイフは、硬化魔術を除去し硬化を解く。

「なっ……！」

「戴くぞ……我が野望の成就のために！」

ジャックはナイフでリュパンの胸元を切り裂いた。

噴き出す血飛沫の中……光るモノを見つけたジャックは、それを片

手に掴んだ。

血に濡れながらも、しかしその紫と蒼の輝きは一向に失われない。返り血で赤く染まった手でそれを握り……ジャックは、高々と掲げた。

「手に入れた……手に入れたぞ！ コキユートス！」

ついに……最悪の殺人鬼の元に、片割れとはいえ、最悪の殺戮兵器が渡ってしまった。

第185弾 二人の殺人鬼（後書き）

次回予告。

「俺が憎いか、リュパン四世」

「『『オルレアンの蓮花』』」

「そろそろ、殺すか」

次回、第186弾 コキュートス

綾瀬

「見ないと風穴空けちゃうわよ？」

第186弾 コキユートス

第186弾 コキユートス

「ジャック・ザ・リッパー、貴様は許さない……！」

投げられたコキユートスの『扉』のイヤリングを追ったジャック。その前に立ち塞がるのは、憎悪に顔を染める理子だった。

「俺が憎いか、リユパン四世」

「……………！」

気づけば、理子はジャックに向かって駆けていた。

四世。理子が最も我慢ならない別称。

加えて言えば、理子の愛する者を傷つけた者からの蔑み。

理子の理性を失わさせるには、充分過ぎた。

「ああああああああああ！」

怒りに身を任せ、それでも正確にジャックの急所へ、硬化された髪を突き立てる。

それを半身になるだけで軽々と避けると……ジャックは。

「つまらん……殺すか」

ミスリルのナイフを、振り上げた。

狙いは、理子の眉間。速度、タイミング諸々含め、絶対にかわすことも防ぐことも不可能な一撃だった。

理子には。

ドン！ と彼女の左から衝撃が走った。

理子は突然のことで弾かれ、地面を転がる。

「ボサツとしない！」

衝撃の元は、アリアだった。

彼女の肩をナイフが掠めたのか、肩には血が滲んでいる。

「良く聞きなさい、理子。レインがああの程度で死ぬはずない。心配

は要らないわ。

……それより、問題はあの男よ。

あいつは、どうして理子をリュパン四世だと知っていたの？」

「！」

確かに、その通りだった。

理子は気が動転して気がつかなかったが……この時代の人間からしてみれば『ただの少女』である理子を、一目で『リュパンの曾孫』だなどと看破出来る人間が、いるはずがない。

「なら……お前は！」

理子が、真相に辿り着いた刹那

ジャックが、視界から消えた。

「……ッ」

肩に熱い感触。

斬られた、のか。

「リュパン四世、お前のことは俺の先人として尊敬していたよ」
ジャックのその言葉の後、理子と、隣のエリアは倒れた。

理子が握っていた手から、コキュートスが落ちる。

それを拾い上げ……ジャックは、不敵に微笑んだ。

「もうすぐだ……もうすぐで、俺の願いは叶う」

一方……もう片方のコキュートスを持つジャックに対し、シャーロットク、リュパン、ジャンとジョーンは苦戦を強いられていた。

まだ条理予知や重複能力を持たないシャーロック、手傷を負ったりユパン、戦力が成熟していない双子のジャンヌ・ダルク。

彼ら程の英雄たちが、束になっても互角……否、押されていた。

「いい加減諦める、ホームズ、アルセーヌ、ジャンヌ……お前たちでは、私には勝てん」

ナイフを一闪。それはリュパン頬を裂き、鮮血を散らせる。

「生憎と、根拠の無い忠告は聞かない主義でな」

「根拠ならある。私の勘だ」

「そういうのを……根拠が無いと言うんだ！」

リュパンの髪が何本にも別れ、貫かんと多方向からジャックに向かう。

「無駄だ」

ナイフで髪を切り裂くと、彼はすぐさまリュパンに肉薄した。避けられそうも無いナイフの一突きは、しかし空を突く。

シャーロックがリュパンの襟首を掴み、退がらせた。

その刹那　彼らの後ろから、白銀の影が二条。

「『オルレアンの蓮花』」

ジャンとジョーンの氷剣と聖剣から、青白い光が放たれた。

冷気は直線的にジャックへ進むが、ナイフの一閃で切り裂かれる。

「私に魔術は効かない」

対魔性の高いミスリルのナイフは、その一斬で魔を断つ。

勝ち誇った笑みを見せるジャックに、しかし二人は微笑んだ。

「分かっているさ」

「言われずともな」

ジャックが切り裂いた、二条の光の後ろから　ステッキより引き

抜いた、スクラマ・サクスを構えた、シャーロックの姿が。

「（冷気は囿か）」

「終わりだ、ジャック」

スクラマ・サクスが亜音速で空気を叩く。

シャーロックの剣術は、フェンシングが基盤になっている　それ

故、突きは一級品と言える代物だった。

その速度たるや、回避は不可。

経験と直感から判断したジャックは、かわすでもなく、況してや防御でもなく、ミスリルのナイフを突きだした。

そして、キーン！　という短い金属音の後、衝撃のあまりジャックが後ろに飛んだ。

その頬からは、血が滴っていた。

「(まさか……今のが決まらないとは……!)」

必中のはずの一撃は、確かに避けられも防がれもなかった。

が ジャックは、スクラム・サクスにナイフを突き立て。

切っ先で、スクラム・サクスを逸らしたのだ。

「かわせも防げも出来ないなら、かわさなければ、防がなければいいのさ」

起き上がったジャックは、自身のナイフから垂れる血を舐め取った。シャーロックの肩に、赤い滴が滲む。

今の一撃に、カウンターを合わせていたのだ。

「(空恐ろしい戦闘能力……! 少なくとも、今の私たちに勝ち目は無い)」

しかし……逃げるのは、不可能に近い。

彼の速度は、シャーロックたちを大きく凌駕している。三輪車で自転車から逃げると言われるようなものだ。

四人バラバラなら逃げられないことも無いが……内一人か二人は、確実に死ぬだろう。

そうなれば、体勢を立て直してからの勝ち目がほぼ無くなると言っても過言では無い。

シャーロックの逡巡は、しかし即座に決行に移す結果となった。

風が、吹く。

やがてそれは一つに纏まり……やがて弾けた。

中から現れたのは、ジャックと同じ赤い髪を靡かせ……黒衣に身を包んだ、アレックスだった。

「てめえか……? レイをやったのは」

普段の彼の様子からは考えられない程、静かな それでいて、敵かな声。

およそ聞く者を震え上がらせる程の怒気が、彼の纏う雰囲気醸されてきた。

「だとしたら、どうする? 敵討ちでもするか?」

「そんな野暮な真似しねえよ。レイがやられたなら、落とし前はレ

イがつけりゃいい。ただ、俺は……」

アレックスはガンズ・トマホークを振り上げ、地を砕いた。

「友達をやった落とし前をつけるだけだ」

風が薙ぐ。

礫を吹き飛ばす程の突風が、ジャックに襲い掛かった。

咄嗟にミスリル製のナイフで防ぐも、超能力でない礫までもは防ぎ切れない。

ジャックの額に礫の一つが衝突し、仰け反った。

正に好機。それを見逃す風神ではない。

彼は風を操り空気抵抗を極端に減らすと同時に、先の突風を自身の真後ろに向けて放ち、莫大な加速を得た。

最早目で捉えることすら出来ない速度で、銃弾の如くジャックに向かう。

ガンズ・トマホークを振りかぶり、敵の意識を奪う一閃を放つ。

……しかし。

アレックスとジャックの間に、赤い影が滑り込むように割って入った。

ナイフを交差させて防いだのは、もう一人のジャック。

彼はアレックスの渾身の一撃を受けた。

斬られはしなかったものの、あまりの衝撃に足が地面を捲りあげる。

「ッ！」

すぐさま、倒れていたジャックはナイフを投擲する。

標準は、勿論アレックスに。しかし。

射線上にもう一人のジャックがいるにも関わらず。

「ば」

馬鹿野郎。そう、叫ぼうと思った。

脚は地面に食い込み、上がらない。

加えて背後からの、味方からの攻撃を、避けられるはずがない、と。

それが、間違いだっただの。

アレックスは見た。

投げられたナイフの輝きを背景に ジャックが、笑うのを。

彼は首を傾けた。

最小限とは正にこのことか。

彼の耳を僅かに斬っただけに留まったナイフは、そのままアレックスの、眉間に

第186弾 コキユートス（後書き）

次回予告。

「ッ、伏せて！」

「状況は最悪だな……」

「遂に、始めやがったか」

次回、第187弾 地獄の門

ミチル

「見ないと風穴空けちゃうよー」

第187弾 地獄の門（前書き）

テスト期間が近いです。

最後のストック投稿……（汗

第187弾 地獄の門

第187弾 地獄の門

「食らうか、よっ！」

眉間を狙う一撃を、アレックスは自身を突風で無理矢理吹き飛ばして避ける。

力一杯突き飛ばしたために、自身の骨が何本かイカれたのを感じた。

「がつ……！」

致死を避けるための自傷行為。風神たる彼には、その代償は小さなモノでは無い。

が、蒼天の風神の胸中を占めるのは、痛覚などという矮小なモノでは断じてなかった。

「（コイツら……本当に仲間同士か？）」

ただただ、純然たる猜疑心。

先のナイフ 風神の名を冠する彼でも避けるのが困難だったのは、その疑問に起因する。

ナイフを放ったジャックは、自身を守ろうとしたジャックを意に介さず、アレックスにナイフを放った。

否。

ジャックは寧ろ……ジャックを、殺すつもりでナイフを投擲していた。

殺されそうになったジャックがそれを避け、アレックスに向かっただけ。

謂わば二次災害のような出来事だったのだ。

「お前ら……！ 成る程な」

理子と同じ結論に辿り着いたアレックスは、ガンズ・トマホークを地に突き立てた。

袖口から、白銀の刃が二本伸びる。

多対一、不利な状況下で、それでもアレックスは臆さない。

「来い、殺人鬼。二人纏めて相手してやる」

挑発気味に、目の前の男たちを嘲笑う。しかし、二人の殺人鬼は思いの外冷静だった。

「悪いが、今宵の目的は果たした。今は退かせて貰う」

エツフェル塔から、後ろを向かずに飛び降りる。

逃亡、それが彼らの選んだ最良手だった。

「ッ、クソがあ！」

予想外の展開に、アレックスはトップスピードで二人を追い、エツフェル塔の端に着く。

下を見れば、血のような赤髪が二人。

アレックスはすぐさま、二人へ追撃の鎌鼬を放とうとするが……それは、憚られた。

ジャックが、拐った悠香を盾にするように担いでいたのだ。

躊躇った一瞬の内に、二人は逃げ去った。

数時間後。

合流したアレックスらは、一先ずリユパンのアジトに集まっていた。

「状況は最悪だな……」

独りでに、呟くように切り出したのは、キンジだった。

誰もが、同意を沈黙で示す。

現在、キンジたちは圧倒的不利な状況に立たされていた。

先ず、コキュートスが敵の手にあること。

二つ揃わなければ意味の無いそれは、逆に二つ揃えば莫大に力を生む。

魔界より殺戮兵器を召還するための、魔具なのだ。

それがあるだけでも脅威だと言うのに……コキュートスを奪ったのは、一人でレインを相手取り、一人でシャーロックたちをあしらっ

た、ジャックが二人。

一国がその力を総動員しても、到底敵う相手では無い。

対し彼らは、大きな怪我は鬼道術で治したとはいえ、吸血鬼との戦いで皆少なからず手傷を負っている。

そして何より

「……レイは、まだ目覚めねえのか？」

壁に背を凭れ、腕を組むアレックスの言葉に、綾瀬は首を振った。深い傷を負ったレインは、未だ目覚めずにいる。

白雪、静奈の鬼道術は、ミスリルのナイフでつけられた傷に対して効果を発揮しなかった。

ジョンとジャンヌがどうにか命を繋いだものの、相当危うい状態らしい。

今は、綾瀬とミチルが必死で看病している状態だった。

「ミチルは？」

「寝ちゃったわ。ずっと囚われてたから、疲れたんでしょね」

「そうですか……」

不幸中の幸いとも言うべきか、同じくジャックに斬られたアリアと理子は、見た目程傷は深く無く、鬼道術が無くとも充分に動ける。だがやはり、レインが居なければ勝ちの目は無いだろう。治療は最善を尽くした今、ミチルと綾瀬の想いに託すしかない。

そのミチルが寝てしまうことを責めるような人間は、この場に居なかつた。

しかし、これではレインの参戦が望み薄なのは事実。

どうするか、と皆が沈黙を守る中　唐突に、彼は切り出した。

「悪いが、俺は戦闘には参加出来ねえ」

恐らく、唯一ジャックと一対一で渡り合える人物　『蒼天の風神』アレックス。

彼の一言に、皆は動揺を隠せなかった。

「何でだよアレックス！？　お前ならジャックとだって」

「いや……だからこそだよ」

キンジの狼狽を遮ったのは、シャーロックだった。

「この場にいる者の中で一番力があるのは、彼だ。故に彼には、
『コキユートス』本体を抑えて貰う」

そう……コキユートスが敵に渡ったことにより、コキユートス本体
……魔界の殺戮兵器が召還される。それを防ぐには、莫大な魔力
即ち、超能力が必要だった。

ジャックを倒さなければならぬのも確かだが、コキユートスが召
還されれば、まず彼らに勝ち目は無い。

誰かが、止めなければならぬのだ。

「そんな……アレックスまで参戦出来ないなんて……」

動揺が、一同の胸中を占めた。同時に……

『こんな時、レインがいてくれたら』。

そんな思いが、去来した。

「キンジ、ホームズ四世、それと初代ホームズ」

そんな中、アレックスは唐突に彼らの名を呼んだ。

参戦出来ない彼は、友の敵を討てない彼は、歯噛みする思いで。

「頼むぜ」

彼らを激励する。

その思いが通じたのかは定かではないが、キンジたちの胸には、確
かに彼の言葉が響く。

「……任せろ（なさい）！」「」

「では、これよりブリーフィングを始める。各自聞き逃すなよ」

一同は首肯で返す。

一つ頷くと、リュパンは言葉を続けた。

「敵は二人。彼の殺人鬼、ジャック・ザ・リッパー二人だ。コイツ
らは化物じみた強さを持つてる……だから、常に行動は二人以上だ。
組み合わせは……この通りだ」

リュパンは、インクで書いた紙を皆に見せる。

『遠山 キンジ、神崎・H・アリア』

『アルセーヌ・リュパン、峰・理子・リュパン四世』

『ジャンヌ・ダルク27世一（二人）、ジャンヌ・ダルク30世』

『シャーロック・ホームズ、ジョン・H・ワトソン』

『朝露 静奈、星伽 白雪、レキ、霧矢 綾瀬、立花 ミチル、平

賀 文、成瀬 レインハート』

『アレックス』

アレックスは一人。これは、彼の仕事が捗るよう配慮だろう。

「朝露、星伽、レキは各人とアジトの護衛、援護狙撃。アレックスはコキユートスの迎撃。」

そして残る四班は、ジャックの搜索、遊撃だ。

何か異論がある者はいるか？」

誰も挙手はしない。

リュパンの怪盗らしい頭の回転は流石の一言だ。

「なら、俺は好きにして良いんだな？」

とはアレックスの言。勿論とリュパンは頷いた。

「さて、次は」

彼が口を開こうとした一瞬の間に、それに気づいたのは二人のみ。

風を読むことで、あらゆる事象を感知出来るアレックス。

そして、それを直に目にした

「ッ、伏せて！」

『雪白の炎神』星伽 白雪。

彼女はイロカネアヤマに焰を灯すと、一閃

窓の外にいた、異形を切り裂いた。

「「「！？」」」

皆の視線が、それに集中した。

黒い生物……しかしその身体は、およそ地球で発見されているあらゆる生物からかけ離れていた。

が、かすかに手、足らしきモノが見える。ならば、あれは

「悪魔、つてヤツか……！」

そう……魔界より現界した、悪魔。

人々に恐れられてきた、恐怖の具現、空想であるはずの化物。モンスター

それが今、正に彼女らの目の前に現れたのだ。

それが何を意味するのか、分からないアレックスではなかった。

彼は建物を飛び出し、不穏な空気を感じる空へ視線をやった。

「おいおい、マジか……！」

額を、一筋の滴が伝う。

彼の視線の先には……夜空を更なる漆黒に染める、魔の大軍があった。

その中心、エッフェル塔上空には

魔の兵器が今にも顔を出しそうな、黒い空間の捻れが、その不気味な存在感を顕にしていたのだ。

「あいつら……遂に、始めやがったか」

そう、悪魔の出現、それは即ち、ジャックたちがコキュートスを解放したに他ならなかった。

第187弾 地獄の門（後書き）

次回予告。

レイン

「と、言いたいところだけど、ストックが1文字も書けてないので無理かも」

綾瀬

「頑張りなさい、作者！」

ミチル

「綾先輩、そこは受験を応援してあげようよ……」

次回、タイトル未定！

お楽しみに！

第188弾 魔の侵略（前書き）

テストです……

頑張って一話あげたので、どうか読んでみて下さい。

テスト中は投稿不可かと思いますが、どうかご了承を。

第188弾 魔の侵略

第188弾 魔の侵略

風に靡く髪を掻きあげ、ジャック・ザ・リッパーは目の前に立つ男にコキユートスを投げ渡した。

奇しくも自分と同じ名、容姿を持つ二人目のジャックは、然したる会話も無くそれを掴み取り、自身の持つコキユートスと引き合わせた。

妖婉な鈍い光を放ち、二つのコキユートスは触手のようなモノで結び付いた。

気味の悪い、臍物の潰れるような音を洩らしながら、ようやくそれは一つの形となった。

輪。それが最も、この魔具の形状を表すに適するだろう。

その輪は、誰に命令されるでも無く……更なる上空に浮かび上がり、やがて、消えた。

違う、消えたのではない。見えなくなったのだ。

一瞬で霧散した漆黒の輪は、すぐさま同じ形態を取る。その規模を、数十倍にして。

既に、空には暗雲が立ち込めていた。これから起きる事象をこの世と隔絶せんとばかりに、空を覆い尽くす。

二人の殺人鬼は、揃って立ち尽くしていた。

別段、驚く事があった訳ではない。書物で読んだ通り、今の所は予定通りに事が運んでいる。

不意に、後ろに立つジャックの鼻先が動いた。

懐に手を伸ばす。

見上げた先には……

暗い天の裂け目より出でし、異形の姿があった。

一目見ただけで、超能力には無縁の彼も理解する。アレは、この世とは別の理に在るモノだ、と。同時に、実力は自身の方が遙かに上だという事も。

「迎撃の準備はしておけ」

言われずとも、彼はこうしてナイフを構えている。皮肉なのだろう。コキュートスが召還するのは、殺戮兵器のみ。溢れ出る魔族は、空けられた魔界の門に便乗しただけの低級な存在。彼らの命令を受け付ける訳ではない。

ジャックは無言で、銀のナイフを構える。ミスリルでないこれは、投擲用に持ち歩いているモノだった。

超能力者対策 とはただ偶然の副産物であり、彼は超能力を扱う者の存在を知る前から、このナイフを使用していた。

まあ、その理由と云えば、殺菌効果の高い銀は自身の殺しをより神聖なモノにする……と、常人には理解し難い狂気だったのだが。

そのナイフを、振りかぶる。

その射線上にはもれなく、自身に皮肉をくれたジャックの姿が。

彼がナイフを、まるでキャッチボールでもするかのように軽快に投擲した。

ジャックからジャックへ、死んでも構わないつもりで投げられたそれは、しかし、彼には届かない。

その間に、彼に向けて腕を振りかぶる異形があったからだ。

ソレの額には、血を浴び赤く光るナイフの切っ先が覗いており、やがて倒れた。

「余計な事を」

「そりゃ悪かったな」

何でもない事のように、他愛ない掛け合いを巡らせる二人は、視界の端にすら足下の肉塊を映してはやらなかった。

二人にとって、殺しに結果は必要のないモノ。

どのように殺したか。

じつくり殺したかあっさり殺したかゆっくり殺したかざっくり殺し

たか。

つまり、それにより残った身体がどうなるうが、知ったことではない。否、知る必要がない。

彼らはただ殺すだけ。そこに、達成感も虚無感も必要無い。ましてや罪悪感など、はなから持ち合わせてはいなかった。

彼らが殺人鬼たるのは正当なのかもしれない、そう思うことに何ら疑問も持たない。

彼らが殺すのは、愉悦や快樂のため、義務や責務では断じて無い。謂わば呼吸と同じ。

ただ生きるために人を殺す。

血を浴びることこそが、彼らの生きる術なのだ。例えそれが、人外のモノの血であったとしても。

「さあ……パーティーの始まりだ」

生きとし生けるモノの血肉を食らう。正しくそれは、生物原初の^{きん}生存本能だった。

「何だ、あの数は……！」

空に浮かぶは、無数の魔。

漏れた言葉に応えられる者は、この場にいなかった。

が、誰もが理解する。あれらは、敵であると。

先陣を切ったのは、本来力を温存しておくべきアレックスだった。

硬直した皆を立て直すには、それしか選択肢は無い。

「食らえ、雑魚ッ！」

ガンズ・トマホークの一太刀は、アレックスの超能力により巨大な旋風を巻き起こした。

^{スラッシュユウインド}
太刀風。

真空の刃による斬撃は、鋼鉄すら容易く切り裂く。

何重にも重なったそれが、遙か上空の魔族に向かう。

魔族の大軍、内半分程がバラバラに切り裂かれた。

「チツ！」

しかし、その結果をアレックスは良しとはしなかった。加減して放ったとはいえ、全滅させるつもりで放った一撃は、その半分程度の敵を削るにしか至らなかった。

が、これ以上は作戦に支障の出るレベル。アレックスの手出しは、これ以上は望めないだろう。

「作戦変更だ！ ジャンヌ・ダルク！ お前ら全員で街中に対魔結界だ、急げ！」

このままでは、確実に一般人に被害が及ぶ。それを防ぐためには、結界を張るのが一番有効なのだ。

「了解した！」

「ここはどうする！？」

街に結界を張るためには、ジャンヌたちはアジトを離れなければならない。それは、この場を放棄することに他ならない。

「星伽、結界だ！ 朝露、レキはサポート、リュパンたちは魔族^{あいつら}を狩れ！」

簡易な説明。しかし、彼らが自身の役割を果たすには充分だ。

己が役目を理解した彼らは、すぐさま行動を開始した。

「27代目、私は西側に向かいます」

「なら、私は北」

「私は南に行こう」

リュパンに対抗するため、二人一組で行動するのが原則であったが、今は迅速な行動が不可欠。

複数人より一人の方が、小回りが効くのは共通認識だった。低級魔族を退ける程度の結界を張るのに、多人数は必要無い。

「では、生きて会おう」

ジャンの激励に、二人は首肯する。

駆け出したジャンヌの前に、魔族が二匹、立ち塞がった。

目的を持った今、彼女は障害を取り除くに何の躊躇いも持たない。

ジャンヌが、疾風の如き速度で二匹の間をすり抜ける。

ピキィ……と。

音を背後に感じながら、ジャンヌは駆ける。
残ったのは、二つの氷の彫像だけだった。

「ヒュー さっすがジャンヌ、かあつくいー！」

傍らで、魔族をものともしないジャンヌを眺めていた理子の軽口。
それを咎めるでもなく、リュパンはナイフを抜いた。

「理子」

「分かつてるよ、曾お爺様」

皆まで言わせず、理子もまた自身の武器を抜いた。

彼女らを囲むように、黒き異形は近づいてくる。

「こいつらが魔族、ねえ」

「まあ、知能もない雑魚の部類だ。数は異常だがな」

リュパンは、自身らを囲む魔族らに目を向けた。

最早数えるのも億劫な数多。アレックスの一撃で数が減ってもこれとは、元の数を考えるとゾツとする。

「さあ……いくぞ、雑魚魔族共」

裏理子モードになった理子は その髪をメデューサのように駆り、
魔族に相對する。

その瞳は、戦いを楽しむ戦闘狂じみた喜色を湛えていた。

異形が、彼女に飛びかかる。大小入り交じった彼らのその数、実に
11。

しかし……彼らの牙が、少女に届くことはなかった。

腹を貫く、栗色の槍。

魔を断絶したのは、血に濡れた彼女の髪だった。

「あーあ、手入れが大変なんだよねえ」

赤髪と見紛うような血に染まった栗色の髪には、硬化の超能力が掛
けてある。

如何に悪魔の一種とはいえ、肉を貫くことなど容易だ。

「アハハハハ！ どおしたのお！？ それでも悪魔さんですかぁー？」

高笑いする理子に続き、リュパンの髪が魔を穿つ。

圧倒的な力を前に、為す術も無く異形は蹂躪されていた。

第189弾 別に記念でも無いけど新章予告

第189弾 別に記念でもないけど新章予告

「はあ……」

様々な事件に巻き込まれ続ける一同。

中でも、綾瀬とミチルは自らの力不足を実感していた。

「せめて、皆に迷惑掛けないくらいには強くなりたいなあ」

悩みを抱える中……東京武偵高の、とあるイベントが近づく。

「そっか、レインたちは転校してきたばかりだから、まだ知らないのか」

「東京武偵高最強決定祭……通称DSF(detective arranged survival feast) in東京。」

文字通り、東京武偵高で最強を決める祭だ」

最強を決める祭。

その優勝商品とは……

「東京武偵高内の人間誰か一人に対し、一度限りの絶対命令権、だつて……!？」

「つて、今年から!？」

「その話、乗ったあ!」

そんなこんなで、DSF開幕。

「……ぶつ殺せえええ！」「……」

「つぎけんなあああ！」

Aランク以下の生徒には、同盟を組むことが許される。

「ふん、たかがAランクが何人集まっても恐くないわ！」

「ひい、ふう、みい……30人、であってるのか？」

「ちよ……多すぎっ！」

狙われるSランクたち＋ は応戦しつつも逃げの一手を取る。

一方……『世界最強』を冠するレイン。

当然、最有力候補として、とんでもない奴等に狙われていた。

「強襲科の蘭豹先生に、狙撃科の南郷先生、SSRの鳳先生まで……」

最強軍団 教務科の連盟が、彼を襲う。

そんな中……ついにラグナロク内での戦闘も開始される。

「お前とやり合つのは初めてだな……静奈」

「恐山の時のようにはいかないぞ？」

謀略の氷神VS深海の水神。

「今回はガチで行かせて貰うぜ」

「ドレイには調教が必要みたいね！」

桜花の剣神VS孤高の武神。

そして……

「へえ、てめえが夜雲 晴夜か」

「そういう貴様が風神か……成る程、良い殺気だ」

蒼天の風神VS夜雲の麒麟児。

などなど……好カード目白押し。

「アリア先輩に……私たちの成長を見て貰おう！」

ある者は己が力を先達に示し。

「ふふ〜！ さあて……レインを虐めちゃおっかな〜！」

ある者は愛しき者を畏に嵌め。

「さて……静奈〜！ ど〜こだ〜！」

ある者は重度のシスコンを発揮して……戦いに臨む。

その応えは果たして、

「成る程……ならその勝負、受けない訳にはいかないな」

応戦か。

「なら、私たちも一緒だな！」

共闘か。

「いやいやいや、無理iiiiiiii！」

はたまた 逃亡か。

そんな中、ついに彼女らが姿を現した。

「綾瀬、ミチル……！？

お前たちも参加していたの！？」

「レイン、悪いけども」

「勝たせて貰うよ、私たちが次へ進むために！」

満を持して降臨する、知神と女神。

彼女らの取る、『雷神殺し』の戦法とは ！？

「レインを倒して 私たちは！」

絶対命令権を手に入れる！」「

「結局それが目的か！」

最強決定祭（DSF）編、乞うご期待。

第189弾 別に記念でも無いけど新章予告（後書き）

書ききれなかったので、新章予告です。

レイン

「オリジナル書いてたからだろ」

静奈

「浮気は感心しないな」

作者

「あ、ちょ、ま」「さくっ

第190弾 殺人鬼VS英雄

第190弾 殺人鬼VS英雄

ジャンヌの超能力による冷気と、魔族特有の臭気が入り交じるパリの夜……道を照らす街灯沿いに、四つの影が街路を駆け抜けていた。

「空の様子から鑑みて……ジャックはエッフェル塔だろうな」

「成る程、一度逃げた場所に態々戻ってくるなんて、予想し辛いものね」

武偵高の防弾制服に身を包む、キンジとアリア。

「魔を召還するのが空というのも、我々への攻撃なら理にかなっているな」

「全く、他所の迷惑も考えて欲しいモノだ」

その隣には、軽装のシャーロックとジョン・H・ワトソンが、魔族に応戦しながらジャックの元を目指す。

「くそ、数が多すぎて進まねえ！」

ヒステリア・セルフを温存しているキンジは、なんとかスクラマ・サクスで頭を切り裂き、叫ぶ。

先程から、足止めのように放たれた異形を前に、中々前に進めずにいる自分たちの状況に、苛立ちがつのる。

斬っては増え、撃っては増える魔族。彼らの手数と魔族の数は、完全に拮抗していた。

「くそ……！」

早く前に進まなければならぬのに。
焦るキンジの背後から、殺気が進った。

「しまっ……！」

逡巡の合間に出来た隙。魔族生来の殺戮本能は、それを逃さない。

鋭い猛禽類のような爪が、キンジの首筋に迫る。

ヒステリアモードでない彼には、それを避けることは叶わない。が、一匹の魔族の鋭利な一撃は、キンジに届くことはなかった。連続して、乾いた破裂音が響く。

それが銃声であることに、元強襲科であるキンジが気づいたのは半ば必然である。

その射手、アリアは、つかつかとキンジに駆け寄ると 彼の頭を愛銃・ガバメントで容赦無く殴打する。

「がつ!?」

「このバカキンジ! しつかりしなさいよ!」

キンジに怒声を浴びせる彼女は、しかし警戒を怠らない。

背より急迫する魔族を、見もせずに緋色の弾丸で撃ち抜いた。

『無限の銃弾 (Infinite scarlet bullet ts)』の緋色の葉莢がガバメントから排出される。

「いいこと、バカキンジ。アンタ、あの状態でもないのにあれこれ考え過ぎなのよ!」

普段のアンタはバカなんだから

今度は、複数の魔族が、押し寄せる波のようにアリアに迫る。しかし、今の彼女の眼中に、彼らは入っていないかった。

瞬きも許さぬ、一瞬の間に、魔族の身体が四散した。

「天桜流奥義……桜吹雪・春宵」

明らかに雰囲気が変わったキンジの、目にも留まらぬ速撃であった。

アリアは満足気に頷いた。

「やっとなったわね?」

「君を守るためならいつだってなってあげるよ、アリア」

ヒステリア・ガーディア。

その発動条件は、今の彼の行動条件と一致する。

即ち、アリアを守る。

姫を守るべくして生まれた守護騎士は、彼女を守る盾となり、彼

女と戦う剣になる。

「なっ……！　そ、そのモードの欠点はそういうところよっ！」

「はは、どうだろうね」

「それに、私でもあれくらいなんとか出来たし！」

「アリアの手を煩わせるまでも無かった、ということさ」

「ああ、と髪の色と同化し兼ねない程、アリアは赤面していた。

「イチヤイチャイチャイチャと、そんな擬音が聞こえてきそうな空気が、色で例えるなら桃色か。」

「そんな空気の真っ只中にいた二人の男は……彼ら二人に呆れたような視線を向けた。」

「アリア君、キンジ君。もしかして、僕らは邪魔かい？」

「皮肉と本音が半々程度にブレンドされたその言葉に、キンジは「も二も無く、頷いた。」

「シャーロック卿、ワトソン卿。貴方たちは先へ。このまま四人で塔へ辿り着くのは、不可能です」

「ヒステリアモードのキンジの予想は、的を射ていた。」

「ただでさえ数の多い魔族が道を塞ぐのに、倒していたら切りがない。」

「だから、ここは私たちが受け持ちます。曾お爺様、ジョン・H・ワトソン様。どうぞ先へ」

「実家では良く思われていなかったらしいが　アリアは、貴族らしく慇懃に礼した。」

「淑女の言葉を裏切れることは、紳士として恥すべきこと。シャーロックたちは首肯した。」

「しかし……根本的な問題が、残っていた。」

「私とワトソン君でジャックの一人を押さえる手筈だったはずだ。後の一人は、どうするんだい？」

「そう、彼らだけで先へ進むということは、即ち戦力を半減させることと同義であった。」

「しかし、そんなことはキンジも勿論把握している。」

何故、彼がそんな無謀な作戦を立てたのか、答えは一つだった。信じているから。

「大丈夫です。あいつが……レインが、何とかするはずですよ」
キンジの断言。

シャーロックは直感する。それが『条理予知』の前兆だとは気づいてはいないだろうが、彼は自分の第六感に正直な男だった。

「……分かった。任せて良いんだね？」

「愚問ですね」

天桜流奥義、桜吹雪。

一瞬の内に、魔族の大半が吹き飛んだ。

その隙間を縫うように、シャーロックとジョンは駆ける。

彼らを追おうとする魔族の身体を、一条の剣閃が貫いた。

「おっと、お前らの相手は俺たちだ」

「さあ、相手になるわよ！」

東京武偵高でもトップクラスの實力を持つ二人は、この程度の敵を相手取ることなど役不足である。

剣の一閃が、緋の銃弾が、魔を断ち、穿つ。

一瞬の間にその命を奪われた魔族たちは、その遺骸を霧散させる。

「ここから先には」

「進ませないわ！」

桜花の剣神、孤高の武神。

二人の武偵の前に、魔族はその足を止めざるを得なかった。

黒き輪の遙か下方……半分しか建設されていないエッフェル塔の、
最上階。

そこには、紅の殺人鬼が二人いた。

「……！」

内一人が、近づく男の気配に気づいた。

「敵か」

「ああ……私が行く。来なければこい」

「いや、必要は無い」

全く同じ顔の二人は、しかしその行動原理が同一では無かった。それが表面的なモノか、深層的なモノかは判断がつかなかったが、迎撃に向かう男は、エツフェル塔から飛び降り、外壁伝いに襲撃者の元へ向かった。

目視出来る影は二つ。そして、その顔には見覚えがあった。

「（シャーロック・ホームズとその相棒、ジョン・H・ワトソンか）」

ロンドンに世界最高の探偵在り、とは彼の殺人鬼、ジャック・ザ・リッパーも聞き及んでいた。

先の戦闘の際、シャーロックと剣を交えた感想と言えば 危険だ、ということか。

あの男は、いずれ自分の敵に回るであろうアルサーヌ・リュパンに己の手の内を晒さぬよう、最低限の攻撃しかしていなかった。

何より、その狡猾さがジャックには恐ろしかった。

共闘する相手にさえ自分の力を隠すなど、あの少年たちのためにはならない。寧ろマイナスだ。

ジャックには、あの探偵の真意が読めなかった。

増す不安に反比例し、敵との距離は縮まっていく。

「シャーロック・ホームズ」

「

頭上からの攻撃。
それを予見していたらしいシャーロックは、最低限の動きでそれをかわした。

「 貴様は危険だ。私の野望の成就には邪魔だ。

故に、ここで貴様を討つ」

話の見えない、突然の宣告。それを前にしても、後に武偵の始祖となるその男は、動じない。

「何となくだが 分かっていた。

君が僕を殺しにくるのは」

相棒のワトソンでさえ首を傾げる、シャーロックの台詞に、ジャックは全身の血が沸き立つのを感じた。

やはり、だ。

やはり、この男は、今、ここで、殺さなくてはならない。

自身の曖昧な感情に、遂に確信を持ったジャックは……その、白銀のナイフを握った。

「シャーロック・ホームズ。お前は、私が殺す」

第191弾 絶体絶命

第191弾 絶体絶命

水で形成された鞭が、次々と魔族の胴を絶つ。

焰を灯す刃が、魔族の大群を焼き尽くす。

二人の超能力者 朝露 静菜と星伽 白雪は、背を合わせて迫り来る数多の敵から、仲間の死角を塞いだ。

「くそ、結界が張ってあるとはいえ……こつもここにはかり数が集中すると、その内破られるぞ」

あまりの数多の敵を相手取り、二人は息を切らしていた。

「はっ、はっ……しつこい！」

白雪のイロカネアヤメに、薄い焰が灯る。

「星伽候天流新 紅花鐘黎」

その一斬が、数匹の魔族を飲み込んだ。

そして、白雪が刀を振るうのを合図に 魔族の身体が、爆ぜる。超能力の奔流は、焰を伴い、熱風を巻き起こす。

その余波が、更なる数の敵を焼く。

「うわっ、凄いな……」

「まだだよ！」

あまりの威力に唾然とする静奈に、白雪は注意を促した。

勿論、静奈も油断はしていない。

彼女は辺りの熱気を利用し、水生木から木生火を続けて発動する。生まれた炎で辺りの魔族を焼き払う。しかし、一向に終わりの見える気配が無い。

「一体、何匹いるんだ……！」

途方も無い敵軍の数に、思わずそう溢す。

ざっと見ても千は下らないであろう軍勢は、今尚増え続けている。

いくら結界があるとはいえ、防衛戦としてはあまりに無謀な数だった。

唯一幸いだったのが、二人の練度がG20以上の域に達していたことだろう。

本来、精神力を消費して戦う超能力者は、力の燃費がすこぶる悪い。

が、G20ともなると、その力の消費をある程度調整し、持久戦が可能になる。白雪の『星伽候天流新』が分かりやすいだろうか。

煌々と燃え盛る焰を、滲むような薄い焰に押さえ込んだのが、あの形態なのだ。

ピラミッドにより星の力を得るパトラ、有するエネルギーの桁の違うレインやアレックスを例外とするなら、超能力者のある種の境地とも言える技巧である。日本でも有数の超能力大家、朝露家の令嬢である静奈も、それを習得しているのは道理だ。

しかし、ガス欠の心配をしなくて良いのは、力がある程度抑えている場合のみ。

大技を放とうとすれば、精神力を大幅に持っていかれる。

それでも、目の前の大軍勢を見ては、一撃の下に葬れるのは何より望ましいことだった。

「こうなったら、一か八か……！」

「駄目だよ、朝露さん！ そんな大技を使ったら、確実にツケが来る！」

「しかし……！」

この数相手に、威力を抑えた攻撃を繰り返しては、体力が持ちそうもない。

逡巡の隙を衝いて、魔族の一体が結界に向かった。

「まずい！」

静奈が高圧水流で撃墜しようとするが、他の敵が押し寄せ、そちらに攻撃せざるを得ない。

白雪も同様で、迫り来る敵に手一杯だった。

こうなれば、大技を使うしかないか　そう思われたその時、結界に向かった魔族の頭部が弾け飛んだ。

「……レキか！」

銃弾の射手は、アジトの屋上より魔族に狙いを定めていた。

「お二人共、申し訳ありませんが支援はそう出来ません。銃弾が無いのです」

今、レキの手元にはドラグノフの銃弾が7発と閃光弾、音響弾、炸裂弾のみ。これがなくなれば、彼女の戦闘手段は白兵戦のみとなる。

だが、二人が溢した敵程度を撃ち抜くには充分だろう。

「良かった……これなら何とか持つかも」

白雪が、安堵の溜め息をついた。

しかし　事態は急変する。

「……！？　何だ！？」

静奈の狼狽の声の先で、魔族が数カ所に固まっていた。

「あれは……！　朝露さん、あれはまずい！　何とかしないと……！」

白雪は言うや否や、自身のイロカネアヤメに巨大な焰を灯した。

「星伽候天流新　緋緋星伽神・二重流星！」

巨大な緋の焰の渦が、辺り一体の魔族を焼き尽くす。

しかし……既に三体程は、成っていた。

「あれは、一体……！？」

目の前にいたのは、魔族が幾重にも重なり、人のような形を保ったモノだった。

背筋の凍るような、凶悪な力。それは、手加減など出来ない、二人にそう思わせるに充分だった。

「食らえ……水流爆！」

白雪は、既に全力の一撃を放っていた。力に余裕のある静奈が、一体でも多く削っておくのが得策だ。

木生火とのコンボで、小規模の水蒸気爆発を起こすこの技は、自

然現象を利用するため精神力を消費するのを抑えることが可能である。

一体を爆破し、静奈はもう一体に水流で切りつけた。

「何!？」

だが、静奈の高圧水流は地面を抉るのみ。

かわされたのだと理解するのに、時間はかからなかった。

が、この魔族に驚異を感じずにはいられない。

少なくとも、ただ攻撃するために突っ込んでくる低級魔族とは違う。

低い唸り声を上げて、巨大な魔族は静奈に急迫した。

その速度は、先刻まで戦っていた有象無象の低級魔族とは比較にならない。

回避の不可を悟り、静奈は戦扇で攻撃を逸らす。

「ッ……!」

逸らした攻撃の衝撃でさえ、手が痺れる。

馬鹿げた威力のその一撃を食らうのは不味い。

静奈は改めて距離を取ろうとした、そこで

「ば、馬鹿な……!」

先ほど爆破したはずの一体が、結界に向かうのを見つけた。

水蒸気爆発をモ口に食らったはずのその顔には、傷一つついてはいなかった。

止めようとするが、目の前の一体はそれをさせてはくれない。

白雪も同様に、敵に足止めを食らっている状態だった。

「そこを、退けえッ!」

ペース配分など、最早彼女の脳中には無かった。

渾身の一撃が、巨大な魔族の腹に大穴を空ける。

最早その敵に一瞥もくれてはやらす、静奈はそのまま結界に向かった敵の殲滅に当たろうとする　　が。

背後から進った、獰猛な獣のような殺気に、咄嗟に振り返った。

全力の下に葬ったはずの異形は、全身の肉を膨張させ、未だその

形を保っていたのだ。

そして、驚愕に身体を強張らせた一瞬で……静奈の華奢な身体は、その巨大な手に囚われた。

「くっ……!!」

彼女自身の腕力では、脱出が難しいのは火を見るより明らかだ。

超能力で脱出を試みるが、

「ぐ、うっ!？」

握力が強まり、痛みで力の制御が出来ない。

ギリギリと締め上げられる痛み、内臓が吐き出されるのではないかとすら思う。

だが、静奈の痛みは頭の隅に追いやられることとなる。

薄れていく視界の端に、一体の魔族が、遂に結界を破るのを捉えたのだ。

「あ……」

レキが応戦しようとするも、集まってきた低級魔族の相手に手一杯だ。

そのまま、巨大なる異形は建物を破壊するように進んでいく。

「……止める」

あの先には、平賀が、ミチルが、綾瀬が、

「止める、止めるッ!」

レインが、いる。

「止めるおッ!」

涙を流しながら、掠れる声で叫ぶ。

このままでは、皆が死んでしまう。

友人が、愛する人が。

「止めるおおおおおッ!」

叫ぶことしか出来ない自分が、情けなくて、惨めで、それでも身体は動かなくて。

遂に精神の限界を向かえた静奈は 意識を、手放した。

第191弾 絶体絶命（後書き）

じ、塾の宿題が辛すぎるorz……

更新速度がいつになく遅れるかもしれません。どうかご容赦を！

（．．）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3310s/>

緋弾のエリア ~ 紫電の雷神 ~

2011年11月24日01時49分発行